漱石全集
第十八巻

書簡集

集中最初の書簡

目次

一

明治二十二年五月十三日　ヲ便　牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ

今日は大勢罷出失禮仕候然ば其砌り歸途山崎元修方へ立寄り大兄御病症幷びに療養方等委曲質問仕候處同氏は在宅乍ら取込有之由にて不得面會乍不本意取次を以て相尋ね申候處存外の輕症にて別段入院等にも及ぶ間鋪由に御座候得共風邪の爲めに百病を引き起すと一般にて咯血より肺勞又は結核の如き劇症に變ぜずとも申し難く只今は極めて大事の場合故出來る丈の御養生は專一と奉存候小生の考へにては山崎の如き不注意不親切なる醫師は斷然癈し幸ひ第一醫院も近傍に有之候得ば一應同院に申込み醫師の診斷を受け入院の御用意有之度左すれば看護療養萬事行き屆き十日にて全快する處は五日にて本復致す道理かと存候且ツ少シにても病患に罹ル「プロバビリチー」アル以上ハ二豎の膏肓に入らざる前に英斷決行有之度生あれば死あるは古來の定則に候得共喜生悲死も亦自然の情に御座候春夏四時の循環は誰れも知る事なから夏は熱を感じ冬は寒を覺ゆるも亦人間の免かるゝ能はざる處に御座候得ば小にしては御母堂の爲め大にしては國家の爲め自愛せられん事こそ望ましく存候雨フラザルニ牖戸を綢繆ストハ古人ノ名言に候へば平生の客氣を一掃して御分別有之度此段願上候

to live is the sole end of man!

五月十三日

歸ろふと泣かずに笑へ時鳥

聞かふとて誰も待たぬに時鳥

金之助

正岡大人

梧右

何れ二三日中に御見舞申上べく又本日米山竜口の両名も山崎方へ同行し呉れたり

僕の家兄も今日吐血して病床にあり斯く時鳥が多くてはさすが風流の某も閉口の外なし呵々

二

明治二十二年五月二十七日 ル便 牛込區喜久井町一番地より本鄕區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ

昨日は存外の長座定めし御蒼蠅の事と恐入り奉る其砌り妄評を加へ御返呈申上候七草集定めて迂生歸宅後御讀了の事と存じ候右に付き後にて胸に手をあて善く／＼勘考仕れば前後の分別もなく無茶苦茶にハヅカ敷漢字を行列したるは流石の某も例のヅー／＼しきに似ず少しく赤面の體に御座候何事も不作法者と御堪忍遊ばせと御詫の序でに願上げまするは批評の後に付したる二十八字の九絶に御座候是は餘り大人氣なく小兒の手習と一般にて只々紅燈緑酒の文字を書き散らしたる而已に候得ば斯ル者を見事の御著にくッつけ置かん事七草集の恥辱且つは人目を愧つる小生の心底憐れと思し給ひ一遍の御回向なしで一刀兩斷に切り棄てゝ屑籠の淨土に往らせ玉へ生レつきの不具者に候得ば偏屈の妙術も一人前には治し難きは無論の儀と存じ候得ば生きて人目に曝しますより殺した方が親の慈悲かと存候去り乍ら凡夫の淺ましさ萬一貴君の配劑にて生來の癈疾も頓治の見込なきやと夫ばかり心配仕居候燒野〔の〕きゞす夜の鶴不具な子程〔可〕愛ゆきは矢張り親の慾目に御座候必ず必ず凡たと御さげしみなき樣願上候 匆々

二十七日

菊井の里
漱石より

丈鬼樣

七草集には流石の某も實名を曝すは恐レビデゲスと少しく通がりて當座の間に合せに漱石となんしたり顔に認め侍り後にて考ふれば漱石とは書かで漱石と書きし樣に覺へ候此段御含みの上御正し被下度先は其爲め口上左樣

米山大愚先生傍より自己の名さへ書けぬに人のの[原]文を評するとは「テモ恐シイ頓馬ダナー」チヨン々々々々々

三

明治二十二年八月三日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

炎暑之候御病體如何被爲渡候哉日夕案じ暮し居候とは些と古めかしくかたくるしき文句ながら近頃の熱さでは無病息災のやからですら胃弱か腦病、腳氣、腹下シ抔種々な二竪先生の來臨を辱ふする折柄なれば貴殿の如き殘柳衰蒲も宜しくといふ優にやさしき殿御は必ず療養專一攝生大事と勉強して女の子も泣かぬ樣餘計な御世話ながら願上候偖惡口は休題として愈本文に取り掛りますれば小生義愚兄と共に去月廿三日出發東海道興津へ轉地療養の爲メ御越し被遊昨二日夜歸京仕候興津の景色の美なるは大兄も御承知ならんが先ヅ大體を申せば

都城之西。六十餘里、山勢崒然、拔地而起、潮流直逼山麓、山海之間得平地、纔五十步、旗亭十數、點綴其間、與蘆戶漁家錯落相間、呼曰興津、所謂東海五十三驛之一也、山腹有古刹、飛閣經樓、高出于青嵐之上、望之縹渺若畫圖、興津之西、山勢漸向北而走、海灣亦南曲、二里而達清水港、港盡而灣再東折、突出洋中二里許、古松無數、遠與天連、白帆時渡、行其間、是則興津灣之勝概也、呼其寺、曰清見寺、呼其山、曰清見山、呼其灣、曰清見潟、面西南長灣、横國大海者、為三保松原、遠山如黛、白雲蓬勃者、為伊豆大嶋、天晴氣朗之時、仰看芙蓉于東北、大凡騷人墨客、上旗亭坐樓頭者、杯酒談笑之際、一瞻而得悉收此數者於眸中焉、蓋所謂東海道、自東都至西京、長二百餘里、有驛五十有三、山則函嶺、水則天龍大井、都邑則靜岡名古屋、其間旗亭驛驛、名山大川、固不爲鮮矣、然至山海之勝、魚鳥之美、則余獨推興津爲最、是以近年以來、縉紳公卿、遊賞避于此地、陸續麕至、山若水則之一轉、亦將潜化絃歌爲熱鬧之地、可嘆也、……

餘りまたイト御退屈先ヅ〳〵御里が露ハレヌ中ニ切リ上ゲベキ儀右の如く風光は非常に異な處ナレた風俗ノ卑陋ニテ物價の高値ナルニハ實ニ恐レ入リタリ小生等最初には水口屋と申す方に投宿せしに一週間二圓にて誠にいや〳〵雲助同樣の御待遇を蒙むれり樓上には翁我諸準先生將軍平として鎭座まします者から猫如き貧乏書生は「バラサイト」同樣の有樣御同笑可被下候翁我中將を呼んで御山の大將ト云へり（解に曰く高之謂山、樓者高故曰御山、大將者武人之）手短かに申せば樓上ノ軍師（梁上ノ君子ニアラズ）ト云フ意味之宿屋ノ主人御山の大將ヲ拜スルヿ平蜘蛛ノ如ク婢僕ノ之ヲ敬スルヿ鬼神ノ如シ偖々金錢程世ノ中に貪きはあらじと樓下ニテ握リ睾丸をしながら新論を發明仕り候夫より怯懦心を鼓舞し身延屋といふに一週間三圓の御散財にて御借居仰せ被出二三日逗留すると又々何處かの縉紳先生の為に追出され、どうにもこうにも駿河の國立ツたり寐たり又興津、清見の浦に澄むとても心はすまぬ濱千鳥啼くより外はなかりしが（ヤ、デン）といふ體裁、汗臭き富士講連と同車にて漸々歸京仕候何れ道中の御話は御面晤之節萬々可申

述候 云々

先は炎熱の候時候御厭ひ可被成何れ九月には海水にて眞黑に相成りたる顔色を御覽に入べく夫迄はアヂユー

菊井町のなまけ者

丈鬼兄座右

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

四

明治二十二年九月十五日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

露冷殘螢瘠風寒柳影疎なるの時節とはあまり長過ぎてゴロがわるくは候得共僕が創造の冒頭ナレバだまつて御讀被下度候偖右の樣なる時節到來仕候處貴兄漸々御快方の由何よりの事と存候小生も房州より上下二總を經歷し去月卅日始めて歸京仕候其後早速一書を呈スル積りに御座候處既に御出京に間もあるまじと存日々延頸して御待申上候處御手紙の趣にては今一ヶ月も御滯在の由隨分御のんきのヿと存候 云々

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

五

明治二十二年九月二十日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

（略） 五絕一首小生の近況に御座候御憫笑可被下候

抱劍聽龍鳴、 讀書罵儒生、 如今空高逸、 入夢美人聲、

第一句は成童の折の事二句は十六七の時轉結は卽今の有樣に御座候字句は不相變勝手次第御正し被下度候　云々

「正岡子規君「筆まかせ」より」

六

明治二十二年九月二十七日　ノ便　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

貴意の如く僕洽財布若しの候大まいに二錢の御散財なら願ひ給はず四國下りまで御霞輸下し賜はる段御親切嘸かし感涙にむせびて郎君の大悲大慈をあり難がり奉るならんといやに恩に着せて御注進仕るに餘の儀にあらず先頃手紙を以て依賴されたる點數一條おつと承知皆迄云ひ給ふな萬事拙の方寸にありやす先づ江戸つ子の爲す所を御覽じろとひま人のありがたさ急に用事の持ち上りたるを嬉しがり早速祕術をつくして久米の仙人を生捕り先づ安心はした者の鐵砲ずれで（面ずれより脱化し來るに似たり）手の皮の厚さ一尺もあると云ふひなた臭い兵隊を相手の談判は都び男やさ男を以て高名なるやつがれには到底出來やせん引き下りやすと反り身になつて斷はると云ふ所だがそこがそれ君いや妾の爲めでけす掛がへさへあれば命の二つや三は進呈仕りてよろしくと云ふ位な親切者だからちつともひるまず古今未曾有の勇氣を鼓舞して二三回戰爭の後是も武運目出度乃公の勝利と相成令孃の身體は一部〔三〕年三の組の室中を橫行しても御勝手次第なり

定めて

あらまあほんとうに賴もしい事、ひよつとこの金はんは顏に似合ない實のある人だよ」〔四〕と云はれるだろふと乃公の高名手柄を特筆大書して吹聽する事あら〳〵如此

九月二十七日夜

郎君より

妾　へ

此手紙到着の頃は定めて東上の途中ならむ若しも亦愚圖々々して故郷にこびりついて居るなら此書拜見次第馳出して東京へ罷り出べき事

七

明治二十二年十二月三十一日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

歸省後は如何病軀は如何讀書は如何執筆は如何、如何にして此長き月日を短く暮しめさるゝやけふは大三十日なりとて家内中大さわきなるに引きかへ貧生のありがたさは何の用事もなく只書は書に向ひ膝に向ひ夜は床の中にもぐりこむのみ氣取りて申さば閑中の閑、靜中の靜を領するの俗に申せば錢のなきため不得已握り睾丸をしてデレリと陋巷にたれこめて御座るの此休みには「カーライル」の論文一冊を讀みたり二三日前より「アルノルド」の「リテレチュア、エンド、ドクマー」と申者を讀みかけたり御前兼て御趣向の小說は已に筆を下し給ひしや今度は如何なる文體を用ひ給ふ御意見なりや委細は拜見の上逐一批評を試むる積りに候へとも兎角大兄の文はなよ〳〵として婦人流の習氣を脱せず近頃は篁村流に變化せられ舊來の面目を一變せられたる樣なりといへとも未だ眞率の元氣に乏しく從ふて人をして案を拍て快と呼ばしむる箇處少きやと存候總て文章の妙は胸中の思想を飾り氣なく平たく造作なく直叙スルガ妙味と被存候さればこそ瓶水を倒して頭上よりあびる如き感情も起るなく胸中に一點の思想なく只文字のみを弄する輩は勿

論いふに足らず眞思あるも徒らに章句の末に拘泥して天眞爛漫の見るべきなければ人を感動せしむると覺束なからんかと存候今世の小說家を以て自稱する輩は少しも「オリヂナル」の思想なく只文字の末をのみ研覈批評して自ら大家なりと自負する者にて北海道の土人に都人の衣裳をきせたる心地のせられ候成程頭の飾り衣の模樣仕立の具合寸分の隙間なきかは知らねど其人の價値はと問はゞ三文にも當せず其思想はと問はゞ一顧の價なきのみならず鼻をつまんで卽走せざるを得ざる者のみの樣に被思候獨り篁村翁のみは直ちに胸臆を直叙して天眞爛漫の眞姿紙上に躍然たる處なきにあらねど是亦質朴なる老翁のいやみ氣なきに過ぎず田舍漢の通がりにまさる萬々なりといへ共さりとも崇高とか遒麗とか磊落とか人をして一見嘆賞感歎せしむる風采には乏きやに被存候故に小生の考にては文壇に立て赤幟を萬世に飜さんと欲さば首として思想を涵養せざるべからず思想中に熱し腹に滿ちたる上は直に筆を揮つて其思ふ所を叙し沛然驟雨の如く勃然大河の海に瀉ぐの勢なかるべからず文字の美章句の法抔は次の次の其次に考ふべき事にて Idea itself の價値を增減スル程の事は無之樣に被存候御前も多分此點に御氣がつかれ居るなるべけれど去りとて御前の如く朝から晩まで書き續けにては此 Idea を養ふ餘地なからんかと掛念仕る之勿論書くのが樂なら無理にとは申譯にはあらねど每日每晩書て／＼書き續けたりとて子供の手習と同じことにて此 original idea が草紙の内から現はれる譯にもあるまじ此 Idea を得るの樂は手習にまさる事萬々なると小生の保證仕る處なり（餘りあてにならねど）伏して願はくは（雜談にあらず）御前少しく手習をやめて餘暇を以て讀書に力を費し給へよ御前は病人之病人に責むるに病人の好まぬ事を以てするは苛酷の樣なれといへども手習をして生きて居ても別段馨しきことはなし knowledge を得て死ぬ方がましならずや塵の世にはかなき命ながらへて今日と過ぎ昨日と暮すも人世に happiness あるが爲なれど十倍の happiness をすてゝ十分の一の happiness を貪り夫にて事足り給ふと思ひ給ふや併し此 Idea を得るより手習するが面白し

と御意遊ばさば夫迄なり一言の御答もなし只一片の赤心を吐露して歳暮年始の禮に代る事しかり穴賢
御前此書を讀み冷笑しながら「馬鹿な奴だ」と云はんかね兎角御前の coldness には恐入りやす

十二月卅一日　　　　漱石

子規御前

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

八

明治二十三年一月　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

いそがしき手習のひまに長々しき御返事態々御つかはし被下候段御芳志の程ありがたい（洋語にあらず）かく迄御懇篤なる君様を何しに冷淡の冷笑のとそしり申すべきやまじめの御辯護にていたみ入りて穴へも入りたき心地ぞし侍る程に一時のたわ言と水に流し給へ七面倒な文章論かゝずともよきに、そこがそれ人間の淺ましさ終に餘計なことをならべて君に又攻撃せられて大閉口何事も餅が言はする雜言過言と御許しやれ

當年の正月は不相變雜煮を食ひ寐てくらし候寄席へは五六回程參りかるたは二返取り候一日神田の小川亭と申にて鶴蝶と申女義太夫を聞き女子にてもかゝる掘り出し物あるやと愚兄と共に大感心そこで愚兄余に云ふ樣「藝がよいと顏迄よく見える」と其當否は君の御批判を願ひます

米山は當時夢中に禪に凝り當休暇中も鎌倉へ修行に罷越したり山川は不相變學校へは出でこず過日十時頃一寸訪問せしに未だ褥中にありて煙草を吸ひ夫より起きて月琴を一曲彈て聞かせたりいつも〳〵のん氣なるが心は憂鬱病にかゝらんとする最中之是も貴兄の判斷を仰ぐ兎角此頃は學校でも吾黨の子が少ないか

ら何となく物淋しく面白くなし可成早く帰り〳〵もう仙人もあきがきた時分だろうから一寸已めにして
此夏に又仙人になり給へ　云々
別紙文章論今一度貴覧を煩はす　云々

埋塵道人拜

四國仙人梧下

七草集四日大盡水戸紀行其他の雜録を貴兄の文章とは文章でなしと仰せらるれば失敬御免可被下候

【別紙】

僕一己ノ文章ノ定義ハ下ノ如シ

文章 is an idea which is expressed by means of words on paper 故ニ小生ノ考ニテハ idea ガ文章ノ Essence ニテ words ヲ arrange スル方ハ element ニハ相違ナケレド essence ナル idea 程大切ナラズ經濟學ニテ申セバ wealth ヲ作ルニハ raw material ト labor ガ入用ナルト同然ニテ此 labor ハ單ニ raw material ヲ modify スルニ過ギズ raw material ガ最初ニナクテハ如何ナル巧ノ labor モ手ヲ下スニ由ナキト同然ニテ idea ガ最初ニナケレバ words' arrangement ハ何ノ役ニモ立タヌナリ

是ヨリ best 文章ヲ解セン

Best 文章 is the best idea which is expressed in the best way by means of words on paper.

此 under line ノ處ノ意味ハ idea ヲ其儘ニ紙上ニ現ハシテ讀者ニ己レノ idea ノ Exact ナル處、(no more no less) ヲ感ゼシムルト云フ義ニテ是丈ガ即チ Rhetoric ノ treat スル所ハ去レバ文章（余ノ所謂）

ハ決シテ Rhetoric ノミヲ指スニ非ス此儀上ノ解ニテ御合點アリタシ
ソコデ此 idea ヲ涵養スルニハ culture ガ肝要ニテ次ハ已レノ經驗ナリ去レド已レノ經驗ノ區域ノミニテハ Idea ヲ得ル區域狹キ故 culture ノ方ガ要用ナリト申スナリ

然ラバ Culture トハ如何ナル者ト云フニ knowing the ideas which have been said and known in the world ト小生ハ定義ヲ下ス積リナリ然ラバ culture ヲ得ル方ハト云フニ讀書ヲ捨テヽ他ノ方ナキハ貴君モ御左袒ナルベシ故ニ讀書ヲシ玉ヘト勸ムルナリ去リ乍ラ Rhetoric ヲ廢セヨト云フニ非ス Essence ヲ先ニシテ form ヲ後ニスベク Idea ヲ先ニシテ Rhetoric ヲ後ニセヨト云フナリ（時ノ先後ニアラズ輕重スル所アルベシト云フノ意ナリ）

是ヨリハ嚴肅トカ端麗トカ云フ文章ヲ analytically ニ御示シ申スベシ

(1) 嚴肅ナル文章＝嚴肅ナル idea expressed by means of words.

(2) 適麗ナル文章＝適麗ナル idea expressed by means of words. etc.

故ニ idea ニシテ嚴肅トカ適麗トカ云フ形容詞ヲ附ケ得ベキ Idea ナラ紀行文デモ議論文デモ小説デモ何デモ嚴肅ナル又適麗ナル文章ト云ヒ得ル之

（然シ idea ニモ斯ル形容詞ヲ附シガタキ者アリ此 idea ヲ express スル文章ニハ到底カヽル形容詞ヲ附シ難シ此ハ scientific treatises ニテ見出ス物ニテ pure literary work ニハ何如ナル種類ヲ問ハズ斯ル形容詞ヲ付スルヲ得ベシト存ズ）

是ヨリ mathematically ニ Idea ト Rhetoric ノ combination ヨリ何如ナル文章ガ出來ルカヲ御目ニカケン

1 case Idea = best, Rhetoric = 0 } make up no 文章

即チハ best idea ガアルモ Rhetoric ナキタメ any speech ガデキヌ知シ但シコレハ文章ノ例ニアラズ

2 case Idea = 0, Rhetoric = best } no 文章 imaginary case

3 case Idea = best, Rhetoric = best } best 文章

4 case Idea = bad, R = bad } bad 文章

5 case Idea = best, R = bad } ordinary 文章

6 case Idea = bad, R = best } bad 文章

此 last two cases ヲ比較セバ Idea ノ R ヨリ要用ナルヲ知ルベシ

此 cases ノ中 1 & 2 ハ殆ンド extreme ノ case デ實際ナシト云フモ可ナリ但シ尤 important トナルハ 5 & 6 ナリ元來 best Rhetoric トハ△ナラ△ノ idea ヲ Express シテ人ガ讀ンデモ同樣同積ノ△ニ感ズルヲ云フニアラズヤ換言スレバ original idea ヲ original ノ儘ニ convey スルガ best Rhetoric ナリ故ニ假令 R ガ best ナリトモ idea ガ bad ナレバ bad ナ idea ヲ bad ナリニ convey スルニ過

ギザレバ文章ハ bad ニシカナラズ之ニ反シテ R ハ bad ニテモ Idea ガ best ナレバ best ナ Idea ガ此 bad Rhetoric ノ爲メ幾分カ modify セラレテ best ナリニ express セラル、能ハズ單ニ ordinary ノ者トナルニ過ギザルナリ

小生ノ平タク無造作ニ飾氣ナク Idea ヲ express スルガ妙文ナリトハ (3) ノ case ヲ云フノミ即チ best ナ Idea ヲ平タク無造作ニ best ナリニ讀者ニ感ゼシムル之 (which is only possible by means of the best Rhetoric!) 章句ノ末ニ拘泥スルトハ第二ノ如キ case 之 R ハ best ナレ圧 Idea ガ 0 ニ近ケレバ殆ンド no 文章ナリト云フ之

君ノ三條ハ讀ニ flimsy 極マルヨ
(1) 讀ム本ヲ知ラヌバ人ニ聞クガイヽデハナイカ
(2) 讀ム本ガナクバ買フテモ借リテモイヽデハナイカ
(3) 漢文ガ讀メナケレバ勉強シテモヨシ已ムヲ得ズバ日本譯漢籍ヲ讀ムデモイヽデハナイカ

君ノ云フ二條ノ文學者ノ目的ハ僕ハ大ニ不賛成ダケレ圧暫ラク君ノ云フ通リ右ノ二條ガ目的ナルニモセヨ君ノ所謂文章（Rhetoric only）デ此目的ガ達セラル、ト思ヒ給フヤ又ハ（Rhetoric only）ガ此目的ヲ達スルニ最必要ナリト思ヒ玉フヤ今一度御勘考アラマホシウ

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

九

明治二十三年七月二十日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

御細〻くめに拝受くさき御文箋すぎにてちと時候おくれながら面白をかしく拝見仕候先以て御精讀日々佛くさく被相成候段珍重奉存候此頃の暑は松山の邊土のみならず花のお江戸も同樣にて日中はさながら儘

中の章魚同然中々念佛題目抔の騒ぎにあらず唯々命に別條なきを頼りにて日々消光仕る仕儀なれば愛國心ある小生も此苦さをだつとこらへて蒼生の爲じや百姓の爲じやとすましこんでゐるこれたものにあらず（尤血液の少なき冷血動物に近き貴殿抔は此限りにあらず）其上何の因果か女の祟りか此頃は持病の眼がよろしくないので讀書もできずといつて執筆は給はるし實に無聊閑散の極、試驗で責めらるゝよりは餘程つらき位之無事是貴人とは如何なる馬鹿の言ひ草やら今に至つて始めて其うそなる事を知れり實は此度非常の大奮發大勉强にて（呉服屋の引札にあらず）平生貯蓄せるポテンシャル、エナージーを化學的作用にてカイネチックに變じ九月上旬には貴殿の目を驚かしてやらんと心待ちに待ちたる甲斐もなくあら悲しや天吾才を縮みそう今から大學者になられては困るといふ一件で卑怯にも二竪を以て吾英氣を挫折せり狭くいへば國の爲め大きくいへば天下の爲め實に惜むべき事共なり併し小生が眼病の爲め貴殿九月になつて小生に面會するも別段目を驚かすこともなく膽を寒からしむる程の騒動は出來せずに濟むから其點は安心すべしさ

（略）貴意の如く山川を落第させる位なら落第させる人はいくらでもある第一貴殿抔は落第志願生だから同人と變つてやれば善いのにそこが人事の不如意で不得已次第さ

午眠の利益今知るとは愚か〳〵小生抔は朝一度晝過一度、廿四時間中都合三度の睡眠之晝寐して夢に美人に邂逅したる時の興味抔は言語につくされたものにあらず晝寐も此境に達せざれば其極點に至らず貴殿已に晝寐の堂に陟るよろしく其室に入るの工夫を用ゆべし

曾て君が「西行の顏も見えけり富士の山」といふ句を自慢したが僕が先頃富士を見て不圖口を衝て出た名吟にはとても不及斯樣なる手帋の後りに書くのは勿體なけれども別懇の間柄だから拜讀さすべし其名吟に日く

西行も笠ぬいで見る富士の山

我ながら感々服々だ然しかやうの名吟を漫りに人に示すは天機を漏らすの恐れあり決して他言すべからず又くだらぬ隨筆中にたゝき込むべからず穴賢

〔正岡子規稿『筆まかせ』より〕

子規病牀下　　漱石

一〇

明治二十三年八月九日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戶正岡常規氏へ

爾後眼病兎角よろしからず其がため書籍も筆硯も悉皆放擲の有樣にて長き夏の日を暮しかね不得已くゝり枕同道にて華胥の國黑甜之鄕と遊びあるき居候得共未だ池塘に芳草を生ぜず腹の上に松の木もはへず是と申す珍聞も無之此頃では此消閑法にも殆んど倦屈仕候といつて坐禪觀法は猶できず瀹茗漱水の風流氣もなければ仕方なく只「寐てくらす人もありけり夢の世に」抔と吟じて獨り洒落たつもりの處瘠我慢より出た風雅心と御憫笑可被下候然シ小生の病は所謂ずる〴〵ベッたりにて善くもならねば惡くもならぬといふ有樣故風光と隔生を免かれたりと喜ぶ事もなきかはりには韓家の後苑に花を看て分明ならずといふ嘆も無之眼鏡ごしに簾外の秋海棠の哀れに咲きたるををかしと眺むる位の事は少しも差支無之候去れば時々は庭中に出て（米山法師の如く蟬こそ捉らね）色々ないたづらを致し候茶の樹の根本に丹波ほうづきとかいふ實の赤く色づきて寐ころげたるを何心なく手折りて不圖心つけば別に贈るべき人もなし小さき妹にてもあれかしと願ふも甲斐なし撫し子の凋みたる間より桔梗の一株二株ひよろ長く延びいでたるが雨にうたれて苫を枕に打ち臥したるに紫の花びらを傳ひて小蟻の行きかふさま眼病ながらよく見えたり女郞花の時なら

ぬ粟をちらすを實の餌と思ひて雀の群がりて拾ふを見るに付借々鳥獸は馬鹿な者だと思へどそういふ人間も矢張此雀と五十歩百歩なれば惡口はいへず朝皃も取りつく枝なければ所々這ひ廻つた末漸々松の根形にある四角張たる金燈籠に纒ひ付かなし氣にたつた一輪咲きたるは錆びつきて見る影もなき燈籠の面目なり病み上りの美人が壯士の腕に倚りけるが如しとでも評すべきか呵々先ヅ庭中の景は此位にておやめと致すべし

此頃は何となく浮世がいやになりどう考へても考へ直してもいやで〳〵立ち切れず去りとて自殺する程の勇氣もなきは矢張り人間らしき所が幾分かあるせいなんか「ファウスト」が自ら毒藥を調合しながら口の邊まで持ち行きて遂に飮み得なんだといふ「ゲーテ」の作を思ひ出して自ら苦笑ひ被致候小生は今迄別に氣樂苦勞して生長したといふ譯でもなく非常な災難に出合ふて南船北馬の間に日を送りしこともなく唯七八年前より自炊の竈に顏を焦し寄宿舍の米に胃病を起しあるひは下宿屋の二階にて飮食の決鬪を試みたりそれは〳〵のんき氣に月日を送り此頃は其にも倦きておのれの家に寐て暮す果報な身分でありながら定業五十年の旅路をまだ半分も通りこさず旣に息切きは段貴君の手前はづかしく吾ながら情なき奴と思へどこれも misanthropic 病なれば是非もなしいくら平等無差別と考へても無差別でないからおかしい life is a point between two infinities とあきらめてもあきらめられないから仕方ない

We are such stuff
As dreams are made of ; and our little life
Is rounded by a sleep.

といふ位な事は疾から存じて居ります生前も眠なり死後も眠りなり生中の動作は夢なりと心得ては居れど左樣に感じられない處が情なし知らず生れ死ぬる人何方より來りて何かたへか去る又しらず假の宿誰が爲

めに心を惱まし何によりてか目を悦ばしむると長明の悟りの音は記臆すれど悟りの實は迹方なし是も心といふ正體の知れぬ奴が五尺の身に蟄居する故と思へば惡らしく皮肉の間に潛むや骨髓の中に隱るゝやと色色詮索すれども今に手掛りしれず只煩惱の焰熾にして甘露の法雨待てども來らず慾海の波險にして何日彼岸に達すべしとも思はれず已みなん／＼目は盲になれよ耳は聾になれよ肉體は灰になれかしわれは無味無臭變ちきりんな物に化して

I can fly, or I can run,
Quickly to the green earth's end,
Where the bowed welkin slow doth bend;
And from thence can soar as soon
To the corners of the moon.

と申す樣な氣樂な身分になり度候、あゝ正岡君、生て居ればこそ根もなき毀譽に心を勞し無實の褒貶に氣を揉んで鼠糞梁上より落つるも膽を消すと禪坊に笑はれるではござらぬか御文樣の文句ではなけれど二ツの目永く閉ぢ一つの息永く絶ゆるときは君臣もなく父子もなく道德も權利も義務もやかましい者は滅茶／＼にて眞の空々眞の寂々に相成べく夫を樂しみにながらへ居候棺を蓋へば萬事休すわが白骨の鍬の先に引きかゝる時分には誰か夏目漱石の生時を知らんや穴賢

（略）小生箇樣な愚癡ッぽい手紙君にあげたる事なしかゝる世迷言申すは是が皮きりと苦い顏せずと讀み給へ

漱石拜

子規机下

二

明治二十三年月日不詳　八月末頃　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

さすが詩神に乗り移られたと威張られる御手際讀み去り讀み來つて河童の何とかの如くならず天晴れ〳〵かつほれ〳〵手を拍て感じ入候然し時々は詩神の代りに悪魔に魅入られたかと思ふ様な悪口あり君此頃大變偈をかつぎ出す事が好きになつたから僕一偈を左右に呈すべし毎朝燒香して此偈を唱へ此悪魔を被ひ給へ

我昔所造諸悪業　皆由無始貪瞋癡
從身語意之所生　一切我今皆懺悔

女崇の攻撃藎箒の反對奇妙〳〵然し滑稽の境を超えて悪口となりおどけの旨を損して冷評となつては面白からず其も貴様の手紙が癪に障るからだと言はるれは閉口仕候悟道徹底の貴君が東方朔の囈語に等しき狂人の大言を眞面目に攻撃してはいけない（略）

詩神は佛なり佛は詩神なりといふ議論斬新にして面白し君能く色聲の外に遊んで清淨無漏の行に住し自己の境界を寫し出されたとすれば敬服の外なし今より朋友の交を絕ち師弟の禮を以て贄を執り君の門に遊ばんかね然し例の臆測的揣摩的の議論なら一切御免蒙る（悟れ君）なんかと吹鳴つても駄目だ（狐禪生悟り）抔とおつにひやかしたつて無功とあきらむべし又理窟詰め雪隱詰めの悟り論なら此方も大分言ひ草あり反對したき點も澤山あれど此頃の天氣合ひ兎角よろしからず攫み合ひ取組合ひ果ては決闘でもしなければならぬ様になるとどつちが怪我をしても海内幾多の美人を愁殺せしむるといふ大事件だから一先づこゝ

は中直りをして置きましよう何れ九月上旬には詩神にのりうつられたといふ顔色しみ〴〵と拜見可仕候

君が散々に僕をひやかしたから僕も左の一詩を咏じてひやかしかへす〳〵

江山容不俗懷塵。君是功名場裏人。
憐殺病軀多客氣。漫將翰墨論詩神。

君の說諭を受けても浮世は矢張り面白くてたまらず夫故明日より箱根の靈泉に浴し又々晝寐して美人でも可夢候

仙人墮俗界。遂不免喜悲。啼血又吐血。憔悴憐君姿。
漱石又枕石。固陋歡吾癡。君病猶可癒。僕癡不可醫。
素懷定沈鬱。愁緖亂如絲。浩歌時幾曲。
一曲唾壺碎。二曲双涙垂。曲闋呼咄々。衷情欲訴誰。
白雲蓬勃起。天際看蛟螭。笑指函山頂。去臥葦湖湄。
歲月固悠久。宇宙獨無涯。蜉蝣飛湫上。大鵬嗤其卑。
嗤者亦泯滅。得喪皆一時。寄語功名客。役々欲何爲。

眞に塵陋で詩とも何とも申し樣御座なく候へ共何となく出來仕候間御笑ひ草に御目にかけ候何卒御叱りなく御添删の程偏に奉願候（どうだ此位卑下したらさすがの君もよもや犬の糞の讎きうちは爲されまい）

露地白牛

正岡詞兄

（正岡子規稿『筆まかせ』より）

三

明治二十四年四月二十日　ヲ便　牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ

狂なるかな狂なるかな僕狂にくみせん君が芳墨を得て始めは其唐突に驚ろき夫から腹を抱へて滿案の哺を噴き終りに手紙を掩ふて淒然たり君の詩文を得て此の如く數多の感情のこみ上げたるは今が始めてなり君が心中一點の不平儼然炎上して滿腦の大火事となり餘焔筆頭を傳はつて三尺の半切に百萬の火の子を降らせたるは見事にも目ばゆき位なり平日の文章心を用ひざるにあらず修飾なきにあらず只狂の一字を缺くが故に人をして瞠若たらしむるに足らず只此一篇狂氣剛燥わが衷情を寸斷しわが五尺の身を戰栗せしむ七草集にものかは隱れみのも面白からず只此一篇……

嗚呼狂なる哉狂なるかな僕狂にくみせん僕既に狂なる能はず甘んじて蓄音器となり來る廿二日午前九時より文科大學哲學教場に於て團十郎の假色おつと陳腐漢の囈語を吐き出さんとす蓄音器となる事今が始めてにあらず又是が終りにてもあるまじけれど五尺にあまる大丈夫が情けなや何の果報ぞ自ら好んでかゝる器械となりはてたる事よ行く先きも案じられ年來の望みも烟りとなりぬ梓弓張りつめし心の弦絶えて功名の的射らんとも思はざれば馬鹿よ白癡と呼ばれて一世を過し蓄音器となつて紅毛の士に弄ばるゝも亦一興ぞかし

左樣なら

廿日夜　平凸凹

偷花兒殿

一三

明治二十四年七月九日　ル便　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戶正岡常規氏へ

　觀劇の際御同伴を不得殘念至極至極殘念（宛然子規口吻）去月卅日曇天を冒して早稻田より歌舞伎座に赴くぶら〳〵あるきの錢いらず神樂坂より車に乘る烈しかれとは祈らぬ南風に車夫よたよたあるきの小言澤山否とよ車主さな怒り給ひぞ風に向つて車を引けばほろふくろゝの道理ぞかしと說諭して見たれど車耳南風にて一向埒あかず十時半頃土間の三にて仙湖先生を待つ程なく先生到着錬鄉をつれて來ると思ひの外岩岡保作氏を伴ひし時こそ肝つぶれしか（再模得子規妙）固より年來の知己なれは否應なしに桝に引つぱり込んで共に見物す桝の內より見てあれば團十郎の春日の局顏長く婆々然として見苦し然し御菓子頂戴御壽もじよろしい口取結構と舞臺そつちのけのたら腹主義を實行せし時こそ愉快なりしか。仙湖先生は頻りに御意に入つてあの大きな眼球から雨滴程な淚をこぼすやつがれは割前を通り越しての飮食に天咎のがれ難く持病の疝氣急に胸先に込み上げてしく〳〵痛み出せし時は芝居所のさわぎにあらず腰に手を當て顏をしかめての大ふさぎはたの見る目も憐なり腹の痛さをまぎらさんと四方八方を見廻はせば御意に入る婦人しなく只一軒おいて隣りに圓遊を見懸けしは鼻々おかしかりしなあいつの痘痕と僕のと數にしたらどちらが多いだらうと大に考へて居る內いつしか春日の局は御仕舞になりぬ公平法問の場は落語を實地に見た樣にて面白くて腹の痛みを忘れたり

　惣じて申せば此芝居寄園以上の價値なしと歸り道に兄に話すと田舍漢が始めて寄席へ行と同じ事でどこが面白いか分るまいと一本鎗込られて僕答ふる所を知らずそこで愚兄得々賢弟默々

今日學校に行つて點數を拜見す君の點で缺けて居る者は物集見(原)の平生點（但し試驗點は七十）と小中村

さんの點數（是は平生も試驗も皆無だよ）餘は皆平生點ありじくそんは平生87に試驗46先以て恐悅至極右の譯だから小中村の平生點六十以上と物集見の平生點六十以上あれば九月に試驗を受る事が出來る然し今のまゝでは落第なり

先は手始めの御文通迄餘は後便

九日午後

金之助

正岡常規さま

一四

明治二十四年七月十六日　〆便　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

貴地御安着日々風流三昧に御消光の事と羨望仕居候小弟不相變宰予の弟子と相成離しがたき朽木をごろ〳〵持ちあつかひ居候

小中村物集見平常點の義に付き教務掛りへ照會致候處一日も早く御差出し有之可くとの事故去る十二日芳賀矢一君方へ參り右の談判相賴み候處小中村は當時伊香保入浴中の由にて早速木幕金太夫方へ同氏より書狀差し出しもらひ候

物集見へも同日同時に賴み狀同人より相つかはし候但し兩人とも不承知なら返事をよこす筈承知なら何とも云ふて來ぬ筈なり今迄何ともいふて來ぬ故出して來れたに相違なしと斷定する者なり（尤も此頃の暑さに恐れて學校へは參り不申）由て來る九月に追試驗の御覺悟にて隨分御勉强可被成候」

芳賀氏訪問の節同人の話しに來る九月より大學にて文學會雜誌といふ者を發兌する都合にて其手順とゝ

のいたる赴きに御座候過日大兄と御話しの件不圖實行の緒につきたるは隨分奇妙且は發兌の上の事何しろ大學の名譽に關せぬ樣願度者也大兄も一臂の御盡力あつては如何（おいやでげすかね）
先は用事迄餘は後便
此手紙二本目に付無性者の本性として非常の亂筆なりおゆるしあれ

盆の十六日　　　　平凸凹

物草次郎樣

こもだれの中

試驗は是非受ける積りでなくては困ります

一五

明治二十四年七月十八日　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戶正岡常規氏へ　〔封筒の表側に「眞書秘密封じ文」とあり〕

去る十六日發の手紙と出逢に貴翰到着早速拜誦仕候人をけなす事の好きな君にほめられて大に面目に存候嗚呼持つべき者は友達なり
愚兄得々賢弟默々の一語御叱りにあづかり恐縮の至り以來は愼みます
御歸省後御病氣よろしからざるおもむきまことに御氣の毒の至に存候左樣の御容體にては强いて在學被遊候とても詮なき事御老母のみかは小生迄も心配に御座候得ば貴意の如く撰科にても御辛抱相成る方可然人爵は固より虛榮學士にならなければ飯が食へぬと申す次第にも有之間じく候得ば命大切と氣樂に御修業可然と存候夫に就ても學資上の御困難はさこそと御推察申上候といふ迄にて別段名案も無之、いくら僕が

器械の龜の子を發明する才あるも開いた口へ牡丹餅を抛りこむ事を知つて居るとも是ばかりはどうも方がつきませんなそれも僕が女に生れていれば一寸靑樓へ身を沈めて君の學資を助るといふ樣な乙な事が出來るのだけれど……夫も此面ではむづかしい

試驗癈止論貴察の通り泣き寢入りの體裁やつた所が到底成功の見込なしと觀破したね

ゑゝともう何か書く事はないかしら、あゝそう／＼、昨日眼醫者へいつた所が、いつか君に話した可愛らしい女の子を見たね、――［銀］杏返しに竹なはをかけて――天氣豫報なしの突然の邂逅だからひやつと驚いて思はず顏に紅葉を散らしたね丸で夕日に映ずる嵐山の大火の如し其代り君が羨ましがつた海氣屋で買つた蝙蝠傘をとられた、夫故今日は炎天を冒してこれから行く

七月十八日

凸　凹

物草次郎殿

一六

明治二十四年七月二十四日　（郵便）　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ　〔はがき〕

御返事兒文

毀盡朱顏嫺痩瘦失來歸素髮閑吾被漢語迷非難事吾是宛然不動尊（大兒の兒文を三誦して悟りたる境界に御座候）

岐岨道中の詩拜見佳句も澤山ある樣なり次韻したけれどそう急には出來ず昨日故人五百題と云ふ者を見て急に俳諧が作りたくなり十二三首を得たり御笑ひ草に供したけれど端書故いづれ後便にて御斧正相願度

一七

明治二十四年八月三日　ル便　牛込區喜久井町一番地より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

一丈餘の長文被下難有拜見小子俳道發心につき草々の御教訓情人の玉章よりも嬉しく熟讀仕候天禀庸愚のそれがし物になるやらならぬやら覺束なき儀には存候得共性來かゝる道は下手の横好とやらに候得ば向後駿尾に附して精々勉强可仕〔候〕間何卒御鞭撻被下度候

玉作數首謹んで拜見俳句はいづれも美事に御座候仰せの如く句調の具合先日中拜見仕候者と夐かに別機軸の御手際と感心仕候峽中雜詩第一五首中の翹楚と存候管々しき細評は佛頭の天糞とやらにつき御免蒙り候實は負けぬ氣に次韻でもして君の一粲を博せんと存居候處去月下旬一族中に不慮の不幸を生じ其が爲め彼是取紛れ只今にては硯に對する閑暇はあれど筆を執る忍耐力なく幼學詩韻をひねくり廻す騷ぎにも參り兼候間次韻の義も願下に致候

不幸と申し候は餘の儀にあらず小生嫂の死亡に御座候實は去る四月中より懷姙の氣味にて惡疽と申す病氣にかゝり兎角打ち勝れず漸次重症に陷り子は闇より闇へ母は浮世の夢廿五年を見殘して冥土へまかり越し申候天壽は天命死生は定業とは申しながら洵に／＼口惜しき事致候

わが一族を賞揚するは何となく大人氣なき儀には候得共彼程の人物は男にも中々得易からず況て婦人中には恐らく有之間じくと存居候そは夫に對する妻として完全無缺と申す義には無之候へ共社會の一分子たる人間としてはまことに敬服すべき婦人に候ひし先づ節操の毅然たるは申すに不及性情の公平正直なる胸懷の洒々落々として細事に頓着せざる抔生れながらにして悟道の老僧の如き見識を有したるかと怪まれ候

位髭髯鬖々たる生悟りのえせ居士はとても及ばぬ事小生自から慚愧仕候事幾回なるを知らずかゝる聖人も長生きは勝手に出來ぬ者と見えて遂に魂歸冥漠魄歸泉只住人間廿五年と申す場合に相成候さはれ平生佛けを念じ不申候へば極樂にまかり越す事も叶ふ間じく耶蘇の子弟にも無之候へば天堂に再生せん事も覺束なく一片の精魂もし宇宙に存するものならば二世と契りし夫の傍か平生親しみ暮せし義弟の影に髣髴たらんかと夢中に幻影を描きここかかしこかと浮世の覊絆につながるゝ死靈を憐みうたゝ不便の涙にむせび候母を失ひ伯仲二兒を失ひし身のかゝる事には馴れ易き道理なるに一段毎に一層の悼惜を加へ候は小子感情の發達未だ其頂點に達せざる故にや心事御推察被下たく候

悼亡の句數首左に書き連ね申候俳門をくゞりし許りの今道心佳句のあり樣は無之一片の哀情御酌取り御批判被下候はゞ幸甚

朝貌や咲た許りの命哉　（未だ元服せざれば）
細眉を落す間もなく此世をば　（死時廿五歳）
人生を廿五年に縮めけり
君逝きて浮世に花はなかりけり　（容姿秀麗）
假位牌焚く線香に黑む迄
こうろげの飛ぶや木魚の聲の下
通夜僧の經の絕間やきりぎりす　（三宵通夜の句）
骸骨や是も美人のなれの果　（骨揚のとき）
何事ぞ手向し花に狂ふ蝶
鏡臺の主の行衞や塵埃　（二首初七日）

ますら男に染模樣あるかたみかな　（記念分）
聖人の生れ代りか桐の花　（其人物）
今日よりは誰に見立ん秋の月　（心氣清澄）

先日御話しの句左に抄錄す是亦御郢正奉願候

馬の背で船漕ぎ出すや春の旅
行燈にいろはかきけり獨旅
親を持つ子のしたくなき秋の旅
さみだれに持ちあつかふや蛇目傘
見るうちは吾も佛の心かな　（蓮の花）
螢狩われを小川に落しけり
藪陰に涼んで蚊にぞ喰はれける
世をすてゝ太古に似たり市の内
雀來て障子にうごく花の影
秋さびて霜に落けり柿一つ
吾戀は闇夜に似たる月夜かな
柿の葉や一つ一つに月の影
涼しさや晝寐の貌に靑松葉
あつ苦し晝寐の夢に蟬の聲
とぶ螢柳の枝で一休み

朝貌に好かれそうなる竹垣根
秋風と共に生へしか初白髪

先づこんな物に御座候向來物になられませうか

鷗外の作ほめ候とて圖らずも大兄の怒りを惹き申譯も無之是も小子嗜好の下等なる故と只管慚愧致居候元來同人の作は僅かに二短篇を見たる迄にて全體を窺ふ事かたく候得共當世の文人中にては先づ一角ある者と存居候ひし試みに彼が作を評し候はんに結構を泰西に得思想を其學問に得行文は漢文に脱胎して和俗を混淆したる者と存候右等の諸分子相聚つて小子の目には一種沈鬱奇雅の特色ある樣に思はれ候尤も人の嗜好は行き掛りの教育にて（假令ひ文學中にても）種々なる者故己れは公平の批評と存候ても他人には極めて偏僻な議論に見ゆる者に候得ば小生自身は洋書に心醉致候心持ちはなくとも大兄より見れば左樣に見ゆるも御尤もの事に御座候全體あの時君と僕の嗜好は是程違ふやと驚き候位然し退いて考ふれば是前にも云へる如く元來の嗜好は同じきも從來學問の行き掛りにてかゝる場合に立ち到り候事と存じ夫よりは可成博覽をつとめ偏僻に陷らざらん樣に心掛居候其上日本人が自國の文學の價値を知らぬと申すも日本好きの君に面白なきのみならず日本が夫程好き者のあるを打ち棄てゝわざ／＼洋書にうつゝをぬかし候事馬鹿々々敷限りに候のみならず我等が洋文學の隊長とならん事思ひも寄らぬ事と先頃中より己れと己れの貫目が分り候得ば以後は可成大兄の御勸めにまかせ邦文學研究可仕候さはれ成童の頃は天下の一人と自ら思ひ上り三身の己れを欺いて今迄知らずに打ち過ぎけるよと思へば自ら面目なき迄に愧入候性來多情の某何にでも手を出しながら何事もやり遂げぬ段無念とは存候得共是亦一つは時勢の然らしむる所と諦め居候御憫笑

頃日來司馬江漢の春波樓筆記を讀み候が書中往々小生の云はんと欲する事を發揮し意見の暗合する事間間有之圖らず古人に友を得たる心にて愉快に御座候此は序ながら申上候

時下炎暑の砌り御道體精々御いとひ可被成候　拜具

八月三日　　　　平凸凹拜

のぼるさま

一八

明治二十四年九月十二日　手便　牛込區喜久井町一番地より埼玉縣大宮驛氷川公園鹿松樓高島方正岡常規氏へ

屁理窟を海容の上はちときびし過ぎる、なれど御採用にあづかりて千萬辱けなし試驗の可否今日念の爲め小泉と談判に及び候ところ異論のあるべき筈なく御都合次第教師と相談の上御受驗可被遊との趣に候向後一週間位の中に完結可致規則にやと問返したれば否左にあらず今少々は後れてもよろしく然し可成早き方こそ望ましけれといふ次第なれば下讀濟次第御歸京目前の障礙御取り被ひ可被成候小生抔は心の不平のみならず顏も一面に不平なれば君よりは申し分もある筈なるに大人しく今迄辛抱致し居候へば大兄も少しは苦しむ方朋友へ對しての義理なり試驗の問題は悉く忘れたれば菊地より送つてもらふ筈然し問題外の處も目を通さなくつては困るぜ何しろ下讀濟次第御歸京可然候

餘は拜眉の上

十二日午後　　　　平凸凹

もの草次郎どの

一九

明治二十四年十一月七日　ヌ便　牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規氏へ

思ひ掛なき君が思ひがけなくも明治豪傑譚に氣節論まで添へて御恵投あらんとは眞以て思ひがけなく驚入候何は偖ありがたく受納仕候御手紙は再三操返し豪傑譚は興味に連れ一息に讀了仕候當時少しく風邪の氣味にて臑顳岑々の折柄はからずも半日消閑の工夫を得申候拜謝仕候

豪傑譚は仰せの如く先頃中より讀賣紙上にて時たま閲覽仕居候其頃より是が豪傑の行爲にやと不審を抱き候角も不少欣羨抔と申す感情は偖置中には眉を蹙めて卻走せんと欲する件りも有之昨日興味につれ讀了候は聊も感服敬服抔と申す念慮より生じたる事に無之編中人物の行爲矯激極端にして殆んど狂癲の痕跡あるかを疑ふ位故何となく好奇の念禁じがたく一部の天然滑稽戯を披覽する心地にて通過致し倦怠を掩ふて是等の人物が如何に小生の心緒を攪動せしやと諦觀仕候へばさ毫も高尙だの優美だのと申す方向に導びきし點無之中には索隱行怪の餘弊殆んど人をして嘔吐を催ふせしむる件りも有之やに見受られ候かく申せばとて編中の人間皆氣節なき「ムータラ」のみと申す次第には無之中には仰の如き稜々たる風骨を具したる人も有之べく其代りには一點の意氣地なき輩も交り居るべくそも氣節と申すは己れに一個の見識を具へて造次顚沛の際にも是を應用し其一生を貫徹するの謂に候得ば其人の氣節の有無は其人の前後を通觀せず候ては全體上其人の行爲が其人の主義と並行するや否やは判じ難きかと存候今此編に記載する件りは單に豪傑の（流俗の豪傑）一言半行位にとゞまりて其人の氣節を斷定するの材料には爲し難きやと存候先づ書中の事件を大別すれば第一卽座の頓智、第二其場の激情等多く之に屬せざるものは或は何人の生活中にも穿鑿したらば出てきさうなる失策話しか尋常一樣の世間話しにて偶其人が後日に盛名を博したる爲め役もな

き好奇漢の詮議立てより是も豪傑の行ひぞと人に云はるゝに至りたる件りも見受け候位是等は此失策話しが豪傑の傳を構造するにあらずして豪傑の盛名が溯つて此失策話しを著名にしたるに過ぎず猶分類せば他の族門をも設け得ん其中には欣慕と迄行かずと「も」感心な行ひと賞する位の事は曉星のごとくちらほらと見ゆる事もあらんなれど先づ右の三種と大別した處で即座の頓智と云ふ事は其人天稟の賦性にて能もあり不能もあり頓智あるが爲に氣節あり頓智なきが爲に氣節なしとは誰も許さぬ事なるべし否氣節を尊む人は場合に依れば出る頓智もわざわざ引き込す事あり是は其人の行爲を支配するものは一定の主義にして頓智とは即座の出放題其場逃れの便宜なれば苟も頓智にして己れの主義と相反する以上は一時の便宜は措おきかゝる方便を用ゆる事あるべからずよしんば頓智が己れの氣節を貫くに必要なる場合ありとするもかゝる能を有せざる人は到底用ゆる事の出來ぬ話しなり第二に一時の激昂にて感情的に爲したる事が氣節を表[原]影すと云ふも受取りがたし氣節とは前にも云ふ如く（余の考へにては）一定斷乎の主義を抱懷して動かざるに外ならず己れに特有なる一個の標準を有しこの標準を何處にも應用せんとするの觀念に過ぎず一時の感情若し此標準と合せば卒然の行爲必ずしも氣節を發揮せずとは云ひ難けれど感情はいつも智識と並行して起るものにあらず、のみならず屢ば背馳して相戻る事あるは君の知る所なれば此點にても氣節の有無は知りがたからん第三種に屬する失策話し（逸話にせよ）は吾人の生活中日々眼前に横たはるものにて中にも小生杯は人一倍失策多ければ若し之を以て氣節の發したるものとせば僕抔は風骨稜々の冠を戴くを得べし兎に角失策は豪傑に限りて多きにあらず又氣節あるが爲に大なるにあらず是は申す迄の事もなからんかく右の三者何れかとるも編中の人物に氣概ありや否やを判ずるの材料とは致し難くはなきやと愚考仕候今一歩を讓つて此片言隻行の間に豪傑の氣宇躍然としてあらはるゝにもせよ編中の人は皆同鑄型中に鍛錬せられたるにあらず甲の爲す處は乙の爲す處と牴牾し丙の言ふ所は丁の言ふ所と隔違す或人は纛を振りかけ

られたるさへ辛抱し或人は師の教訓に堪へずして長者を撃つ一方が氣節あらば一方は意氣地なきなり一方が風骨を有するならば一方は馬骨を有するなり君何が故に稜々の字を下して軒輊する所なきや君が意は其行爲の裏面に横たはる精神を見よとの事なるや精神を見るも二人の心行きは決して同じからず一は堪忍を大事となし一は任意直情を潔しとせるなり堪忍の方が氣節あらば任意の方氣節なきなり但し兩方共に氣節ありと云ふや職を高官に奉じて座睡禁ぜず是毫礫なり氣節にあらず格闘を挑まれて敢てせず之を酒樓に誘つて逃る是れ卑怯なり（昔しの武士道より見れば）氣節にあらず故に假令ひ氣節をして片言隻行の間にあらはるゝものとするも編中の事悉く氣節的の作りのみとは云ひ難からんと存候君若し以上の論議に不同意ならば再び方針を轉じて總概的に氣節の何物たるを說明致さんと存候御存じの如く人間の能力は智、情、意の三者に外ならず氣節は人間能力の一部なる以上は三者の中何「れ」にか屬せざるべからず第一氣節とは情に屬するやと云ふに決して然らず一時の怒りに激して人を痛罵す是氣節なりや余は氣節とは思はざるなり年來の怒りに激して日常人を痛罵す是氣節なりや是も亦氣節とは思はれずさらば一時の感情にもせよ年來の感情にもせよ感情を以て爲したる行爲は氣節と云ふ可からず氣節既に感情に屬せずんば之を意志の作用とせんか打つ可きの道理なく打ち度の感情なく妄りに鐵拳を擧て人に加ふ是れ氣節なりや同じく打つ可きの道理なく又打ち度の念慮なきに日常鐵拳を擧げて人に加ふ亦氣節にあらず去らば一時の意志にせよ年來の意志にせよ意志より來るもの氣節なりと云ふべからず意志に屬せず感情に屬せずんば氣節の屬する處は智の範圍内にあらずんばあらず親には孝を盡すべき理ありと心得て孝を盡す是氣節なり君に忠を致すべき道存すとて忠を致す是氣節なり人を罵しるべきの理あり故に罵しる人を打つべきの理あり故に打つ是氣節なり然れど一時の理を行ふ是れ一時の氣節を表はすのみ一小見識を抱いて之を行ふ是れ一小見識の氣節のみ一時の氣節一小見識の氣節有もよし無くとも差支へなし吾人の欲する所は絶大見識を抱懷して人生

の前後を貫き通ずるにあり書物にても一頁[原]には一頁の主意あり文字あり一篇には一篇の主意あり文字あり一卷には一卷を貫くの主意あり文字なかる可らず一頁の主意一篇の文字は一時の氣節一小見識の氣節のみ人生五十年の浩帙人生天大の主意决して一章一篇の中に存せざるなり故に僕謂ふ氣節は情に屬せず意に屬せずして智に屬す而して大氣節は人生を掩ふ大見識に屬すと君若し氣節は情若くは意に屬すと云はゞ僕一言なし唯見解の異なるを悲しむのみ君若し氣節は小見識を一時に行ふにありといはゞ僕又一言なし愈見解を異にするを悲しむなり

小生元來大兒を以て吾が朋友中一見識を有し自己の定見に由つて人生の航路に舵をとるものと信じ居候其信じきりたる朋友がかゝる小供だましの小冊子を以て氣節の手本にせよとてわざ／＼惠投せられたるはつや／＼其意を得ず小生不肖と雖も亦人生に就て一個の定見なきにあらず此年頃日頃詩を誦し書を讀むも讀むに從ひ誦するに從つて此定見の自然と發達して長大になるが爲めのみ徒らに彫琢の末技に拘[原]して一字一句の是非を論ずるは愉快なきにあらず然れども遂に小生が心を滿足せしむるに足らざるなり去れど小生とて我が見識こそ絶大なれ最高なれと云ふにあらず若し吾が主義の卑野ならんか大兒の高說を拜聽して其愚を癒するも可なり前賢の遺書に因て之を啓發するも可なり何を苦んで此蕞爾たる一俗冊を用いん君此書を讀んで自ら思へらく日本男子の區域外に放逐せられて饕餮飽くなきの蠻夷と伍するに至らざるを喜こぶなりと然れども君の目して蠻夷となすもの饕餮飽くなきの輩となすもの實に余に誨ゆるに人生の大思想を以てせり僕をして若し一點の節操あらしめば其節操の一半は鴃舌の書中より脫化し來つて余が腦中にあり此腦中にあるの秤量を以て此書の貫目をはかるに其輕き事秋毫の如し君何を以て此書を余に推擧するや余殆んど君の余を愚弄するを怪しむなり君の手翰を通觀するに字義共に眞面目にして通例滑稽的の文字にあらず且つ結末に（僕が之を贈るの微意を察せよ）とあり小子翻讀再三に及んで猶其微意の在る所を知るに

苦しむ不敏の罪逃るゝに由なきは是非なし但し小子は賢愚無差別高下平等の主義を奉持するものにあらず己より賢なるものを賢とし己より高きものを高しとするに於ては敢て人に遜らずと雖ども此編中の人吾より賢なる人吾より高き人吾の取て以て崇拜せんと欲するもの果して幾人かある由しや之れありとするも君の余に勸めんと欲するものは抽象的の氣節にして實體的の片言隻行にあらず余も三尺の童子にあらざれば此片言隻行を誦して氣節こゝにありと歎賞する能はず故に聊か疑を書して机下に呈す

君の書に曰く試みに學校の兒童を見よ工商の子多くは上座にあり士家の子多くは末席にあり然れども其學校を出づるや工商の子弟は終に士家の子弟に「一籌を」輸するを常とすと是は君一家の經驗にて云ふなるか統計抔にて云ふや（僕嘗て曰ふごとあれば貴君一家の説なるべし然し小生の居りし學校にては工商の子弟より士家の子弟常に上席を占めたりかく事實相反する以上は議論の土臺と爲り難し且つ學校を出でゝ商工の子「弟」が士家の子弟に一籌を輸すとは學問の點なりや世渡りの巧拙なりやはた君の所謂氣節の點なりや學問の點より云へば商工は商工の業あり專意學問に從事する事能はず士家の子弟は學を以て身を立つるもの多ければ商工の及ばざるは勿論の話しなり世渡りの巧拙に至つては容易に斷言しがたし商工は世に應じて甘く切りぬけ行くもの澤山ならん士人の子弟にても御鬚の塵を拂ひおべつか專一にて世に時めく者幾千萬なるを知らず又氣節の點に至つても商工の子無下に意氣地なしと思ひ給ふ可からず身分〳〵に應じて相應の意地はあるものなり但し無學なる工商に望むに絶大の見識を以てするは赤子をして郵便配達夫たらしめんとするが如し云はずとも分り切た話しなり之に反して士人の子と雖どもあながち氣節ある人多しとは云ふ可らず方今紳士とも云はるゝ輩靑萍とも浮草とも評すべき行爲あるもの枚擧すべからず其身元を尋ねたらば大方は士族なるべし兎に角氣節の有無抔は教育次第にて工商の子なりとて相應の教育を爲し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんとも覺えず暫らく氣節は士人の子の手に落ち工商の夢視

せざる處とするも是は工商たるが爲に氣節なきにあらずして氣節を涵養するの時機に會せざりしのみ試みに士家の子弟をとりて幼少より丁稚たらしめば數年を出ずして銅臭の兒とならん君の議論は工商の子たるが故に氣節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞ゆ君何が故［に］かゝる貴族的の言語を吐くや君若しかく云はゞ吾之に抗して工商の肩を持たんと欲す

君又曰く僕は賢愚の差に於て人を輕重する事少し然れども善惡の違に至つては一歩もこれを假さず小惡あれば卽ち極口之を罵詈し小善あれば則ち極口之を褒美す……僕之を以て得意となす他人の毀譽敢て關せざるなりと君既に他人の毀譽に關せず其主義を貫かんとす故に僕敢て君を褒貶せず然れども善惡の差を重んずる事君の云ふ所の如くならば願くは僕が言の善か惡かを聞け君が腦中には至善なる理想あり此理想を標準として他を褒貶せらるゝならん然るに世界の人間中君が理想を以て嚴正なる判定を下し是人こそ至善なれと君が道德試驗に滿點を得て及第する者ありや余は斷じてかゝる人間なしと云はん人は完全なる者にあらず頭の頂點より足の爪足まで圓滿の德を具へたる聖人は實際世間に存するものにあらず人間の思想は實より空に入り卑より高きに推移す實を離れたる善世間より高きの善是れ君が腦中の理想なり此理想の尺度を以て此善惡混合の人間をはかる決して合格者あるべからず若し合格者なきときは君朋友中に於て又知人中に於て遂に一人も君の意に合する者を見出す能はざらんとす見出す能はざれども之を我慢すれば差支へなし然し君の如く善惡の差に於ては一歩も假さずと云ふ以上は君遂に滿天下を見渡して一の交る可き者なく言語を交はす者なきを見ん若し又善は善でとり惡は惡としてすつると云ふ意ならば君既に善を褒すると同時に惡を寬假したるなり由しや惡を寬假せずとするも若し一人に接して毫末の惡を見出し彼れ談ずるに足らずとて之を嫉視せば彼人假令ひ他に蓋世の善あるも君遂に其善を知る能はずして已まん又彼れ涓滴の善ありとて之に交はるとも其人滔天の惡ある以上は之を奈何すべき必竟人間界にては善は善惡は惡と範

圓を分ち善の區域にあるものは生涯惡を見ず惡の領分に居るものは終身善を知らずと云ふ樣な勝手な事は行はるゝものにあらず何人にても取るべき所あり又貶すべき所あり君既に寸善を容るゝの量あらば又分惡を包むの度なかるべからず乍失禮君の一身でさへ前後を通看したなら機微の際忽然として惡念の心頭に浮びし事あるべし（假令ひ之を行はぬにもせよ）何となれば人間は善惡二種の原素を持つて此世界に飛び出したるものなればなり若し人性は善なりと云はゞ惡と云ふ事を知るべきの道理なし惡と云ふ事を行ふ筈なし善惡二性共に天賦なりとせば善を褒すると同時に不善をも憐まざるべからず今君謾罵の不善を假さずして終身之を忘れずんば僕實に君が慈憐の心に乏しきを嘆ぜずんばあらず僕思ふに君實にかゝる主義を應用するにあらず論じて筆端に上る〔に〕至つて遂に此過激の文字となりしならん先年僕が厭世の手紙の返事に天下不大瓢不細の了見で居るべしと云ひ給へり其了見で居る君が斯る狹隘なる意見を述べて（得意となす）抔云ふに至つては實に前後の隔絶せるに驚かずんばあらず先に云ふ處のものは單に壯言大語僕を驚かせしなれば僕向後決して君を信ずまじ又冗談ならば眞面目の手紙の返事にかゝる冗談は癈して貰はんと存ず又先年の主義を變じ今日の主義となしたりと云はゞ夫でよし人間の主義終始變化する事なければ發達するの期なし變じたるは賀すべし然し變じ方の惡きは驚かざるを得ず高より下に上り大人より小兒に生長したる樣な心地するなり僕決して君を誹謗するにあらず唯君が善惡の標準を以て僕が言の善か惡かを量れ

實は默々貰ひ放しにしておかんと存じたれどかくては朋友切磋の道にあらず君が眞面目に出掛たものを冷眼に看過しては濟まぬ事と再考の上好んで忌諱に觸る狂妄多罪

十一月七日　　　　金之助拜

常規殿

明治二十四年十一月十一日　口便　牛込區喜久井町一番地より本郷區眞砂町常盤會寄宿舍正岡常規兄へ

僕が二錢郵劵四〔原〕牧張の長談議を聞き流しにする大兄にあらずと存居候處案の如く二牧張の御返禮にあづかり金高より云へば半口たらぬ心地すれど芳墨の眞價は百牧の黄白にも優り嬉しく披見仕候仰の如く小生十七八以後かゝるまじめ腐つたる長々しき囈語を書き連ねて紙筆に災ひせし事なく議論文抔は君に差上候手紙にも滅多に無之唯君の方で足下呼はりで六づかしく出掛られた故つい乘氣になり色々の雜言申上恐縮の至に不堪決して〱御氣にかけられざる樣願上候

頑固の如くには候へども片言隻行にては如何にしても氣節は見分けがたくと存候良雄喜劍の足を舐る良雄の主義人の辱を受けざるにあれば足を舐るは氣節を損したるなり良雄の主義復讎にあれば足を舐るは氣節を全ふしたるなり喜劍良雄の墓前に死す喜劍の主義長生にあらば墓前に死するは節を損したるなり喜劍の主義任俠にあれば墓前に死するは節を全ふしたるなり去れば一言一行を其人の主義に照り合せざれば分らぬ事と存候（其人の主義の知れておる時は例外）

氣節は（己れの見識を貫き通す）事と申し上候積り此（見識）は智に屬し（貫く）（卽ち行ふ）は意に屬す行はずして氣節の士とは小生も思ひ申さず唯行へと命令する者が情にもあらず意にもあらず智なりと申す主意に御座候處筆が立ぬ故其所迄まはり兼疎漏の段御免被下度候

僕決して君を小兒視せず小兒視せば笑つて默々たるべし八錢の散財をした處が君を大人視したる證據なり恨まれては僕も君を恨みます

君は人の毀譽を顧みず毀譽を顧みぬ君に喃々するは君を褒貶するの意にあらず唯僕の說が道德上嘉すべ

き說なりや道德上惡しき說なるやを判じ給へとの意に御座候唯卑說の論理に傾きたる爲め善惡の字を以つて正否の字に見違へらる是亦僕の誤り（說に善惡あり又眞僞あり多妻論は耶蘇教徒より見れば論理的なると否とを問はず惡說なり進化主義も神造物者主義より見れば惡說なり社會主義は高天原連より見れば惡說なり）

「其惡を極口罵詈せしとて其人と交らぬと云ふにはあらず」御說明にて恐れ入候叩頭謝罪

僕前年も厭世主義今年もまだ厭世主義なり嘗て思ふ樣世に立つには世を容るゝの量あるか世に容れらるゝの才なかるべからず御存の如く僕は世を容るゝの量なく世に容れらるゝの才にも乏しけれどどうかこうか食ふ位の才はあるなりどうかこうか食ふの才を頼んで此浮世にあるは說明すべからざる一道の愛氣隱々として或人と我とを結び付るが爲なり此或人の數に定限なく又此愛氣に定限なく雙方共に增加するの見込あり此增加につれて漸々慈悲主義に傾かんとす然し大體より差引勘定を立つれば矢張り厭世主義なり唯極端ならざるのみ之を撞着と評されては仕方なく候

最後の一段は少々激し過ぎたる由貴意の如くかも知れず（僕の愚を憐んで可なり）抔と出られては眞に慚愧不禁再び叩頭謝罪

道德は感情なりとは御同意に候絶大の見識も其根本を煎じ詰れば感情に外ならず形而下の記號にて證明し難ければなり去れど此理想の標準に照し合せて見る過程が智の作用と存候

君の道德論に就て別に異議を唱ふる能はず唯貴說の如く惡を嫉むの一點にて君と僕の間に少しく程度の異なる所あるのみどう考へても君の惡を嫉む事は餘り酷過ぎると存候

微意の講釋は他日拜聽仕るべく候

君の言を借りて

（偏へに前書及び本書の無禮なるを謝す　不宣）
又々行脚の由不相變御精興賀し奉候
秋ちらほら野菊にのこる枯野かなの一句千金の價あり
犢丸の句は好まず、笠の句もさのみ面白からず

十一月十日夜

平凸凹筆

子規
　臥禪傍

二

明治二十五年六月十九日　ホ便　牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ　〔はがき〕

凸凹[註]昨君の青白の容を拜むに何ぞ纍々として喪家の犬に似たるや就ては九時頃ブッセの試驗問題到着皆哲學の試驗を濟せ了んぬ處が君の平生點があれだから困る譯だけれど昨日の樣な條件のある試驗だから後から受る事も出來るだらう故都合次第左樣談判可相成候先は用事まで早々頓首

十九日早朝

三

明治二十五年七月十九日　ト便　岡山市内山下町百三十八番邸片岡方より松山市湊町四丁目十六番戸正岡常規氏へ

貴地十七日發の書狀正に落手拜誦仕候先は炎暑の候御清適奉賀候小子來岡以來愈壯健日々見物と飮食と

晝寐とに忙がはしく取紛れ打ち暮し居候去る十六日當地より金田と申す田舍へ參り二泊の上今朝歸岡仕候
閑谷贊へは未だ參らず後樂園天守閣等は諸所見物仕候當家は旭川に臨み前に三樋山を控へ東南に京橋を望
み夜に入れば河原の掛茶屋無數の紅燈を點じ納涼の小舟三々五々橋下を往來し燭光淸流に徹して宛然たる
小不夜城なり君と同遊せざりしは返すゞゝす殘念なり今一度閑谷見物かたゞゝ御來岡ありては如何一向平
氣にて遠慮なき家なり試驗の成蹟面黑き結果と相成候由鳥に化して跡を晦ますには好都合なれども文學士
の稱號を頂戴するには不都合千萬なり君の事だから今二年辛抱し玉へと云はゞなに鳥になるのが勝手だと
云ふかも知れぬが先づ小子の考へにてはつまらなくても何でも卒業するが上分別と存候願くば今一思案あ
らまほしう

鳴くならば滿月になけほとゝぎす

餘は後便にゆづる亂筆御免

十九日午後

平凸凹より

獺祭詞兄

尊下

二三

明治二十五年八月四日　ハ便　岡山市内山下町百三十八番邸片岡方より松山市湊町四丁目十六番戶正岡常規氏へ

朶雲拜誦仕候御申越の如く當地の水害は前代未聞の由にて此前代未聞の洪水を東京より見物に來たと思
へば大に愉快なる事ながら退いて勘考すれば居席を安んぜず食飽に至らず隨分酸鼻の極に御座候御地は別

段の水害もなき模樣先々結構の至に存候津山は餘程の損害と承る是空子の處は如何
　小生去る二十三日以後の景況御報申し上んと存居候へども鳥に化して跡をかくすとありし故旅行中にもやと案じ別段書狀もさし上げず居候先便にも申し上候通り當家は旭水に臨む場所にて水害中々烈しく床上五尺程に及び二十三日夜は近傍へ立退終夜眠らずに明し二十五日より當地の金滿家にて光藤と云ふ人の離れ座敷に迎へ取られ候處同家にても老祖母大患にて厄介に相成も氣の毒故八日目に歸宅仕候歸寓して觀れば床は落ちて居る疊は濡れて居る壁は振い落してあるいやはや目も當てられぬ次第四斗樽の上へ三疊の疊を並べ之を客間兼寐處となし戸棚の浮き出したるを次の間の中央に据へ其前後左右に腰掛と破れ机を絣[原]べ是を食堂となす屋中を歩行する事峽中を行くが如し一歩を誤てば椽[原]の下に落ついやはや丸で古寺か妖怪屋敷と云ふも猶形容し難かり夫でも五日が一週間となるに從ひ此野蠻の境遇になれて左のみ苦とも思はず可笑しき者なり實は一時避難の爲め君の所へでも罷り出んと存居候ひしが旅行中で留守にでも遇つたら困ると思ひ今迄差し控へ居候斯る場合に當方に厄介に相成候も氣の毒故先日より歸京せんと致候處今少し落付く迄是非逗留の上緩々歸宅せよと强て抑留せられ候へども此方にては先方へ氣の毒先方では此方へ氣の毒氣の毒と氣の毒のはち合せ發矢面目玉をつぶすと云ふ譯御憫笑可被下候
　夫故閑谷黌へも猶參らず然し近日當主人の案內にて金比羅へ參る都合故其節一寸都合よくば御立寄可申歸京は九月上旬と御約束申上置候へども右の次第故少々繰り上本月中旬か又は下旬頃に致し度と存候大兄の御見込は如何に御座候や若し御不都合無之ば御同伴仕り度と存候來る六七日頃太田達人より爲替送付致し呉候筈故夫より後なら何時でも歸京差支へなし
　實に今回の水は驚いた樣な面白い樣な怖しい樣な苦しい樣な種々な原素を含み岡山の大洪水又平凸凹一生の大波瀾と云ふべし然し餘波が長くて今に乞食同樣の生活を爲すは少し閉口石關の堤防をせき留めるや

否や小生肛門の土堤が破れて黄水汎濫には恐れ入る其に床下は一面の泥で其上に寐る事故餘程身體には害があるならんと愚考仕る許りで目下の處では當分此境界を免がるゝ事能はさらんとあきらめ居候

猶委細は御面會の節　頓首頓首

八月四日　　平凸凹

子規さま

尊下

二四

明治二十五年十一月二十日　ル便　牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ　〔はがき〕

御一家御無事御着京之趣大慶奉存候早速參上可仕のところ御（悄然）の際御邪魔と存じ差控へ居候御老母さま幷びに御令妹へよろしく御鳳聲被下度候何れ其内拜趨萬々

二五

明治二十五年十二月十五日　イ便　牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

貴書拜見目下愈寒氣に差し向ひ候ところ筆硯ますく御清榮奉賀候小生不相變毎日々々通學仕居候間乍憚御休神被下度候偖運動一件御書狀にて始めて承知仕り少しく驚き申候然し學校よりは未だ何等の沙汰も無之辭職勸告書抔も未だ到着不仕御報に接する迄は頓とそんな處に御氣がつかれず平氣の平左に御座候過日學校使用のランプの蓋に「文集はサッパリ分らず」と書たるものあれど是は例の惡口かゝる事を氣にし

ては一日も教師は務まらぬ譯と打捨をき候其後講義の切れ目にて時間の鳴らぬ前無斷に室外に飛び出候生徒ありし故次の時間に大に譴責致候是は前の金曜の事其外別段異狀も無之今日迄打過居候元來小生受持時間は二時間のところ生徒の望みにて三時間と致し且つ先日前學年受持の生徒來り同級へも出席致し呉ずやと頼み候位故左程評判の悪しき方ではないと自惚仕居候處豈計らんやの譯で大兄の御手紙にて運動一件小生の耳朶に觸れ申候勿論小生は教方下手の方なる上過半の生徒は力に餘る書物を担ね返す次第なれば不滿足の生徒は澤山あらんと其邊は疾くより承知なれど是は一方より見ればあながち小生の咎にもあらず學校の制度なれば是非なしと勘辨仕居候去るにても小生の爲めに〔?〕此間運動抔致す程とは實に思ひも寄らずと存居候段隨分御目出度かりし無論生徒が生徒なれば辭職勸告を受てもあながち小生の名譽に關するとは思はねど學校の委托を受けながら生徒を滿足せしめ能はずと有ては責任の上又良心の上より云ふも心よからずと存候間此際斷然と出講を斷はる決心に御座候

(巨燵から追ひ出れたる)は御免蒙りたし

病む人の巨燵離れて雪見かな

十二月十四日夜　〔封筒の裏に〕

金之助

子規さま

御報知の段ありがたく奉謝候坪内へは郵〔原〕便にて委細申し遣はすべく候其文言中には證人として君の名を借る親友の一言なれば固より確實と見認むると云へば突然辭職しても輕卒の誹りを免が〔る〕る譯なればなり願くば證人として名前丈をかし給へ但し出處は命ぜず召還〔原〕の氣使ひも無用なり

二六

明治二十六年一月六日　へ便　牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

先夜は失敬仕候竹村鍊卿赴任地宿所御承知に御座候はゞ一寸御一報被下度候也

一月六日

二七

明治二十六年二月二十日　牛込區喜久井町一番地より下谷區上根岸町八十八番地正岡常規氏へ

過日文學談話會へ出席仕候處大兄御病氣の趣にて御來駕無之右は御風邪にても有之候や又は例の御持病にや心元なく存候間御容體一寸相伺ひ申上候隨分御養生專一と奉存候

二月二十日

二八

明治二十六年八月七日　東京帝國大學寄宿舍より両谷虎二氏へ

一別以後如何御暮し被遊候や時下酷暑のみぎりには候へども筆硯益御清穆の事と奉欣羨候迂生事も不相變無異消光日々晝寐と食事に餘念なく勉強致居候へば乍憚御休神可被下候九州地方の御旅行は最早相濟候や定めて優遊御逸興の儀と紅塵中より推察仕候去月中旬菊池米山兩人と兩三日間日光地方へ罷り越し少しは塵懷の洗濯仕り候心得の處當今は其反動にて何分にも炎暑に耐へがたく日々呻吟仕居候段吾ながら憫笑の至貧生の境界あはれ斯の次第御察し可被下候寄宿舍も當時は大不景氣にて惣勢十三四人に過ぎず至つて

寂寥を覺え候當夏卒業の文學士賣口大に惡しく皆困却の體氣の毒に存候小生抔も如何成る事やら頓と不相分今日を今日とのみ未來の考へなく打暮し居候此分にては九月に御馳走の約束もあまり當にならず當にせずと御待ち可被下候先は右暑中御伺がひまで餘は拜眉の節萬々可申述候時節がらくれ〴〵も御道體御心づけ可被遊候　匆々頓首

八月七日　　　金之助

虎一様

梧前

拜借の椅子少々破損仕候故〔卷紙破れて一二字不明〕は不相用丁寧に保存致居候〔同前〕破損後なれば元の通りには〔同前〕相成甚だ失敬

二九

明治二十七年三月九日　東京帝國大學寄宿舍より山口縣山口高等中學校菊池謙二郎氏へ

御手紙被下難有拜見仕候大兄御赴任後は大分の好景氣の模樣何しろ結構の事と奉賀候小生病氣は目下差したる事も無之日々平常の通起臥罷在候へば乍憚御安慮被下度候實は去る二月初め風邪にかゝり候處其後の經過よろしからずいたく咽喉を痛め夫より細き絹糸の如き血少々痰に混じて喀出仕り候故從來の〇〇と〇〇と兩方へ轉んでも外れそうのなき小生故直ちに醫師の診察を受け候處只今の處にては心配する程の事はなく矢張り平生の如く勉學致してもよろしく只日々滋養物を食し身體の衞養を怠らぬ樣にする事專一なりとて夫より檢痰を試み候處幸ひバチルレン抔は無之去れば肺病なりとするも極初期にて今の内に加攝生

すれば全治可致との事に御座候小生身體上の自覺も至極爽快にて目下は毫も平日と異なる所無之候へども可成滋養物を食し運動を力め「ノンキ」に消光致居候今暑中休暇には海水浴か溫泉にて充分保養を加ふる積りに御座候尤も人間は此世に出づるよりして日々死出の用意を致す者なれば別に咯血して卽席に死んだとて驚く事もなけれど先づ二つとなき命故使へる丈使ふが德用と心得醫師の忠告を容れ精々攝生致居候

何となう死に來た世の惜まるゝ

小生始め醫師より肺病と聞きたる時は兼て覺悟は致居候へば今更の様に驚愕は不仕又死と云ふ事に就ても小生は至極冷淡の觀念を有し候へば咯血抔に心經を痛むる事は無之りしも只家の後事抔を考へ過ぎて少は心配仕候然し一方にては一度び此病にかゝる以上は功名心も情慾も皆消え失せて恬淡寡慾の君子とならんかと少しは希望を抱き居候にも係らず身體は其後愈壯健に相成醫師も左程差當りては心配はなし抔申し聞け候に就ても性來の俗氣は依然不改舊觀實に自らもあきれ果候そこで君の漫興に次韵して蕪句一首

閑却花紅柳綠春
江樓何暇醉芳醇
猶憐病子多情意
獨倚禪牀夢美人

御一笑可被下候此頃は雨のふる日にも散歩致す位に御座候

春雨や柳の中を濡れて行く

大弓大流行にて小生も過日より加盟致候處的は矢の行く先と心得候へば何時でも仇矢は無之眞に名人と自ら誇り居候

大弓やひらり／＼と梅の花

矢響の只聞ゆなり梅の中

先は御返しまで　匆々頓首

三月九日　　　金之助

菊池兄

机下

三〇

明治二十七年三月十二日　東京帝國大學寄宿舍より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後は御無音に打過候目下は新聞事業にて定めし御多忙の事と存候過日は小生病氣につき色々御配慮被下難有奉謝候其後病勢次第に輕快に相成目下は平生に異なるところなく至て健全に感じ居候へども服藥は矢張以前の通致し滋養物も可成食ひ居候固より死に出た浮世なれば命は別段惜しくもなけれど先づ懸替のなき者なれば使へる丈使ふが德用と存じ精々養生は仕る覺悟に御座候へば先づ御安心可被下候小生も始め醫者より肺病と承り候節は少しは閉口仕候へども其後以前よりは一層丈夫の樣な心持が致し醫者も心配する事はなし抔申ものから俗慾再燃正に下界人の本性をあらはし候是丈が不都合に御座候へどもどうせ人間は慾のテンションで生て居る者と悟れば夫も左程苦にも相成不申先づ斯樣に慾がある上は當分命に別條は有之間敷かと存候當時は弓の稽古に朝夕餘念なく候

　弦音にほたりと落る椿かな

　弦音になれて來て鳴く小鳥かな

蛙音の只聞ゆなり梅の中

御一笑可被下候

銀婚式は生憎の天氣小生は只池の端を散歩せるのみにて市門の景況を知らす

　　春雨や柳の下を濡れて行く

先日來尋常中學英語教授法方案取調への爲め隨分多忙に有之候處本日漸く結了大に閑暇に相成候

　　春雨や寐ながら横に梅を見る

閑情御一掬先は近況のみ　匆々

十[原]月十二日　　　　　　　　金之助

子規子

　　梧下

三一

明治二十七年五月三十一日　東京帝國大學寄宿舍より山口縣山口町伊勢小路吉富氏方菊池謙二郎氏へ

二十四番の花も無常迅速の喩に漏れず最早綠陰時節と相成候處益御清適奉賀候生義不相變寄宿に起臥仕居候病氣も何處へやら行方知れず相成候へども猶醫師の診察を受け豫防の爲め服藥も仕居[原]候大兄目下如何御消光被遊候や些と近況御報知可被下候小生は其後毎日弓術を強勉致居候へども天性の不氣用中々上達の見込無之去りながらこゝが辛防處と入らざる處に負惜みを出し例々兩度に百本位は毎日稽古致居候中らなくとも少しは面白く散歩杯は全く[原]廢止仕候小屋坂牧吉田長谷川齋藤西谷等皆々執心に候昨今は諸氏とも大

分上達弓術部は殆んど文科の專有と相成候位其代り特別に上手も無之只數でこなす積りに御座候過日より賄の後に柔道劍道の道場を開き有志の面々頻りに勉强致居候小生も少し撃劍でも始め度と存候へども餘り運動の過劇なると手頭の相手のなきに閉口致し差控へ居候斯樣に運動に隨分出精致候へども肝心の研究の方は一向はかどり不申此學年はまんまと遊んで通り拔け候是も病氣の爲と自ら良心に對し辯護致居候兎角理窟は何とでもつけらるゝ者に御座候狩野氏も過日より出京兩三度面會仕候隨分多忙の樣に見受け申候昨年は御存じの如く夏中寄宿に蟄居致居候故今年は休暇に相成次第何れにか高飛を仕る積りに御座候大兄暑中休暇中の御計畫は如何に御座候や多分御出京の上御歸省の事と存候折よくば其時拜顏を得度先は近况御伺ひ迄　早々頓首

五月三十一日　　金之助

菊池賢契

座下

三二

明治二十七年九月四日　ト便　東京帝國大學寄宿舍より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

拜啓昨夜又々持て餘したる酒甕飯袋を荷ひてのそ／＼と歸京仕候小生の旅行を評して健羨々々と仰せらるゝ段情なき事に御座候元來小生の漂泊は此三四年來沸騰せる腦漿を冷却して尺寸の勉强心を振興せん爲のみに御座候去すれば風流韻事抔は愚か只落付かぬ尻に帆を擧けて歩ける丈歩く外他の能事無之願くば到る處に不平の塊まりを分配して成し崩しに心の穩かならざるを慰め度と存候へども何分其甲斐なく理性と

感情の戰爭劇しく恰も虚空につるし上げられたる人間の如くにて天上に登るか奈落に沈むか運命の定まるまでは安身立命到底無覺束候俊鶻一擧起てば將に蒼穹を摩すべし只此頭頂の鐵鎖を斷するの斧なきを如何せん抔と愚癡をこぼし居候も必竟氣向に直前するの勇氣なくなり候爲と深く慚愧に不堪去月松島に遊んで瑞巖寺に詣でし時南天棒の一棒を喫して年來の累を一掃せんと存候へども生來の凡骨到底見性の器にあらずと其丈は斷念致し候故鍾を囘らして故鄕に歸るや否や再び半肩の行李を理して南相の海角に到り日夜鹹水に浸りて手足を動かして落付かぬ心を制せんと企て居候折柄八朔二百十日の荒日と相成一面の青海原物すごき光景を現出致候是屈竟と心の平かならぬ時は隨分亂暴を致す者にて直ちに狂瀾の中に沒して回時快哉を呼ぶ折宿屋の主人岸上より危ない／＼と叫び候故不入驚人浪難得稱意魚と吟出したれど主人禪道なき奴と相見「え」と問答も其丈にて方がつき申候右の有樣故別段面白き事もなく只錢を使つた處が大兄よりは話が利く丈にて其他の「コンヂション」は大兄の方遙かによろしくと斷定仕候間御自身も左樣御承知可被下候俗界に在て勉強が出來ぬ由御歎息御尤もに御座候へども學問の府たる大學院に在つて勉強すべき時間はありながら勉強の出來ぬは實に心苦しき限に御座候此三四年來勉強といふほど勉強をした事なく常に良心に譴責せらるゝ小生の心事は傍で見る程氣樂な者には無之候然し申譯の爲め暇さへあれば終日机に向ふ處隨分か殊勝に御座候此度も讀もせぬ書籍を山ほど携帶致候然ながら其意を了解するに苦しみ候只「シエレー」の詩集一卷は常にと「は」云はざれど時々あまり不快の時は繰り返し／＼或部分を熟讀致し大に愉快を覺え候必竟小生此不平を散ぜん爲めではなけれど此不平の頂點に達せる折忽ち腦中の靈火炎上して一路通天の路を開き或る「プリンシプル」を直覺的に感得したる如き心地致し大に胸中落付候其砌り「シエレー」の詩を讀み候に其句々甚だ小生の考へと合し天外亦此同情の人あるかと大に愉快に存候故に御座候

小生近日中下宿致すやも計りがたく候其折は又御報知可申上候

先は右近況迄　早々不一

九月四日　　　　　　金之助

正岡賢契

座下

三三

明治二十七年十月十六日　ト便　小石川區表町七十三番地法藏院より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　〔はがき〕

塵界茫々毀譽の耳朶を撲に堪ず此に環堵の室を借して蠕袋を葬り了んぬ猶尼僧の隣房に語るあり少々興覺申候御閑の節是非御來遊を乞ふ

三四

明治二十七年十一月一日　ニ便　小石川區表町七十三番地法藏院より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

小生の住所は先　殿通院の山門につき當り左りに折れて又つき當り今度は右に折れて半町程先の左側の長屋門のある御寺に御座候淨土宗の寺にて住持は易斷人相見抔に有名な人豐田立本といふ　圖にて示せば

大略右の如し午後は大抵閑居す必用なければ何處へも出ず隣房に尼數人あり少しも殊勝ならず女は何時までもうるさき動物なり

尼寺に有髪の僧を尋ね來よ

三十一日　　夏目金之助

正岡賢契

座右

三五

明治二十八年一月十日　ト便　小石川區表町七十三番地法藏院より本郷區駒込千駄木町五十七番地齋藤阿具氏へ

新年の御慶目出度申納候今度は〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇謹んで御祝ひ申上候小子去冬より鎌倉の楞伽窟に

參禪の爲め歸源院と申す處に止宿致し旬日の間折脚鐺裏の粥にて飯袋を養ひ漸く一昨日下山の上歸京仕候五百生の野狐禪遂に本來の面目を撥出し來らず御憫笑可被下候先は右御祝ひまで餘は拜眉の上萬々

一月九日　　夏目金之助拜

齋藤學兄

三六

明治二十八年三月十八日　小石川區表町七十三番地法藏院より山口縣山口町伊勢小路吉富氏方菊池謙二郎氏へ

拜呈仕候其後は打絶御無音奉謝候過日御招聘の件早速御返事可仕筈の處彼是不得其意荏苒今日に至り候段甚だ不調法御容赦可被下候偖小生儀今般愛媛縣尋常中學へ赴任の事と粗決定致し十中八九迄は相談も可纏と存候間貴校の方は乍失禮御斷り申上候右につき愈出發と定まり候上は彼是買調へ候品物も有之候處御存じの文なしにては如何とも致方なく因て甚だ御迷惑ながら貴方にて金五十圓程御融通被下間鋪候や尤も貴兄も隨分貧の字なるべければ（是は失敬）御手本になきは承知なれどそこの所を友達の好みと思ひ何とか御算段相願はれ間じくや尤も返濟の義は赴任後兩三月中に屹度皆濟可致若し又赴任不致事と決定仕り候へばすぐに其儘御返却可致候右否や乍憚電報にて御報被下度（若し出來なければ外に奔走せねばならぬ故）先は用事のみ　早々頓首

三月十八日　　金之助

菊池契兄

三七

明治二十八年五月二十八日　午後　松山市一番町愛松亭より神戸市神戸縣立病院内正岡常規氏へ

拝呈首尾よく大連灣より御歸國は奉賀候へども神戸縣立病院はちと寒心致候長途の遠征舊患を喚起致候譯にや心元なく存候小生當地着以來昏々俗流に打混じアッケラ閑として消光身體は別に變動も無之候教員生徒間の折惡もよろしく好都合に御座候東都の一瓢生を提へて大先生の如く取扱ふ事返す〳〵恐縮の至に御座候八時出の二時退出にて事務は大概御免蒙り居候へども少々煩鎖なるには閉口致候僻地師友なし面白き書あらば東京より御送をこふ結婚、放蕩、讀書三の者其一を擇むにあらざれば太抵の人は田舍に辛防は出來ぬ事と存候當地の人間隨分小理窟を云ふ處のよし宿屋下宿皆ノロマの癖に不親切なるが如し大兄の生國を惡く云ては濟まず失敬々々

道後へは當地に來てより三回入湯に來り候小生宿所は裁判所の裏の山の半腹にて眺望絶佳の別天地恨らくは俗物の厄介を受け居る事を當地にては先生然とせねばならぬ故衣服住居も八十圓の月俸に相當せねばならず小生如き丸裸には當分大閉口なり

貴君御親戚大原君より中學校員太田先生を以て不都合の事あらば何角世話をしてやらんと申し込まれたり所が小生例の放任主義で未だ參堂面謁の場合にも至らず御序の節はよろしく御傳聲被下度候

古白氏自殺のよし當地に風聞を聞き驚入候隨分事情のある事と存候へども惜しき極に候

當地着後直ちに貴君へ書面差上候處最早清國御出發の後にて詮方なく御保養の途次一寸御歸國は出來惡く候や

小子近頃俳門に入らんと存候御閑暇の節は御高示を仰ぎ度候
近作數首拙劣ながら御目に懸候

快刀切斷兩頭蛇　不顧人間笑語譁
黃土千秋埋得失　蒼天萬古照賢邪
微風易碎水中月　片雨難留枝上花
大醉醒來寒徹骨　餘生養得在山家

辜負東風出故關　鳥啼花謝幾時還
離愁似夢迢々淡　幽思與雲澹々閑
才子群中只守拙　小人園裏獨持頑
寸心空托一杯酒　劍氣如霜照醉顏

二頃桑田何日耕　青袍徹盡出京城
稜々逸氣輕天道　漠々癡心負世情
弄筆慵求才子譽　作詩空博冶郎名
人間五十今過半　愧爲讀書誤一生

駑才恰好臥山隈　夙托功名投火灰
心似鐵牛鞭不動　憂如梅雨去還來

青天獨解詩人骨　白眼空招俗士嘲

日暮敗軍將講室　退禪鋭頭對盤嵬

御一噱可被下候

當地出生童人の俳句を貰はれか〳〵と勧むるものあり貰はんか貰ふまいかと思案せしが少々面倒と思はしからぬ事ありて御免蒙れり

先は右近況御報知まで餘は後便に譲り申候

五月二十六日

夏目金之助

正岡賢兄　研北

三八

明治二十八年五月三十日　（消印）松山市一番町愛松亭より東京市下谷区上根岸町八十二番地正岡常規へ　〔はがき〕

破碎空中百尺樓巨濤却向月宮流大魚無語沒波底俊鶻將飛立岸頭劍上風鳴多殺氣枕邊雨滴鎖閑愁一任文字買奇禍笑指青山入豫洲

追加一律　斧正をこふ

三九

明治二十八年七月二十六日　口便　松山市二番町八番戸上野方より東京市本郷区駒込千駄木町五十七番地斎藤阿具へ

其後は手前こそ存外の御無音奉多謝候時下炎暑に向ひ候處愈御清適奉賀候小生亦幸ひに虎列拉にも赤痢にも罹らず惜くもなき壽命をぶら〳〵消光致居候大兄研究の御目的を以て崎陽地方へ御出張到る處大もての由結構此事に御座候小生抔田舍にくすぼり歸り居候のみにて一向さへたる事も無之當節は餘程田舍じみ申候當夏は出來るならば九洲の山河を跋渉致度と存候へども囊中自ら錢なくといふ景況にて奈何とも致し難く候去年以來海水浴場溫泉場抔は嫌ひに相成候故金はなくとも其方の慾望は無之別段苦にもならず候

當中學は存外美少年の寡なき處其代り美人があるかと思ふと矢張り拂底に御座候何しろ學校も平穩にて生徒も大人なしく授業を受け居候小兒は惡口を言ひ惡戯をしても可愛らしきものに御座候

小生當地に參り候目的は金をためて洋行の旅費を作る所存に有之候處夫所ではなく月給は十五日位にてなくなり申候

近頃女房が貰ひ度相成候故田舍ものを一匹生擒る積りに御座候此度山口高等學校より招聘を受け候へども當地の人間に對し左樣の不親切は出來惡く候へば一先辭退仕候一生の間遭逢百端此先は何うなる事やら觀じ來れば不覺啞然運は天にありと申候へども小生天公と中がわるく御座候へば別に牡丹餠の棚より墜るを望み居り不中行盡天涯似斷蓬とか末は放翁の生れ代にでも相成る事と存候呵々

先日立花より來状小生の二代目となるまで時々は厭世觀を生ずる由氣の毒の至り小生の二代目が交友間に出來ては大騷ぎに御座候ものにならぬ前御消しとめ被下度候

先は近況御報道まで餘は後便にて萬々　早々頓首

七月二十五日　（封筒の裏に）

夏目金之助拜

齋藤學兄

空石

東京諸友へよろしく願上候

ゆく水の朝な夕なに忙がしき

漱石

四〇

明治二十八年八月二十七日　松山市二番町八番戸上野方より松山市湊町四丁目十九番戸大原氏方正岡常規氏へ

拝呈今朝風骨子来訪貴兄既に拙宅へ御移転の事と心得御目にかゝり度由申居候間若し不都合なくば是より直に御出であり度候尤も荷物抔御取纏めかたに時間とり候はゞ後より送るとして身體丈御出向如何に御座候や先は用事まで　早々頓首

八月二十七日

漱石

子規俳仙

研北

四一

明治二十八年十月八日　松山市二番町八番戸上野方より岡山縣津山尋常中學校[illegible]一郎氏へ

其後は存外御無音奉謝候時下秋冷のみぎり益御清適奉賀候先般は御地へ御就職に相成候よし新聞紙上にても散見致し御手紙にても承知致候御校は新設の黌舎のよし定めて何角御多忙の事と存候其代り随分今迄よりも面白き事も候はんと存候随分御奮勵御盡力の程奉冀望候小子其後頗る頑健閑散に打暮し居候其代り

世事とは日々疎濶に打過候段々田舍び申候結婚の事も漸く落着致候○○○のは母肺病にて沒し候由につき小生には不適當と存じやめ申候矢張東京より貰ふ事に致候菅長谷川は過日熊本へ赴任致候同氏等一身上の爲めには結構の事に御座候山口は其後當參事官宛にて再び申し來候故同樣辭退致し候處今度は岡田氏より折を見て呼ぶ積り故其心にて居てくれと申來候無論往先の事などは當には致さず風船玉主義に御座候呵々先は右近況御伺ひ迄如斯に御座候　草々頓首

十月八日　　金

菊池盟兄　座右

四二

明治二十八年十一月七日　イ便　松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

遂に東京へ御歸りのよし大慶の至に存候僂麻も差したる事ならざるよし隨分御氣をつけ可被成候

小生去る一日觀瀑の爲め河の内へ參り近藤氏へ一宿翌日雨中簑と笠にて白猪唐岬に瀑一覽致候近藤宅にて觀瀑の書畫帖一覽中に貴兄の發句及び歌あり發句も書も頗る拙の樣に思はれ候僕此書畫帖を看て貴兄の處に至り不覺破顏微笑す番頭傍にありて曰く其内には甚だ拙なるのも御座りますと僕叱して云ふ見苦しき故に笑へるにあらず知人あるが爲めなり

十二月には多分上京の事と存候此頃愛媛縣には少々愛想が盡き申候故どこかへ巢を替へんと存候今迄は隨分義理と思ひ辛防致し候へども只今では口さへあれば直ぐ動く積りに御座候貴君の生れ故鄉ながら餘り

人氣のよき處では御座なく候
駄句不相變御叱正被下度候可成酷評がよし啓發する所もあらんと存候　以上

十一月六日夜

金之助

升　様

四三

明治二十八年十一月十四日　[illegible]　松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規へ

御手紙拜見致候其後兩待電何よろしからぬよし怪しからぬ事隨分御加養可被遊候小生四五日風氣にて矢堪臥褥然し大した事なく結句氣樂に御座候俳壇の老將御手合せのよし定め〔て〕佳句續出致候事と存候碧梧月抔も矢張東京にぶら付居候にや今冬上京の節は仰せなくとも押しかけて見參仕る覺悟に候へども昨今の力量にては甚だ心元なく今一度位はやめにするかも知れず如何となれば先づ金の金主から採らねばならぬからなり御仰せの如く鐵管事件は大に愉快に御座候小生近頃の出來事の内尤もありがたきは王妃の殺害と濱茂の拘引に御座候俳句精神の御評難有奉謝候折ふし保堂參り合せて大に喜悦致し候人の惡口をうれしがるとは隨分性のわるき男なり小生の句の實に拙なるは入門の日の淺きによるは無論なれど天性の然らしむる所も可有之と存候拙句又々御送致候故先便の如く御存分に御成敗可被下候　以上

十一月十三日

愚 陀　拜

兩　待　様

御枕元

四四

明治二十八年十二月十五日　八便　松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

兩三日來當地は雪と霰のみ降り非常の寒氣大に恐縮致候東京は如何に御座候や大兄御變りもなく漸次御快氣に御座候や偖東上の時期も漸々近づき一日も早く俳會に出席せんと心待ち居候先日差上候駄句中には句にならぬもの多く大に赤面致居候今度の分も同じく不出來に候へども御序の節御斧正被下度候小生二十五日頃當地出發の筈に有之候へば御稿同日位迄に當地へ着致さず候はば御手元へ御留置被下度候

承はり候へば日本は又々停止の厄にかゝり候由十一日より右災難にかゝり候やに承はり候左すれば十日の分は當地へ參る間敷若し御手元に御座候はゞ三ページ丈でもよし御郵送被下度候帝國文學で似角先生の惡口をいひしは閑雲と申す人にや喧嘩も惡口のやりとりと成つては下落致候

先は當用まで　匆々頓首

十二月十四日

金

升　様

御もと

四五

明治二十八年十二月十八日　木便　松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

遠路わざ〳〵拙宅まで御出被下候よし恐縮の至に存候其節何か愚兒より御話し申上候由にて種々御配慮あらかたく存候小生は教育上性質上家内のものと氣風の合はぬは苦しよりの事にて小兒の時分より「ドメスチック　ハッピネス」抔いふ言は度外に付し居候へば今更ほしいとも無之候近頃一段と隔意を生じ候事も甚だ不本意に存居候然し之が爲め御配慮を受けんとは期し居らず候ひしなり愚兒の申も虚ら幾分の理窟も可有之上京の節緩々可伺候結婚の事抔は上京の上實地に處理致す積りに御座候かゝる事迄に貴意を煩はす必要も無之かと存候尤も家内のものゝ確と致候もの少なき故此度の緣談につきても至急を要する場合には貴兒に談合せよとは兼て申しやり置候中與の事に付ては寫眞で取極候事故當人に逢た上で若し別人なら破談する迄の事とは兼てよりの決心是は至當い事と存候

小生家族と折合あしき爲外に欲しき女があるのに夫が貰へぬ故夫ですねて居る抔と勸進をされては甚だ困る今迄も小生の沈默し居たる爲め友人抔に誤解された事も多からんと思ふ家族につかはしたる手紙にも少々存意あつて心になき事迄も書た事あり今となつては少々閉口して居るなり是非雲煙の如し善惡亦一時只今拙持論で通すのみに御座候此頃は人に惡口されると却て愉快に相成候呵々

切角送つた發句の草稿をなくしては困るではありませんか草稿を再錄して上るから序の時に直して下さい

過去日端子に手紙を送る返事來る小生の發句を褒めてくれたり有難いやら耻しいやら恐縮の至やら

漸々寒氣相增候龍麗隨分御氣を付可被遊候

出京の節も御心配ありがたし一先づ歸宅時宜によつたら御厄介になるかも知れず

小生の事につき愚兒がどんな事を申し候やは出京の上で篤と伺ひ可申候へども大兄の御考へで小生が惡いと思ふ事あらば遠慮なく指摘して吳玉へ是交友の道なり諷刺嘲罵は小生の尤嫌にさはる處短刀直入の說

法なら喜んで受納可致候
先は御返事まで　草々頓首

十二月十八日　　金

升　　様

四六

明治二十九年一月十二日　未便　松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　〔はがき〕

海苔ひねになつたる由御氣の毒に存候送別の詩拜誦後聯尤も生に適切乍粗末次韻却呈

一月十二日

海南千里遠　欲別暮天寒　鐵笛吹紅雪　火輪沸紫瀾
爲君憂國易　作客到家難　三十巽還坎　功名夢半殘
東風や吹く待つとし聞かば今歸り來ん

四七

明治二十九年一月十七日　二便　松山市二番町八番戸上野方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後御病勢如何可成書狀を見合せられたし小生依例如例日々東京へ歸りたくなるのみ歸途米山より陶淵明全集を得て目下誦讀中甚だ愉快なり練卿を神戸に訪ひ築島寺及び和田岬を見る其後俳會の模樣如何過日霽月來る半夜過ぎまで話して歸る

歸松後何となく倉忙俳句を作るの閑を得ず偶得る處亦皆拙悪なり然しながら習慣をかくと退歩の憂あり故に送る面倒ながら御批政可被下候餘は後便に讓り申候　拜具

十六日　金

升　様

四八

明治二十九年四月十六日　（便　熊本第五高等學校より松山市千舟町横地石太郎氏へ

拜啓出發の際は御見立被下ありがたく奉謝候小生去る十日發十三日午後當地に着致候當時非常の多忙永き事を書き居る暇なし願くは舊同僚諸君へよろしく御傳へ被下度候（別に手紙も出さず）

英語教師五十五圓位にて一人あり農學士渡邊勇太郎とかいふ人なり滋賀縣尋常中學にありて後長崎の耶蘇學校に入る今は喧嘩してやめて居る由佐久間の話しでは出來る由一寸御報知申上候

四月十五日　金之助

横地様

四九

明治二十九年五月三日　熊本第五高等學校より坪内雄藏氏へ

拜呈其後は意外の御無音平に御海恕可被下候先生愈御清穆奉恭賀候次小生不相變碌々現今は當地高等學

校に奉職致居候間乍失禮御休神可被下候偖今般小生友人高濱淸なるもの先生の御宅に參上の上英文學に關する御高說伺ひ度由申居候間專門校以來の御交誼に對し同人紹介狀認めつかはし候間參上の節は何卒よろしく御教訓被下度先は右用事のみ早々如此に御座候　頓首

五月三日　　　　夏目金之助

坪内先生
　　虎皮下

五〇

明治二十九年五月三日　熊本第五高等學校より麹町區飯田町四丁目狩野亨吉氏へ

拜呈
其後は打絶御無音に打過候段御海恕可被下候偖小生去月以來當地高等學校に轉任奉職致居候間左樣御承知可被下候偖今般小生友人高濱淸なるもの小生朋友に紹介を求め訪問の上談話承聞くべき人を教へ呉れよと申來り候間早速貴君の處へ宛差出候間可然御高說御聞かせ被下度願上候此高濱なるものは文學的才に富みたる男にて現に俳句抔は中々上手に御座候且人物も隨分たのもしき男に御座候今般大學撰科へ入學志願致す筈にて勉强致居候へば何卒御遠慮なく種々御指導御交際被下度候先は用事のみ　早々頓首

五月三日　　　　夏目金之助

狩野學兄

座右

東京諸友へ御面會の節はよろしく御傳聲可被下候

五一

明治二十九年五月十六日　ハ便　熊本第五高等學校より愛媛縣松山尋常中學校横地石太郎氏へ

拜啓　偖其後學校の有樣は如何に御座候や頓と消息なき故心懸りに候へども小生も色々多忙にて遂に伺ひもせず打過居候處今般去る友人のたより今年の英文科の卒業生にて田村喜作と申す人小生の後任として松山へ參り度由につき多少目下の事情報知致しくれと申し來候然るに此田村喜作と申す人は小生よくは知らぬ故大丈夫と引き受候譯には行かねど何にせ英文科の卒業生故別段不都合も有之間敷かと存候若し後任者未だ定ま「ら」ぬならば同人の學力人物等御詮議相成候ては如何に御座候や右至急伺ひ上候

當地非常に家屋拂底にて漸くの事一週間程前敗屋を借り受候へども何分住み切れぬ故又々移轉仕る覺悟に御座候

淺田は岩手へ參り候よし

目下學校の有樣は如何に御座候や　頓首

五月十六日　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

横地樣

乍筆「二字不明」御令閨へよろしく御傳聲被下度候

五二

明治二十九年六月八日　八便　熊本市光琳寺町より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

御紙面拜誦仕候虚子の事にて御心配の趣御尤に存候先日虚子よりも大兄との談判の模樣相報じ來り申候虚子云ふ敢て逃るゝにあらず一年間退て勉強の上入學する積りなりと一年間にどう變化するや計りがたけれど勉強の上入學せば夫でよからん色々の事情もあるべければ先づ堪忍して今迄の如く御交際あり度と希望す小生の身分は固何時免職になるか辭職するか分らねど出來る丈は虚子の爲にせんとて約束したる事なり當人も夫を承知で奮發して見樣といひ放ちたるなり雙方共別段の事故新たに出來ざる內は其積りで居らねばならぬと存候小生が餘慶な事ながら虚子にかゝる事を申し出たるは虚子が前途の爲なるは無論なれど同人の人物が大に松山的ならぬ淡泊なる處、のんきなる處、氣のきかぬ處、無氣樣なる點に有之候大兄の觀察點は如何なるか知らねど先づ普通の人間よりは好き方なるべく左すれ［ば］左程愛想づかしをなさるるにも及ぶまじきか或は大兄今迄虚子に對して分外の事を望みて成らざるが爲め失望の反動現今は虚子實際の位地より九層の底に落ちたる如く思ひはせぬや何にせよ今度の事に就き別に御介意なく虚子と御交誼あり度小生の至望に候小生よりも虚子へは色々申し遣はすべく候

妻呼迎の件色々御心配被下ありがたく存候實は先便申上候通父同道にて兩三日中に當地へ下向の筈に御座候間御休神被下度候當夏は東京へ參り度候へども妻の事件で如何なるやら分らず

近頃は一月頃より身體の御具合あしき由精々御保養可然名譽讎擬世事頓着深く御禁じ可被成虚子の事抔はどうでも御抛擲なさいよ　頓首

六月六日　〔封筒の裏に〕

子規樣　　　　　　　　　　　　　　愚陀佛

五三

明治二十九年六月十一日　（土）　熊本市光琳寺町より　東京市下谷區上根岸町八十二番地正岡常規へ

中根事去る八日着京九日結婚略式執行致候近頃俳況如何に御座候や小生は頓と振はず當夏は東京に行きたけれど未だ判然せず俳書少々當地にて堀り出す積りにて參り候處案外にて何もなく失望致候右は御披露まで餘は後便に讓る　頓首

衣更へて京より嫁を貰ひけり

子規樣　　　　　　　　　　　　　　愚陀佛

五四

明治二十九年七月二十八日　熊本市光琳寺町より　在獨乙大塚保治氏へ

御存じの如く當地は只今土用中にて非常の暑氣毎日々々弱り果居候處大兄の御近況如何に御座候や先日は獨乙着の御手紙正に拜受仕候愈御清適御勉學の御模樣結構の事に存候國家の爲め御奮勵有之度切に希望仕候次に小生當四月より當地高等學校に轉任矢張り英語の教授に其日〳〵をくらし居候不相變御無事に御目出度のんきに御座候當地は背法師杯も有之大に都合よく御座候へども暑氣のはげしきには殆んど閉口致候丸で蒸風呂に入りたらんが如く實に御苦腦の程御覽に入れ度と存候獨身に候へば疾に避暑とか何とか名

をつけて逐電可致筈の處當六月より兼て御吹聽申上置候女房附と相成申候へば御荷物携帶で處々をぶらつくも何となく厄介なるのみならず隨分入費倒れの物品に候へば釜中の苦を忍んでぐず〳〵致居候御笑ひ被下度候小生は東京を出てより松山松山より熊本と漸々西の方へ左遷致す樣な事に被存候へば向後は琉球か臺灣へでも參る事かと我ながら可笑しく存居候爲朝か鄭成功の樣な豪傑になれば夫でも結構と思ひ候へども愈土著と落魄しては少々寒心仕る次第に御座候

過日御出立後玉影一葉東京御本宅より御郵送被下ありがたく奉拜謝候

或は御承知とは存候へども過日三陸地方へ大海嘯が推し寄せ夫は〳〵大騷動山の裾へ蒸氣船が上つて來る高い木の枝に海藻がかゝる抔いふ始末の上人畜の死傷抔は無數と申す位實に恐れ入り山忠助さん抔と洒落る場合でないから義捐金徵集の廻狀がくるや否や月俸百分の三を差出して微衷をあらはしたと云ふ次第に御座候然し是は職員全體共に出金致したる事故別段小生の名譽にもなるまじきかと心痛致居候

偖御地にて面白き事も有之候はゞ御閑暇の時でよろしいから御一報可被下候京都大學は愈設立のよしにて過日來續々官費留學生派遣に相成候東京の諸友は不相變の樣子に御座候先は右左右御伺ひの爲め草々如斯に御座候　頓首

七月二十八日

熊本市光琳寺町

夏目金之助

右は小生の寄寓致居候宿所に御座候

金之助

大塚學兄

五五

明治二十九年九月二十六日　八便　熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後御目見えも無事に打過候處世間は何となく海嘯以來騒々しきやに被存候東京は定めて目ざましき模様ならんと存候大兄御病氣過日來少々よろしからぬやに承はり候只今の處如何に候や随分御養生專一に御座候小生當夏に一週間程九州地方滊車旅行仕候俳句も近頃は頓と浮び申さず閉口致候たにも關らぬ小生の駄句時々雜誌抔に出るよし生徒抔の注進にて承知致候少々赤面の至と存じ何か傑作をものせんと思ひ立つ事有之候へども思ひ立つのみにして毫ものにはならない事が不思議に御座候大兄近頃は文章の方に餘程御勉强の模様雜誌の廣告にて承知仕候新體詩會抔にも御發起のよし結構に存候時に竹の里人と申すは大兄の事なるや序ながら伺ひ上候虛子修竹大阪にて滿月會に出席致候よし露石より申し來り候ちと御閑の節俳壇の様子にても御報知被下度候俳書購求一件は大兄より虛子にでも御托し被下度候又同子に御面會の節活版の七部集及故人五百題一部づゝ乍面倒送る樣御依賴被下度候

序に附記す小生今回表面の處に移轉せり熊本の借家の拂底なるは意外なりかゝる處へ來て十三圓の家賃をとられんとは夢にも思はざりし「名月や十三圓の家に住む」かれ轉居の事虛子にも御傳被下度候

月東君には今頃寐て居るか

九月二十五日

愚陀佛

子規様

駄句少々御目にかけ候友人菅虎雄の句も同時に御批點被下度候

五六

明治二十九年十一月十五日　八便　熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

拜啓

こゝに一つの御願有之候先頃學校の教務掛の庭に靈芝とか何とかいふものが生たと申すにより小生に其詩を作つて呉れと申し來り候處が小生は御存じの通りの詩人なれば何とか言ひ拔けて胡魔化さんと存候處運のわるき時は困るものにて小生の斷はりたるを謙辭とのみ推了して呉れ果は自宅迄押懸來り依賴致候につきそこは鐵面の小生遂によろしいと受合申候夫より幼學詩韻抔をひねくりちらしやつとの事で五絶五首を作り候へども自分ながら此が拙の詩でげすと人に贈る譯にも相成兼るといふ次第で不得已貴公を煩はして種竹先生の添削を仰ぎ度と存候尤も面倒なれば右五首の中只一首丈にてよろしく候間可成詩になりそうなものを捉へて詩に御成し被下候へば夫でよろしく候化鐵爲金事は化學上に於ても文學上に於ても同樣困難の事と存候間地金のまゝ少々御鍊鍛の程願上候若し又それも御面倒ならば小生の代理に一句御浮び被下候へば幸甚の至に存候右甚だ御迷惑ながら種竹氏に御依賴の程懇願致候

日本人は當地にて購讀の道を開き候へば御送に及ばず候新聞代價は君に迷惑を懸ては濟ぬと思ひ爲替で送り候然し一部位はどうで都合がつくといふなら送らぬ但し君が拂ふ位なら僕が拂ふも同じ事故是より送る事と致したし

小生近頃藏書の石印一枚[原]を刻して貰ひたり章曰漾虚碧堂圖書と漾虚碧堂とは虚子と碧梧桐を合した樣な

堂號なれど是は春山疊亂青春水漾碧と申す句より取りたるものに候刻者は伊底居士とて先般より久留米の梅林寺に掛錫し近頃當地見性寺の僧堂に參り居候ものゝ篆刻の餘暇參禪の工夫に餘念なき樣子刻風は纖麗宜案法とかいふ奴を注文致候頗る雅に出來致候一寸御覽に入度と存候へども肉を買はぬ故捺す事が出來ず次回に送るべし

俳句頗る不景氣につき差控へ申候其辭窮切の有樣に御座候

大兄の新體詩（洪水）拜見致候音韻調抔よりも餘程よろしくと存候然も處々俗語を調和せんとて遂に俗語に了るものある樣に被存候貴意如何

虛子の俳論を讀み候内容と外容の議論「論事矩」を應用したる所面白く御座候或點に於て内容を充すと同時に外容を縮めざる事を力むべきは誰も同感ならんと存候然し夫が爲め好んで詩形の外に逸出せば遂に俳句なきに至らんか況んや外容内容共に依然たるの時に於て稍好んで字句を皷張せば不必要の勢力を使用するに過ぎざらん虛子好んで長句を用ふ是既に十七字の詩體を離れんとするなり全く離るゝは可なり虛子今日の舉動は半身を體外に拇して敵を壓ぐが如し矢石の標とならざんば幸なり敢て貴意を問ふ

そんな事はどうでもよし先は用事まで右可成例によらず御早く願ひます穴賢

十一月十五日

漱石

子規様

研北

五七

來熊以來は頗る枯淡の生涯を送り居候道後の温泉にて神仙體を草したる事宮島にて紅葉に宿したる事など皆過去の記念として今も愉快なる印象を腦裡に留め居候今日日本人三十一號を讀みて君が書簡體の一文を拜見致し甚だ感心致候立論も面白く行文は秀でゝ美しく見受申候此道に從つて御進みあらば君は明治の文章家なるべし益御奮勵の程奉希望候先日世界の日本に出たる「音たてゝ春の潮の流れけり」と申す御句甚だ珍重に存候子規子がものしたる君の俳評一讀是亦面白く存候人事的時間的の句中甚だ新にして美なるもの有之候樣に被存候然し大兒の御近什中には甚だ難澁にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之樣存候（心安き間柄失禮は御海恕可被下候）所謂べくづくし抔は小生の尤も耳障に存候處に御座候然し「春に醉べく頭痛あり」又「豐年も卜すべく新酒も釀すべく」抔は至極結構と存候凡て近來の俳句一般に上達巧者に相成候樣子に存候讀賣抔に時々出るのは不相變まづき樣覺候まづしと云へば小生先頃自身の舊作を檢査致し其まづきことに一驚を喫し候作りし當時は誰しも多少の己惚は免るべからざる事ながら小生の如きは全く俳道に未熟の致す處實に面目なき次第に候過日子規より俳書十數卷寄贈し來り候大抵は讀み盡し申候過日願上候七部集及び故人五百題（活字本）は御面倒ながら御序の節御送願上候子規子近來の模樣如何此方より手紙を出しても一向返事もよこさず多忙か病氣か無性か或は三者の合併かと存候小子僻地に罷在樂みとする處は東京俳友の消息［に］有之何卒爾後は時々景氣御報知被下度候近什少々御目にかけ候御ひまの節御正願上候小生藏書印を近刻致候是亦御覧に入候　頓首

十二月五日　　漱石

虛子樣

五八

明治三十年一月十二日　卜便　熊本市合羽町二百三十七番地より松山市千船町横地石太郎氏へ

御書拜見仕候心經弘治版一葉御寄贈被下ありがたく拜受仕候又書籍の件拜承仕り候小生借用書籍は凡て十卷前後と存候右は全部とも中村氏に托し候山口氏が四册は中村より受取り殘卷三卷は受取らずと申す事尤も不審に存候右は中村氏より返納せざりしか又は山口氏が手控を消す事を忘却せるかにては無之候や小生第壹回の諸件を山口氏に始めたる時藏庫中を搜索し若し見當らずば中村へ今一度照會致し吳れとの主意に御座候處其後二月許り何の返事も無之貴書に先つ事一日始めて同氏より一書を受取候處書籍の有無及び書名も判然不致且つ中村より受取りたりとあるのみにて何卷丈受取何々の殘卷が不明なるや分らず雜誌とか何とか有之候へども如何なる種類の雜誌なるや小生勝間田寄附の書籍は正に借用致候是は「スコット」の小說三四部と記臆致候へども右は慥かに他の教科書用の書籍と共に中村に托し候に相違なく候雜誌の如き勝間田にせよ何にせよ借用したる覺無之候何卒今一應書籍の名を分明に致し書庫中を搜索し若しなけれ

ば中村へ今一應御照會被下候樣山口氏へ御命じ被下度候若し夫でも相分り不申候はゞ小生甘んじて辨償の責に任ずべくと存候

兎に角山口氏が所轄の書籍に對し小生轉任後數月の後まで其儘に致し置き始めて突然書生抔に對し小生が未だ書籍を返納致し居らぬ由口外致し候のみならず小生より照會致し候も二三月間何等の返事も致さゞる事第一學校へ對しては不親切なるのみならず小生へ對しても至當の處置と存じ不申候右御參考まで申上候

先は用事まで　早々頓首　　金之助

一月十二日

橫地學兄

座右

五九

明治三十年四月十八日　ハ便　熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

腰部切開後の景況あまり面白からぬ由困つた事と存候過日は美事なる短冊御寄送被下ありがたく奉謝候時々徒然の折は手習の爲めむだ書致し居候今春期休に久留米に至り高良山に登り夫より山越を致し發心と申す處の櫻を見物致候歸途久留米の古道具屋にて上野と淡々の軸を手に入候につき御慰の爲め進呈致候勿論雙方とも眞僞判然せず且上野の句月花を捨て見たれば松の風といふは過日差上候梅室の句と同じ樣に記憶致し居候元來の駄句と存候に如何なれば色々の俳人の筆に登るにや是も僞物の一證かもしれずと存候然

し疎畫は何よりも中々風韻ある樣見受申候淡々の方は畫は三文の價値も無之字は少々見處あり句に至つては矢張り肱の方と存候是も僞物かもしれず何せよ御笑草にまで御覽に入候先日來山川を當校に招聘致す事に相成目下拙宅に寄寓致居候小生東京のある學校にて招きを受け候處待遇も申分なけれど何分學校の義理あり且該校の依頼山川へ對しての信義等の點より謝絶致す事と相成候處子北堂の病氣はかゞ／＼しからぬ由にて猶滯松のよし氣の毒の至と存候近頃小説を物せられたる由廣告で拜承嘘から出た眞と相成候にや呵々近業御覽に入候間御叱正願上候　不一

四月十六日　漱石

子規樣
藥湯爐邊

六〇

明治三十年四月二十三日　八便　熊本市合羽町二三七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規へ　〔封筒表に「必親展」とあり〕

腫物猶々長大に生長屹然たる腰邊の大塊突起し御難儀と存候精々御自愛可然と存候

小生身分色々御配慮ありがたく奉謝候實に教師は近頃厭になり居候へどもさらば翻譯官はといふと果してやつて除るといふ程の自信と勇氣無之第一法律上の言語も知らぬ我々が外務の翻譯官と突然變化した處で英文の電報一つ滿足には書けまいと思ふなりせめて一二年見習の上は多少望のある事なれば何とか故魔化しもきくべけれど差當りては到底高等官處か屬官の價値もあるまじと存候實は去年十月頃教師をやめたいが好分別はなきやと中根に相談致し候處外務の翻譯官に依頼し置きたり（多分小村なるべし）と申し越し

たり尊叔が課長なれば非常の好都合なれど自信なき事に周旋を頼み後に至り君及び加藤氏に迷惑がかゝりては氣の毒故其職掌事務等詳細の事相分り是ならば隨分君の面目を損する事なく遣つて行けるといふ見込がつく迄は先づ差し控たが可然と愚考致候

仙臺の高中に目下行き度考なし仙臺は愚か東京の高等學校でも多分は辭する考なり否教師をして居る位なら當分現在の地位にて少し成蹟を現はしたる後にて動きたし過日高等商業學校長小山より中根を介して年俸千圓高等官六等にて來ぬかと申し來り中根も金の不足あるならば月々補助するから歸京せよとまで勸めたれど一方にては當地の校長は是非共居つて呉れねば困ると懇々の依頼なりし故宜しい貴公が夫程小生を信じて居るならば小生も出來る丈の事はすべし又教師として世に立つ以上は先づ當分の處御校の爲に盡力すべしと明言したり且此語は校長のみならず山川を呼ぶ時にも明答に及びたる次第目下假令如何なるよき口ありとも自ら進んで求むるの意なく候尤も小生と當學校との關係變化する場合或は一身の事情にて斷然教育界を去る場合や或は官命にて是非なき場合は別問題にて自由に進退し得る境遇に御座候今回の翻譯官抔も教師の口で他へ轉ずる譯でないから小生に意思あり外務省で採用すれば當校を去る點に於ては別に苦情もある間鋪と思へども如何せん進んで頼はれぬと申す譯は冒頭に申せし次第なれば是非なし

偖小生の目的御尋ね故御明答申上たけれど實は當人自らが所謂わが身でわが身がわからない位故到底山川流に説明する譯には參り兼候へども單に希望を陳列するならば教師をやめて單に文學的の生活を送りたきなり換言すれば文學三昧にて消光したきなり月々五六十の收入あれば今にも東京へ歸りて勝手な風流を仕る覺悟なれど遊んで居つて金が懷中に舞ひ込むといふ譯にもゆかねば衣食丈は小々堪忍辛防して何かの種を探し（但し教師を除く）其餘暇を以て自由な書を讀み自由な事を言ひ自由な事を書かゝん事を希望致候然るに小生は不具の人間なれば行政官事務官抔は到底して呉れる人もなくあつても二三月で愛想を盡か

すにきまつて居れば大抵な口では間に合はず因て先頃郵便にて今回若し帝國圖書館とか何とかいふものが出來る樣子だから若し出來たらば其方へで「も」周旋して異れまいかと中根へ申てやり候處圖書館の方は牧野に面會色々聞た處管も松方内閣成立の始めでどうなるやら夢の樣な話しなりとの返答中根より到着致候まゝ其話しは今日迄夫ナリに御座候

右至急御返事まで草々如斯に御座候

序に伺候一葉集といふ俳書は前後兩編にて壹圓貳拾錢位ならば高くはなきや又芭蕉句解も八十錢位で相當の價なりや兩書共久留米で見當たれど高さう故實はなんだ安ければ今から取寄せる積りなり

尊叔には未だ拜顏を得ざれどよろしく御鳳聲願上候

二十三日　　　　金

升　様

六一

明治三十年五月二十八日　八便　熊本市合羽町二百三十七番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　（封筒表側に「平用事」とあり）

薫風の時節病魔果して如何近日蕪村の續稿を讀みて少しく輕快に向へるを知る伏して道體の安全を祈る

小子因例如例碌々たり昔々たり詩腸枯れ硯池蕪す時に句あり皆句を成さず嘆息

行く春を剃り落したる眉青し

行く春を沈香亭の牡丹哉

春の夜や局をさがる衣の音

憶子規

春雨の夜すがら物を思はする

埒もなく禪師肥たり更衣

よき人のわざとがましや更衣

更衣て弟の脛何ぞ太き

埋もれて若葉の中や水の音

影多き梧桐に据る床几かな

郭公茶の間へまかる通夜の人

蹴付たる雛の枕や子規

辻君に袖牽れけり子規

扛げ傘て妹が手細し鮓の石

小賢しき犬吠付や更衣

七筋を心利きたる鵜匠哉

漢方や柑子花さく門構

若葉して半簾の雨に臥したる

妾宅や牡丹に會す琴の弟子

世はいづれ椶櫚の花さへ穂に出でつ

立て懸て螢這ひけり草箒

若葉して緑切榎切られたる
でゞ蟲の角ふり立てゝ井戸の端
溜池に蛙鬪ふ卯月かな
虚無僧に犬吠えかゝる桐の花
筍や思ひがけなき垣根より
若竹や名も知らぬ人の墓の傍
若竹の夕に入て動きけり
鞭鳴す馬車の埃や麥い秋
渡らんとして谷に橋なし閑古鳥
折り添て文にも書かず杜若
八重にして芥子の赤きぞ恨みなる
傘さして後向なり杜若
蘭湯に浴すと書て詩人なり
すゝめたる鮓を皆迄參りたり
鮓桶の乾かで臭し蝸牛
生臭き鮓を食ふや佐野の人
粽食ふ夜流車や膳所の小商人
蝙蝠や賊の酒呑む古館
不出來なる粽と申しおこすなる

五月雨や小袖をほどく酒のしみ

五月雨の壁落しけり枕元

五月雨や四つ手繕ふ舊士族

眼を病んで灯ともさぬ夜や五月雨

馬の蠅牛の蠅來る宿屋かな

逃すまじき蚤の行衛や子規

蚤を逸し赤き毛布に恨みあり

蚊にあけて口許りなり蟇の面

鳴きもせでぐさと刺す蚊や田原坂

熊本にて

夏來ぬと又長鋏を彈ずらく

藪近し椽[原]の下より筍が

寐苦しき門を夜すがら水鷄かな

成道寺

若葉して手のひらほどの山の寺

菜種打つ向ひ合せや夫婦同志

菊池路や麥を刈るなる舊四月

麥を刈るあとを頻りに燕かな

文與可や笋を食ひ竹を畫く

五月雨の弓張らんとすればくるひたる
立て見たり寐て見たり又酒を煑たり

〔封筒の裏に認めあるもの〕

水攻の城落ちんとす五月雨
大手より源氏寄せたり青嵐
水涸れて城將降る雲の峯

こんなものばかりに候然し病中の御慰に御覽の〔原〕人候
又別紙詩文稿は熊本人野々口勝太郎といふものゝ作にかゝる同人は往年商業學校の主計課を卒業し田舍新聞抔に從事し居たる處目下糊口の方に迷ひ頻りに小生方に泣き付に來るものなり當人の志願は文筆を以て月々夫婦の糊口位出來ればよしといふ也固より東京には限らねどひよつと日本〔新〕聞位にて使つて呉まいか又は他に心當りはなきか病中氣の毒ながら少々心配して見て呉ぬか願ひます　以上

五月二十八日　漱石

子規子　梧下

六二

明治三十年六月八日　二便　熊本市合羽町二百三十七番地より仙臺市東一番町五番地加藤滿方齋藤阿具氏へ

漸々暑氣相催し候處愈御清穆奉恭賀候小子幸ひに無異碌々消光仕居候間御休神可被下候兼て御依賴申上

置候歴史講本御手數の御蔭にて漸く完備深く奉鳴謝候右草稿費金七拾錢はとくに御送付可申上筈に有之候處何角取紛れ荏苒今日に至候不悪御宥恕願上候今回幸便を以て右御郵送申上候間御落掌被下度願上候
仙臺へ御就任の事大慶の至に存候隨分國家の爲め學校の爲め御奮勵御指導の程奉希望候騷動後には却つてうまく行くものに御座候

米山の不幸返す〲〱氣の毒の至に存候文科の一英才を失ひ候事痛恨の極に御座候同人如きは文科大學あつてより文科大學閉づるまでまたとあるまじき大怪物に御座候蛟龍未だ雲雨を起さずして逝く碌々の徒或は之を以て轍鮒に比せん殘念

小生只駑駘に鞭つて日暮道遠の嘆あり御憫笑可被下候先は右當用のみ　早々頓首

六月八日　　金之助

齋藤學兄　几下

六三

明治三十年八月一日　ト便　麴町區内幸町貴族院官舍中根氏方より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

一筆啓上

每度ながら長座嘸かし御迷惑の事と存候御備ひ被下候車夫濱田屋主人の希望により解雇主人自ら轅棒をとつて虎の門まで送り屆け候六十錢は小生前の車夫より沒收の上更に四拾錢を濱田屋の老翁につかはし候殘金貳拾錢何れ其内御返上可仕候兎に角昨夜御門前にての立まはりは一寸奇觀に候ひし御依賴の書籍其内

御届可申上候
御北堂樣御令妹へよろしく御傳聲可被下候　以上
夕涼し起ち得ぬ和子を卿つらく

八月一日　　　　　　　　　　　　　　　　愚陀佛

子規庵
御もと

六四

明治三十年八月四日　（二便）　麹町區内幸町貴族院官舍中根氏方より麹町區飯田河岸第五號成瀬方赤木通弘氏へ

拜啓其後御無沙汰に打過ぎ候大兄御任官の事委細熊本某校長宛にて手紙差出し候處未だ何等の廻答も無之實は校長も目下旅行中にて大故返答の後るゝ事と存候就ては大兄履歴書は早晩學校にて入用の事と存候間御都合次第小生迄御送附被下度左すれば小生より直に校長手元へ差出し可成早く御任命の手續に致し度と存候先は用事のみ　早々頓首

八月四日　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

赤木賢臺
座下

六五

明治三十年八月十七日　八便　鎌倉材木座亂橋河内屋より麴町區飯田河岸第五號成瀬方赤木通弘氏へ

拜啓暑氣烈しく候處愈御清穆奉賀候過日英語御分擔の件につき御協議申上候處早速御承引被下奉謝候然る處本日熊本高等學校教頭櫻井氏よりの書面にて來學年には從來の論理受持敎授黑木千尋氏やめる事に相成候に就ては該科擔當の儀貴君に願度由申來り候間左樣御承知可被下候尤も該科目は一週九時間につき過日御協議申上候英語の時間は多くとも十時間位に減少する筈に有之候尤も何年何組といふ事は時間割變更の上にて可申上と存候へども先は右至急得貴意候論理御擔任の事は兼ねての御希望と存じ候へば勿論御異存なき事と存じ候　頓首

八月十六日　　　　　　　　　　　　金之助

赤木賢臺

梧下

六六

明治三十年九月十二日　ロ便　熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ　〔はがき〕

小生海陸無事昨十日午後到着致候途上秋雨にて困却す當地殘暑劇し

今日ぞ知る秋をしきりに降りしきる

小生宿所は表面の通

六七

明治三十年九月十九日　八便　熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎氏へ

其後は絶て御無音に打過申候漸々秋冷相催ふし候處愈御清穆奉賀候御高吟毎度新聞紙上にて拜見致候先日御送りの先風居七勝拙作とくに御笑覧に可入筈の處種々俗用の爲め今に不果素志實は何回かこゝろみ候へどもいつも果さずして已み申候發句も其後ほとんど中絶の姿東京にて三四回子規庵に會合致し候のみに御座候今夏一月程鎌倉にくらし申候駄句二三首申譯の爲め御覽に入候

〔中略〕

唱和の作秋季にては甚だ困難を感じ候然し其内御笑ひ草に何か物しまゐらすべく候　不一

九月十九日　　漱石

霽月様　研北

六八

明治三十年十二月十二日　二便　熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

愈窮陰の時節と相成候御病體近日の模樣如何に候や不相變筆硯御繁昌の樣子故まづ御快氣の方と遙察致候小生碌々矢張因例如例に御座候俳句頓とものにならず囊底と共に拂底に御座候頃日五言律一首を得候間御笑覽に供し候御大政願上候

掉頭辭帝闕
倚劍出城闉
羣岫肥山盡
滂洋鏡水新
秋風吹落日
大野絕行人
索寞乾坤靄
蒼冥裹雁頻

俳句少々御目にかけ候序を以て御批正願上候　以上

十二月十二日

金

升　様

几下

六九

明治三十年十二月十七日　熊本市内坪井町大江村四百〇一番地より千葉縣千葉尋常中學校菊池謙二郎氏へ

啓窮陰の時節と相成候處益御多祥奉恭賀候偖今夏東京表にて御面語のみぎり一寸御評判有之候津山尋常中學の英語教授與（秦二郎氏か）は其後矢張同校に奉職被致居候や實は本校にて來年四月頃迄には英語教師一名是非共雇入の運びに立ち至るべきかと存じ候につき只今よりそろ／＼と候補者選定に着手致し稍進

んで其内約束にても取極めんとの下心も有之候に就ては同氏の性行學力其他大兄の御承知の箇條委細の處御報知を煩はし度同時に大兄若し同氏を以て高等學校英語教師に差し支へなしとの御見込に候へば同氏へも書狀御差出被下來月四月頃迄には津山を去り得るや又第五高中に來り得るや一應御問ひ合せ被下間敷候や大兄の御紙面拜見の上又同氏の返答如何により猶進んで交渉致す必要も生じ候はゞ又々御手數を煩はすか或は直接の話し合ひに致し度と存候

猶可成は多數の候補者を作り其中より選擇の自由を得度候につき奥氏へは其御含みにて只同氏の都合のみ御問ひ合せ願ひ上候成否は無論小生にも保證し難き儀に候へば左樣御承知願上候

又此事は候補者製造の上にて始めて校長へ打ち明る手順につき（郎ちある無能力の教師放逐を建議する積り德義上秘密を御守り被下度奥氏へも其旨御通知願上候右取急ぎ候まゝ當用のみ御免可被下候　頓首

十二月十七日　　金之助

菊地賢臺

研北

奥氏待遇上の希望抔も序に御問合せ被下度候又同氏は檢定試驗合格者と記憶致し居候が如何それも御知らせを乞ふ

七〇

明治三十一年一月六日　ト便　熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より府下日暮里村元金杉百三十七番地山川方高濱清氏へ

其後不本意ながら俳界に遠かり候結果として貴君へも存外の御無沙〔汰〕申譯なく候

承はれば近頃御妻帶のよし何よりの吉報に接し候心地千秋萬歳の壽をなさんが爲め一句呈上致候

　初鴉東の方を新枕

小生舊冬より肥後小天と申す溫泉に入浴同所にて越年致候

　かんてらや師走の宿に寐つかれず

　酒を呼んで醉はず明けゝり今朝の春

　甘からぬ屠蘇や旅なる醉心地

　うき除夜を壁に向へば影法師

御大喪中とある故

　此春を御慶もいはで雪多し

一年の計は元日にありと申せば隨分正月より御出精明治三十一年の文壇に虛子ある事を天下に御吹聽被下度希望の至に不堪候　以上

正月五日夜　　漱石

虛子君

乍末筆御令閨へよろしく御鳳聲願上候

七一

明治三十一年一月十八日　ロ便　熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より熊本縣玉名郡小天溫泉前田氏へ

拜啓先日は南人にてまかり出種々御厄介に相成御禮申上候今回は見事なる密[原]柑幷びに菲わざ〳〵御恵送にあづかり奉萬謝候先は右口上迄早々如斯に御座候也　頓首

正月十八日

夏目金之助
山川信次郎

前田樣

七二

明治三十一年三月二十一日　へ便　熊本縣飽託郡大江村四百〇一番地より神田區東五軒町高濱清氏へ

其後は存外の御無沙汰平に御海恕可被下候御惠贈の新俳句一巻今日學校にて落手御厚意の段難有奉拜謝候小生爾來俳境日々退歩昨今は現に一句も無之候此分にてはやがて鳴雪老人の跡釜を引き受る事ならんと少々寒心の體に有之候子規子病氣は如何に御座候や其後是も久しく消息を絕し居候事とて頓と樣子も分らず候へども近頃は歌壇にての大氣焰に候へば先々あしき方にてはなかるまじと安心致居候先は右御禮のみ早々如斯に御座候　頓首

三月二十一日　愚陀佛

虛子樣
　榻下

梅ちつてそゞろなつかしむ新俳句

七三

明治三十一年六月十日　熊本第五高等學校教員室より第五高等學校二部一年蒲生榮へ

一昨日は御來訪の處何の風情も無之候大兄の俳句千江氏の分と共に過日子規手許迄送り置候處本日着の日本に三句丈掲載致來候間供御一覽候猶斯道の爲め御奮勵の段偏に奉希望候　不一

六月十日　漱石

紫川樣　研北

七四

明治三十一年八月二十七日　土屋忠治へ

芳墨拜見致候金策の件都合よく纏まり候よし大慶の至に存候此上とも知人の好意に背かぬ樣御勉學專一と存候近頃東京より參り候ものゝ話しには大學の書生の品行日々頽廢遊里抔に出入致を名譽と致す位のよしかゝる中には餘程の決心必要に御座候水に入つて溺るゝか火に入つて熱くるか平生の得力は斯樣の時にわかるものに候よく〱御注意可被成候君平素禪を好むも禪は文句にあらず實地の修行なるべし塵勞の裡にあつて常に塵勞の爲に轉ぜらるゝならば禪なきと一般ならん小生不知禪妄りに相似を說く唯君の成功を冀ふが爲のみ　不一

八月二十七日

金之助

忠治様

七五

明治三十一年九月四日　イ便　熊本市内坪井町七十八番地より神田區錦町淡路醫院大西氏方寄虎雄氏へ

其後は不相變御無沙汰に打過候過日來御上京のよし忽ち接華墨承知致候今度の御東上は御身邊の御關係のやうに承り候先日狩野氏より第一の方にて大兄を御招聘の相談纏まり候やの報有之多分それが爲めの御出發と存候此際結構の事と遙かに御祝申上候當校の方は過日黑木教授（一字不明）舍監兼務に任ぜられ候是は定めて新聞紙上にて御承知の事と存候山川狩野兩氏未だ歸熊の運びに至らず小生終日閑坐貴重の米粒を浪費致候俣野生過日東上中根岸邊に寓居のよし手紙を以て報じこし候參上の節は隨分御訓示願上候淺井氏には時々面會御噂致居候過日御來示の俳句數首日本新聞へ寄送致候處夏季〆切後にて掲載の運びに至らず其後三池生より禮狀到來始めて同人の句なるを知り申候近頃は頓と俳句も作り不申暑中は少々奮發打坐を試み候處些の入處も無之其内運動不足の爲め下痢を催ふし夫より昨今に至りては始業間近く相成候爲め夫なりに放却致候御憫笑可被下候法語々錄の類數種披見致し候が少しの得に御座候へども畫餅不充饑依然たる睡酒糟の漢なるには閉口致候右御挨拶旁近況御報知迄　早々頓首

九月三日夜

金之助

虎雄様

研北

七六

明治三十二年四月二十日　土屋忠治へ

啓御老母樣かねて御病氣の處御療養の甲斐もなく御遠逝のよし拜承嘸かし御痛悼の事と遙察致候此際金錢上の事にて必用の事も有之候はゞ些少の事は如何樣にも取計申候間無御遠慮御申越可相成右は先御弔詞迄早々如斯御座候　頓首

四月二十日

金之助

忠治樣

七七

明治三十二年九月二日　ト便　熊本市内坪井町七十八番地より牛込區矢來町五十四番地夏目直矩氏へ

貴書拜見仕候御手紙の趣拜讀致候右につき少々分り兼候儀有之候につき重ねて申上候

小生の伺ひ度は姉の意志並びに高田の意志の確然たる處に有之候然るに御手紙にては雙方の意志とも只貴君の御推察のみにて此件につき小生のとるべき態度を決しかね候樣の御返答かと存候尤も姉は目下喘息のよし是は一週間位にて一應治る事と存候へば其節にてよろしく又高田の方は御會見の上何とか當人の口より確としたる處を御聽取被下度御迷惑とは存じ候へども最初此事件相生じ候節より中間に御立ち被下候は御覺悟の事と存候そは大兄より始めて口を開いて此事件を喚び起され候故に候

右高田の意志（姉の方は目下至急にも無之）承はり候上にて篤と處置致度と存候

目下高田のなす處は啻に小生を馬鹿にするのみならず大兄をも馬鹿にしたる仕方には無之や己れの女房が人の世話になるのに一言の禮もせぬ樣なものはあまり多からぬ樣被存候若し理窟が分らずして平氣ならば御諭し被下度候わかつてゐてするのなら諫言を御取り被下度小生にも其考有之候

右折返し御返事申上筈の處少々旅行致居候爲め遲引致候

月々のもの送る送らぬの點に關しては要領を得たる御返事頂戴致候上の事と可致從つて今回は御答申上ず候　頓首

九月一日　　金之助

直矩様

愚女は筆となづけ申候

七八

明治三十二年十二月十一日　二便　熊本市内坪井町七十八番地より神田區猿樂町二十五番地高濱清氏へ

其後は大分御無沙汰御海恕可被下候時下窮陰之候筆硯愈御清穆奉賀候偖先般來當熊本人常松迂巷なる人當市九洲日々新聞と申すに紫溟吟社の俳句を連日掲載する樣盡力致し猶東京諸先俳の俳句も時々掲載致し度趣にて大兄へ向け一書呈上候處其後何等の御返事もなきよしにて小生より今一應願ひくれる樣申來候右迂巷と申す人は先般來突然知己に相成候人なるが非常に新派の俳句に熱心忠實なる人に有之實は今回の擧抔も新派勢力扶植の爲めの計畫に候左すればほとゝぎす發行者などは大に聲援引き立てゝやる義理も有之

べきかと存候且九洲地方は新派の勢力案外によはくほとんど俳句の何ものたるを解せざる有樣に候へば俳句趣味の普及をはかる點より論ずるも幾分か大兄抔は鼓吹奬勵の責任ありと存候右の理由故何とか返事でも迂巷宛にて御差出可被下候又日日新聞は同人より大兄宛にて每日御送致し居候よし定めて御閲覽の事と存候

乍序ほとゝぎすにつき一寸愚見申述候間御參考被下度候

「ほとゝぎす」が同人間の雜誌ならばいかに期日が後れても差支なけれど既に俳句雜誌抔と天下を相手に呼號する以上は主幹たる人は一日も發行期日を誤らざる事肝要かと存候それも一日や二日なら兎「に」角十日二十日後れるに至つては殆んど公等が氣に向いた時は發行しいやな時はよす慰み半分の雜誌としか受取れぬ次第に候尤是には色々な事情も可有之又御陳述の如く期日の後れたる爲め每號改良の點も可有之とは存じ候へども門外漢より無遠慮に評し候へば頗る無責任なる雜誌としか思はれず候現今俳熱頗る高き故唯一の雜誌たる「ほとゝぎす」はかく無責任なるにも不關賣口よき次第なるべけれど若し有力な競爭者出でば之を壓倒する事固より難きにあらざるべし假令有力なる競爭者が出來得ざるにせよ敵なき故に怠る樣に見えるは猶更見苦しく存候

次に述べたきは「ほとゝぎす」中にはまゝ樂屋落の樣な事を書かれる事あり是も同人間の私の雜誌なら兎に角苟も天下を相手にする以上は二三東京の俳友以外には分らず隨つて興味なき事は削られては如何加之品格が下る樣な感じ致候高兒如何虛子露月が俳人に重ぜらるゝは俳道に深きが爲め其秋風たると春風たるとに關係なきなり天下の人が虛子露月を知らんとするは句の上にあり「頰をかむ」の「顏をなめる」のと愚にもつかぬ事を聞いて何にかせんや方今は「ほとゝぎす」派全盛の時代也然し吾人の生涯中尤も謹愼すべきは全盛の時代に存す如何

子規は病んで床上にあり之に向つて理窟を述ぶべからす大兄と小生とはかゝる亂暴な言を申す親みは無き筈に候苦言を呈せんとして逡巡するもの三たび遂に決意して卑辭を左右に呈し候是も雜誌の爲めよかれかしと願ふ微意に外ならざれば不悪御推讀願上候　以上

十二月十一日　　　　漱　石

虛　子　樣

横顏の歌舞伎に似たる火鉢哉
炭團いけて雪隱詰の工夫哉
御家人の安火を抱くや後風土記
追分で引き剝がれたる寒かな

正

七九

明治三十二年　月日不詳　十二月頃　土屋忠治へ

貴翰拜見致候銀行の件委細承知致候右は卒業後大分の社に入りて從事するといふ條件の如く聞え申候然らば其年限はどの位に候や

若し過重の義務と不當の束縛ありて忍び難き程ならば出來る丈他の方法を講ずる方可然か

小生目下の狀況にては月々五六圓の金は送る事出來るべし其上に山川狩野二氏に依賴して月々二圓宛も

もらへば十圓の金は手に入るべし假に中根に寄食するとせば其位にて行き立つやも知れず是も一策ならん（狩野山川二氏共貧の方なれど君の學資に關して幾分か補助の意あるは在熊中明言されたる事あり若し此策をとるならば小生より懸合て見るべし）

〔以下卷紙切れて缺〕

兎も角も手紙にては巨細の事は述べ難し狩野山川菅三先生の意見など聞きたる上にて御分別あるべし

〔以下卷紙切れて缺〕

八〇

明治三十三年四月五日　木便　熊本市北千反畑より愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎氏へ　〔はがき〕

御書拜見近頃は發句廢業駄句もなにも皆無に候今般表面の處へ轉寓致候間一寸御傳申上候

鶯も柳も青き住居哉

菜の花の隣ありけり竹の垣

四月五日

八一

明治三十三年九月六日　木便　牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號山田傳氏方より本郷區駒込西片町十番地イの十六號寺田寅彦へ　〔はがき〕

小生出發は汽船出發の時刻變更の爲め午前五時四十五分ノ汽車と相成べくと存候是も正確ならず御見送御無用に候

秋風の一人をふくや海の上

八二

明治三十三年九月十日　汽船プロイセン號より牛込區矢來町三番地中ノ丸内六十番中根重一氏へ

拜啓横濱解纜ノ際ハ態〻御見送被下難有存候初日ノ航海ハ氣分あしく晩餐ヲ食ハズ臥床致候乘合ハ英人ヤラ佛人ヤラニテ既ニ洋行シタル感有之神戸ニテ上陸諏訪山溫泉ニテ日本料理ヲ食ヒ日本ノ浴衣ヲ着タル爲メ漸ク歸朝致候樣ノ感ニ存候此先ハ漸々西洋クサクナル許ト存候神戸ノ時間クルヒタル爲メ鈴木君に面會ヲ得ズ行違ニテ甚だ殘念ニ存候今日午後五時頃ハ長崎へ到着ノ筈其時ハ又上陸散步デモスル積ニ候船中ハ只少々窮窟ナルト風波アルノミニテ他ハ凡テ我々ノ生活ヨリハ遙ニ上等ニ候朝起キルト直グニ茶ヲ飲マセ八時頃ニ至リ朝飯ヲ出シ十二時ニ晝飯三時ニ茶ヲ出シ六時ニ晩餐九時頃又茶ト云フ譯デ都合一日ニ六回ノ御馳走ニ候米ツキデモ四度〔ニ〕候普通ノ我々ハ到底六回ヤルコトハ出來ニクヽ候先ハ無事御報知迄　匆々頓首

九月十日午前十一時奏樂ヲ聞キナガラ

プロイセン喫烟室ニテ

金　之　助

中　根　樣

母上樣倫、梅、其他ノ人々ヘモヨロシク願上候

此手紙鏡ヘモ御示シ被下度候

〔裏に〕

湯淺、土屋、俣野へ宜敷願上候

留守中區役所其他ノ用事ハ湯淺カ土屋ヘ御依頼可被成候

金之助

鏡　どの

八三

明治三十三年九月十九日　清國香港より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

航海は無事に此處まで參候へども下痢と船酔にて大閉口に候昨今は大に元氣恢復唐人と洋食と西洋の風呂と西洋の便所にて〔原〕窮窟千萬一向面白からず早く茶漬と蕎麥が食度候〔中略〕熱くて閉口、二百十日には上海邊にて出逢申候

阿呆鳥熱き國にぞ參りたる

稻妻の碎けて青し海の上

〔『ほとゝぎす』第三巻第十一號より轉載〕

八四

明治三十三年九月二十七日　汽船プロイセン號より牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方夏目鏡へ

今日ハ九月二十七日ニテ吾等ガ乘レル船ハ昧爽英領「ペナン」ト申ス港ニ着キ申候未明ヨリノ小雨ニ加フルニ出帆時刻ハ午前九時ナレバ遺憾ナガラ上陸ヲ得ズ上海ニテハ日本旅館ニ宿泊シ香港ニテモ同朋〔原〕ノ營業ニ關ル宿屋ニテ日本飯ノ食納ヲナシ候上海モ香港モ宏大ニテ立派ナルコハ到底横濱神戸ノ比ニハ無之特ニ香港ノ夜景杯ハ滿山ニ夜光ノ寶石ヲ無數ニ〔原〕綴メタルガ如クニ候又「ピーク」トテ山ノ絶頂迄鐵道車ノ便

ヲ假リテ六七十度ノ峻坂ヲ上リテ四方ヲ見渡セバ其景色ノ佳ナルヿ實ニ愉快ニ候「シンガポア」ニモ上陸シ馬車ヲ假リテ植物園博物館及市街ヲ一見致候茲ニモ日本ノ旅館アリテ午食ヲ認メ候此地ノ日本人ノ多數ハ醜業婦ニテ印度ノ腰巻ニ縮チリメンノ羽織ニ一種特別ナ下駄ヲ穿キテ街上ヲ散歩致候一種奇的烈ノ感ヲ起サシメ候熱帶地方ノ植物ハ名前ノミヲ承知致候ガ來テ見レハ今更ノ如ク其青々ト繁茂セル樣ニ驚カレ候熱帶地方ト申セバ太陽直下ノ光線ニテ身體モ焦ゲル位ノ熱サト想像致候處實際ハ豈計ランヤデ却ッテ日本ノ夏ヨリモ涼シキ位ニ候但春夏秋冬ニ寒暖ノ區別ナキノミト御承知可被下候此邊ニテ見ル印度人ハ佛畫ニ見ル阿羅漢丸出シニテ其服裝顔色遙カニ日本人ヨリハ雅ニ御座候色ノ光モ黑キハ紫檀位ニテ且其光澤ノ美ナルヿモ殆ンド紫檀ニ彷彿タル者之アリ候「シンガポア」ニテハ碇泊中船ノ周圍ニ幾十艘ノ丸木舟ヲ漕ギ寄セテ口々ニ分ラヌヿヲワメキ候樣面白ク候是ハ船客ヨリ銀貨銅貨ヲ海中ニ投ゲロト申ス譯ニテ甲板上ヨリ慰半分ニ投ゲル貨幣ヲ海中ニモグリテ取リテ上ガルニ百ニ一モ過タズ感心ナヿニ候

皆御變リナキヿト存候其許モ筆モ達者ト存候月々ノ俸給ハ固ヨリ些少ナレドモシ餘アラバ幾分ニテモ家賃トシテ御納可被成候夏目ヘハ事情ヲ善ク申シ遣ハシ候間都合次第ニテヨロシク候

小生ノ着物羽織等ハ留守中ノ寸法ノ合フ樣總直シ可被成候

其許ハ歯ヲ拔キテ入歯ヲナサルベク候只今ノ儘ニテハ餘リ見苦ク候

頭ノハゲルノモ毎々申通一種ノ病氣ニ違ナク候必ズ醫者ニ見テ御貰可被成候人ノ言フヿヲ善ヒ加減ニ聞テハイケマセン

食物ノ急ニ變化シタルト氣候アツキト運動不足ト船ノキラヒナトガ合併シテ消化機能兎角働キ方面白カラズ日ハ餘程クボミ申候其割ニ身體ハ左ノミヤセ不申候

此手紙ハコロンボト申ス處ニ着テヨリ出スベケレバ日本ニハ三週間位ノ後ニ達スベシト存候

八五

明治三十三年十月八日　汽船プロイセン號より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

今日ハ十月八日ニテ横濱ヲ出發シテヨリ島渡〔原〕一月目ナリ一週間許前ニコロンボト申ス處ニ碇泊是ハセロンノ港ニテ「セロン」ハ釋迦ノ誕生地ナリ此地ニ來リテ見レバ李龍眠ノ佛畫ニアリソウナ印度人ノミ〔ニ〕テ頗ル雅ニ候

熱帶地方ノ植物ノ見事ナル事ハ今更ノ樣ニ驚かれ候「コーコ」「バナナ」抔ノ熟シタルヲ木ノ枝ニ見タルハ實ニ面白ク候佛教ノ寺院ニ參詣致候是ハ海ヨリ三里許リ田舍に有之結構抔幼稚ニテ見るに足らず只古跡と申迄に候舍利塔は今も存在致居候

昨夜は名月にて波も風もなく十二〔原〕時近く迄甲板に逍遙致候今日ハ「エーデン」と申す處に着スル筈に候是ヨリ紅海ニテ砂漠ノ熱キ風が吹く來る中を通りて地中海に出る事に候兎角する内には英吉利に着可致思へば長き樣な短かきものに候

毎々ながら西洋食には厭々致候且海岸は小生の性に適せざる事とて横濱出帆以來限が餘程くぼみ申候然し別段の病氣もなく先ず〔原〕無事なれば御安堵可被下候

熊本にて逢ひたる英國の老婦人「ノット」と申す人上等に乘込居りて一二度面會色々親切に致し吳候此人の世話にて「ケンブリッヂ」大學に關係の人に紹介狀を得候へば小生は多分「ケンブリッヂ」に可參かと存候

筆は其後丈夫に相成候や隨分御氣をつけ可被下候
留守中とて無暗に寐坊被成間敷候
中等船客は九十名以上有之非常に賑かに候小生は別に噺相手もなく默然として居候
髪は丸髷銀杏返抔に結ばざる方よろしく洗髪にして御置可被成候
西洋人ノ子供澤山居候奇麗にて清潔なる事は日本人の比に無之衣服も至極輕便にて羨敷存候
船中は毎日入浴も出來よごれ物の洗濯も出來御馳走も食へ下等下宿抔よりも遙かに上等の生活と存候然し寐室の窮屈にて風通のあしきは閉口致候
印度洋は日本の夏よりも餘程涼しく候且風波も至極穩に候

雲の峯風なき海を渡りけり

御地にては漸々秋冷の候に可相成候へば隨分御身御厭なさるべく候
皆々へよろしく
時さんの呉れた萬年筆は船中にて鐵棒ヘツカマツて器械體操をなしたる爲め打ち壞し申候洵に申譯無之
御序の節よろしく御傳可被下候

十月八日　　　　金之助

鏡　どの

小生への書信其他は凡て在倫敦日本公使館宛にて御出可被成候

明治三十三年十月二十三日　佛國西巴里より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

紅海ノ熱ノ非常ナルニ引キ易ヘテ地中海ニ入レバ既ニ日本ト同ジ氣候ニ候 Naples ト申ス所ニ碇泊中上陸ノ上博物館等ヲ一見是ハ「ポンペイ」ヨリ堀出シタル種々ノ古物ヲ蒐集セル見事ノモノニ候夫ヨリ Genoa ニテ船ヲ棄テ、上陸其地ニ一泊以太利ノ小都會ナルニモ關セズ頗ル立派ニテ日本抔ノ比ニアラズ殊ニ Naples ノ寺院等ノ内部ノ構造ハ來テ見ネバ分リ兼候馬車ニテ見物致候ガ半分ハ見物サセニ歩行ク樣(ナ)モノニ候皆々奇體ナ奴ダト云ハヌ許リニ見返候「ゼノア」ヨリ瀛車ニテ「パリス」ニ十月二十一日(昨朝)到着瀛車抔ノ雜沓混雜馴レヌ我々ハ「マゴマゴ」シテ途方ニ呉レル許リナリ金ノ力ニ賴リテ夢中ニ「パリス」迄「タドリ」ツキ候が目付ものに候「パリス」ニ來テ見レバ其繁華ナルコ是亦到底筆紙ノ及ブ所ニ無之就中道路家屋等ノ宏大ナルコ馬車電氣鐵道地下鐵道等ノ網ノ如クナル有樣實ニ世界ノ大都に御座候昨日ハ停車場ニ荷物受取ノ爲メ參リ夫ヨリアル素人屋(宿屋ハ高クテ居ラレズ)ノ三階ヲ借リ一週間滯在ノ積ニ候食事ハ三度三度外へ出テ認メ候夫デモ一日ノ費用七八圓ヲ下ラズト存候今日ハ博覽會ヲ見物致候ガ大仕掛ニテ何ガ何ヤラ一向方角サヘ分リ兼候名高キ「エフエル」塔ノ上ニ登リテ四方ヲ見渡シ申候是ハ三百メートルノ高サニテ人間ヲ箱ニ入レテ綱條ニ(テ)ツルシ上ゲツルシ下ス仕掛ニ候博覽會ハ十日や十五日見ニモ大勢ヲ知ルガ積ノ山カト存候只今午後十二時迄「パリス」ノグロン　ヴルヴハート申ス繁華ナ處ヲ散歩シテ地下鐵道ニテ歸宅致候斯樣ニシルシ候ト何モカモ自分デヤツタ樣ナレ𪜈「パリス」ニテハ文部ノ書記官渡邊董之助ト申ス人ノ世話デ歩行キ廻リ候「ゼノア」カラ「パリス」迄ハ全ク金ノ力デ通リ候言語ノ通ゼヌ容子ノ分ラヌ所程不便ナモノハ無之歐洲上陸以來自動的ニ何モナシタルコナク悉皆他動的ニ候惡

者ガ田舍モノヲ噛スノモ最ト存候意外ノ失策ナク「パリス」迄参候ガ不思議ニ候此位ナラ論テヤラズニ佛語ヲ勉強スレバ善カツタト今更不覺ヲ後悔致候是ヨリハ一人ニテ英京ニ渡ル事故ドウナルカ妙ナモノニ候
當地ニ來テ觀レバ男女共色白ク服裝モ立派ニテ日本人ハ成程黄色ニ觀ユ候女抔ハクダラヌ下女ノ如キ者デモ中々別嬪有之候小生如キアバタ面ハ一人モ無之候
其他大分書キタキ事有之候ヘドモ疲勞致候故端筆後ハ英國ヨリ發信致候中根皆々樣ヘヨロシク其他ノ人ヘモヨロシク
當地ハ中々寒ク冬ノ外套ヲツケテ手袋ヲハメテ歩行キ候身體ハ別段ノ事モ無之候御安意可被下候其許懐妊中善々身體ヲ大事ニ可被成候筆モ隨分氣ヲ付ケテ御養育可被成候妊娠中ハ感情ヲ刺激スル樣ナ小說抔ハ御止メ可被成候可成ノンキニ御暮シ可被成候
入歯ノ事御實行可被成候丸髷抔ニハ結ハヌガヨロシク候洗髪可然候

十月二十三日午後一時　金之助

鏡どの

小生洋服ハ東京ニテ作リ來リ好都合ニ候是ナラバ「カラ」モ仕立モ別ニ耻カシキ事ナク用ラレ候太キシマ「ハデ」ナ色ノモノナドハ着テ居ル者無之皆「クスン」ダ無地下降類ニ候就中外套ハ大概黒カ紺ニ候茶ハ餘程少ナク鼠モ稀ニ見受候其他ハ一切無之候
歐洲ニ來テ金ガナケレバ一日モ居ル氣ニハナラズ候穢クテモ日本ガ氣樂デ宜敷候

明治三十三年十月三十日　70 Gower Street, London より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

拜啓其後無恙消光致居候其許も筆も定めて丈夫の事と安心致居候可成養生して御安產可被成候

小生昨二十八日朝十日巴理發同夜七時頃倫敦に着致候博覽會も餘り大にて一週間位では何が何やら見當がつかぬ位に候倫敦も今日出で見たれども見當がつかず二十返位道を聞て漸く寓居に還り候未だ公使館へは參らず留學地ら其內定めて落付つもりに候

公使館への手紙は

K. Natsume Esq.
Japanese Legation
sic
(Crosvener Garden)
London

にて屆き可申候西洋にては金が氣がヒケル程入候留學費でどうしてやるかゞ問題に候町抔へ出れば普通の人間は皆日本の勅任官位な身ナリをして步行致居候洋行生が洒落るのは尤に候是が當地にては普通の事に候

詳しき手紙は何〔れ〕落付てより可差上候　以上

皆樣へよろしく

十月二十九日夜一時

金之助

明日は十時頃迄寢る積に候

〔裏に〕

小生只今の宿所は日本人の下宿する所にて 76 Gower Street, London に候是は旅[原]屋より遙かに安直なれども一日に部屋食料等にて六圓許を要し候到底留學費を丸で費ても足らぬ故早くきり上る積に候

八八

明治三十三年十一月二十日　午後零時十五分　85 Priory Road, West Hampstead, London より Bei Frau Lenke, Mehmeltonstrasse 23, Berlin 藤代禎輔氏へ　〔絵葉書表に横書はがき〕

ナシノ礫の御小言ニハ少々恐縮シタガ君ダツテ一杯機嫌デナケレバ葉書抔ハカクマイ此前ノ葉書ハ立花ガコヽンタノデハナイカ

倫敦[原]ノ天氣ノ惡〔イ〕ニハ閉口シタコ君等ハ大ゼイ寄ツテ御全盛ダネ僕ハ獨リボツチデ淋イヨ學校ノ講義ナンカ餘リ下サラナイヨ伯林大學ハドウカネ英語モ中々上手ニハナレナイ第一先方ノ言フ事ガハツキリ分ラナイ丁ガアルカラナ金ガナイカラ倫敦ノ事情モ頓ト知レナイ勉強モスル積ダガソウハ手ガ廻ラナイ獨乙皇帝ハ婆サンノ鐵椎ニ遭ツタソウダ丁度博浪ノ椎ト云フ趣ガアル面白イ今日ビスケツトヲカヂツテ晝飯ノ代リニシタ餘リビールヲ飲ンデハイケナイヨ左樣ナラ

十一月二十一日

萬一手紙ヲ出スナラ公使館ニアテテ吳玉ヘ一番慥カト思フ
倫敦ノ古本屋ニハ欲イ本ガ澤山アリマス一冊モ御齒ニ合フ者ハアリマセン
此繪葉書ノ處ハ僕ガ到着ノ翌日マゴツイタ處ダヨ

八九

明治三十三年十二月二十六日　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

拜啓十一月十七日附の御書面昨十二月二十五日着拜見致候先以て皆々樣時候の御變りもなく御消光のよし奉賀候其許も無事に御暮しのよし珍重に存候當地着以來二回書狀差出し候只今頃は最早御地着の事と存候其後都合有之 6 Flodden Road, Camberwell New Road, S. E. と申す所に轉居致候以前の處は東京の小石川の如き處に存候今度の處は深川と云ふ樣な何れも邊鄙な處に候卽ち北西ヨリ南東に轉居致候日本にて三里許りの道のり有之馬車を傭ひて書物を載せて宿替隨分厄介なれど日本の書生の如くランプを手に持つ樣な不體裁は無之候此度の家は先頃迄女學校なりし處傳染病の爲め閉校其後下宿と變化致候主人夫婦と妻君の妹にてやり居候下宿にしては女學校の女先生丈ありて上品に候色々親切にて家族の如く致し居候同宿のもの日本人少々有之候主人は頗る日本人好にて西洋人を下宿させるよりは日本人を客にしたしと申居候是は日本人はおとなしく且金にやかましからぬ故に候もとの高等學校教授（我々の先生）に「て」國文學の先生池邊義象（もとの小中村義象）氏パリより來り此宿にて邂逅同氏歸朝の節は福本氏方へ參る故中根方へも立寄り小生の近況を話してやると申し居られ候故其內爲參候事と存候間可然御取持可被成候筆への見やげものに「クリスマス」の「カード」依賴致候筈の處混雜の際失念致候

當地にては金のないのと病氣になるのが一番心細く候病氣は歸朝迄は謝絶する積なれど金のなきには閉口致候日本の五十錢は當地にて殆んど十錢か二十錢位の資格に候十圓位の金は二三回まばたきをすると烟になり申候今度の下宿は頗るきたなく候へども安直故辛防致居候可成衣食を節して書物丈でも買へる丈買はんと存候故非常にくるしく候殊に留學生は少なく逗留のものは官吏商人にて皆小生抔よりは金廻りのよき連中のみ羨ましき事はなけれど入らぬ地獄抔に金を使ひ或は無益の遊興贅澤品に浮身をやつし居候事惜しき心地致候彼等の金力あれば相應に必要の書籍も買ひ得られ候事と存候其許も二十圓位にては定めし困難と存候へども此方の事も御考御辛防可被成候

中根父上の方へ借金出來候よし是は少々の事と存候もし少にても（一圓でも二圓でも）餘り候へば其方へ御廻し被下度候中根父上地方局長とかに御轉任のよし政海の事は我等には分り不申候へども御目出[度]き方の轉任と存候

昨日は當地の「クリスマス」にて日本の元日の如く頗る大事の日に候青き枝にて室内を裝飾し家族のものは皆其本家に集り晩餐を喫する例に御座候昨日は下宿にて「アヒル」の御馳走に相成候

湯淺土屋俣野時々參り候よしよく御あしらひ可被成候

筆も丈夫に相成候よし何より結構の事に候可成我儘にならぬ樣あまへぬ樣可愛がりて無暗にあまき物抔やらぬ樣無暗にすはらして足部の發達を妨げぬ樣御注意可被成候是等は一時に害なき樣なれども將來恐るべき弊害を生じ一生の痼疾と相成申候小兒の教育程困難なる物は無之精々御心配願上候

熊本にて一ペン尋ね候西洋人の婆さん「ノット」夫人に不圖長崎より逢になり夫より以後色々親切なる注意にあづかり今以て時々書狀の往復を致居候もし櫻井の妻君へでも書狀をだる〔原〕序あらば「ファーデル」に賴みて右婆さんの娘「ノット」孃（熊本在の宣教師）へよろしく御傳言可被下候」

時々書面も八方へ差上度候へども一刻もむだな時間は無之可成有益に時を使度と存候故其ひまも無不悪御推察鈴木夏日其他へもよろしく御傳言賴み上候

倫敦の繁昌は目撃せねば分り兼候位馬車、鐵道、電鐵、地下鐵、地下電鐵等蛛の糸をはりたる如くにてなれぬものは屢ば迷ひ途方もなき處へつれて行れ候事有之險呑に候小生下宿より繁華な處へ行くには馬車地下電氣高架鐵、鐵道馬車、の便有之候へども處々方々へ參り候故時々見當違の處へ參る事有之候

倫敦の中央にては日本人抔を珍らしそうに顧りみるもの一人も無之皆非常に自身の事のみに急がしき有樣に候さすが世界の大都會丈有之候

只天氣のわるきには閉口晴天は着後數へる程しか無之しかも日本晴と云ふ樣な透きとほる樣な空は到底見る事困難に候もし霧起るとあれば日中にても暗夜同然ガスをつけ用を足し候不愉快此上もなく候

當地のもの一般に公德に富み候は感心の至り滊車抔にても席なくて佇立して居れば下等な人足の樣なものでも席を分つて讓り申候日本では一人で二人前の席を領して大得意なる愚物も有之候又種々の買物でも盜んで出樣とすればいくらでも盜める樣なもの有之古本の如きは室外に陳列して番人も何もなき處有之候鐵道の荷物抔も「プラットフォーム」に抛り出してあるを各自勝手に持つて參り候日本で小利口な物どもが滊車を只乘つたとか一錢だして鐵道馬車を二區乘つたとか緣日で植木をごまかしたとか不德な事をして得意がる馬鹿物澤山有之候是等の輩を少々連れて來て見せてやり度候

まだ書けばいくらも有之候へども時なき故擱筆新年の御慶皆樣へよろしく

中根樣へも書狀差上る筈なれど此回は此書狀をかねて失禮致候不悪御宥恕ある樣御取なし可被下候

十二月二十六日

金之助

鏡どの

九〇

明治三十三年十二月二十七日　午前零時十五分　6 Flodden Road, Camberwell New Road, Londons, S. E. より Bei Frau Lenle, Melanchtonstrasse 28, Berlin 藤代禎輔氏へ　〔繪はがき〕

先日の御手紙拜見「コーチ」と云ふのは書生間の語で private な先生の事を云ふのだよ僕の「コーチ」は「シェクスピヤ」學者で頗る妙な男だ四十五歳位で獨身もので天井裏に住んで書物ばかり讀んで居る今は「シェクスピヤ」字引を編纂中である

二年居つても到底英語は目立つ程上達シナイと思ふから一年分の學費を頂戴して書物を買つて歸りたい書物は欲いのが澤山あるけれど一寸目ぼしいのは三四十圓以上だから手のつけ樣がない可成衣食を節倹して書物を買〔は〕ふと思ふ金廻りのよき連中が贅澤をするのを見ると情き心持がする

御地の「クリスマス」は如何僕は「アヒル」の御馳走になつた

僕は東京でいふと小石川といふ樣な處から深川といふ邊へ宿替をした倫敦[原]の廣いのは驚く滊[原]車抔を間違へて飛んでもなき處へ持つて行かれる事がある

會話は一口話より出來ない「ロンドン」兒の言語はワカラナイ閉口

十二月二十六日

金之助

藤代君

九一

明治三十四年一月一日　午後三時半　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町五十四番地夏目直矩へ
〔繪はがき〕

新年の御慶目出度申納候貴家御一同萬福御越年の事と存候小生無恙加馬齢候得安意可被下候平生は多忙の爲め御無沙汰御海恕可被下候

三十四年一月一日　　金之助

夏目直矩様
高田庄吉様

九二

明治三十四年一月三日　午前十一時三十分　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より在獨○○○氏へ

下宿の不平は僕も大有だつたが一週二十五志の場所を見出して汚い處に籠城して居る只今は頗る愉快だ

下宿はカ々尋ねて歩いたが日本人のふるく居る處は皆「スポイル」して仕舞つて高くて悪い樣だ

餘りビールを飲まない樣餘り美人に近付の出來ぬ樣天帝に祈禱して新年の御慶を申上ます

僕は書物をかつて仕舞ふから又邊鄙な處に居るから家がやかましいから金と不便と遠慮がハチ合せをして頗る謹直である

倫敦に遊びにこられるなら僕の處へき給へ安い事に受合いだ

一月三日　　　　　　　　　　　　金之助

○　○　○

九三

明治三十四年一月二十二日　夜　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方
夏目鏡へ　〔封筒表に筆にて認めあり〕

其後は如何御暮し被成候や朝夕案じ暮し居候先以て皆々樣御丈夫の事と存候其許も御壯健にて今頃は定めし御安產の事と存候此方も無事にて日々勉强に餘念なく候御懸念あるまじく候小兒出產前後は取分け御注意可然と存候當地冬の季候極めてあしく霧ふかきときは濛々として月夜よりもくらく不愉快千萬に候はやく日本に歸りて光風霽月と靑天白日を見たく候當地日本人はあまた有之候へども交際すれば時間も損あり且金力にも關する故可成獨居讀書にふけり居候幸ひ着以後一回も風をひかず何より難有候近頃少々腹工合あしく候へども是とても別段の事には無之どうか留學中には病氣にかゝるまじくと祈願致居候

倫敦の市內を散步すればほしき物澤山有之國へ歸るとき見やげものにしたきものも非常に多く候へども如何にせん微力にて一向買ふ事出來ず故に散步のときは場末の田舍のみあるき居候

先年熊本にて筆と御寫し被成候寫眞一枚序の節御送り可被下候厚き板紙の間に挾み二枚絲にてくゝり郵便に御投じ可被下候當地は十圓位出さねば寫眞もとる事出來ず候故小生は當分送りがたく候

他國にて獨り居る事は日本にても不自由に候況んや風俗習慣の異なる英國にては隨分厄介に候朝起きて冷水にて身を拭ひ髯をそり髮をけづるのみにても中々時間のとれるものに候況んや白シャツを着換へボタ

ンをはづし抔する實にいやになり申候西洋人との交際別段機會も無之且時間と金なき故可成致さぬ樣に致居候

當地の品物は高き代りに皆丈夫向に候中にも男子の洋服は「パリス」よりも倫敦がよろしき由成程結構に候小生も當地にて「フロック」と燕尾服を作り候是は日蔭町の如き所故無論極粗末なものに候其上「フロック」は出來損ひ申候是は漸く旅費の餘で調へ申候然るに「フロック」の袖口廣く外套の袖狹く大に困難致居候此地に居る日本人の内には人より三四月前に來りながら倫敦通をきめて新來の日本人の服裝抔を冷かし申候其癖當人の洋服は頗る妙なのを着て得意がつて居候是は洋服屋にだまされて無暗に高き金をとられ自分は人よりも高き金を拂つた故品物も仕立も人より遙かに上等と心得居る如き愚物に候

此地にて物價の高きは一寸靴一足を買ひ候ても十圓位はかゝり候にて御推了被下度候毛織物は割合安く候襟等は非常に白く堅く到底日本のとは比較になり兼候外に出た時一寸晝飯を一皿位食へばすぐ六七十錢はかゝり候日本の一圓と當地の十圓位な相場かと存候隨つて知らず／＼の中に贅澤になり申候洋行生が日本に歸りて贅澤と思はるゝは尤もと存候是はあながち贅澤には無之當地にて普通以下の事を日本ですれば頗る贅澤と見傚さるゝ迄に候

氣候は隨分寒き事有之候へども概して東京よりは凌ぎよく此二三日は春の如き心地致候位それも例年此通なるや分り兼候東京は嘸寒き事と存候正月い樣な心持は少しもなく候

芝居には三四度參り候いづれも場内を赤きビロードにて敷きつめ見事なる事たまげる許りに候道具衣裳の美なる事亦人目を驚かし候中にも寄席芝居の樣なものには五六十人の女翩々たる舞衣をつけて入り亂れて躍り候樣皆に見せ度程うつくしく候其中此女がフワ／＼と宙に飛び上り（ハリガネの仕掛にて）て其女の頭胸手抔に電氣燈がツキ夫に輕羅と寶石が映ずると云ふ譯だから想像しても美いと思ふだらう然し眞面目

な芝居に善き席にて見物せんとするには燕尾服をつけ白襟ならざるべからず喫烟は無論出來ず頗る窮窟に候小生はセビロ赤靴にて飛び込み大に閉口したる事有之候

　當地の商人紳士少し身分あるものは平生必ず「フロック」に絹帽をいたゞき候中にはクヅ屋から買た樣な「シルク」帽を蒙りヘンテコな「フロック」を着て居るのも有之御羽うち枯した浪人と申す位な處なるべし男子服裝は頗るヂミにてせびろも黑多くヅボン縞あれども黑ズミて遠方から見れば無地と思ふ樣なもののゝみに候中以下は夏冬同じものをつけ居候由少し上等になれば晩には必ず燕尾服に着換て食事をなす風に候燕尾服は必ず晩の禮服ときまり居候葬儀結婚等の大禮にても日中執行するものは必ず「フロック」を用い申候「フロック」を着ても燕尾服をつけてもつけばいの致さぬは日本人に候日本に居る内はかく迄黄色とは思はざりしが當地にきて見ると自ら己れの黄色なるに愛想をつかし申候其上脊が低く見られた物には無之非常に肩身が狹く候向ふから妙な奴が來たと思ふと自分の影が大きな鏡に寫つて居つたり杯する事毎々有之候顏の造作は致し方なしとして脊丈は大きくなり度小兒は可成椅子に腰をかけさせて坐らせぬがよからんと存候尤長く當地に居る人は大抵奇麗にてどこか垢ぬけ致居候へども脊丈は十年居つても高くなる事は御座なく閉口の至に候往來にて自分より脊の低き西洋人に逢つた時は餘程愉快に候然し大抵の女は小生より高く候恐縮の外無之候

　住みなれぬ處は何となくいやなものに候其上金がないときた日にはニッチもサッチも方が就かぬ次第に候下宿に籠城して勉強するより致方なく外へ出ると遂金を使ふ恐有るものに候

　筆は定めし成人致し候事と存候時々は模樣御知らせ可被下候少し步行く樣になると危險なものに候けがなき樣御注意可被下候

　鈴木禎さんへは一向手紙も上げず失禮ばかりして居る序の節よろしく云ふて下さい

手紙も再々上げたいが時を使ふのが惜いからあまり書かない其積りで居い[原]下さい御手紙はいつでも公使舘宛で御出可被成下宿は只今の處より移らる積なれど換えぬとも限らぬ事に候橫濱よりほとゝぎすを贈つて呉申候着後既に三冊もらひ候

產後の經過よろしく丈夫になり候へば入齒をなさい金がなければ御父ッさんから借りてもなさい歸つてから返して上ます髮抔は結はぬ方が毛の爲め腦の爲ようしいオードキニンといふ水がある是はふけのたまらない藥だやつて御覽はけがとまるかも知れない

餘り長くかくと時がつぶれるから此位にして置く

三十四年一月二十二日夜　　　　金之助

鏡　ど　の

此方へ郵便を出すには郵便日といふのが極つて居る今年中の表が出來て居て橫濱を何月何日に何船が出て「アメリカ」若くは印度を通つていつ倫敦につくといふ日取が分る[原]此表[原]は多分郵船會社か何かでくれるであらふから御貰ひなさい「アメリカ」便の方が二週間許り早く呉狀袋の左の上の端に Via America とかけばアメリカ便でくる

九四

明治三十四年一月二十四日　夜　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方　夏目鏡へ　【薄葉に筆にて認めあり】

昨日久々にて一書相認め郵筒に附し候處今日御地十二月二十一日付の書翰到着皆々無事のよし承知大慶此事に御座候

小兒出産後命名の件承知致候是は中根諸樣の御つけ被下る事と合認して何とも申し遣はさず打絶申候名前も考へると無つかしきものに候へどもどうせい、加減の記號故簡略にて分りやすく間違のなき樣な名をつければよろしく候今度の小兒男兒なれば直一とか何とか御つけ可被成候是は家の人が皆直の守かついて居る故なり又代輔でもよろしく是は死んだ兒の幼名なり或は親が留守だから家の留守居をする卽ち門を衞ると云ふので衞門杯は少々洒落て居るがどうだね門を衞るでは犬の樣で厭なら御止し己と御前の中に出來た子だからどうせ無口な奴に違ひないから夏目默ッ杯は乙だらう夫とも子供の名前丈でも金持然としたければ夏目富がよからう但し親が金之助でも此通り貧乏だからあたらない事は受合だ女の子なら春生れだから御春さんでいゝね待てよ父の上ノ一字ヅ、を取つてマチ卽ち町は如何ですかな己の御袋の名は千枝といつたこいつは少々古風で御殿女中然として居るな姉が筆だから妹は墨としたら理窟ポイかな一寸名がよければ雪江、浪江、花野なんて云ふのがあるよ千鳥鷗とくると鳥に緣が近くなるし八つ橋、夕霧杯となると女郞の名の樣だからよしたがよからうまあ〳〵何でも異議は申し立んから中根のおやぢと御袋に相談してきめるさ

入齒の事承知保野湯淺土屋へは無沙汰をして居るよろしく言つて御吳れたまに來たら燒芋でも食はしてやるがいゝ菅の奥さんが來たら是亦よろしくだ菅へも狩野へも一返も手紙をやらないよ

此手紙と前便とは一所に屆くだらう此土曜が郵便日だから

二十四日夜　　　金

御梅さんは脊が高くなつたかね御豊さん、たけさん、倫さん皆さんへよろしく倫さんは勉強するかい近頃はどんな樣子かね

鏡　どの

九五

明治三十四年二月五日　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より在獨乙〇〇〇〇氏へ

所謂難關說は承はつた時は左程でもなかつたが昨今は大に名說だと思つて感服仕るね第一無精極まる僕が妻の處へ丈は一月に一返位便りをするから奇特だらうあんな御多角顏でも歸たら少々大事にしてやらうと思ふよ僕は書物を買ふより外には此地に於て樂なしだ僕の下宿抔と來たら風が通る暖爐が少し破損して居る憐れ憫然なもんだねかういふ所に辛防しないと本抔は一冊も買へないからなー先達文部省へ申報書を出した時最後の要件と云ふ箇條の下に學資輕少にして修學に便ならずと書てやつた僕はまだ一回も地獄抔は買はない考ると勿體なくて買た義理ではない〇〇が聞たらケチな奴だと笑ふだらう西洋人と交際もしない廣く交るには紹介も必要だし衣服其他もチャンとしなければならず馬車も奢らねばならず第一時間を浪費して而して「シンミリ」した話は出來ないからねあまり難有い事はないよ大學も此正月から御免蒙つた往復の時間と待合せの時間と教師のいふ事と三つを合して考へて見ると行「く」のは愚だよ夫に月謝抔を拂ふなら猶々愚だ夫で書物を買ふ方が好い然も其 Prof. がいけすかない奴と來たら猶々愚だよ君はよく六時間なんて出席するね感心の至だ僕のコーチも頗る愚だが少しは取る處ありで是丈はよさずに通學して居る system も何もなくて口から出まかせを夫から夫へとシャベる奴だよ君は病氣だつたつてね大事にし

給へ美人を封じられて得た鄕愁を惹くと云ふ譯なら封じられない前は思ひやられるね、せつぱつまらなければ不品行抔はよすがいゝ其方が上品でもあり經濟でもあり時間も德であるからね僕は幸ひ無事だ安心して呉給へ友達がなくて淋い倫敦へ遊びに來ないか立花も病氣だつてね加愛有によろしくいつて呉給へ神田男爵はどうだね君も少しはシャレル樣になつたらう以下次號

二月五日　　　　金之助

〇　〇　〇

九六

明治三十四年二月九日　倫敦 6 Fladden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より東京狩野亨吉、大塚保治、菅虎雄、山川信次郎、四氏へ

狩野君
大塚君
菅君
山川君

三十四年二月九日朝　　　　金之助

其後は何方へも御無沙汰をして濟まん〱と思つて居ると一昨七日山川君から年始状が來た續いて菅君からも繪端書が來たかうなるといかな無精な拙者でも義理にも默つて居られないといふ譯で勇猛心を鼓舞

して今土曜の朝を抛つて久し振りに近況を御報知する事にした尤も諸君へ別々に差上るのが禮ではあるか長い手紙を一々かくのは頗る困難であるから失禮ではあるが一纏めの連名で御免蒙る事とした夫から例の候の奉るのは甚だ厄介だから少し氣取つて言文一致の會話體に致した右不惡御了承を願ふ」

着後の景況を詳しく述べるには紙數に限りありといふよりも時間に限りありで到底出來にくいから一寸かいつまんで申上様

九月八日に日本を出てから十月下旬に「パリ」にて博覽會を一週間許り見たが一切何にも分らないと思ひ給へ夫から皆に別れて心細くも英國へ着したが朋友も居らず方角も分らず北海道の土人が始めて東京へ修業に出た位の處を大塚君から敎へられた (Gower St. の下宿へ行つて部屋の明いて居る處があるなら留めて頂けますまいか何ていふ頗る馬鹿叮嚀な調子で頼み込んで漸く雨露丈は凌いだ

倩是から留學地選定の件を方付ねばならぬ「ケンブリッヂ」か「オクスフオード」か乃至「エヂ[原]バラ」か「ロンドン」かと色々思案をしたが幸ひ或る西洋人の紹介を持つて居たから一先「ケンブリッヂ」に行つて様子を見て來ようと思ふて出掛て見た是が英國内の旅行の最初である「ケンブリッヂ」へつくと驚いたのは書生が運動シャツト運動靴で町の内を「ゾロ〳〵」歩いて居る是は舟を漕いだり丸を抛けたり又は自轉車へ乘る先生方であつて而して大學生の大部分は此先生方である夫から段々大學の様子を聽て見ると先づ普通四百磅乃至五百磅を費やす有様である此位使はないと交際抔は出來ないそうだ尤もやり方でもつと安くも出來るが世間がそういう風だから衣服其他之に相應して高い月謝も高い留學生の費用では少々無理である無理にやるとした處が交際もせず書物も買へず下宿にとぢ籠つて居るならば何も「ケムブリッヂ」に限つた事はない少しでも樂な處に行くが善いと判斷した是に於て「ケンブリッヂ」も「オクスフオード」も御已めにして此度は「エヂバラ」か「ロンドン」かと考へ出した「エデンバラ」は景色が善い詩

趣に富んで居る安くも居られるだらう倫敦は烟と霧と馬糞で塡つて居る物價も高い、で餘程「エヂンバラ」に行かうとしたが玆に一の不都合がある「エヂンバラ」邊の英語は發音が大變ちがう先づ日本の仙臺辨の樣なものである切角英語を學びに來て仙臺の「百ズー三」抔を覺えたつて仕樣がない夫から倫敦の方はいやな處もあるが社會が大きい女皇が死ねば葬式が倫敦を通る王が卽位すれば「プロクラメーション」が倫敦である芝居に行きたければ「West End」に並んで居る夫から僕に尤も都合の善いのは古本抔をさがすには（新い本で「も」出版屋は大槪倫敦である）此處が一番便利である　以上の譯で先づ倫敦に止まる事に致した

倫敦に留まるとすれば第一學校第二宿をきめねばならぬ學校の方は University College ノ Prof. Ker に手紙をやつて講義傍聽の許諾を得たから先よいとして宿の方は困つた第一安直でなければならぬ第二可成閑靜な處が欲いだから公使館へ行つて日本人の名簿を引くり返して留學生の居つたらしい處を尋ねる事にした處が倫敦は廣い汽車馬車交通の機關は備はつて居るが田舍者のぽつと出には悲いかな之を利用する事が出來ぬ仕方がないから地圖にたよつて瞎雲毛で出掛ると一二軒尋ねる內に日が暮れて仕舞ふ然も其尋ねた家が代が替つて居たり部屋が塞がつて居つたり或は滅法高かつたりして皆だめだ夫から此度は新聞の廣告を見て搜し出した廣告の貸間は素敵にあるもんだよ之を見通すさへ三時間位はかゝる況んや之を尋ねるに於てをやだ此困難を經過して漸く二週間の後東京の小石川といふ樣な處へ一先づ落付たすると此家がいやな家でね――且つ頗る契約違背の所爲があつたから今度は深川のはづれと云ふ樣な所へ引越した道程は四五里もあるだらう隨分書物抔は不便なものだよ東京の書生の樣に「ランプ」を持つてこそ行かないが實にいやなもんだよ此家が 6 Flodden Camberwell New Road S. E. で此手紙を書いて居る所だよ

宿は夫で一段落が付た夫から學校の方を話さう University College へ行つて英文學の講義を聞たが第

一時の配合が惡い無暗に待たせられる恐がある講義其物は多少面白い節もあるが日本の大學の講義とさして變つた事もない滊車へ乘つて時間を損して聽に行くよりも其費用で本を買つて讀む方が早道だといふ氣になる尤も普通の學生になつて交際もしたり圖書館へも這入たり討論會へも傍聽に出たり教師の家へも遊びに行たりしたら少しは利益があらう然し高い月謝を拂はねばならぬ入らぬ會費を徵集されねばならぬ其のみならずそんな事をして居れば二年間は烟の樣に立つて仕舞ふ時間の浪費が恐いからして大學の方は傍聽生として二月許り出席して其後やめて仕舞た同時に Prof. Ker の周旋で大學へ通學すると同時に Craig と云ふ人の家へ敎はりに行く此人は英詩及「シェクスピヤー」の方では專門家で自分で edit とした沙翁を「オクスフォード」から出版して居る「ダウデン」の朋友で今同教授が出版しつゝある沙翁集中の「キングリヤ」の editor である「ベーカー」町の角の二階裏に下女と二人で住んで居る頗る妙な爺だよ餘〔り〕西洋人と縁が絶ても困るから此先生の所へは逗留中は行く積りだ

以上は僕の大體の經歷だ是からくだらぬ事を一二御話し樣

僕は英語研究の爲に留學を命ぜられた樣なものゝ二年間居つたつて到底話す事抔は滿足には出來ないよ第一先方の言ふ事が確と分らないからな情ない有樣さ殊に當地の中流以下の言語はＨノ音を皆抜かして鼻にかゝる樣な實に曖昧ないやな語だ此は御承知の cockney で教育ある人は使はない事になつて居るが實に聽きにくい仕方ないからいゝ加減な挨拶をして御茶を濁して居るがね其實少々心細い然し上等な教育のある人になると槪して分り易い芝居の役者の言語抔も頗る明晰先づ一通りは分るので少しは安心だ然し教育ある人でも無遠慮にベラ〳〵嘵舌り出すと大に狼狽するよ日本の西洋人のいふ言が一通り位分つても此地では覺束ないものだよ元來日本人は六づかしい書物を讀んだり六づかしい語を知つ〔て〕居るが口と耳は遙かに發達して居らん此も一種の教育法かも知れぬが内地雜居の今日口と耳がはたらかないと實用に適

しないのみならず夫に毛唐人に馬鹿にされるよ堂々たる日本人が随分御出になるが會話がまづいから西洋人の方では學問も會話位しか發達して居ないとしか考へないつまらぬ樣だが日本でも手紙の字がまづいと其人を悪く想像するといふ樣な譯だから仕方がない此を改良するのは大問題だ到底僕抔には考へられない恐く今の日本の有樣では何人も名案はあるまい然し少しでも善き方に進ませるが教育者の任である山川君抔は随分研究被下たいと思ふ然し同じ教育のある人でも非常に分りよいのと分りにくいのとあつてね日本と同じ事たよ大幸勇吉の日本語抔は僕にも分らないからだ

斯ういふ譯で語學其物は到底僕には卒業が出來ないから書物讀の方に時間を使用する事にして仕舞た從つて交際抔は時間を損するから可成やらない加之西洋人との交際上となると金がいるよ御馳走ばかりになつて居るとしても金が居るよまづい洋服抔は着て居られないしタマには馬車を驅らなければならないし酒も飲程親密にならなければ一通りの談話しか出來ない興味のあるシンミリした話なんかはやれないからね夫も二年で語學が餘程上達する見込があれば我慢してやるがそれは以上の理由でだめだから時間を損し金を損して是といふ御利やけがない位なら始めからやらない方がいゝからね僕は下宿籠城主義とした

下宿といへば僕の下宿は随分まづい下宿たよ三階でね窓に隙があつて戸から風が這入つて顏を洗ふ室がペンキ塗の如何はしいので夫に御玩弄箱の樣な本箱と横一尺竪二尺位な半まな机がある夜抔は君ストーブを焚くとドラフトが起つて戸や障子のスキかちピユー〳〵風が這入る室を煖めて居るのだか冷して居るのだか分らないね夫から風の吹く日には烟突から「ストーブ」の烟を逆戻しに吹き下して室内は引き窓なしの臺所然として居る何に元の書生時代を考へれば何の事はないと痩我慢はして居るが色々な官員や會社の役人や金持が來てねくだらない金を使ふのを見るといやになるよ日本へ歸れば彼等のある者とは同等の生活が出來る外國へ同じ官命で來て留學生と彼等の間にはかゝる差違が何故あるかと思ふと歸り度なるね然

しこんな愚癡は野暮の至りだから默つて居るが何しろ彼等の或物が日本の利益にも何にもならない處に入らぬ金を茶々風茶に使ふのは惜いよ

下宿の有樣は以上の如しだから是から下宿の家族に付て一言せざるべからざる譯となる抑も此下宿たるや先頃迄は女學校たりしものが突然下宿に變化したのである是は女學生中に流行病が起る生徒がなくなる借金が出來る不得已閉校して下宿開業借金返濟策と出掛た故に此家の女主人公は固の女學校の校主にして其姉たるや學校の音樂教師たりと云ふ譯さそして此姉が閉校後結婚して亭主も同宿して居る其外に元の女學生が一人居るこう云ふと大變上品の樣に聞える僕も其積りで移つたのであるが移つて段々話しをして見ると誰も話せる奴はない書物抔は一向知らない姉君の方は元はどこかの governess であつたとかで頻りに昔しの夜會や舞踏抔の話をする又綺がかけると云ふのが御自慢である大變な vanity の强い女で御相手をするのが厭だからフン〳〵と云つて向通りを眺めて居ると張合がないと見えて自慢話しをやめる事がある近頃は僕の人となりを知り僕の如何なる人間たるやを少し會得したと見えて餘り法螺を吹て自慢しなくなつた頗る謹愼して殊勝である夏目の德御天馬に及ぶと云ふ位いものだ

此女將軍の英語たるや學校の主幹たりし丈にわるくはなけれども決して上品にあらず且六づかしき字抔は知らず會に俗に用いない字を使ふと「アクセント」や發音を間違へる此方の言語がムヅカシクてならなくても日本人に聞ては英國婦人の品位が落ちると云ふ樣な顏で知たふりで通す頗る憐れな奴だ（田川君に取分けて申すが）一般の英國人よりも我々が學者であつて多くの書物を讀んで居つて且つ英國の事情（ある事情昔し存在して今なき樣な事情）には明かであると申して差違なし前には語學の困難を申して我々は二足三文の價値なき樣に申上たが斯樣な點になる〔と〕彼等よりも威張れるよ安心し給へ或る西洋人は pillory と云ふ事を知らなかつた或人は such a one と云ふとか such an one であるとかで議論して居

た或る婆さんは benefit と云ふ字は a norm of multitude だといつて僕に教へた耳で聽た事のない書物上ニ出テくる字の「アクセント」などはよく間違へて居る然も以上の點は普通教育を受たもの丶内にあつた事其内のあるものは大學の卒業生中にあつた事と思ひ給へ

　其から妹の方は極めて内場だ賢夫人である教育はさしてないがあるふりをせぬ丈が感心である夫から亭主もいゝ奴だが頗る無學で書物抔は讀んだ事もあるまい此間一所に芝居「パントマイム」を見物に行たRobinson Crusoe をやつて居つた所が實際是は小說か事實物譚かといつて僕に尋ねた

　芝居といへば此ちらの芝居は奇麗だよ其代り中央の善い芝居へ行くと善い席では燕尾服をつけなければならぬ僕は赤靴ジャケッで飛び込んで極りが惡かつた事がある

　交通機關は便利だね馬車電鐵地下鐵道高架鐵道色々のがあるよ其代りやかましくつていやだ馬車へ乘つて濟まして居ると元の方角へ連れて行かれたり滊車を乘違へて飛でもない處へ持て行かれたりする事が澤山ある

　紳士は大概「フロック」に「シルクハット」ダ中には如何しき「フロック」に屑屋の樣な「シルクハット」を被つて居るのがある浪人のベンベラの羽二重と云ふ樣なものだらう

　先達ての女皇の葬式は見た「ハイドパーク」と云ふ處で見たが人浪を打つて到底行列に接する事が出來ない其公園の樹木に猿の樣に上つてた奴が枝が折れて落る然も鐵柵で尻を突く警護の騎兵の馬で蹴られる大變な雜沓だ僕は仕方がないから下宿屋の御爺の肩車で見た西洋人の肩車は是が始ての終りだらうと思ふ行列は只金モールから手足を出した連中が續がつて通つた許りさ

　僕は少々面白い本を買つた狩野君に見せたいのがある

　僕は順に行けば來年の十月末若くは十一月始ニ歸朝するのだが少シ佛蘭西に行つて居たいどうも佛蘭西

語が出來んと不都合だ切角洋行の序にやつて行きたいが四ヶ月か五ヶ月でいゝが留學延期をして佛蘭西に行く事は出來まいか狩野君から上田君に話して貰ひたいそうして一寸返事をよこして貰ひたい。そうするとサ來年四月位ニ歸ル譯ニナル

夫からもう一つ狩野君と山川君と菅君に御願ひ申す僕はもう熊本へ歸るのは御免蒙りたい歸つたら第一で使つてくれないかね未來の事は分らないが物が順にはこぶと見て僕も死なず狩野君も校長をして居るとした處で如何ですかな御安くまけて置きますよ

大塚君の指輪は到着したかね安達から手紙が行つたらう

山川君世帶を持つたか僕は歸つたらだれかと日本流の旅行がして見たい小天行抔を思ひ出すよ

僕は中々手紙をやらないから諸君に頼むのは妙だが時々何か書てよこして呉れ給へ御願だ宛名は公使舘がいゝ下宿は移る事があるから

九七

明治三十四年二月二十日　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

國を出てから半年許りになる少々厭氣になつて歸り度なつた御前の手紙は二本來た許りだ其後の消息は分らない多分無事だらうと思つて居る御前でも子供でも死んだら電報位は來るだらうと思つて居る夫だから便りのないのは左程心配にはならない然し甚だ淋い山川から端書か來た先達て是は年始狀だ菅からも年始の端書をくれた其外に熊本の野々口と東京の太田と云ふ書生から年始狀が來た手紙は是丈だ

御前は子供を産んだらう子供も御前も丈夫かな少々そこが心配だから手紙のくるのを待つて居るが何とも云つてこない中根の御父つさんも御母さんも忙がしいんだらう

金遣りさへよければ少しは我慢も出來るが外國に居て然も嚢中ほか（ら）錢なしと來てはさすがの某も中々閉口だ早く滿期放免と云ふ身になりたい然し書物丈は折角來たものだから少しは買つて歸り度と思ふそうなると猶必逼する然し命に別條はない安心するが善い

段々日が立つと國の事を色々思ふおれの樣な不人情なものでも頻りに御前が戀しい是丈は奇特と云つて褒めて貰はなければならぬ夫から筆の事だの中根の御父つさんや御母さんの事だの御梅さんや倫さんの事だの狩野だの正岡だの菅だの山川だの親類や友達の事なんかを無暗に考へる其癖あまり手紙はかゝない先達大塚の鈴木と時さんへ一本出した熊本の櫻井へも出した狩野と大塚と山川菅へ連名で出した夫から中根の御母さんへ一本出した是は此前の郵便で屆くか事によると此手紙と一所に屆くだらう

おれの下宿は氣に喰はない所もあるが先々辛防して居るよ妻君の妹が洗濯や室の掃除抔の世話をする中々行屆いたものだシヤツや股引の破けたの抔は何にも云はんでもちやんと直つて呉る御前も少々氣をつけるが善い

湯淺だの俣野、土屋、抔にも逢ひ度、高知縣の書生でよく來た男一寸名前を忘れて仕舞たあの男抔の事も時々考へる

おれの下宿には○○と云ふサミユエル商會へ出る人が居る此人はノンキな男で地獄の話より外は何にも知らない人だ此人と時々芝居を見に行く是は一は修行の爲だから敢て贅澤ではない日本の人は地獄に金を使ふ人が中々ある惜い事だおれは謹直方正だ安心するが善い

西洋は家の立て方から服裝から萬事窮屈で行かぬそして室抔は頗る陰氣だ殊に倫敦は陰氣でいけない昨日も三時頃「ピカーデレー」と云ふ所を通つて居ると突然太陽が店仕舞をして市中は眞暗になつた市中は瓦斯と電氣で持つて居る騷ぎさ

まだ〱あるが是から散歩に出なければならぬから是でやめだ
からだが本復したらちつと手紙をよこすがいゝ

二月二十日　　　　金之助

鏡　ど　の

此手紙は明日の郵便で日本へ行く郵便日は一週間に一遍しかない

九八

明治三十四年三月九日　午前十一時三十分　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より牛込區矢來町三番地中ノ丸
中根氏方夏目鏡へ

其後國から便があるかと思つても一向ない二月二日に横濱を出た「リオヂヤチイロ」と云ふ船が桑港沖で沈沒をしたから其中におれに當た書面もありはせぬかと思つて心掛りだ
御前は産をしたのか子供は男か女か兩方共丈夫なのかどうもさつぱり分らん遠國に居ると中々心配なものだ自分で書けなければ中根の御父さんか誰かに書て貰ふが好い夫が出來なければ土屋でも湯淺でもに賴むが好い
新聞も賴んで置たが一向來ない是は經濟上の都合があると云ふならよこさんでもよろしい只だんまりですてゝ置くのは宜しくない注意するがよい
おれは不相變忙がしいから長い手紙を出し度ても出す暇がない諸方へは御前からよろしく言つて呉れ

芝居は修業の爲に時々行くが實に立派で魂消る許りだ昨夜も「ドルリー・レーン」と云ふ倫敦[原]の歌舞伎座の樣な處へ行つたが實に驚いた尤も其狂言は眞正の芝居ではない「パントマイム」と云つて舞臺の道具立や役者の衣裝の立派なのを見せる主意であつて是は重に「クリスマス」にやるものだがはやるものだから去年から引き續いてやつて居る（倫敦は廣い處だから芝居の數も無暗にあるがはやる狂言になると三年も續けて一つ芝居をやつてそして人が這入るのだから不思議なものだ）そこで此道具立の美しき事と言つたら到底筆には盡せない觀音樣の棟に彫りつけてある天人が五六十人集まつて繪にかいた龍宮の中で舞踏をして居ると其後から又五六十人が舞臺の下からセリ出してくる急に舞臺が暗くなると其次の瞬間には悉皆道具が替つて居る突然舞臺の眞中から噴水が出て此噴水が今紫色であるかと思ふと黃色になり其次には赤くなり靑くなり非常な金銀を鏤めた殿閣が急に現はれて夫が柱天井の中に皆電氣がつい〔て〕光る「ダイヤモンド」で家が出來て居る樣だ女の頭や衣服も電氣で以て赤い玉や何かゞ何十となくつく夫が一幕や二幕ではない差し易り引き易り實に莫大な金を費さなければ出來ない丸で極樂の活動寫眞と巡り燈籠とを合併した樣だ何しろ大きな水晶[原]宮がセリ出すかと思ふと奇麗な花園がセリ下がつて來たり其後から海に日が當つて山が靑く見える處が次第に現はれて來たり是が漸々雪の降る景色に變化したり實に奇觀である
おれは丈夫だ餘程肥た樣だ然し早く日本に歸りたい後は其内書いてやる

三月八日　　　　　　　　　　　　　　金之助

鏡どの

九九

明治三十四年四月九日　夜　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

其後は頓と御無沙汰をして濟まん君は病人だから固より長い手紙をよこす譯はなし虚子君も編緝多忙で「ほとゝぎす」丈を送つてくれる位が精々だらうとは出立前から豫想して居つたのだから手紙のこないのは左迄驚かないが此方は倫敦といふ世界の勸工場の樣な馬市の樣な處へ來たのだから時々は見た事聞た事を君等に報道する義務がある是は單に君の病氣を慰める許りでなく虚子君に何でもよいからかいて送つて呉れろと二三度頼れた時にへい／＼ようしう御座いますと大揚に受合つたのだから手紙をかくのは僕の義務さ夫は承知だが僕も遊びに來た譯でもなし醉興にまごついて居る仕儀でもないのだから可成時間を利用し樣と思ふのでね遂々いゝ方へも無音になつてまことに申譯がない　〔以下全集第十六卷『倫敦消息』の一參照〕

四月九日夜　　漱石

子規君

虚子君

（もう厭になつたから是で御免蒙る實は僕の先生の話しをし度のだがね餘程の奇人で面白いのだから然し少々頭がいたいから是で御勘辨を願はう

ほとゝぎす拜見、君の端書も拜見病氣がよくないそうだ困るねまー／＼用心するがいゝ）

一〇〇

明治三十四年四月二十日　6 Flodden Road, Camberwell New Road, London, S. E. より下谷區上根岸町八十二番地正岡常規氏へ

〔本文「倫敦消息」の二参照〕

今回は是で御免竹村は氣の毒な事だ

ひまがあれば通信をするこんな事をかくんでも中々時間がかゝるから惜い通信は歸朝の上見せてもらうかも知れないから反古にせずととつて置いて呉れ給へ

二十日　　　　　漱石

子規君

虚子君

一〇一

明治三十四年五月八日・Tooting より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

御前の手紙と中根の御母さんの手紙と筆の寫眞と御前の寫眞は五月二日に着いて皆拜見した

久々で寫眞を以て拜顏の榮を得たが不相變御兩人とも滑稽な顏をして居るには感服の至だ少々耻かしい樣な心持がしたが先づ御ふた方の御肖像をストーヴの上へ飾つて置たすると下宿の神さんと妹が掃除に來て大變御世辭を云つてほめた大變可愛らしい御孃さんと奥さんだと云つたから何日本ぢやこんなのは皆御多福の部類に入れて仕舞んで美しいのはもつと澤山あるのさと云つてつまらない處で愛國的氣燄を吐いてやつた筆の顏杯は中々ひようきんなものだね此速力で滑稽的方面に變化されてはたまらない

善良なる淑女を養成するのは母のつとめだから能く心掛けて居らねばならぬ夫につけては御前自身が淑女と云ふ事について一つの理想をもつて居なければならぬ此理想は書物を讀んだり自身で考へたり又は高

尙な人に接して會得するものだ　ぼんやりして居ては行けない
飯を食はして着物をきせて湯をつかわせさへすれば母の務は了つたと考へられてはたまらない御頼まふしますよ
二週間許前に又宿替をした此度は日本橋を去る四里許り西南の方だ矢張り下宿の主人や神さんはもとの奴だ實は變りたいのだが妙な緣故で出にくい樣な譯になつて居る
當地はまだ寒ひ冬服で居る外套をきても可笑しくはない我輩の着物はきられなくなつて仕舞つた然し新服を作る餘裕がない
菅の御父さんは病氣だつて夫から死んだか又はよくなつたか不相變貧乏世帶の上にそんな事が湧いて來てはたまるまい氣の毒だ山川は先達家を持つとかいふ端書をよこしたがどうしたかしらあいつは人に手紙をよこせといつて催促をするが自分は一向よこさないけしからん奴だ
此間鈴木夫婦から手紙をよこした太陽雜誌を送つてやるとかいつてよこした二十圓許り繪葉書を買つてよこせと云ふ御注文だ時さんは不相變御大名だよ

五月八日　　金之助

鏡どの

一〇二

明治三十四年六月十九日　Tooting より在獨乙伯林藤代禎輔氏へ

君の手紙が今十九日着した先達て鮎原の事での手紙もついたがいつどこへつくのだか分らないからそれ

なりにして置いた宜しく御工夫と書てあつたが公使館へでも通知する位の事でそれも當人さへ公使館へくれば僕の宿所は分るのだから工夫といふ程の事でもないと思つてそれつきりにした因つて同氏には面會しなかつた目下は池田菊苗氏と同宿だ同氏は頗る博學な色々の事に興味を有して居る人だ且つ頗る見識のある立派な品性を有して居る人物だ然し始終話し許りして勉強をしないからいけない近い内に同氏は宿を替る僕も替る管の家嚴の訃音は僕の妻の所から知らせて來た

僕はね留學生になつて何にも所得はない少しは進歩したかあるかと思つて考へて見ても心が許さんから仕方がない自惚るより少しはよいかも知れぬ

第一高等學校で僕を使つてくれないかと狩野へ手紙を出した返事が來ない熊本はもう御免蒙りたい

近頃は英學者なんてものになるのは馬鹿らしい樣な感じがする何か人の爲や國の爲に出來そうなものだとボンヤリ考へテ居るコンナ人間は外ニ澤山アルダラウ左樣ナラ

六月十九日　　　　金之助

藤代君

一〇三

明治三十四年八月二日　午後（時間不明）　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より Bei Brandt, Paulstrasse 24, Berlin 芳賀矢一氏へ　〔はがき〕

拝啓

立花君の爲に記念の圖書御購求の次第拝承小生も無論賛成致候當地にて同君交際の人は頗る少かるべく

藤井君の番地聞合せ候處 120, Belgrave Road S. W. の由なれど目下 Eastbourne とやらに旅行中のよしに候其他陸軍少佐梶川某といふ人は同君の舍兄と交際あり從つて滯英中懇親の由承知致候同氏へは公使舘宛にて屆く事と存候其他の人は一向存じ不申候

　醵金の手續及び概略の金額御通知被下候へば小生より兩君に通知致してもよろしく又貴兄にて御まとめ相成候へば小生分は直ちに貴兄へ宛御送可申上候　頓首

八月一日　　夏目金之助

芳賀兄

　藤代君に度々不足税を拂はして失敬御容赦可被下此カードなら大丈夫と存候如何にや是も不足税なら一寸御一報被下度候

一〇四

明治三十四年八月十日　午後一時　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ　〔はがき〕

其後御無事の事と存候
其許よりは一向書信無之或は公使舘邊に滯停致し居るやと存候
日本新聞六月末より七月九日に至る迄昨八月九日落手致候
山川より二回程書面參り候

中根父上は休職のよし其後は御無沙汰に打過候よろしく其許より御傳被下度候
兩女とも健康の事と存候
鈴木夫婦よりは度々書信有之候

八月十日　　夏目金之助

一〇五

明治三十四年八月十七日　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より 牛込區矢來町三番地中ノ丸
中根氏方夏目鏡へ　〔はがき〕

拜啓
八月十五日土井氏パリスより來倫當分小生方に止宿の事に致候同君より肌着上下一着絹ハンケチ四枚[原]受取申候御厚意難有存候
中根父上の手紙其許及び梅子どのゝ手紙拜見致候
父上には目下御休職御閑散のよし結構に存候
其許御病氣のよし目下は定めて御全快の事猶御注意可然と存候小兒兩人とも健康のよし結構に候御梅樣華族女學校へ御通學のよしよく御勉強可被成候御梅さんの手紙はよく出來て居候猶時々御通信可被下候小生至極丈夫御安心可被下候

八月十七日　　ロンドン　　夏目金之助

先日又々轉居候只今の處は頗る上品なる〔以下七八字チギれて見えず〕姉妹と退職の陸軍大〔以下同前〕に候此御婆さん中々親切な〔以下同前〕「クリスマス」に見やげもの（日本の）〔以下同前〕何に手に入候はゞ御送り可被下〔以下同前〕其許の處へ手紙をかくと申して居候〳〵

一〇六

明治三十四年九月十二日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より東京理科大學（學生）寺田寅彥へ

其後は存外の御無沙汰失敬大兄も御無事御勉學何かメンデルゾーン抔をブーノヽ鳴らして御得意の事と存候小生も矢張碌々生命を維持するにいそがしく候只今に倫敦の西南に住居致居候御婆さん二人と退職の陸軍大佐と同居で頗る老朽的生活に候此御婆さんは中々學者で佛蘭西語なんかをベラ〳〵嘵舌り「シエクスピヤー」抔を引きずり出し候大變な難有屋にて地下鐵道の御蔭でセントポールの土臺へヒヾが入るとかで大不平に候

御家内御病氣のよし是はナンボ君でも御閉口の事と御察し申上候隨分御療養專一啗血抔は一寸流行るものだが頗る難有からぬ奴に候子規抔もあぶなき事と心配の至に候

倫敦には無數の「アン」有之「ショーペ〔ン〕ハウワー」の說によれば 8.8000 人とか申す儀に候へば貴兄の御近づきの先生は一寸見當り不申何れ其内面會の折も有之候へば昔よりよろしくと可申候「サイラス・マーナー」に逢つたら金を借りてやらうと思居候へども運惡くまだ遇ひ不申候

俣野の年始狀が九月に着致候には少々喫驚差出人が俣野丈に郵便が半年以上道草を喰つて居つた事と存候竹崎君落第のよし落第の一返位は心地よきものに候益奮發して御遣り可被成候

學問をやるならコスモポリタンのものに限り候英文學なんかは椽の下の力持日本へ歸つても英吉利に居

つてもあたまの上がる瀬は無之候小生の樣な一寸生意氣になりたがるもの丶見せしめにはよき修業に候君なんかは大に專[原]問の物理學でしつかりやり給へ本日の新聞で Prof. Rücker の British Association でやつた Atomic Theory ニ關する演說を讀んだ大に面白い僕も何か科學がやり度なつた此手紙がつく時分には君も此演說を讀だらう

つい此間池田菊苗氏（化學者）が歸國した同氏とは暫く倫敦で同居して居つた色々話をしたが頗る立派な學者だ化學者として同氏の造詣は僕には分らないが大なる頭の學者であるといふ事は慥かである同氏は僕の友人の中で尊敬すべき人の一人と思ふ君の事をよく話して置たから暇があつたら是非訪問して話しをし給へ君の專問上其他に大に利益がある事と信ずる

僕も歸つて熊本へは行き度ない可成東京に居りたい然し東京に口があるかないか分らず其上熊本へは義理があるから頗る閉口さ

何か其他面白い事を書いて上け〔た〕いが一寸今考へ出せない君は寫眞を送れとか云ふ注文であつたが忘れた譯ではないが大なる寫眞はちと高いから餘り買へない歸るときに御見やげに少し買つて上け[原]あけましやう

僕は留學期限を一年のばして佛蘭西へ行き度が聞屆られさうにもない

君下宿で淋しければ時々僕の留守宅へでも遊びに行つて見給へ――それも話しがなくてつまらないか――
――夫ならよし給へ

僕の趣味は頗る東洋的發句的だから倫敦抔にはむかない支那へでも洋行してフカの鰭か何かをどうも乙だ抔と言ひながら賞翫して見度い

貞ちやんへよろしく

九月十二日

漱石

寅日子様

一〇七

明治三十四年九月二十二日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸
中根氏方夏目鏡へ

其後御無事御暮らし被成候事と存候筆も恒も丈夫に成人致居候ならんよく／＼氣をつけ御養育有之度候小生無事勉強致居候間皆々樣へよろしく御申聞可被下候近頃少々胃弱の氣味に候胃は日本に居る時分より餘りよろしからず當地にては重に肉食を致す故猶閉口致候

近頃は文學書は嫌になり候科學上の書物を讀み居候當地にて材料を集め歸朝後一卷の著書を致す積りなれどおれの事だからあてにはならない只今本を讀んで居ると切角自分の考へた事がみんな書いてあつた忌忌しい

先達櫻井氏より手紙參り候其前櫻井氏宛にて留學延期（佛國へ）の件周旋頼み置候處延期は文部省にて一切聞き屆けぬ由につき泣寢入に候歸朝後は東京に居り度と思へど此樣子では熊本へ歸らねばならぬかも知れぬ御前も其覺悟をして居るがいゝ先達御梅さんの手紙には博士になつて早く御歸りなさいとあつた博士になるとはだれが申した博士なんかは馬鹿々々敷博士なんかを難有る樣ではだめだ御前はおれの女房だから其位な見識は持つて居らなくてはいけないよ

山川から先達て手紙が二本來た山川は此次此次といつて書くと短かい手紙だへゝな擊劍使ひが懸聲ばか

り仰山でちつとも斬り込まないのと同様だ」

寺田寅彦から手紙をよこした妻君が病氣で咯血をした相だそれから子供が生れたさうだ氣の毒と御目出度のが鉢合せをして居る

中根の御父さんも御母さんも御達者だらう、日本新聞は時々來る大抵一週間に一返位來る端書でもよいから二週間に一度位宛は書面をよこさなくてはいかん子供抔があると心配になるから、皆さんへよろしく

九月二十二日　　　　金之助

鏡　どの

一〇八

明治三十四年九月二十六日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸
中根氏方夏目鏡へ

八月末御差出の書狀拜見致候小供も其許も少々御病氣のよしの處もはや御全快のよし結構に候小生も不相變に候

下女暇をとり嘸かし御多忙御氣の毒に候金が足らなくて御不自由是も御察し申す然し因果とあきらめて辛防しなさい人間は生きて苦しむ爲めの動物かも知れない

倫さんの手紙によると筆は何か大變な强情ばかりの容子だ男子は多少强情がなくては如何んが女が無暗に强情ではこまる又之を直すに無暗に押入に入れたりしては如何んよ仕置も臨機應變にするのはいゝがたゞ

嚴しくしては如何ぬ小供の性質は遺傳によるは勿論であるが大體六七歳迄が尤も肝要の時機だから決して瞬時も油斷をしては如何ん可成スナホな正直な人間にする樣に工夫なさい

鈴木からも手紙が來て夫婦とも寶塚の溫泉で洒落れて居る相だ

中根の御兩人始め其他の諸先生も皆丈夫だ相で結構だ

入歯の事も承知時機を見てやれたらやるがいゝ無理をするにはあたらない此頃は長い手紙をかくのがオツクーだから是でやめる

九月二十六日

金之助

鏡　ど　の

一〇九

明治三十四年十一月二十日　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より高知縣土佐郡江ノ口町大川筋

寺田寅彥へ

寺田寅彥から手紙が來た寺田の妻は吐血した夫に病氣後子を生んださうだ妻は國へ歸し自身は下宿をする

可愛相だから時々僕の留守宅へでも遊びに行けと申してやつた行くかも知れない

土屋湯淺俣野とも落第のよし氣の毒に候

落第なんか恐れる樣では仕樣がない落第は良き經驗だ奮發してやる樣に御申聞可被成候

今十一月二十日君の手紙を拜見、何か肺尖カタルとかで御上京にならぬ由コイツは少々厄介の事と遠方から御心配申上る先日大學苑にて手紙を一通出したが恐らく君の處へは屆くまい、

油畫やバイオリンや俳句や寔に小說の主人公見た樣で結構に思ふが其上に病氣で海濱へ養生に來て居る抔は近頃の文學狂が好んで寫し出す種と思ふが既に妻あり子ありとなつては少々相場が下落する

小生不相變碌々別段國家の爲にこれと申す御奉公も出來かねる樣で實に申譯がない

今から十年もしたら何か出來想に思ふが此十年が昔からの事だから頗るあてにならない

こちらの樣子も種々申述る事もあるがどうもひまがなくていつかへも御無沙汰のみをして居るから君にも御勘辨を願はねばならぬ

君の妻君は御病氣はどうです君の子供は丈夫ですか

學校抔はどうでもよいから精々療治をして御兩親に安心をさせるのが專一と思ひます

明日の晩は當地で有名な「Patti」sic と云ふ女の歌をアルバート・ホールへきゝに行く積り小生に音樂抔はちとも分らんが話の種故此高名なうたひ手の妙音一寸拜聽し樣と思ふ先は是丈　草々

寺田君　　漱石

倫敦有歷日

一一〇

明治三十四年十二月十八日　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London. S. W. より下谷區上根岸町八十二番地

正岡常規氏へ

「前略」日曜日に「ハイド・パーク」抔へ行くと盛に大道演說をやつて居るこちらでは「イエス・キリスト」の神よ「アーメン」先生が皺枯聲で口說いて居ると五六間離れて無神論者が怒鳴つて居る「地獄？地獄とは何だ若し神を信ぜん者が地獄に落ちるならヴォルテールも地獄に居るだらうインガーソルも地獄に居るだらう吾輩はくだらぬ人間の充滿して居る極樂よりもかゝる豪傑の集つて居る地獄の方が遙にましだと思ふ」僕の理想的アマダレ演說よりも餘程氣餤が高い之を稱して鼻息あらき演說といふので之も雄辯法抔に見當らない形容詞のつく使ひやうだ此無神論者の向側に Humanitarian の旗を押立てゝ「コムト」の假色を使つて居る奴がある其隣では頻りに「ハックスレー」の說を駁して居る其筋向にシナビた先生がからだに似合ない太い聲を出して「諸君予は前年日本に到りかの地にて有名なるマーキス・アイトー（伊藤侯爵のこと）に面會して同氏が宗教に關する意見を親しく聽き得たのであります……」どれもこれも善い加減な事ばかり述立てゝ居る

先達「セント・ジェームス・ホール」で日本の柔術使と西洋の相撲取の勝負があつて二百五十圓懸賞相撲だといふから早速出掛て見た五十錢の席が賣切れて這入れないから壹圓二十五錢奮發して入場仕つたが夫でも日本の聾棧敷見た樣な處で向の正面でやつて居る人間の顏などはとても分らん五六圓出さないと顏のはつきり分る處迄は行れない頗る高いぢやないか相撲だから我慢するが美人でも見に來たのなら壹圓二十五錢返して貰つて出て行く方がいゝと思ふソンナシミッタレタ事は休題として肝心の日本對英吉利の相撲はどう方がついたかといふと時間が後れてやるひまがないといふのでとう〳〵御流れになつて仕舞つた其代り瑞西のチャンピョンと英吉利のチャンピョンの勝負を見た西洋の相撲なんて頗る間の拔けたものだよ膝をついても横になつても逆立をしても兩肩がピタリと土俵の上へついて然も一二と行司が勘定する間此ピタリの體度を保つて居なければ負でないつて云ふんだから大に埒のあかない譯さ蛙のやうにヘタバツ

テ居る奴を後ろから抱いて倒さうとする倒されまいとする坐り相撲の子分見たやうな眞似をして居る御蔭で十二時頃迄かゝつた難有仕合である翌日起きて新聞を見ると夕十二時迄かゝつた勝負がチャンとかいてあるには驚いたこつちの新聞なんて物はエライ物だね

僕は又移つたよ五乞閑地不得閑三十五年七處移なんと三十五年に七度居を移す位な事では自慢にやならない僕なんか英吉利へ來てからもう五返目だ今度の處は御婆さんが二人退職陸軍大佐といふ御爺さんが一人丸で老人國へ島流しにやられたやうな仕合さこの御婆さんが「ミルトン」や「シェクスピヤー」を讀んで居ておまけに佛蘭西語をペラ／＼辨ずるのだから一寸恐縮する「夏目さん此句の出處を御存知ですか」抔と御せられる事がある「あなたは大變英語が御上手ですが餘程おちいさい時分から御習ひなすつたんでせう」抔と持上げられた事もある人豈自ら知らざらんや冗談言つちやいけないと申度なるこちらへ來て御世辭を眞に受けて居ると大變な事になる男は左程でもないが女なんかはよく"wonderful"などゝ愚にもつかない御世辭をいふ下手な方に"wonderful"ですかと皮肉をいふこともある〔中略〕今や濃霧窓に迫つて書齋書暗く時計一時を報ぜんとして撫腹食を欲する事頻なり此美しき數句を千金の掉尾として筆を擱く

〔「ほとゝぎす」第五卷第五號より轉載〕

三

明治三十五年二月二日　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ

拜啓愈新年と相成寒氣烈敷候處先々御無事の由大慶に存候クリスマス贈品として注文致し候品押繪二牧[額]ハンケチ一牧は去る一月六日到着受取申候時節遲れたれどやらぬよりよしと思ひ御婆さんにつかはし申候

御面倒の段御禮申上候越えて一月二十日に其元の手紙到着是亦披見致候皆々壯健のよし珍重に存候川住樣御逝去のよし御くやみ申上候

其許の手紙にはそれやこれやにて音信を忘たり云々とあれど「それやこれや」とは何の言譯やら頓と合點不參候其許はとまり掛にでも川住へ看病にでも被參候や又川住殿死後手傳の爲毎日同家へ止宿被致居候や去らずば二週間に一返の端書位かけぬひまは有之間敷と存候冬着の仕度とて朝から寐るまでかゝる譯には有之まじと存候元來留守中朝は何時頃起きて夜は何時頃寐らるゝや去年つかはし候二週間に一返位端書にて安否を通信せよと申つかはしたる書狀（端書）を讀みたるにや讀まぬにや此方より右の端書を出したるは去年九月二十二日なれば十月末にはつきし筈なり而して其許の最近の手紙は十二月十三日日附なれば此方の手紙到着の日より凡そ一月半ばかり捨置たるなり又其以前とても二月許り音信なければつまり前後を通じて四月許此方へ一片の音信もせざるなりそれで「それやこれや」位な言譯でよしと思ふや又多忙其他にて音信を繁くする事出來ずば何故始めより斷はり置かざるや左すれば此方にても心配なく一年でも二年でも安心して過すべきに、去りとては餘り愚かなる事なりよく考へよく思ふて口をきくべし又事をなすべし以來ちと氣をつけるがよろしい

二月二日

金之助

鏡どの

一三

明治三十五年二月十六日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より小石川區林町六十四番地菅虎雄氏へ

〔はがき〕

其後は御無沙汰をして濟みません不相變頑健には候へども近頃の寒氣には閉口水道の鐵管が氷つて破裂し瓦斯がつけられぬ始末厄介に候氷すべりを始めて見て經驗を增した位の事に候漸々留學期もせまり學問も根つからはかどらず頗る不景氣なり歸つて教師なんかするのは厭でたまらない況んや熊本迄歸るに於てをや夫を考へると英國に生涯居る方が氣樂でよろしい近頃は文學書抔は讀まない心理學の本やら進化論の本やらやたらに讀む何か著書をやらうと思ふが僕の事だから御流れになるかも知れません先は御挨拶迄匆々

二月十六日　　　金之助

菅　様

一一三

明治三十五年二月十七日　午後五時　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より愛媛縣温泉郡今出町
村上半太郎氏へ　〔はがき〕

新年の賀狀拜見此方よりは御無沙汰をしてまことに申譯なく候當地寒氣烈敷頗る難澁に候

花賣に寒し眞珠の耳飾

なつかしの紙衣もあらず行李の底

三階に獨り寐に行く寒かな

二月十六日

露　月　様　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金　之　助

一一四

明治三十五年三月十日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ

年始狀筆の日記倫君の日記いづれも披見致候右は去る二月二十日に着致候皆々元氣にて結構に存候此方も丈夫にて暮し居候間御安神ある可く候

先日中一週間程寒氣烈敷水道鐵管が破裂し瓦斯もつけられぬ始末に困じ果候が昨今は非常の暖氣にて木の芽春の草花などぼつ〳〵見當る樣に相成候世界廣しと雖倫敦位氣候の劇變する處は無之と存候霧は有名なるものにて之を角切りにして罐詰にして日本へ持歸度位に候當地にて始めて氷すべりなるものを見物致候甚だ面白相なるが險呑故未だ試みず

倫さんの日記も筆の日記も面白かつ〔た〕からひまがあつたら又御つかはし可被成候倫さんは近頃大改良大奮發のよし至極結構に存候家の中に出入りしてへー〳〵ピョコ〳〵して居る者杯を相手にして居てはいけないそれから古人の書を讀むと無暗に古人の言行が眞似たくなる自分で小說的な人間になつて仕舞ふ若い内はこんな弊がよくあるからよく考へて表面上の役者的人物にならない樣にしなければいけない良賈は深藏あるなきが如しと言ふから無暗に人を凌いだり出過ぎたりしてはいけない學問は智識を增す丈の道具ではない性を矯めて眞の大丈夫になるのが大主眼である眞の大丈夫とは自分の事ばかり考へないで人の爲世の爲めに働くといふ大な志のある人をいふ然し志許あつても何が人の爲になるか日本の現在ではどん

な事が急務か夫々熟考して深思せねば容易にわからない是が智識の必要なる點である大丈夫の人格を備へて又智識より得たる大活眼を有する底の男にならなければ人に向つて威張れないよく／＼細心に今から其方向へ進行あらん事を希望します今の内の一擧一動は皆將來實となつて出てくる決してゆるかせにしてはいかぬ人間大體の價値は十八九二十位の間にきまる愼み給へ勵み給へ

其許もよく氣をつけて二女を養育あるべく候留學期も漸々縮少十一月位に出發歸國のつもり何れ來年始頃には歸着の事と存候

三月十日　　　　金之助

鏡どの

一一五

明治三十五年三月十五日　午後五時　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸丙五十八號中根重一氏へ

拜復二月十二日御差出の御書狀昨三月十四（日）着拜見致候いつも御壯健御暮しの段奉恭賀候鏡及二女生活の模樣につき委細御報知被下御手數拜謝致候皆々無事のよしにて安堵致候鏡よりは其後二回程通信有之但し十一月出の書面は到着不致右は物品の誤には無之候や

御辭職後多少御困難の御模樣も承はり痛心致候政海目下の有樣にては官吏程不安全のものは有之間敷且銳意計畫の事業も緒に就かざる內に後任者の爲に打壞され候事と存候かくの如くならば只變化のみにて進化は覺束なき事と存候

日英同盟以後歐洲諸新聞の之に對する評論一時は引きもきらざる有樣に候ひしが昨今は漸く下火と相成候處當地在留の日本人共申合せ林公使斡旋の勞を謝する爲め物品贈與の計畫有之小生も五圓程寄附致候きりつめたる留學費中より如斯臨時費の支出を命ぜられ甚だ困却致候新聞電報欄にて承知致候が此同盟事件の後本國にては非常に騷ぎ居候よし斯の如き事に騷ぎ候は恰も貧人が富家と緣組を取結びたる嬉しさの餘り鐘太鼓を叩きて村中かけ廻る樣なものにも候はん固より今日國際上の事は道義よりも利益を主に致し居候へば前者の發達せる個人の例を以て日英間の事を喩へんは妥當ならざるやの觀も有之べくと存候へども此位の事に滿足致し候樣にては甚だ心元なく被存候が如何の思召にや

國運の進歩の財源にあるは申迄も無之候へば御申越の如く財政整理と外國貿易とは目下の急務と存候同時に國運の進歩は此財源を如何に使用するかに歸着致候只己のみを考ふる數多の人間に萬金を與へ候とも只財産の不平均より國歩の艱難を生ずる處あるのみと致候歐洲今日文明の失敗は明かに貧富の懸隔甚しきに基因致候此不平均は幾多有爲の人材を年々餓死せしめ凍死せしめ若くは無教育に終らしめ却つて平凡なる金持をして愚なる主張を實行せしめる傾なくやと存候幸ひにして平凡なるものも今日の教育を受くれば一應の分別生じ且耶蘇教の隨性と佛國革命の殷鑑遠からざるより是等庸凡なる金持共も利己一遍に流れず他の爲め人の爲に盡力致候形跡有之候は今日失敗の社會の壽命を幾分か長くする事と存候日本にて之と同樣の境遇に向ひ候はゞ(現に向ひつゝあると存候)かの土方人足の智識文字の發達する未來に於ては由々しき大事と存候　カールマークスの所論の如きは單に純粹の理窟としても缺點有之べくとは存候へども今日の世界に此說の出づるは當然の事と存候小生は固より政治經濟の事に暗く候へども一寸氣焰が吐き度なり候間斯樣な事を申上候「夏目が知りもせぬに」抔と御笑被下間敷候

著述の御目的にて材料御蒐集のよし結構に存候私も當地着後(去年八九月頃より)より一著述を思ひ立

ち日下日夜讀書とノートをとると自己の考を少し宛かくのとを商賈に致候同じ書を著はすなら西洋人の糟粕では詰らない人に見せても一通はづかしからぬ者をと存じ勵精致居候然し問題が如何にも大問題故わるくすると流れるかと存候よし首尾よく出來上り候とも二年や三年ではとても成就仕る間敷かと存候出來上らぬ今日わが著書抔事々敷吹聽致候は生れぬ赤子に名前をつけて騷ぐ樣なものに候へども序故一應申上候先づ小生の考にては「世界を如何に觀るべきやと云ふ論より始め夫より人生を如何に解釋すべきやの問題に移り夫より人生の意義目的及び其活力の變化を論じ次に開化の如何なる者なるやを論じ開化を構造する諸原素を解剖し其聯合して發展する方向よりして文藝の開化に及す影響及其何物なるかを論ず」る積りに候斯樣な大き〔な〕事故哲學にも歷史にも政治にも心理にも生物學にも進化論にも關係致候故自分ながら其大膽なるにあきれ候事も有之候へども思ひ立候事故行く處迄行く積に候斯樣な決心を致候と但欲しきは時と金に御座候日本へ歸りて語學教師抔に追つかはれ候ては思索の暇も讀書のひまも無之かと心配致候時時は金を十萬圓拾つて圖書館を立て其中で著書をする夢を見る抔愚にもつかぬ事に御座候此手紙差上候後は又當分御無沙汰致すやも計り兼候間右樣御了知被下度候　敬具

三月十五日

金之助拜

中根父上樣

一一六

明治三十五年三月十八日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方 夏目鏡へ

二月十四日出の書狀今三月十八日到着披見致候寫眞も同時に到着致候

御前の顔は非常に太つて驚ろいた恒の目玉の大いにも驚いた筆の顔の變つたのにも驚いた自分の顔も大分變つたらうと思ふ然し自分にはわからない

此方よりも書面を出さないと云ふ苦狀(原)だが己は今迄返事を出さなかつた事はない又急がしいから度々はかけぬと先最初から斷つてある斷つて無沙汰をするのと無斷で無沙汰をするのとは大變違ふ

心配になるから度々端書で音信をせよと云ふのと疑るのと一所にされてはたまらないよく落付て手紙を見るがよい女の腦髓は事理がわからない樣に出來て居るなら仕樣がない

おれの事を世間で色々に言ふつてどんな事を言つて居るのか、おれも御前の信用してくれる程の君子で、もないから何をして居るか實は分らんのさ世間の奴が何かいふなら言はせて置くがよろしい

先達櫻井さんから又熊本へ歸つて貰ひ度が一己の御都合はどうだと云つてきたから實の所を白狀すると歸り度ないといつてやつた此さきどうなるか分らないが先々遠くへ行くと思つて覺悟して居ないといけない

近頃は著述を仕樣と思つて大に奮發して居る己の著書だからどうせ賣れる樣なものではない又出來上るとも保證出來ん先々ゆつくりかまへてやる著書なんかやらうと思ふと金が欲しくなる教師なんかはいやになる

山川は妻帶をするつて候補者を詮議中ださうだが至極よからうあいつも今年三十六でおれと同じ歳だから少しは世帶じみて見るがよからう

英國で衣服をつくらなくてはならないから百圓ばかり金をかりた歸國旅行費の中で返濟する積りだそれから中根のおとつさんから借りた六十圓も其内から返す積り今から中々計畫がむづかしい

筆は中々方々へ出掛てあるく樣だがわるい友達抔と遊してはいけない
鈴木の小兒の病氣は少しも知らなかつたそれでもよくなつて結構だ
倫敦では日本人が大分居るが少しも交際をしない會抔へも出た事がない土井とも近頃は滅多に遇はない
たつた一人で氣樂でよろしい世間の人間共がおれの事を何とかいひ度ても己が何をして居るか知つてる者はない　彼等はどこから材料を得てそんな事をいふか聞て御覽

三月十八日　　　　　　　　　　　　金　之　助

鏡　ど　の

皆さんへよろしく
手紙は封臘(原)で封じてよこさるべし

一一七

明治三十五年四月十三日　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方
夏目鏡へ

二月二十八日附の手紙本月上旬着披見致候其許も二女も丈夫にて何よりの事と存候此方も無事勉學御安神あるべく候當地も漸々あたゝかに相成候へども未だストーブに火を焚き居候木の芽はちら〳〵見受候
勉強するには今日の如き境遇まことに安氣にてよろしけれど其他の點に於ては矢張日本の方すみよき心地爲致候いづれ今年十二月頃には歸朝致す事と存候

筆の日記は面白く存候度々御つかはし可被成候
鈴木の二女病氣のよし氣の毒に存候然し最早本復のよし結構に存候
色々かき度事あれど何をかいてよきやら分らぬ故今度は是丈にてやめに致候

四月十三日　　　　金之助

鏡どの

一一八

明治三十五年四月十七日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方
夏目鏡へ

三月十一日附の手紙今十七日落手披見致候留守中色々多忙にて困難のよし委細の樣子相分り候甚だ氣の毒の事ながら今少し辛防可被成候いづれ今年末には歸朝のつもり故其後は何とか方法も立ち少しは樂になるべくと存候然しおれの事だから到底金持になつて有福にはくらせないと覺悟はして居て貰はねばならぬとにかく熊本へは歸り度ないが義理もある事故我儘な運動も出來ず只成行にまかせるより仕方がないと思ひ居るなり實は少し著書の目的をたて只今は日夜其方へむけ勉强致居候日本へ歸へれば斯樣にのんきに讀書も思考も出來んそれ丈は洋行の御蔭と思ふ其他に別段洋行の利益もない

小兒兩人共無事にて成育何よりの事と存候よく氣をつけ御そだて可被成候俣野湯淺土屋抔時々參る樣子貧乏しても貧乏なりによく御遇あるべく候彼等は余の不在にも關らず訪問致しくれ候は甚だ感心の事に候、今年になり此方の手紙一本もとゞかぬとは心得ぬ事に候今日迄に三四通出し候近頃日記をかゝぬ故いつ頃

か記憶せねど第一通は三月頃には到着すべき筈と存候是にはクリスマスの送物の禮と疎信の小言とをかきたり其次は倫君に關する事を多くかきたり其次ぎはほんの返事に一通かきたり其次が此手紙なり

日本の留學生にて茨木、岡倉といふ二氏來る二十三日頃當地へ到着の筈なり歸るものくるもの世は樣々に候かくすつたのもんだのと騷いで世涯暮すものに候これが濟めば筆の所謂いゝ樣に成る義に候譯もへちま何も無之只面白からぬ中に時々面白き事のある世界と思ひ居らるべし面白き中に面白からぬ事のある浮世と思ふが故にくる歟なり生涯に愉快な事は沙の中にまじる金の如く僅かしかなきなり

當地には櫻といふものなく春になつても物足らぬ心地に候且つ大抵は無風流なる事物と人間のみにて雅と申す趣も無之文明がかくの如きものならば野蠻の方が却つて面白く候鐵道の音汽車、烟馬車の囂騰情抔ある人は一日も倫敦には住みがたかるべきかと思はれ候日本に歸りての第一の樂みは蕎麥を食ひ日本米を食ひ日本服をきて日のあたる椽側に寐ころんで庭でも見る是が願に候夫から野原へ出て蝶々やげんげを見るのが樂に候

御梅さんもだんだん成人したから御嫁に行くのだらうまだ口はないか隼や恒が大きくなつたらどうして嫁にやらう抔と考へるといやになつて仕舞ふ四五日前中根之公が近頃は四千圓位なくては嫁にやれないといつた四千圓は借置き百圓も覺束ない厄介極まつた譯ぢやないか

倫さんは近頃勉強して居るか、鈴木はまだ東京に居ると見える中々氣樂な話しだ、近頃は遠くへ出掛る癖がついた是から土井の處へでも行て見樣と思ふ

四月十七日

金之助

鏡どの

一一九

明治三十五年四月中旬 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より在倫敦渡邊傳右衛門氏へ

御端書拜見御轉居の由拜承毎々英語の教授をつけられ候よし定めて御上達の事と存候小生不相變蟄居愚かなる事のみ考居候ちと御散歩の節太良兄と御立寄可被下候近頃の天氣風はげしく物騷に候日本の櫻といふもの無之物たらぬ樣被感候はいかゞ

句あるべくも花なき國に客となり

叱正

金之助

春溪兄

梧下

一二〇

明治三十五年五月十四日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ

四月四日出の書面は去る九日到着披見致候又宿の婆さんへの贈物は今十四日朝到着直ちにつかはし候何だかガラスの箱へ入れて應接間へかざり立てゝ居る樣子西洋人は小供らしきものなり婆さんより其許へ宜敷禮をいふてくれとの事なり

手紙の趣によれば夜は十二時過朝は九時十時頃迄も寐るよし夜はともかくも朝は少々早く起きる樣に注

意あり度し日本の諺にも早[原]寐宵張はあしきものとしてある位其邊は心得あるべし九時か十時迄寐る女は妾か、娼妓か、下等社會の女ばかりと思ふ苟も相應の家に生れて相應の教育あるものは斯様のふしだらなものは澤山見當らぬ様に考へらるまづ矢來町三番を門並しらべて見よ左様の妻君其許を除くの外例あるまじ、此事は洋行前にも常に申したる様に思へど其許は左程感ぜぬ様なりし夏目の奥さんは朝九時十時迄寐るとあつては少々外聞わるき心地せらるゝ其許は如何考へらるゝやもし病氣は特別の事なれど先達の手紙によれば非常に丈夫になりし由なれば身體に異狀なき限はつとめて早く起きる様心掛らるべし且小兒の教育上にもよろしからざる結果ありと思ふ筆などが成人して嫁に行つて矢張九時十時迄寐るとあつては余は未來の婿に對して甚だ申譯なき心地せらる其許の御兩親はそれを何とも思はれざるかも知らねど余は大に何とも思ふなり力めて己れの弊を除くは人間第一の義務なり且早起は健康上に必要なりことに眼あしき時抔は早く寐て早く起るが專一なるべし

五月に入りて若葉の時節なるにも關せず頗る冷氣にてストーヴを焚く始末いやな所なり春になつても櫻はさかず物足らぬ心地なり

宿の下女は病身なる由もし傳染病（肺病等）の嫌疑あらば速かに解雇あるべし抱かれたり又は食物抔を口うつしにしたり甚だ危險あるべし但し此邊は其許にも考あるべければ改めて申す必要もある間敷と思へど注意の爲申遣はすなり

恒の寫眞もとゞけるとありたれど寫眞は到着せず

熊本のファーデルは時々手紙をよこし候

皆々へよろしく

五月十四日

鏡どの　金之助

一二三

明治三十五年七月二日 c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方

夏目鏡へ

書狀一通寫眞一束端書一牧[原]外に倫氏梅子端書各一葉落手披見致候其許持病起り相のよしよく寐てよく食つてよく運動して小兒と遊べばすぐ癒る事と存候

此方は不相變無事御安心可有之候只今巴理より淺井忠と申す人歸朝の序拙寓へ止宿是は畫の先生にて色色畫の話拆承り居候又一所に參り候芳賀矢一氏も淺井氏と同船にて來る四日出發歸途に上る筈に候

皆々が歸ると自分も歸り度なり候然し日本にてかくの如くのんきにひまがあつて勉强が出來たら少しは人に見せられる著書も出來相なれど歸れば中々追使はるゝ故左樣勝手には不參しかたなきものに候

二女とも丈夫の事と存候筆はインフルに罹り候よし然しすぐ癒り候由にて安心、倫君は高等學校の試驗準備中のよし勉强專一に候御梅さんは華族學校へ通ふよし英語なんかなまなか出來ぬ方がよろしい日本の婦人が西洋的になつては大變ぢやこちらの男は婦人に對して皆召使の如きものである御嫁に行く心配なんか御無用とあるがまだ御嫁に行き度はありませんか

七月二日　金之助

鏡どの

一二二

明治三十五年九月十二日　午後四時三十五分　c/o Miss Leale, 81 The Chase, Clapham Common, London, S. W. より牛込區矢來町三番地中ノ丸中根氏方夏目鏡へ

八月六日發の書狀今九月十一日到着披見致候其元の病氣の快よく兩女とも壯健の由にて安堵致候筆は大分成人致候由恒も少々は口を開候由丹精して御養育賴み入候御見やげも此分にては覺束なく候
近頃は神經衰弱にて氣分勝れず甚だ困り居候然し大したる事は無之候へば御安神可被下候
父上も母上も倫君も梅子さんも其他皆々丈夫の事と存候
御地は秋暑の候にて嘸かし凌ぎがたき事と存候當地は存外凉しく今日も細雨蕭々たる有樣に候
近來何となく氣分鬱陶敷書見も碌々出來ず心外に候生を天地の間に享けて此一生をなす事もなく送り候樣の脳になりはせぬかと自ら疑懼致居候然しわが事は案じるに及ばず御身及び二女を大切に御加養可被成候
倫君の手狀も拜見致候一意御勉强の程偏に希望致候
新聞は九月一ぱいにてよろしく候

九月十二日　　金之助

鏡どの

一二三

啓子規病狀は毎度御恵送のほとゝぎすにて承知致候處終焉の模樣逐一御報被下奉謝候小生出發の當時より生きて面會致す事は到底叶ひ申間敷と存候是は雙方とも同じ樣な心持にて別れ候事故今更驚きは不致只只氣の毒と申より外なく候但しかゝる病苦になやみ候よりも早く往生致す方或は本人の幸福かと存候倫敦通信の儀は子規存生中慰藉かた〴〵かき送り候筆のすさび取るに足らぬ冗言と御覽被下度其後も何かかき送り度とは存候ひしかど御存じの通りの無精ものにて其上時間がないとか勉強をせねばならぬ抔と生意氣な事ばかり申しつい〳〵御無沙汰をして居る中に故人は白玉樓中の人と化し去り候樣の次第誠に大兄等に對しても申し譯なく亡友に對しても慚愧の至に候

　同人生前の事につき何か書けとの仰せ承知は致し候へども何をかきてよきや一向わからず漠然として取り纒めつかぬに閉口致候

　偖小生來五日愈々倫敦發にて歸國の途に上り候へば着の上久々にて拜顏種々御物語可仕萬事は其節まで御預りと願ひ度此手紙は米國を經て小生よりも四五日さきに到着致す事と存候子規追悼の句何かと案じ煩ひ候へどもかく筒袖姿にてビステキのみ食ひ居候者には容易に俳想なるもの出現仕らず昨夜ストーヴの傍にて左の駄句を得申候得たると申すよりは寧ろ無理やりに得さしめたる次第に候へば只申譯の爲め御笑草として御覽に入候近頃の如く半ば西洋人にて半日本人にては甚だ妙ちきりんなものに候

　文章抔かき候ても日本語でかけば西洋語が無茶苦茶に出て參候又西洋語にて認め候へばくるしくなりて日本語にし度なり何とも始末におへぬ代物と相成候日本に歸り候へば隨分の高襟黨に有之べく胸に花を插して自轉車へ乘りて御目にかける位は何でもなく候

倫敦にて子規の訃を聞きて

筒袖や秋の柩にしたがはず
手向くべき線香もなくて暮の秋
霧黄なる市に動くや影法師
きり〲すの昔を忍び歸るべし
招かざる薄に歸り來る人ぞ

皆無雜句をなさず　叱正

（「ほとゝぎす」第六卷第六號より轉載）

一二四

明治三十六年二月五日　午後五時（分不明）　牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

啓

滯英中は色々御交情を辱ふし鳴謝此事に御座候其後留學期限も滿期と相成去冬倫敦發船中にて越年去月二十三日漸く歸京仕候早速御報可申上筈の處彼是多忙荏苒今日に至り候段御海恕可被下候いづれ其内拜眉の上ゆる〲御話し可申上候　以上

二月五日

夏目金之助

渡邊樣

榻下

一二五

明治三十六年二月九日 午後八時三十分 牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓一昨日は唐突參堂御多忙の折から嘸かし御迷惑と存候御蔭にて横濱見物を致し面白く一日を消し申候小生只今家屋捜索中身分も未だ定まらず日々くらげ的生活を營み居候何れ近日東京へ御出向の節は是非御來訪被下度待上候田中君へも御禮狀可差上筈の處是にて御免蒙り候間大兄よりよろしく御傳聲願上候
匆々不悉

二月九日 金

渡邊樣 研北

一二六

明治三十六年二月二十三日 午後三時二十分 牛込區矢來町三番地中ノ丸丙六十號中根氏方より小石川區林町六十四番地菅虎雄氏へ

頃日來毎々まかり出いつも御邪魔致失敬御免可被下候昨日は又時分時にまかり出御馳走に相成難有御禮申上候偖先般來御配慮にあつかり候住宅一件先方より來る二十五日に引拂ふ旨申越候につき當方にては翌二十六日に引移り度と存候番地は北山伏町三十一番地に候御閑の節は御光來待上候 以上

二月二十二日 金之助

虎　雄　様
　　　座　右

一三七

明治三十六年三月六日　午前十一時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より越後國古志郡六日市村大字[illegible]氏へ

拜復
御手紙拜見致候短冊染筆の儀承知仕候小生歸朝以來俗事多忙俳句と申すものは殆んど忘却の有樣從つて近作と申すもの一句も無之實は御謝絶申上げんかと存候へども切角の御依頼故舊句相認め御笑草に御目にかけ申候先は右御返事まで　草々頓首

二月六日　　夏目金之助

湖　貝　様

一三八

明治三十六年三月九日　午後一時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本第五高等學校奥太一郎氏へ

其後は頓と御無音に打過候御壯勝御精勤の事と存候降つて小生歸朝以後萬事茫漠日々空しく消光致居候然し身體も別段の事なく頑健に罷在候間乍憚御休神可被下候歸朝後身邊の事に關しては矢張熊本向へ下向の筈の處色々事情有之當地にとゞまる事と相成候に就ては當分乍遺憾不得拜顏目下英語部の狀況如何に御座〔候〕や小生東京へとゞまる事と相成候に就ては御校に少からぬ御迷惑相懸候事と心痛致居候事情不得

已義に候へども一半は小生不注意より生じ候事と深く慚悔罷在候遠山君其他へも御詫狀可差出筈なれど大兒よりよろしく御傳へ被下度候スキート氏近況如何に候や倫敦にて分袂以後未だ一回の音信も無之候へども仲々好評のよし承はり安堵致居候不相變熱心授業の事と存候ファーデル氏六月以後解傭の由氣の毒に存候櫻井氏にも折角周旋の勞をとられ居候事と推察致候へどもさし當り思はしき口も御座なき由大兒は依然寄宿の方へ御關係に候や矢張り御多忙の事と存候先は右歸朝後御無沙汰御見舞旁近況御報知まで　草々不一

三月八日

夏目金之助

奥太一郎様

座下

一二九

明治三十六年三月九日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區林町六十四番地菅虎雄氏へ

今朝は寢込へ御來駕褥中にて大失敬申上候偖小生熊本の方愈辭職と事きまり候に就ては醫師の珍[原]斷書入用との事に有之候へども知人中に醫者の知己無之大兒より吳秀三君に小生が神經衰弱なる旨の珍斷書を書て吳る樣依賴して被下間鋪候や小生は一度倫敦にて面會致候事あれど君程懇意ならず鳥渡ぢかにたのみにくし何分よろしく願上候　以上

三月九日

金之助

虎雄様

一三〇

明治三十六年三月十七日　午後[illegible]時（分不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町二丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓先日以後御無沙汰に打過候其後轉宅の爲色々多忙御招の梅見も夫なりに相成候偖小生先日漸く表面の處へ寄寓しばらく尻を落付る事に相成候間一寸御報申上候先日參堂の節御座敷にて拜見致候蘭數株御惠送被下候へば幸甚と存候貧居にて床間に何の裝飾も無之ふと先日の御話しを思出し此段願上候尤も澤山無之候へば無理に頂戴仕らずともよろしく餘つてゐたら頂き度と存候田中君へもよろ敷御傳被下度候先は右用事のみ　草々不一

三月十六日　　夏目金之助

渡邊様
座下

一三一

明治三十六年三月十九日　午前十一時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

芳墨拜見仕候芝居見物御誘ひ被下難有奉謝候小生歸朝以來兎角不精にて芝居抔も見るも一向のり氣に相成る間敷かと存候尤も折角ノ御誘引故或は出馬致すやも計りがたく候へど元來何時頃どこへ參るにや又月末にて懐中甚だ不如意ならんと思はる全體いくら位かゝるのですか一寸御しらせ下さい若の手紙と行違に

小生の手紙は横濱へ參り候事と存候圖の儀出來得るなら頂戴仕度候御出京の節は御立寄待上候　以上

三月十八日

金

渡邊樣

座下

一三二

明治三十六年三月二十二日　午後一時四十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より橫濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

御手紙拜見今日ことによると御出の由御待申上候二十九日芝居見物の儀は月末にて少々多忙ことに小生近來芝居抔申すのんきな量見にならず乍殘念御斷り申上候いづれ其內落付候へば御供致し度と存候先は御返事迄　草々不一

二十二日

金

渡邊樣

一三三

明治三十六年三月二十三日　午後一時四十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より橫濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

華墨拜誦仕候小生在宅の時日はほとんど不定なれど先不精ものといふ前提より論理的に結論を下す時は大抵うちに寐て居ると云ふ命題を得ることかと存候此頃は一定の職業なき爲每日々々瓢箪[原]の化物然と消光

致居候只御光來の節は一寸端書を御つかはし被下候へば御待ち可申上候拙寓僻部にて何の風情も無之加之貧居御馳走も致しがたく候先づ一日田舍へ遠足する積で御出かけなさい　以上

二十三日　　　　金

太良様

侍様下

一三四

明治三十六年四月十三日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本市第五高等學校奥太一郎氏へ

貴書拜見仕候春暖の候愈御清穆御精勤奉賀候小生歸朝後碌々消光今に何事も成さず慚汗の至に候御地英語部内の状況逐〔原〕々御報知被下先々無事に進行致居候模樣安心致候殊にスヰート氏非常の熱心にて職務に盡力被致居候由甚だ滿足の至に不堪實は同氏傭入の當時より小生は別段の知己に無之候へば幾分かの危險を冒して周旋致候次第はからずもかゝる熱心家を得て學校は勿論他の諸教員迄其利益を享候段意外の仕合に候小生は其時より一回の書信も不仕御面會の節はよろしく小生より感謝の意を御傳被下度候猶英語部内の件其他とも遠山君と共に御盡力被下度小生如きもの參り候とても別段學校の爲にも相成間敷かと存候小生は是より餘暇を得て多少研學の便宜を得度と希望致居候へども人事不如意の世の中なれば如何になり行くや自身にも見當相つき兼候遠方にて容易に御目にかゝる事も出來ず御話も承はり兼候殘念に存候其内何等かの時機に御上京にも相成候へば久々にて謦咳に接し度と待居候御承知の菊池謙氏上京明日同氏の爲に會

[illegible]　匆々頓首

奥　様　　　　　　　金之助

一三五

明治三十六年五月九日　午後七時三十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡得前村井上藤太郎氏へ

拜啓貴俳並びに白眉會集御送被下難有奉謝候

小生は目下大多忙にて近來俳句とは全く絶緣の有樣に候へば評選等の儀は到底御依賴に應じがたく候いづれ近日虛子碧梧桐兩君の内にでも依賴致し見るべくと存候

先は右御返事迄　匆々頓首

十[原]日　　　　夏目金之助

井上藤太郎様

一三六

明治三十六年五月二十一日　午後七時三十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より久留米市築島町小畑氏方菅虎雄氏へ

御書拜見仕候愈御出發の期にせまり嘸かし御多忙の事と存候小生は存外閑暇にて學校へ出て駄辯を弄し居候大學の講義わからぬ由にて大分不評判　俳人時々來訪又々邪道へ引き入られさうなり藤代先日より病氣本日承り候へば肺炎の由しかし最早全快の事と存候第一高は遙かにのんきに候熊本より責任なく愉快に候大學の方は此學期に試驗をして見て其模樣次第にて考案を立て考案次第にては小生は辭任を申出る覺悟

に候もし左樣なれば小生の目的通の研究をなす積に候大塚の三女病氣にて死去夫が爲同人よりの借錢返却の爲め貧乏なる山川を煩し候山川は不[illegible]特に候先日一寸訪問自轉車の稽古をして戻り申候近頃書痙病再發何にもせず寢て居り候不平でも病氣でもなく只寐たいから寐る次第甚だ意味なき寐方に候戻野の父死去の由氣の毒の至に存候同人今回も亦落第の事と存候支那へも一寸參り度候然し教へるものがないから困却致候日本語を二時間許教て三百元くれるわけにに參りませんか先ハ御返事迄　匆々不一

二十一日　　金

虎雄樣

座下

一三七

明治三十六年六月八日　午前十一時二十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣玉名郡小天村井上藤太郎氏へ

拜啓白扇會報第九號わざ／＼御送被下難有存候右會報は活版ならぬ處大に雅味あるやに虛子とも申合候內容も面白く拜見仕候

近頃地方俳句會の吟什見るべきもの多く却つて本場の東京を凌ぐ佳句もまゝ見受候樣に存候ほとゝぎす抔にても地方俳句會の句の中には大にふるうて居るのがあると先日四方太と話し申候

小生は先日申上候通最早俳界中の人に無之新しき句抔もほとんど作り不申頃日來ほとゝぎす關係の人にせめられて又々邪道に陷りかけて居候其內蕪句相認め御送御笑覽に可供候　以上

六月八日　　夏目金之助

一三八

明治三十六年六月十四日　午後十一時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ

貴翰拜誦無事御着の段奉賀候目下ゴタ〳〵デ休暇のよし珍重存候可成ゴタ〳〵ヲ長クシテ休ム算段ヲスベシ教授ナンカ何デモイ、サ僕ガ教ヘル生徒ニ支那人ノ何トカ云フノガアル僕ハスキナ男ダヨ朝鮮人モ居ル是モスキダ高等學校ハスキダ大學ハやメル積ダ一方案ヲ立テナケレバナラン何ノカンノツテ一學期立ツテ仕舞ツタ僕モ一度神社佛閣ノ樣ナ家ニ住ンデ見度イ學問ナンカスルナ馬鹿氣タモンサネ骨董商ノ方ガイイヨ僕ハ高等學校ヘ行ツテ駄辯ヲ弄レテ月給ヲモラツテ居ル夫デモ中々良教師ダト獨リテ思ツテル大學ノ講義モ大得意ダガワカラナイソウダ、アンナ講義ヲツヾケルノハ生徒ニ氣ノ毒ダ、トイツテ生徒ニ得ノ行ク樣ナヿハ教エルノガイヤダ、試驗ヲシテ見ルニドウシテモ西洋人デナクテハ駄目ダヨ

近來晝寐病再發グー〳〵寐ルヨ博士ニモ教授ニモナリ度ナイ人間ハ食ツテ居レバソレデヨロシイノサ大著述モ時ト金ノ問題ダカラ出來ナケレバ出來ナイデモ構ハナイ天勾踐ヲ空フスルト云フ譯カネ近來南隣ノハツチヤン北隣ノ四郎チやン背後ノ學校ノ生徒諸君日課ヲ定メテ色々ナヿヲやツテ居ルヨ是モ一學期結了ト云フ譯サネ

其外何モカクヿガナイ御留守宅ヘハ其後何ハナイ御變モアルマイヨ大塚ノ三女ガ先達テ病氣テ死ンダ僕ハ見舞ニ鯛ヲヤツテ笑ハレタ

僕ハ切角調ヘカケタヿヲ丸デ忘レテ仕舞ツタ愚ナ話シダ（ノート）ナンカ焚テ仕舞フト思フ

君ノ狀袋ト半切ハ氣ニ入ツタサスガ支那的ダネ
今常公ガ泣イテ居ルヨアイツハ泣テ仕方ガナイ、山川不相變デ困ル僕モ相變ラズデ困ル
右早速御答迄費ハ少々氣取ツテ夏目ハ字ガ上手ニナツタト云ハレタカツタガソンナ山氣モナクナツタカラ天眞爛熳タル處デ御免蒙ル　左樣ナラ

六月十四日　金

虎雄樣

坐下

君ガ居ナクナツテ悪口ヲ闘ハス相手ガ居ナクナツテ甚ダ無聊ヲ感ズルヨ

一三九

明治三十六年六月十七日　午後五時（分不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡湯前村井上藤太郎氏へ

啓白居會投稿用紙わざ〳〵御送被下候につき別紙蕪句數首御笑覧に供し申候近頃俳句杯やりたる事なく候間頗るマヅキものばかりに候右用事迄　匆々頓首

六月十七日　金

微笑樣

愚かければ獨りすゞしくおはします
無人島の天子とならば涼しかろ
短夜や夜討をかくるひまもなく

● 更衣同心衆の十手かな
ひとりきくや夏鶯の僞鳴
蝙蝠や一筋町の旅藝者
蝙蝠に近し小鍛冶が鎚の音
市の灯に美なる莓を見付たり
玻璃盤に露のしたゝる莓かな
能もなき教師とならんあら涼し
蚊帳青く涼しき顔にふきつける
更衣沂に浴すべき願あり
薔薇ちるや天似孫の詩見厭たり

一四〇

明治三十六年七月三日　午後十一時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ

七月一日第二ノ手紙ガ來タ色々ナ珍事ガ書テアツテ面白カツタ車ト酒ト間違ツタリ驢馬デ落チカヽツタリ頗ル支那的ダカラ妙ダ日本ニ面白イ事ハナイヨ京(原)坂合併相撲位ナ者ダ大學モ高等學校モ試驗ハスンダ昨日ハ點數會議デ朝カラ晩迄引張〔ラ〕レル只默ツテ名説ヲ謹聽スル許リダガ中々草臥ルモンダナー明日カラハ入學試驗トクルカラ又厄介ダドーモ人間ハ生キタイ爲ニ生キテ居ツテソーシテ生キタイ爲メニ苦勞スルイクラ骨ガ折レテモ生キテ居ル方ガ善イノト見エル夫ガ高ジルトイクラ骨ガ折レテモ名譽ガトリタクナル學問ガ出來タガル金ガ欲シクナル實に變ナ奴サネ

、君ノ御母サンハ病氣ダツテ君ノ一家ハ郷里へ引上ゲ相ダナ昨日藤代カラ聞タ君又心配ガ一ツ殖タナ家族ハ當分國へ置クガイ、可成金ヲタメテ半世ノ落托ヲ回復スルサ世ノ中デハ貧乏ヲ不名譽ト思ツテ居ルカラ君モコ、デ名譽回復ヲスルサ骨董ノ掘出物ノト云フテ矢張リイカサマ物ヲツカマサレルノダラウ假令然ラズトスルモ貯蓄ヲ癈シテ骨董ニ打込ンデハ所謂名譽回復ガ出來ンヨ

發句ナンカ下火極マルマルヲ作ル氣ニナラン然シ退窟凌ギニ時々ヤル是ハ得意ノ餘ニ出ルノデハナイ一時ノ鬱散ト云フ資格サ時ニ僕近頃ノホト、ギスニ自轉車日記ト云フ名文ヲ已ヲ得ズ草シテ載セタカラ見給ヘ甚ダ上品ナラザル文章ダガ中々ウマイヨ

君教授ノ傍支那語ヲ勉强シ給ヘ君ノ樣ナ無器用ナ者デモ熱心ニヤレバ上達スルダラウソーシテ支那ノ書物ヲ讀メ僕ハ支那文學ハ大スキダガスキダ抔ト云フ程知ツテハ居ラナイヨ

僕大學ヲヤメル積デ學長ノ所へ行ツテ一應卑見ヲ開陳シタガ學長大氣燄ヲ以テ僕ヲ萎縮セシメタソコデ僕唯々諾々トシテ退クマコトニ器量ノワルイ話シヂヤナイカ

狩野も大塚も藤代も相變らん

藤代は君ノ心配スル程ナヿハナイダラウ、大塚モソンナニ落膽シテ居ナイ樣ダゼ尤モ是ハ僕ノ樣ナ不人情ナ人間カラ見ルカラ左樣ニ見エルノカモ知レナイ狩野ハ狩野サ萬古不易ト云フベキ代物ダ然シ熊本時代ヨリモ元氣ガアルラシイ山川ハドウナルカ僕モ近來面會シナイ僕ハナマケル方ニイソガシイ男ダカラ御無沙汰ヲスルノサ大ニ盡力シテやレツテ中々氣ガ進マナイ樣ダカラ一寸ムヅカシイソレニ周旋シ樣ト思フロモナイ實ハ甚ダ氣ノ毒ニ存ジテ居ルガドウモ仕樣ガナイ君ノ方ニ口ガアレバ夫コソ結構ダガ當分夫モ六ヅカシイト云フナラ仕方ガナイ

近頃梅雨ノ天氣鬱陶敷甚ダ困リ入ル平生ノ物草太郎ハ益物草太郎ニナル（樂寢晝寢われは物草太郎なり）

抔とすまして居る内に天罰覿面胃病、腦病、神經衰弱症併發醫者モ匙ヲ投ゲルト云フ始末ハ近キ將來ニ於テノ出來事ト察セラレル

山川ハ近キ將來ニ於テ氣狂ニナルト？ドーダカ分ラナイ普通ノ人ハ大概氣狂ダ自分デ氣狂デナイト自信シテ居ル許リサ何ノ事ハナイ世ノ中ト云フ者ハ氣狂ノ共進會ト云フ樣ナ物サ其中ノ大氣狂ヲ稱シテ英雄トカ豪傑トカ天才トカスベツタトカ轉ンダトカ云フ迄ダラウ御前サンダノ吾輩ノ如キハ小氣狂ダカラ駄目サ鳥渡泥棒ノ樣ナモノデ大泥棒ハ人カラ崇拜セラレ小泥棒ハ牢屋ヘ入ル世ノ中ハ種類ノ差デナクテ單ニ程度ノ差デ反對ノ物ニナツテ仕舞フ黑白ナカト云フノハソレサ」

支那ヘ行カナクツテモ豚ト同化スル位ノ決心ガナケレバ世ノ中ハ渡ツテ行カレヤシナイ幸ニ南京迄出張シタノダカラ可成豚ヲ觀察シテ歸ルトキニハ立派ナ豚ニナツテキ給ヘ御前サンノ樣ナ潔癖家ニハイヽ訓練ダ是カラ禪學ナンドヲやメテ豚學ヲヤルベシダ吾輩ハ唯ゴロ／＼シテ居ル所丈ハ豚ヲ學ビ得テ其骨髓ヲ得テ居ルト自ラ信ジテ居ル其他モ追々稽古ヲシタラ遼東ノ豚位ニハナレルダラウト思フ

明日カラ入學試驗デ朝七時カラツラマル譯サ七時カラツラマルニシテモ試驗ヲスル方ハマダイヽガサレル爲ニツラマルノハタマランネ然シソレモ自分ノ得ノイクコトダカラ誰モスルノサ馬鹿ニシテイラ

君ハ時々菊謙ト議論ヲスル相ダナ兩方共閑情ダカラ面白イダラウ僕君ヲ失ツテ惡口ノ相手ガ居ナクナツテ甚ダ寂寥ノ至ニ堪ヘン僕モ支那ヘ行キタイヨ

今度ハ此位ニシテ置カウ又改メテ現參スル先身體ヲ大事ニ氣樂ニ暮シ給ヘ　匆々頓首

七月一日夜　　金之助

虎雄樣

漱石へヨロシク、アイツ四百元ノ月俸デ大得意ダラウ

一四一

明治三十六年七月三日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本第五高等學校奥太一郎氏へ

漸々暑氣相催し候處愈御清勝奉賀候次に小生不相變碌々消光罷在候間乍憚御休神可被下候目下入學試驗にて隨分多忙毎日朝七時より出校には恐入候御校にても同樣定めて御いそがしき事と遙察候小生は高等學校と大學とかけもちにて兩方とも碌な事は致せもせず致さうともせず勝手好加減主義にてやり居候大兄などの樣な眞面目な人より見れば墮落の極に候御地景況如何に御座候や御序の節御もらし被下度候あまり御無沙汰致候間一寸御左右伺上候　匆々

七月三日　　金

奥　樣

榻下

一四二

明治三十六年九月十四日　午後二時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ〔封筒の表に「菅虎雄大人虎皮」とあり〕

漸々秋冷の候と相成候處愈御清勝奉賀候小生不相變神經衰弱意氣銷沈と申す次第に御座候過日俣野生參り大兄大分得意のよし承り候旅遊山親睦會の事なども傳聞致候小生夏中籠居大塚は一家引きまとめ鎌倉へ參り候狩野は避暑のかはりに學校へ通勤致候先日は結構なる菓子折頂戴難有存候愚妻先日より又歸宅致居

候大なる腹をかゝへて起居自在ならず如何なる美人も孕むといふ事は甚だ美術的ならぬものに候況んや荊妻に於てをやかね學校も漸く始まる講義も例の如く不得要領底にて御免蒙るつもり之君の法帖はまだ拜見致さず實は御留守宅へは御無沙汰をして一向參らん其内行かうと思ふがまづあてにならない天下にあてになるものは金だけだから金をため給へ菊地は矢張元氣であらう是へも無沙汰をして居る君からよろしく賴むよ、何だか「御座候」に始まつて「賴むよ」に了る手紙抔は實に前後一貫せぬ樣だが龍頭蛇尾は僕の大得意の處だから其積で讀み給へ、

其外何にもかく事がないから是でやめる　失敬

九月十四日　　　　金

虎　雄　樣

山川は淨土宗の學校へ行く一週八時間程　（オハリ）

一四三

明治三十六年九月十五日　午後五時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本縣球磨郡渡村井上藤太郎氏へ

拜啓秋氣相催ふし候處愈御淸適奉賀候御刊行の白扇會報毎度御送にあづかり難有存候過日は舊稿御求めに相成候處近頃俳神に見離され候せいか一向作句無之不得已其儘に致し置候不悪御容赦可被下候先は右御禮旁御挨拶迄　匆々不一

九月十五日　　夏目金之助

井上藤太郎様
貴下

一四四

明治三十七年一月三日 午後六時 本郷区駒込千駄木町五十七番地より下谷区谷中清水町五番地橋口貢氏へ 〔自筆水彩画はがき 八重咲の紅水仙背景は屏風らし〕

人の上春を寫すや絵そら言　　漱石

一四五

明治三十七年二月八日 午前十時二十分 本郷区駒込千駄木町五十七番地より小石川区原町十六番地寺田寅彦へ 〔はがき〕

水底の感　　藤村操女子

水の底、水の底。住まば水の底。深き契り、深く沈めて、永く住まん、君と我。
黒髪の、長き亂れ。藻屑もつれて、ゆるく漾ふ。夢ならぬ夢の命か。暗からぬ暗きあたり。
うれし水底。清き吾等に、譏り遠く憂透らず。有耶無耶の心ゆらぎて、愛の影ほの見ゆ。

二月八日

一四六

明治三十七年二月十四日 午前十一時十分 本郷区駒込千駄木町五十七番地より本郷区弓町三十六番地同集舎内野村伝四へ 〔はがき〕

小生の下駄無事に消光罷在候御休神可被下候大兄の足の裏の直覚誤りなき事を保證致候間右主婦へ御申

聞可然と存候

一四七

明治三十七年三月二十七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小松武治氏へ

拝啓先日御持參のリヤ王物語拝見一々原文と對照候爲め存外手間とり候今分にては他の分も相應に時日を要すべきかと存候乍失敬少々添刪を施し申候へば御披見の上御取捨可被下候　以上

三月二十七日　　夏目金之助

小松様

一四八

明治三十七年四月二十一日　午後五時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町酒井男爵邸内野間眞綱へ

拝啓伊豫國西條の中學にて practical English の出來る文學士一名入用のよし至急申込有之月俸は七拾圓なり校長は松平國次郎と云ふ二十六年出の文學士なり御心當なきや否や御返事を待つ　草々

四月二十一日　　金之助

野間兄

御閑なときに御遊に御出可被成候

鳩鳴いて烟の如き春に入る
杳として桃花に入るや水の色

一四九

明治三十七年四月　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小松武治へ

御依頼の冬物語閲了御急ぎの事と存候間召使を以て御送り申候御落掌可被下候
是にて沙翁物語も一先結了一寸一服出來る譯に候　以上

夏目金之助

小松武二〔原〕様

一五〇

明治三十七年五月三十日　午前[illegible]　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]町[illegible]へ

啓上
君病氣のよしにて日比谷中學をやめるとか代理をさがして居るとか聞けり實事にや病氣とは何病なるや少しの事ならば辛防しては如何學校を卒業した許りの者が二十五六時間の授業に堪えぬ抔云ふ樣な事では駄目に候君の年輩より言へば三十時乃至四十時の働きは多きに失せずと思ふ
夫とも他に大功名心でもあつて自分の勉強が必要とあらば特別なり又家族其他に不愉快な事又は心配ありて精力を其方に消耗すとあらば是も格別なり去れど常態にあるものが僅々二十五六時をもて餘すとは情

なき次第ならずや
且島津家の授業は一年限にて御免蒙るを得べし中學の口は今やめればすきな時に手に入ると限らず此點より云ふも辛防肝要なり或は地方行を希望するやも知らねど地方は俗務の爲め二十五六時間の授業よりも困難なるべし
右は入らざる事ながら御忠告迄に申上候何卒御一考ありたし

五月二十九日　　　　金

眞　鍋　様

一五一

明治三十七年六月三日　午後七時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町二十六番地同學舍内野村傳四へ〔はがき〕

只今高等學校にて島田三郎君の演說を聽し歸れり僕も駄辯を弄する事は人に負けぬ積りだが斯程迄に駄辯は振り舞はせない彼の辯は雄辯でも巧辯でも能辯でもない要するに平なる板辯と云ふものなり僕の講義中の駄辯と異なる處なし
太陽にある大塚夫人の戰爭の新體詩を見よ、無學の老卒が一杯機嫌で作れる阿呆陀羅經の如し女のくせによせばいゝのに、それを思ふと僕の從軍行抔はうまいものだ。行春や重たき琵琶の抱心とは蕪村の秀句に候。橋口は又繪葉書をよこした

野村傳四仁兄大人閣下　〔あて名に〕

一五二

明治三十七年六月四日　午後六時四十分　本郷区駒込千駄木町五十七番地より本郷区龍岡町三十六番地同風舎内野村傳四へ　〔自筆ペン書〕

野村傳四先生　〔表の宛名に〕

一五三

明治三十七年六月四日　午後六時四十分　本郷区駒込千駄木町五十七番地より本郷区龍岡町三十六番地同風舎内野村傳四へ　〔自筆ペン書〕

NO 2

野村傳四先生 〔表の宛名に〕

一五四

明治三十七年六月十七日 午後[illegible]時[illegible]十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町三十六番地同學舍内野村傳四へ 「はがき 表の署名に「千駄木の住人某先生」とあり」

昨日散歩の序同學舍の前を通れり没趣味にして且汚穢極まる建物なり傳四先生此内に閉居して試驗の下調をなしつゝあるかと思へば氣の毒の至なり

傳四先生の答案を瞥見せり傳四先生のパラフレースはハラフレースにあらずミスプレースなり

日本の運送船がまたやられた金洲丸事件に鑑みざる日本人はさすがに大國「民」の襟度を具したるものか持ちたくなきものは大國民の襟度なり

昨日ハンケチ一ダースとビスケット一箱をもらふハンケチで汗をふきビスケットをかぢる

轉居せんと思ふがよき家はなきか

一五五

明治三十七年六月十八日 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町三十六番地同學舍内野村傳四へ 「はがき 凡て赤インキにて認めあり、表の署名に「某先生より」とあり」

ビスケットをかぢりて試驗の答案を檢査するにビスケットはずん〱方付くけれども答案の方は一向進まない。物徂徠云ふ炒豆を喫して古人を罵るは天下の快事なりと余云ふビスケットをかぢつて學生を罵る

は天下の不愉快なりと傳兄以て如何となす
　僕は一文なしの癖に近頃しきりに住宅の圖案を考へて居る夫故に書物を讀んで居つても茶座敷や築山が眼に映じて書物がわからない、かゝる先生に答案を閲さるゝ學生は幸かはた不幸か傳兄以て如何となす
　君が英文が下手なのは書物を澤山讀まんからである、小言を申す我輩も決して上手ではないが日進月歩の今日弟子たるものは先生を凌がなくてはいけないから其積りで多少工夫して書物を讀まねばいかんよ傳君以て如何となす
　橋口が又繪端書をくれた靜かな海に雲の峯それに白帆甘いものだ僕の手腕よりも少々上等の様だ傳君以て如何となす
　どこか善い借家はないだらうか休暇の始めに引越してそこで夏中勉強を仕様と思ふ傳君以て如何となす
　さうして君は手傳に來て呉れるだらうね傳君以て如何となす

五六

明治三十七年六月二十二日　午後[illegible]　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]高等學校內野村傳四へ[illegible]インキにて認めあり」

　君が遠慮して來なくとも毎日書齋で待居たよ
　ビスケットは事件頗る進行して最早一個もない
　其代り答案の方は到底事件の如く進行する譯にはいかない、君の答案は存外いゝ此次にはもつとうまくや〔ら〕なくてはいかんよ　小山内や中川の方が餘程よろしい

二十二日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　先　生

御病氣精々御加養可然と存候氣分のよきときは遊びに御出可被成候
先は御禮まで　匆々

二十八日

夏目金之助

川淵樣

一五九

明治三十七年六月二十九日　午前拾時二十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町尾崎男爵家内野間眞綱へ

先日は失敬諸々ぶらつきの上西洋料理の御馳走に相成候處其翌日より下痢を催ふし今に至る迄粥を食ひ居候餘り食ひなれぬものを食ひし爲か將御馳走しつけぬ人が奮發した爲か主治醫には分りかね候
一昨日家をさがし候處偶然川淵正幸の家の前へ出候故訪問致候去年から髮をからず髭を剃らすと申しますことにいやはや二十世紀の俊才に御座候往昔や僕の心經衰弱も漸々斯樣にハイカラに成る事と存候明星の投書家孫の新體詩の主人公となり候へば少々位の病氣は我滿致すべく候先は遲引ながら御禮旁下痢御報迄
匆々頓首

二十八日

金

眞綱樣

一六〇

明治三十七年七月一日　午前六時―十時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より　[illegible]へ

拝啓昨日は遠路御光来の處何の風情も無之失敬此事に御座候其節御申置の貸家件につき御配慮を煩はし難有存候空家二間の絵圖面其他詳細御申越被下御手數の段恐入候實は只今寄寓致居候家の家賃は二十五圓に有之目下の處たまたま多額の屋賃は拂ひかたしと存候もこの家の内部の方は稍低廉とは存候へども是亦二十五圓を超過致候故今回は御断り申上候右御禮旁御返事迄匆々如斯に候　以上

三十日

夏目金之助

彌富様

座下

一六一

明治三十七年七月三日　午後[illegible]　本郷区駒込千駄木町五十七番地より　[illegible]へ

昨日は御光来の處何の風情もなく失敬此事に候其節御話の島津家家庭教師の件只今湯淺生參り候につき一寸申談じ候處大に志望の由につきもし大兄御辭任の際は同人御推擧被下度右御含迄至急申入候

昨夜皆川氏方へ参る筈の處寺田生來訪又々新體詩抔の批評にて遂に遲く相成失敬致候

別紙繪葉がき御注文故差上候中々うまく出來候實物よりはよろしき處御賞翫可被下候　以上

七月三日

金

眞綱様

一六二

明治三十七年七月十六日（？）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より皆川正禧へ

拜啓去る地方より新文學上一名招聘の件小生方まで申來候につきては一寸御面會の上御相談申上度に付御ひま有之候はゞ御光來被下度候實は參堂可仕筈なれど目下顏に腫物生じ鼻まで漆喰を塗りたり候故乍恐縮御足勞を煩し度候　以上　「ラァ」

一六三

明治三十七年七月（？）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ　「日本水彩畫繪はがき」

繪はがきを難有

あの色が非常に氣に入つたが全體あれは何の繪ですか一寸見當がつかない

是は久し振でかいたら無暗にきたなくなつた夜だか晝だか分らないから（春日影）とかいた

一六四

明治三十七年七月十八日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十一番地菅虎雄氏へ

君から貰つた紙へ君から貰つた筆を以て君から授かつた法を實行してかくと斯樣なものが出來る才子は違つたもので一時間許り稽古するとすぐ此位になるうまいものでせうほめてくれないと進歩しない

此詩は僕が洋行する時に作つた傑作で書と共に後世に傳ふるに足るから君に進呈する

君の處へ行くと何か取得がある僕は魏故南陽張府君墓誌を習ふ事約三時間君の傳授は實に窮窟千萬のも

のたゝ事だと悟り得た 以上

十 八 日

虎 雄 兄

金

坐下

生死因緣無了期
色相世界現狂癡
迭迴倚屢塵中滯
迢遞正遲天外之
得失忘懷當是[illegible]
江山滿目悉吾師
前程浩蕩八千里
欲學葛藤文字技

一九五

明治三十七年七月二十日 午前七時―十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區[illegible]町島津男爵家內 菅虎雄へ

倉書拜見島津家の方は今一年繼續の事と相成候よし湯淺の方は多分神宮皇學館の方へまとまる事と存候へば御心配被下間敷候日比谷の方も十時間御受持のよし承知致候可相成は二十五六時間御持ち可被成候浮

世はウン／＼働くものに候皆川君一昨夜來り何か發句をかいてくれと云ふから詩箋に十五葉無茶苦茶にかいてやり候是は近頃習ひたる漢魏六朝の筆法にて凄いものに候一枚十圓宛とすれば何でも百五六十圓の商買に候鼻上の漆喰自然剝落もとの如く玉子の如くうつくしき美男に相成候へば御安神可被下候暑中如何御暮し被成候や一日がゝりにて寐轉びに御出掛可相成候

俣野大觀先生卒業彼云ふ訪問は教師の家に限るかうして寐轉んで話しをして居ても小言を言はれないと僕の家にて寐轉ぶもの曰く俣野大觀曰野村傳四半轉びをやるもの曰く寺田寅彦曰く小林檔庵坐するもの曰く野間眞綱曰く野老山長角

樋口は風流端書をくれる中々うまいもので僕い御手際では到底競爭が出來ん野村が靜岡から端書をよこした曰く濛雨しきりにてマダム　フジの曲線美を賞する事が出來ませんと柄にない圖案と存候

不相變金ほしく金なく凉を欲して凉を得ず

凉しい處で美人の御給仕で甘い物をたべてそして一日遊んで只で歸りたく候　以上

七月二十日

金

眞綱樣

漢魏六朝の筆法も暑氣の爲め少々崩れ申候

無人島の天子とならば凉しかろ

明治三十七年七月二十四日　午後六時三十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中淸水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

西洋人の肖像〕

名畫なる故
三尺以內に近付くべからず

一六七

明治三十七年七月二十五日　午後九時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中淸水町五番地橋口貢氏へ　〔はがき〕

昨日君の所へ繪端書を出した處小童誤つて切手を貼せす定めて御迷惑の事と存候然し御覽の通り名畫故切手位の事は御勘辨ありたし

　十錢で名畫を得たり時鳥

一六八

明治三十七年七月二十七日　午前十一時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國葉山岩倉家別邸小松武治氏へ

拜啓其後起居如何當時岩倉家の別莊に御消光のよし避暑の爲め良策と存候
御說湯淺生件につき種々御配慮を煩はし感佩此事に候實は當人も在京を希望し從來の研究を續け度素志切なりしも鼻の下要求もだしがたく先般文部省澤柳氏の周旋にて伊勢神宮皇學館へ高等官六等年俸八百にて略內定致したるやに承はり居候然る處貴君よりの手紙にて在京の望も萬更にあらさるを知り當人の爲甚だ遺憾の至に不堪因て澤柳及神宮皇學館の方へ不義理を釀さゞる程度內に於て當人今一應熟考の餘地を與へたくと存候就ては岩倉家の方の職務繁簡性質等待遇等今少し委細の所承知致し度と存候につき御多忙中

甚だ御氣の毒と存候得ども右御聞合せの上湯淺方迄直接に御報被下間敷くや當時彼は横濱市伊勢町二丁目官舍内に起居罷り在候只今落手の貴翰は愚兄附記の上同人方へ廻付致置候間左樣御承知置被下度候
臨終本件につき御配慮を煩はしたる岩倉家の人々並びに家扶君へよろしく御禮御傳被下度候　以上

七月二十七日　　　　夏目金之助

小松武治樣

一六九

明治三十七年八月十五日　午前十一時十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき　摸樣化されたる流水に落葉二〕

先日はよかり出御邪魔致候
不忍池畔の散歩に曉を見て御歸りの由そんなものが繪の材料にも文章の材料にもなります、近頃散歩には出るが根つから材料がない
繪葉書はやめにしやうと思つたが又謀叛心を出して此度は自製ならぬ一枚八厘のやつを十枚許買つて來ました其二枚へ少し風替りのものを書いたから送ります素人くさい處が好い所です褒めなくてはいけません

秋立や斷りもなくかやの内
ばつさりと後架の上の一葉かな

漱石

一七〇

明治三十七年八月二十七日　午後二時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自畫水彩畫繪はがき〕

其後繪端書は澤山書くが送るのはやめにして仕舞た君は試驗の準備で急がしい事でせう
先日高濱虛子に逢ふ十月からほとゝぎすの號をかへる其時同紙の上部四分一許の處へ廻り燈籠の樣な影法師の行列を入れたい僕にかいてくれといふから僕は駄目だからといつて君の略畫を見せたら君に進ふ機會があつたら賴んで見て吳れといふ君の略畫に感服したものと見える、一つかいてやりませんか

二十七日

御舍弟の停車場のスケッチを寺田寅彦に見せたらターナーの色彩の樣だと褒めました

一七一

明治三十七年八月二十九日　午[illegible]二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自畫水彩畫繪はがき〕

御返事ありがたく候御舍弟でも無論よろしく候書いてやつて下されば高濱は大に喜ぶべく候

一七二

明治三十七年九月四日　午後[illegible]十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町[illegible]野間眞綱へ　〔はがき〕

トラホームは長い病氣です然し死ぬ事はない藥なんかはあてにならない只急劇に醫して仕舞へばよろし
慢性になると終涯かゝるあぶない

九月四日

阿矢仕醫學博士

一七三

明治三十七年九月二十二日　午後一時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ〔自筆水彩畫繪はがき　朝顏の花を五つ六つ大きく描きあり、其中に洗髮の女團扇を手にして橫向きに立つ〕

試驗が濟んだら樂になりましたらう小生大多忙閉口
奈良の模樣頗る面白く候
是は朝貌の幽靈なり

一七四

明治三十七年九月二十三日　午後六時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町二十六番地同學舍內野村傳四へ

ブリタニカヲ見レバアルダラウ

拜啓僕或人からたのまれてモロッコ國の歷史の概略をしらべる事を受合つたが多忙でそんな事が出來ない君二三時間を潰して圖書館に入り五六ページ書いてくれ給へ御願ひだから古來からの政體等の變遷が一寸分ればよい右至急入るから其積りで御願申す左樣なら

九月二十三日　　夏目金之助

野村傳四君

是非やつてくれなくてはいけない、いやだ抔といふと卒業論文に零點をつける

一七五

明治三十七年九月二十四日　午後六時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

虛子から手紙をよこして橋口君の所へ出て御願するのだが明日から用事で京都へ立つから先日願つた廻り燈籠の畫を僕から今一返願つてくれと言います、僕は橋口君の弟は今奈良へ修學旅行中だから駄目かも知れぬが何しろ今一返話して見樣と返事をしました、ほとゝぎす來月の十日頃出板と記臆して居ます夫に間に合ふ樣にかいてもらへませうか

二十四日

一七六

明治三十七年九月二十九日　午後六時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ　〔はがき〕

先達の君の發句は中々面白いうまいものだと再興してやり給へ虛子に見せたらほめた

秋風のしきりに吹くや古榎

御朱印つきの寺の境内

老僧が卽非の額を仰ぎ見て

柵を食ふ鹿の影の長さよ

二十九日　　　　漱石

一七七

明治三十七年九月三十日　午後（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地[illegible]方寺田寅彦へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

大變な事が出來たといひながら大變な事を話さずに歸るのはひどい

一七八

明治三十七年九月三十日　午後六時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

漁師がふご〔？〕をかつぐ畫は御說の如く面白く候

昨夜深江參り是亦落第のよしに候御仲間に澤山あれば決して落膽すべからず

今日は御令弟の御蔭にて色々說明を承りありがたく候

一七九

明治三十七年十月二日　午後[illegible]時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき　木の葉大小五六枚大きい紅葉を[illegible]々に散らし、前景に[illegible]人の女振向にたつ、女の着物の模様は紅葉散らし〕

昨日はほとゝぎすの插畫御送被下難有存候

早速虛子の所へやり申候御多忙中嘸かし御迷惑の事と存候　あの畫はほとゝぎす流の畫に候明星流に無之面白く存候先日虛子と連句をしたる時丁度あの樣な句を詠みました

此は紅葉の精に候無暗に赤くて大俗極まる所が却つて雅趣ある所に候繪畫の戶迷ひしたる如き畫端書に候　以上

十月二日

一八〇

明治三十七年十月九日　午後三時三十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　（白紙水彩畫繪はがき）

昨日の孔雀は結構に候僕なんかにはこんな思想は出ない
虚子が來て色々繪をもらつたといつて喜んで居りました

一八一

明治三十七年十月十一日　午後五時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ　（白紙水彩畫繪はがき）

君の畫端書は何を寫したものか知らぬがあれは倫敦だ留學中の事を思ひ出す僕はあのあたりをよくぶら付いたものさ
君の連句を高濱に送つてほとゝぎすへ載せる事にした今度のに出るか知らん「諸國一見」の句は甚だ佳と思ふ、昨夜野村がきた柿と林檎を食はせてやつた　何か持つて來給はん事希望致候

「行春や未練を叩く二十棒
　　青道心に冷えし田樂
此頃は京へ頼（たよ）りの狀もなく
　　兀々として愚なれとよ
僧堂と燒印のある下駄穿いて
　　門を出づれば櫻かつ散る」

今に別莊を建るから君を番人にして月給百圓賜給すといふ辭令をあげます　金

一八二

明治三十七年十月十二日　午後七時二十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　「白黒水彩畫繪はがき」

鷄の畫は頗る瀟洒な貢齋の様な風があると思ふ發句の前の句は調が整はぬ後の句は「時雨るゝや庚申塚に鳴く狐」としたらものになります、君中々見込がある少し發句をやり給へそして君の令弟にも是非勸めてくれ給へ、わけはない少しやるとぢき上手になる、畫の趣味のある人が發句をやつて發句的の趣味を西洋畫でかいて貰ひたい、

白馬會に一人位發句をやる人があつてもよからう

一八三

明治三十七年十月十五日　午後三時五十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　「白黒水彩畫繪はがき」

夕風の句面白し笈と須磨との配合も黒人じみたり然し時候がいつだか分らぬ發句に季のものを入れるのは感情を強くせん爲なり「夕風に笈を下すや須磨の秋」とでもすれば判然する宴やんでの句も景色よけれど是も時候がわからぬ故「春寒の細殿もるゝ灯影かな」と位に改正然るべきか

夜嵐の句も同樣の非難あり且是は句調とゝのはず秋風の句は季あれども景色明瞭ならず去りとて情趣も見えず候むしろ考へて理に落ちたる句と思はれ候拙句に日の入や秋風遠く鳴つて來るといふがある是は別段の句にてはなけれども理窟なき故まだよろしく候こゝに理窟と申すは「一うなりして古葉かな」と如何

にも秋風が一度吹くと木の葉がちると云ふ景色をことさらに人に示さんと工夫して不自然に陷入れるをいふ、人を泣かすも笑はすもさあ泣け、さあ笑へといふのは妙ならず泣き度ば笑ひ度ばと拋り出したる泣かせ方笑はせ方が上手のする所に候繪にてもどうです美いでせうと繪が故意に己れを廣告して居るのはキザではありませんか、牛の繪は昔しの俳畫を見る樣にて面白く候妄言多罪氣にかけずにもつとどん／＼御作りあらん事を希望致し候

十五日　金

一八四

明治三十七年十月十七日　午前六時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より越後國古志郡六日市村字蛇山細貝勝逸氏へ

拿書拜見仕候征露帖とか御製作のよしにて小生發句揮毫御求め相成候處小生當時は發句を廢し候のみならず征露の句などは一句も無之候然し切角の御所望故舊句二句戰爭に關するもの相認め御送申上候一葉はかき損ひ候故裏にもかいし申候御ゆるし可被下候子規の短冊は小生懇望せざりし爲生前親交の割合に存外無之只今僅かに二三枚有之候是とても留送別の句にて皆小生の身上に關するものゝみに候へば他人に差上る譯に參りかね候右不惡御承知被下度候　以上

十月十六日　夏目金之助

細貝勝逸樣

一八五

明治三十七年十月二十日　午後七時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ　〔封筒表側に「平信凡旨」とあり〕

先達は譯文の俳體詩御送拜見致しました處があれは白芙蓉のよりも甚だ劣りて見ゆる樣なり翻譯なんどは駄目だから創作をどし〱やつて送り玉へそうして俳體詩の大家になるさ君のほめて呉れた俳想詩は寅彦も大變ほめてくれたが四方太が來て大嫌だといつた俳體詩を作り得るものがこんなものをどうして作つたといふ評は少々恐縮した、近頃尼が尼になる來歷の長い奴を俳體詩で虛子と試みて居るが中々困難でちつとも進歩しない、こんだ君と遠足でもして俳體詩の記行文でもやらうではないか、ちと落雁でも以て御出掛なさい　匆々頓首

十月十九日　　金

奇瓢先生

一八六

明治三十七年十月二十二日　午後零時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地籠谷方寺田寅彦へ　〔自筆水彩畫繪はがき赤衣の少女白き鷄に餌を與へつゝあり、背景に木立と碧空〕

君がくると近頃は客が居る、君は勉強がいやになつた時に人を襲撃するのだからたまには此位な事があつてもよろしいと思ふ

此繪はまづいが色が奇麗だと思ふどうだ

一八七

明治三十七年十月二十四日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　（自畫水彩畫繪はがき　裸體の女の半身、背景は空）

君の句の見付所は皆艷麗なる點なり君は奇麗な事が數奇と思ふ。句々皆前回よりは大進歩なり可賀々々不産女の句だけは俗なり故らなり、水牛の句新らしくて面白し、濡小袖の句配合物はよけれど鏡臺の上に小袖あるは如何草庵の句よろし但し少々陳腐也、緋の袴の句はいつゝるやの四字わろし意匠はよろし、此等の趣味さへあれば發句は何でもなしやり給へ／＼

二十四日

一八八

明治三十七年十月二十五日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區[illegible]町十六番地[illegible]方寺田寅彦へ　（自畫水彩畫繪はがき）

此畫は昨日も一枚書いて橋口に遣つた兩方共同樣の出來である後世の好事家一方を見て贋物といふ重野成齋なるものあり兩方共うそなりといふ漱石といふ發句を作る人は居るが端書に畫をかいた漱石とは別人である云々

一八九

明治三十七年十一月六日　午前[illegible]時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　（自畫水彩畫繪はがき　寺の屋根、右手に高く杉木立、左上に[illegible]月、月と杉木立との間に句あり）

御示しの句趣好は皆取り所あり句法は未だ調はざるもあり「壇高し」の句難有し但し大なる異色也先日

のとは大に異なれり一番槍の句に季なし雜の句とすべきか今少し調子をとゝのへ度ものなり、夜寒の篝火といふより夜寒に篝かなとする方可ならんか萩たるゝは何となく調はず姫瓜垣といふもの小生は知らず、東屋には句法調へり然し「しのぐ」といふは夕立の如き感あり且東屋のある菊畠ならば雨に逢ふとき母家に歸り得るなるべし實際にあらず妄評多罪

〔繪の中に〕

名月や杉に更けたる東大寺

君の繪端書を散らしにしてワクに入れんと思ふ金ピカノ物を下さい先達ての梅の青軸に雀がまだあるなら頂戴

一九〇

明治三十七年十一月七日　午後五時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彦へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

昨夜は御馳走になりました
今度は本郷座をおごる積りですか
蒲團を干してランプを明るくして長烟管でポン／＼やれば天下は太平と御承知あるべし

七日　金

一九一

明治三十七年十一月十一日　午後七時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

先達て頂戴したる繪端書黒ん坊の圖は傑作に御座候珍重可致候、是はまづい方の傑作故御挨拶として進呈致候

金

一九二

明治三十七年十一月十一日 午後七時二十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より鹿兒島縣[illegible]町島津男爵邸内野間眞綱へ

拜啓金澤地方小松とか申す所に年俸九百圓英語教頭の口あり行く人なきや淡路の先生は熊谷へ移りたるや山口の美禰に口をかけて見んと思ふ如何其他行き度人あらば教へ玉へ

それから又寶亭へ行きましたボアソングラタンの方は如何

十一月十一日

金

綱　様

一九三

明治三十七年十一月十八日 午後五時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地[illegible]方寺田寅彦へ 〔自筆水彩畫繪はがき〕

先達は晩餐會の爲め失敬然し僕のフロツクコートの出立を見ろといふのに見ずに歸るのも失敬だ

本郷六丁目二十五番地藪中といふ女髮結の隣りに新らしき貸二階あり一寸見て御覧

金　公

寅　さん

一九四

明治三十七年十二月一日　午前零時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

又々名作を頂戴難有候額を作らうと思つてまだ作らない
是はミレの厄の鶏を勝手に寫したらこんな頓ちんかんなものになつたのです

一九五

明治三十七年十二月七日　午前十一時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

先達ては難有一枚共洒落て居る
是は例の如く亂暴な畫なり然し傑作とほめてくれゝば結構也

一九六

明治三十七年十二月十二日　午前十一時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口貢氏へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

近頃多忙で畫をかくひまがない。皆傑作です。先達ての上野の冬枯は意匠は頗る面白い。鴉に少々文句をつけたい

一九七

明治三十七年十二月十九日　午前十一時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ　〔はがき〕

端書と雜誌と正に落手候今日は本屋の主人と吉川と若月の二氏參り候倫敦塔は未だ脱稿せず然しものに

なります御一覧の上是非ほめて下さい雑誌の批評は當つてるのか間違つてるのか分らない僕の事が雑誌に出る度に子規が引き合に出るのは妙だとにかく二代目小泉にもなれさうもないスヰフトにもなれさうにない僕の様な善人をシニックの様にかくのはよくありませんよねえ君

　昨夜の牛乳は非常にうまかつた僕は是から牛乳生活をやつて横隔膜の呼吸法で大文學者になるつもりだ

一九八

明治三十七年十二月二十二日　午前八時（分不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町南部男爵邸内野間眞綱へ

一昨夜橋口の宅へ招かれて雁を食つた雁は生れて始めて食つて見た頗る甘い雁の美は橋口の家に限る
去る本屋が大坂の蕪漬を送ると云ふて來た
倫敦塔は出來上つたあとから讀んで見ると面白くも何ともない先便は取り消す
浦島を讀んだある部分はうまいある部分はまづい殘る部分はうまくもまづくもない

十二月二十一日　〔封筒の裏に〕

金

眞綱　様

只今手塚がきた不相變ひげが長い
今日は是から攝津大椽をきゝに行く、連中の中に女が二人居る

一九九

明治三十七年十二月二十二日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區[illegible]町九番地[illegible]へ　〔自筆水彩畫繪はがき　池、綠の土手、土手の上右端に立木一本、垣、土手の向ふに赤き屋根見ゆ、鷲鳥が群がつて土手を池の中へ驅け下りる〕

難の御馳走は大變うまかつた此度はこゝに書いてある樣な奴を一疋しめて食ひたい
空也堂の菓子は頗る洒落たものですな

二〇〇

明治三十七年十二月三十一日　使ひ持參　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込東片町十番地[illegible]太郎共へ

昨日は失敬其節申上た大坂の蕪漬年輕少御目にかけ候間御風味可被下候多いと石を厭すがあぢが變らんでよいさうだけれど少し許りだから夫にも及ばぬ事と存候
蕪を送ればとてかぶを食つて新年に羊にでもなりたまへといふ謎ぢやない度々櫻坊の御馳走になるから御返禮と思つて差上ますのですよ

燕居士

櫻坊大人
座下

二〇一

明治三十八年一月一日　午後（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區[illegible]へ

先達ての龍土軒主人の歌は頗る面白いから虚子の所へ送つた虚子曰く以て一月のほとゝぎすを飾るに足ると但し歴の肉我に何ぞは何とか改めたい芥川は逗子へ行つて氣に喰はんとかで房州へ行つた當日來て洋書を二冊僕に托して君にやつてくれろといひ置いて行つた一冊はハーンの怪談で御蔭で之を通讀した猫傳をほめてくれて難有いほめられると増長して續篇續々篇抔をかくきになる實は作者自身は少々鼻について厭氣になつて居る所だ讀んでもちつとも面白くない陳腐な戀人の顔を見る如く毫も感じが乘らない。小野小町は僕も驚ろいたね。萬事控目が難有い 實は出目張る學問も精力も無いのだから已を得ざる譯だ猫傳中の美學者は無論大塚の事ではない大塚はだれが見てもあんな人ぢやない。然し當人は氣をまはしてさう思ふかも知れぬがそれは一向構はない。主人も僕とすれば僕他とすれば他どうでもなる。兎に角自分のあらが一番かき易くて當り障りがなくてよいと思ふ。人が悪口を叩かぬ先に自分で悪口を叩いて置く方が洒落てるぢやありませんか

昨日は傳四が來る寅彦が來る四方太が來る。晩に限がきめたら百八の鐘をつく所であつた昔しなら感慨云々の場だが何ともない只聞いて居たら鐘で仕舞つた。元日も好い天氣で結構だ。今日は何だかシルクハットが被つて見たいから一つ往來を驚かしてやらうかと思ふ 左樣奈良

元日　　金

眞綱樣

二〇三

明治三十八年一月二日　午前六時九十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内野間眞綱へ　〔はがき〕

今日はなぜ上らずに歸つた。傳四が來て雜煮を食はせろといふから一所に晩餐を食つた。君も雜煮を食ひに來給へ可成晩食の時が落付いてよい

本鄕駒込千駄木町五七

一　日　夜　　　　　　　　　　夏目金之助

二〇三

明治三十八年一月二日　午前十時五十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鹽谷方寺田寅彥へ　〔はがき〕

君年始をやめて雜煮を食ひにこぬか可成晩食の際が落付いてよい。

本鄕駒込千駄木町五七

夏目金之助

二〇四

明治三十八年一月二日　午後六時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中淸水町五番地橋口貢へ　〔自筆水彩畫繪はがき　左端下に灰吹、灰吹から蛇が二匹出て枠の形取る、枠の中にては男が机に頰杖をつく、机の上には硯と筆〕

灰吹から蛇が出ました一寸驚かせるね

二〇五

明治三十八年一月四日　午後五時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵方内野間眞綱へ

君がくれた猪肉で傳四を御馳走し。昨夜は又虛子四方太橋口兄弟を御馳走した昨夜は大分面白かつた是

も君の御陰と敢て一書を奉呈して感謝の意を表するいづれ八日過になつたら來給へ皆川と三人で雑煮でも食ふかね。今朝小野君が來て英米名家詩抄といふのを一部くれた。

人のところへ手紙をよこすに名宛人の名前丈をかいて自分は姓丈かくなんてえのは失敬だよ。自分の事は大抵の場合には（眞綱）とばかりかいて誰もかゝないが禮義である。先方を尊敬し樣とする場合には向ふの姓丈かいて名を略す或は其人の號をかく。自分の號を書くのは矢張失禮になる

第一號

一月四日

眞綱

夏目樣

尊敬の場合

第二號

一月四日

野間眞綱

夏目金之助樣

同等の場合

又は目下へやる場合

極懇意の場合

一月四日

金之助様

眞綱

是が昔しの禮義であります

一月四日

金之助

眞綱様

二〇六

明治三十八年一月四日　午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地坂中方野村傳四へ

昨夜は虚子と四方太と橋口兄弟を呼んで猪の雜煮を食はした。君はもう一返食つて居るから呼ばなかつた。虚子と四方太に君の文章を見せたら四方太曰く是は寫生文ぢやない三十七年十二月三十一日の雜錄だと傳四君にさう傳へてやり玉へと僕は此一言に避易してほとゝぎすへ出せとも云はなかつた　草々不一

一月四日

金

二〇七

明治三十八年一月六日　午後零時三十分　[illegible]より[illegible]井上微笑へ

新年の御慶目出度申納候陳者舊年中は毎々御高情にあづかり候處俳句屢御求めの處いつも御斷りのみ致し甚だ濟まざる儀と存候間今日は無理やりに妙なものを作り供貴覧候御一笑可被下候何だか譯のわからぬものに候へば御取捨は御隨意に候　以上

一月五日　　　　　　　　　　夏目金之助

井上微笑様

元日や歌を咏むべき顔ならず
　胃弱の腹に三椀の餅
火燵から覗く小路の靜にて
　瓶に活けたる梅も春なり
山妻の淡き浮世と思ふらん
　廚の方で根深切る音
專念にこ、んろ、煽ぐは女の童
　黄なるもの溶けて鍋に珠ちる

じと鳴りて羊の肉の煙る門

ダンテに似たる屑買が來る

二〇八

明治三十八年一月十日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町三十番地奥井方皆川正禧へ

拜啓只今野間眞綱君參り雉子一羽もらひ候間ひる飯をくひに御出被下度右御案内申上候　以上

一月十日　　　　夏目金之助

皆川樣　貴下

二〇九

明治三十八年一月十五日　午後六時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]へ　〔自筆水彩畫はがき〕

其後何にも出來ないかね。どうも君の作は着想は面白い所があるが言葉が不平凡な所が多い今一といきと云ふ處で氣がぬける。端唄でも俳體詩でも澤山作つて御送りなさい。猫の續篇を達脱稿虚子に交付したり見て文句をいつて下さい。今日頃から休業前の僕に返つた樣だ。鷺鷥博士とは艶な名だ。此繪端書は舊作です。

昔し大變な罪惡を冒して其後悉皆忘却して居たのを枕元の壁に掲示の樣に張りつけられて大閉口をした夢を見た。何でも其罪惡は人殺しか何かした事であつた。
先達の雉子は大變うまかつた。

二一〇

明治三十八年一月十八日　午後二時四十分　本郷區千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ　〔自筆水彩繪はがき〕

猫の畫をかいて被下よし難有候。可成面白い奴を澤山かいて下さい。
鬼と佛の繪端書は上出來と存候

〔繪の肩に〕

あるは鬼、あるは佛となる身なれ
浮世の風の變るたんびに

二一一

明治三十八年一月十九日(一)　午後九時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麻布區三河臺町島津男爵邸内橋口貢へ　〔自筆水彩繪はがき〕

君がほめて呉れたので倫敦塔が急にうまくなつた心持がする。然し世に稀なる文學者は少々驚ろいたね。何しろ此繪端書を以て御禮を申し上げねばならぬ。
支那の織物は僕がもらふよ。僕は大抵のものはもらふ主義だ。
時間さへあれば僕も稀世の第一文豪になるのだが。時が乏しいので、ならずに死んで仕舞ふのは殘念だか

幸福だか一寸自分には分らない

二二三

明治三十八年一月二十日(?)　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館皆川正禧へ

倫敦塔の御批評難有候實は稿を草する折は多少逆上の氣味にて自分でも面白いと思候處脱稿の上通讀したらいやな處が多く且今一いきと云ふ所で氣が拔けて居る樣で我ながらいやに成つて居たのです。然る所本日寄鵬先生から手紙をくれて大變ほめてくれたので又少し色氣が出た處へ君の端書が來たものだから當人大得意で以前の逆上に戻りさうに成つて來ました。

ダンテの句は仰せの如く故意とらしく候こあれはあまり句が長すぎる爲もあります何だか知つて居る事を氣取つて無理に插入した樣な感じがある。少し氣ざと思ふ。あの句を二句位につめれば色彩として存してもよからうと思ふ如何。番兵を褒めてくれ手はないと思つて居たら飛んだ處から喝采が出て大に面目を施こす譯です。首斬りの段は一番面白いかね。僕自身はあすこが一番よく書けたとも思つて居らん。

倫敦塔で君を免職させるのは御氣の毒だから當分君を窘迫させる樣なものはかゝない積りに候、二月のほとゝぎすには猫の續きが出ます是は健康に害のある程のものではないから讀んで下さい。

先は御禮迄　匆々頓首

一月二十日

金

皆川兄

座下

舟人が舟から上る所はわざと突飛にかいて驚かして見たのです。あれは突飛な所を買つてもらひたい

二二三

明治三十八年一月二十二日　午後三時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

織物到着難有候、あれは書齋の小机の上に敷て見たら丁度うまく一杯になつた。誂へた樣で結構上等なり。あれは西洋物で餘り安い品物ではないと思ふ。I came up hand over fist, doing my five knots と云ふのは熟語ではあるまい。拳を握つてと云ふ意味ではないか「フィスト」と云ふのはコブが出來るから云ふのではないか。doing five knots とはコシラヘルト云フ意味ではないか、猶よく考へて見樣。
御禮旁御返事迄　匆々

Hand over fist ハ片方の拳を片方の手でつかむ意味ではなきか

二二四

明治三十八年一月二十三日　午後三時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]へ　〔自筆水彩畫繪はがき〕

Corretti といふ字存じ申さず　Correnti ト云フ以太利の政治家兼志士あれども綴が違ふ樣なり。僕の事を評するときは誰でも必ず上田君を引合に出す上田君は迷惑なるべし。あまり讃賞で學者の樣に吹聽されると大學の講堂で講義がやりにくゝて困ります。白鳥子は一面識なき人なり先達て尋ねてくれた時は歌舞伎座へ行つて留守であつた。近い身より却つて知らぬ他人の方が時々は買被つてくれるものに候。

君がほめたから倫敦塔を澤山書いて君を發憤させ様と思ふがひまがなくてかけない。

二二五

明治三十八年二月二日 午後六時四十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より [illegible]町三丁目[illegible]橋口貢氏へ 〔自筆水彩畫繪はがき〕

〔上段に〕

君は僕の氣燄に驚くと云ふが僕は君の健筆に驚ろいて居る。此頃の文藝の雜誌に君の詩が載つて居ない事はない。何しろ大にやり玉へ筆硯萬歲可賀可賀

昨夜は雪 僕の前の家から火事が出て夜の間に燒けて仕舞つた。今朝起きて始めて知つた。雪中の火事は詩題になると思ふ。それを知らずに寐て居るのも詩になると思ふ

〔下段に〕

自分の肖像をかいたらこんなものが出來た何だか影が薄い肺病患者の様だ。君が僕を鼓舞してくれるから今にもつと肥つた所をかいて御目にかける現在の顏は此位だ

二二六

明治三十八年二月七日 午前九時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區[illegible]町十六番地[illegible]方寺田寅彦へ 〔繪はがき 表は宛名に〕

「千駄木 力緒七」より〕

漱石が熊本で死んだら熊本の漱石で。漱石が英國で死んだら英國の漱石である。漱石が千駄木で死ねば又千駄木の漱石で終る。今日迄生き延びたから色々の漱石を諸君に御目にかける事が出來た。是から十年後には又十年後の漱石が出來る。俗人は知らず漱石は一箇の頑塊たるに變化せずと思ふ。此故に彼等は皆

失敗す。漱石を知らんとせば彼等自らを知らざる可らず　這般の理を解するものは寅彦先生のみ

恐惶謹言

Dynamic Law
on
Mr. K. Natsume.

二一七

明治三十八年二月九日　午後一時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地[illegible]野間眞綱へ

手紙を度々難有う無精だからいつも返事を出さない先達は火傷をしたさうだ其時の俳體詩は一寸面白さうぢやないか一寸行き度いがつい色々ごたごたして居るものだから失敬して居る。今日から三日間學校をやすんだよ。別段病氣でもないがまづ病氣の心持で居るそれで萬事自ら病人風に所置する積りで晝は牛乳と玉子で間に合せたら三時頃腹がへつて驚いた。矢張無病だと見える。まぼろしの楯といふ文章をかゝうと思つて大體趣向は出來たがうまく行きさうにない。僕は贅澤で此の字はいや此句はいやと思ふものだから容易に出來ん苦しい。今日は朝からかく筈の處を色々雜用で晩に一ページ許りかいたらどうも氣に入らんからやめた。出來上つたら見て批評してもらはう

傳四の二階の男はまだ見ないえんな何でも蚊でも書いてどしどし世間を壓倒すればいゝ君も何でもいゝからやり給へ。

皆川君は倫敦塔はほめてくれるが猫は宗旨違ひだからだめだらう。猫の材料も出來たから又あとをかきたいが閑がないから四月位にのせる事に仕樣と思ふ　左樣なら

二月八日夜十時半　　金

眞綱様

二一八

明治三十八年二月十二日　午後一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ　〔自畫水彩畫繪はがき〕

ホトヽギスの挿畫はうまいものに候御蔭で猫も面目を施こし候。バルザツク、トチメンボー皆一癖ある畫と存候。外の雜誌にゴロ〳〵轉つては居らず候。是でなくては自分の畫とは申されません。孔雀の線も一風有之候。足はことによろしく候。あれは北齋のかいた足の様に存候。

僕の文もうまいが橋口君の畫の方がうまい様だ。

右御禮迄　匆々

昨日は失敬。

二月十二日　　金

淺井の口繪畫の百姓の足はうまいと思ふ如何。

君の裏畫の馬の首がねぢ切れさうに思ふが如何

二一九

明治三十八年二月十三日　午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十六番地鈴木方寺田寅彦へ　〔自製水彩畫繪はがき〕

淺嘉町へ花を買に行つた留守に寺田さんが御出になつたといふから、もう病氣はよいのかと聞くとえゝと云ふ。なんだもう直つたのか馬鹿な奴だと云つてやつたよ。

淺井の口繪の百姓の足は非常に甘いと思ふ。橋口の插畫は特長がある無暗に他の雜誌杯には載つて居ない。あれは慥かに橋口の畫で他人の畫ではない。僕は非常に感服した。僕の文章よりもうまい。どうかあれを新聞かなにかで評してやつてくれゝばよい。然し僕の猫傳もうまいなあ。天下の一品だ。十錢均一位な所にはあたる。……時に續々篇には寒月君に又大役をたのむ積りだよ

二三〇

明治三十八年二月十三日　午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]　皆川正禧へ　〔自畫水彩畫繪はがき〕

君が大々的賛辭を得て猫も急に鼻息が荒くなつた樣に見受候。續篇も、かき度「い」抔と申居候。いづれ四月はホトヽギスが第百號だそうですから其時迄に椽側で趣向を考へて置くと申す話です。日本文壇の偉觀に少々[illegible]す「る」から御返却したいと申します。皆川さんは倫敦塔の樣なものでなくては御氣に入らないかと思つたら吾輩の樣なのも分るらしい。猫は大喜悦に御座候。同じ駒込區内にもう云ふ知己があれば町内の奴が野良と云はうが馬鹿猫と申さうが構ふ事はないと滿足の體に見えます。此猫は向三軒兩隣の奴等が大嫌だそうです

二三一

明治三十八年二月十六日　午後六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地栗田方野村傳四へ　〔はがき〕

只今學校の歸りに七人を買つて二階の男をよんだ。スラ〳〵とよくかいてある。强いて非難をすると一

篇の山がない。まとまりがわるい樣だ。然し中々名作だ、大にやり玉へ。

二三二

明治三十八年二月十七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市老松町一丁目一番地渡邊和三郎氏へ

其後御無沙汰をしました。御變りもない事と思ひます。新年に御禮狀を頂戴したけれど今年はどこへも略したから失禮をしました。

先達てアメリかの傳ちやんがホト、ギス社へ宛てゝ態々美しい繪端書を送つてくれました。私は此繪葉がきが大すきで机の上へ置いて眺めて居ます。禮をいひ度が所が分らないからあなたが此次手紙を出す時右の事をかいて禮をいつてくれませんか。これ丈の御願です　左樣なら

二月十七日　　金

渡邊和三郎樣

二三三

明治三十八年二月二十二日　午後十一時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地喜中方野村傳四へ

君が廬子の所へ談判に出懸けたのに一寸驚いた廬子が既に廣告をした抔と斷つたのにも驚いた。廣告抔はどこに出て居るかね。切角の御依賴だから七人へ何か書いて出してもらひ度が色々用事もあるし少しは本もよみ度いからうまく時日内に出來るかどうか受合ふ譯にもゆかぬ君から小山内君へさう話して置いて呉れ玉へ

先日寺田が主人を借りて行つて左の端書をよこしたから一寸報知をする

「〇村〇四さんの「二階の男」面白く拝見しました中々うまいものです。格別の山もなく谷もないかわりに厭味もなく近來兎角溜飲につかへる文壇には大に歓迎すべき一服の清涼劑であると考へます猫傳以來の出色の文字感服しました猶進んで二階の女か何かかいて貰ひ度者です。さうすると私も何か一つ「床下の狸」でも書く、洛陽の紙價が十四パーセントあがる愉快ぢやありませんか……」

貴君も猫のつゞきを書かうと思ひながらついまだ筆を下さない今度は實業家の妻君の事をかくよ左様なら

二月二十二日

夏目金

野村傳先生

座下

二二四

明治三十八年二月二十三日 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]へ 〔はがき〕

明後二十五日土曜日食牛會を催ふす 鍋一つ、食ふもの曰く[illegible]曰く傳四曰く眞[illegible]曰く虚子曰く四方太曰く寅彦曰く漱石。午後五時半迄に御來會希望致候

二十三日夜

二二五

明治三十八年二月二十三日 午後十一時十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]六丁目二十五番地[illegible]野村傳四へ 〔はがき〕

明後二十五日土曜日食牛會を催ふす、鍋一つ、食ふもの曰く傳四曰く寄瓢曰く眞柝曰く寅彦曰く虚子曰く四方太曰く漱石。午後五時半迄に御來會を乞ふ牛の外に何の食ふものなし

二十三日夜

二二六

明治三十八年三月四日　午前九時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地明陽館野間眞綱へ　〔はがき〕

盾のうた面白く出來候最後の二句は不賛成に候。何とか改め度候。傳四丸一日をものし候よし。明星と七人は喧嘩をはじめる由　御村宅で文士會合の節白鳥來り候よし

栗原古城といふ先生も其席上にありし由白鳥をひやかしたかどうだかあやしきもの也

二二七

明治三十八年三月五日　午後六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地中方野村傳四へ

本日野間の家から君の原稿を二つ郵便で送つて來たから只今拜見したが滿一日より月給日の方が餘程うまく出來て居る中々面白い。滿一日はゴチヤ／＼だ。同じ樣な事が必要もないのに無暗に重複して出て來るあれをものにするなら諸々を削減しなくてはいかん。虚子が二三日中に來ると云ふから來たら意見を聞いて見やう

君が一月のホト、ギスを虚子にもらう筈にしたさうだが都合がつくなら僕にくれ玉へ深田文學士からたのまれたのだよ。

猫傳は脱稿した。出たら讀んで下さい

二月四日

金

傳四先生

三三八

明治三十八年三月十一日 午前十一時-十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より [illegible]町十二番地大谷正信氏へ

拜呈明星御親切に御送被下難有存候早速新體詩の一日と申すのを拜讀致候前半教科書の譯を插まれ候は御趣向に候へども小生には別段の感も無之只後半書齋中の出來事より食事、及び晩餐後の御相手の邊は甚だ興味を以て讀了致候小生の事を態々御推服の樣に御記載被下候は難有仕合に候へども少々赤面致候人間に欽慕抔と申すは知らぬ昔に遠方から見た時のみの迷かと存候釋迦も孔子も十年も同棲致候はゞ凡庸の匹夫なるべきかと存候。是よりは再々御光來の上欽慕する漱石をうんあの漱石がといふ樣に變化する迄御交際被下度候。欽慕とは遠慮と輕侮と未知とが重なり合ふときに發生する化物に候御高見如何に候や御禮旁妄言かきつらね申候御海恕被下度候　早々頓首

三月十日

金之助

繞石學兄

座下

三三九

明治三十八年三月十一日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地東中方野村傳四へ

昨夜キヨ子が來て君の月給日を見せたら面白いといつた但し前の方が餘慶な樣だと云ふた。滿一日は時間がなくてよむひまがなかつた。然し虚子は兩方とも持つて行つた。虚子が猫をよむ僕がきく二人でげら〳〵笑つて御蔭で腹がへつた。

先〔は〕御報知迄　匆々

三月十日　金

傳　四　兒

妻君が犬の手をあたゝめる所は先達てはいけぬといつたが昨夜傍聽した所では大に振つて居る。毫も厭味も乙な色氣もなく出來て居るは大に佳也。結末の「此事件は此で結了した」といふ意味の語は尤もうまい　ちつとも洒落ても氣取つても居らん。極め〔て〕平凡極めて眞面目な裏に大に奇拔なとぼけた樣な馬鹿にした樣な所がある。結構です。僕は全體からいふと二階の男より月給日の方がよいかんじがする

二三〇

明治三十八年三月十三日　午後二時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ　〔はがき〕

繪端書頂戴致候寺田の宿所は小石川區原町鹽谷方に候哲學館の北方なり。寅彦は今日も來て文章を朗讀してゆきました。

二三一

明治三十八年三月十四日　午前八時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地數山方野村傳四へ

本日七人を發行所から送つてくれたから君が小山内君に逢つたらよろしく禮をいつてくれ玉へ疵を探せばみんなあるだらうが皆僕よりうまい所がある後進の人が勢よくやるのを見て居るのは甚だ愉快だ。松浦の英雄杯も感心なものだ。ホトヽギスを見たかね。四方太の稻毛をもう一返よんで御覽何の奇もないが嫌味がない。虚子の百楷は奇な代りにどこか不自然で嫌味がある。今の人はとかくあゝ云ふものをほめる。僕の倫敦塔をほめてくれるのも全くその爲である。巴の助といふ人のコマイ釣は面白い末段抔はことに振つて居る。小泉先生の文をよむ樣だ。卷末の百號廣告は少々山師的だね。僕もあの位かゝれゝば澤山だ尤もあれで人が讀んでくれなければ僕の名聲も地に墜ちる譯だなあ！

世間は存外靜かだのに虚子一人が騷いで僕を吹聽して居る樣な氣色だハヽヽヽヽ

十四日　　　　金

傳四兒

寅彥の團栗はちよつと面白く出來て居る

二三二

明治三十八年四月一日　午後六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

昨日は失敬

日向のくに都の城にて文學士一名千圓にて雇たき由心當りはなきや可成は英文學科の人を周旋したしと思ふ

尤も首席にて教育に經驗ある人を要する由也

四月一日　金

眞綱様

【封筒の裏に】

明日天氣無覺束

三三三

明治三十八年四月二日　午前十一時三十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區本鄕六丁目二十五番地[illegible]中方野村傳四へ

ホト、ギスに出て居る碧梧桐の五形花といふのと、八千代さんの鷄鳴といふのを比較して御覽。五形花は渾然としてすこしも痕迹がない。作つたものとは思はれない。強いて人の感を挑撥しやうといふ拙な巧が見えない。あれをまづくかいたら毒々しいいやなものになるにきまつて居る。趣味の正邪は此二篇を對照すれば分ると思ふ。才のある人が邪道に入つて居るのは惜しいものだ。

鏡花の銀短册といふのを讀んだ。不自然を極め、ヒネくレを盡し、執拗の天才をのこりなく發揮して居る。鏡花が解脱すれば日本一の文學者であるに惜しいものだ。文章も警句が非常に多いと同時に凝り過ぎ

だ。樸拙な一風のハイカラがつた所が非常に多い。玉だけは疵だらけな文章だ。僕抔のいふ事は門外漢の言葉として彼等は首肯しないだらう。然し僕はあの人々の方が悪い方へ向いて居るのを非常に残念に思ふばかりで一寸君に洩らすのさ。君のは正路たがふ結構だ。此度のホトヽギスに出て居るのは皆面白い。虚子も、碧梧桐も、四方太も、寒月先生も、君も、投稿のカルタ會もみんな面白い。ホトヽギス萬歳だ。

四月二日　　　　　　　　　　　　金

傳四先生

二三四

明治三十八年四月四日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地栗田方野村傳四へ　〔はがき〕

傳四先生足下。昨日虚子が來て今月末に文章會をやりたいと云ふから引きうけて拙宅で催ふす事にした。君も何か持つて御出席ありたし。

四月四日

二三五

明治三十八年四月六日　午前九時―十時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地栗田方野村傳四へ　〔はがき〕

君の丸一日を虚子が逢つて來て曰く傳四君の文章一應御返事申上置候勢猛烈當るべからざる感有之候とある。原稿は君が来る迄僕が保管して居る

四月五日

明治三十八年四月十日 午後一時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區[illegible]町十一番地大谷正信氏へ

拝啓昨日は御光來被下候處生憎他出失禮此事に御座候　目下小生知る人の中にて地方行志願の人は左の如くに候

一昨年卒業副島松一今四月迄宮崎中學にて教頭をつとめ居候人此男は至急片付ねばならぬ人に御座候

同年卒業撰科生堀川三四郎此人は今年四月迄宮城縣角田に奉職目下他の口捜索中に小生より廣島在の中學へ紹介中なれど成否分りかね居候

第三は目下長野縣長野中學に奉職中の日野健四郎氏是は矢張同年の卒業に候が郷里が香川縣故老母を迎ふる爲今少し便宜の地に轉任致し度希望に候

英文にては右三名丈承知致居候幸に大兄の御周旋にてどこかへ片づく事が出來れば幸甚に候一臂御折被下度懇願致候　匆々

四月十日　　金

大谷賢兄

座下

昨日は四方太が來て一所に上野をぶらつきました

明治三十八年四月十三日　午前十時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區曙町森巻吉へ

拜啓先日は失敬君のくれた菓子は僕が大概くつて仕舞つた。小供もたべました。
君の號の事を考へても中々面白い奴は出ない。君の名は巻吉だから巻といふ字を二字にしたらよからうと思ふ。魔奇。馬奇。麻期。磨綺。等色々出來候。内海月杖といふ人は月末に困るから月杖としたさうだ。嵩山堂といふ書店は書物が高いからといふて徂徠がつけてやつたと云ふ。僕の號は蒙求にもある極めて俗な出處でいやになつ〔て〕るが仕方がないから用いて居る。
僕も君の樣に泥棒に這入られた綿入がなくて袷で少々寒いです。
先は閑用迄　匆々頓首

四月十三日　　金之助

森巻吉樣

二三八

明治三十八年四月二十三日　午前十時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕

繪端書拜見。來る二十九日土曜日文章會を開き候につき名文御携帶の上御出席願上候（但午後五時より）

二三九

明治三十八年四月二十三日　午前十時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ〔はがき〕

只今君の名文三篇を拜誦しました。皆々傑作結構です。つぎの土曜の午後五時から文章會を開くから名

文御携帶の上御來會願上候

二四〇

明治三十八年四月二十七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎氏へ

御手紙拜見仕候此方も存外の御無沙汰御ゆるし下され度候拙作御懇篤なる御批評を蒙り難有存候大體に於て大兄の御考は正鵠を得たるものと存候盾は禮服塔は袴猫は平常服の喩尤も得吾意中候。盾の廣告は出鱈目ですよ。あれが出た時天下は安泰だのに虚子が獨りで騒いで居ると笑つた位です。先達て新小説に出た嬉劇は拜見しました。面白いと思ひます充分此方面で御盡力を願ひたいと思ひます。君の兄弟分は皆片づきました。みんなが片づくと僕も安心する樣な心持です。

君は結婚したさうですね。一寸御祝辭を申し上げ樣と思つて遂々忘れて仕舞ひましたよ。

モリエルは君の繩張内だから僕より君の方が精しい譯ですが御尋ねの La Comédie des Fâcheux は The Comedy of the Bores といふのでせう。ボアと云ふのは話しをしても面白くない欠伸がしたくなる樣な厄介な御客さんや人間を云ひます。又は積極的に出しや張つて、うるさくて堪らんといふ樣な人間も云ひます。夫から自分が世の中に厭き果てゝ酒も面白くない女も妙でない何もかも乙でけえせん抔と顋を撫る樣になつた心の狀態もボアと云ひます。モリエルのは人間の意味の方でうるさい厄介者が澤山出て來て其が爲に迷惑をするといふ筋ぢやありませんか。たとへば君が新婚早々僕が君の家へ行つて五時間も六時間もくだらぬ事を話して居ると僕は君等御夫婦にとつて大ボアになる譯でせう。先此位な邊で御免蒙りますよ。モリエルに關する書籍は一向知りません其内見當つたら書いて上げます。さし當り一つ見付

けましたがくだらぬものらしいですよ。

四月二十七日　　　　　　　　　　　　金之助

若杉君

二四一

明治三十八年四月三十日　午後一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地鶴鳴館野間眞綱へ

昨夜は五六人集つて十一時頃迄談話をしました虛子は短篇を作つて來た虛子一流の面白い處がある僕は琴のそら音と云ふ小說を讀んだ七人に出す積だから讀んでくれ給へ。

島津家の若樣が病氣で君が看病に行く由嘸御心配の事だらう。休學と事が極つても姉さんの方を敎へて居れば當分困る事もないだらうと思ふがどうだらうさう云ふ談判にしたら約束期限中は何とかなりさうなものだと考へるがどうだらう

昨日君は野村の所迄行つたさうだから或はくるかも知れんと思つて居たいづれそちらの方で閑が出來たら來給へ

四月三十日　　　　　　　　　　　　金

眞綱樣

二四二

明治三十八年五月九日　午前九時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より愛媛縣温泉郡今出町村上半太郎氏へ

其後は存外の御無音奉謝候先達は御用にて東京向迄御上りの處色々用事の爲め御面晤の機を得ず遺憾此事に存候拙文につき御批評たまはり難有拜讀致候あんなものにても知人抔よりはめられると愉快なものに候小生は教師なれど教師として成功するよりはへぼ文學者として世に立つ方が性に合ふかと存候につき是からは此方面にて一奮發仕る積に候然し何しろ本職の餘暇にやる事故大したものも不出來只御笑ひ草のみに候。俳句は近頃頓と作らず時々短冊抔をよこして書けといふ注文抔參り候節は困却致候。松山に居た頃の事を思ふとまるで夢の樣に候一度は又遊びに行き度感も有之候道後の湯は實にうれしきものに候。筆硯の中常に俗塵を混じ起居常に倉皇寧處(原)に違なき有樣に候御憫然可被下候先は御返事まで　匆々頓首

五月八日　　　金

霽月老臺

座下

二四三

明治三十八年五月十二日　午前十時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地赤門前野村傳四へ

東京座も見たいが論文も見なければならん。英文科の諸君が大に力を奮つて作つたものをいゝ加減に見ては濟まん。中々面白いよ。二十五日迄に採點をすると云ふのだから夫迄に是非眼を通さなければならん。中々多いページを書いた人もあるから讀むのに骨が折れる。

東京座は右の譯だから今度は御免を蒙ります。諸君へよろしく願ひます。其内一所に御伴を願ひます。ド

ラヾ會とはどんな會かね。先達文科の教授連が観劇會をつくつたと聞いたか君のかは學生連らしい僕は其會に就ては今始めて聞くのですよ。左樣なら。

五月十一日　　　　　　　　金

傳四先生

僕は芝居を見て面白くなる迄には三十分かゝる漸く面白くなつたと思ふと幕になる。厄介な男さね

二四四

明治三十八年五月十八日　午後八時―十時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町一番地有馬[illegible]野間方野間へ「封筒まで朱にて認めあり」

本屋は君のところへ行くと云ふて歸た。來たらよい加減に話をして下さい。向ふでいふなり次第になつてはいけない。本屋は[illegible]無茶だから[illegible]な事を[illegible]すると致される

看病面白く候余の意に滿たぬ所朱點を施こして御再考を煩はす。直して今一遍御送りありたし。此兩三句願くは今少し俗ならぬ、新しき、句にしたしと思ふ　如何

五月十八日　　　　　　　　金

眞綱樣

二四五

明治三十八年五月二十二日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地萬中方野村傳四へ　〔はがき〕

御ほめに預かつて甚だ難有い。實は昨夜讀んで何だか氣がぬけた樣な氣合であると思ひ且つ「婆さん」が不自然の樣な感じがして居た所です。僕來客の爲めに卒業論文をよむ事能はず。昨日は過る。不得已明日と明後日缺講をすると松永へ注進に及んだ。今日は午後から高濱に招かれて能を見に行つた。君の小說は出來る。寺田の龍舌蘭は出來る。野間皆川の兩君も新體詩をつくる。今度の文章會は大分賑かで面白いだらうと樂しんで居る。僕も猫のつゞきが書きたい。

五月二十一日

昨日は野間と皆川が來て午過から夜迄遊んで行つた。七人を三冊くれたから兩人に一部宛やつた

二四六

明治三十八年五月二十六日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區小日向臺町三丁目七十一番地山縣五十雄氏へ　〔はがき〕

拜復小生の文章を二三行でも讀んでくれる人があれば難有く思ひます。面白いと云ふ人があれば嬉しいと思ひます。敬服する抔といふ人がもしあれば非常な愉快を覺えます。此愉快はマニラの富にあたつたより、大學者だと云はれるより、教授や博士になつたより遙かに愉快です。小生は君の手紙を得て此大愉快を得たのだから御禮は此方より申さなければならんと考へます　匆々

五月二十五日

二四七

明治三十八年五月二十七日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地喜多床方野村傳四へ

高作拜見致候

凡一日拵よりはずつと上等に候。二階の男よりも遙かに小說的に候。最後の一節よろしき情景の處に候。あそこが一番詩的かと思ひ候。然し全體の上から云ふと所々自主の徵取と云ふ樣な點有之候。病がぶり返す處抔はぶり返した樣に無之。當人が死ぬ所はただ死にさうもなく候が如何に候や。今度は一字一句の間に注意を入れられたし。見ると實に所々に散見致候。但し會話少々妙過ぎると思ふ所は二三ヶ所筆を入れ候が是は御容赦を願ひ候。今迄作の書いたものゝ内で一番手間がかゝつたものと存候今前の七人の鳥の事が五六行かいてあつたのは甚だ小生の氣に入候。今度の感じは鳥の感じよりよろしくなく候　妄評多罪

五月二十六日　金

傳　四　兄

二四八

明治三十八年五月二十七日　午後一時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地喜多床方野村傳四へ　〔はがき〕

次回土曜六月三日午後正一時より文章會相開候間御出席被下度候。追て晩食を共にする計畫故御出缺の有無其前一寸御報知願上候

御高作可成御持參願上候。時間は可成正しく御入來願上候

二四九

明治三十八年五月二十七日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町一番地野間眞綱へ　〔はがき〕

來る土曜日六月三日午後正二時より文章會相催し候につき御出席願上候。朗讀後晩食會を開き候間御出缺の有無前以て一寸御通知被下度候。時間は正に二時

先日の俳體詩面白く候今日虛子へ送り申候

二五〇

明治三十八年六月十一日　午後二時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]中川芳太郎へ　〔はがき　表の宛名に「金やん」とあり〕

先刻は失敬歌舞伎座行には色々故障で延引の處今度の火曜は僕の方であまり氣が進まなくなつたから僕はやめにして。いづれ此次でも御同行仕る事にしやう。左候へば君は朝から諸君と御詰掛可然。必ず〳〵學校前にて待伏せ抔と云ふ手數をやり給ふな。色々御心配を掛けた上でこんな我儘を云つては濟みませんか、まあ勘辨し給へ。

御令妹の御上京は別段惡るい事でもないでせう。

僕今日胃がわるいが天氣もわるいから運動を見合せて居る。

二五一

明治三十八年六月二十七日　午後二時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地[illegible]方野村傳四へ

貴翰拜讀玉稿の事につき虛子は君の所へでも來て意見を述べたのか。虛子が君の小説を持ちあつかつて居る居らんは暫く措く。彼がもし君の作に就て意見を述へに來たら充分意見を聞いて參考にするが必要な

り。君位の作は現今の文學雜誌に出して別段持て餘さるゝ程のものにあらず然し之を云々するのはホト、ギスであるからである。他の雜誌が歡迎さへするものを獨りホト、ギスが兎や角云ふとすれば其裏には何か曰くがなければならぬ。ホト、ギスの主張と趣味が一般と異なつて居ると云ふ事に歸着する。世間の人にはそこが呑み込めない。君も或は此點に關して一寸可笑しいと思ふ點があるかも知れない。若しさうであるならば是は好機會である充分虛子の意見を叩いて彼の一派の主義主張を聞いて置くのは充分參考になる事と思ふ。つまらん事に氣を惡くするより君の考も述べ人の考をも容れて利害を比較するのが得策である。ホト、ギスは方今の文壇で獨毛色のちがつたものである。明星其他の文章家から見ればホト、ギスの文章は文章でないかも知れないがホト、ギス連から見ると明星流は又文章にならんのである。レトリック許りだと思つて居るかも知れん。僕はどつちがいゝとも云はぬ然し君の文章に於る智識及趣味は色々な人の說を參考して啓發すべき時期であつて惡口をいはれて氣をわるく「す」る時代ではない。虛子は學問のない男である長い系統の立つた議論も出來ぬ男である。然し文章に關しては一隻眼を有して居る。ある方面に僻して居るかも知れんが彼の云ふ所は理窟も何もつけずして直ちに其根底に突き入る斷案を下すに於て到底大學の博士や學士の及ぶ所でない。かゝる人の云ふ事は傾聽すべき價値がある。かゝる人にくさゝれたら其くさゝれた理由を知るのは作家にとつて寧ろ愉快である。虛子は今迄の所で小說家でも何でもない然し彼の小說に對する標準で現今の小說に對する考を遠慮なく云はせると小說らしい小說はないと思つて居る。此點に於て虛子も四方太も碧梧桐も一致して居る。彼等の注文に應ずる小說のないのは當人等自身がかゝない否かけないのでも分り切つて居る。然し世の中が鏡花をほめ風葉をほめ其他の小說家をちやほや云ふのに彼等が振り向いても見ないのは彼等が全然沒趣味か又は一見識あるかに相違ない。是を探求するのも自作の上に多大な影響を生ずるに極つて居る。

文章は苦勞すべきものである人の批評は耳を傾くべきものである。たま〳〵一篇を草して世間庸衆の譽を買つたとて毫も誇るに足らんのみか却つて其人をスポイルして仕舞ふのみだ。小山内の樣なのは多少其氣味である。小山内があの儘で通したつて立派な文學者にはなれないと思ふ。然しあゝなると到底他人の云ふ事杯は聞く氣づかひはない。君が虛子から小言をいはれるのは君に取つて結構な事だと思ふ。あの連中は無論缺點のある見方をするが。ある點から云ふと僕杯より遙かに見巧者である。僕は嚴酷な樣で却つて大概の作に同情する弱點がある。是は自分がよく出來んと云ふ事に心が引かれるからである。

一の垣隣りがホト、ギスでどうならうとも構はん、僕は此際に於て君が文章に對する心懸に就て以上の希望を述べたのである。實は僕の家で文章會を開く事にしたのも多少此主意であつたが皆が遠慮するものだからついこんな事になつた。君と虛子の間に立て切つてある障子一枚をあけ放つて見よ。春風は自在に吹かん。妄言多罪

六月二十七日　　　金　　生

傳四先生

梧下

二五二

明治三十八年六月二十七日　午後六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より松山市松山中學校小島武雄氏へ

拜啓先達ては貴翰に接し拜讀御申越の件委細承知致候偖本年卒業の英文學士中吉松武通氏は去年は首席本年は二位にて成蹟可良其上大學入學前岐阜にて中學〔に〕教鞭をとり居候事とて經驗にも不乏本日同人

に相談致候處今治へ赴任の儀承諾仕候に就ては先方へ御推擧相成度右御返事迄申上候

卒業生成績發表の手間どりしと二三年前の卒業生の他に移りたき志望のものを聞き合せ居りたる爲め返書遲延不惡御海恕。

此頃は方々から來客にて忙殺せられ候追々暑氣に向ひ讀書も苦しく候御自愛專一に候　以上

六月二十七日　　　　　夏目金之助

小島武雄様

二五三

明治三十八年七月二日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地喜中方野村傳四へ　〔はがき〕　朱書、署名には「先生」とのみあり

御　　屆

一　パナマ製夏帽　一

右者本日本鄕唐物店にて相求め爾後カブッテあるき候間御驚きにならぬ樣致度右御屆及候也

二五四

明治三十八年七月十三日　午後一時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地喜中方野村傳四へ　〔はがき〕

龜井兒面白く候垣隣りよりあの方が感じがよろしく候。あれはホト、ギス向きかき隣りの方は却つて帝國文學むきと存候　以上

二五五

明治三十八年七月十六日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より名古屋市西瓦町百〇五番戸中川芳太郎へ

手紙を頂戴難有拜見しました其後君は大分勉強の由結構です何もする事がないとか外に面白い事がないと勉強するものだから學者になるには君の樣な境界が第一番よいと思ふ。交際が多かつたり女に惚れられたりして大學者になつたものはない。

僕も勉強はしたいがいやはやの至りだ。一昨日迄は入學試驗の監督を仰せつけられる。うちへ歸ると今年卒業の諸先生が口の爲めに談判にくる。支那から友人が歸つてくる。新小說の社員が來て戰後の文壇に對する所感をきかせろなかといふ。中學世界で世界三十六文豪を紹介するから沙翁を受持てといふ。中央公論のチョイン先生がきて何かかけといふ。隆文館が來て猫を出版させろといふ。金尾文淵堂なるものが何か出版するからかけといふ。而して來學年の講義は作らねばならず。明治大學の試驗の答案は見なければならず。そこへ持つて來て胃が惡いから眠くなる。本を讀むと批評的に讀むから少しも面白くない。作中から自分の作の事を思ひつくから少しも捗取らず。ビヤホールへも行かないが晩にはよく寅彦先生や四方太大人それから傳四君は無論奇瓢眞拆兩文豪も御出になる。是で大學で一人前の事をして高等學校で一人前の事をして明治大學で三分一人前の事をして文士としても一人前の事を仕樣といふ圖太い量見だから到底三百六十五日を一萬日位に御天と樣に掛合つて引きのばして貰はなくつちや追ひつかない話しさ。

先達日本新聞がきて何でも時々かけといふから。僕もつくづく考へたね。毎日一欄書いて毎日十圓くれるなら學校を辭職して新聞屋になつた方がいゝと。然し是は日本新聞で承知する譯のものでないから矢張り赤門の中で妙な事を云つて暮らす積りですな。然し猫をかいて先月十五圓貰つたから早速パナマの帽をか

つて大得意で被つて居る所などは隨分小供の様だ。然るに先日友人が支那から歸つて來て同じくパナマの帽を被つて居る然も僕のよりずつと上等であるのを見て猫をかくより支那へ出稼ぎをするが得策だと思つた。

不平をいふと人間は際限がない僕杯も不平だらけだが妙なもので不平ながらぴん／＼實在して居るから不思議だ。今にハムレット以上の脚本をかいて天下を驚かせ様と思ふがいくらいゝものをかいても天下が驚きさうにもないから已め様とも思ふ。　以上

七月十五日　　　　　　　　　金

中川先生

二五六

明治三十八年七月十七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎氏へ

尊翰拜誦御問合せの件は別紙にかいて差し上げます。是で御間に合ひますか知らん。君はモリエルの專門家になつてモリエル全集の翻譯と云ふ奴を御出しなさい。僕は翻譯は嫌だ。骨が折れる許りで思ふ様にうまく行かない者ぢやないですか。ホトヽギスの猫の一二は此正月と二月の號だと記憶して居るが兩號共賣切れで一部も殘つて居ません。皆川のソラブトラスタムあれは御意に逆ふ様だが面白くない小生は一二頁讀んで御免蒙つたです。僕なんかは矢張先生の俳體詩の方がいゝ。元來今の新體詩と云ふ奴は言葉許り飾つて何を云つてるのか分らないのは閉口します。あんなものより平々凡々調で趣味のある嫌味のない事を歌ふ方が洒落て居ますよ。一體小説でも新體詩てゝいやにしつこい、あぶらこい奴が流行するのは時

節柄胃嚢へ納りきれません。僕米が食へれば教員をやめて明治の文士とすます所ですが此樣子では猫の續きもかけさうにありません。　失敬

七月十七日　　金之助

若杉モリエル樣

二五七

明治三十八年八月三日　午後二時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國大磯町北本町田村屋野村傳四へ　〔はがき〕

『垣隣りで七圓總の子で五圓都合十二圓では心細いなあ。あすこに白百合が見える。一つ白百合と云ふ題でかゝう。是が十圓か。うまい事に氣がついた』

八月三日

二五八

明治三十八年八月四日　午後六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國大磯町北本町田村屋野村傳四へ　〔はがき　表の署名に「こまる先生」とあり〕

事業如山多く時間かくの如く短かし僕が二人になるか一日が四十八時間にならなくて〔は〕到底駄目だ。猫も何も書けさうにない。圓左會へも行かれさうにない。岩崎が避暑にきて居るならよろしく。

神泉は出ない方がいゝ。僕の筆記抔は何がかいてあるか分らない

二五九

明治三十八年八月六日　午後一時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國大磯町北本町田村屋野村傳四へ〔封筒の名宛に「野村傳四先生」とあり、裏に「東京は本郷區駒込の千駄木夏目金之助なる者より八月六日」と三行に認めあり〕

一寸申上げますが

あなたの浴場スケッチは第一第二ともうまいものですあゝ云ふ奴がつゞくと名文が出來ます、あゝ云ふ呼吸を飲み込んだ人は名文家です、從つて君も名文家だらうと思はれます。今の文章家といふのは心掛がわるいと思ふ。あれはあれ丈でよいから長いものであゝ云ふ山をこしらへ玉へ。神泉に出た卷末の本郷座の合評は當時愚なものだと思ふたら中々君面白いぜ。岩崎に逢はなければよろしく云はんでもよろしい。序ながらあの別莊を作るに何圓かゝつたか一寸取調べて頂きたい。風葉先生は此前もツルゲネーフか何かを譯して自作の如く御吹聽に相成つたのだから今回の荒野のりやも御驚きになる事はない。人殺しも毎日あると平氣になるものだ。今の世は度胸が大事ですよ。然し僕はその所謂荒野のりやなるものを拜見仕らんのだがね。十頁許り讀んで何でも西洋物と氣がついたが興が乘らんから御やめにした其代り山岸荷葉君の葉屋の若旦那といふ奴を通讀したがあの若旦那の言葉は頗る氣に入つたね。僕の細君の妹の亭主に工學士が居てね、其工學士先生がまるであの若旦那だから餘程僕は愉快によんだ。僕春陽堂から反物一反を頂戴仕つた戰後文壇の趨勢は遠からず單衣に化ける事と存じて居る。神泉に出て居る梨雨先生の春の夜と申す新體詩を御覽下さい。あれは往來を色眼ばかり使つてあるく女學生位な程度だ。其他色々あるが御やめ。寒月君は葉書のつゞきもの丶小說をよこす。何でも夫婦の中に子なきを憂ひて大磯へ貝を食ひに行くと

云ふ趣向だがね。頗る振つたものさ。是はゾラ君の翻案ださうだ。

八月六日　　　　　　　　　　　　　金

傳四先生

二六〇

明治三十八年八月七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鈼太郎氏へ

拜啓御歸朝後一寸機會なく御面語の折なく打過候處愈御清穆奉賀候
偖今回ホト、ギス所載の拙稿を大倉書店で出版致し度と申すについては其内に插畫を入れる必要有之之を大兄に願ひ度事小生も書肆も一樣に希望につき御多忙中甚だ御迷惑とは存じ候へども御引受け被下間敷や實は製本も可成美しく致し美術的のものを作る書店の考につき君の筆で雅致滑稽的のものをかいて下されば幸甚と存候猶委細は此手紙持參の番頭より御聞取被下度條件も同人と御とりきめ願候　以上

八月七日　〔封筒には八月八日とあり〕

夏目金之助

中村不折樣

二六一

明治三十八年八月九日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より相模國大磯町北本町田村屋野村傳四へ　〔はがき　表の「田村屋方」の下に括弧して「岩崎男爵様御別邸傍」とあり、署名に「空氣風呂發明者」とあり〕

拝啓今日晴天大風にて障子を立て切り密室内にて空氣風呂に入浴仕候處至極工合宜敷早々御歸京の上御試驗相成度先は右御案内迄　匆々頓首

二六二

明治三十八年八月九日　午後二時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町六番地野口淸氏へ　〔はがき〕

昨夜は失禮致候其節御依賴の表紙の義は矢張り玉子色のとりの子紙の厚きものに朱と金にて何か御工夫願度先は右御願迄　匆々拜具

二六三

明治三十八年八月十日　午後二時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より赤坂區青山南町一丁目五十六番地坂尾内野間眞綱へ　〔はがき〕

雨になろかと　君待つ宵は
雨ともならで　ほとゝぎす
君しまさずば　寐たものを
あの曉の　ほとゝぎす

これは下手だ君の方がうまいあれを仕舞迄御かきなさい

十　日

二六四

明治三十八年八月十一日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より名古屋市西瓦町百〇九番戸中川芳太郎へ

宮津の御祭の手紙拜見。田舍の事がどうも面白い。御婆さんの鷄は氣の毒だよろしく云つてくれ玉へ。東京は雨ばかり降つて閉口の處二三日前から大分熱くなつて晴天。熱いときに汗をかいて家の内にうんうん云つて居るのは乙なものだ何だか俳味があると思つて澄してゐる。皆川は歸省、傳四は大磯へ避暑寅彦も歸省。僕のうちへくる定連は大分減つたので少々日の長い樣な氣がする。ところが來年の講義が氣にかかつて義太夫の文句ぢやないが食ものんどへ通るまいと思ふ程でもないが實際大學がいやになつて仕舞つた。先日厨川が來てペーターの本を借せと云ふて持つて返つた。船へ乘つて月を見て美人の御酌でビールが飲みたい。神泉といふ雜誌の小澤平吾と云ふ先生が來て月見に來いと云ふたが是は御免蒙る。日比谷へ音樂堂が出來た。何だか六づかしいプログラムでやるぞ。傳四は大磯から毎日スケッチをよこす。あれは君無暗に筆まめな男だ。僕本屋の請に應じて猫を出版する二百八十頁位になる。うつくしい本を出すのはうれしい。高くて賣れなくてもいゝから立派にしろと云つてやつた。何で「も」插畫や何かするから壹圓位になるだらうと思ふ。到底賣れないね。うれなくても奇麗な本が愉快だ。あとは追々

八月十一日

夏　金

中川芳太郎先生

二六五

明治三十八年八月十九日　午後二時三十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區向坂町第一號富士樓高田知一郎氏へ

拜啓

先日新潮社の高須賀淳平といふ人が來ましてね、一夕雜誌をやつたら、先生すぐ是を文章にして「みづ

まくら」夏目漱石など、號して此度の新潮へ載せたんですがね。其内に神泉に出た君の春の夜といふ新體詩の批評がまぐれ込んで居るが夫で見ると何だか君を故意に罵詈した樣で甚だ恐縮の至ですがね。是は淳平君の口氣が少々惡るいので僕の主意ではないのですよ。あんなつまらない話をこんな口調で載せ樣とは思はなかつた。かうなつては僕から君にあやまるより仕方がない。どうか御勘辨下さい。尤も春の夜の惡口は少々申しましたよ。

新潮を一部御覧に入れます。他日御面會の節は改めて閉口します。

夏目金之助

梨　雨　先　生

二六六

明治三十八年九月五日　午前十時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地有隣館野間眞綱へ　〔はがき〕

此前の日曜には四方太と上野の日月會を見て根岸の岡野から中村不折の家へ行つて晩は若竹へ朝太夫をきゝに行つたので失敬しました花の本慥かに落手君の鮎つりは何だか調はぬ感じがある尤も面白い所もあるから再考してはどうだ。神泉はえらいものだ。梨雨先生のダンテはうまい。あとは多忙でよまない。「一夜」の批評難有拜讀あればだれもほめてくれ手があるまいと思つて居た。秋風が吹き出してから好い氣分だ。呑氣な身分になつて遊山でもしてあるきたい。學校が始まるのは何よりいやだ。草々

僕の神經は學校に適しない樣に出來てるんだらう。

二六七

明治三十八年九月十一日　午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井信中川芳太郎へ　〔はがき　表の署名に「金やん」とあり〕

昨日は野間と野村とが朝から來て晝飯を食つて居たら寅彦が來て四人で神田へ行つて寶亭で晩食をしました。寅彦君が奢つた。中々金持だ。「一夜」の批評非凡大變なほめ方で少々恐れ入つた次第然し悪口されるより愉快です。今日高等學校へ行つたら畔柳がわからないと云ふた〔か〕ら。わからんでも感じさへすればよいのだと云ふた。芥舟先生は少しも感じて呉れないらしい。して見ると君なんかは天下の知己ですよ。

二六八

明治三十八年九月十一日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井信中川芳太郎へ

只今三重吉君の一大手紙を御送りに相成早速披見大に驚かされ候。第一に驚ろいたのは其長い事で念の爲め尺を計つて見たら八疊の座敷を竪にぶつこぬいて六疊の座敷を優に横斷したのは長いものだ。あれ丈のものがかけるなら慥かに神經衰弱ではない。休學などゝは思ひも寄らぬ事だ。早速君から手紙をやつて呼び寄せ玉へ。僕は來週からでなくては講義をはじめない外の先生も大概そんな事だらう是非出京し玉へと云ふてやり給へ。たとへ只ぶら〳〵學校へ出たり出なかつたりして居ても夫で澤山だ。休學した積りで東京に居るがよろしい。親が病氣で一日も早く成業して見せ樣といふものが一年間休學する理窟があるものか一日も早く卒業するのが義務である。是は君から是非手紙で云ふてやつてくれ玉へ。僕の考だと云ふてくれ玉へ。何でもかんでも學校に籍さへ置いて居れば自然天然と文學士になる所を休學なんてつまらない。出て來て方々遊んであるいて時々は金やん先生の家抔へ遊びに來れば神經衰弱なんかすぐ直つて仕舞

ふさ。

　それから次に驚ろいた事は三重吉君が僕の事をのべつにかいて居る事だ自分のおやぢの事より僕の事が餘程長くかいてある。あの手紙が三間の長さとすると二間は慥かに金やんの事で埋つて居る。僕の樣な人間が學生の一人の頭腦を是程迄にオキユパイして居るとは夢にも考へなかつた。あの手紙を讀むと三重吉君は僕の事を毎日考へて神經衰弱を起した樣に思はれる。僕が十七八の娘だつたら。すぐ樣三重吉君の爲に重き枕の床につくと云ふ物騷な事になるのだが幸ひ吉原から買つて來た油壺なんかを乙がつて居る金やんなので、こつちにとつては藥代も入らずに濟みさうなのは先以て結構仕合せの至りである。然しいくら漱石だつて、金やんだつて、講師だつて、髭が生へてたつて、三重吉君からこれ程敬慕せられて難有［く］思はんといふ次第のものではない。難有いなどは通過して恐ろしい位だ。三重吉君は僕の細君抔より餘程僕の事を思つて居るらしい。然もそれが學資を貢いだと云ふのでもなし周旋をしたと云ふのでもなし。金を貸した事は無論ないのだから一層難有いと云はなければならない。僕は是で中々自惚の強い男だからある人には好かれて然るべき性質を有して居ると自信して居るがね――然しあれ程迄に敬慕され樣とは氣がつかなかつた。あれは己惚以上だよ。豫期を超過する事五十五六倍だよ。元來人から敬慕されるとか親愛されると急に善人になりたくなるものだ。敬慕親愛に副ふ丈の資格を一夜のうちに作りたくなるものだ。僕も今夜は急に善人になりたくなつた樣な氣がする。天下の人がみんな三重吉君の樣に僕を敬愛してくれて居たら僕は今頃はとくに孔夫子か基督か乃至釋迦牟尼位にはなつて居るよ。恨むらくは氣に喰はない馬骨野郎が充滿して居るのでかやうの次第で遂には三重吉君の好意にすら負く樣な譯に相成るのは汗顏の次第だが考へると是は僕のわるいのではない馬骨君のわるいのだから三重吉君の想像する如き好人物でなくて切角の豫期を失望させても是は僕の責任ぢやないから其邊の所は篤と三重吉君に斷つて置いてくれ玉へ。

三重吉は蛸壺をくれる筈の處壺を括つた繩が切れて御ぢやんと相成つた由甚だ遺憾の至だが金やんも其好意に對して何か進呈しやうと思ふが別段勸業銀行の債券にも當らん事だから思ふものも差し上げる譯に參らんから。近日出版の吾輩は猫である一部を謹呈する事に致すから是も御報知を願ひたい。

三重吉は僕を愛するとか敬ふとか云ふ外に僕は博學だとか文章家だとか良教授だとか云ふて居らん。そこで君の僕に對する親愛の情は全くパーソナルなので僕自身がすきなのだと愚考仕る。そこが甚だ他人と異なる所で且甚だ難有い所である。だから僕が「吾輩は猫である」を獻上するに就ても猫の文章を讀んでくれろとか滑稽を味つてくれろとか云ふ考で獻上するのではない。單にパーソナル・アッフエクションを表する微意であるから是も序に御傳言を願ひたい。

あれ丈長く僕の事をかいて居り又あれ丈僕の事をほめて居るが少しも御世辭らしい所がない。昔の文章家の樣にウソらしい文句がない。誇張も何もない。どうしても眞摯な感じとしか受取れん。是が僕の三重吉君に尤も深く謝する所である。

あの手紙は僕がこの手紙と同じくなぐりがきにかき放したものであるらしいが頗る達筆で寫生的でウソがなくて文學的である。三重吉も文章をかいて文章會へでも出席したら面白いと思ふ。

右御挨迄に草々認めた許りであるから前後亂雜で讀みにくゝ解しにくいと思ふがどうか僕の云ふ事丈を三重吉君に傳へて下さい。尤も望む所は一年間田舍へ引籠るのをやめて出京する樣に勸めて下さい。僕には三間の手紙をかく勇氣がないから是で御免を蒙ります。實際三重吉君より僕の方が神經衰弱さ。親分が大神經衰弱だから子分は少々神經衰弱でも學校へ出るがよからう。

九月十一日夜

金　や　ん

芳　太　郎　様

二六九

明治三十八年九月十二日　午前九時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地森中方野村傳四へ　〔はがき〕

傳四先生。僕は今週休んで來週から開講と致す積りだから此旨を一寸聽講の諸君子に報知してくれ玉へ。むだ足をさせるのも氣の毒と思ふ。

十　二　日

二七〇

明治三十八年九月十六日　午後九時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奧井館中川芳太郎へ

一寸申上ます。昨夜來客があつて歸らうとすると帽子がない。玄關にあつた小生のゴム製の雨具がないよつて泥棒だらうと云ふ鑑定であつた。

所が夜更に及んで月を見ながら椽の下をのぞいて見たら君から來た三重公の手紙を入れた狀袋がある。而して中身がない。して見ると是も泥棒君の所爲だと思ふ。三重吉君が三間餘の手紙を天下の珍品と心得て持つて行つたとすれば此泥棒は中々話せる泥棒に相違ない。然し君の所へ來た手紙を僕がぬすまれて平氣で居る譯にも參りかねるによつて一寸手紙を以て御詫を致す譯だがね。どうか御勘辨にあづかりたい。向後氣をつけると申したいが僕の家は是より氣のつけ樣がない。氣をつけるなら泥棒氏の方で氣を付けるより仕方がない。尤もあんなうつくしい手紙を見たら泥棒も發心して善心に立ち歸るだらうと思ふから其内手紙も自然どこかゝら戻るかも知れない。戻つたら正に返上仕るから左樣御承知を願ひ度い。先は古今

未曾有の泥棒事件の顚末を御報に及ぶ事しかり。是で見ると今迄も色々なものが紛失して居るのかも知れんが少しも氣がつかない。隨分物騷な事だ。此つぎは僕の書齋を焚き拂ふかも知れない。泥棒が講義の草稿を持つて行つたら僕は辭職する譯だが泥棒君も中々仁惠のある男だ　以上

九月十六日　　　夏　金

中川先生

二七一

明治三十八年九月十七日　午後二時二十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

啓上文章會開會の議敬承仕候小生も今月末迄には猫のつゞきをかく積りに候會日は九月三十日が土曜につき同日午からとしたら如何かと存候。就ては會場の儀今迄小生宅にて催ふし候處細君アカンボ製造中にて隨分難儀さうに見受候に就ては今度は一寸御免蒙りどこかほかへ持つて行き度と存候會員の宅でなくとも貸席抔可然か是は御撰定にまかせ候。さうなると公然會費を徵集する必要相生じ候。さうなると出るものが少なくなると存じ候。又報知の御手數も大兄を煩はす方がよくなつて參り候。以上につき御考如何。一寸伺上候。

每日來客無意味に打過候。考へると己はこんな事をして死ぬ筈ではないと思ひ出し候。元來學校三軒懸持ちの、多數の來客接待の、自由に修學の、文學的述作の、と色々やるのはちと無理の至かと被考候。小生は生涯のうちに自分で滿足の出來る作品が二三篇でも出來ればあとはどうでもよいと云ふ寡慾な男に候處。それをやるには牛肉も食はなければならず玉子も飲まなければならずと云ふ始末からして逐々心にも

なき商買に本性を忘れるといふ顚末に立ち至り候。何とも殘念の至に候。（とは滑稽ですかね）とにかくやめたきは教師、やりたきは創作。創作さへ出來れば夫丈で天に對しても人に對しても義理は立つと存候。自己に對しては無論の事に候。

「一夜」御覽被下候由難有候。御批評には候へどもあれをもつとわかる樣にかいてはあれ丈の感じは到底出ないと存候。あれは多少分らぬ處が面白い處と存候。あれを三返精讀して傑作だといふてくれたものが中川芳太郎君であります。それだから昨日中川君と傳四君に御馳走をしました。尤も傳四君は分らないと云ふて居ます。

九月十七日　　　　　　　　　　　　　　　　　　金　　生

　　虛　先　生

俳佛の御說教中々面白くかゝれ候

二七二

明治三十八年九月二十四日　午前零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番道館野間眞綱へ

拜啓風邪にて御臥床のよし嘸かし御退屈の事と存候たまに病氣にかゝるのは一寸洒落たものに候へども發熱甚しくと有つては隨分御苦しみの事と存候近ければ水菓子でも御見舞に差し上げる所だがあまり遠方だから其にも及ぶまいと思ひ差控申候。小生日々來客責めにて何を致すひまもなく候然し來客の三分二は小生にインテレストをもつて居る人々だから小生の方でも逢ふとつい話しが長くなる次第必竟自分で來客

を製造して自分で苦しんで居るに過ぎぬ愚見に候。夫故心ばかり狼狽して仕事は一向出來ず愛想がつき申候。學校をやめたら創作家になれるだらうなかと己惚るのも矢張り本來の愚見かと存候。只今中川が參り長らく話しをして返り候。橋口の母は死去のよし氣の毒と存候一寸尋ねたいと思ひ候へども是も右の事情にて果さず候。當人甚だ寂寞を感ずる由申來候。中學校教師の件病中態々難有候早速心當りへ報知可申候。佐治はどうか口にありつきさうに候。濱武は横濱へ參り候。金子と申す人に相談致さうかと存候　先は御攝養專一に候。病氣で何か不自由な事があるなら手紙で遠慮なく御申聞可被成候　以上

九月二十三日　金

眞綱様

二七三

明治三十八年九月　本郷區駒込千駄木町五十七番地より皆川正禧へ

昨日は二三人の來客あり後寺田寅彦のすゝめにて上野から谷中あたりを逍遙致候留守中御來訪失禮致候暫らく御目にかゝらず候處不相變御機嫌の事と存候小生何だか陸へ上つた魚の如く喘々として消光一寸免職になつて半年許り休養が致度候

佐治君は浦和中學に内定野間は風邪で寐て居ます中川は眼病で眼鏡をかけて居ます傳四はのんきな事をいつて居ます白馬會の出品は大概前年の舊作ですこれと申感服したものはありません

近頃は創作をやるひまがないので何だか筆が動かない様な氣持です

其内御面會の上萬縷　草々　〔うつし〕

二七四

明治三十八年十月二日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎氏へ

拜啓先達御質問の件は多忙にて御返事を怠たつて申譯がない
　コルネイユと申す先生の作は自慢ぢやないが一つも讀んだ事がない。此分では生涯讀む事はなからうと存じます。そこへコルネイユが出て來たから大恐縮で手紙をポケットへ入れた儘にして置くと昨日三年生の中川芳太郎と云つて博學の男が來たから君コルネイユを讀んだかいと聞いたら讀みはしませんが學校で調べて上げても宜しう御座いますと云ふから難有い是非願ひ度と君の手紙を渡しました處今朝中川君は別紙の通デコ〳〵な佛文をかいて來ました。夫を早速君の方へ廻しますから御讀み下さい。
　夫からアンドラインのある所はね
　Lag.　サア金を茲へ置くぞ
　Mol.　わしの金も茲にある十兩は現金但し九十兩は *on Amynta* （on Amynta ト云ふのは僕にも分らない）
　Lag.　よろしい
　Mol.　異存はない
位な所でせう。よく分らない　先は右用事迄　匆々頓首

十月二日　　　　金之助

若杉樣

二七五

明治三十八年十月十一日　午前零時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

君塚の一夜面白く拜見致候。少々主客の言語動作が故意にひねくれて居る所が厭味に候。たとへばにらめなくてもいゝのに河童の畫をにらめたり仰ぐ必用もないのにバイロンの像を仰いだりする事に候。其他の光景は甚だよろしく候。會話は少々文句有之候。あれは連句丈にあらためた方がよからんかと存候。あの儘では會話としてあまり振はざるのみか僕の「一夜」中の會話を強いて眞似た樣に思はれ候。兩人が對座して連句をやつて居るやうに少し直して見ましたこんど見せます。

僕來客に食傷して來客が大嫌に相成候當分こない事に御きめ被下度候

猫出來一部一兩日中に進呈致候

十月十日　　　　　　　　　　金

眞　綱　樣

二七六

明治三十八年十月十一日　午前九時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込追分町奥井館中川芳太郎へ　〔はがき〕

猫を三重吉君に送つて下さい。僕は猫を二十二部もらつた。金はまだ一文ももらはない。近來來客に食傷して人が嫌になつたから當分きてはいけません。手紙はいくらでも頂戴

十月十一日

二七七

明治三十八年十月十二日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

御手紙は拜見しました休學の件も萬不得已事情ありての事なれば却つて出京を御勸めして一時でも考へ込ましたのは甚だ恐縮の至です。

休學中々學の教師といふけれど教師抔をしては神經衰弱が起る許りで決して休學にはなりませんよ。夫も手近に面白い口でもあれば格別ですがさうでなければ矢張り島へ渡つて遊んで居る方がいゝ。僕も時があれば小笠原島位へ一寸流されて見たい。兩三日前猫が出來ましたから君に一部あげやうと思つて中川君に托して置きました今頃は屆いて居るでせう。近來來客が無暗にあるので大に人間がいやになつたから五六人に手紙を出して當分來てはいけないと通知をしましたら、其通知を受けた一人の寒月君が通知を受けた翌日すぐやつて來ました。是では切角の通知も役にたゝない譯です。中川君も此通知を受けた一人です。

小生も君の樣に敬慕してくれる人があると大分えらい樣ですが裏の中學生や前の下宿のゴロツキから馬鹿にされる所を見ると一文の價値もないグータラですよ。世の中は妙なものであります。小生も大學を一年休講して君と一所に島へでも住んで見たい。　頓首

十月十二日　　金

鈴木三重吉樣

二七八

明治三十八年十月十四日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ　〔はがき〕

拜啓するめ頂戴難有候。僕はするめ各商買（原）道具で贈答をするのは一寸面白い譯ですな。此次ぎ何か書いて一本を獻上する際にはどうか正金銀行の株券を下さい。

十月十五（原）日

東京本郷駒込千駄木町五七

夏目金之助

二七九

明治三十八年十月十九日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區竹早町百二十番地愛知社内中川芳太郎へ

御手紙拜見、加計先生御出京のよし、田舍へ這入つて適意の書を讀んで暮らせれば夫が人間の最幸福だと思ふ。そして年に一度東京へ出て來て遊べば猶結構だ。僕の音を蓄音機に詰込む事一向差し支無之。然し詰め込むなら詰め込む的の文句か音聲がよからうと思ふ。不幸にして歌もうたへず詩吟も出來ず只平生の駄辯より外に能のない人間だから困ります。僕來週は學校の行軍だからひまになる。（僕は行軍へ出た事はない）遊びに來給へ。加計君が其時迄居るなら一所に御出なさい。

今日高等學校で一人の學生を大きな聲でしかり付けてやつた。さうして全級にこんなに出來ないと皆落第だと宣告した。こんな人々は生涯僕の聲をきくのが厭だらう。廣島から漱石の聲を詰めに來たと聞いたら吃驚して目を舞はすだらう。　頓首

十八日　　　　金

芳太郎様

二八〇

明治三十八年十月十九日　午後三時五十分　本郷区駒込千駄木町五十七番地より愛媛県温泉郡今出町村上半太郎氏へ　〔はがき〕

霽月先生の芳墨を誦する事前後二回。此頃は應答の句も出來ぬ始末なるを深く惜む。媾和約成り、天下太平、英艦來泊、素貧如故、秋氣入衣　頓首

二八一

明治三十八年十月二十日　午後三時五十分　本郷区駒込千駄木町五十七番地より熊本市内坪井町百二十七番地奥太一郎氏へ

拝啓拝見仕候其後は存外御無沙汰に打過申候熊本も其後大分移動有之候の様子奈須川君には當地にて一寸面會致候山縣君入學には小生の尤もよろ〔こ〕ばしく思ふ所に御座候熊本も永く居ると存外あきる所に候が大兄の如き人に始終一日の如く御勤めにて敬服の至に不堪小生如きはどこへ參つても教師がいやで生涯覺れない關突張に候人は大學の講師をうらやましく思ひ候由金と引きかへならいつでも譲りたくと存候御令嬢御誕生の由結構に候中々容易に生長仕らざる樣ながらズン／＼のびて行くには一寸驚く事も有之候小生はあとから小供に追ひかけられ居候氣持に候。近來非常の多忙先達中抔は來客ばかり日々兩三名も引き受け實に閉口致し候爲め五六人に手紙を出して當分來てはいけないよと申候處其翌日其一日〔原〕がすぐ參り候

高等學校は樂なものに候小生は高等學校で食つて餘暇に自分の好きな事を致し度と存候。舍監抔は一日も致すべきものに無之と存候第一高等學校は熊本より大分氣樂に御座候同僚の家抔へ參りたる事無之先方

よりも參りたる事無之候。大學も其點は頗るのんきなるものに候。
閑窓に適意な書を讀んで隨所に山水に放浪したら一番人生の愉快かと存候
小生は教育をしに學校へ參らず月給をとりに參り候。自餘の諸先生も正に斯の如くに候。以上

十月二十一日　　　　金　　生

奥　太　一　郎　樣

二八二

明治三十八年十月二十三日　午前十時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市元濱町二丁目一番地渡邊和太郎氏へ　〔はがき〕

今日は觀艦式に御招待を蒙つてありがた〔く〕御禮を申します。小生も一寸參りたいが汽車が非常に込み合ふだらうと思ふのと今一つは八時前に尊宅に伺ふ勇氣がないので失敬します。あしからず

金

二八三

明治三十八年十月二十九日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鈼太郎氏へ

拜啓かねて御面倒相願候「吾輩は猫である」義發賣の日より二十日にして初版賣切只今二版印刷中のよし書肆より申來候。是に就ては大兄の插畫は其奇警輕妙なる點に於て大に賣行上の景氣を助け候事と深く感謝致候拙作も御蔭にて一段の光輝を添候ものと信じ改めて茲に御禮申上候　以上

十月二十九日夜　　　　金

不折畫伯
　　座下

二八四

明治三十八年十一月一日　午後五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ　〔繪はがき〕

拜啓本一日廣島の柿と嚴島の貝を頂戴。御心にかけられわざ／＼御送り被下難有存候。
先達加計君がきてとう／＼僕の音聲を蓄音機へ入れて歸りました。
東京は東郷大將の歡迎會やら、ブライァンがくるやら中々賑ひます。
小生は不相變胃病。晩餐を食ふとぐう／＼寐て仕舞ひます。是で大學の教師が勤まるかは頗る疑問です。

二八五

明治三十八年十一月三日　午前十時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地寂心方野村傳四へ　〔はがき　宛名に「野村傳四先生」とあり、署名に「夏目先生」とあり〕

中央公論が出たから是非買つて讀んで而して褒めて頂戴。本日本郷の雜誌屋で文庫の六號活字を見たら「夏目漱石の吾輩は猫である大牧壹圓、金が餘つて困つて居る人でなければ買ふべからず。くれても讀むのが惜しいヤ」とあつた。此六號活字先生は買ふ事も出來ず貰ふ事も出來ないのだらうと思ふ。依つて二版が出來たら一部獻上し樣と思ふがどうだらう。烏みつ先生へ宛てゝやればよからうと存ずるが如何。

二八六

明治三十八年十一月三日　午前零時四十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ〔はがき〕

頂戴仕つた柿を其後食つて見た處非常に旨いですよ。毎日食後に一つ宛たべます。家内のものもたべます。且は小供がおもちやにして居ます。

餘は後便

加計君によろしく

あすは天長節で休みです。うれしい。

二八七

明治三十八年十一月五日　午後六時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より神田區三崎町三丁目一番地前田儀作氏へ

拜啓高著夏花少女御惠贈にあづかり難有拜受仕候只今少閑をぬすんで一氣に讀了致候小生は多く新體詩と申すものを讀まず詩集を通讀致し候は大兄の御作を以て始めと致候。多く此種の文字に接せざる爲め所所難解の所有之候へども全體の上に於て妖麗瑰琦の感を生じ候爲め不少愉快を覺候。御返禮の爲め拙著至極卑俗のものに候へども一部贈呈致し度と存候處只今再版印刷中にて刻下の間に合かね候間是はあとより差上ぐる事と致候こゝには御禮のみ申上候

猶來年新年號に蕪稿御入用のよし拜承は仕り候へども生憎正月は方々より依賴を受け到底一人にて引き受けかね候位先づ義務的のもの一二を除くの外は不得已謝絕致し居候切角の御懇望を空くする段甚だ不本意の至には候へども學校其他多忙にて閑日月なき目下の境遇故事情御察しの上あしからず御容赦被下度候

頓首

十一月六日

金

林 外 先 生

座右

二八八

明治三十八年十一月六日 午後二時五十分 本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地吉陽館野間眞綱へ 〔はがき〕

僕一二重廻しを作りたい。に依つて、君の洋服屋を一寸よこしてもらひたい。午前は不在、午後は二時半過ぎ。但し暗くなつては縞が見えないから駄目。序に洋服屋の名と番地を教へ玉へ。昨日高田知一郎先生がくる

二八九

明治三十八年十一月 本郷區駒込千駄木町五十七番地より皆川正禧へ

拜啓先日は薤露行の批評頂戴難有候今般中央新聞にて文藝に關する日曜附錄發刊の計畫ある由にて福原君來訪何か寄稿を求められ候處生憎多忙にて何もかけず因て思ひ出し候は先日神泉へ出す爲に貴兄が岡倉の許へ行つて筆記した原稿はまだあの儘にて御手許にある筈故あれを此方へ御廻し被下候はゞ小生の義理も立ち中央新聞社の便利にもなり福原君の責任も全くなると云ふ次第ですが如何ですか此依賴を御引き受け下さる譯には參りますまいか尤も岡倉君へは是非照會の上許諾を得ねばならん事と存じますが御不都合なきかぎりはよろしく御取計ひを願ひます

猶委細は此次御面會の上萬縷可申上候先日梨雨君來訪明星に何か書いてくれと申され候是も多忙にて乍

不本意斷り申候　以上　〔うつし〕

二九〇

明治三十八年十一月十日（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

啓

三重吉さん一寸申上ます。君は僕の胃病を直してやりたいと仰やる御心切は難有いが僕より君の神經痛〔原〕の方が大事ですよ早く療治をして來年は必ず出て御出でなさい。僕の胃病はまだ休講をする程ではないですが來年あたりは君と入れ代りに一年間休講がして見たいです。大學の教師だとか講師だとか申して評判をしてくれますが一向ありがたくはありません。僕の理想を云へば學校へは出ないで毎週一回自宅へ平常出入する學生諸君を呼んで御馳走をして冗談を云つて遊びたいのです。中川君抔がきて先生は今に博士になるさうですなかと云はれるとうんざりたるいやな氣持になります。先達て僕は博士にはならないと吳れもしな〔い〕うちから中川君に斷つて置きました。さうぢやありませんか何も博士になる爲に生れて來やしまいし。

　君は島へ渡つたさうですね。何か夫を材料にして寫生文でも又は小說の樣なものでもかいて御覽なさい。吾々には到底想像のつかない面白い事が澤山あるに相違ない。文章はかく種さへあれば誰でもかけるものだと思ひます。……僕は方々から原稿をくれの何のと云つて來て迷惑します。僕はホト、ギスの片隅で出鱈〔目〕をならべて居れば夫で滿足なのでそんなに方々へ書き散らす必要はないのです。……文庫といふ雜誌の六號活字がよく僕のわる口を申します。……文章でも一遍文庫へ投書したらすぐ褒め出すでせう。……段々秋冷になりました。今日は洋服屋を呼んで外套を一枚、二重廻を一枚あつらへました。一寸景氣

ないゝでせう。猫の初版は賣れて先達印稅をもらひました。妻君曰く是で質を出して、醫者の藥禮をして、赤ん坊の生れる用意をすると、あとへいくら殘るかと聞いたら一文も殘らんさうです。いやはや。一寸此位で御免蒙ります。又ひまが出來たら何かかいてあげます。

十一月九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

三　重　吉　樣

三重吉さん。先生樣はよさうぢやありませんか、もう少しぞんざいに手紙を御書きなさい。あれはあまり叮嚀過ぎる

二九一

明治三十八年十一月十日　午前十時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町、香取館内野間眞綱へ〔はがき〕

拜啓本日洋服屋參り豫定の如く新調のもの申しつけ候。御手數難有存候。薤路行の批評も難有候。あの手紙は三日の消印あるにも關せず七日に到着馬鹿「々々」しいぢやけーせんか。附箋も說明も何もありやせん。だから遞信大臣に逐一事情を報告に及んでやりました。僕が大臣に手紙を出したのは生れて始めてです。尤も遞信大臣の名を知らなかつたから二三人に問ひ合して大浦君だといふ事を確めてかいてやりました。あの手紙を見て郵便配達の取締を嚴にして、且延着の理由を僕の所へいふてくれば大臣だが、平氣で居るなら馬鹿だ――ねー君。

二九二

明治三十八年十一月十一日　午後五時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ〔はがき〕

野間君。小澤〇〇は詐欺師なる事相分り大變な奴ですよ。文科大學助教授文學士小澤〇〇なる名刺をふり廻し諸所をごまかしてあるく由。――昨日内田不知庵から注意が參り。本日は神泉に關係の畫家古城天鳳一君參り多額の畫をかたられた話を致し候。御用心の事。全體どうしてあんなものを紹介したのかね。僕の名前なんか方々へ行つて振り廻す由

二九三

明治三十八年十一月十三日　午後五時十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區本鄕六丁目二十五番地數中方野村傳四へ〔はがき　表の署名に「なつめきむ」とあり〕

君の盡力に因つて眞砂座を見る筈の處少しく都合が出來て同行が出來ぬから一人で行つてくれ玉へ手のない人に手を出せといふのは愚物に賢人になれといふ樣なものだ是は近頃失敬の至であつた然し僕抔はない學問を出して講義をする位だから學生の方でもない手位はだしてもよさゝうに思ふ

二九四

明治三十八年十一月十五日　午後五時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區本鄕六丁目二十五番地數中方野村傳四へ〔はがき〕

昨夜下駄物語をよむ。うまく出來ました。文章が段々上手になつてくる結構々々。あれはあとがあるのだらうね。あれ丈では纒まらない。あの茶屋の所は寫生だね。どうも寫生は無理がないから生きて居る。

二九五

明治三十八年十一月二十六日　午前〔?〕時十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

御手紙拜見文章會を來月九日にしては如何との御問合せ別段差支もなささうなれど夫迄に猫が出來るや否やは問題に候。帝國文學は十五日迄に草稿が入用のよし。實は帝文をさきへ書いて然る後猫に及ぶ量見の處此方が未だ腹案がまとまらずどれをかゝうかあれにせうかこれにせうかと迷つて居る最中然もどれもこれもいざとならぬと纏つた趣向がないのでまだ手を出さずに居る夫故に此方を三四日中にかき出してかりに一週間と見れば大丈夫夫から猫とすると是も長くなるかも知れないが一週間あれば安心すると九日の〔原〕閑ではちとあぶない其次の土曜ならよからうと思ひます。尤も小生近來は文章を讀む事が厭きた樣だから自分に構はず開いて頂戴猫は出來れば此方から上げます。一體文章は朗讀するより默讀するものですね。僕は人のよむのを聞いて居ては到底是非の判斷が下しにくい。いづれ僕のうちでも妻君がバカンドーを腹から出したら一大談話會を開〔原〕いて諸賢を御招待して遊ぶ積に候　頓首

十一月二十四日

金

虛子先生

僕は當分のうち創作を本領として大にかく積りだが少々いやになつた。然し外に自己を發揮する餘地もないから矢張り雜誌の御厄介になる事に仕つた

此度の猫は色々かく事がある。其內で苦沙彌君の裏の中學校の生徒が騷いで亂暴する所をかいて御

覽に入れます

二九六

明治三十八年十二月四日　午前零時十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地竹陽館內野間眞綱へ　〔はがき〕

御邸の御孃さんが病氣ぢや大變だ。若い美しい女の病氣程世の中に大事件はない。御用心御用心

　　十二月三日

二九七

明治三十八年十二月四日　午前零時十分　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸へ

拜復

十四日にしめ切ると仰せあるが十四日には六づかしいですよ。十七日が日曜だから十七八日にはなりませう。さう急いでも詩の神が承知しませんからね。(此一句詩人調)とにかく出來ないですよ。今日から帝文をかきかけたが詩神處ではない天神樣も見放したと見えて少しもかけない。いやになつた。是を此週中にどうあつてもかたづける。夫からあとの一週間で猫をかたづけるんです。いざとなればいや應なしにやつゝけます。何の蚊のと申すのは未だ贅澤を云ふ餘地があるからです。桂月が猫を評して稚氣を免かれず抔と申して居る恰も自分の方が漱石先生より經驗のある老成人の樣な口調を使ひます。アハヽヽ。桂月程稚氣のある安物をかく者は天下にないぢやありませんか。困つた男だ。ある人云ふ漱石は幻影の盾や薤露行になると餘程苦心をするさうだが猫は自由自在に出來るさうだ夫だから漱石は喜劇が性に合つて居るのだと。詩を作る方が手紙をかくより手間のかゝるのは無論ぢやありませんか。虛子君はさう御思ひに

なりませんか。薤露行抔の一頁は猫の五頁位と同じ勞力がかゝるのは當然です。適不適の論ぢやない。二階を建てるのは驚ろきましたね。明治四十八年には三階を建て五十八年に四階を建てゝ行くと死ぬ迄には餘程建ちます。新宅開きには呼んで下さい。僕先達て赤坂へ出張して寒月君と藝者をあげました。藝者がすきになるには餘程修業が入る能よりもむづかしい。今度の文章會はひまがあれば行くもし草稿が出來ん樣なら御免を蒙る。　以上頓首

十二月三日　　　　金

虛子先生

二九八

明治三十八年十二月九日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十七番地數山方野村傳四へ　〔はがき〕

傳四先生下駄物語につき明星でわる口をかいて居る御覽なさい。今日の文章會は休席。帝文の原稿がまだ出來ない。人がこない樣に手笞をすると思ひがけない人がくる。然り而して僕も其實あまりかく氣が御座らん。猫もかゝなくてはならん

二九九

僕は小說家程いやな家業はあるまいと思ふ。僕なども道樂だから下らぬ事をかいて見たくなるんだね。職業となつたら敎師位なものだらう。島津の御孃樣はとんだ事をした。僕が代理に死んでやればよかつた。

明治三十八年十二月十一日　午前六時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

時間がないので已を得ず今日學校をやすんで帝文の方をかきあげました。是は六十四枚ばかり。實はもつとかゝんといけないが時が出ないからあとを省略しました。夫で頭のかへた變物が出來ました。明年御批評を願ひます。猫は明日から奮發してかくんですが、かうなると苦しくなりますよ。だれか代作を頼みたい位だ。然し十七八日迄にはあげます。君と活版屋に口をあけさしては濟まない。

三〇〇

明治三十八年十二月十八日　午後二時二十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

啓　先刻の人の話では御孃さんが肺炎で病院へつめきりださうですね少しは宜いですか。大事になさい

僕の家バカンボ誕生失張女です。妻君發熱猫はかけないと思ふたらすぐ下熱先々大丈夫です。

猫は一返君によんでもらう積りで電話をかけたのですが失望しました。はじめの方のかきかたが少し氣取つてる氣味がありはせんかと思ふ。夫から終末の所はもつと長く書く筈であつたがどうしても時間がないのであんな風になつたんです。

此二週間帝文とホト、ギスでひまさへあればかきつゞけもう原稿紙を見るのもいやになりました是では小說抔で飯を食ふ事は思も寄らない。

君何か出來ましたか。病人抔の心配があると文章抔は出來たものぢやない。

今日はがつかりして遊びたいが生憎誰もこない。行く所もない。

先々正月に間に合ふ樣に注文通り百枚位書いて安心しましたよ

十　八　日

虛　子　様

金

三〇一

明治三十八年十二月二十四日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島縣佐伯郡中村下田方鈴木三重吉へ

只寒し封を開けば影法師

三〇二

明治三十八年十二月二十四日　午後三時（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]町十番地[illegible]東松風氏へ

啓

猫のこよみわざ〳〵御持參被下難有頂戴致しますあんな妙なこよみは見た事がありません柱にかけて眺めて居ります。

風呂敷を置いて行かれました。當分の間御あづかり申します。其内遊びに入らつしやい。

來年正月のホト・ギスには長いのをかきましたどうぞ讀んで下さい。面白くない所があつたら遠慮なく注意して下さい。先は右御禮迄　匆々頓首

十二月二十四日

金

松　風　雅　兄

三〇三

明治三十八年十二月二十九日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本所區茶場町三丁目十八番地伊藤左千夫氏へ

拜啓只今ホト、ギスを讀みました。野菊の花は名品です。自然で、淡泊で、可哀想で、美しくて、野趣があつて結構です。あんな小說なら何百篇よんでもよろしい。二十六頁の

　民さんの御墓に參りに來ました

と云ふ一句は甚だ佳と存じます。只次にある「只一言である云々」の說明はない方がよいと思ひます

小生帝文に趣味の遺傳と云ふ小說をかきました君の程自然も野趣もないが亡人の墓に白菊を手向けるといふ點に於て少々似て居りますから序によんで下さい。

押しつまつて御多忙の事と存じます。新年は缺禮致します　以上

十二月二十九日　　　　金

伊藤大兄

三〇四

明治三十八年十二月三十一日　午後三時五十分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓本日書店より藝苑の寄贈をうけて君の病葉を拜見しました。よく出來て居ます。文章抔は隨分骨を折つたものでせう。趣向も面白い。然し美しい愉快な感じがないと思ひます。或は君は既に細君をもつて居る人ではないですか。それでなければ近時の露國小說抔を無暗によんだんでせう。どつちから來たか知

らんが書物か、實地から來たに相違ない。然しあれをもつと適切に感ぜさせるのはあの五六倍かゝないと或程とは思はれないですよ。凡ての因緣ものは因緣がなる程と呑み込める樣に長たらしくかゝんと面白くゆかぬ樣に思ひますがどうですか。あれで悪いといふのではない。長くしたらもつと面白く見えるだらうと云ふのです。あゝ云ふ裏面の消息は表面の戀をかき盡して種切れになつた時に考へ出すか又は自分が經驗を積んで表面の戀が馬鹿々々しくなつた時に手をつけるものだ。君の若さであんな事をかくのは書物の上か又は生活の上で相應の原因を得たのでありませう。ホトヽギスに出た伊藤左千夫の野菊の墓といふのを讀んで御覽なさい。文章は君の氣に入らんかも知れない。然しうつくしい愉快な感じがします。　以上

十二月三十日夜　　　　　　　　　　　　　　　　金

白　楊　兄

今朝又讀み直して見ました。あれを今少々活躍させる工夫があると思ひます。あれ丈の短篇では今少々活躍させんと完璧とは云はれない。それでなければもつと長くかく。　三十一日

三〇五

明治三十九年一月一日　午前零時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

加計君の所へいつか手紙をやりたい。宿所を敎へ玉へ

拜啓

御通知の柿昨三十日着直ちに一個試みた處非常にうまかつた。コロ柿は堅過ぎるがあれは丁度好加減で

す。小供にもやりました。君の神經衰弱は段々全快のよし結構小生の胃病も當分生命に別條はなささうです。君が芝居をやる抔は頗る見ものだらうと思ひます。全體何の役をやる積りか一寸御一報にあづかりたい。今日は大晦日だが至つて平穩借金とりも參らず炬燵で小説を讀んで居ます。ホト、ギスを見ましたか。裏の學校から抗議でもくれば又材料が出來て面白いと思つて居る。此學校の寄宿舍がそばにあつて其生徒が夜に入ると四隣の迷惑になる樣に騷動する。今夜も盛にやつて居る。此次は是でも生捕つてやりませう。仕舞には校長が何とか云つてくれればいいと思ふ。喧嘩でもないと猫の材料が拂底でいかん。伊藤左千夫の野菊の墓といふのをよんだですか。あれは面白い。美くしい感じする。一昨日から雪今日も曇中々寒い。昨日は中川が來ました。

君が芝居をやる所を猫にかきたい。多々良三平と自認せる俣野義郎なるもの五六度も親展至急で大學へむけ猫中の取消を申し來る。新聞で廣告して取り消してやらうかと云つたら御免と云ふてきました。當人は人格を傷けられたとか何とか不平をいふて居る。呑氣なものである。人身攻擊も文學的滑稽も區別が出來ないで自ら大豪傑を以て任じて居るのは餘程氣丈の至りだと思ふ。

君早く出て來給へ

早稻田文學が出る。上田敏君抔が藝苑を出す。鷗外も何かするだらう。ゴチや／＼メヤ／＼其間に猫が浮きつ沈みつして居る。中々面白い。猫が出なくなると僕は片腕もがれた樣な氣がする。書齋で一人で力味んで居るより大に天下に屁の樣な氣燄をふき出す方が面白い。來學年から是非出て來給へ

明日丸山通一といふ獨乙語の先生の所へ午飯に呼ばれた。何の因緣か分らないがまづ御馳走になる方が得策だと思つて承引した。

うれしきも悲しきも眼前の現象　月も花も刻下の風流。定業は何十年か知らないが、御駄佛となる迄は

まづ／＼此の如くであらうと思ふ　珍重

三十八年大晦日の夜　金

三重吉様

今日野村傳四と上野を散歩したら、耶蘇教の戸外演説があつた。聞き手は一人もない。大晦日である。人間は衣食の爲めには狂氣じみた事も眞面目にやるものですな。其例澤山あり。

三〇六

明治三十九年一月四日　午前（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より松山市下京町小島武雄氏へ

拜啓賀狀拜見致候吉松氏任地にて評判よろしき由本懐の至うれしく候拙作御通讀被下候由難有奉謝候本年も相變らずつまらぬものをかゝねばならぬ事と存候御覽被下候はゞ幸甚に候。本年より早稻田文學藝苑其他にて文壇も大分賑やかになり候。其間に立ちて出頭沒頭の醜態を極め候事大悟の達人より見ば定めし可笑しからんと折々は自らさへも失笑致候先は御返事迄　匆々頓首

三十九年一月三日　金之助

小島様

三〇七

明治三十九年一月八日　午前（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

啓、長い手紙を頂戴面白く拜見致しました。御世辭にも小生の書簡が君に多少の影響を與へたとあるのは嬉しい。夫程小生の愚存に重きを置かれるのは難有いと云ふ譯です。小生は人に手紙をかく事と人から手紙をもらふ事が大すきである。そこで又一本進呈します。

「野菊」を御讀みの由。詳細の御評拜見御尤もの事ばかりです。今度作者に逢つたら見せてやります。定めし喜こぶでせう。あの男は職業は牛乳屋で子規存生のみぎり一所に歌を研究して今でもアシビといふ雜誌を出して居る。小生は二三度會したぎり交際もない人です。あの作も一句一句吟味すると技巧の上では大分足らぬ所があると思ふ。君は讀むまいが矢張り前のホトヽギスに出た寺田寅彦と云ふ人の「團栗」とか「龍舌蘭」とかいふ作の方が遙かに技術上の價値がある　只野菊に取るべき所は眞率の態度を以て作者が事件を徹頭徹尾描き出して居る點である。あれ丈の材料を普通の小說家がとり扱つたならもつと似非藝術的なものにして仕舞ふと思ふ。そこが頗る尊い所だと思ふが、どうです。趣向は仰せの如く陳腐です。寧ろ月並臭を脫しない。然し仰せの如く月並臭くないからいゝ。それから君の非難をする箇所は一々尤もである。僕も多少さう思ふ。但し女が死んでからの一段はあれでいゝ實際です。尤も君の云ふ樣にすれば死といふものに對して吾人の態度が違つてあらはれてくる許りである。死に崇高の感を持たせやうとするときは、其方を用ゐるがよいと思ふが、死に可憐の情を持たせるのは、あれでなくてはいかぬ。野菊の行きがゝりから云ふてあれでなくてはものにならない。調和せんと思ふ。死は一つである。然し吾人の死に對する態度は色々ある。此態度如何で讀者の感じが違つてくる。然も其色々な態度が皆眞といふ事がいへると思ふ。

女が猿股をいやがる所や、笠を被らない所は妙ですよ。つまり君の云ふ如く、あんな所で活動すると思

ふ。女が死んで寫眞を持つて居るのは寧ろ幼稚です。もつと上等に行けばそんな眼に見えるものを持たないでそれ以上の感じを起させるがいゝ。然しそれは中々大手腕が入る。前後の關係から云つて、寫眞を撮つて居たので一種の趣意が貫ぬいて、女の病死に落ち付きが出來るといふ點から見れば何にもかゝないより善い。

病葉に就いて一言蛇足を添へるが、主人公が何だか六づかしい本を讀んで居る。あれは必要があるのですか。突然あれを讀むと。故意にあんな本を讀ませて居る樣な、初心な氣障な感じがする。もつと長いもので主人公が一種の人物であんなものを讀むべき傾向を有して居るか、又はあの本があの短篇中に一種の關係を有して居るなら故意とは思はれなかつたらう。尤も後段に一寸關係が出るがあれ丈では、あんな本をよます必用はないと思ふ。

容赦なく云へば君は文に凝り過ぎて失敗しさうな懸念が僕にある。あまり凝ると拔目がない代りに何となく窮屈な苦しい感じがするでせう。第一長いものは到底根氣がつゞかないと思ふ。

僕は君の文が出る度に讀みます。さうして時間の許す限り、心づく限りは忠評を加へる積りです。其代り惡口を云つても怒つてはいけません。大學では君の先生かも知れないが個人として文章抔をかく時は同輩である。決して僕に對して氣を置いてはならぬ。君はあまりに神經的、心配的、人の心を豫想しすぎる樣な傾向がありはせんかと思ふ。他人に對してはとにかく僕に對してはさうせん方がいゝ。君も氣樂でいいでせう。野村傳四抔は氣樂なものである。あまり長くなるから是でやめます。　不一

一月七日　　金之助

森田兄

三〇八

明治三十九年一月十日　午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあげます。もう少し立つと色々多忙になつて到底返事らしいものはかけないから只今少々ひまのあるのを幸にこれをかきます

君は大分長い手紙をかいてよこしましたね。あれ丈かくのは大分時間をとるに相違ない。僕の爲めになんな勞力を費やさしたと思ふと中々頼母しい心持ちで讀みました。何か不平でも氣燄でも洩したい時に時間があつたらいつでも僕の所へ云つて寄こしてくれ玉へ。僕は讀むのを樂しみにして居る。其代り必ずそれに匹敵する長い返事は出されないかも知れません。

野菊の墓の評をかいて下さる由定めし本人（卽ち牛乳屋の主人）はよろこぶだらう。どうかかいてやつて下さい。左千夫なんて聞いた事もない人だから誰も相手にしてはくれん。切角出色の文字でも誰も相手にせんでは甚だ氣の毒である。君が評をしてやれば僕も何だか愉快な氣がする。而も君の評は十中八九迄僕と同樣であると思ふから猶更愉快である。然しわるいと感じた所は遠慮なく云ふてやつて下さい。本人の參考になります。

牛乳屋が氣に入つたといふのは見上げたものです。牛乳屋の主人の方が大學の講師よりも氣韻があると思ふ。顏も頗る雅な顏ですよ。あんなものがかけさうでもない。

君は衣食の爲めに充分學問が出來んのを苦痛に感じて居る樣だが御尤もです。僕も貧乏で十八九の時から私立學校を敎へて卒業迄やり通したが其時分は別に何と云ふ考もなかつたから左程驚きもしなかつた。是が今日の君の樣であつたら矢張り大煩悶であつたらう。夏休みに金がなくつて大學の寄宿に籠城した事

がある。而して同室のものゝの置き去りにして行つた蚤を一身に引受けたのには閉口した。其時今の大塚君が新しい革鞄を買つて歸つて來て明日から興津へ行くんだと吹聽に及ばれたのは羨やましかつた。やがて先生は旅行先きで美人に惚れられたと云ふ話を聞いたら猶うらやましかつた。

僕もその時分から眞の勉強―昔の所謂ヰスドムを得る工夫―でも熱心にしたら今はもう少し人間らしくなつてるだらうと思ふ。其時分は本の名前を覺えて人に吹聽するのが學者だと思つて居た。趣味杯も極いものであつた。物の道理も今の若い人程には到底わからなかつた。要するに今でも愚物であるが當時は尚更愚物であつた。尤も見識はあつたが、只人を下げる見識で自分が獨得したホンヂョーヴの見識ではなかつた。

僕もそれだから大に聰明な人になりたい。學問讀書がしたい。從つてどうか大學をやめたいと許り思つて居ます。先達晩翠が年賀状をよこしてまだ教授にならんかと云ふから、人間も教授や博士を名譽と思ふ樣では駄目だね、失禮乍ら詩人土井晩翠ともあるべきものがそんな事を眞面目に云ふのはよくないと。漱石は乞食になつても滿足だ――と云ふ樣な事をかいてやりました。あとで成程小供らしい氣焰だと氣がついた。

君が人の作を讀む態度は甚だよろしいと思ふ。それでなければクリチシズムは出來ない。只人の長所を傷けない丈の公平眼は是非共御互に養成しなければならん。僕は人の作に對して只面白く讀みたい。よんでやりたいと云ふ氣が先へ起る。然し讀んで仕舞つて是は敬服したといふ樣なものはあまり少ない。矢張り西洋人の方がそんな感じを引き起させる事が多い。然し西洋人だからといつて決して一日置いて讀むのではない。二三日前鏡花の海異記とか云ふものをよんで驚ろいた。どうも馬鹿々々しいと云ふ感より外に起らなかつた。それから彼の文章のかき方がいやに氣取つて居て嫌だと云ふ感じがあつた。警句は無論澤

由ある。あれをなぜもつとうまく繋げないのかと思ふ。かう感ずるが僕は鏡花に對して憎惡心も何も有して居らん寧ろ好意を以て迎へよむのである。こんなのは矢張り天性の趣味の相違でありませう。

君の手紙をよむと君の人間を貫ぬいて見る樣な心持ちがします。君と二三月交際しても、あれ程には分るまい。人に自己を打ち明けるといふ事は放膽の所爲である。打ち明けられた人は其放膽をほめるのではない。他に打ち明けぬものを自分にのみ打ち明けてくれたと云ふ特許を喜ぶのである

自分の弱點に對しては二樣に取り扱ふ方法がある。一は之を隱して自己の虛榮心を失望させまいとする。是は誰でもやつて居ます。僕もやつて居ます。然し決して滿足が得られるものではない。一はコンフェッションである。然し無用の人若しくは此コンフェッションをきいて之を輕蔑する人若しくは之を利用して害を加へやうとする人には自白したくない。だから此場合には己れの信ずる人、若くは敬する人、或は敎を垂れて訓戒してやらうと思ふ人に自白するのである。其時は甚だ愉快を覺えるものだ。單に本人が愉快を覺えるのみならず。相手も快よく思ふ　君がもし君の書中に自己の弱點も構はず吐露したとすれば、其點に於て君は愉快である。僕が君の自白を聞き得たる相手とすれば僕も愉快である。

これからはいそがしくなるといつこんな長い手紙をあげられるか分らない。一先づ是で擱筆とします。

以上

一月九日夜

金之助

森田兄

明治三十九年一月十四日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より清國南京三江師範學堂菅虎雄氏へ

拜啓小生は御無沙汰をして濟まん。年禮も賀狀も今年は倹約として見たが矢張り中川元さん抔からくるとさうも行かぬ。昔の留守宅へも失禮して仕舞つた。いづれ妻がまかり出る。僕のうちでは又去年の暮に赤ん坊が生れた。又女だ。僕の家は女子專門である。四人の女子が次へ次へと嫁入る事を考へるとゾーッとするね。貯蓄をせんといかん。然るに去年の十二月抔は色々かゝつて三百圓近く仕拂つた。幸ひ著作の印税があつたので間に合つたが何しろ金の入る方には續くね。君は出來る丈貯蓄をせんとゆかぬ。君に返す金矢は張り十圓宛にして居る今年中位で濟むだらう。東京も別段變つた事もない。近頃は天氣がいゝ。狩野も大塚も藤代も例の如くだ。藤代位學校を欠勤する男は珍らしいね。僕大學をやめて江湖の處士になりたい。大學は學者中の貴族だね。何だか氣に喰はん。ホト、ギスを君の所へ送る樣に依賴して置いたが行くだらうね。四月には歸るまいね。居られるならそちらに居るがいゝと思ふ。東京に口はなさゝうだ。まあ此位にして置かう此手紙は君が呉れた絹箋でかいたのだいつ迄立つても字はうまくならない。君の字は立派なものだ。御寺の額にでもありさうだ。繪端書には堅過ぎて釣り合はない　以上

正月十四日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

虎雄樣

三一〇

明治三十九年一月十六日　午前零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地明陽館內野間眞綱へ

今夜野村が雉子と卷紙を持つて來てくれました。御親切にありがたう存じます。あの紙は妙な紙だね。

此紙は寺田が高知から持つて來てくれたものだ。先達ては橋口が白紙の卷紙をくれた。其前は誰か唐紙を支那から持つてきてくれた。僕は紙大盡だ。今年中は紙を買はずに濟む。君憂鬱病いよ〳〵結構に存候。憂鬱も快活も全く本人の隨意と存候。小生抔は一日に兩方やり申候。昨日は野村と日本橋、神田、淺草を散步致し候。柳橋で藝者に逢ひ候。其外竹本組玉、竹本園洲、都々逸坊扇歌の家をつきとめて歸り候。皆川には頓と逢はず候。　頓首

正月十五日　　　　　　　　　　　　　　　　金

眞綱樣

島津の若大將には此方から禮狀を出す

三二一

明治三十九年一月十七日　午後四時－五時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より芝區三田若松町十番地行德方皆川正禧へ

尊書拜讀野間は憂鬱病に罹つた由を申來候けしからぬ事に候。三十にもならないで憂鬱病抔と申す贅澤な事を申し候。

其後はしばらく拜顏の期を得ず。不相變餅を食つて御消光の事と存候。小生も例の如く漫然と消光致し居候。其うち會食でも致し度と存候

趣味の遺傳御讀み被下難有候。結束の一氣呵成の所をほめて下されたのは望外の幸福と存候。實は時間がたりなくて、かけなかつたのです、仕舞をもつとかゝんと、前の詳細な敍述な[原]比例を失する樣に思ひま

す。

あれは誤植誤字だらけであります。

野菊の墓の末段をわるく云ふ人は君の外にあります。森田二十五絃が同樣の事を云つて來ました。僕はさうも思はない。東京邊の家庭にはこんな御しやべりな婆さんがあるものだと存候。

野間が雉子を屆けてくれました。是は島津の若旦那の御見やげです。昨夜無暗にたべた所今日腹がわるく候。

いづれ其内　草々

十六日　金

皆川兄

三一三

明治三十九年一月二十六日　午後三時―四時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

其後御無沙汰仕候。二月のほとゝぎすに何か名作が出來ましたか。僕つら／＼思ふにホト、ギスは今の樣に每號版で押した樣な事を十年一日の如くつゞけて行つては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英氣を鼓舞して刷新をしなければいかないですよ。と申して別に名案もないから只主人公たる君が大奮發をするより外に仕方がない。文庫新聲杯一時景氣のよいものが皆駄目になるのは時候後れだからと思ひます。ホト、ギスも賣れるうちに色々考へて置かねばならんでせう。

先づ卷頭に每號世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心ですね。夫から君は每號俳話をか

いて、四方太は毎號文話でもかいたらどうです。四方太は原稿料が出ないと云つてこぼして居るがあの男はいくら原稿料を出しても今の倍以上働くかどうか危しいものだ。とにかくもつと活氣をつけたいですね。小生餘計な世話を燒いて失敬だがホト、ギスが三四千出るのは寧ろ異數の觀がある、決して常態ではない油斷をしては困る事になると思ひます。

そんなら僕に何かかけと來るかも知れんが僕は取りのけ別問題です。一寸手紙をかく序があるから是を差し上げます。苦い顏をしてはいけません　頓首

一月二十六日　　金

虚子樣

三一三

明治三十九年二月三日　午後三時－四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ

拜啓

先日皆川君のうちへ行く約束はしなかつた都合によつたら行くと申してやつた。然し待つて居たのは氣の毒である。小生例の如く毎日を消光人間は皆姑息手段で毎日を送つて居る。是を思ふと河上肇などゝ云ふ人は感心なものだ。あの位な決心がなくては豪傑とは云はれない。人はあれを精神病といふが精神病なら其病氣の所が感心だ。君の憂鬱病はどうなつた。金を百圓許り借りて大に青樓に遊んで見たまへ。大抵の憂鬱病は屹度全快する。放蕩は長く續くものではない。放蕩をつゞけると放蕩の方の憂鬱病が出てくる。さうしたら又勉強をする。又憂鬱病になる。又何か道樂をやる。是で澤山だ。是を姑息手段といふ普通の

人間は大概やる。君は此姑息手段さへやらんから病氣になるのである。
近頃は訪問者が少々減じて難有い。忙しい事は依然として忙がしい。生涯此有様であらう。而して生涯落ちつく事はない。僕のキュー／＼して居るのも姑息手段に過ぎぬ。要するに大俗物になつて金大俗物たらんとアセルのだね。是ではどこがえらいか分らない。人間は他が何といつても自分で安心してエライといふ所を把持して行かなければ安心も宗教も哲學も文學もあつたものではない。　頓首

二月三日　　金

眞鍋様

三一四

明治三十九年二月六日　午後[illegible]　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]へ

拜啓陸軍の英語教師の口があつた由何より結構の事と存候實は君の口に就ては内々心配して居つたが是で僕も安心した精出して御勤めなさい決してなまけてはいけません。其内月給が上つて美人の妻君がもらへます。
金がとれて地位が出來ると憂鬱病も退散するだらうと思ふがどうですか。僕なんか百萬圓もらつても憂鬱病だね。呵々

二月五日　　金

眞鍋様

三一五

明治三十九年二月七日　午前零時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番[illegible]中方野村傳四へ

謹白傳四先生足下

僕の友人の西洋人が乃木將軍の傳をかくといふので吉田松蔭の著書を知りたいと申すが君だれかにきくか一寸圖書館で見てくれないか。尤もどこで賣つてるか分れば猶よい。夫から福地櫻癡の幕末記事は今賣つてるかね。いくらでどこに賣つてるか教へてくれ給へ。櫻癡といふ人の逸話を讀んだがあれは駄目な人間だ。然し常人は餘程えらいと思つてる。生前は可成有名でも死ねばすぐ葬られる人だ。一寸學校の成績はよくても卒業して駄目になると同じ事だね。然しあんな淺薄な人間でも人から大にもて囃されるのだから殊に女から屢惚れられるのだから妙なものだね。さうなると女に緣が遠い程えらい人といふ譯だな。君なんか少しは奢つてもいゝ。

三月には猫のつゞきをかく積りで居る。レクチユアはまだ一枚もかゝない。それで毎日々々何か蚊にか忙がしい。今度の猫に惡口をいふ材料はないかね。落文館なんか相手にならんから今度はやめにして又金田令孃の御見識でもかゝうかと思ふ。

先達て女から手紙が來たよ夏目先生御許へとかいてある。見たければ御見やけを持つて居らつしやい。

但し有體にいふと來ない方がいゝ　再拜

二月六日　　金

傳四先生

三一六

明治三十九年二月十一日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

昨夜君の手紙がつきました。加計君が結婚をしたのは御目出たい。男爵の娘だなんてそんなものが山の中で役に立つでせうか。然しそれは餘計な事だ。とにかく御目出たい。君小説をかいたら送り玉へ。早く拜見仕りたい。近頃は色々な雜誌屋や何か來ていやになつて仕舞ふ。文章も作るひまがない。芝居は是からやるのですね。東京でも坪内さんの門下生がやりますよ。押入のなかで三味線をひくのは近世奇人傳にでもありさうだ。猫の原書をかひにくるのは猫中の材料だ。色々な人があるものだ。大町といふ男が猫をよんで作者は氣の小さい陰氣な少し洒落氣のある男だと二度も三度も繰り返して居る。人民新聞といふのには僕が猫を作つて以來細君と仲が惡るくなつたとあるさうだ。すると高等學校で其きり拔きを大事に校長に御目にかける。内田魯庵といふ男は夏目君は金田夫人に談判されて迷惑して居るさうだとある男に話したさうだ。

僕も此位有名になれば申分はないと思ふ。昔はこんな事が氣にかゝつて一々正誤しないと心持ちがわるかつた。今では却つて面白い心持ちがする。是から文章でもかいてながく居ると益僕の惡口をいふものが出て來ます。仕舞には漱石に昨日死んださうだ。いや瘋癲院へ這入つた。華族の御孃さんから惚れられたなんて妙なのが出て來るでせう

今日は紀元節でいゝ天氣です、一昨日は雪でね。大變積つた。今日も道がわるい。昨夜は中川や何か四人ばかり來て夕飯をくつて快談をして暮らしました。

廣島といふ所はどんな所か行つて見たい。廣島のものには僕の朋友が少々ある昔は大分つき合つたもの

だ。猫のうちにある甘木先生も廣島の人だ。毎日役々としてくらすのが人間の目的だとあきらめて仕舞つたが本もよめず、樂に坐つてる事も出來ないとなると一寸弱りますね。

もつと何かかゝうと思ふがいやになつたからやめ。

加計によろしく云つてくれ給へ。妻君は美人ですか。　以上

二月十一日紀元節朝　　　　金

三重吉樣

三一七

明治三十九年二月十三日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

尊書拜見

君の心の狀態が果して君の云ふ所の如くなれば君は少々病氣に相違ない。病氣がわるいとも云はぬ。よいとも申さぬがつまり自分が苦しむ丈不幸と云はねばなるまい。前の手紙にも云ふた如く君はあまり感じが强過ぎるので其鋭敏な感じに耽り過ぎた結果今日に至つたのであらう。そんな時には人が異見をしたつて慰めたつて容易に癒るものではない。自然に任せて於て同時に氣を晴らすより外に方法はない。そんな時に神經質な文學書抔を讀むと猶いけない。可成方面の違つた人間と話したり丸で趣味の違つた書物を讀んだね。若くは人と喧嘩をしたり。或は借金をして放蕩をして見たり。或は人に手紙を出して鬱氣を洩らすがいゝと思ふ。君は最後の手段に訴へて手紙をよこしたのかも知れないが僕が君に同情を表して泣言を並べると君は多少賴りになるかも知れないが病氣は益はげしくなる。去ればと云つて冷淡な返事をすれ

ば矢張りいふしなら。或は月並な說教がましい事を云つたら何の功能もない事となる。是には僕も少々弱るな。

僕も昔は非常に馬鹿で薄志で剛情でしかも世人が大變恐ろしかつたが今は大分變化して仕舞つた。性格は此三四年以來いちゞるしく變化した。只氣分丈は矢張り若くて學生なんか友達の樣な氣がする。

それで近來は僕が文章をかくものだから人が色々な事をいふ。大町なんかは僕の惡口を二度も繰返して居る。人民新聞では僕が猫をかいて細君と仲がわるくなつたとかいたさうだ。ある人は僕が金田夫人に强迫されて煩悶して居ると話したさうだ。是が十餘年前なら眞面目に辯解する所だが今日ではそんな氣は少しもない。桂月なんて馬鹿だと頭から思つてる。新聞なんて何をかかうと構はないときめて居る。なぜこんなになつたか分らない。又これがいゝとも斷言しない。然し昔より太平である。人間は太平の方が難有いに相違ない。人間として僕は決して君の師表たる樣な資格はない。然し世の中にこんなえらい人になつて見たいと崇拜する人間は一人もない。だから君も君で一人前で通して行けば夫で一人前なのだから構はんではないか。

人が笑ふから云々と云ふのは尤だが今の文壇で人の笑ふに價せざる者ばかりを作る人は殆んどない。丁度朋友其他の知人中に於て馬鹿の分子を含んで居らんものは一人もないと同じ事であらう。

先づ最前の大町桂月の樣なのは馬鹿の第一位に位するものだ。竹風先生だつてあんなものだ。樗牛なんて崇拜者は澤山あるがあんなキザな文士はない。然しみんな押を强くして平氣で居る。何も君一人が閉口する必要はない。つまらないと感じて文壇を退くなら分つてるが。何もそんなに自分丈を妙に考へる必要はあるまい。僕なんかは蔭では矢張り僕が桂月其他を目する如く批評されてるのである。然し些とも構はん。蔭で云ふ事なんかはどうでもよろしい。文章もいやになる迄かいて死ぬ積りである

他人は決して己以上遙かに卓絶したものではない又決して己以下に遙かに劣つたものではない。特別の理由がない人には僕は此心で對して居る。夫で一向差支はあるまいと思ふ。

君弱い事を云つてはいけない。僕も弱い男だが弱いなりに死ぬ迄やるのである。やりたくなくつたつてやらなければならん。君も其通りである。死ぬのもよい。然し死ぬより美しい女の同情でも得て死ぬ氣がなくなる方がよからう。

先達て憂鬱病だと云つた男にかう答へてやつた

「借金を百圓許して放蕩をやれば憂鬱はなほる。もし放蕩を永くつゞけると放蕩の方で憂鬱病が出る。さうしたら又放蕩をやめて強勉をする。是が普通の人間のとる尤も自然の方法である。是は姑息手段であるか誰にでも出來る。然しそんな面倒な事をやつたりやめたりせんで一度に天下太平になるのは。死ぬ丈の覺悟で以て大に考へ込んで近頃はやる自覺でもしなくてはなるまい。自覺になると僕に知らない事だから一言も云へない……」

僕の文章の評をしてくれたさうだ定に難有い。夫は拜見の上にてまた何とか申し上げやう　以上

十三日　　金之助

森田樣

三一八

明治三十九年二月十三日　午後五時－六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

今日歸宅の上藝苑を拜見した。僕の文の批評は結構であります。あれは頗る比例といふ點から云つては

丸駄目の作である。趣味の遺傳といふ趣味は男女相愛するといふ趣味の意味です。猫は世の中があきた抔といふ事はない。二三の氣短かな連中がそんな事を云ひたがるのだ。猫の讀者はそんなに急にあきやしない。僕のつむじは眞直なものさ。猫をかくのは立派な考だと思つてる。決してブク／＼湧いて出ては來ない。只無暗にかいてるとあんなものが出來るのです。

天下に己れ以外のものを信頼するより果敢なきはあらず。而も己れ程頼みにならぬものはない。どうするのがよいか。森田君君此問題を考へた事がありますか　頓首

二月十四日　　金

森田君

三一九

明治三十九年二月十五日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區指ケ谷町七十八番地神岡正治氏へ

拜啓今日は學校で立談の際御互の意志の通ぜぬ所もあるから改めて手紙で愚存を申し上げる。實は〇〇さんが逢ひたいとか又は折り返して罫紙入りの半官文的のものをよこすと又面倒だから茲迄申して置く

英語學試驗囑托辭任の事はあれで濟んだ事と思つて居た所はからずも君等に御心配をかけて相濟ん是は大に僕の謝する所である。謝する所であるから腹藏のない所を話して判斷をしてもらはう。

辭任の理由は多忙といふ事に歸着する。僕は一週間に三十時間近くの課業をもつて居る。是丈持たなければ米塩の資に窮するのである而してそれ以外にも用事がある。讀書もしなければならぬ。だから多忙といふのは僞りのない所で尤な理由である。

次に僕は講師である。講師といふのはどんなものか知らないが僕はまあ御客分と認定する。大學から普通の教授以上叮重に取扱はれてもよいと考へて居る。大學の方ではさうは思はんかも知れんが僕の方ではさう解釋してゐる。從つて擔任させた仕事以外には可成面倒をかけぬのが禮である。

其代り講師には教授抔の樣な權力がない自分の數へる事以外の事に口は出せない。夫等は皆教授會で勝手にきめて居る。語學試驗の規則だつても講師たる僕は一向あづかり知らん。いつの間にかあんなものが出來上つて居るのである。

だからあんなものから生ずる面倒は之をきめた先生方と當局の講師が處理して行くのが至當である。自分たちが面倒な事を勝手に製造して置いて其勞力丈は關係のない御客分の講師にやれといふ理窟はない。

尤も相談づくならそれでもよい。○○○○は僕を以て報酬がないからやらんのだと教授會で報告したさうだ。其解釋は至當である。僕自身もさう考へて居る。僕の樣なものに手數（擔任以外の）をかけるには金錢か、敬禮か、依賴か、何等かの報酬が必要である。それがなくて單に……囑託相成候間右申し進候也といふ樣な命令なら僕だつて此多忙の際だから御免蒙るのはあたり前である。

もし僕の辭任に對して學長始め其他の教授が不穩當と認めるならばそれ等の人々は講師と云ふものゝ解釋に於て全然僕と考を異にして居るのだ。僕の考では講師を使ふには教授を使ふよりも遠慮しなくてはならん。見玉へ講師は教授會の事に就て何等の權利ももつて居らんではないか。俸給の點から云つても無給のさへあるではないか。講師は教授に比すれば斯の如く特權が與へられて居らんのであるからして、講師の方では擔任以外の事を命令的に押しつけられてへイ々云ふ丈の義理がないぢやないか。

僕は僕の擔任する六時間の講義さへして居れば講師としての義務はそれ以外にはないものと信じてゐる。

夫だからして文科大學宛て斷り狀を出した。もし文句がわるいと云ふなら是にも理由がある。文科大學か

ら來たのだから個人に對する樣な愛嬌のある文句はかけないのである。文科大學御中としてはあれ丈の表面上の事しか言ひ得ないのである。

君は親切に色々心配してくれるし井上さんもさうだといふから一應僕の考を述べて英斷を仰ぐ譯だ。でとにかく今回は御免蒙るよ。

此手紙は〇〇さんに見せても井上さんに見せても乃至は教授會で朗讀してくれてもさし差し支ない。君も迷惑だらうが妙に引きかゝつたもんだから宜しく取計つて下さい　以上

二月十五日

金之助

姉崎兄

三三〇

明治三十九年二月十五日　午後二時―三時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

又手紙をあげます

自分の作物に對して後悔するのは藝術的良心の鋭敏なので是程結構な事はない。此量見がなければ文學者になる資格はないと思ふ。

自分で自分の價値は容易に分るものではない。古來からちつとも文藝に志さなかつたものが急に筆を執つて立派な作を出した例は澤山ある。夫迄は自分の何物かゞ分らなかつたのである。小說とか何とか云ふものは必ず一足飛びに大作は出來るとは限つて居らん。突然うまいものをかくのは天分の充分に發揮されべき機が熟した時に限るので他の人は書きつゝも熟しつゝも進んで行くのである。

僕の樣なものが到底文學者の例にはならないが僕は君位の年輩のときには今君がかく三分一のものもかけなかつた。其思想は頗る淺薄なもので且つ狹隘極まるものであつた。僕が二十三四にかきかけた小說が十五六枚殘つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。

勿論今でも御覽の通りのものしか出來ぬが然し當時からくらべると餘程進步したものだ。夫だから僕は死ぬ迄進步する積りで居る。

夫から今日の事を申すと（例へば猫を一節かくと）此次にはもうかく事があるまいと思ふ然しいざとなると段々思想も浮んでくる先づ前回位なものは出來る。すべてやり遂げて見ないと自分の頭のなかにはどれ位のものがあるか自分にも分らないのである

君抔も死ぬ迄進步する積りでやればいゝではないか。作に對したら一生懸命に自分の有らん限りの力をつくしてやればいゝではないか。後悔は結構だが是は自己の藝術的良心に對しての話しで世間の批評家や何かに對して後悔する必要はあるまい。

君は自我の縮少を嘆じて居ると同時に君の手紙中には大に自我を立てゝ居る。君の手紙の如く我が立つて居ながら夫でも自から小さい〳〵と嘆息するのは必竟幾分かのエゴが籠つて居る

コンフエシヨンの文學は結構である。コンフエシヨンの文學程人に敎へるものはない。夫で澤山だから立派なものを書けばよい。容れられない事はない君は未だ其方面に於て雄飛して見ないのである

君の文章には君位の年輩の人にしてはと思ふ樣な警句が往々ある。夫丈でも君は一種の寶石を有して居る。君の手紙を見ると言廻し方の中々うまい所がある。他人が後悔せぬ所を恨む邊はうまくかきこなしたものだ。君の手紙のうちには形容の妙な言語もある。モグ鼠の樣に音もたてずに嚙りついて死にたい抔は

擱つたものだ。

君の批評を見ると普通の雜誌記者抔よりも遙かに見識が見える。よくよんで居る。だから自分の作物上にでも其見識は應用され得るに相違ない。

僕は君に於て以上の長所を認めて居る。何故に落膽するのである。今日大なる作物が出來んのは生涯出來んといふ意味にはならない。たとひ立派なものが出來たつて世間が受けるか受けないかそんな事はだれだつて受け合はれやしない。只やるだけやる分の事である。

衣食は無論節約する事位は覺悟しなければならない。そんなに贅澤をして見たい名文をかいて見たりしては冥利がわるい。

此夏は君は卒業する。卒業すればパンの爲に苦しむ。當前である。それがいやなら、すぐに中學校の口をさがして田舍へ行けばよい。

僕の髯毛は直き事鐵の如し。世の中が曲つて居るのである。僕は苦しいのを強いて笑つてる許ぢやない。ほんとに笑つてるのである。

此手紙に對して別段返事はいらない。只奮つて強勉し玉へ。以上

二月十五日

金之助

森田兄

三二一

明治三十九年二月十七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區指ヶ谷町七十八番地姉崎正治氏へ

拜啓

君の返事は拜見した。個人としての御忠告は難有感謝する。決して惡意を以て見る樣な事はしない。たとひ指圖であつても決して怒りはせん。

然し學長からもう一返何とか云つてきた時に何と挨拶するかはあらかじめ君に受合ふ譯に行かん、のみならず僕自身にも分らない。時と場合によつては斷然斷はらんとも限らない。是は決して君の親切を無にする考からではないから誤解してくれては困る。

高等學校の入學試驗が毎年ある。其折には學校長がよく僕の宅へ依賴にくる事がある。然し僕は多忙の故で毎々辭する事がある。それでそれぎりになる。淡泊なものだ。世の中は夫で澤山である。

夫では惡るいと云ふのは形式に拘泥した澆季の風習だ。二十世紀は澆季だから仕樣がない俗吏社會、無學社會ならとにかく學者の御そろひの大學でそんな事をむづかしく云ふのは大學が御屋敷風御大名風御役人風になつてるからだよ。

大學で語學試驗を囑托する、僕が多忙だから斷はる。其間に何等の文句は入らない。もしそれが僕の一身上の不利益になつたり英文科の不利益になれば僕のわるいのぢやない。大學がわるいのだ。

語學試驗なんか多忙で困つてる僕なんか引きずり出さなくつたつて手のあいて居る教授で充分間に合ふのだ。

僕なんかは多忙のうちに少しでもひまがあれば書物を一頁でも讀む方が自分の爲にも英文學科の將來の爲にもなると思つて居る。語學試驗を引き受けないでけしからんと思ふなら隨意に思ふがよい。○○さんなんか何と思つたつて困りやしない。少々こんな謝絶に逢ふ方が人間といふものが理解されていゝのだ。

學長たるものは只歷史の大家になつたつて駄目だよ。少しは世の中の人間はこんな妙な奴が居つて講師で

もそんなに意の如くにはならないといふ事を承知させるがいゝのだよ。　頓首

二月十七日

金之助

姉崎兄

三三三

明治三十九年二月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鈼太郎氏へ

拜啓カーライルの家の寫眞は持ち合せずカーライルの家に關する案内記樣のものは別封にて入御覽候御參考にも相成候はゞ幸と存候夫から今度の插繪の事も小生から御願に參上可仕筈の處多忙の爲め本屋まかせに致置候甚だ無申譯次第御容赦可被下候

次に插繪は別段の望無之只繪として面白きもの價値あるものを御無理にも願度と存候

服部申候には御報酬として普通の例にならふ必要なしと。夫れ故御手間のかゝり具合と出來のよさ加減にて充分御請求願上候

いづれ拜顏の上〔二字不明〕御禮可申上候へども以序右迄申上候　艸々

二月二十日

金之助

不折老臺

座下

三三三

明治三十九年二月二十日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

拜啓君の苦心の作を四方太が失敗だと申し小山内が傑作だと申したので君大に惑ふのは尤もだ。然し四方太と小山内と反對の批評をするのは寧ろ當然で驚ろく事はない。小山内のかいたものを四方太に見せ四方太のものを小山内へ持つて行つたら兩方で是はだめだといふに違ない。僕はどうかといふと自分でも分らない。然しとにかく見せ玉へ公平なる評番[原]を仕るから。尤も世の中は色々なものでほめてくれても銘々ほめ所が違つたりわるく云つても惡くいふ場所が皆異なつて居る。どんなものでもほめられもするし、くさゝれもする。どんな男でも女を口説いてる内は生涯に女房の一人や二人や[原]もてるものだからな。天下の別嬪だつて難くせをつければいくらでもあるよ。とにかく苦心の御作とあるからは是非拜見仕らうから郵便で送り玉へ　以上

二月[原]二十一日

金

傳四先生

三三四

明治三十九年二月二十二日　午前七時—八時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

四方太は倫敦塔幻影の盾は面白いといふが薤露行はわからぬといふ人だ。僕には其理由がわからん

只今一昔を拜讀に及んだから愈斷案を下さねばならぬ
四方太と擁子先生の評を左右にならべてどつちに賛成するかと問はれゝば余は四方太に賛成する。然し君の作のうちで尤も失敗の作かといふとさうではない。君は尤も苦心の作だといふけれども僕が見れば他の出來のいゝ諸篇より同等より少し下位の程度のものだ。だから四方太に賛成する爲には失敗といふ意味を大に高くしなければならん。
小山内君がほめるわけは分つた。あの男はこんなものがすきなんだ。あれは趣味が近いからほめるのだよ。
以上謹んで僕の斷案を左右に呈す。此斷案は決して動かぬ斷案であります。君決して疑ふなかれ
今樗火といふのをついでによんだ。樗火も芝居がゝりだが一昔よりはよつぽどいゝと思ふ　再拜

二十一日　　　　金之助

傳四樣

三二五

明治三十九年三月二日（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町二十八番地北辰館川本（當時横前）敏亮氏へ

拜啓蕪稿御愛讀被下候よし感銘の至に不堪候御尋ねの文句「うれしきものに罪を思へば罪ながかれと祈る憂身ぞ」と申す句は下の樣な意味で使用せる積に候「恐ろしき罪は犯したれど其内に嬉しき節もあれば其嬉しさに引かされて永く此罪を犯して居りたしと迄戀に心を奪はれたるうき吾身なり」と云ふ考にて使用致候處生硬なる爲め御疑をまねき候。元來小生のかきたるあるものはよく人より難解と云はれ候

自からかく折は俳句抔作る折の考にて文章をやり候故此位なら通るだらうと考候へども俳句をよむ樣な心得にて小說をよむ人は滅多になき爲め六づかしくて分らぬと思ふ人が多きならんと存候。骨を折つて人にわからぬ樣に致すは一方から云へば愚な事に候。呵々

先は右御返事迄　草々頓首

三月二日　　　　金之助

横前樣

題は古樂府中にある名の由に候御承知の通り「人生は薤上の露の如く晞き易し」と申す語より來り候。無論音にてカイロとよむ積に候

自己の作物が讀者に快感を與ふるよりうれしき事は候はず。作物の目的は是に於て完く成就されたるものに候。重ねて大兄の厚志を謝し候。向後共御氣付の個處も候はゞ善惡にかゝはらず御注意願度と存候

三二六

明治三十九年三月二日　午後零時—一時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鈼太郞氏へ

拜啓昨夜服部書店主人大兄の插畫持參逐一拜見致候。いづれも見事なる出來滿足不過之と存候あれは今迄のさし畫に類なき精巧のものにて出來の上は定めし人目を驚かすならんと嬉しく存候。夜中にてよくわからざりしかど、かの倫敦塔の圖の如きは着色の點に於いて慥かに當今の畫家をあつと云はしむるにたる

名品と存候。小生日本人のかいた水彩にてあの如きしぶき調色を見ず。只うまく板に出來ればよいがとそれが心配に候。此邊は大兄よりきびしく服部へ御命じ願上候

其他旅路行の古雅にして多少の俳趣味を帶べる琴のそら音の幽冥にして迭宕なる。まぼろしの盾の無邪氣にして眞摯なる皆面白く拜見仕候御蔭を以て拙文多大の光彩を添へ單行して江湖に問ふの價値を加へ候。先は御禮迄　匆々

三月二日　　　　　　　　　　金

不折畫伯

座右

三二七

明治三十九年三月二日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町中村不折へ

先日は失禮昨夜服部主人來訪され畫すべて拜見致候。御骨折の段奉鳴謝候。あの樣な手のこんだものをかいて頂くのは洵に難有仕合に御座候。御蔭にて拙文も光彩を放ち威張つて天下を横行するに足ると存候。不折のも今迄に比類なき精巧のもの甚だ滿足致候。小生あの倫敦塔の色彩を非常にうつくしく感じ候。何だか西洋人の色としか思はれず候。

小生の尤も面白しと思ふは大兄と不折の畫が毫も趣味に於て重複せざる點に有之候。是一つは兩君の性質が違ふからかとも存候。兩君の畫によつて小生の文集もえらい者に相成申候

先は御禮迄　匆々

三月二日

橋口樣

金

三二八

明治三十九年三月三日 午後十一時―十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區本郷六丁目二十五番鴻蔦中方野村傳四へ 〔はがき 署名に「なつめの金公」とあり〕

早稲田文學の三號の小說評（先刻は失禮アレカラスク讀ンダ）

小川未明氏作　未明君獨り感慨を催して居る讀者は何ともない。あんなに感じを人に強いるものはやない

大塚楠緒子作　筆が器用に出來て居る。〔苦〕（原）心る文章を考へたものであります。思ひつきもわるくありません。あの人の作としては上乘であります。三小說のうちの傑作である。

小栗風葉作　何をかいたものものやら。あれよりホト、ギスの投書の寫生文をよむ方よろしくと存候。駄作の駄の字であります

三二九

〔左上の隅に細字にて〕

僕の趣露行を十二へン讀んだ人がある。僕は感謝の手紙ヲ出シタヨ

明治三十九年三月八日　午前七時—八時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十二番地寺田寅彥へ　〔はがき〕

御病氣の由如何毎日いやな天氣風か雨か雪　いやはや。小生不相變原稿にて多忙是もいやはやあまりたのまれるのもよしあしゝでげす

三三〇

明治三十九年三月十七日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ

御手紙拜見中央公論には可成かゝうと思ふが何とも受け合はれない。只今ホト、ギスの分を三十枚餘認めた所。何だか長くなりさうで弱はり候。夫に腹案も思ふ樣に調はず閉口の體に候。實を申すと今日抔はぶら／＼白帆の見える川べりでもあるきたい所に候。文章も職業になるとあまり難有からず又職業になる位でないと張合がなし厄介なものに候。漾虛集は未だ校正が廻つてこず。拜借の天外先生の文章も拜見のひまなく候

先は右御返事迄　草々

三月十七日　　夏目金之助

瀧田哲太郎樣

三三一

明治三十九年三月二十二日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓新作小說存外長いものになり、事件が段々發展只今百〇九枚の所です。もう山を二つ三つかけば千

秋樂になります。趣味の遺傳で時間がなくて急ぎすぎたから今度はゆる〳〵やる積です。もしうまく自然に大尾に至れば名作然らずんば失敗こゝが肝心の急所ですからしばらく待つて頂戴出來次第電話をかけます。松山だか何だか分らない言葉が多いので閉口、どうぞ一讀の上御修正を願たいものですが御ひまはないでせうか　艸々

金

虚子先生

三三二

明治三十九年四月一日　午前十一時―十二時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜啓雜誌五十二錢とは驚ろいた。今迄雜誌で五十二錢のはありませんね。夫で五千五百部賣れたら日本の經濟も大分進歩したものと見て是から續々五十二錢を出したらよからうと思ひます。其代りうれなかつたら是にこりて定價を御下げなさい。中央公論は六千刷つたさうだ。ほとゝぎすの五千五百は少ないといふて居ました。來月もかけとは恐れ入りましたね。さうは命がつゞかない。來月は君の獨舞臺で目ざましい奴を出し給へ。

雜誌がおくれるのはどう考へても氣になる三十一日の晩位に四方へ廻して一日から賣りたかつたですな校正は御骨が折れましたらう多謝々々其上傑作なら申し分はない位の多謝に候。

中央公論抔は秀英舍へつめ切りで校正して居ます。君はそんなに勉強はしないのでせう。雜誌を五十二錢にうる位の決心があるなら編緝者も五十二錢がたの意氣込がないと世間に濟みませんよ。いや是は失敬。

僕試驗しらべで多忙しかも來客頻繁。どうか春晴に乘じて一日川があつて帆懸舟の通る所へ行つて遊び

たい。夫から東京座の二十四孝といふものが見たい。

今月は新聲でも新潮でも手廻しがいゝみんな三月中に送つて來た。是を見てもホト、ギスは安閑として居てはいけない。然し夫は漱石の原稿がおくれたからだと在つては仕方がない恐縮。

島村の破戒と云ふ小説をかつて來ました。今三分一程よみかけた。風變りで文句抔を飾つて居ない所と眞面目で脂粉の氣がない所が氣に入りました。

何やら鈍やら　以上

四月一日　　金

虚　先　生

三三三

明治三十九年四月一日　午後九時―十時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

藝苑毎度御贈にあづかり奉謝候小生は君の作が出るか出るかと思ふて待つて居るが出ない今度もかゝなかつたですか。破戒は二三日前買ひました。先日紅緑が來て破戒の著者は此著述をやる爲めに裏店へ這入つて二年とか三年とか苦心したと聞いて急に島崎先生に對し〔て〕も是非一部買はねばならぬ氣になりすぐ買つて來ました。是は只買つて來たのです。面白くてもつまらなくても構はない買つて來たのです。夫から半分程よみました。第一氣に入つたのは文章であります。普通の小說家の樣に人工的な餘計な細工がない。そして眞面目にすら〳〵、すた〳〵書いてある所が頗るよろしい。所謂大家の文辭の樣に裝飾澤山でないから愉快だ。夫から氣に入つたのは事柄が眞面目で、人生と云ふものに觸れて居ていたづらな脂粉

の氣がない。單に通人や遊蕩兒や所謂文士がかき下すものと大に趣を異にして居るからです。まだ後半はよまないから批評は出來ないが恐らく傑作でせう。今迄の日本の小說界にこんな種類のものはなからうと思ふのです。只一篇のモーチーヴが少々弱いかと思ふ。

輕薄なものばかり讀んで小說だと思つて居る社會にこんな眞面目なのが出現するのは甚だうれしい事と思ふ。

僕多忙採點に窮し來客に窮し、色々なものに窮す。君は金に窮する由。もし必要なら少々取りに來給へ

以上

四月一日　　　金

森田兄

僕ホト、ギスに坊っちやんなるものをかく。どうか御序の節よんで下さい。然し到底君がほめてくれさうなものでないから困る。實は藤村先生とは正反對のものです。

三三四

明治三十九年四月三日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ　〔はがき〕

破戒讀了。明治の小說として後世に傳ふべき名篇也。金色夜叉の如きは二三十年の後は忘れられて然るべきものなり。破戒は然らず。僕多く小說を讀まず。然し明治の代に小說らしき小說が出たとすれば破戒ならんと思ふ。君四月の藝苑に於て大に藤村先生を紹介すべし

三二五

明治三十九年四月四日　午後〇時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

春暖の候愈御淸適奉賀候小生も一寸伺ひ度と存じながらつい色々な雜用にて御無沙汰致し居候
拙文御推賞にあづかり感謝の至に不堪候山嵐の如きは中學のみならず高等學校にも大學にも居らぬ事と存候然しノダの如きは累々然としてコロがり居候。小生も中學にて此輩を二三目撃致候。サスが高等學校には是程劇しき奴は無之（尤も同類は澤山有之）候。要するに高等學校は校長抔に無暗にとり入る必要なき故と存候。山嵐や坊ちやんの如きものが居らぬのは、人間として存在せざるにあらず、居れば免職になるから居らぬ譯に候。貴意如何。
僕は教育者として適任と見傚さるゝ狸や赤シャツよりも不適任なる山嵐や坊つちやんを愛し候。大兄も御同感と存候。右御禮かた〴〵卑見迄如斯に候　以上

四月四日　金

繞石兄

三二六

明治三十九年四月四日　午後〇時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　（はがき）

畑打ち淡々として一種の面白味あり。人は何だこんなものと通り過ぎるかも知れず。僕は此の雪流な味を愛す。只學士の妻になり損なつたものが百姓になつて畠を打つ程零落するのは普通でない。「小說家」

といふ文はわかる達者である。「寮生活」も多少輕薄也。而も兩篇とも僕の文に似て居るから慚愧の至りだ。これにくらぶれば「素人淨瑠璃」杯の方遙かに面白し。

藤村の破戒といふのを讀んで御覽なさい。あれは明治の小説として後世に傳ふるに足る傑作なり。金色夜叉杯の類にあらず。

五千五百部はうれましたか。五十二錢が高いと思つたら明星も五十二錢だ。隨分思ひ切つたのが居る。其代り明星はうれません。

四月四日

三三七

明治三十九年四月十一日　午後二時—三時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より芝区琴平町二番地[illegible]野間真綱へ　〔はがき〕

拜啓其後久々御目にかゝらず。承はれば島津の若さんは病氣の由皆川より少々よい方との報知ありたり。然し何かと御多忙ならん。小生も是から又多忙にとりかゝる。講義をかくのがいやでたまらない。左様なら

〔以下細字にて行間に認めあり〕

度々御氣の毒の事なりよろしく御傳可被下候

三三八

明治三十九年四月十一日　午後十一時—十二時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より[illegible]江[illegible]島内鈴木三重吉へ

御手紙と小説を頂いて只今兩方とも拜見千鳥は傑作である。かう云ふ風にかいたものは普通の小説家に到底望めない。甚だ面白い。強いて難を云へば段落と順序が整然として居らん。第一回の藤さんと瀬川さんの會話が少々振はない。（其代りあとの會話は悉く活動して居る。）最後に舟を望んで藤さんを想像する所は少しさつと過ぎる（其代り鐵の貝をなげる所などはうまいものだ）。夫から法學士との問答もない方がいゝ。結末の瀬川さまは前後ともない方が明瞭である。尤もあれば妙な趣味は生ずる。壁の畫がぬけ出すのも考へものだ。以上は僕の感じたわるい方だがそれを除いては悉くうまい。會話といひ所作といひ仕草といひ悉く結構である。一つ二つ取り出して云ふとほかゞまづい樣になるから云はない。總體が活動して居る。僕が島へ遊びに行つて何かかかうとしても到底こんなには書けまい。三重吉君萬歳だ。そこで千鳥を此次のホトヽギスへ出さうと思ふが多分御異存はないだらう。構ひますまいな。尤も緒言はぬく積りだ。

どうか面白いものをもつと澤山かいて冥途文士を驚ろかして呉れ玉へ。僕多忙でこまる。昨日から講義をかきかけたら半ページ出來た。講義を書くより千鳥をよむ方が面白い。加計の縁談は破談とやら氣の毒な事だ藤さんでも貰つてやり玉へ。血統なんて構やしないよ。別嬪でやりくりが上手ならわるい病氣なんか持やしない。大丈夫なものさ。先祖代々の血統か吟味したら日本中に確たる家柄は一軒もなくなる譯だ。序によろしく　以上

四月十一日夜

金

三重吉樣

三三九

明治三十九年四月十一日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸へ

拜啓僕名作を得たり之をホト、ギスへ獻上せんとす隨分ながいものなり作者は文科大學生鈴木三重吉君。只今休學郷里廣島にあり。僕に見せる爲めに態々かいたものなり。僕の門下生からこんな面白いものをかく人が出るかと思ふと先生は顏色なし。先は御報知まで　艸々

四月十一日　金

虛子先生
　座下

三四〇

明治三十九年四月十二日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市江波村[illegible]島内鈴木三重吉へ

拜啓二三日前君に手紙を出すと同時に虛子に手紙を出して名作が出來たと知らせてやつたら大將今日來て千鳥を朗讀した。そこで虛子大人の意見なるものを御參考の爲めに一寸申し上げる

○全篇を通じて會話が振つて居らん。藤さんのホ、、、が多過ぎる藤さんが田舍言葉で瀨川さんが田舍言葉で掛合をしたらもつと活動するかも知れん（漱石曰く虛子の云ふ所一理あり。然し主人公が田舍言葉でやつつけたら下女や何かの田舍言葉が引き立つまい。但し全篇を通じて若い男女の會話はあまり上出來にあらずと思ふ）

○虚子曰く章坊の寫眞や電話は嶄新ならずもつと活動が欲しい（漱石曰く章坊の寫眞も電話も寫生的に面白く出來て居る）

○女と男が池の處へしやがんで對話する所未だ室に入らず。且つ其景色が陳腐なり（漱石曰く會話はあの位で上の部なるべし。池の景色鮒の動靜悉く寫生なれば陳腐ならず）

○虚子曰く若い男女が相會して互に思ふはありふれた趣向なり但二日間の出來事と云ふに重きを置いて、それを讀者にわからせる樣につとめた所がよし。（漱石曰く趣向は陳腐にもあらず又陳腐でなき事もなし要するに技倆如何にて極る。此篇の大缺點はどうしても作り物であるといふ疑を起す點にあり。然し所々に寫生的の分子多きために不自然を一寸忘れさせるが手際なり）

虚子曰く孤の言葉はし全篇あの調子で行けばえらいものなり（漱石曰く全篇大概はあの調子なり）

要するに虚子は寫生文としては寫生足らず、小說としては結構足らずと主張す。漱石は普通の小說家に是程寫生趣味を解したるものなしと主張す。

以上は虚子の評なり。君は固より僕に示す丈の積りだらうが僕以外の人の說も參考に聞く方が將來の作の上に利益があると思ふから一寸報知する。虚子と云ふ男は文章に熱心だからこんな事を云ふので僕が名作を得たと稱讃が大き過ぎた爲め却つて缺點を擧げる樣になつたので、いゝ點は認めて居るのである。

それで原稿は一度君の許諾を得た上でと思つたが虚子が持つて歸ると云つたからやりましたよ。尤も長いから少々削るかも知れない。是も不平を云はずに我慢してくれ玉へ　以上

四月十四日夜

金

三重吉樣

三四一

明治三十九年四月十七日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區[illegible]六丁目二十五番地[illegible]方野村傳四へ

拝啓先達て一寸御話を願つた末松先生の著述は愈本屋が著者と相談の上僕の撰定する人に依頼し度と云ふ事になつた。そこで先づファンタジー・オフ・ジャパンといふのから始めるさうで是を六月一杯に上梓したいと云ふ見込ださうだ。そこで先方の條件は

○第一、小說風にかいてあるからして、譯文に骨を折つてもらひたい。卽ち美文的に譯してもらひたい。

○原稿料は原書の一ページにつき壹圓五十錢拂ふ

○期限は六月十日迄。ページ數は二百四十八ページ

○譯者の名前は出さず。矢張り末松謙澄著とする事

以上の條件故誰か適任者で小使がとり度人はあるまいか。僕も引き受けた以上は幾分か責任が〔あ〕る。美文的に且つ間違のない樣に期限に仕上げてくれる人でないと困るが君もう一遍心當りを尋ねてくれないか。尤も文體が揃へばあながち一人に限らず二人でも三人でもよし。

僕の希望は小遣の入る人で以上の資格に應ずる人がよからうと思ふ。

先は右相談旁ちよつと御周旋の勞を煩はし度と存候　以上

四月十七日　　　　　　　　　　　　金

傳　四　兒

三四二

明治三十九年四月十八日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地[illegible]中方野村傳四へ　〔はがき〕

栗原と森田の兩氏が引きうけてくれゝば結構也。然し論文で青くなつたり黄色くなつたりして居るものがそんな餘裕があるかね。僕は末松先生自身よりもうまい文章をかく人を周旋してやると威張つたから幾分か責任がある。二人でやれば文體も揃はなくてはならん。其邊も話してくれ玉へ

金之助

三四三

明治三十九年四月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓先日御面倒を願ひ候藏書票の儀兩三日前學校にて本日に面會の上相談し候處大悦びにて篤く禮を申し畫料はどの位なりやと申候故心配に及ばす無料にてよろしと申置候實は大兄に聞き合せたる上クラークに返事を致すが順なれど大兄は無論斯樣をとらるゝ事なき事と存じ一存にて勝手に答へ置き候先は右御禮かた〴〵御報迄　艸々

四月十九日

橋　口　樣

叢虚集はまだ出來ず本屋がむやみに校正を後らす故に候

三四四

明治三十九年四月二十八日　午前七時―八時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

拜啓毎月淸國南京へ送つて頂いたホト・ギスは今月から御やめにして下さい。大將事日本へ歸つて參ります。どうか日本の東京の番地へやつて頂戴。其番地は只今一寸忘れた。

三四五

明治三十九年四月三十日　使ひ持歸　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

啓

一金　參拾八圓五拾錢也

一金　壹百四拾八圓也

計　壹百八拾六圓五拾錢也

右は吾輩は猫である(十)及び坊つちやんの原稿料として正に領掌仕候也

四月三十日　　夏目金之助㊞

俳書堂雜誌部

御中

三四六

明治三十九年五月三日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市江波村築島内鈴木三重吉へ　〔はがき〕

寺田寅彦が千鳥をほめて好男子萬歳とかいて來た。四方太が手紙をよこして四方太抔は到底及ばない名文である傑作であると申して來た。僕も是で鼻が高い。あれにケチをつけた虚子は馬鹿と宣告してしまつた。　以上

三四七

明治三十九年五月五日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

君の手紙は昨日拜見仕つた。實は此前二度手紙を出しても返事がないから君は當分手紙をかゝないのかと思つて居たら又突然手〔〕い奴が來て少々驚ろいた。飜譯の事は實は僕に譯せといふから、末松著で下働きをするなら食ふものに困つた時でなくてはいやだ。然し末松さんより上手な文章家を周旋してくれといふなら教へてやると威張つた結果とう〳〵君と栗原君の所へ持つ〔て〕行く事になつた。原稿料が高いつて本屋抔に嬉しい顏を見せてはいけない。壹圓五拾錢ではいやだが夏目からたのまれて仕方がないからやつてやると云ふ樣な顏付をして少々本屋を恐れ入らせてやるがいゝと思ふ。

猫の御批評難有頂戴。もう一回でやめる積で居ますが、忙がしくて書けないから閉口だ。所謂寫實の極致といふ奴をのべつに御覽に入れてアツと驚ろかせる積丈は成算が出來て居る。然し實際驚ろかすのはいつの事か分ない。

坊ちやんも讀んで下された由難有う。君の抗議には降參をしない。ほめてくれた所は贊成であります。大に嬉しいのです。

ホト、ギスの插繪の攻擊は降參をしてもよろしい。あれは僕のかくのでないから、時々は僕も惡口した

くなる。然し君小杉先生の雲は特別ですよ。あれはたまらないものだ。

左千夫が晶子を評したのゝ明星で「これほど本人の魯鈍を發表せるものなし」とか云ふて居る。左千夫が見たら怒るよ。元來左千夫なんて歌論抔出來る男ではない。只子規許り難有がつて自ら愚なうたを大事さうに作つて居る。

破戒の批評も拜見した。あの位思ひ切つてほめてやれば藤村先生も感謝していゝと思ふ。それでも過ぎたるは何とか云ふなら話せない男だ。詩人ぢやない僞人だ。實は破戒が出ても精細な評が出ないから氣の毒に思つて居たが君のを見ると同時に太陽のも早稻田文學のも讀賣には前後して三回も出たのを見た。かう續々出ればもう澤山だと思ふ。藤村先生瞑して可なり。

君のこんどの手紙はいつものよりも親しい感じがある。是はいつもよりも遠慮がないからだらう。僕論文を見るので中々多忙「坊ちやん」をかく所にあらず。今日漸く古城先生を片付けた。凡て十有九人。傳四の如きは御丁寧に二册つゞきを呈出して居る。

先達てから食後に腹が痛くつて仕方がない。學生が夫は胃ガンだと嚇したので驚ろいて服藥を始めた。是は慢性胃カタールださうだ。腹が重くて、鈍痛で、脊や胸がひきつつて苦しくて生きてるのが退儀千萬になつた。近々人間を辭職して冥土へ轉居しやうと思ふ。

五月五日

野武士

白楊先生

藝苑は君もくれるし、社からもくれる。可相成は君から丈貰ふ事にして本社の方は斷はりたい。

三四八

明治三十九年五月七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地[illegible]方野村傳四へ　〔はがき〕

昨日は近火見舞難有候。あの時やけたら今日は學校を休む筈であつた。胃カタールで藥を呑むと灰色の糞が出る。不可思議なものだ。ホト、ギスの千鳥を御覽、君より餘つ程うまいぜ。先生一番の奮勵を要す。君のエッセイは英語がまづいね。然し他に御仲間があるから大丈夫だ。然し今少し何とかありたいものだ。意味の通じない所がある。もつと注意して本をよまなくてはいけない

三四九

明治三十九年五月七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]野間眞綱へ　〔はがき〕

昨日は近火の處早速御見舞難有候。實は中川、森田君と寶亭へ行つて夫から九段へ行つて火事の事などは頓と知らず。一時は大分騷いだそうだ。何でも知らずに居るのが一番結構だ。人間もいつ死ぬか知らないから毎日幅をきかして居るのだね。御濟さんはどうかね。　艸々

四　月　某　日

三五〇

明治三十九年五月十六日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ　〔はがき〕

只今手紙着神經衰弱がわるい由。近々人間も辭職して靜養可然か呵々。今少し立つと漾虛集が出來るから一部上げます

拜啓寫眞は先日中川君から屆けてくれました。難有う。あの寫眞は大理石の像の樣には見えない。幽靈の樣だ。君の顏や咽喉の所があまりやせて居るせゐだらう。是も全く十七八の別嬪の祟と思ふ御用心

三五一

明治三十九年五月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

虛子先生行春の感慨御同樣惜しきものに候。然る所小生卒業論文にて每日ギユー〳〵閱讀甚だ多忙隨つて初袷の好時節も若葉の初鰹のと申す贅澤も出來ず閑居の體。加之眼がわるく胃がわるく。散々な體服藥の御蔭にて昨今は腹の鈍痛丈は直り大に氣分快壯の方に候。いつか諸賢を會して惜春の宴でも張らんかと存候へども當分駄目。一寸伺ひますが碧梧桐君はもう東京へは來らんですぐ行脚にとりかゝりますか

卒業論文をよんで居ると頭腦が論文的になつて仕舞には自分も何か英語で論文でも書いて見たくなります。決して猫や狸の事は考へられません。僕は何でも人の眞似がしたくなる男と見える。泥棒と三日居れば必ず泥棒になります　以上

五月十九日　金

虛子先生

三五二

明治三十九年五月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より伊勢國宇治山田町字浦田町百五十番地湯淺廉孫へ

拜啓此春は伊勢迄行かうと思つて居た所例の如く色々の用事が出來て遂に違約と相成殘念千萬に候。此

夏もどこへも出られぬかと思へば存分情なき生活なり。新聞の切りぬき御親切にわざわざ御送難有候拙文があんな所へ引き合に出やうとは夢にも思ひ寄らず。随分妙な所で妙な人によまれるものに候。只今卒業論文閲讀中多忙一筆み走らす　失禮御免

五月十九日　　金

湯　淺　樣

三五三

明治三十九年五月十九日　午後（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區竹早町百二十番地同人社内中川芳太郎へ

拜啓　二三日前君の論文をよみたり。通篇自家の英語にてかきこなしてある御手際はえらいもの也。英文としてあれ丈にかき上げられゝば結構なり。感服の至りである。只僕の氣のついたうちに二三箇所の誤謬あり。コンサーンといふ字の使用法が違つて居る樣に記憶す。内容も博引旁證少しも胡魔化しなく頗る立派なものなり。只西洋と日本の比較が有機的に發展してこず。御互に獨立して並んで居る樣〔な〕傾向諸々あるは可惜。然し大體から云ふて大成功である。聊か數言を陳じて敬意を表す。今から十年もあの方面へ向つて進めば日本随一の學者になれる㤀たり玉ふなかれ。老頽余の如きは云ふに足らず新進の士正に鋭意斯道の爲に貢獻する所あるべし。〇〇君の論文も頗る面白い。只英語がづぬけてまづいのは困る。

御願の文學論はいそぐ必要なし。面倒ならばやめてもよし。僕は是非出版したい希望もない。通讀の際變な事あらば御注意を乞ふ

エッセイは未だ片づかず

五月十九日　　　　　　　　　　金

芳太郎様

三五四

明治三十九年五月十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓君の論文は大に短かい而してよく釣合がとれてよく纒つて居るあれはマーローの脚本が數に於て少ないのと其數の少ない脚本が三とも同種類の主人公で貫いて居る所爲か又は君の手際がうまいのか。

文章も君のかいたのと人のを借りたのとは區別出來る樣に思ふが君のかいたと思はれる所が中々面白く出來て居る。但し綴字の間違に亂暴なのがあるのは驚ろいた。第一君の參考書のシモンズ Symonds とかくのは餘程輕率だ夫から時々 delinarate と云ふ言葉があるが是も困る。其他は略。

然し大體の上に於て成功で結構であります。

五月十九日　　　　　　　　　　金

森田君

五六日中に僕の短篇をあつめたものが出來る。本屋に贅澤を云ふて居たら。出來上つた上が本屋が復讐に大變高いものにしてどうしても是より安くは賣れないといふには閉口した

毎度雜誌を頂戴するから御禮の爲め一部獻上したいと思ふ

論文は未だ閲了の運に至らず

三五五

明治三十九年五月十九日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地藪中方野村傳四へ

拜啓二宮君の所へ手紙をやりたいが番地が不分明故君に傳言を依賴する。
昨今兩日二宮君の論文をよみたり。泰西の脚本を數多く通讀して材料を種々の方面から蒐集した勞力は大したものにて感心の至である。其議論も西洋人抔のいふ事には耳をも貸さず直ちに自己の胸臆を大膽に述べたる所甚だ可なり。但し英文の拙劣にして而も書法のゾンザイなる事甚し。同氏は無論英文をかく了見もあるまいが、あまり亂暴である故折角の論文の價値を下げる事一方ならず
面白い事は中川氏の云ふて居る事と二宮氏の說とある箇所が符節を合する樣に暗合した。

五月十九日　金

傳四樣

三五六

明治三十九年五月二十一日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

のせぬ時は御保存を乞ふ

拜啓別紙の如き妙なものが參り候筆者は木村秀雄とて熊本に住む人なれど逢ふた事も話をした事もなければ學生やら紳士やら知らず

只今論文校閲中にて熟讀のひまも無之只御高覽の爲めに御廻し致候。ホト、ギスへのせるともよすとも
其邊は勿論御隨意に候　以上

五月二十一日　　金

虛子先生

三五七

明治三十九年五月二十六日　午後三時－四時　本郷區駒込千駄木町[原]五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

拜啓漾虛集が出來ました一部あげます。諸々方々に誤字があり誤植がある樣だから見當つたら敎へて頂戴

人間の價値は何かやつて見ないとどの位あるか分らない。君どうぞ勉强してやつてくれ玉へ。

然し世の中には駄目な事が分り切つて居ても眼が見えないのでうん〱やつてる奴がある。そんなものは敎へてやつても說諭してやつても分りつこない。矢張自分が飽きる迄やつて念晴らしが出來ないと氣が濟まんものである。勝手に覺りがつく迄やらせるがいゝが、はたから見ると憫然なものだ。是は此間中からたつた一人で感じて居る事だが誰にも云はない。然し文藝上の事でも何でもない。

君にやり玉へといふのは文學の事だ自分で何か作つて見ないとどの位作れるものか自身にもわからない。いくら作つてもそのつぎの自分はどんな風にあらはれるか決して分るものでないから君も千鳥のあとに萬鳥でも億鳥でも大にかき給はん事を希望する。

僕も漾虛集丈でつきた譯でもないから是から又何ぞかく積りで居る。　以上

五月二十六日　　　　　　　　　　　　　　　夏目金之助

鈴木三重吉君

先日卒業論文を漸く讀み了つた。中川のが一番えらい。あの人は勉強すると今に大學の教師として候補より遥かに適任者にない〔る〕。しかも生意氣な所が毫もない。まことにゆかしい人である。只氣が弱いのが弱點である。

三五八

明治三十九年五月二十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

若葉の候も大分濃く相成候小生はフランネルの單衣を着て猶も秋をとして而も服藥を二種使用致し居候手島の原稿料御渡せの通にて可然かと存候

御紀行はつまらぬ由、小生もあの一くゝりを拝見する勇氣今は無之候

漾虚集本屋より既に獻上仕り候や一寸伺ひ候。まだならば早速上げる事に取計はせます　以上

五月二十九日　　　　　　　　　　　　　　　金

虚子先生

三五九

明治三十九年五月三十日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓御蔭にて漾虚集も出來ありがたく御禮申上候

偖先日願ひ候ブックプレートの儀獨者ある美術的に寫したる寫眞を見せるから來いと申す故次の日曜日朝參る積に候。もし御同意なら御同行如何本人は君にも見せたしと申居候。此男の説によると日本の寫眞術はまるで駄目のよし。此男は美術がすきでそんなものを調べる爲め半分來朝せしで日本的の生活を送り居候　御令兄にも御ひまなら御同行を御勧め申度候。先方の都合は八時半から十二時迄のうちならいつでもよき由〔に〕候八時頃拙宅迄御出被下候へば幸甚　所は巣鴨に候。先は右用事まで　匆々頓首

五月三十日　　　　夏目金之助

橋口清様

三六〇

明治三十九年六月三日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓小生近來論文のみを讀んだ結果頭腦か論文的に相成猫などは到底かけさうに無之候へども若し出來るならば七月分に間に合せ度と存候然し是は當人があてにならぬ事故君の方では猶あてにならぬ事と御承知被下度候

漸暑の候南軒の障子を開いて偶然庭前を眺めて居るのは愉快に候。少々眼がわるくて弱はり候。

碧梧桐趣味の遺傳を評して冗長魯鈍とか何とか申され候魯鈍には少々應へ申候。大將はいつ頃出發致候やあれは二年間日本中を遍廻する經畫の由なれど屹度中途でいやになり候。もしやりとげればそれこそ冗

長魯鈍に候。
近來一向に御意得ずたま〱机上清閑毛頴子を弄するに堪へたり因つて數言をつらねて寸楮を置二階に呈す　艸々

六月吉日　金

虚子先生

三六一

明治三十九年六月三日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區同心町二十八番地森卷吉へ

拜啓文章世界御送難有候あれは桑木君から僕の事が書いてあると聞いて先日買つて見たものです
僕の小兒の時分は楠正成論とか漢高祖論とかいふのが流行つたものだが今どきの小供は妙な事をかく驚ろいた天下は廣いものだ夏目漱石論を草する中學生があらうとは思はなかつた。
白鳥先生のつとめてやまずんば云々は老先生から奬勵の辭を頂戴した樣な感がある實際先方では其つもりなのだらう
近來論文ばかり讀んだので頭腦が丸で論文的になつた此樣子では創作抔は出來さうにない然し何も書きかけて居ないと氣樂でいゝ日々是好日といふ語が思ひ合される
此夏は又講義をかゝなければならない苦しくて面白くなくてきく人もつまらなくて然もやらねばならぬとは馬鹿氣て居る
右御禮旁二三迄　艸々頓首

六月二日

金

森仁兄大人

君が西片町へ轉居するといふ話をきいたが事實ですか

三六二

明治三十九年六月五日　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鈼太郞氏へ

拜啓謙虛集御蔭を以て奇麗に出來上り難有候

却說小生友人にてモリスと申す米國人只今第一高等學校の敎師に候處日本の美術書畫に多大の興味を有し諸々方々へ出掛候事樂の樣に見受られ候故一度大兄方へまかり出て御所藏の畫幅ことに日本のもの又は支那物拜見の上種々斯道の御話も承はり度と存候が御都合は如何に候やもし御迷惑に無之候はゞ適當の日(日曜ならねば午後)御指定被下間敷や尤も此男は非常のバンカラで萬事日本流に振舞ひ居候へば接待等の點については寸毫の御懸念無之候先は右御都合御うかゞひ迄　艸々不一

六月五日

金之助

不折居士

案下

三六四

明治三十九年六月七日　（以下不明）　本郷区駒込千駄木町五十七番地より　広島市猿楽町　鈴木三重吉へ

昨夜君の所へ手紙をかいた處今朝君のを受けとつたから書き直す原稿料は遠慮なく御受取可然。小生抔は始めからあてにして原稿をかきます

漾虚集の誤字誤植御親切に御教示の段難有候。實に僕も訂正の積で一度よんで誤の多いので驚ろいた位人が見たら定めし見苦しき事なるべし御蔭にて僕の見落したるをたに分直す事が出来て結構だ。どうか序にあとも教へて下さい

君は九月上京の事と思ふ神経衰弱は不快の事なるべく結構に候然し現下の如き愚なる間違つたる世の中には正しき人でありさへすれば必ず神経衰弱になる事と存候。是から人に逢ふ度に君は神経衰弱かときいて然りと答へたら普通の徳義心ある人間と定める事に致さうと思つてゐる

今の世に神経衰弱に罹らぬ奴は金持ちの魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か左らずば、二十世紀の軽薄に満足するひやうろく玉に候

もし死ぬならば神経衰弱で死んだら名誉だらうと思ふ。時があつたら神経衰弱論を草して天下の犬どもに犬である事を自覚させてやりたいと思ふ。

大分あつ〔〕たくなつた。揚宅難有なり。書籍をかへる時は大學の中川先生と今一人を手傳にたのみたいと思ふ　頓々不一

六月六日　　　　金

三重吉様

三六四

明治三十九年六月七日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地喜早方鈴木三重吉へ　（はがき　全部六號活字の文字にて認めあり）

啓上来る九日頃愈書齋の模替を仕るにつき手傳に御出掛願候右用事迄　早々頓首

三六五

明治三十九年六月八日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より神田區錦町三丁目一番地西田傳作氏へ

拝復漾虚集一部進呈仕候處わざ〳〵御禮にて痛入候實は毎度白百合を頂戴仕り候につき聊か御禮のしるし迄に机下に呈し候までの處御通覽被下候よしにて此上なき仕合に候。然る處校正疎漏にて到る處に誤字誤植有之嘸かし御目ざはりの事と存候

破戒は小生も數日かゝりて通讀致候あれは文章にてよませる小説では無之又局部々々の活動にて面白がらせる小説にも無之辛抱して仕舞迄よませて後感心させる作と存候小生も一いきにはよみかね候へども通讀して感服致候。愚考にてはあれは慥かに明治の作物として後世に傳ふべきものと存候尤も局部々々の刺激を求むる人にはよみ通す事少々如何あらんかと存候

拙作につき御讃辭を賜はり難有奉謝候去れど拙作中には破戒程の大作は無之尤も趣の違ふもののみ故此方が大兄の嗜好に投じて却つて分外の仕合せと相成りたるやも計りがたくと存候呵々先は右御挨拶迄　草草不一

六月七日夜　　　　　　　　　　金之助

林外詞兄

三六六

明治三十九年六月十九日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ　〔はがき〕

漾虚集の誤植御報知難有候三版には大分正さねばならぬ。
神經衰弱論をかゝうと思つて居る。僕の結論によると英國人が神經衰弱で第一番に滅亡すると云ふのだが名論だらう。いづれ出たら讀んでくれ玉へ

三六七

明治三十九年六月二十二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本鄕六丁目二十五番地喜中方野村傳四へ　〔はがき〕

正は勝たざるべからず、邪は斃れざるべからず。犬は殺さゞるべからず。豚は屠らざるべからず、猪子才は頓首せしめざる可からず。文は作らざるべからず。書は讀まざるべからず。月給は貰はざるべからず御馳走は食はざるべからず。試驗はしらべざる可からず。人世多事

三六八

明治三十九年六月二十三日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拝啓末松の譯完結の由本屋よりも其旨申來候原稿料も御受取のよし承知致候末松先生外題を改めて夏の

夢日本の面影としたさうだ。何だか本郷座でやりさうぢやないか。青萍先生も存外話せない男だ
論語を御よみの由小生は丸で忘れたりニーチェと論語とを比較して見給へ。兩人共人間である。
口述試驗に悽慘たるものは君のみにあらず。學問の出來る中川と平然たる傳四とを外にしては大概は悽澹たるものである。サンタン豊君のみならんや。試驗官たる小生が受驗者とならば矢張りサンタンたるのみ。僕はあの試驗をして深く感じた事がある。多數の人は逆境に立てば皆サンタンたるものだ。得意の境に立てば愚うたらたる小生の如きものも亦普通の試驗官たり。人間を見るのは逆境に於てするに限る。得意に居る奴を見ると大に買ひ被る。當人自身が買ひ被つて居る。氣の毒なものである。逆境を踏んだ人は自ら修業が出來るサンタンたる諸先生も毎日試驗を受けて居れば立派な人になれる。天の禍を下す、下せる人を珠玉にせんが爲めなり。禍はないかな。禍はないかな。天下に求むべきものありとすれば禍のバーゲトリなり。

今一つ感じた事がある。純文學の學生は大抵神經衰弱に罹つて居る。是は二十世紀の潮流が自然學生を驅つてこゝに至らしめたるか又は神經衰弱ならざれば純文學が專門に出來ぬのか。未だ研究せず。諸君既に神經衰弱なれば試驗官たる拙者の如きは大神經衰弱者ならざるべからず而も當人自身は現に神經衰弱を以て自任しつゝあり。神經衰弱なるかな。神經衰弱會を組織して大に文運を鼓吹せんとす白楊先生以て如何となす。　頓首

六月二十三日

金

白楊先生

明治三十九年十月二日　午後[illegible]　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區[illegible]町四丁目八番地[illegible]へ

啓上其後御無沙汰小生漸く點數しらべ結了のう／＼致し候。昨日ホトヽギスを拜見したる處今度の號には猫のつゞきを掲載したくと存候とかあり候。是は御微笑に價したる次第に候。實は論文的のあたまを回復せんため此頃は小説をよみ始めました。すると奇體なものにて十分に三十位何だか漫然と感興が湧いて参り候。只漫然と湧くのだからどうせまとまらない。然し十分に三十位だから澤山なものに候。此漫然たるものを一々引きのばして長いものに出來かす時日と根氣があれば日本一の大文豪に候。此うちにて物になるのは百に一つ位に候。草花の種でも千萬粒のうち一つ位が生育するものに候。然しとにかく妙な氣分になり候。小生は之を稱して人工的インスピレーションとなづけ候。小生如きものは天來ノインスピレーションは棚の御牡丹と同じ事で當にならないから人巧的ニインスピレーションを製造するのであります。近頃は器械で卵をかへすインキユベトーと云ふものがあります。文明の今日だから人爲的インスピレーションのあるのも尤でせう。そこで此七月には何でも四編ばかりかく積りです。前に云ふ漫然たる惠比壽ざれの樣なものは雲の如くあるが偖まとまつたものは一つもない。どれを纏めやうか、又どう纏めやうか其邊は未だ自分でも考へて居ないのであります。實は來學年の講義を作らなければ大議論をかくか大讀書をやる積りだが講義といふ奴は一と苦勞です。是は八月に入つてからかき出す積りです。

傳四は文學士になり候。小生も文學士に候。して見ると傳四と僕とは同輩に候。同輩である以上は是から御馳走の節は萬事割前に致さうかと存候。

小生は生涯に文章がいくつかけるか夫が樂しみに候。又喧嘩が何年出來るか夫が樂に候。人間は自分の力も自分で試して見ないうちは分らぬものに候。握力抔は一分でためす事が出來候へども自分の忍耐力や文學上の力や強情の度合やなんかはやれる丈やつて見ないと自分で自分に見當のつかぬものに候。古來の

人間は大概自己を充分に發揮する機會がなくて死んだらうと思はれ候。惜しい事に候。機會は何でも避けないで、其儘に自分の力量を試驗するのが一番かと存候

坊チヤンを停號御廣告に相成るのは恐れ入りましたね。しかも坊ちやンが下落して四十錢になるに至つては愈恐れ入りましたね。まだ大分殘つて居ますか。

猫を英譯したものがあります。見てくれと云ふて郵便で百ページ許りよこしました。難有い事であります。然し人間と生れた以上は猫杯を翻譯するよりも自分のものを一頁でもかいた方が人間と生れた價値があるかと思ひます。

小生は何をしても自分は自分流にするのが自分に對する義務であり且つ天と親とに對する義務だと思ひます。天と親がコンナ人間を生みつけた以上はコンナ人間で生きて居れと云ふ意味より外に解釋しやうがない。コンナ人間以上にも以下にもどうする事も出來ないのを強ひてどうかしやうと思ふのは當然天の責任を自分が脊負つて苦勞する樣なものだと思ひます。此論法から云ふと親と喧嘩をしても充分自己の義務を盡して居るのであります。天に背いても自分の義務を盡して居るのであります。況んや隣り近所や東京市民や。日本人民や乃至世界全體の人の意思に背いても自分には立派に義理が立つ譯であります。是ではちと氣焰が高過ぎましたね。少々ひまになつたから餘計な事を書きます。

昔はコンナ事を考へた時期があります。正しい人が汚名をきて罪に處せられる程悲慘な事はあるまいと。今の考は全く別であります。どうかそんな人になつて見たい。世界總體を相手にしてハリツケにでもなつてハリツケの上から下を見て此馬鹿野郎と心のうちで輕蔑して死んで見たい。尤も僕は臆病だから、本當のハリツケは少々恐れ入る。絞罪位な所でいゝなら進んで願ひたい。

四方太先生愈々文章論をかき出しましたね。あれを何號もつゞけたらよからう。尤も文章論と申す程な

筋の通つたものではない全く文話といふ位なものですな。鳴雪老人のは例によつて讀みません。漾虚集を御批評下さつてありがたい。ことに野菜づくしはありがたい。中央公論にれ大魚に呑まれたる人といふ小説がありますよ。伊藤銀月といふ人のかいたものです。隨分妙な事をかきますね。然し中々新しい形容の言葉があつて刺激の強い文章です。序に讀んで御覧なさい。
色々かきましたね。いくらでもかけばいくらでも書けるがまづよしませう
どうです一日どこかで清遊を仕らうぢやありませんか　頓首

七月二日

夏金生

虚子大人

三七一

明治三十九年七月十一日　午後五時―六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區音羽八丁目二十三番地森次太郎氏へ

昨日は失敬致候
御尋ねの〇〇〇〇と申す男は昔は小生の同級生に候今は高等學校で同僚に候然し近來殆んど交際せず從つて此頃の同氏の人世觀其他一向承知仕らず候。又嫁をとる意向あるや否やも知らずとる積りならとくにもらふた筈と存候
女子大學の教師中には懸意のもの無之只大塚保治といふ人を知つて居り候
高著出版の件小生の出來る事なら本屋へ一二軒は聞いて見てもよろしく候
妻君の御馳走が出來損つて御病氣は風流に候自分で粥をにて食ふ抔は猶々風流に候下女を使はぬも風流

に候。小生先日下女兩名を一時に解雇し面倒だから雨戸を開放して寐た事有之候。下女が出來ねば毎晩戸を立てないで、三度共パンを食つて掃除もしないでいつ迄も暮す積りに候ひし處又下女が兩名出來た爲め折角の計畫も無駄に相成候

先は右御返事迄　匆々頓首

七月十一日　　夏目金之助

森　次太郎様

三七二

明治三十九年七月十七日　午後十一時－十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地　高濱清へ　〔はがき〕

拜啓猫の大尾をかきました。京都から歸つたら、すぐ來て讀んで下さい。明日は所勞休みだから暇だと都合がいゝ

十七日

三七三

明治三十九年七月十八日　午後十一時－十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　福岡縣京都郡犀川村　小宮豐隆へ

御手紙拜見川へ行つて鮎をとるのは面白いだらう僕も同行の榮を得たい。猫の大尾をかいた。八月のホトヽギスには出るだらうと思ふから讀んでくれ玉へ夏は閑靜で奇麗な田舍へ行つて御馳走をたべて白雲を見て本をよんで居たい。大磯や箱根は大きらひ　あつくなるとぼんやりして氣が遠くなるそこへ人が來て

のべつに入れ替り攻撃をやると到底持ち切れない。御客から見たら病人か厭世家の樣だらう。文章もかき上げると愉快だがかいてるうちは苦しいものだ。胃が堅くなる。外の事は何にも考へられなくなる。一大心配が出來た樣な氣がする讀書はこれ程熱心になれないのはどう云ふものだらう

來月は講義をかゝなければならん。講義を作るのは死ぬよりいやだそれを考へると大學は辭職仕りたい。

薤露行を大變面白がつてくれる靑年が往々ある。ある人手紙を寄せて薤露行の一篇書に於て聖書よりも尊しとかいてきた文士の名譽も此に至つて極まる譯だ。然しあんなものは難句を重ねて行く樣な心持ちで骨が折れて行かない

僕も困があつて山があつて河があつて家があつて最後に金があつたら嘸よからう。然らずんば胃病で近近往生可仕候　頓首

七月十七日

夏目金之助

小宮豐隆樣

御ばゞ樣の御病氣を大事になさい。御母さんによろしく

三七四

明治三十九年七月十九日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

昨日は失敬其節御話し致候ホト、ギスの寄贈所は小石川區久堅町七十四番地五十二號菅虎雄方に候間宜敷様御取計願上候　以上

七月十九日

三七五

明治三十九年七月二十日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區市ケ谷藥王寺前町二十番地早稻田文學社内片上伸氏へ

拜啓先日は失禮致し候兩度の御高來の節何か勝手に申述候雜談をわざ〳〵早稻田紙上御掲載相成度由にて原稿御廻付相成候には一寸閉口致候本來なら御斷りを致したき筈なれども折角の御勞力を無にするも失禮と存じ貴意の通に可仕候尤も貴稿は一應拜見不穩當と思ふ所など訂正致し候間右はあしからず御海恕被下度候　頓首

七月二十日　　夏目金之助

片上伸様

三七六

明治三十九年七月二十四日　午後零時—一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區竹早町百二十番地愛知社中川芳太郎へ

毎々御面倒相願候處早速神田の方へ御送り被下候よし多謝の至り、いづれ印税が這入つたら何か御馳走可致候

學校を卒業して一日のうちに世の中が恐ろしくなつたから是から餘程注意を周密にする由結構に候

然し周密と云ふ意味に上等と下等あり。自己の智力にて出來得限り考へ、自己の感情にて出來得る限り感じ。而して相手と自己とに不都合の破綻なき樣にするを上等といひ。只人を見て泥棒の如く疑ひ何でもコソ／＼に先を制する樣な事を得意にする是を下等の周密と云ふ。

君の感じたるは如何なる方面に於ての意味なるやを知らず。もし前者ならば賢の方へ一歩進みたるなり。もし後者ならば愚の方へ一歩進みたるなり。世上幾多の才子は愚に近づきつゝ自ら賢に進むと思へり。利害の關係なき三者より忌憚なく是等の人を評して見よ。學校に居るうちの方が遙かに上等にして卒業して世の中に居る時の方が餘程下等なり。而も自らは頗るワイズになつたと考ふる人多し。是程いやな現象なし。

世の中が恐しき由、恐しき樣なれど存外恐ろしからぬものなり。もし君の弊を言はゞ學校に居るときより君は世の中を恐れ過ぎて居るなり。君は家に居つておやぢを恐れ過ぎ。學校で朋友を恐れ過ぎ卒業して世間と先生とを恐れ過ぐ。其上に世の中の恐しきを悟つたら却つて困る位なり。恐ろしきを悟るものは用心す。用心は大概人格を下落せしむるものなり。世上の所謂用心家を見よ。世を渡る事は即ち是れあらん。親友となし得べきか。大事を托し得べきか。利害以上の思慮を鬪かはすに足るべきか。

世を恐るゝは非なり。生れたる世が恐しくては肩身が狹くて生きて居るのが苦しかるべし。

余は君にもつと大膽なれと勸む。世の中を恐るゝなとすゝむ。自ら反して直き千萬人と雖われ行かんと云ふ氣性を養へと勸む。天下は君の考ふる如く恐るべきものにあらず、存外太平なるものなり。只一箇所の地位が出來るか出來ぬ位にて天下は恐ろしくなるべきものにあらず。どこ迄行つても恐るべきものにあらず。免職と增給以外に人生の目的なくんば天下は或は恐ろしきものかも知れず。天下の士、一代の學者

はそれ以上に恐ろしき理由を口にせずんば耻辱なり　勉旃勉旃

七月二十五日

金

芳太郎様

三七七

明治三十九年七月二十八日　[illegible]　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區久堅町七十四番地十一　菅虎雄氏へ

拜啓昨夜紀元會に出席を上君の奥さんの病氣の由をきゝたり隨分御心配事御推察可然候小生只今さしかゝりたる用事あ〔り〕一見舞にあがらず。毎月御送りの金子は昨日遲番に出掛けたかと思つて今日當番へて出た。遲延の段失敬。

金貳十圓は七八月兩月分なり御査收を乞ふ　頓首

二十八日

金

虎雄様

三七八

明治三十九年八月三日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御手紙拜見昨日來てあれ丈話した上今日六錢印紙を張つて手紙をよこす人は滅多にあるまいと思ひながら讀んで見ると第一が猫の攻撃は多數決だから已を得んとあきらめて後世に知己を待つより外に仕方な

し

作文編緝につきての御注文は麁子へ交迫致し置くべく墨汁一滴の著者へは申してやれぬから是も麁子で間に合して置くと致す。猫に至つては悉く御取りになつても差支なし

夫から續稿出版の件は其うち本屋がき次第談判にとりかゝるべく候何とも受合はれないが。来た奴を一人一人つらまへる事に可致無し円なぞもうかし知らないと説明に困るがね。

君に御辭儀をしたものは正に僕の妻にして年齢は當年三十、二十五六に見えたと申し聞かしても喜びさうもないから話さずに置く。僕の妻にしては若過ぎるとは大に此方を老人視したものだ

寒月先生は神經質にして爾惜あるもの。彼は僕に向つてすら丁寧に御辭儀をしたる事なし況んや愚妻に於てをや

古語を復活せる新體詩人に付ては大に激昂の體御尤も千萬の樣なれど實は小生未だ同君の詩を讀まず從つて毫も癪にさはらず

今日春陽堂の本を嘯月先生催促かた〴〵御來訪になる。僕唯々として汗をかいて原稿紙へ向ふ。中々苦しい。しばらくして春陽堂よりカクザトウ一罐暑中見舞として來る

今度の小說の一部分はあるひは御氣に召すかも知れず實は君位な御氣に召さないと天下氣に召し手がなくなるだらうと思ふ。漱石先生虛名を擁して倖月知己を後世に待つ樣では憫然なり　艸々頓首

八月三日　　金

白楊先生

三七九

明治三十九年八月三日　午後六時—七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔封筒裏の署名に「なつめきむのすけ」とあり〕

拜啓碧梧桐の送別會へはついに出られず失敬致候。文學士森田白楊なるものあり小生の教へた男なるが今度作文の本を作るとかにて墨汁一滴のなかを二三滴君の文を一篇、僕の猫を一頁程もらひ度と申してきたり。どうか承諾してやつて下さい。

寒月來つて今度の猫を攻撃し森田白楊之に和す。〔原〕漱石之に降る。只今新小說の奴を執筆中あつくてかけまへん。　艸々頓首

八月三日　金　奴

虛子庵　二階下

三八〇

明治三十九年八月五日　午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より上野國伊香保溫泉蓬萊館野間眞綱へ　〔はがき〕

むかし伊香保へ行つて人の家根ばかり見てくらした事あり。君は今雲を見てくらして居るだらう。今小說をかいて居る　多忙

三八一

明治三十九年八月五日　午前（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より名古屋市西瓦町百〇五番戸中川芳太郎へ

おとつさんが御病氣で血を吐かれたさうな嘸御心配の事であろ其うちどうにかよくなるだろから安心して越路でも聞いて心配せずに御出でなされ。色々卒業していやな事ばかりでくさ〳〵するだろが其うち面白い事も出て來るだろ長い手紙を上げたいが今新小説の小説をかきかけて期限がせまつてひまがないから是丈にします　艸々

八月五日　　金

よたさま

御許

三八二

明治三十九年八月五日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓

虛子の返事に云く拙文おやくに立てば冥加至極に存じ上げ奉ります。墨汁一滴も差支無いことと信じます

生田先生は現代の知己なり先生の朗讀四十點猫の文章二十點併せて六十點にて及第の事と存候

新小説未だ脱稿せずあつくてかけまへん

つゝ勉強をしつゝ、文章をかきつゝ、もうろくどもがくたばる迄は決して千駄木をうつらずして、安々と往生仕る覺悟なれば君が夜中遊びにくる位の事は何でもなく候。

いゝ年をしてこんな事を云ふと笑ふなかれ僕の妻は御覽の如く若きが故に亭主も中々元氣がある也　先は其丈

八、六　　　　金

白楊先生

三八四

明治三十九年八月七日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區西片町十番地畔柳都太郎へ

拜復商業學校はどの邊なりや文學士でなくてはならぬにや僕は一二年前の卒業にて久しく周旋をたのまれたる男あり然し是は撰科なり語學は比較的本年の卒業生のあるものよりも出來る也。新學士の地方行は先達迄一名ありし所只今長岡へ交渉中なりもしまとまらずば此方へ相談してもよろし但し語學が特別えらいとは受合かね候

東風君苦沙彌君皆勝手な事を申候夫故に太平の逸民に候現實世界にあの主義では如何かと存候御反對御尤に候。漱石先生も反對に候。

彼等の云ふ所は皆眞理に候然し只一面の眞理に候。決して作者の人世觀の全部に無之故其邊は御了知被下度候。あれは總體が諷刺に候現代にあんな諷刺は尤も適切と存じ猫中に收め候。もし小生の個性論を論

文としてかけば反對の方面と雙方の働らきかける所を議論致し度と存候

来九月の新小説に小生が藝術觀及人生觀の一局部を代表したる小說あらはるべく是は是非御讀みの上御批評願度候。是とても全部の漱石の趣味意見と申す譯に無之其邊はあらかじめ御斷はり申候未だ脱稿せず十日〆切迄に是非かきあぐる積夫故どこへも行かず夏範の姿御無沙汰御ゆるし可被下候

八月七日　　　　　　　　　　　　金

芥舟先生

三八五

明治三十九年八月（日附不明）　午後零時—一時　本鄉區駒込千駄木町五十七番地より鹿兒島縣肝屬郡高山村野村傳四へ　〔はがき〕

傳四さん田舍は面白いだらう。東京も面白い。此年の土用は存外凉しい。毎日晴氣さましに近所の下等野郎を罵倒してやる。是から十年もかゝるうちには彼等は少々は上品の何物たるを解するに至るだらう。ぼくは慈悲の爲めに千駄木に永住する也　匆々。執筆多忙。九月に逢ひましよ

三八六

明治三十九年八月十日　午後零時—一時　本鄉區駒込千駄木町五十七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ　〔はがき〕

先達は手紙をありがたう。牛の胃袋の話を二三行かりました。九日迄連日執筆この兩三日休養夫から講義をかく。人生多忙。

八月十日

三八七

明治三十九年八月十日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

先刻はありがたう存じます。其節の馬の鈴と馬子唄の句は

　春風や惟然が耳に馬の鈴

　馬子唄や白髪も染めでくるゝ春

と致し候、矢張り同程度ですか

三八八

明治三十九年八月十一日　午前十時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

拜啓昨日の駄句花嫁の馬で越ゆるや山櫻を、花の頃を越えてかしこし馬に嫁と致し候が御賛成下さい。是は几董調です。前のと伯仲の間だと仰せられては落膽します。

『御前が馬鹿なら、わたしも馬鹿だ。馬鹿と馬鹿なら喧嘩だよ』今朝から云ふうたを作りました。此人世觀を布衍していつか小說にかきたい。相手が馬鹿な眞似をして切り込んでくると、賢人も已を得ず馬鹿になつて喧嘩をする。そこで社會が墮落する。馬鹿は成程社會の有毒分子だと云ふ事を人に敎へるのが主意です。先づ當分は此うた丈うたつてゐます。小說にしたらホトヽギスへ上げます

三八九

明治三十九年八月十二日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より山口縣玖珂郡由宇村三國屋鈴木三重吉へ　〔はがき〕

君は一人で大きな屋敷に居るよし。御大名の樣でよからうと思ふ。僕例の如く多忙長い手紙をかく餘暇なし。君文章をかきたいならどん／＼御かきなさい。書いてゐるければ其時修養がたりないとか何とかはじめてわかる也。かゝないうちはどんな名作が出來るかわからん。何でもどんどんやるべしと存候

三九〇

明治三十九年八月十五日　午前十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　京都市大學町一丁目井原市次郎氏へ

拜啓廣島に寫眞を御送被下あつかり本日落掌難有御禮申上候、あの寫眞は背面白くながめ暮らし候新聞の井原氏は大兄の御舍弟のよしそれはちつとも知りませんでした尼子さんは四郎と云ふ名です同町内に居ていつでも厄介になります。先日逢つたら痩せた時へ引合に出されたと申されました。迷亭と云ふ男は定であるません。苦沙彌は小生の事だと世間できめて仕舞ました。寒月といふのは理學士寺田寅彦といふ今大學の講師をしてゐる人だ さうです。是も世間がさう認定したのです。尤も前齒は缺けて居ます。

寫眞拜受難有候。御顏を見て始めて思ひ出しました。よくあなたと同じ御話しをした事がありますね。然し御貨を落したのは慥かにあなたではありません。もつと脊の高い痩せた人の樣に思ひます。あなたは寫眞では大變色が白いが小生の記憶ではもつと黑いと思ひますがどうですか。

尼子さんに逢つたらあなたの御話しをしませう。斗作先生に御文通の時小生の事をきいて御覽なさい。倫敦の時の事で何か面白い事を御話しなさるかも知れません　頓首

八月十五日　　　　夏目金之助

井　原　様

三九一

明治三十九年八月二十六日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より [illegible]へ　〔はがき〕

先達ては久々にて御出での處生憎用事中にて失禮あの晩は十時半頃迄かゝつた夫から森田に飯を食はせたら十二時少し前になつた君等は引きとめられた上飯を食ひそくなつて定めし空腹であつたらう逗子の樣子御しらせ被下難有候先〔は〕御禮迄　草々

〔以下行間に朱書〕

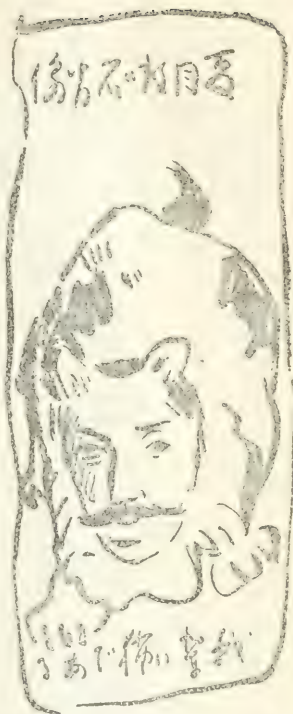
昨日傳四瓢然歸來。大島紬を二反もつてくる。但し御見やげにあらず。暴風雨にて垣愈危うし。講義は一頁もかゝず。北郷先生はもう歸りましたか

三九二

明治三十九年八月二十七日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より大分縣臼杵町字海添野上豐一郎へ　〔はがき〕

御自製の繪端書難有存候江湖々一帆を張つて行きたい方へ行つて見たく候。休暇中毎日來客是でも中々多忙なるには驚き候。書生、青年、雜誌屋、本屋を除いては全く蝿塵を訪問するものなし妙な生活に候。夫で澤山に候。夫も多過ぎる位に候。

三九三

明治三十九年八月二十八日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

大坂[原]ノ滑稽新聞所載の寫し。學生がキリヌキを送つてくれた

夏だから客はないと思ひの外毎日々々繁昌で樂々書案も出來ず閉口してゐるうち八月も御仕舞になつて大に驚ろいて弱つてゐる實は講義を一ページも書いてゐない。然し[原]而して十月一日發行の中央公論にかく約束がある進退に窮する譯であつて見れば講義に容易には始まりさうにもない。まづ以て十五日以後二十[原]以日と見當をつけて御出京可然候。今日狩野亨吉先生に京都の模樣をきいたら京都の法科大學抔は十月中頃から開講するさうだ隨分のんきなものである。僕も其うち東京の文科大學で十二月位に開講して見樣と思ふ。

猫の批評こま〴〵難有候苦沙彌と迷亭の比較御尤に候。あれで一段落ついてまづ安心致し候。然し出來るならばあんな馬鹿氣た事を生涯かいてゐたい。それでないと。腹へつめたものがもたれて困る。猫の十一を非難せるもの二人ばかりありたりその一人の曰く終りの方の文明の議論が人によつて調子が變つてゐない。迷亭が喋舌つても苦沙彌が述べても同じ語氣であると。御尤もなる攻擊に候。

今度は新小說にかいた。九月一日發行のに草枕と題するものあり。是非讀んで頂戴。こんな小說は天地開闢以來類のないものです（開闢以來の傑作と誤解してはいけない）
今度の中央公論へは何をかゝうと思ふてゐる。今日は久し振りで朝から晩迄外出方々あるいてくたびれた。　艸々

八月二十八日　　なつめ金

小宮豐隆先生

三九四

明治三十九年八月三十日　午後零時―一時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地朝陽館野間眞綱へ　〔はがき〕

拜啓草枕を明治文壇の最大傑作といふてくれる人はたんとあるまい。普通の小說の讀者は第一つまらないと云ふて笑ふだらう。だから新小說に氣の毒である。謹んで高評を謝す

三九五

明治三十九年八月三十一日　午前十時―十一時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

先生驚ろきましたね僕の第三女が赤痢の模樣で今日大學病院に入院したといふ譯ですがね。ことによると交通遮斷になるかも知れません。小供の病氣を見てゐるのは僕自身の病氣より餘程つらい。しかも死ぬかも知れないとなるとどうも苦痛でたまらない。もしあの子が死んで一年か二年かしたら小說の材料になるかも知れぬが傑作抔は出來なくても小供が丈夫でゐてくれる方が遙かによろしい。到底草枕の筆法では

行きません。

猫の代正に頂戴難有候漱石會なるものが出來るよし出られゝばいゝが。

新小說は出たが長篇名の妙案〔苛〕林なのには辟易しました。ふりがなは矢張り本人がつけなくては駄目ですね。

もう九月になる講義は一頁もかいてない。中央公論は何をかいたものやら時間がなさゝうだ。是で小供の病氣がねるければ僕は何も出來ない。中央公論には飛んだ不義理が出來る

然し交通遮斷は一寸面白い。あまり人がきすぎて困るからたまには交通遮斷をして見たいと思ひます。

野間先生が草枕を評して明治文壇の最大傑作といふて來ました。最大傑作は恐れ入ります。寧ろ最珍作と申す方が適當と思ひます。實際珍といふ事に於ては珍だらうと思ひます

八月三十一日

金

虛 子 先 生

三九六

明治三十九年九月二日 夕 本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區[illegible]六丁目二十五番地[illegible]方野村傳四へ

拜啓別紙の通り通知有之候當宅では三女が赤痢で入院中交通遮斷なり（尤も內々では出る）然し棄て置いてもわるいと思ふから若し時間の餘裕があるなら君僕の代理に會葬してくれ玉へ。右用事迄 艸々

病人は助かりさうである。金は入りさうである。講義はかけさうもないのである。中央公論はかゝねばならぬ樣である。

九月二日

夏目金之助

野村傳四様

三九七

明治三十九年九月二日　夜　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十番地寺田寅彦へ

嵐拜見先づ面白い方に候

結末の五六行は大家に候。あれ位短かくしてしかもあれた仕舞に置く所が尤もよろしく候。短篇は是で持つものに候。ドーデ抔はこの呼吸を心得た人に候。君もこの呼吸を心得た人に候。

　嵐の前の景色よろしく候。あとの景色もよろしく候。只肝心の嵐が一向引き立たぬ氣が致し候。今少し何とかしたら凄くなつたらう。又蕪公の嵐後の樣子が尻缺してよわつたらう。

「海は地の底から重く遠くうなつて來る」の一句既に時間を含くんで居るのみならず。既に嵐の經過を豫期せしむる如き書方である。此好句を冒頭に置きながら其つぎの節から一節毎に嵐の吹き募る模樣を漸漸深く切り込む樣に書か（卽ち時間的に）ないのは殘念だと思ふ。

　嵐の一篇はホト、ギスに送つてよければ僕から送ります。虛子は不相變贊辭を呈する事と存候

　草枕については大部諸方から賞辭を頂戴した。大概は端書でほめてくれる。碧梧桐も旅行先から端書をよこした。同人の事だから必ずあとにわる口がついてゐる。曰く警句は多いが皆川の流れの如く同傾向であるから仕舞には警句の用をなさぬと。說明を承はらんから意味が分らない。

　昨夜巡査と衞生員と東京市の醫員と小使が二人來て淸潔方を施こして行つた。今日は警察醫が健康診斷

をしに來た。六日迄外出を禁ずるのださうだ。四方太が來て話して行つた。僕は病院へ見舞に行つた妻は湯に入つた。是ならどこが交通遮斷か分らない。

病人は大分よろしいまあ助かりさうだ。其代り大分金が入る。今日一日何もせんで中央公論の趣向を考へてやつたが別段名案も浮ばない一寸したもので御免蒙らうと思ふ。

一昨日新小說の男が來て今度の號は二十七日に出て二十九日に賣り切れたから廣告をやめたと云ふた。おどされて買つたもの〻うち讀んでつまらんものだと思ふたものが大部あるだらうと思ふと氣の毒だ。覇王樹の處は虛子が大にほめて呉れた所だ　以上

九月二日夜　　　　金

寅　彥　樣

三九八

明治三十九年九月三日　午前八時―九時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜啓御手紙ありがたく候病人は存外よろしく候此分にては一命丈はたすかる事と存候只今の處交通遮斷なれど好加減に出たり這入つたり致し居候

寅彥風と題する短篇を送りこし候例の如く筆を使はないうちに餘情のある作物に候十月分のホト、ギスに御掲載被下べくや。御郵送申上候。今日中央公論の末尾に小生等の作を讀者に吹聽する所を觀て急に中央公論へかくのがいやになり候。何ぼほめられるのがい〻と申してあ〻云はれて一生懸命に十月號に書いてやらうと云ふ氣にはなれなく候が如何。今度瀧田に逢つたらあまり廣告が商賣的だと申してやらうと存

候　以上

九月二日夜　　　　　　　　　　　　　金

虚子庵

三九九

明治三十九年九月三日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ　〔はがき〕

二返讀んでもらふのは恐縮だ。女が崖の上へ出る譯はかいてない。從つて只出たと思へばいゝのです。出た風情が面白ければ夫で苦情を云はずに置いて下さい。僕の家に赤痢がひよこりと出て公向きは交通遮斷なり。内々は交通自在なり。一寸昔しの侍が閉門になつた樣な氣がして面白い。患者は大學病院にゐる。助かりさうだ

四〇〇

明治三十九年九月六日　午後二時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地明陽館野間眞綱へ　〔はがき〕

病人は漸く快方此分にては大丈夫に候。下痢のよし。御大事になさい。寐て粥を食ふがよからう。僕はいそがしいのにぶら／＼して何もせぬ。文章を二三枚かいていやになる。客はくる。

四〇一

明治三十九年九月六日　午後二時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御歸京のよし小生宅には三女赤痢にて大學醫院へ入院今日迄交通遮斷なり。遮斷にも關はらず方々出あるくのみならず來客無暗に至る。學校の講義は一ページも書かず。十月發行の中央公論からは催促をうけるいやはやのはやいやで困却中なり

草枕を讀んで下された由難有い　其上あつと感心してくれた所などは尤も難有い。あれはどうしても君に氣に入る場所があると思つた。今日迄草枕に就て方々から批評が飛び込んで來る。來る度に僕は喜こんでよむ。然し言語に絕しちまつたものは君一人だから難有い。今日迄受取つた批評のうち尤も長く且つ眞面目なものは深田康算先生のものである。尤も驚も感情的なものは君のである。多少けちをつけたものが二三人ある。いづれもうれしい。僕はまとめて持つてゐる。今日中川君が來たから其事をはなしたら出版したらどうですと云ふた。草枕批評一斑として出版したら早速僕は草枕の原稿料の上へ幾分か持ち出さなければならなくなる。

僕今日中川先生に倫敦製フロックコート一着を獻上仕つた。着せて見たらよく似合つた　先生大きな風呂敷へたゝみ込んで歸つて行つた。君あやめ會では詩體詩人が喧嘩をしてゐるよ。昔は詩人が喧嘩杯をと云つたものだ。今ぢや詩人だから樂に先つて喧嘩をするのだ

いづれ其うち　左樣なら

九月五日　金之助

森田米松樣

四〇二

明治三十九年九月十日　午後二時—三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ

拜啓先日來御約束の小說どうにかかうにかかき上げ候。まことに杜撰の作にて御耻づかしき限なれど誤つて違約をしては大變な御迷惑になる事といゝ加減にかき了り申候四五十枚との御約束の處とう〳〵六十五枚程になり候是も御ゆるし被下度候御序の節はいつにても御渡し可申候先は用事迄　草々頓首

九月九日　　　　　金之助

瀧田樣

四〇三

明治三十九年九月十一日　午後六時—七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓來る二十六日の能に御招き被下難有奉深謝候西洋人も定めてよろこぶ事と存候尤も通辯を仕るのは少々閉口に候。あの番組のうちで一つも見たものも讀んだものもありません橋口は兄の方ですか弟の方ですか小兒病氣は日にまし快方小生見舞に參り候へども未だ一度も話を交せたる事なし草枕の作者の兒丈ありて非人情極まつたもの也すると今度は妻のおやぢが腎臟炎から腦を冒かされたとか何とか申す由世の中も多忙なものに候。小生も御客の相手で一人を暮らして居る樣也驚ろいたのは今日女記者の中島氏とか申す人が參られたる事也此女猫を愛讀して研究する由草枕でも讀んでくれゝばいゝのに。二六をすぐ買つてよみました。あの人は面白い考を持つて居るがあまり學問のない人と思ひます。然しよく趣味を解する人であります。今度の中央公論に二百十日と申す珍物をかきましたよみ直して見たら一向つまらない。二度よみ直したら隨分面白かつた。どう「いふ」ものでせう。君がよんだら「ら」何といふだらう。又どうぞよ

んで下さい。左樣なら

九月十日　　　　　　金

虛子庵

梧下

四〇四

明治三十九年九月十一日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ

拜啓小說二百十日原稿御渡し申候間御落手被下度候試驗にて御多忙のよし御勉強專一に候娘病氣大分よろしく候

二百十日は昨日また讀み直して見た處始めてよんだ時よりも少しは面白く存候不相變殺風景な女向きのせぬものに候善惡ともに御批評被下候は丶幸甚先は用事のみ　草々頓首

九月十一日　　　　　　金之助

瀧田哲太郎様

四〇五

明治三十九年九月十三日　午後〇時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ〔はがき〕

西洋人にはまだ逢はんから逢つて椅子が欲しいかどうか聞いて見ませう。日本ずきだから坐るといふか

も知れない。三崎座で猫をやる由成程今朝の新聞を見たら廣告があつた。寺田も知らせて來ました。然も忠臣藏のあとだから面白いと書いて來ました。猫が芝居にならうとは思はなかつた。上下二幕とはどこをする氣だらう。僕に相談すれば教へてやるのに

四〇六

明治三十九年九月十四日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

今夜三崎座の作者田中霜柳といふ人が來て猫をやるから承知してくれといひました。仕組もきゝました。二三助言をしました。苦沙彌が喧嘩をする所がある呵々。見に來いと云ふた。どうです

四〇七

明治三十九年九月十四日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區中六番町五十七ノ三号中根重一氏方夏目鏡へ

昨夜電報にて御病人御危篤の由承知致候嘸かし御心配の事と存じ候。いつ迄もそちらに御逗留の上御看病可然と存候

當方はどうにで〔も〕相成候今日宮田とか申すものゝ妻親類に取り込みある由にて歸宅致候。早くくる積りか、來ぬ積りか知らず。來なくとも差支無之候。今居るキツとかキチとか何とか申す妙な名の女も歸り候ても決して御心配に及ばず。矢張りそちらにて御看病御大事と存候

私學校の方いそがしく且つ例の如く神經衰弱にて御見舞にも參りかね候皆樣へよろしく御申傳へ願候金錢上の事につき御相談も有之候はゞ遠慮なく御申聞相成度候。あるものはある丈御用立可申候　以上

昨夜緒方氏の書生參り病院の都合如何と相尋ね候故御蔭にて入澤氏の方都合つきたる旨答へ置候。混雜すみ次第御禮に御出向可然と存候

九月十四日　　　　　金之助

鏡　ど　の

四〇八

明治三十九年九月十八日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

ぼくの妻の父死んで今週は學校を休む事にした。その外用事如山。三崎座を見たいが行けるかしら。もし行けたら御案内を仕る積りなり

四〇九

明治三十九年九月十八日　午後零時―一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込西片町十番地[illegible]氏へ

拜啓學校へ出やうと思つて居る所へ親類のものが急病で死んだから今週はやすむ事にした。小供はまだ病院にゐる然しもはや全快にちかい。閑門はとくに御ゆるしになつた。實は閑門中から出てあるいた。學校へ出ないた〔め〕出るのがいやだ此儘ずるノ＼に辭職したい。君は學校へ出たくなる方だから結構だ。

先達て三崎座の作者の田中霜柳といふ人が來て猫を芝居にするから許諾してくれといつた。女がやるんだから面白い然かも忠臣藏のあとだから猶面白い。猫をやるなら猫的な人間がよらなければ出來る筈はな

い。女役者抔がやれば妙なものにして仕舞ふばかりだ
ヰンチエスターは僕も讀んだ事がある面白かつた。今は大部分忘れて仕舞つた
近來來客で食傷の氣味なり。先日突然一個の青年が來て小說の弟子にしてくれと云つたのには驚いた。
其前には一人の女記者が來て一時間ばかり話したにも珍らしい心持ちがした
草枕の畫工見た樣になつて一ヶ月ばかり遊びたい。いづれそのうち御目にかゝります　艸々以上

九月十八日　　　　金

芥舟學兄

四一〇

明治三十九年九月十九日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓先日頂戴仕つた能の番組も時間も御手紙を紛失仕つて忘れて仕舞つた。どうぞ今一返知らせて下されゝ實は今週中休むから手紙で西洋人へきゝ合せてやらうと思つた所が時間も何も分らず夫が爲め又々御面倒をかける甚だ相濟まん。夫で入口では高濱さんの座ときゝますかな。もし西洋人がさしつかへたなら誰か連れて行つて見ませうか夫とも君の方にだれかゐますか又は御互に知り合のうちを御指名被下れば引き張り出します　以上

九月十九日　　　　金

虛子庵

明治三十九年九月二十二日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町五番地橋口淸氏へ

四一一

拜啓先日御面倒をかけ候藏書符の義兩三日前モリス氏に逢ひ候處大滿足の由にて篤く御禮を述べてくれる樣にとの事に御座候ほめて來た手紙のうちには色々な言葉あれども面倒故略して追て御拿來の節御目にかけ可申候御蔭にて小生も約束を終へ寔に難有奉謝候　以上

九月二十二日

夏目金之助

橋口淸樣

明治三十九年九月二十二日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

四一二

拜啓西洋人は大に感謝の意を表し來り候椅子は入らぬ由何だか日本服をきて出陣する模樣なり是でなくては能杯は見られぬ事と存候

十月號には面白いものが出ますか僕も何か書きたいが當分いそがしくて駄目である

三重吉が來て四方太の文をほめて居た。御互に惚れたものでせう　頓首

九月二十二日

金

四一三

明治三十九年九月二十五日　午前八時―九時　本鄉區駒込千駄木町五十七番地より芝區高輪車町四十八番地皆川正禧へ　〔往復はがき返信用〕

風ガ「ジベツト」ヘ當ツテ鳴ルデハナイカ。彼等（即チ「ジベツト」カラブラ下ガツテ首ヲ釣ラレテ居ル死人等）は皆躍を躍ツテゐるデハナイカ（on nothing トハ「空デ」ト譯スベシ。普通ノ踊ヲオドル者ハ床ノ上トカ地ノ上トカ足ノ踏まへる所ガアレド、首ヲ釣ツタ所刑人ガ踊ヲオドルトスレバ空ヲ踏ンデ踊ルヨリ外ニ仕方ガナイノデアル）御前方（即チブラサガツテゐル連中ニ話ス樣ニモテナス）ハイクラ空中デ踊ツテモ喉カニハナラナイヨ。――イやヒドイ風ダ。ソラ、ダレカ落チタ樣ダ（ジベツトカラ風デ繩ガ切レテ地ヘ落チタ音ヲ想像サセルナリ）メドラーの木（三本足ノメドラーダ。――即チジベツトノ事大體ハ two-legged tree ト云フガコヽハ三本足トアル）カラ、メドラーガ一ツ落チテ木ニナツテ居ルノガ一ツ減ツタ（所刑人ヲメドラーニタトヘタルナリ）

〔以下行間に赤インキにて記しあり〕

アダムス・アツプルとは生理學上咽喉ノ所ニアルグリ〳〵ヲサス。字引ヲ引イテ見給へ。呼吸ガ此所デツマツタト云フ意ナリ。決シテ酒杯ノ意味ニアラズ

四一四

明治三十九年九月三十日　午後零時―一時　本鄉區駒込千駄木町五十七番地より本鄉區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

草枕の主張が第一に感覺的美にある事は貴說の通りである。感覺的美は人情を含まぬものである（見る人から云ふても見られる方から云ふても）

（一）自然天然は人情がない。見る人にも人情がない。雙方非人情である。只美しいと思ふ。是は異議がない。

（二）人間も自然の一部として見れば矢張り同じ事である。

（三）人間の情緒の活動するときは活動する人間は大に人情を發揮する。見る人は三樣になる

(a)全く人情をすてゝ見る。松や梅を見ると同樣の態度（是は一ト二ト同じ事に歸着する）

(b)全く人情を棄てられぬ。同情を起したり。反感を起したりする。然し現實世界で同情したり反感を起したりするのと異なる場合。卽ち自己の利害を打算しないで純粹なる同情と反感の場合。（吾人が普通の芝居を見る場合）

(c)現實世界で起す同情と反感を起して人間の活動を見る場合（此場合が芝居抔へ切り込むと時々見物人が舞臺へ飛びあがつて役者をなぐつたり抔する。フランスで兵士の見物がオセロを拳銃で打つた事がある）

草枕の畫工の態度で異議のある所は第三であるからして第三の(a)か(b)か(c)かをきめて見ればよい。(c)では無論ない。畫工は可成(a)で見やうとする。よし(a)丈で見られないでも全然(b)になつてはもういやだといふ男である。だから、一歩を讓つて(a)を離れても(b)迄は飛ばない。(a)と(b)の中間位である。

「憐れ」が表情になつて女の顏にあらはれるのが(a)で見て居られぬ事はない。「憐れ」の表情が感覺的に畫題に調和するか。又はそれ自身に於て氣持がいゝ表情かわるい表情か。換言すれば單に美か美でないかと云ふ點からして觀察が出來る。（畫工が此態度で居れば「憐れ」といふのが人情の一部でも、觀察

の態度は矢張り純非人情である)

(ろ)女の顏に憐れが出て夫が亭主の爲めに出たのだから感心である。大に同情を寄すべき女である。見上げたものである。從つて畫工も思はず憐れを催した。――かうなると普通の芝居の心持ちである。(草枕の畫工は多分こゝ迄ば人情的になつて居るまいと思ふ)

(は)憐れが出たので矢張り亭主に未練がある。未練があるとすれば畫工にはそれ丈冷淡であつた。なんだ馬鹿々々しい。今迄はおれに惚れて居たのにと思ふのが現實界の態度である。此場合には自己の利害の爲めに亂さるゝからして結構な女の心行きが却つてにくらしくなる。(草枕の畫工は無論こゝには居らぬ)

沙翁がハムレットをかく時の了見は分らないが(い)ではないに極つて居る。(は)でもあるまい。恐らく(ろ)であらう。(即ちハムレットを見る觀客の起す了見と同一であつたらう)

從つて草枕の畫工の態度と沙翁とは違ふ。截然として區別がつかぬかも知れぬが傾向が違ふ。沙翁は(ろ)に住する傾向がある畫工は(い)にもどる傾向がある。(い)と(ろ)をならべて矢で方向を示すと沙翁の態度は → である。畫工の態度は ← である。兩方とも離れたがつて居る。

畫工は非人情的である。沙翁は純人情的である。而して吾々日々夜々パンに汲々として喧嘩をしてくらす人間は俗人情的である」

> 作家は作家の考がある通り批評家は批評家の見識がある。君の云ふ事は僕の考で毫も曲ぐべき必要はない。只考丈を云ふ迄である。

畫工は紛々たる俗人情を陋とするのである。ことに二十世紀の俗人情を陋とするのである。否之を陋とするの極純人情たる芝居すらもいやになつた。あき果てたのである。夫だから非人情の旅をしてしばらく

でも飄浪しやうといふのである。たとひ全く非人情で押し通せなくても尤も非人情に近い人情（能を見るときの如き）で人間を見やうといふのである。」

御能拝見の事承知致候。今度行く折があつたら誘つて上げませう。

此間メレヂスの事をかいた人がある此本を取り寄せる積りの處まだ取り寄せない。ハーデーの事もかいたものがある様に記臆する、記憶がわるいから忘れて仕舞ふ、調べて置いて上げやう。

九月三十日

夏目金之助

森田米松様

四一五

明治三十九年十月一日　午後三時—四時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清へ〔はがき〕

拝啓先日は御能拝見御付合ひ難有仕合に存じ奉り候。西洋人大喜にて今度ある時も知らせてもらひたい杯と申し居候　以上

僕の後ろに居た西洋人ハド等ナ奴ダ。アンナ者ガ能ヲ見ニ来ルノハ断ハルガイヽ、

四一六

明治三十九年十月二日　午前八時—九時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より本郷区丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御手紙拝見人情から非人情にうつる所が面白いとの議論面白く候。僕かねて御依頼の三名家文集の義本

日服部主人參り候につき談合致し候處ともかくも原稿を拜見致し度との事なり。よつていつでも御序の節御三君の名文をあつめたものを一寸御見せ下さい先は用事のみ　草々不一

十月一日夜　　　　夏目金之助

森田白楊樣

四一七

明治二十九年十月四日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

御書拜見毎々御懇篤なる御褒辭を賜はり却つて慚汗の至に存候草枕はある一部の人には大受にて小生も大にうれしく存候三度讀んだ人は大兄を入れて是で三人目に候。尤もある人は小兄を失ひて引き籠り中毎毎草枕をよんだと書いて參り候が是は少々御まけの樣に候。今日明星と申す雜誌を見たら議論が多くて文章にも穴があると二三行程かいてあり候

二百十日はかねての約束にて不得已執筆た故可成骨の折れぬ樣會話に致し候あれを例の流義で長くかいたら依然として冗長なものになり可申か呵々　右は先づ御挨拶迄　草々頓首

十月三日　　　　金之助

繞石兄

四一八

明治三十九年十月四日　午後四時十五分　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稻田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓先日相願候妹尾福松氏教員檢定試驗免状の件其後如何相成候や實は本人より聞き合せ參り候。是は本人へ去月十二三日に至ればわかる由を申し聞け置きたるによる事に候。甚だ御迷惑ながら會議の結果一應御令兄へ御きゝ合せ被下間敷候や右願用迄　艸々不一

十月三日　　　　　　　　　　夏目金之助

白仁三郎樣

四一九

明治三十九年十月八日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區原町十番地寺田寅彦へ　〔はがき〕

本日は留守へ御出失敬。「二百十日」の評ありがたく拜見。大に恐縮致し候。今度からは木曜の三時からを面會日と致すにつき（原）御來遊被下度候

令甥も時々つれて成されたく候　以上

四二〇

明治三十九年十月八日　午前（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地高濱清へ　〔はがき〕

拜啓小生是から每木曜日三時よりを面會日と相定め候につき時々遊びに御出下さい

十月七日

四二一

明治三十九年十月八日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地　高濱清氏へ

拜啓ホト、ギスの豫告に驚ろきましたね。小生來客に食傷して木曜の午後三時からを面會日と定め候。妙な連中が落ち合ふ事と存候。ちと景氣を見に御出被下度候

四二二

明治三十九年十月八日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷六丁目二十五番地若葉方　野村傳四へ　〔はがき〕

拜啓本日に娘を難有く存候小生今度から木曜日の午後三時からを面會日と定め候故遊びに御出被下度候

以上

十月七日

四二三

明治三十九年十月九日　午前八時―九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地　高濱清氏へ

二百十日を御讀み下さつて御批評被下難有存じます。論旨に同情がないとは困ります。是非同情しなければいけません。尤も源因が明記してないから同情を強ひる譯にゆかない。其代り源因を話さないでグー〳〵寐て仕舞ふ所などは面白いぢやありませんか。そこへ同情し給へ。碌さんが最後に降參する所も辯護します。碌さんはあのうちで色々に變化して居る然し根が呑氣な人間だから深く變化するのぢやない。圭さんは呑氣にして頑固なるもの。碌さんは陽氣にして、どうでも構はないもの。面倒になると降參して仕

舞ふので、其降參に愛嬌があるのです。圭さんは鷹揚でしかも堅くとつて自說を變じない所が面白い餘裕のある逼らない慷慨家です。あんな人間をかくともつと逼つた鋼窟〔原〕なものが出來る。又碌さんの樣なものをかくともつと輕薄な才子が出來る。所が二百十日のはわざと其弊を脫してしかも活動する人間の樣に出來てるから愉快なのである。滑稽が多過ぎるとの非難も尤もであるが、あゝしないと二人にあれだけの餘裕が出來ない。出來ないと普通の小說見た樣になる。最後の降參も上等な意味に於ての滑稽である。小生はあれが掉尾だと思つて自負して居るのである。あれを不自然と思ふのはあのうちに滑稽の潛んで居る所を認めないであの降參が如何にも飄逸にして拘泥しない半分以上トボケて居る所が眼目であります。小生はあれが掉尾だと思つて自負して居るのである。普通の小說の樣に正面から見るからである。

僕思ふに圭さんは現代に必要な人間である。今の青年は皆圭さんを見習ふがよろしい。然らずんば碌さん程悟るがよろしい。今の青年はドッチでもない。カラ駄目だ。生意氣な許りだ。以上

十月九日（[illegible]）

金

虛子先生

四二四

明治三十九年十月九日　午後十一時—十二時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

能の事難有存じます。矢張九段であるのですか。いつあるんですか。一寸敎へて下さい。正月は何かかいて上げたいと思ひます。然し確然と約束も出來かねます。まあ精々かく方にして置きませう

拜啓只今服部主人來訪「はなうづ」出版致し度旨申候。夫については川下先生の長詩は少々困るから他の美文とか小說と〔か〕いふものと取りかへて頂きたい由。如何なものにや　劇詩戲曲は差支なけれど長詩は營業上駄目のよし。江村先生には氣の毒なれど君の取計でどうかして貰ひ度候。夫から製本は念を入れて充分美裝する由。原稿料は印稅として壹割（ドコ迄行つても）にしたき由。夫から「はなうづ」と云ふ名の外にもつといゝ名はないかと申候。夫から僕に序をかいてくれと申候。是は君がたの方で御迷惑でなければ折角周旋したものだから何かかゝうと思ふ。出版は目下活版屋非常の多忙故本年中に手をつけかねる故來年一月着手の由

右至急御報知申候。どうか長詩の所丈をよろしく願たい　以上

十月火曜日夜　　金之助

白楊先生

四二五

明治三十九年十月十日　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より若杉三郎へ

二百十日についての御批評拜見隨分思ひ切つてわる口を承はり大に面白く候。所であれは傾向小說でも象徵小說でも何でも構はない。そんなものは讀んだ人が勝手につけるのである。アート・フォー・アート抔は是亦どうでもよい。アートが下手ではいけない。然しアート丈がいゝのではない。剛健趣味は結構だ。文部大臣がどんな主義でも構はない。中央公論に適しない事はない。別に中央公論むきは柔弱主義といふ譯はない。筆蹟をまづいと云ふが外の大家は僕よりまづい。僕はあの二百十日　夏目漱石が甚だうまいと

思つてゐる。大家揃ぢやない小學生揃だ。君はあれを餘所行の筆蹟でないといふが、僕の筆蹟には餘所行も不斷着もない。いつでもあの通りうまいのである。

猫を女役者がやる。本郷座だつて女役者だつて同じ事だ。猫をやつて面白い芝居が出來る爲めには僕自身がやらなくつちやいけない。中川芳太郎が見て來て極めて愚なものだといつた。愚は始めから知れ切つてゐる。

猫を圖書館に獻上するなんて隨分人を馬鹿にしたものだ。尤も僕も高等學校へ獻上した。此次は皇室と宮家へ一部宛獻上しやうかと思ふ。宮樣杯はちと猫を御覽になつたらよろしからうと思ふ。

モリエルの事に關した寫眞や何かは一枚もない。先達てマンチウスの四卷目を讀へて置いたがまだ來ない。だから駄目だらう。兎に角に活動あらん事を希望する。明治の文學は是からである。今迄は眼も鼻もない時代である。是から若い人々が大學から輩出して明治の文學を大成するのである。頗る前途洋々たる時機である。僕も幸に此愉快な時機に生れたのだからして死ぬ迄後進諸君の爲めに路を切り開いて、幾多の天才の爲めに大なる舞臺の下ごしらへをして働きたい。さうかうしてゐるうちに日は暮れる急がなければならん。一生懸命にならなければならん。さうして文學といふものは國務大臣のやつてゐる事務杯よりも高尚にして有益な者だと云ふ事を日本人に知らせなければならん。かのゲーテの金持ち抔が大臣に下げル頭を文學者の方へ下げる樣にしてやらなければならん。

皇太子や宮樣が文學を御讀みになつて其主意がわかる樣に書いて上げなければならん　左樣なら

十月十日

夏目金之助

若　杉　兄

明治三十九年十月十一日　夜　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　本郷區丸山福山町十番地伊藤はる方森田米松へ

花うづの内君の分と生田君のある部分とを見直した。君のに就て極遠慮のない事を云へばいづれも物足らない。何だか要領を得ない感じが多い。君は出來る丈悲酸で深刻で皮肉な問題を捕へてくるにもかゝはらず。よんだあとの感じが悲酸でも、深刻でも皮肉でもない。

其解決はどう云ふ點にあるか一寸考へた所を參考に述べる。

(一)事件に發展がなくして、比較的長い事を一二枚でかいてしまふ。だから讀者は君につり込まれる程作中の人物に同情がない。

是が大源因だらうと思ふ。換言すれば長くかくべきものを短かくかいて然も長くかいたものと同樣の感を起し得るものと假定して居るらしい

(二)君は文章に骨を折る。然し其骨折はレトリツクに骨を折るのである。レトリツクは無論必要である。白粉の如きものである。眞の文章は女の營養や心的狀態から來る表情の如くべにや白粉とは違ふ。文章のうまいにかゝはらず感じが乘らぬのは口調や文字に許り骨を折つて、絞出するものゝベゼールングが出來ぬ爲ではあるまいか。

(三)所々に奇警な句がある。ハツト思はせる程のものがある。（重に人世上の觀察）是程の急所をつらまへて居る人が何故此句をもつと活かして使はないかと思ふ。たとへば夫れ自身が一句で纔かに一短篇の主意となり得るにも關はらず君は君に惜氣もなく好い加減な所へ使つて仕舞ふ。而して全篇から云ふと左程奇警でない。ある時は幼稚である。すると何だか妙な氣がする。此作者は時々老成な觀察をする點から云

へば四十前後であるが若い方から云ふと二十を多く越してゐない。二十三四の男と四十位な男が合併して居る樣だ。夫がうまく調和すればいゝが片手丈が四十位であつたり何かする。

僕の遠慮のない批評は正にこゝである。要するに花うづ中にある君の作は決して未來に君を重からしむるものではない。もし君に大作があればそれは未來である。是から愈奮發して立派な作物を苦心せられん事を希望する。もし餘暇あらば正月迄に是非兩三篇を新作せられん事を希望する

寅彦の嵐は彼の作としてはあまり秀逸でもない。嵐の前後丈かいて肝心の嵐をかゝないなんてするい男だ尤も最後の二三行「あの人も御かみさんの居る時分云々」は君と絶對的反對で大賛成である。あの下女の言葉があつて始めて熊さんの長い間の變化やら歴史やらが一句のうちに纏められて、讀者はうんさうかと云ふ氣になるのである。短篇でもし長い歴史を感ぜしむる爲めにはあゝ云ふ筆法でなければいかぬ。あれが短篇の落ちである。あれがあるから畫龍點睛の妙を見えて全篇が活動してくるのである。もし是を不賛成といふなら大に議論がしたい。

委細は面語に讓る。花うづはいゝ名だと僕も本屋に教へてやつた。

本屋へは川下氏の稿をしかへの義通知可致か否や　草々

十月十一日　　夏目金之助

白楊先生

四二七

明治三十九年十月十二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓昨日は失敬本ノ學校でモリスに聞いて見た所二十八日の喜多の能を見に行くから升を一つ（上等な所。あまり舞臺が鼻の先にない所を）とつてもらひたいと云ふ事であります。どうか願ひます。夫から時間は午前八時頃から五時位迄ですか。喜多の番地はどこでしたか鳥渡敎へて下さい。今度の木曜にも入らつしやいな。四方太も來るかも知れない。小生元來のんき屋にて大勢寄つて勝手な熱を吹いてるのを聞くのが大好物です。

森田が千鳥をよんで感心して來ました。森田は一頁五十錢で飜譯をして食つてゐる。シヤボテン黨は此味を知らないからシヤボテン派なんだらうと云ふてゐます。今日も三人來ました。然し玄關の張札を見て草々歸ります。甚だ結構です。以上

十月十二日夜　　金　生

虛子先生

四二八

明治三十九年十月十三日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稻田南町三十番地大澤方片上伸氏へ

拜啓御手紙にて恐縮實は先達から御依賴故漠然と何かかゝねばなるまい位は考へてゐたもの〻。そんな程度のものは外にも大分あるので御手紙がくる迄は明かに責任も感ぜずに打過候。ホト、ギス、藝苑。東亞の光。も同樣の體に候。まあ出來たら。可成かゝう位に候。然る所君の方の雜誌は大分大仕懸故かけるかも知れない位では御困りになる事と存じそこで大に閉口致し候。實は近來色々多忙に相成不得已木曜の午後三時からを面會日と定めたる位の有樣。よしかくとしてもやつと來年迄に一つ位と存候。到底三つも

四つも出來る程のひまはなからうかと存候其一つも氣が向かなければ出來ぬ事と相成るべく御依頼の方も御困りなら引き受ける方も困る事に候。まあ精々書いて見る事にして出來たら上げる事に致しませう。尤もホト、ギスは從來の關係ありて此方は斷はりかね候故。ことによると早稻田へ出なくてもホト、ギスへは出るかも知れず。夫から帝國文學も少々恐れて居り候。かうかち合つては小生も迷惑君の方も御迷惑ではありますまいか。一寸伺ひます。

本月の早稻田文學の彙報中小生の事を御書き被下たのは君だらうと思ひます。あれは今度出た日本の批評のうちで尤も精細な眞面目な系統のある。努力の入つたものと思ひます。小生の作の様なものに對してあれ丈の努力を費やされた好意を深く感謝し度と思ひます。是はあながち小生を賞めて下さつたから難有く思ふのではありません。あれが批評家の態度として堂々として然も落ち付いて居て奥床しい上に餘程えらいと思つて居るから、そんな事を今の世に敢てする批評家の手にかゝつた小生を名譽と思ふから感謝の意を表する譯であります。今の世の批評といふものは通りがゝりに「アテコスリ」をちよつと殘して逃げて行く様なのが多いぢやありませんか。作物に立派なのがない所爲かも知れんが批評のやり方もわるいです。あれぢや雙方進みつこない。

先は右御返事旁御禮迄　草々頓首

十月十四日

夏目金之助

片上伸様

四二九

明治三十九年十月十四日　午前十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

大に議論を上下したいが手紙を何本も書かねばならんのと校正を無暗にしなければならんのと夫から色々な用事があるのでどうも長い手紙がかけない。いづれ今度の木曜日にでも來たら大に議論をやる。

今夜服部が用事で來たから川下君承知の旨を話して置いた。服部の野郎は「猫」をやつてくれと本郷座の連中にたのんだのださうだ。人間も是程營利的に傾けば世話はない。芝居でやりたければさせてはやるが役者に頼んでしてもらふ抔といふ了見がどうして出來るだらう。たのむ場合には役者の方が作者の方より上手な場合だ。今の役者輩に猫がわかるものは一人も居やしない。

君ともかくも正月迄に今一篇かき添へ玉へ　草々以上

十月十四日夜

なつめ金

森田白楊様

四三〇

明治三十九年十月十五日　（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

喜多の番組難有候。一寸この文壇五名家といふ奴を御覧なさい。僕の鼻が曲がつてるから妙だ。鼻の穴の片ッ方が餘計に見えてゐる。是で文學者もすさまじいものだ。然し他の四名家も文學者らしくもありませんね。中には泥棒の様なものもゐる　草々

十月十五日

金

四三一

明治三十九年十月十五日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町一番地野間眞綱へ　〔はがき〕

久しく御無沙汰をした。此間フロックコートを誂へたから出來たら着て見せに行かうと思ふ。野村も冬服を作つた。僕の古いフロックは中川にやつた。高田文學士が草枕を評してくれた。近頃の批評には隨分アヤシイのがある中學生位ナ青二才ガ生意氣ニ云ッテ六號活字ニスル。ヨムトエラサウダガ遂ノト根ッカラ下ラナイ。木曜ニ遊ビニキ玉へ。高田ニ御禮ヲ云フテクレ玉へ

四三二

明治三十九年十月十六日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より鹿兒島市第七高等學校寄宿舎行德二郎氏へ

拜啓其後は御無音如何なされし事かと存居候處先日の御手紙にて鹿兒島の高等學校へ御入學のよし承はり安心致し候

カゴシマは何かにつけて不便なるべけれども久留米に近いから便利かと存候時候を厭ひ御勉強專一と存候

當方別段の變りもなく無事に暮らし候

筆は大分大きくなり只今は小學の一年生に候。筆のあとに娘が三人生れ候。皆女にて厄介なる事に候。

御令兄には時々御面會申候。

君は醫學をやる事と存候多分福岡大學へ入學の事と存候。段々世の中に住みなれると愚な事許り笑ふに

も笑はれず怒るにも怒られぬ愚な事ばかりに候。其なかに住んで居る自分がさう思ふ位だから後世から見れば瞧馬鹿氣て居るだらうと思ひ候。是だから後世に名の殘る人は滅多にない者だと合點が行きます。

高等學校生抔といふと日本では教育のある部類の人であるが、あのうちで未來に名の傳はる樣な人は何人あるか、考へて見ると大抵は平凡で愚劣なものに相違ないといふ事がすぐに分る。ここに氣がつけば世の中に恐ろしい人は滅多に居ない事になる。カゴ島の果でも東京の眞中でも同じ事である。天下は太平である。ユックリと鷹揚に勉強してエライ者になつて、名前を後世に御殘しなさい　以上

十月十五日　　夏目金之助

行德二郎樣

四三三

明治三十九年十月十七日　午後〇時―一時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜啓喜多の番づけを難有う存じます。早速モリスにやりませう。先達て御話しのあつた二百十日に關する拙翰をホト、ギスへ掲載の義は承知致しましたと申しましたが、少し見合せて下さい。近々「現代の青年に告ぐ」と云ふ文章をかくか又は其主意を小說にしたいと思ひます。すると其前にあの手紙は出して貰はない方がよい。どうでせう。あの主意をあなたが布衍して、さうしてあなたの意見も加へてあなたの文章とかきかへてホト、ギスへ出して下さつては。あの手紙のうちで困るのは現代の青年はカラ駄目だと云ふ事と「普通の小說家なら……」と云ふ自贊的の語である。自分が小說をかいて、人の小說を自分のに比べて攻擊するのはいやな心持ちだ。夫から現代の青年に告ぐと云ふ文章中には大に青年を奮發させる事を

かくのだから「カラ駄目」ぢやちよと矛盾してしまひます
まづ川事丈にして置きます
森田流の人には何分シヤボテ、主義は分りません矢張りロシや主義で進歩するがよからうと思ひます

十六日　　　　金

高濱様

四三四

明治三十九年十月十八日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓手紙は國民新聞へ御出しのよしちつとも構ひません。出したら出したで小說でも論文でも出來ますから決して御心配には及びません。本當は現代の青年の一部のものにあの手紙を見せてやりたいのですから大に結構であります。今日松根が來ました。今度の日曜に散歩をする約束をしました。早稻田から正月といふ注文が來ましたが是は延ばす事に仕つてホト、ギスへ何かかいて見ませう尤も他にも約束もあるがどうかします。尤もホト、ギスへ出來なければ外へも出來ないのですから御勘辨なさい　左樣なら

十月十六夜　　　　金

虛子大人
座下

四三五

明治三十九年十月二十日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町　番地不詳　眞鍋嘉一郎へ

拜啓伊香保の紅葉を貰つて面白いから机の上へのせて置いたら風がさらつて行つて仕舞つた。どこをたづねてもない。

近頃は久しく逢はない。昨日の面會日には四五人來て十時頃迄文學談をやつて愉快であつた。

近來世の中に住んで居るのが小便壺のなかに浮いて居る樣な氣がする。周圍が小便だから自分も嗅臭い事だらうと思ふ。

高等學校抔へ出ても尤も簡單で尤も純潔なるべき書生が大分アートフルである。眞正に書生らしいものは十分一位だらう。こんなものに教へるのだからどうでも構はないと云ふ氣で居る。昔し小便壺のうちに居る事に氣がつかなかつた時はもつと熱心であつた。天下の人が戯れて居るのに自分丈眞面目で居るのは醉漢の中に鋼屈にかしこまつてゐる樣なものだ。未來の日本を作る青年が自己の責任もエライ事も何も知らずにワーノ＼して居るのは天子樣の爲めに御氣の毒である。

今日曜には遠足をする。近日猫の中卷と鶉籠と夫から今少しすると文學論が出來る。出來たら一部あげる。今の青年共は猫をよんで生意氣になる許りだ。猫さへ解しかねるものが品格とか人柄とかいふ事が分り樣筈がない。困つたものだ。　左樣なら

十月十九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

眞鍋樣

四三六

明治三十九年十月二十日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區高輪車町四十八番地皆川正禧へ

拜啓久しく御目にかゝらない先日野間が手紙をよこして君の今度の家はいゝ所だ是非行つて見ろとあつた。是非行きたいが何だか忙がしくて行かれない。近頃は世の中に住んで居るのが夢の中に住んでゐる樣な氣がする。どこを見ても眞面目なものが一つもない。悉く幻影と一般タワイないものである。こんな世界に住んで眞面目に苦しい思ひをして暮らすのは馬鹿氣てゐる。眞面目になり得る爲めには他人があまり滑稽的である。

僕明治大學をやめやうと思ふ。先日高田が來て報知新聞へ何かかいてくれと云つたから明治大學をやめて新聞屋にならうか知らん國民新聞でも讀賣でも依頼されてゐる。明治大學は土曜の四時間であるから、土曜を四時間つぶして何かかいてさうして夫が同じ位の收入になれば新聞の方が色々な便宜がある樣に思ふ。

明日は大森の方へ遠足をするが東洋城といふ青年と一所だから君のうちへは寄れない。此東洋城君なるものは頗る眞面目な青年である。青年は眞面目がいゝ。僕の樣になると眞面目になりたくてもとてもなれない。眞面目になりかける瞬間に世の中がぶち壞はしてくれる。難有くも、苦しくも、恐ろしくもない。世の中は泣くにはあまり滑稽である。笑ふにはあまり醜惡である。

あまり御無沙汰をしたから手紙を一寸あげる。土曜の晩だからこんな下らない手紙をかくひまがある。來客は皆木曜にまとめて仕舞つた。壹週間丸つぶしにして人の爲めに應接をしてやつたつて自分が疲勞する許りである。　草々

十月二十日

夏目金之助

皆川正禧様

四三七

明治三十九年十月二十一日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓君の所から白い狀袋の長い手紙が來ないと森田白楊なるものが死んで仕舞つたかの感がある。今日曜早起きるや否や白狀があつたので矢つ張り生きてるなと思つた。

草枕の評は多大の興味を以て拜讀した面白かつた。草枕を評すると云ふ點より君がどんな考を以て書をよみつゝあるかゞ分るからである。あの理窟を云ふ所が面白い。普通の新聞屋抔のいふ評は何を云ふのだか分らない。さすがに森田先生丈あつて何か云ふ事があるから感服だ。一體君は評論をして理窟を云ふかが筋の立つた事を云ふ。又譯の分つた事を云ふ。だから創作が其主義を應用する樣に出來てるかと思ふと、さう旨く行つてゐない。君は不平かも知れないが慥かに行つてゐませんよ。

君のいつもよこす手紙は何だかどこかに愚癡つぼい所があつたが今度のはサラ〳〵したものだ。甚だ我意を得てゐる。愚癡を並べても愚癡に拘泥してゐない。滔々と愚癡が出て來て平氣である。是が甚だ愉快だ。凡て愚癡でも何でも拘泥した奴は厭味だね。いくらスキのない服裝でも本人が夫に拘泥してゐると厭味が出る。凝つた身裝をしてさうして凝つた所を忘れてゐるのがいゝぢやないか。今度の手紙は是に近い。君の創作もどうかこの格で行きたいと思ふ。今度の手紙の結末にある「是から洗湯に參らうかと存候敬具」抔は振つたものだ。あれを稱してサボテン趣味と名づけるのである。サボテン趣味と云へば君がラ

ウムレーレからサボテン趣味を中止しろ、わが虚子に報告したら、虚子大に激して——大學を卒業して既に人生觀を作つてゐるか、サボテン趣味が分らないのだ郁と氣焔を吐いて來た。さうして森田君にサボテン趣味を說いてくれといふから僕は森田に當分サボテン趣味は分らない、矢つ張り露西亞主義でいゝのであるとかいてやつた。すると今度は虚子先生の返事に「實は私も社會學や心理學方面が嫌ひのではない、出來れば此方へも興味を持ちたい、其代り森田君もサボテン趣味を研究して貰ひたい」とあつた。

木曜日にはサボテン黨の首領は鼓の稽古日だといつて來なかつた。呑氣なものである。其代り中川のヨ太公。鈴木の三重吉。坂本の四方太、寺田の寒月諸先生の上に東洋城といふ法學士が來た。此東洋城といふのは昔し僕が松山で敎へた生徒で僕のうちへくると先生の俳句はカラ駄目だ、時代後れだと攻撃をする俳諧師である。先達て來て玄關に赤い紙で面會日拆を張り出すのは甚だ不快な感がある。「僕の爲めに遊びにくる日を別にこしらへて下さい」と駄々つ子見た樣な事を云ふから、そんな事を云はないで木曜に來て御覽といつたからとう〳〵我を折つて來たのである。又俳諧を食はせてやつた。今日此東洋城と大森の方へ遠足をするのである。」

僕は明治大學の文學部の方を御免蒙る樣に辭表を提出して置いた。君を後釜に据ゑてやりたいが內海月杖翁が承知しまいから駄目だ。文學部の方をやめると米櫃に影響する。夫から色々な所へ變動を起す。妙な事だ。

近頃は小便壺の中に浮いてゐる樣な氣がする。小生も臭いか何か見ても臭いだらう。去りとて小便壺から飛び出す程の必要も認めない。昨日ある人に手紙をつかはして曰く「世の中は泣くにはあまり滑稽である、笑ふにはあまり暗黑である」「今の世で眞面目になる事は到底不可能だ。眞面目になりかけると世の中がすぐぶち壞してくれる」

こゝに於て僕はサボテン黨でも露西亞黨でもない。猫黨にして滑稽的十豆腐屋主義と相成る。サボテンからは藝術的でないと云はれ露西亞黨からは深刻でないと云はれて、小便壺のなかでァプアプしてゐる。是からさき何になるか本人にも判然しない。要するに周圍の狀況で色々になるのが自然だらう。西洋人の名前抔を擔いで此人の樣なものをかゝう抔といふのは抑も不自然の甚しきものである。君オイランの寫眞を見てアタイもこんな顏にならうたつてなれやしないぢやないか。今の文學者は皆此アタイ連である。僕の事を英國趣味だ抔といふものがある。糞でも食ふがいゝ。苟しくも天地の間に一個の漱石が漱石として存在する間は漱石は遂に漱石にして別人とはなれません。英國趣味があるなら、漱石が英人に似てゐるのではない。英人が漱石に似てゐるのである。

君英譯をやるつてそりや少々無理だよ。英文で立たうと思ふなら今から五六年其方の丁稚奉公でもしなけれりやいけない。それより英文を日本に譯す方がいゝ。尤も何を譯していゝか僕にも一寸わかりかねる。

もうかくのが厭になつたから是にて擱筆

十月二十一日

夏目金之助

森田白楊樣

四三八

明治三十九年十月二十二日　午前八時－九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

君の夜中にかいた手紙を見てゐると東洋城が誘ひに來たから手紙は洋服のカクシへ入れて品川の先の鮫州の川崎屋といふ料理屋で飯をくふ時さき棄てゝしかもさいたくずは未だにカクシの中に丸めてある

余は滿腔の同情を以てあの手紙をよみ滿腹の同情を以てサキ棄てた。あの手紙を見たものは手紙の宛名にかいてある夏目金之助丈である。君の目的は達せられて目的以外の事は決して起る氣遣はない。安心して余の同情を受けられん事を希望する。

余の知る人のうちに二三君と同樣の境遇の人あり。否境遇の人なりときく。去れど彼等は皆相應に成功の人なり。君も相應に成功の緒を得ば此不幸を忘るゝを得んか。余は君が此一事を余に打ち明けたるを深く喜ぶ。余を夫程重く見てくれた君の眞心をよろこぶ。同時に此一事を余に打ち明けねばならぬ程君の心を苦しめたる源因者（もしあらば）を呪ふ。同時に此一事を余に打ち明くべく餘義なくさるゝ程君の神經の衰弱せるを悲しむ。男子堂々たり。這般の事豈君が風月の天地を懊惱するに足らんや。君が生涯は是からである。功業は百歳の後に價値が定まる。百年の後誰か此一事を以て君が煩とする者ぞ。君若し大業をなさば此一事却つて君が爲めに一光彩を反照し來らん。只眼前に汲々たるが故に進む能はず。此の如きは博士になれざるを苦にし、教授にならざるを苦にすると一般なり。百年の後百の博士は土と化し千の教授も泥と變ずべし。余は吾文を以て百代の後に傳へんと欲するの野心家なり。近所合壁と喧嘩をするは彼等を眼中に置かねばなり。彼等を眼中に置けばもつと愼んで評判をよくする事を工夫すべし。余はその位な事がわからぬ愚人にあらず。只一年二年若しくは十年二十年の評判や狂名や惡評は毫も厭はざるなり。如何となれば余は尤も光輝ある未來を想像しつゝあればなり。彼等を眼中に置く程の小心者にはあらざるなり。彼等に余が本體を示す程の愚物にはあらざるなり。彼等が正體を見あらはし得る程な淺薄なものにあらざる也。余は隣り近所の賞賛を求めず。天下の信仰を求む。天下の信仰を求めず。後世の崇拜を期す。此希望あるとき余は始めて余の偉大なるを感ず。君も余と同じ人なり。君の偉大なるを切實に感じ得るとき這般の因果は紅爐上の雪と消え去るべし。勉旃々々

十月二十一日夜

十一時池上より歸りて　　夏目金之助

森田白楊樣

〔以下餘白に朱書〕

人若し向上の信を抱いで事をなす時貴キ事神人ヲ超越シテ蓋天蓋地に自我ヲ觀ズ。天子樣ノ御威光デモ是許リハドウモ出來ヌ。漱石ハ喧嘩ヲスル度に此域に出入ス。白楊先生ハ如何

四三九

明治三十九年十月二十三日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稻田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓妹尾輔松氏件につき色々御手數を煩はし難有候今日の御手紙にて同人も希望通り愈教員免狀下附の運に至り定めし滿足の事と存候

御序の節御令兄へよろしく御禮願上候。小生も是にて同人の爲め安心致候是から早速通信してやらうと存候

先達中から餘り來客が多いので木曜日の午後三時からを面會日に定め申候すると木曜には色々な人がやつて來て愉快に候クラブの觀有之候、時々御出掛の上模樣を御覽になつては如何　以上

十月二十二日　　夏目金之助

白仁三郎様

四四〇

明治三十九年十月二十六日　午後二時－三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區彌生町三番地小林第一支店鈴木三重吉へ　〔封筒表左側下に「第一信」とあり〕

君の夜中にかいた手紙は今朝十一時頃よんだ。寺田も四方太もまあ御推察の通の人物でせう。松根はアレデ可愛らしい男ですよ。さうして貴族種だから上品な所がある。然しアタマは餘りよくない。さうして直むきになる。そこで四方太と逢はない。僕は何とも思はない。あれがハイカラならとくにエラクなつて居る。伯爵ノ伯父や叔母や、三井が親類でさうして三十圓の月給でキユキユしてゐるから妙だ。さうしてあの男は鷹揚である。人のうちへ來て坐り込んで飯時が來て飯を食ふに、恰も正當の事であるかの如き顔をしてゐる。「今日も時刻ヲハヅシテ御馳走ニナル」とか「どうも難有う御座います」とか云つた事がない。自分のうちで飯をくつた樣にしてゐるからいゝ。

君は森田の事丈は評して來ない。恐らく君に氣に入らんのだらう。あの男は松根と正反對である。一擧一動人の批判を恐れてゐる。僕は可成あの男を反對にしやう〳〵と力めてゐる。近頃は漸くの事あれ丈にした。それでもまだあんなである。然るにあゝなる迄には深い源因がある。それで始めて逢つた人からは妙だが、僕からはあれが極めて自然であつて、而も大に可愛さうである。僕が森田をあんなにした責任は勿論ない。然しあれを少しでももつと鷹揚に無邪氣にして幸福にしてやりたいとのみ考へてゐる。

君をしかるつて、夫で澤山だ。そんなにほめる程の事もないが叱られる事もなからう。

僕の教訓なんて、飛んでもない事だ。僕は人の教訓になる樣な行をしては居らん。僕の行爲の三分二は

皆方便的な事で他人から見れば氣違的である。それで澤山なのである。現在狀態がつゞけば氣違である。死んでから人が氣違ときめて仕舞つたつて少しも耻とも何とも思はない。現在狀態が變化すれば此狂態もやめるかも知れぬ。さうしたら死んでから君子と云はれるかも知れん。つまり一人の人間がどうでもなる所が自分ながら愉快で人には分らないからいゝ。氣違にも、君子にも、學者にも一日のうちに是より以上の變化もして見せる。人が學者といふも、氣違といふも、君子と云ふも、月給さへ渡つてゐればちつとも差支ない。だから僕は僕一人の生活をやつてゐるので人に手本を示してゐるのではない。近頃の僕の所作を眞似られちや大變だ。　草々

十月二十六日

夏目金之助

鈴木三重吉様

四四一

明治三十九年十月二十六日（時間不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區彌生町三番地小林第二支店鈴木三重吉へ　〔封筒表中央下に「第二信」とあり〕

只一つ君に教訓したき事がある。是は僕から教へてもらつて決して損のない事である。

僕は小供のうちから青年になる迄世の中は結構なものと思つてゐた。旨いものが食へると思つてゐた。綺麗な着物がきられると思つてゐた。詩的に生活が出來てうつくしい細君がもてゝ。うつくしい家庭が〔出〕來ると思つてゐた。

もし出來なければどうかして得たいと思つてゐた。換言すれば是等の反對を出來る丈避け樣としてゐた。

然る所世の中に居るうちはどこをどう避けてもそんな所はない。世の中は自己の想像とは全く正反對の現象でうづまつてゐる。

そこで吾人の世に立つ所はキタナイ者でも、不愉快なものでも、イヤなものでも一切避けぬ否進んで其内へ飛び込まなければ何にも出來ぬといふ事である。

只きれいにうつくしく暮らす卽ち詩人的にくらすといふ事は生活の意義の何分一か知らぬが矢張り極めて僅小な部分かと思ふ。で草枕の樣な主人公ではいけない。あれもいゝが矢張り今の世界に生存して自分のよい所を通さうとするにはどうしてもイブセン流に出なくてはいけない。

此點からいふと單に美的な文字は昔の學者が冷評した如く閑文字に歸着する。俳句趣味は此閑文字の中に逍遙して喜んで居る。然し大なる世の中はかゝる小天地に寐ころんで居る樣では到底動かせない。然も大に動かさゞるべからざる敵が前後左右にある。苟も文學を以て生命とするものならば單に美といふ丈では滿足が出來ない。丁度維新の當士勤王家が困苦をなめた樣な了見にならなくては駄目だらうと思ふ。間違つたら神經衰弱でも氣違でも入牢でも何でもする了見でなくては文學者になれまいと思ふ。文學者はノンキに、超然と、ウツクシがつて世間と相遠かる樣な小天地ばかりに居ればそれぎりだが大きな世界に出れば只愉快を得る爲めだ抔とは云ふて居られぬ進んで苦痛を求める爲めでなくてはなるまいと思ふ。

君の趣味から云ふとオイラン憂ひ式でつまり。自分のウツクシイと思ふ事ばかりかいて、それで文學者だと澄まして居る樣になりはせぬかと思ふ。現實世界は無論さうはゆかぬ。文學世界も亦さう許りではゆくまい。かの俳句連虚子でも四方太でも此點に於ては丸で別世界の人間である。あんなの許りが文學者ではつまらない。といふて普通の小說家はあの通りである。僕は一面に於て俳諧的文學に出入すると同時に一面に於て死ぬか生きるか、命のやりとりをする樣な維新の志士の如き烈しい精神で文學をやつて見たい。

それでないと何だか難をすてゝ易につき劇を厭ふて閑に走る所謂腰拔文學者の樣な氣がしてならん。
破戒にとるべき所はないが只此點に於テ他をぬく事數等であると思ふ。然し破戒ハ未ダシ。三重吉先生
破戒以上の作ヲドンドン出シ玉へ　以上

十月二十六日　　夏目金之助

鈴木三重吉樣

四四二

明治三十九年十月二十九日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町四番地蓋平館薄井秀一氏へ

拜啓先日來日曜文壇に何か執筆を御依頼の所何かと存じ候へど小生近刊の文學論に自序を認め候。是は二十四行二十四字詰めにて十二三枚のものに候が、もしそれにてよろしければ此次の附録に差し上げてもよろしく候。少しながすぎるならばやめてもよろしく候。御望みならば下女に持たせて上げます。但し一度に出して下さらなくては困ります夫から表題は近刊「文學論」序と云ふのです　草々

十月二十一日　　夏目金之助

薄井樣

四四三

明治三十九年十月二十九日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町四番地蓋平館薄井秀一氏へ

御返事拝見原稿用貴意御送申候表題は
　文學論序（近刊）　　夏目漱石
位に願ひ候。右用事迄餘は拜眉萬縷
　　　十月二十九日　　　　夏目金之助
　　薄井秀一様

四四四

明治三十九年十一月三日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓先夜は御立寄被下候處何の風情も無之不本意千萬に存候偖其節は御見事なる菊花御持贈被下意外の幸福早速瓶中に插み朝夕眺入居候何卒御老人へよろしく御鳳聲願度候先は右御禮迄　草草以上
　　　十〔一〕月二日
　　　　　天長節の前夜　　　　夏目金之助
　　大谷繞石様

四四五

明治三十九年十一月六日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

二十一圓なにがし御落手の由結構に候。そこで手紙をかく元氣が出た所猶更結構に候。君が手紙をよこさないか顏を出さないと何だか存在を疑ふ樣になる外の人にはそんな心配がない。是は君が氣まぐれに浦和の安宿り拆へ行つて考へ込む病氣がある所爲だらうと思ふ。生田先生が金港堂へ這入つたので何か書いてくれといふて來た。二十五圓だから君より三圓なにがし多い事になる。先生の來た時は親類のものがある相談に來てゐた最中でしかも其上に今一人來訪中であつた。其來訪中の御客は驚ろいて逃げて歸つた。

アンクワを讀んださうだが僕もよんだ。通篇西洋臭い。君どう思ふ。あれは燒き直しぢやないか。然し田園の光景が面白かつた。夫から田舍言葉のせゐか厭味がなくよまれた。僕は初めて小說をかいてあれ丈出來れば大成功の方と思ふ。

文章一日談は例の東洋城が池上の山門で藝者を見ながら筆記したもの何だか怪しいものだ。

不折のイムプレツシヨニストの論は亂暴なものだ。大將曰く感興そのものをかくからイムプレツシヨニストだと無學もこゝに至つて極まる。本人畫工ぢやないか。而して印象派なる名目の由來を知らないで馬鹿な事をいふ。

文學論の序に文章を見てもらふのでも何でもない。あの通りの事を讀んでヘエーと云つてもらへばいゝ。讀賣へのせる必要もなかつた。何かくれといふからやつた。

生田先生の戀愛文學が癪に障つたと思つて片上天絃が早稻田文學へかいた。夫を白鳥が贊成した。白鳥はチヨツカイを出す事を家業にしてゐる。云ふ事は二三行だ。夫で人を馬鹿にして自分がエラサウな事ばかり云ふ。厄介な男だ。

正月には何か純人情的卽ちシヤボテン式ならざる物をかきたいと思ふ。　以上

十一月六日

僕のひげについての抗議は少々困る實は時々ほめる人があるがまだとれと命じた人はない。これあるは昔より始まる。

僕フロック・コートを五十四圓で新調したら、急に演舌がやつて見度なつた。夫長節に一着の上庶布迄行つたらもう演舌はしないでもよくなつた

四四六

明治三十九年十一月七日　午後四時—五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤方森田米松へ

君が手紙をかく僕が手紙をかく而して互に連續すれば手紙で疲弊して仕舞ふ。そこで今度は一寸短かい奴をかく。

サボテンの元勳四方太がアン火を賞めたから面白い。大方自分に出來ないからだらう。天紘は比較的眞面目な人だ。僕は長江先生も天紘先生も兩方知つてるから兩方へ賛成する。尤もあんなに議論する程のものはないね。田舍へ行くのもいゝ。然し敗北して行くのは御免だね。御釋迦さんの樣に自ら王位や美人をすてゝ行くなら贊成だ。居たゝまらないで、人からつゝきやられた抔といふのは一生の恥辱だ。人は何といふてもよい自分がさうでなければ。然し自分でさうしては一分が立たない。矢張り東京にゐるがいゝ。東京にゐてみんなを眼下に見下すがいゝ。そんなに君よりえらい人が澤山ゐるものぢやないよ。飯だつて三度食へれば夫で澤山だ。

子を生ませたつていゝさ。僕なんか何人も製造して嫁にやるのに窮してゐる。然も細君にさう惚れてる譯でもないんだから出來て見ると少々汗顏の至りだ。大方向でもさうだらう。
泣く小說を御注文だが僕に出來ればいゝ。とにかく早く取りかゝりたいものだが中々いそがしい是から一風呂這入つてくる。（藝苑まだ見ず）

十一月七日　　　　　　　　金之助

白楊育兒院長殿

四四七

明治三十九年十一月九日　午後六時―七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

昨日は御出かと思つて居たら東洋城の注進で顏がはれたと云ふ譯で髮結床も油斷のならないものと氣がつきました。昨日は大分大勢來ましたしめて十三四人です。東洋城と三重吉が大に論じてゐました。紅綠のアンクワを四方太がほめた。森田白楊は散々わるく云ふた。あのヂヤイは僕も嫌だ。通篇西洋臭い。燒直し然としてゐる。然し田舍の趣味がある所が面白いと思ひます。
文章談はほんの一口でつまらんものです。
正月には非人情の反對卽ち純人情的のものがかきたいが出來るか、出來損ふか、叉は出來上らないか分らない。文債が多くて方々から尻が來て閉口です。
坊ちやんは依然として廣告されてゐま［す］ね。どうか正月分は（もし出來たら）此醜態を免がれたいと思ふ。

僕今度は新體詩の妙な奴を作らうと思ふ。

文界は依然として芋を揉んでゐる。其なかに混つて格鬪するのは愉快ですね。皮がむけて肉がたゞれても愉快だ。僕もし文壇を退けば西部へ行つて大學で澄まして講義をしてゐます。然し折角生れた甲斐には東京で花々しく打死をしたいですね。

吉原の酉の市なんか僕も見たかつた。

二三日漫然とあるきたい。手紙をかく丈でも隨分骨が折れる　以上

十一月九日

虛子先生

四四八

明治三十九年十一月九日　午後六時—七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地[illegible]小宮豊隆へ

今日は長い手紙をかゝなければならん日で四五本かくと一寸一仕事だが返事をよこせといふから上げる。

昨日は客に接する事十三四人一寸驚ろいた。然し知つた人があゝ云ふ風に寄つてみんなが遠慮なく話しをするのを聞いてゐる程な愉快はない。僕は木曜日を集會日と定めたのをいゝ事と思ふ。

君は一人でだまつてゐる、だまつてゐても、しやべつても、同じ事だが、心に窮屈な所があつてはつまらない。平氣にならなければいけない。うちへ來る人は皆恐ろしい人ぢやない。君の方でだまつてるから口を利かないのだ。二三度顏を合せればすぐ話が出來る。實に君の樣なのが昨日の客中にもあるのだが夫が構はずに話しをしてゐたから面白い。君も話せば面白くなるのである。中川といふ人はやさしい人である

が三重吉君は御仰の通中々猛烈な所がある。あの兩人は親友である。色の白い顔は東洋城といふ俳句家である。あれもあれぎりの好人物である。セビロ連は尤も大人しい連中でちつとも氣焔抔をする男ぢやない。君かりに俳句の會へでも出ると假定し玉へ知らない人は幾人でも居る。僕も昔は内氣で大に耻づかしがつたものだ。今でもある人はさう思つてゐる。所が大違ひ外部こそ同じだが内心はどんな人の前でも何とも思はない。學校抔で氣に喰はない教師抔が居ればフンと云つて鼻であしらつてゐる。夫で澤山なのだよ。世の中にエライ人が無暗に多いと思ふから耻づかしくなつたり。極りがわるくなるので。自分の心が高雅であると下等な事をする物などは自然と眼下に見えるから些つとも憶する必要が起らないものさ。
　こんな氣儘を吐くのも木曜日に君を話させ様と思ふからさ。又來る時は大に辯じ玉へ忙しいから是で御免を蒙る　以上

十一月九日　　　　夏目金之助

小宮豊隆様

四四九

明治三十九年十一月十一日　午前八時—九時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓昨日一寸伺ふのを忘れましたがね小生の原稿は十二月二十日頃迄でいゝでせうか、そこの所を一寸確めて置きたい實は色々用事があつてね　早くは出來さうもないです。
　生田長江といふ人が四方太さんの所へ行つたら先生大氣焔で漱石も一夜をかいてゐるうちはよかつたが近頃段々墮落すると云つたさうだ。四方太先生はこんな元氣はない人だと思つてゐた。えらい事になりま

した。僕は秋晴や秋曇をかいて滿足してゐられる樣になりたい。其方がどの位個人として幸福か知れない。僕がかくのは冗談にかくんぢやない。まづくても下手でも已を得ずかくのである。冗談なら文章をかゝずに教師丈でひまがあれば遊んであるいてゐる。

小生今後の傾向は先づ四方太先生の墮落的傾向であります。甚だ厄介ですな。小生が好んで墮落するんぢやない。世の中が小生を強ひて墮落せしむるのであるか。　恐惶謹言

十一月十一日　　　　金

虛子先生

左千夫の手紙に云つてゐる事は僕にわからない。四方太の駄洒落を攻擊してゐる所は小生は駄洒落とは認めない。僕はあすこへ應用して貰ふ積りで文章談をしたのではない。あれが駄洒落なら大抵のものは駄洒落だ。然し秋晴や秋曇は墮落的傾向を帶びないから僕には一向感じがない。何をかいたのか分らない。あの儘白紙を代りにしても同じ事だ。四方太がきいたら定めし怒る事だらう。

四五〇

明治三十九年十一月十一日　使ひ持參　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

今日は早朝から文學論の原稿を見てゐます中川といふ人に依賴した處先生頗る名文をかくものだから少少降參をして愚痴たら／＼讀んでゐます。

今四十枚ばかり見た所へ赤い冬瓜の樣なものが臺所の方から來て驚ろきました夫に長い手紙があるので愈驚ろきました。赤冬瓜の事は一二行であとは自我說文學說だから愈以て驚ろきました。御意見は面白く拜見しました。大分御謙遜の樣ですがあれはいけません。然し文章について大意見があるとは甚だ面白い是非伺ひ度と思ひます。

アン火は感じがわるいですね。佛蘭西あたりのいか樣ものを脊負ひ込んだのでせう。

四方太は白紙文學、僕は墮落文學、君はサボテン文學三重吉はオンラゞ戀ひ式夫々勝手にやればいゝのです。夫で逢へば滅茶に議論をして喧嘩をすればいゝと思ふ。所が四方太先生は議論をしませんよ。だからいやだ。

天下が僕の文を待つは甚だ愉快な御愛嬌で難有く待たれて置いて大に驚ろかす積りで奮發してかきませう。東洋城のォバサンが二百十日をほめたさうだから面白い。僕は人の攻擊をいくらでもきくが大概採用しない事にしました。其代りほめた所は何でも採用すると云ふ憲法です。

何だかムヅ／＼していけません。學校なんどへ出るのが惜しくつてたまらない。やりたい事が多くて困る。僕は十年計畫で敵を斃す積りだつたが近來是程短氣な事はないと思つて百年計畫にあらためました。百年計畫なら大丈夫誰が出て來ても負けません。

木曜に入らつしやい

ハムは大好物だから大に喜んで食ひます

二十日迄にかきます

十一月十一日

夏目金之助

虛　子　先　生

四五一

明治三十九年十一月十二日　午後三時—四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區谷中清水町三番地橋口清へ

拜啓先日は御令兄がわざ／＼御出掛下た處生憎親類のものがある日まで名古屋から來てゐた所へ又々外の來客があつてすぐ御歸りで甚だ失禮しました。どうぞ又御出下さい。

昨夜服部が猫の中篇の見本を持つて來ました。始めて體裁を見ました。今度の表紙の模樣は上卷のより上出來と思ひます。あの左右にある朱字は無雜作に出來て古い雅味がある。（上卷の金字は惡口で失禮だが無暗にギザ／＼して印とは思へない。）總體が淋しいが落ち付いてゐると思ひます。扉の朱字も上卷に比すれば數等よいと思ひます。ワクの中にうまく嵌つてゐる樣に思はれます。

鶴嶺の三枚の扉は先達持つて來ましたが何れも駄目だから歸しました夫からまだ持つて來ません。何をしてゐる事やら

淺井の畫はどうですか。不折は無暗に法螺を吹くから近來繪をたのむのがいやになりました。先〔は〕御禮まで　草々頓首

十一月十一日夜

夏目金之助

橋　口　清　樣

どうも忙がしくて困ります。こんないゝ天氣に一寸とも出られません。「女學世界」の記者が來た

から追ひ歸してやりました

四五二

明治三十九年十一月十六日　午後五時―六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區飯田町六丁目二十三番地瀧田哲太郎氏へ

拜啓讀賣新聞文壇擔任の義につき昨夜考へながら寐て仕舞つた。夫故別段名答も出來ぬ
先づ一寸思ひ浮んだ事を云ふと月に六十圓位で各日に一欄もしくは一欄半宛かくのはちと骨が折れる。
尤もやつて見んから分らんが多分いやになるだらう。
僕が各日にかけば高等學校か大學をやめる。どつちをやめるかと云へば大學をやめる。
大學は別段難有いとも名譽とも思ふて居らん。今迄三年半に余としては一人前の仕事をして居る。やめたとて職に堪へぬとは云はれない。
高等學校は授業が容易で文學上の研究及び述作の餘裕を作るに便だからやめぬ。のみならず今の所では猶やめない。高等學校の教師のあるものは生意氣である。生徒のあるものも生意氣である。ある教師は余がやめればいゝと考へてゐるらしい。余がやめれば、あとから、すぐ運動して這入らうと思ふてゐるものもあるらしい。こんな奴等を增長させては世の爲めにならんからやめぬ。生徒は何の考もなく只輕跳にして生意氣なのである。然しこんな生徒を征伏しないで學校を出ては余は生涯心持ちがわるい。世の爲めになる事を自分の安きを得る爲めに逃げた樣で甚だ不愉快である。だから高等學校は決してやめぬ。尤もそのうち職員のあるもの若しくは生徒のある「もの」と衝突して事件が急に發展して出るか居るか二つに極める場合が起るかも知れぬ。余にそんな事があればいゝと心待ちに待つてゐる。然しさうして出るなら格別それでなければ出ない。[運]動を起して出るにしても僕の代りに這入りたがつて居るものは決して入らせ

ない。

　大學をやめれば八百圓の收入の差がある。よし讀賣から八百圓くれるにしても每日新聞へかく事柄は僕の事業として後世に殘るものではない（後世に殘る殘らんは當人たる僕の力で左右する譯には行かぬ。然し苟も文筆を以て世に立つ以上は其覺悟である）只一日で讀み捨てるもの丶爲めに時間を奪はれるのは大學の授業の爲めに時間を奪はれると大した相違はない。そこで僕は躊躇する。

　よし夫でも構はんとする。然し讀賣新聞は基礎の堅い新聞かも知れぬが大學程堅くはない。尤も大學でいつ僕を免職するかも知れぬ。僕の眼中には學生も學長も教授もないから、其位の事はいつ僕の頭の上へふりかゝつて來るかも知れん。然し其懸念を度外視するときは大學の俸給は讀賣よりも比較的固定して居る。竹越氏は政客である。讀賣新聞と終始する人ではなからう。一反の約束である程度の機械的文學欄を引き受けた所で竹越氏と終始して去就する樣に融通の利く文學者ではない。ある時ある場合に僕は一人で立場を失ふ樣になるかも知れぬ。竹越氏が如何に努力家でも如何に僕に好意を表しても全然方面の違ふ文學者を生涯引きずつてあるく譯には行かぬ。

　又それ丈の覺悟を以て最初から入社するには僕の方で夫丈のモーチーヴがなくてはならん。「僕は教育界に立てぬ人だから、退かなければならん」とか「是非共新聞紙上で自家の說を發表して見たい」とか何かそこには未來の危險を犧牲にする丈の强烈な事情がなくてはならん。所が今の僕には左程の事情がない。

　夫からよし以上の理由を念頭に置かずして御依賴に應ずるにした所で到底文欄が僕の當初の所期の樣に行くものではない。讀賣には讀賣に附屬した在來の記者も居る。僕が文欄を擔任すれば僕の近しい人の文字をのみ載せて、在來の人の文字を閑却する樣になるかも知れん。さうすれば苦情が起る。其他色々の事で苦情が持ち上がる。

もし僕の待遇をよくして月給を増して僕の進退を誘ふとすれば僕も少しは動くかも知れん。然し未來の危險は依然として元の通りである。のみならず比較的僕が過分の月給をとれば社中に又不平が起る。島村抱月氏の日々文壇と同樣の事情が起るに極つてゐる。

今度の御依頼に就て尤も僕の心を動かすのは僕が文壇を擔任して、僕のうちへ出入する文士の糊口に窮してゐる人に幾分か餘裕を與へてやりたいと云ふ事である。然し事情を綜合して考へると夫も駄目である。

以上の理由だからしてまづ當分は見合はす方が僕の爲めだらうと思ふ。早々頓首

十一月十六日　　夏目金之助

瀧田哲太郎樣

四五三

明治三十九年十一月十六日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清へ　「[illegible]御下に

「御降り在中」とあり、裏に「十一月十六日夜八時半」とあり」

〔初めの部分切れてなし〕

もうやめます。陳列すると際限がない。仕舞へ行く程ソンザイになる。一二分に一個位宛出來る。此うちで尤も上等な奴を二つ許りとつて頂戴。

あしたは明治大學がやすみになつて嬉しいから、御降りを一寸作りました

十六日夜　　金

四五四

明治三十九年十一月十七日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

巣鴨の奥に御引移りのよし拜承淋しい處がよろし。

冬籠り染井の墓地を控へけり

四五五

明治三十九年十一月十八日　午後二時―三時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓昨夜は失敬。あの沼津行の事で考へたが一寸分らない。

今朝數藤斧三郎君が來て校長落合氏の方にはよい候補者がないから大學出の方で賴みたいと云ふ。

昨夜話した通り太田善男に此事を話した。返事はまだ來ない。

今朝數藤君に富山縣魚津に居る北鄕二郎の事も話した。

そこで僕は數藤君に是丈の事を受合つた

君と太田君がもし意があるならば校長落合氏に面會して見る樣に通知して置く事。

校長は神田三崎町の森田舘に居る。朝早くか夜ちと遲くでないと居らんさうだ。明後二十日の午後二時の滊車で歸るさうだ。

北鄕へも意志を聞く事を受合つた。

候補者を三人出したのは少々氣が多過ぎるかも知れんが候補者の方でも行くか行かぬか分らんのだから

仕方がない。
昨夜不忍池畔の君の身の上話しをきいた時は只小說的だと思つた。今朝になつて見ると何だか夢の世界に逍遙した樣な氣がする。
どうしても沼津行は斷然やめぬ方がいゝ一寸校長に逢つて見るがいゝ。
今日ある人に俳書堂で編輯人が入るといふ事をきいたから月給をきいたら四十圓位は出すだらうと云ふからともかくも聞いて貰ふ事にした。然し頗る危ない
先づ用事迄　草々

十一月十八日　夏目金之助

森田白楊樣

四五六

明治三十九年十一月二十一日　午前七時—十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より　本郷區駒込西片町十番地　中川芳太郎氏へ

拜啓五條氏書面拜見致候實は數藤斧三郎氏よりの依賴にて三名ばかり候補者を出し候うち二名は斷はり先方にても望まぬ樣子よつて殘る一名富山縣魚津に居る北鄕と云ふ人に電報にて問合せたる所行きたしとの希望にて其方まとまりたるあと故仕方なく候五條氏は聞き込んですぐ拙宅へ參られゝば相談も出來たものをと存候こんな事に紹介も何も入るものに無之候死活の問題に禮儀は古來より無之候　戰爭には道德さへ無之候。
君が御出ならいつ御出でになつてもよろしい。ちと遊びに來て下さい。但今週は木曜の外は長い御話し

は出来かね候。制作をしてゐる際には無之譯故作らうと思ひ批評すべき作家の作物をよみ始めたる所いやはや眼が二つでは一年もかゝりさうにて只今閉口致し候 以上

二十一日

金之助

芥舟兄

四五七

明治三十九年十一月二十三日 午後十一時―十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拝啓傳四先生の原稿は先程送りました。手を入れると申しても大變ですから大體あれでいゝでせう。校正の時でも氣がついた所を直してやつて下さい。ホトヽギスの趣向にはないのだがどうも長くなりさうで、さうして頗る複雑な事が書いて見たい。所がどうも時間が足りないですがね。そこが困ります。もし充分の時日があつて趣向が渾然とまとまれば日本第一の名作が來年一月のホトヽギスへあらはれるのだが惜しい事です。

いそがしくて困ります。昨夜は大變面白かつた。毎木曜にあゝ猛烈な論戰があると愉快ですな。

四五八

明治三十九年十一月二十三日 午後十一時―十二時 本郷區駒込千駄木町五十七番地より 本郷區駒込東片町百八十八番地 野上豐一郎へ

拝啓中學世界の臨時増刊にある十三年前の英文科學生の寫眞中にあるのは正に僕である。前列の左から二番目に髯髭を蓄へてるのが僕です。一番目は山川信二郎といふ男である。混同しちや困る。あれは卒

業したてのほや／＼で髭を生やし立てのほや／＼の所を不忍の長蛇亭の前で寫したのである。
　同號にとし女といふ人が當世の文學者を評したなかに僕の事を夏目先生といつて他の人は皆雅號を以て呼んでゐるのは、全體何物ですか。男がかりにあんな事をかいたものかと思つたらさうでもない樣だ。何で商人の家に生れて云々とある。而して僕の作を愛讀するとかいてある。かう云ふ異性の知己を得た僕は幸福である。實を云ふと創作をやる時にかつて女の讀者を眼中に置いた事がない。女の十中八九迄は僕の作に同情を有して居らんと信じてゐる。其なかにこんな人がひよこりと出て來ると一寸驚ろかされる。而して風葉天外一派を罵倒して居る見識家だから猶驚ろく。どうか西村君に逢つたらあのとし子さんの事をもう少し聞いて置いてくれ玉へ。序に大に感謝の意を表したいものである　先は右迄　不一

十一月二十三日

夏目金之助

野上豐一郎様

四〇九

明治三十九年十一月二十五日　午前十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

　猫を早く上げやうと思つたが下女がぐづ／＼して遲くなつた。風邪をひいても僕の講義を出席してくれる抔は甚だ難有い。元來僕の講義にそんなに面白い筈はないのだから風邪をひいたらゆつくり葛湯でも呑んで寐てゐるがいゝ。僕がやすんだのは病氣ぢやない。去ればと云つて君が病氣だから夫に對して休んだ譯でもない。只やすんだのさ。靈の感應で僕がやすむなんて事があるものか。左程に僕を信仰してくれるのは難有いが君がそんな傾向を發達させると飛んでもない事になるよ。僕だからまだいゝが女が相手だと

君は遂に其女の爲めに食ひ殺されて仕舞ふ。あぶない。君の樣な性質の人は可成反對の性質を養成しなくてはいけない。君も年頃だから今に戀をするかも知れない。其時に戀の感應なんぞばかり振り廻はしてると小宮豐隆なるものは地球の表面から消滅して仕舞ふ。僕も君位な年には戀の感應を擔いであるいたものだ。而して其［御］蔭でもつとえらくなる所をこんな馬鹿になつて仕舞つた。以來は決して戀の感應を擔いぢやいけない。ことに女に對して擔いぢや大變な事になる。世の中には感應を擔がせてひそかに冷笑する樣な怖い女が澤山居る。僕だつて戀の感應を利用して君を嬉しがらせる位は出來る。然しそんな罪な事はしないから君もやめなくつちやいけない。かうして葛湯を飲んでね、日向へ寐て發句でも作つてるがいゝ。直つたら木曜に來給へ。先達ては大勢來て皆々議論をして面白かつた。

僕忙がしくつて困る。人に出來る事だと君にすけて貰ふがさうはゆかない。

君はあまり神經質だから今のうちにもう少し呑氣になつて置き給へ。今のうちに呑氣になるのは譯はない。僕がして上げるから毎木曜に必ず出勤し玉へ　以上

十一月二十四日夜　　夏目金之助

小宮豐隆樣

四六〇

明治三十九年十一月三十日　午前十時―十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區早稻田南町三十番地大澤方片上伸氏へ

拜啓御手紙を拜見しました。新年の早稻田文學へ執筆の義につき再應の御照會は甚だ御氣の毒に存じて居ります。有體に申すと早稻田の方は逃れた積りで居りました。是から大學の講義が切れたから今年分

を少々かき夫からホト、ギスの約束を果すうちに今年の文章事業は出來なくなる事と存じます。ホト、ギスの方も漸の事で十二月二十日〔迄〕待つて貰ひました。夫から學校の試驗をして文學論の校正をして大晦日迄働く積りであります。

其代りホト、ギスのあとでは屹度早稻田文學へかく積りで居ります。どうかあしからず思つて下さい。木曜に御暇なら御遊びに入らつしやい。此間は中井君（趣味の）が來てゐました　以上

十一月二十九日　　夏目金之助

片上伸様

四六一

明治三十九年十一月三十日　午前十時－十一時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ

拜啓未だ御面會の機を得ず候處愈御清適奉賀候陳者今般はセロン茶一鑵御惠投にあづかり難有拜受仕候。御宿所を檢するに濱武氏と御同宿の樣に見受けられ候がもし御朋友にても候や御渡し被下度候吾輩ハ猫デアル中編幸手元に持合せ候故御禮として進呈仕候間御受納被下候はゞ幸甚に候。先は右御挨拶迄　草々頓首

十一月二十九日　　夏目金之助

久内清孝様

四六二

明治三十九年十二月二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より牛込區南榎町二十二番地小宮豐隆へ〔はがき〕

僕ノウチノ塀ハ奇麗ニナッタ

登錄の件色々御骨折多謝。登錄は二十圓かゝるさうだ。誰が何でもこちらへ云ふ時にすればそれでよいと云ふ譯だからやめた。登錄をする本は殆んどないさうだ。先は御禮迄　早々

四六三

明治三十九年十二月二日　本郷區駒込千駄木町五十七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村不折へ

寒氣漸く烈敷相成候處愈御清勝奉賀候扨近著書道一斑恵投にあつかり拜受難有御禮申上候拙著「猫」中篇も手もとに持合せ居候間一部供高覽候御笑草とも相成候はゞ幸甚に候
鳥井素川先生の手翰拜誦致候實は年末にて色々の用事輻湊手が五六本有つてもやりきれぬ體裁その爲め諸方よりの依賴も乍遺憾謝絶致候位故到底「朝日」の方も御たのみ通りに随筆ものを綴る譯に相成かね候右御氣の毒ながら不惡御諒察の上鳥井君へ宜しく御斷わり被下度先は右當用のみ申述候余は拜眉の上萬々可申述候　以上

十二月二日

金之助

不折賢臺
坐下

四六四

明治三十九年十二月四日　午後六時—七時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

拜啓明後日は千鳥の作者が新作をもつてくる由どうか御出席の上朗讀を願ひたいものですが如何でせう

十二月四日

四六五

明治三十九年十二月五日　午後十一時—十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より仙臺市第二高等學校齋藤阿具氏へ

拜啓塀の修繕難有存候偖今日學校にて承はる處原勝郎の後任として君が第一にくるかも知れぬとの事。
そこであらかじめ伺つて置き度候
一若し東京へ御轉任の時は當家へ御這入りなせ[原]れ候や
一もし小生が此家を出ねばならぬならば君が東京轉任決着次第御報知を受けて御着前に相當の家を探したし
一出來るならば此うちを以前の如く借りて居りたし
右用事迄草々得貴意候　以上

十二月五日　夏目金之助

齋藤阿具樣

四六六

明治三十九年十二月七日　本郷区駒込千駄木町五十七番地よりヂョン・ロレンス氏へ

57, Sendagichō, Hongo. 12. 7. 06

Dear Prof. Lawrence,

All the work I do in my classes falling on me, and my students having no share in it, I can possibly form no idea whatever as to their ability in their special line of studies, till they present their theses at the end of their academic career. I have run through the list you sent me and have found that some of them [sic] included in it are quite unknown to me. Others I know personally, but our intercourse are not so frequent as to make me bold enough to give any decided opinion about them. Thus I am quite powerless in the way of helping you in the matter, If it is absolutely necessary for me to test their eligibility, I must, as you suggest in your letter, have recourse to an examination. But then you are going to give them one, and Mr. Lloyd another. I think those two examinations are enough to show them at the best advantages. I should not object holding mine, if it would help them in giving them fair chance. As it is, I am rather inclined to dispense with it and leave it to you and Mr. Lloyd to decide their competency for the admission to the Eng. Seminar. I should be very much obliged to you, if you are so good as to let me know the names of successful students in the coming examinations.

Yours very sincerely,

K. Natsume

四六七

明治三十九年十二月八日　午後五時―六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

山彦の評落手拜見一々贊成に候然しデカダン派の感じは假令如何なる文學にも散點せざれば必竟駄目に候。ボードレール抔申す輩のは遂に病的の感に候。三重吉の方が餘程上等に候。君の方のデカダンは結構に候。但眞の爲めに美や道德を犧牲にする一派に候。夫もよろしく候。僕文學論にて之を論ぜんと思ひし所時間なく其儘に相成居候。

ホト、ギス未だ手を下さず今度は今迄と違ふ方面をかゝうと存候然し趣向纏まらず二十日迄に出來さうもなし實はハムレットを凌ぐ樣な傑作を出して天下のモ、ンガーを驚ろかしてやらうと思へども歳末多忙の上いくらえらいものを出しても決して驚ろかぬ性根を据つた讀者のみ故骨折損と存じ御やめに致し是から學校のひまにポツ／＼墮落文學を五六十枚かゝうと存候　以上

十二月八日　金

白楊樣

四六八

明治三十九年十二月八日　午後（以下不明）　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町福榮館鈴木三重吉へ

拜啓別封山彦評森田白楊より送り來り候御參考の爲め入御覽候ホト、ギスを書き始めんと思へど大概向にて纏らず切ればカタワとなる、時間はあらず困り入候　頓々

十二月八日　　　　夏目金之助

鈴木三重吉様

四六九

明治三十九年十二月八日　午後十一時―十二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地[illegible]へ　〔はがき〕

宮城縣角田に六十圓と四十圓の英語教師の口あり誰か心當りはなきか。堀川では雙方不都合と思ふ如何

四七〇

明治三十九年十二月九日　午後一時―二時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より[illegible]へ

拜啓御手紙拜見愈東京へ御轉任のよし結構に存候従つて小生現住家屋引拂の件委細承知致候早速家屋搜索にとりかゝり可申候。然し適當の場所見當り候迄はどうか御勘辨を願ひ度と存候。小生が千駄木に居りたきは失禮ながら今の家が氣に入りて外に移るのがいやになつたと申す譯に無之。他に少々理由有之。もし大兄が東京へ参られぬ以上はいつ迄も御厄介にならんと存候處所有主たる大兄が入れ換つて御住居となれば懇願の餘地も無之不得已次第至急立退の用意可仕候。只家屋拂底の今日、色々書籍類も澤山有之どこへでも立ち退くと申す運びに至らず候故其邊の御容赦にはあづかり度と存候

へ・・・・は小生のものに候。車屋から・・・・、イを借りた覺は無之候

右御返事迄　艸々

十二月九日　　夏目金之助

齋藤阿具様

四七一

明治三十九年十二月九日　午後二時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より小石川區久堅町七十四番地五十二號齋藤阿具氏へ　〔はがき〕

僕の家主東京轉任につき僕追ひ出される。よき家なきや。あらば敎へ給へ。

九　日

四七二

明治三十九年十二月九日　午後二時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ　〔はがき〕

僕の家主東京轉任につき近々追ひ出される。よき家あらば見當り次第御報知を乞ふ

九　日

四七三

明治三十九年十二月九日　午後二時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町二十七番地[illegible]中川芳太郎、鈴木三重吉へ　〔はがき〕

僕の家主東京轉任で僕は追ひ出されるにつきよき家あらば見當り次第敎へて下され

白楊先生の批評を見たりや

九　日

四七四

明治三十九年十二月十日　午前十一時—十一時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜啓愈本日曜からホトヽギスに取りかゝりました　學校があるから廿日迄に出來るかどうか受合へない。然し出來る丈かいて見ませう。時があれば傑作にして御覽に入れるがさうも行くまい。廿一日の朝には全部渡さなくてはいけませんか。一寸きかして下さい。正月發行期日が後れても職人が働かないから同じ事でせうか。

僕の家主が東京へ轉任するに就て僕に出ろと云ふ甚だ迷惑である。今時分轉任せんでもの事であるのにと思ふ。然し向は所有權があるから出なければならない。君どうですか、いゝ所を知りませんか。あつたら移りたいから教へて下さい。あれば今年中に移つて仕舞ふ。　頓首

十二月九日夜　　夏目金之助

虛子先生
座下

四七五

明治三十九年十二月十日　午後二時—三時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區丸山福山町四番地伊藤はる方森円月へ

啓上

三重吉先生が封入の手紙をよこして君に送つてくれといふから御覽なさい。三重吉は嬉しいとかスヰートとか云ふ字を無暗に使用する男だ。而して先生僕に對して大に嬉しがつてゐる。僕もこんな御弟子があれば本望の至りだ耶蘇の御弟子でも孔子の御弟子でも此位なものだらう。殆んど恐縮の至りだ。

かうやつて君の手紙を三重吉に渡して三重吉の手紙を君に渡すのは丸で色の取持をしてゐる樣なものだ。昔の小說にある女髮結の亞流だと思ふ　艸々

十二月十日　　金

白楊樣

昨日から小說をかき出した二十日迄に出來ればいゝが。今度の小說中には平生僕が君に話す樣な議論をする男や、夫から經歷が（人間は知らず）君に似てゐる男が出て來る。自然の勢何となしにさうなるのだから君や僕の事と思つちやいけない

四七六

明治三十九年十二月十一日　午後四時―五時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

正義組拜見趣向はいゝですがあれでは物足りませんね。あれをもつとキユッと感じさせなくつては短篇の生命がありません。惡口を申して失禮です。こんなものは今の小說家がみんなやります。而してもつとうまくやります。是よりは寫生文の方がよい樣に思はれます。然し屑籠へ入れる必要はないでせう。

寺田が短篇をよこしました。是もあまり感服しません。然し他人はほめるかも知れない。とにかく御覽

に入れます　以上

十二月十一日　　　　　　　　　　　　　　　金

虚　子　様

四七七

明治三十九年十二月十一日　本郷区駒込千駄木町五十七番地よりヂョン・ロレンス氏へ

57, Sendagichō, Hongo. 11th Dec. 1906

Dear Prof. Lawrence,

I am very much obliged to you for your letter, accompanied with the list of the successful candidates. Enclosed herewith, I return it signed, as is requested. I am very sorry I have done nothing toward helping you in the matter, despite the considerateness on your part to submit it before you have taken any decisive step in it.

Yours very sincerely,

K. Natsume

四七八

明治三十九年十二月十六日　午後四時—五時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清へ　〔はがき〕

欠び御出来のよし小生只今向鉢巻大頭痛にて大傑作製造中に候。二十日迄に出来上る積りなれど只今八

十枚の所にて。豫定の半分にも行つて居らぬ故どうなる事やら當人にも分りかね候。出來ねば末一二回分は二十日以後と御あきらめ下さい。

小生立退きを命ぜられ是亦大頭痛中に候」

今度の小說は本郷座式で超ハムレツト的の傑作になる筈の所御催促にて段々下落致候殘念千萬に候

四七九

明治三十九年十二月十六日　午後十一時—十二時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　〔はがき〕

只今頗ル艷ナ所ヲカイテ居ル

表題ハ實ハキマラズ。

「野分」、位ナ所ガヨカラウト思ヒマス。ドウデセウ。中々人ガキタリ、何カシテ一氣ニ書ケナイ

四八〇

明治三十九年十二月十九日　午後五時—六時　本鄕區駒込千駄木町五十七番地より本鄕區臺町二十七番地鳳明館中川芳太郎へ

御手紙拜見僕今明兩日中に長いものをかき上げるので七顚八倒の苦しみ御察し被下度家は大概きまつた。落雲館や車夫のない所をさがして下さる御好意は難有いがあんなものにいくら有つても構ハナイ。早晚夏目先生に降參するにきまつてるんだから降參をさせる樣な場所に居る方が社會の爲めである

文學論の校正が舞ひ込んで來た是は君の所へ行くのを間違つて僕の所へ來たのだらう。

鈴木は病氣をしたさうだ。僕のうちでも家内中インフルエンザ下女は寐てゐる細君も起きたり寐たりしてゐる。僕丈助かつた。僕が助からないと天下の大文章が出來損ふ所であつた。萬歲萬歲。向鉢卷の大頭

痛は度々經驗するが仕舞にいやになる。もう小說は御やめといふ氣にさへなる。何だか腹が痞へて苦しくつて書き上げる迄は眼が血走つてる。眠たがる僕がちつとも眠くない。夜通しでも起きてゐられる　左樣なら

十二月十九日　　夏目金之助

中川芳太郎樣

四八一

明治三十九年十二月二十二日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より熊本市内坪井町百二十七番地奥太一郎氏へ

御手紙拜見其後は御無沙汰實は大多忙にて始終謝絕致し居りたるために候學校も何だか〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇と存候右については〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇參り候由先日或る所より承はり候小生は東京にて孤獨校長が變つても學長が變つても頗る呑氣に候考へると東京は廣い所に候。其代りスリや胡魔の灰は至る所に散在致居候然し彼等は到底平面以下のものなれば其上に住む吾等には何等の痛痒を與ふるものにあらざる故安心なものに候

拙著御愛讀被下候よし難有存候鶉籠御所望につき一部差上候是は正月に賣出す筈に候其うち御地へも參る事と存候

何か面白い事を報道せんと思へども何にもなき故是にて御免蒙り候さう〳〵俣野義郎の事は面白く候あの男は多々羅三平を以て自ら目し而も大不平なので頗る厄介に存候漸く正月に相成候年々同じ樣な事を致して年々墓に近づき候スリ、ゴマノ蠅は生涯スリ、ゴマノ蠅で一命を終り候　呵々

十二月二十二日　　　　　　　　　　金之助

奥　　様

四八二

明治三十九年十二月二十二日　午後五時—六時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

君は長い手紙をかいたね。漸くホト、ギスを濟ましたから今日は用事其他の手紙をかく是が六本目である。手紙も六本位かくと疲れる。木曜の晩は小說が一章殘つて大に勉强しやうと思ふと午後から色々な人がくる入れ代り立ち代り（鈴木、中川も來た）大抵は十分位で歸した。然るに最後に至つて債主俳書堂主人廬子が車を驅つて原稿を受取りにきたのは一番辟易した。僕はまだ書き上げてゐない。それから書き放しで見直してない。それで不得已廬子先生に半分朗讀を賴んであまり可笑しいと思ふテニヲハを一寸直したらもう十時過ぎ、そこへ中央公論の瀧田先生がやつてくる。何でも十一時頃になつた。それだから君が來ても矢つ張り同じ事であつた。くればよかつた。

僕引越をしなければ年末に諸先生を會して忘年會を開かうと思ふが手紙を出してさうして客を呼んでさうして引越で見合せちや面白くないから控へてゐる。何でも先達て東洋城が自から臺所へ出て指揮を司どると云つてゐたが先生どうするかしらん。

僕瓦斯會社出張所の前を通つて見世にあるランプが欲しくなつた。札を見たら十五圓である。今に瓦斯でも引く家へ這入つたら此ランプを買ふ事に致さう。

鶉籠が出來た。今度來たら一部上げ樣。

僕をおとつさんにするのはいゝが、そんな大きなむす子があると思ふと落ち付いて騒けない。僕は是でも青年だぜ。中々若いゝんだからおとつさんには向かない。兄さんにも向かない。矢つ張り先生にして友達なるものだね。

おとつさんになると今日の樣な氣分で育英館の生徒なんかと喧嘩が出來る譯のものぢやない。世の中に何がつまらないつて、おとつさんになる程つまらないものはない。又おとつさんを持つより厄介な事はない。僕はおやぢで散々手コズツタ。不思議な事はおやぢが死んでも悲しくも何ともない。舊幕時代なら親不孝の罪を以て火あぶりにでもなる倅だね。君は女の手に生長したからそんな心細い事ばかり云ふ。段々自分で心細くして仕舞ふと始終には世の中がいやになつていけない。君の手紙を見て思ひ出した。今度僕のかいた小說をよんで御覽。あれは天下の心細がつてるものによませやうと思つて書いたものだ。あれを讀んでどんな感じが起るか聞きたいと思ふ。

僕は是で色々な人から色々に自分の身の上を打ちあけた手紙や何かを受取る男だ。人にそんな事の云へるうちは人間がつまり純粹なのである。其代り自分で自分の云ふ事を大袈裟に誇張する事がある。自分は當時はそれ程と氣がつかないでもあとからさう思ふ。君もさうだ。今に細君でももらふと大愉快になるかも知れない。つまらん事をかいて長くなつた。是から一寸晝寐でもしやうと思ふ。何だかだるくていけない。

十二月二十二日　　　　夏目金之助

小宮豐隆樣

四八三

明治三十九年十二月二十三日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

拜啓蝶衣（高田四十平）君の所ハ淡路從口デスカ

四八四

明治三十九年十二月二十四日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より芝區琴平町二番地一陽館野間眞綱へ　〔はがき〕

小生駒込西片町十番地へ来る二十七日晴天ならば轉宅興行に付何卒御来援の〔程〕偏に奉願上候

興行元　夏目漱石

四八五

明治三十九年十二月二十四日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ　〔はがき〕

天氣ならば二十七日轉宅願くは御賛成の上御来援被下度候
轉宅先は西片町十ロノ七ノアタリ御出張先は千駄木ニテヨロシ

四八六

明治三十九年十二月二十四日　午後三時―四時　本郷區駒込千駄木町五十七番地より本郷區臺町福榮館鈴木三重吉へ　〔はがき〕

天氣ならば二十七日轉宅の筈どうか手傳に來てくれ玉へ。西片町十ロノ七ノアタリナリ。但シ千駄木へ

御出張ヲ願ハシタシ

十二月二十四日

四八七

明治三十九年十二月二十六日　午後四時―五時　本郷区駒込千駄木町五十七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清へ　〔はがき〕

廿七日引き越します
所は本郷西片町十ロノ七
であります。中々よい處です。喬木を下つて幽谷に入る。

四八八

明治四十年一月一日　午後七時―八時　本郷区西片町十番地ろノ七号より[illegible]へ　〔はがき〕

拜啓来る三日木曜につき御來駕願度候。だれか來て夕食の支度をする有志者がありさうです

一月一日

四八九

明治四十年一月一日　午後七時―八時　本郷区駒込西片町十番地ろノ七号より本郷区本郷四丁目四十一番地喜多方方行徳俊則へ　〔はがき〕

拜啓来る三日木曜には誰か來て夕食の御馳走をする筈につきひるから御出をこふ

一月一日

四九〇

明治四十年一月一日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

拜啓來る三日木曜日につき大に諸賢を會し度と存候かねて松根東洋城が御馳走を周旋するといつてゐたから手紙を出して置きました。どうか來てまぜ返して下さい

四九一

明治四十年一月二日　午前六時―七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彥へ　〔はがき〕

拜啓來る三日木曜にて例の人々來りて御馳走をこしらへて、たべる由手傳ふなら晝から食ふなら夕方御出被下度候

四九二

明治四十年一月六日　午後四時―五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

〔はじめの部分切れて無し「畑打」の句なるべし〕

まづ此位な處に候御旅行結構に候三日には大勢あつまり頗る盛會に候。小生野分をかいたから此次は何をかゝうかと考へ居り候。何だか殿下樣より漱石の方がえらい氣持に候。此分にては神樣を凌ぐ事は容易に候。人間もそのうち寂滅と御用になるべく。それ迄に色々なものを書いて死に度と存候　以上

一月四日夜　　金之助

虛子先生

四九三

明治四十年一月六日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外田中村五十四番地木村方伊津野直氏へ

拜啓わざ〳〵御手紙にてうれしく拜見致候閑靜なる御住居を卜され候由結構狩野君より毎々京都はよい所だ是非こい〳〵といはれ候小生も行き度候。一ヶ月ばかり遊んで東京へ歸つたら嘸面白からうと存候竹藪の中抔は東京では到底住めず候。舊臘齋藤阿具氏仙臺より東京へ轉任にて千駄木の住居を追ひ出され二十七日に漸く表面へ引き越し候夫から毎日々々來客やら片付けやらで大騷ぎ實は仕事が大分あるのに何にもせぬうちに休暇もなくなる次第何につけてものび〳〵せぬは東京の生活に候。新居も鼻がつかへる樣な所に候ホトヽギス賣切れの由。東京にても二三日中に賣り切れたる樣子。餘分があると送つて上げたけれども出版社の方にも種切れ故如何とも致しがたく候。狩野君には東京にて兩三度逢ひ候。京都にてゆつくり御勉強の程願上候先は右御返事迄　草々

一月六日夜　　夏目金之助

伊津野樣

四九四

明治四十年一月十一日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區春木町薦榮館鈴木三重吉へ　〔はがき〕

日曜には十一時半に拙宅へ御出の事但し隨意の時間に九段へ御出で夏目の席ときいてもよろしく候

四九五

明治四十年一月十一日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ　〔はがき〕

日曜の能見物には僕等が十一時過ぎに君を誘ふから待つてゐ玉へ。夫とも一人で先へ行つて夏目の席と聽いてもよし

四九六

明治四十年一月十二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多床方野村傳四へ　〔はがき〕

寒水村をよみました。君のかいたもので一番小說に近いものである。趣向が面白い。さうして是といふ不自然がない。結構であります。一字一句に苦心するよりあの方が遙かにいゝ。　早々萬歲

四九七

明治四十年一月十二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區竹早町森巻吉へ

拜啓呵責を讀んだ

あれは大變骨を折つた短篇である。其骨折は文章にある。文章のうちでも句法及び句切りにある。一句一句の內容よりも寧ろ前者である。而して其骨折り方は非常に堅い齒の立たない樣なものを作り上げた。あれは文の口調から云ふと僕のかいた幻影の盾や一夜に似て居る。妙な事に僕は僕の癖を眞似た文章を嫌ふ。僕の他人と共通の所を眞似たものでなく僕の癖をわざ〳〵眞似た作に對すると其人の個性がない樣な氣持ちがしていくら善く出來てゐてもほめる氣にならない。是が第一の不滿の點である。

夫からあゝ云ふ文體は時代ものか空漠たる詩的のものには適するかも知れぬが世話ものには不適當である

世話物は主としてある筋を主眼にする。筋でなくてもあるものを捉へて、其あるものを讀者に與へやうとする。所があゝ云ふ風に肩が凝るやうにかくと筋とかあるものとかを味ふ力がみんな一字一句を味ふ爲めに費やされて仕舞ふから自分で自分の目的を害する事になる。

だから文體をあの儘にしてしかも筋とか、ある人情とかをキューとあらはす爲めにはもつと筋を明瞭にしなければならない。或は人に感じさせやうとする人情をもつと露骨にかゝなければならない。所が君の短篇の筋は茫としてゐる。女の呵責も矢張り原因結果の不明瞭に伴つて一向ひき立たぬ。それだから文章をもつと容易にするより外に改良の途はない。

もし又文章をあの調子で生かせ樣とするならもつと頭も尾もなくて構はない趣向にして仕舞ふがいゝ。詩的な空想とか、又は官能にうつたへる樣なものにしさへすれば文章丈を味ふ事が出來る。

文章に意を用ゐれば肝心の筋が解らなくなる。筋をたどれば文章の一字一句が晦澁になる。君は知らぬ間に讀者を苦しめてゐる。

單に詩的な作物と人情ものとを兼ね樣としてさうして讀者の方向を迷はせたからかうなつたものと思ふ。

○最後に文章丈で云ふと面白い句もあるが前云ふ通り重に口調や句切りの方に意を用ゐて内容に重きを措いて居らん。平凡な想を妙な口調で述べたに過ぎぬ場所さへある。だから呵責の一篇は單に文章ものとしてみてもえらくない

○最後に文章は措いて筋、趣向、人情の方から云ふと是はもつと明瞭に長くかくか又は裏からかいてももつと自然に近い樣にかゝなければ人を感動せしむる事は出來ん。あの女が無暗に一人で苦しんで居る樣

に思はれる、苦しみ方が突飛で作者が勝手次第に道具に使つてゐる様に見える。凡ての人間が頭も尾もないダーク一座の操人形の様に見える。あれではいけないよ。

○して見ると呵責は單に文章としても餘りうまくなし。單に人情ものとしても猶よくない。而して片々が片々を邪魔をする様に組み合はされてゐるから其結果は猶いけない。

○僕の解剖は正しい。普通の人はあれを讀んで何だか可笑しいと思ふ。而して何が可笑しいか分らずに仕舞ふ。君は其等の評をきくと不平に違ひない。不平かも知れないがさう云ふ評が適當である。君の不平を或る點迄和げやうと思つて僕はこゝ迄解剖して御覽に入れたのである。

○一番最後に呵責の一篇に於て尤も取るべき點があるなら文章である。而して其文章は遂に漱石の癖所を眞似たものである。從つて漱石以上に成功した文章でも天下はそれ程動かない。君の損である。眞似をされた漱石自身さへ好まぬ以上は他人は猶更である。文は人間である。君は漱石とは違ふ人間であるから自然にかけば屹度漱石と違つたものが出來る。それが君の文章である。どうか此後作物をやる時は其積でやつて貰ひたい。

○僕は遠慮のない事をいふ。君を失望させる譯ではない。君が正しい點から出立して一個の森巻吉として成功せん事を望むからである　以上

一月十二日

夏目金之助

森　巻　吉　様

四九八

か

明治四十年一月十六日　午後四時—五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　麴町區富士見町四丁目八番地寺田寅彦へ　〔はがき〕

寅彦が枯菊の影を送つて來ましたから廻送します。今度のホトヽギスに僕の轉居を廣告してくれませんか

四九九

明治四十年一月十七日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上八重へ

明　暗

一　非常に苦心の作なり。然し此苦心は局部の苦心なり。從つて苦心の割に全體が引き立つ事なし

一　局部に苦心をし過ぎる結果散文中に無暗に詩的な形容を使ふ。然も入らぬ處へ無理矢理に使ふ。スキ間なく象嵌を施したる文机の如し。全體の地は隱れて仕舞ふ。

一　而して此裝飾は机の木とある點に於て不調和なり。會話は全然寫眞にして地の文は殆んど漢文口調の如き堅苦しきものなり。（余の文體のあるものに似たり）然し警句は大變多し此警句に費やせる勢力を擧げて人間其ものゝ心機の隱見する觀察に費やしたらば是よりも數十等面白きものが出來るべし

一　明暗は若き人の作物也。篇中の人物と同じ位の平面に立つ人の作物なり。自から高い處に居つて上から見下して彼我をかき分けた樣な作物にあらず。夫故に同年輩以上の人の心を動かす能はず

大なる作者は大なる眼と高き立脚地あり。篇中の人物は赤も白も黑も悉く掌を指すが如く雙眸に入る。明暗の作者は人世のある色の外は識別し得ざる若き人なり。才の足らざるにあらず、識の足らざるにあらず。思索綜合の哲學と年が足らぬなり。年は大變な有力なものなり。「明暗」の作者は今より十年後に至つて再び「明暗」をよむ時余の言の詐りならざるを知るべし

一　去れども世には年ばかり殖えて一向頭腦の進歩せぬものあり。十中六七迄はこれなり。余の年といふは單に世に住むといふ意ならず。漫然と世に住むも住まぬと同じ。余の年と云ふは文學者としてとつたる年なり。明暗の著作者もし文學者たらんと欲せば漫然として年をとるべからず文學者として年をとるべし。文學者として十年の歳月を送りたる時過去を顧みば余が言の妄ならざるを知らん

一　女主人公一人より成る小説なり此女主人公がもつと判然と活動せざる可らず。是を圍繞する附屬物の人間も亦今一層躍然たらざるべからず。幸子を慕ふ醫學士の如きはどうも人間らしからず。之に對する幸子も大分は作者がいゝ加減に狹い胸の中で築き上げた畸形兒なり。

讀んで成程と思ふ程に出來ねば失敗なり。明暗は成程と迄思へぬ作なり。著者のみ無暗に成程と思つてゐる。此著者の世間が狹い證據なり。人世の批評眼が出來上らぬ證據なり。觀察が糸の如く細き證據なり

一　明暗の如き詩的な警句を連發する作家はもつと詩的なる作物をかくべし。而して自己の得所が充分發揮せらるゝ樣にすべし。人情ものをかく丈の手腕はなきなり。非人情のものをかく力量は充分あるなり。繪の如きもの、肖像の如きもの、美文的のものをかけば得所を發揮すると同時に弱點を露はすの不便を免がるゝを得べし。　妄評多罪

しばらく實際に就て御參考の爲め愚存を述べん

一　幸子といふ女が畫の爲めに一身を獻身的に過ごすといふはよし。然し妙齢の美人がこんな心を起すには起す丈の源因がなければならん夫をかゝなければ突然で不自然に聽える

一　兄が嫁を貰ふのを聽いてうらめしく思ふのはよし。此うらめしさを讀者に感ぜしむる爲めにはあら

かじめ伏線を設けて兄と妹の中のよき所、よき加減を讀者に知らしめざるべからず。然らざれば是又突然にて器械的也。作者一人が承知してゐる樣に思はれる

一　女が男の戀をしりぞける所は夫でよし。退ぞけて後迷ふもよし、只力量足らざる爲め悉く作者が勝手に製造せる如く見ゆ

一　女が自分の畫のまづきに氣がつく處アツクなし。突然としてレヱレーションの如く自分の畫のまづきを知る。作者は夫でよしとするも讀者の腑には落ちず

一　女が遂に降參して醫學士に靡かんとする時自己の不見識を考へて無理に昔の主義を押し通す所よし。全篇にて尤もと思ふは此所なり。何故といへば前に伏線がある故なり。是丈は突然にあらず。作者の勝手にあらず。か丶る女の心理的狀態として如何にもかく發展しさうに思はる丶なり

一　か丶る變な女を描く事は一方から云へば容易なる如くにて一方からは非常、困難なるものなり。變人なる故普通の人と心理狀態の異なる所以を自ら説明せざるべからず。之を説明さざる限りは讀者は成程と思へぬ也。然も其説明たるや全篇を讀むうちにいつといふ事を知らぬ間に説明せざるべからず　是尤も手腕の必要なる所なり

一　趣向は全體として別段の事なし。あしく云へばありふれたるものなるべし。只運用の妙一つにて陳を化して新となす。作者は惜しい事に未だ此力量を有せず。

最後の一節の如きは尤も女主人公の性格を發揮すると共に吾人の同情を彼女の上に灑がしめ得る好シチユエーションなるにも拘はらず。左のみ感服せず

明治四十年一月十八日　午後零時—一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

「緣」といふ面白いものを得たからホト、ギスへ差し上げます。「緣」はどこから見ても女の書いたものであります。しかも明治の才媛がいまだ曾て描き出し得なかつた嬉しい情趣をあらはして居ます。「千鳥」をホト、ギスにすゝめた小生は「緣」をにぎりつぶす譯に行きません。ひろく同好の士に讀ませたいと思ひます。

今の小說ずきはこんなものを讀んでつまらんといふかも知れません。鰒汁をぐら〳〵煮て、それを飽く迄食つて、さうして夜中に腹が痛くなつて煩悶しなければ物足らないといふ連中が多い樣である。それでなければ人生に觸れた心持ちがしない抔と云つて居ます。ことに女にはそんな毒にあたつて嬉しがる連中が多いと思ひます。大抵の女は信州の山の奥で育つた田舍者です。鮪を食つてピリ、と來て、顏がポーとしなければ魚らしく思はない樣ですな。

こんななかに「緣」の樣な作者の居るのは甚だたのもしい氣がします。これをたのもしがつて歡迎するものはホト、ギス丈だらうと思ひます。夫れだからホト、ギスへ進上します。

一月十八日　金

虛子樣

五〇一

明治四十年一月十八日　午後零時—一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

一寸お返し上げます。

君が衣食に困る事をたのまれもせぬに少々心配して居た處先日俳書堂主人が子規遺稿を出版するに付いて適當の人がほしいと云ふからあたつて見た所。一週間（一ヶ月中）を其方に費やして編輯に從事し其他は毎日十六頁乃至三十二頁の校正をして先づ一年事業として月々貳十五圓位なら出せると云ふ。夫から虚子にも話しをしたら誰ですかといふから實は森田ですが是は此方であてにする丈で向ではいやといふかも知れませんと答へた。すると虚子が森田君は俳句の心掛があるでせうかといふから、まあないでせう然し校正位は出來るだらうといふたら、いや出版の上でこんな間違があつたと人の噂に上る不都合さへなければいゝのですと申した。

近頃君の事情は知らぬがもし差し當つて困るならやつて見たらどうであらう。氣があるならば俳書堂主人（籾山仁三郎事築地二丁目住）及び高濱虚子（富士見町四ノ八住）に面會して見たら如何。

是はあまり威張つた仕事でなし且つ薄給故強ひて勸める譯にあらず只僕の老婆心からいふのである。逢ふ積りなら僕から兩人へ手紙を出してもよし又は突然行つて僕からきいたと云つてもよろしく。いづれにも一寸手紙で返事を下さい。　以上

一月十八日　　夏目金之助

森田米松樣

五〇二

明治四十年一月十九日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓春陽堂の編輯員本多直二郎(原)氏新小説紙選句の件につき御目にかゝり御話し申度由につき御面會被下

候へば幸甚に存候先は用事のみ餘は拜眉千萬　不一

一月十九日

夏目金之助

高濱樣

五〇三

明治四十年一月二十一日　午後六時―七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　〔はがき〕

拜啓庄野宗之助君の宿所を一寸御報知願度と存候　以上

一月二十一日

五〇四

明治四十年一月二十三日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓先日は遠路の所をわざ〳〵御來駕被下候處實にいやはやぞんざい千萬なる接待ぶりにて甚だ以て恐縮致候實はさしかゝつた用事を明日に控へて其方で時間が必要なりし爲め御引きとめ申す譯にも行かず。歸らうと仰せらるゝを左樣ならと御歸し申候。

そこで其節一寸御話しを致した庄野君の畫の事を一寸手紙にて問ひ合せ候處賣るなら百圓と申候。さうして買はうと云はれる方には少々高價かも知れぬと申す返事が參り候。小生畫の相場は知らず。畫工を踏み倒すのは無論嫌であなたに無暗なものを壓しつけるのも固より厭に候。只あれなりにして置いては何だか氣が濟まぬ故御通知丈は致し候

右不取敢御詫旁御報迄草々如斯に御座候　以上

一月二十三日　　夏目金之助

渡邊和太郎様

傳君によろしく御申傳被下度候

五〇五

明治四十年一月二十三日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓其後は御無沙汰を致しました。色々用事ばかり多くて一向出られません。今日學校にてモリス君が先達て書いて頂ひたブックプレートを版にしたいがいゝ人を教へてくれ。滅多な人にたのんで折角の筆致を無茶苦茶にされてはかいて貰つた甲斐がないと申候。それ故橋口君に聞き合はしてもらひませうと答へて置きましたから何分御面倒でも教へて下さい。或はモリス君からあれを其儘あなたの所へ送つてそれを彫刻家の方へ廻していたゞいて出來上つたあとから費用を本人から拂はせる様に致せば猶モリス君の爲めには便宜かと思ひますがそれ丈の御面倒が願へるものでせうか。

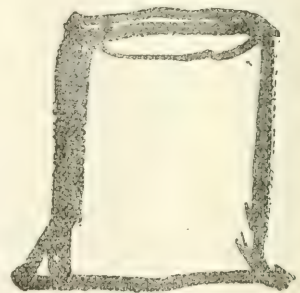
其次に私の御願が一つありますがね。僕はインキ壺を二つ（黑と赤）青銅か何かで鑄出して見たいと思ひますが御存じの學校出の方でこんな事に趣味のある方でひまにこしらへてやらうと云ふ様な奇特な人はありますまいか。謝禮は澤山は出來ません。二つで五圓位で出來れば結構だと思ひます。

カタは支那的趣味でわからない篆字位が出て居る事を希望します。大きさは此位かもう少し大きくてよろしい蓋がついて、据りが丈夫なのがよろしいと思ひます。二個が一つにくつゝいても別々に離れて居ても意匠の都合でどうでもよろしい。どうもインキ壺と申すものは俗なもので毎日机の上を見る度にいやな心持になります。

先は用事迄　艸々頓首

二十三日

金之助

橋口清様

五〇六

明治四十年一月二十五日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

尊書拜見庄野氏の畫の價は仰せに從ひ今一應きゝ直し可申候歌舞伎座御親切に御誘ひありがたく候實は先度も籾山氏より誘はれ候へども多忙の爲め謝絶致候行きたい事は行きたく候へども去年から持ち越しの用事山積殘念ながらよす方に取り極め申候間他を代りに御誘ひある樣願度候

先は用事迄　草々

一月二十五日

夏目金之助

渡邊和太郎様

五〇七

明治四十年一月二十七日　午後三時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓庄野君に七十圓に負けぬかといふたら一厘も引けぬといふて來ました。僕は其手紙のうちに藝術家の氣骨があらはれて居るのを見て非常に氣に入りました。彼は貧乏である、しかも自己の畫を百圓より一厘も負からぬと云ふ。其裏面には自分の畫にそれ丈の勞力の價を認めぬものは買つてくれなくてもよいと云ふ氣概が躍つてゐる。たのもしい男であります。あれだから下宿にくすぶつて情けない生活をしてゐるのであります。私はあなたに買つてくれと勸めはしません。只負からぬといふて來た事を御報知する許りであります。今日の芝居は定めて面白いでせう

先は用事迄　草々

一月二十七日

夏目金之助

渡邊和太郎様

五〇八

明治四十年一月二十七日　午後三時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

虛子君二月の能（九段）の席上等をとつて頂く譯に行きませんか今度も連れて行つてくれといふ人があ

る。モリスも取りたいと申します。都合はつきますまいか

五〇九

明治四十年二月四日　午後三時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓畫の事につき庄野氏に再應きゝ合せ候處別紙返書參り候間入御披見申候畫は小生宅に有之いつにても御渡し可申代價は都合によりては小生御預りの上本人へ渡してもよろしく候

右用事迄　草々頓首

二月四日　　　夏目金之助

渡邊和太郎様

五一〇

明治四十年二月十日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區森川町一番地小宗館小宮豊隆へ　〔はがき〕

昨九日夜若竹に朝太夫君を拜聽の序一寸御誘ひ申候處御外出。朝太夫君は到底義太夫を以て目すべからず。寒風凛々馬鹿を見候。

十日今日内丸最一郎君來り只今迄談話時に午後五時

五一一

明治四十年二月十日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓過日御送附の手形百圓正に落掌直ちに庄野氏へ廻送致候尚早速禮狀をよこし申候。右にて金の方は一先づ片づき候間左樣御承知被下度候借書の方は御都合迄小生方に留置申候間御序の節御受取願上候。あれが人の預りものとなると鼠が出てかぢりはせぬかと心配に候。舊臘より持ち越しの用事にて毎日心も心ならず御返事もつい後れ申候不惡御海恕願上候　以上

二月八日　夏目金之助

渡邊和太郎樣

五一二

明治四十年二月十三日　午後十一時—十二時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村四十八番地狩野亨吉氏方菅虎雄氏へ

尊書拜見小生多忙にて御出立前に參堂の機を得ず遺憾の至り。其多忙は今日迄引きつゞき毎日に追はれ甚だ困却大兄も久々にて獨逸語教授嘸かし忙がしい事と存候。小生は愈となるとよく學校休講と出掛け候が今度は何だかやすむのがいやで其日暮しに送り候。

大我先生から靑田石と云ふのを三個八圓五十錢で賣りつけられ而して君のくれた印材へも刻してもらひ都合ほり賃として十二三圓とられ。材價を合して貳十圓餘の散財には閉口ある人曰く印は腐るものでないからいゝだらうと成程ながが持ちのする點から云へば安きものに候先は右御返事迄　艸々頓首

二月十三日　金之助

菅大兄

五一三

明治四十年二月十三日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區市ケ谷薬王寺前町二十番地早稲田文學社内片上伸氏へ

拜啓今年に至り第一に早稲田文學へ小說を寄稿する御約束の處昨年末より臨時の用事出來目下毎日其方にて持て餘し居候故肝心の御約束も至急と申す譯に相成りかね候につき當分の間御容赦にあづかり度先は右用事迄相述べ候　艸々頓首

二月十三日

夏目金之助

片上伸様

野分の評面白く拜見致候。わる口の處大分異存有之候へども批評として例の如く體を得たる點に於て大にうれしく存候

五一四

明治四十年二月十六日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松根豐次郎へ

先夜は失禮其後閑をぬすんで樂堂君の三の糸を拜讀中々面白い所がある樣だ。其面白味は俳句をやつた人のみ出し得る面白味である樣でそこの所は甚だ贊成だが全體から云ふとまとまらない。散漫の樣に感じた。文章があまり簡單で字があまりうまくなくてさうして僕に充分のひまがないのでさう思はれたのかも知れぬ。

時に只今見るとあの玉稿が見えぬ。下女に尋ねたら知らぬといふ甚だ物騒である。よく探して見ませう。僕は文學論で困却の體である。

三の糸が出なかつたら御隣家の牧野先生に告訴する事に致さう　左樣なら

二月十六日夜

金

東洋城樣

五一五

明治四十年二月二十日　午後五時―六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區琴平町一番地朝陽館野間眞綱へ

拜啓先日は英語教師の候補者わざ〳〵御報知難有存候あの人の人物と學力等を知りたいと申して參り候間御承知ならば御教示願上候　以上

二月二十日

夏目金之助

野間眞綱樣

五一六

明治四十年二月二十二日　午後四時―五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓御手紙拜見實はいつでもよろしと申度なれど只今ある仕事に追はれ其方を一日も早く片づけねばならぬ故日曜の十一時と十二時の間に御出被下候へば好都合に存候先は右御返事まで　艸々頓首

二月二十一日　　　　　　夏目金之助

白仁三郎様

五一七

明治四十年三月四日　午前十時―十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓先日は御來駕失敬致候其節の御話しの義は篤と考へたくと存候處非常に多忙にて未だ何とも決せざるうち大學より英文學の講座擔任の相談有之候。因つて其方は朝日の方落着迄待つてもらひ置候。而して小生は今二三週間の後には少々餘裕が出來る見込故其節は場合によりては池邊氏と直接に御目にかゝり御相談を遂げ度と存候。然し其前に考の材料として今少し委細の事を承はり置度と存候

一手當の事　其高は先日の仰の通りにて增減は出來ぬものと承知して可なるや

それから手當の保證　是は六やみに免職にならぬとか、池邊氏のみならず社主の村山氏が保證してくれるとか云ふ事。

何年務めれば官吏で云ふ恩給といふ樣なものが出るにや、さうして其高は月給の何分一に當るや。

小生が新聞に入れば生活が一變する譯なり。失敗するも再び教育界へもどらざる覺悟なればそれ相應なる安全なる見込なければ一寸動きがたき故下品を顧みず金の事を伺ひ候

次には仕事の事なり。新聞の小說は一回（年に）として何月位つゞくものをかくにや。それから賣捌の方から色々な苦情が出ても構はぬにや。小生の小說は到底今日の新聞には不向と思ふ夫でも差し支なきや。尤も十年後には或はよろしかるべきやも知れず。然し其うちには漱石も今の樣に流行せぬ樣になるかも知

れず。夫でも差支なきや。

小說以外にかくべき事項は小生の隨意として約どの位の量を一週何日位かくべきか。

それから學校をやめる事は勿論なれども論說とか小說とかを雜誌で依賴された時は今日の如く隨意に執筆して然るべきや。

それから朝日に出た小說やら其他は書物と纏めて小生の版權にて出版する事を許さるゝや

小生はある意味に於て大學を好まぬものに候。然しある意味にては隱居の樣な敎授生活を愛し候。此故に多少躊躇致候。御迷惑とは存じ候へど御序の節以上の件々御聞き合せ置被下度候。尤も御即答にも及ばずもし池邊氏に面會致す機會もあらば同氏より承はりてもよろしく候。先は用事のみ　匆々

三月四日　　　　夏目金之助

白仁三郎樣

大學を出て江湖の士となるは今迄誰もやらぬ事に候夫故一寸やつて見度候。是も變人たる所以かと存候

五一八

明治四十年三月四日　午後五時―六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき　中央に漱石山房の印が捺してあり〕

白酒をのみに來てもよろしく候。漱石山房の印をペタ〳〵押したいが時々來て五六冊づゝ押し

て被下度候。其代り時々御馳走を致候　以上頓首恐惶謹言

五一九

明治四十年三月十一日　午後五時―六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田南町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓先日御話しの朝日入社の件につき多忙中未だ熟考せざれども大約左の如き申出を許可相成候へば進んで池邊氏と會見致し度と存候

一小生の文學的作物は一切を擧げて朝日新聞に掲載する事

一但し其分量と種類と長短と時日の割合は小生の隨意たる事。（換[原]言すれば小生は一年間に出來得る限り感興に應じ又思索の暇を見出して凡てを朝日新聞に致す事。但しもとより文學的の述作故に器械的に時間を限る能はず。小說抔にても回數を受合ふ譯に行かず。時には長くなり又短かくなり。又は一週に何度もかき又は一月に一二度しか書かぬ事あるべし。而して小生のやり得る程度は自己にも分らぬ故先づ去年中に小生がなし得たる仕事を以て目安とせば大差なからんかと存候尤も去年の仕事は學校へ出た上の事故專門に述作に從事せば或は量に於多少の増加を見るに至るべきかなれどもまづ標準はあの位と御考ありたし。而して小生の仕事の過半は無論美文ことに小說にあらはるべきかと存候。（或は長きものを一回にて御免蒙るか又は坊ちやんの樣なものを二三篇かくか其邊は小生の隨意とせられたし）

一俸[原]酬は御申出の通り月二百圓にてよろしく候。但し他の社員並に盆暮の賞與は頂戴致し候。是は雙方合して月々の手宛の四倍（？わからず）位の割にて豫算を立て度と存候

一もし文學的作物にて他の雜誌に不得已掲載の場合には其都度朝日社の許可を得べく候。（是は事實として殆んどなき事と存候。既に御許容のホト、ギスと雖ども入社以後は滅多に執筆はせぬ覺悟に候）

一但し全く非文學的ならぬもの（誰が見ても）或は二三頁の端もの、もしくは新聞に不向なる學說の論文等は無斷にて適當な所へ掲載の自由を得度と存候

一小生の位地の安全を池邊氏及び社主より正式に保證せられ度事。是も念の爲めに候。大學教授は頗る手堅く安全のものに候故小生が大學を出るには大學程の安全なる事を希望致す譯に候。池邊君は固より紳士なる故間違なきは勿論なれども萬一同君が退社せらるゝ時は社主より外に條件を滿足に履行してくれ〔る〕ものなく又當方より履行を要求する宛も無之につき池邊君のみならず社主との契約を希望致し候。

必竟するに一度び大學を出で、野の人となる以上は再び教師抔にはならぬ考故に色々な面倒な事を申し候。猶熟考せば此他にも條件が出るやも知れず。出たらば出た時に申上候が先づ是丈を參考迄に先方へ一寸御通知置被下度候先は右用事迄　艸々頓首

三月十一日　　夏目金之助

白仁三郎様

五三〇

明治四十年三月十四日　午後（以下不明）　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區上野櫻木町丸茂病院滑井秀一氏へ

御病氣のよし御大事に可被成候御依頼の鶉籠小包にて差出候御讀被下度候　以上

三月十三日

五三一

明治四十年三月十七日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より大隅國重富村平松野間眞綱へ

只今御手紙を拜見御母上樣終に御逝去の由嘸かし御力落しの事と存候あとの事抔色々御心配と存候坂巻の方は大分時日經過致し候故既に定まりたるやも知れず、歸途鹿兒島にて一寸樣子を見て御出可被成候。然し坂巻には逢はぬがよし又無暗に取極めぬがよく候。他にも口は可有之見込なり。委細は御歸京の上萬事相談只今多忙たゞ御返事のみ　草々

三月十七日　　　　　　　　　　金之助

眞綱樣

五二三

明治四十年三月二十二日　午後五時—六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區市ヶ谷藥王寺前町二十番地早稻田文學社内片上伸氏へ

拜啓かねて御約束の早稻田文學へ寄稿の件荏苒遲延申譯無之候然る處今般ある事情にて教員生活をやめ新聞に這入る事と相成候に就ては一切の文學的作物は其方へ廻さねばならぬ義務を生じ候。因て甚だ申譯なき次第ながら御約束を履行する運びに至りかね候右不惡御ゆるし被下度先は右御申譯旁御斷はり迄　艸艸頓首

三月二十二日　　　　　　　　　夏目金之助

片上伸樣

五二三

明治四十年三月二十三日　午後零時—一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ

御手紙拜見小生が大學を退くに就て御懇篤なる御言葉をうけ慚愧の至に候。僕の講義でインスパヤーされたとあるのは甚だ本懷の至り講座に上るものゝ名譽不過之と存候。世の中はみな博士とか教授とかを左も難有きものゝ樣に申し居候。小生にも教授になれと申候。教授になつて席末に列するの名譽なるは言ふ迄もなく候。教授は皆エラキ男のみと存候。然しエラカラざる僕の如きは殆んど彼等の末席にさへ列するの資格なかるべきかと存じ。思ひ切つて野に下り候。生涯は只運命を頼むより致し方なく前途は惨憺たるものに候。それにも拘はらず大學に噛み付いて黃色になつたノートを繰り返すよりも人間として殊勝ならんかと存候。小生向後何をやるやら何が出來るやら自分にも分らず。只やる丈やる而已に候。頻年大學生の意氣妙に衰へて俗に赴く樣見うけられ候。大學は月給とりをこしらへて夫で威張つてゐる所の樣に感ぜられ候。月給は必要に候へども月給以外に何にもなきものどもごろ〳〵して毎年赤門を出て來るは教授連の名譽不過之と存候。彼等はそれで得意に候。小生は頃日ヘーゲルが伯林大學で開講せし當時の情況を讀んで大に感心致し候。彼の眼中は眞理あるのみにて聽講者も亦眞理を目的にして參り候。月給をあてにしたり權門からよめを貰ふ樣な考で聽講せるものはなき樣子に候。呵々

京へは參り候。京の人形御所望なれば御見やけに買つて參るべく候。どんなのが京人形やら實は知らぬにて候。京都には狩野といふ友人有之候。あれは學長なれども學長や教授や博士抔よりも種類の違ふたエライ人に候。あの人に逢ふために候。わざ〳〵京へ參り候。一力は如何相成るやわかりかね候。大坂へも參りて新聞社の人々と近付になる積りに候。昨夜はおそく相成。今日はひる寐をして暮し候。學校をやめ

たら氣が樂になり候。春雨は心地よく候　以上

三月二十三日

夏目金之助

野上豐一郎様

五二四

明治四十年三月二十三日　午後五時—六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

先日は御來駕手拭を御被り被下難有候。

偖ホト、ギス小說選拔の件は當分むづかしく御座候。正月に執筆の事はどうなりますやら、小生が朝日へ書き得る分量次第かと存候。是はあらかじめ御約束もむづかしかるべきか、とも角も出來得る限りホト、ギスの爲めに御用を務める事に致すべく候　以上

五二五

明治四十年三月二十七日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろの七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓印氣壺の模樣わざ〳〵御寫し被下難有存候。篆字の義は別段よきもの無之　王維の日落江湖白潮來天地靑抔如何かと存候然し十字にて足らぬならば是非なく候。石闌斜點筆桐葉坐題詩もよろしかるべくか。

明朝出發京都へ遊びに參り候故よき句も考へ得ずことによれば彼地より御一報可致候　以上

三月二十七日夜

夏目金之助

橋口清様

五二六

明治四十年三月三十一日　午後四時―五時　京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏内より芝區三田三丁目八番地七海方野間眞綱へ

拜啓御書拜見鹿兒島は御斷はりの由唐津をきゝ合せる事は容易なれども先日岩田氏よりの來書にては只今ある學校の教師と交換問題進行中のよしなれば如何にや兎に角照會して見るべく候當地寒く見物にいそがしく候皆々へよろしく先は用事迄　艸々拜具

三十一日　　　金之助

眞綱様

五二七

明治四十年三月三十一日　午後四時―五時　京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏内より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓京都へ參候　所々をぶらつき候　枳殼邸とか申すものを見度候　句佛へ御紹介を願はれまじくや　頓首

三月三十一日　　　金

虛子先生

五二八

明治四十年三月三十一日　午後四時―五時　京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏内より本郷區西片町十番地ろノ七號夏目氏内小宮豊隆へ
〔封筒の表に「東京本郷西片町十ロノ七夏目金之助様方執事御中」とあり、裏の署名には「京わけ人」とあり〕

京都は寒く候加茂の社は猶寒く候糺の森のなかに寐る人は夢迄寒く候

　春寒く社頭に鶴を夢みけり

高野川鴨川共に磧のみに候

　布さらす磧わたるや春の風

詩仙堂は妙な所に候。銀閣寺の砂なんど乙なものに候。智恩院はよき所に候。祇園の公園は俗に候。清水も俗に候
見る所は多く候
時は足らず候
便通は無之候
胃は痛み候
以上

三月三十一日　　　　　　　　　　　　　金

五二九

明治四十年四月三日　午後三時―四時　京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏内より東京府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ

〔はがき〕

御手紙拜見家の事御親切に御知らせ被下難有候序の折御留置願候毎日見物の爲め忙殺せられ長い手紙もかけず是にて御免蒙り候

四月三日

五三〇

明治四十年四月十二日　午後三時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏方菅虎雄氏へ　〔はがき〕

無事只今歸京滯在中は色々御世話に相成候來年あたりは二萬五千圓持つて迎ひの爲め參上可仕候　以上

十二日午

五三一

明治四十年四月十二日　午後三時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區三田三丁目八番地七海方野間眞綱へ

貴君の手紙は京都にて拜見致候夫より直ちに岩田氏へ手紙にて聞き合せ候處野間は當分囑托にてくるや又報給はどの位の希望なるやとの電文に接せし故本官にて千圓を望む旨返電せし處別紙の通返事參り候へども至急を要する事にも無之故今日迄手元にとめ置候。今日午前歸京致し候につき不取敢右同封にて入御覽候先は右用事かた〲御報迄　草々頓首

四月十二日

夏目金之助

野間眞綱様

五三二

明治四十年四月十二日　午後三時—四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

留守中に唐茄子のの〔原〕へた澤山難有存候小生今十二日午前歸宅致候ちと御遊びに御出可被成候
　京人形の一寸ほどのものを買ひ求め候

五三三

明治四十年四月十二日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稲田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓朝日新聞入社に就ては色々御厚志を蒙り御心切の段深く奉鳴謝候
其後池邊と相談略調ひたる上去月二十八日京都表へまかり越し夫より大阪朝日の鳥居氏に面會の上遂に大阪に赴き社主及び幹部の人々と大阪ホテルにて會食の後翌日再び京都へ立ちもどり昨十一日迄處々見物の上今十二日歸京致候今回の事はもと大阪鳥居氏の發意に出で夫より東京にて大兄の奔走にて三分一以上成就致候事と信じ居候御禮の爲めまかり出で可きの處そこは例の通りの無精にて手紙を以て代理と致し候先は右御禮旁成行御報迄いづれ其うち拜眉の節萬縷可申述候　以上　〔うつし〕

四月十二日　　夏目金之助

白仁三郎様

五三四

明治四十年四月十二日〔?〕 東京市本郷区駒込西片町十番地ろノ七号より京都市外下鴨村二十四番地狩野亨吉氏方野間真綱氏へ 〔はがき〕

一滞在中は色々御世話になりました何か御礼を致したいが謹厳なる清教徒に対しては悪魔も施すべき方法無之先づ端書丈にて御免蒙り候

四三五

明治四十年四月十四日 午後一時—二時 東京市本郷区駒込西片町十番地ろノ七号より京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏方菅虎雄氏へ

拝啓叡山の植物大に元気よく此方にては夏期上京の節進呈仕る事容易ならんと存候中にも叡山菅は尤も園満に生成の模様今でも五六圓の価格は有之べきか（?）

今日狩野に面会致し候処君帰京後病気にて臥床せる由苦々しき事に候。然し今はもはや全快の由に候。時に小生出立の夜御地にては種々御馳走の由妙な事と存候小生の立つた晩に泥棒に這入る抔とは余程小生を見縊びりたる泥棒と存候

先は御礼まで　草々頓首

十四日

金之助

虎雄様

野明さんへよろしく御傳声願上候。大阪朝日はもはや送付無之と存候へどもよし参り候とも御送に不及候間左様御話し有之度候

五三六

明治四十年四月十九日 午後一時―二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内清孝氏へ 「はがき」

拜啓本牧の繪葉書難有拜見濱武は寫眞をくれました小生は學校をやめたから是から落付たら少し閑が出來るだらうと思ひますさうしたら御邪魔に出ます

五三七

明治四十年四月十九日 午後一時―二時 本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓もしや西京より御歸りにやと存じ一書奉呈致し候近頃高等學校二部三年生にて美文をつくり之をホト、ギスへ紹介してくれといふ人有之一應披見致候處中々面白く小生は感服致候乍毎度貴紙上を拜借致し度と存候が如何にや來月分に間に合へば好都合と存候

京の都踊萬屋面白く拜見一方に於ける漱石は遂に出ぬ樣に存じ候少々御恨みに存じ候漱石が大に婆さんと若いのと小供のとあらゆる藝妓にもてた小説でも寫生文でも御書き被下度と存候近來の漱石は色の出來ぬ男の樣に世間から誤解被致居り大に殘念に候　以上

四月十九日

金之助

虛子庵

座側

五三八

明治四十年四月二十四日　午後八時—九時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地內海方野上豐一郞へ　〔はがき〕

小說の批評は君のよし僕は四月の小說を讀んで居らんから是非は一向分らん。惡口の程度はあの位で澤山と思ふ。僕少々小說をよんで是から小說を作らんとする所也愈人工的インスピレーション製造に取りかかる。

花食まば鶯の糞も赤からん

五三九

明治四十年五月四日　午後零時—一時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地內海方野上豐一郞へ　〔はがき〕

七夕さまは「緣」よりもずつと傑作と思ふ　讀み直して驚ろいた。燈籠を以て着物を見に行く所は非常によい。末段はあれでよろし

五四〇

明治四十年五月四日　午後零時—一時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　〔はがき〕

七夕さまをよんで見ました、あれは大變な傑作です。原稿料を奮發なさい。先達てのは安すぎる。

五四一

明治四十年五月四日　午後零時—一時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　〔はがき〕

花瀨川はものにならず傳四先生何を感じて此劣作をなせるか怪しむべし

五四二

明治四十年五月十二日　午後四時―五時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より橫濱市根岸町三千六百二十二番地久内淸孝氏へ

先日は結構なものを難有頂戴致しました。拙著文學論一部御禮に其内差上ます。校正者の疎漏の爲め非常に誤植多き故訂正表を添へて上けます

五四三

明治四十年五月二十七日　午前九時―十時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大森八景坂上杉村氏内中村蓊へ

今日は上野をぬけ淺草の妙な所へ散步したらつい吉原のそばへでたから丁度吉原神社の祭禮を機として白晝廓内を逍遙して見たが娼妓に出逢ふ事頻りなり。いづれも人間の如き顏色なく悲酸の極なり。歸りがけにある引手茶屋の前に人が黑山の如く寄つて居るので覗いて見たら祭禮の爲め藝者がテコ前姿で立つて居た。夫が非常に美しくて人形かと思つて居たら、ふいと顏を上げたので矢張り生きて居ると氣がついた夫から橋場の渡しを渡つて向島へ行つたら藤棚があつて其下の床几に毛布が敷いてあつたから、そこで上野から買つて行つた鯛飯を食つて晝寐をして、うちへ歸つたら君の長い手紙が來てゐた。

あの手紙をよんでいつぞや君が僕の文學論の序に同情してくれた事を思ひ出して成程と其意味が分つた。僕はあんな序をかく積りではなかつたがある事情で書く事に決心してしまつた。あれに對して同情してくれる君は恐らく僕よりも不愉快な境遇であつたかも知れない。君の手紙で君の家の事抔も判然して見るとかへつて僕の方から同情を寄せねばならんと思ふ。甚だ御氣の毒である。然し世の中にはまだ〳〵苦しい

連中が澤山あるだらうと思ふ。おれは男だと思ふと大抵な事は凌げるものであるのみならず、却つて困難が愉快になる。君抔もこれからが事を成す大事の時機である。僕の様に肝心の歳月をいも蟲の様にごろごろして過ごしては大變である。大に勇猛心を起して進まなければならない。抔と講釋を云ふのは野暮の至である。世の中は苦にすると何でも苦になる苦にせぬと大概な事は平氣で居られる。又平氣でなくては二十世紀に生存は出來ん。君も平氣に大森から大學へ通つて居るがよからうと思ふ。

君が中川の序文を訂正したのを見た學生が最後の所を讀んで痛快だと云ふた。中川は必ずしも傲慢不遜といふ男ではないのだらう。只日本文をかきつけないから、あんなものが出來たのだらう。僕は序に對しては君程苛酷な考は持つて居らん。右御返事迄　匆々

五月二十六日夜　　夏目金之助

中村蓊様

將來君の一身上につき僕の出來る事ならば何でも相談になるから遠慮なく持つて來給へ。尤も僕の出來る範圍は極めて狹いものである。

五四四

明治四十年五月二十九日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より熊本市内坪井町百三十七番地渡邊太一郎氏へ

新緑の候愈御清適奉賀候其後は打絶頓と御無沙汰に打過候處忽然芳音に接し感謝此事に御座候御地學校改革後諸事復舊當分御無事結構の至に存候公退後は灌花栽培の御樂もある由閑適の餘事風流欣羨の至に候。

小生大學退職後小說家と相成り講義の必要もなく又高等學校の調の爲めセンチユリーの厄介になる事もなくなり心中大に愉快に候。只今の住居前後にいさゝかの庭園あり四時の眺めと申す程の事も無之候へども時々矚目遣悶の花樹も數種有之多少は得意に候。人生五十流轉のうちに殘喘を託し候身のいつ何時いづ方へ轉居致し候やも計りがたく昔の人は一戶を構へたるを一人前の證據の如く言ひ囃し候事あながちの弊にも有之間敷か。

日々書齋にて讀書冥想ひる寐も折々致し候。然し夫から〳〵と雜用出來心事は存外等閑ならず候御察し可被下候。小兒も見る間に成長致候何となく後ろか〔ら〕追ひかけられる樣に覺え候。早く何事かして死にたく候。一日が四十八時間になるか、腦が二通り出來るかいづれにか致し度候。去りながら半世の鴻爪全く是癡夢にひとしく此儘枯木と相成候とも苦しからずそこへ行くと頗るのん氣に候。

右偷寸閑近況御報迄に御座候　草々不一

五月二十九日　　夏目金之助

奥　　樣

御令閨へよろしく御傳聲願上候

五四五

明治四十年五月二十九日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込西片町十番地反省社内瀧田哲太郎氏へ

御手紙拜見實は昨日金尾が來て十八世紀文學出版の禮を云ふて瀧田君か野上さんと一所にやりたいと云

ひますがどうでせうといふから夫もよからうと云ふたら立派なものが出來ますかと聞いたから夫は受合へない。自分のものは自分がやるより外にうまく出來る筈がない。ことに二人や三人でやつては却つていけまいと云ふた。夫から可成は一人でやるがいゝだらうと附加した。すると金尾の云ふには瀧田君はとても一人では出來ますまいと云ふた。僕答へて瀧田君は文章に達者だが専門が法律家だからあの講義のうちのある所は面倒かも知れないと答へた。それでは外に人はありませんかときいたから、人はいくらでもあるが、瀧田君が持つて歸つたものだから、まあ瀧田君に相談して見たらよからう、瀧田が進んでやるのが面倒ならば森田にでも頼んだらやつてくれるだらうと云ふた。話は夫れぎりで分れた。金尾はもう出版する積りで廣告抔の事迄云ふて歸つた。

　僕は君が十八世紀文學を書き直すに就てどの位の興味を有して居るか知らぬ。又それを家計上のたすけにする必要あつての事とも知らぬ。夫故以上の如き返事をして置いた。君と金尾の間の面白くない事も全く知らなかつた。金尾は其事に就て一言も云はなかつた。

　右の譯である以上はたとひ金尾から十八世紀を出すにしても君がやらなくては少し君として面白くない事になるだらう。金尾からもし君の所へ相談に來たら夏目さんと相談した上返事をすると云つて歸し玉へ。

　右の出版に關しては君の都合のいゝ樣又僕の都合のいゝ樣に相談をするから出來るなら木曜に來てくれ玉へ尤もいそぐ事でないから君さへよければいつでもよろしい。金尾の方へは適當な人を見付ける迄は廣告其他見合せる樣に云ふてやる

　金尾と君の關係は僕が口を出してよいかどうか分らない。君を無報酬で使ふ積でもないだらう。君が關係をつける時に月々の報酬をどの位ときめて、それを拂はぬなら不都合の至である。

　君の一分が立つ樣に金尾にかうつけ加へてやる。「十八世紀文學は瀧田君との關係上から同君に對する

好意上許諾をしたものだから向後の談判は出版の手續に至る迄契約書をとり更す迄はすべて同君を經て御協議を經度く候」

委細は御面語の上虞美人草は廣告丈で一向要領を得ない人がくる用事が出來る。どんな虞美人草が出來る事やら思へばのんき至極のものなり　匆々不一

五月二十九日　　夏目金之助

瀧田樣

追白　手許に十圓ばかりあり。御不如意の由なれば失禮ながら用を辨ぜられ度し。御返濟は卒業して金がウナル程出來た時でよろし。御母上の御病氣御大事と存候。試驗には是非共及第する程に勉强可被成候

五四六

明治四十年五月三十日　午後四時―五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より京都市外下加茂村二十四番地狩野亨吉氏方菅虎雄氏へ　〔はがき〕

文學論が出來たから約束により一部送る。校正者の不埒な爲め誤字誤植雲の如く雨の如く癇癪が起つて仕樣がない。出來れば印刷した千部を庭へ積んで火をつけて焚いて仕舞いたい。

五四七

明治四十年五月三十一日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より横濱市根岸町三千六百二十二番地久内淸孝氏へ　〔「文學論」正誤表の最後の頁に〕

誤あまり」

先日は御出のよし失禮致候。御約束の文學論差上候。小包にて御落手被下度候。是は正誤表に候。古今獨步の誤植多き書物として珍本として後世に殘る事受合なれば御祕藏被下度候

五月三十一日　　　　夏目金之助

久内淸孝様

五四八

明治四十年六月四日　午後五時—六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

廣　告

今日から愈虞美人草の製造にとりかゝる。何だかいゝ加減な事をかいて行くと面白い。

僕の顔を高等官一等とは恐れ入つた。どうか猫をかく樣な顔付に生れたいものだ。金子堅太郎君は親任官であつたかな、君。金堅君を下る事一等の顔になつちまつた。ほめられたつて感謝は出來ない。

五四九

明治四十年六月四日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ　〔はがき〕

拜啓愈御結婚の由恭賀候。實は五六日前結婚をするものがきて其あとへすぐ君の手紙が來たので間違へて名宛を野上豐一郎として御祝狀を出した。失敬々々。小生今日より虞美人草の製造にとりかゝる當分行

かれぬ其うち行く

五五〇

明治四十年六月十七日　午後八時—九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區[illegible]町[illegible]内松根豐次郎へ

御手紙拜見長い手紙をかく餘裕がない毎日虞美人草の事ばかり考へてゐる今日社から原稿をとりにくる九十七枚わたした。

折角苦心してかいた所もあとから讀み直すと何だこんなものかと思ふ事多し。つまらない。

當分は君にも逢へない。リースの子が僕の作物をよんでくれるのは難有い。僕の妻なんか天で僕の作には手をつけない。どうも婦人には苦手の樣だ。紫影先生原稿出版の義御斷はりの趣承知不得已事と思ふ其旨先方へ通知致すべし。赤ん坊は中々大きい由無暗に大小兒を生んで國家に貢獻する所もなく心細い事なり

先は用事のみ　草々

六月十七日夕

金

豐次郎様

五五一

明治四十年六月二十一日　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

御手紙拜見

君はウーンと云つて還つて呉れたからいゝが大概はうんとも何とも云はず這入つて來る。

虞美人草が出來る迄謝絶と思ふたが中々前途遼遠いつかき了るか分らない。かき上げた時は嘸愉快だらう。今では小說が本業だからいつ迄かゝつても時間は惜しくない。例の通り急行列車に乘る必要がなくなつた代りに書物をよむひまがなくなるだらうと思ふ。

七々子さへ感服して呉れたのはうれしい。滿田樗陰書を三重吉に寄せて曰く夏目先生があんなものをほめるに至つては聊か先生の審美眼を疑はざるを得ずと。樗陰はあれを淺薄といふさうだ。樗陰は二三日中君の所へ來訪の筈よく說諭して呉れ玉へ。あれは北國で仙臺萩ばかり食つてゐたからそんな事をいふのだらうと思ふ

生田先生は正に二十圓を拉し去る。言譯に曰く飲んだんではありませんと。

其他の諸君子を見ざる事久し。豐隆時々臺所に來る。明日歸るさうなり。昨日中村蓊來る。寫眞をくれといつて持つて行く。第二義の顏を方々へ進呈して甚だ不平なり。君雲右衞門なるものを聽いたかい。

六月二十一日　　金

米松先生

五五二

明治四十年六月二十一日　午後（以下不明）　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より本鄕區駒込千駄木町二百二十六番地幸川方鈴木三重吉へ

本日虞美人草休業。肝癪が起ると妻君と下女の頭を正宗の名刀でスパリと斬つてやり度い。然し僕が切腹をしなければならないからまづ我慢するさうすると胃がわるくなつて便秘して不愉快でたまらない僕の

妻は何だが[原]人間の様な心持ちがしない。

中學世界での評なんかはどうでもよし知人を雇ふて方々の雜誌に稱贊の端書を送つたらよからうと思ふ

六月二十一日　　金

三重吉様

五五三

明治四十年六月二十四日　午後六時―七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ

拜啓一寸御願が出來た又面倒な例の文學論の事だが。あの中に肯定と否定の間違が四五ヶ所あつて普通の誤植とは思へぬ程念の入つたものであるにより。大倉を以て秀英舍へ掛合つた所。秀英舍は責任なしと威張つて居る由。僕よつて之を朝日新聞紙上に於て筆誅せんと欲するに就ては例の虞美人草祟りをなして筆を執る事面倒なり。どうか君僕の代りに書いてくれ玉へ。間違の箇所は僕の所にわかつてゐるから序でに來て見て呉れ給へ　御願頓首

二十四日　　金

三重吉様

五五四

明治四十年六月二十六日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ（はがき）

今日瀧川先生がわざ〳〵きて君の投書を歡迎すると云ふて來た、然し都合によると六號にする由、但し侮るべからざる六號にする由。僕は何とも云はなかつた。然し出してやつてくれ給へ

五五五

明治四十年六月二十六日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百六十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

御手紙拜見毎日かいたりかゝなかつたり。人が來たりする。面會謝絶にも拘らず呑氣なり。虞美人草をよんでくれて難有い。八重子さんにもよろしく。八重子さんにはオースチンは面白くないかも知れない

五五六

明治四十年六月二十七日　午前八時―九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百六十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

君此つぎ國民へ短かいものをかくなら其代りにうちの新聞へ書いてくれ玉へ。

梅雨はげしく降つて中々佗びしい。小説をやめて本がよみたい

五五七

明治四十年六月二十七日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ

御手紙拜見君の事をほめる手紙を谷山舍監にやる傳四觀は論文としてはひまが入るけれども手紙ならぢき出來る御安い用なり一兩日うちに谷山氏へ出すつもりなり先生の名〔は〕初七郎かね一寸伺ひ度名前が間違ふと折角の傳四觀も信用がなくなる

六月二十七日

金

傳四先生

五五八

明治四十年六月二十八日　午前八時—九時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より本鄕區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ

拜啓朝日新聞の澁川玄耳氏より別紙の如き書面參り候につき可然御回答を與へられ度候。（京橋區瀧山町四番地朝日新聞内澁川柳次郎宛）本宅ならば麴町區隼町四番地）〔原〕

右用事迄　匆々

六月二十七日　金之助

三重吉様

五五九

明治四十年六月二十九日　午前八時—九時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彥へ　〔はがき〕

晩は大抵散歩夫からは日によると休業。尤も日中でも頭と相談の上時々休業仕候。段々暑くなると小説をかくのが厭になる

六月二十九日

先達ては奧さんがわざ〳〵難有うつい御禮を忘れて居た

五六〇

明治四十年七月二日　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

先日は失敬

一寸行きたいが愚圖々々して居る。僕うちの新聞で醫學上の事を簡易に書く人を周旋してくれといふが君の弟に聞いて呉れぬか。是は社員といふ譯ではない投書をしてくれゝばよいのである。原稿料は出すさうである

七月二日　金

虎雄様

五六一

明治四十年七月三日　午前十時—十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ

昨日君の長信が來た久々で國へ歸つて大持ての事羨望々々途上の繪端書は一々落手多謝。今頃は九州は嘸暑い事だらうと思ふ西片町も中々あつくなつた。蚊帳をつる。大きな蚊帳で一人で寐るのは勿體ない。來客謝絶にも不關時々御來臨。臼川、三重吉、諸先生健在、朝日へ何かかくなら書かぬか。

御母さんと御婆さんの御機嫌をとつて大事にせんとわるい。後世が大事だ。冥罰がおそろしい。僕漫然たり。臼川天笠牡丹なるものをくれる。文學論二版御蔭にて出來深謝。十八世紀は撈陰森田雨君に依賴する事となれり。坪内先生來訪早稻田へこいとの相談である。評判によれば慶應義塾へも行くさうだ。近々

一萬圓で家を建てるさうだ。小供がシツチかいて困る。中央公論を約束したがまだ見ない。[原]公告には筑水君の「文學論に因みて」が出て居ない。或は送らんで濟むかも知れぬ。竹風君の評は新小説に出た。是はそちらで買へるだらうから送らない。小說は中々進行しない。暑いと中止したくなる。
君の手紙は色女が色男へよこす樣だ。見ともない。男はあんな愚な事で二十行も三十行もつぶすものぢやない。
久しく靴屋の娘を見ず。あれはめかけの由。是から又虞美人草をかく。

七月三日朝九時　　金

豐隆樣

五六二

明治四十年七月五日　午後二時―三時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地幸川方鈴木三重吉へ　〔はがき〕

駒込上富士前町五番地（王子通岩崎別莊向横町右入）に貸家あり。廣瀨といふ人の所有僕に貸したいと云ふ序の時散歩でもしたら見て呉れ給へ。家の向を知らず圖面は見たり

五六三

明治四十年七月八日　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ　〔はがき〕

枇杷到着難有候。何か上げやうと思ふが何がいゝか分らんうちに君が東京へ歸るだらう。面會謝絶でも毎日面會してゐる。昨夜藤戸を謠つた。中々うまい。謠を再興しやうかと思ふ

五六四

明治四十年七月八日　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ〔はがき〕

近頃の讀賣に君の事がよく出るね。御用心。虞美人草の御批評拜受。善くても惡くても本當に讀んでくれゝば結構。僕ハウチノモノガ讀マヌウチニ切拔帳へ張込ンデシマウ。ワカラナイ人ニ讀ンデモラウノガイヤダカラデアル

五六五

明治四十年七月八日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ

拜啓高松中學の件承知致候昨今の場合或は御赴任可然やとも存候然し愈となれば地方行は御見合せを希望す。明治學院五〇では到底暮しがたかるべくことに妻帶の上は子供も豫算に這入る事故何とか工夫を要し候小生も種々考へては居れど別に名案も無之自分で世話も出來ぬものを無理に東京に引きとむるも不都合の至故其邊は是非なきかと存候新聞の方も聞き合せる事は容易なれどあの事業は少々明快なる頭腦と敏捷なる手腕を要し且つ外國電報抔は夜十二時過迄は社に殘らねばならず而して必竟するに第二流の新聞記者たるを免がれず考へ物に候。君に今少し覇氣があり野心があれば結構夫でなくても今少し活氣があり精根があればよろしからんも君の樣にてはあとで困るかも知れず。然しよく考へてやつて見る氣なら紹介は喜んでする積故遠慮なく申來らるべく候外國電報主任弓削田精一といふ人は正直にて一本氣の至極よき人間に候かゝる人に就て電報の修業をするは仕合せとも存候朝日には妙な人間居らず池邊を始め皆立派な男と信ず。小生は二名ばかり周旋したり。白仁も這入る。然し白仁はそんなに月給を餘計にもらうまじ中

村翁も入社の筈是も白仁と同斷なるべしもし不時の入用抔にて差當り困難の時は少しの都合はつく積りなり遠慮なく申來らるべく候先は御返事迄　匆々頓首

七月七日　　　　　　　　　　　　　　　金

眞　鍋　樣

五六六

明治四十年七月十一日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ　〔はがき〕

其後動靜如何當地存外凉氣にて例年より凌ぎよし小說脫稿次第北の方へ遊びに行かうかと思ふが。いつ脫稿する事やら分らず。ビハは小供が喜んでたべた。三重吉が時々くる

五六七

明治四十年七月十一日　午後十一時—十二時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内藤方野上豐一郎へ　〔はがき〕

君のくれた天笠[原]牡丹が今日の雨で落ちて仕舞つた何だか淋しくなつた。今度の日曜には人がくるかも知れぬ君もひまなら來給へ

五六八

明治四十年七月十二日　午前九時—十時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田鶴卷町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓京都より御歸りの由每日出社御精勤の事と存候。小生一昨十日總務局より臨時賞與として五十圓貰

へり。定めて入社當時に話しのあつた盆暮の賞與の意味なるべし。夫ならば大分話が違ふ。始め君の周旋の時は一年二期に給料の二ヶ月分宛位といふ事であつた。其後愈となつたら弓削田氏より君への返事に言ふ所は先づ一ヶ月位との事であつた。僕が池邊氏にあつて最低額は一ヶ月分と定めて差し支なきやと質したる時氏は然りと答へられた。

僕は賞與がなくとも其日には困らぬ。又實際アテにもする程の自覺もない。然し貰つて見るといやである。金の多少でいやといふよりは池邊、弓削田兩君の如き君子人が當初の條件を守られぬといふ事がいやである。

入社の日が淺いから今年は出さぬといふなら辯解になる。同上の理由で今年は少ないと云ふなら尤である。

以上の理由は誰からもきかぬ。只一个で、しか解釋すべきものか。

受取つた五十圓は難有く頂戴する。返却は仕らぬ。不足だからもつと餘計くれとも云はぬ。只事實は條件を無視してしかも一言の辯解に伴ふて居らんといふ事を、入社の周旋をしてくれた君に參考の爲め申し送る。

池邊弓削田兩氏は君子人なれば此邊の消息は知らぬ事なるべし。知つても當初の事は忘れたるなるべし。いづれにても故意ならぬ所作ならば介意するに及ばず。序での節兩君の存意を確められたし。

小生が朝日に對してなし得る事は微少なり五十圓にも當らず。只それは入社の條件とは別問題なり。是は誤解なきを祈る。

虞美人草はまだ片付かず。いつ果つべしとも見えざりけり　以上

七月十二日

夏目金之助

白仁三郎様

五六九

明治四十年七月十二日　午前十時―十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ〔はがき〕

あの謎は謎として解かない方が面白い。凡ての謎は解くと愛想が盡きるものである。神祕をやさしい言葉デ言ふと上品トナル

五七〇

明治四十年七月十二日　使ひ持參　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒氏へ

拜啓　一寸出る筈ですが出ると長くなつて御邪魔になりますから手紙で用を辨じます

あなたの萬朝へ御書きになつたものを岡田さんの方が先へ出るとすればあまる事だらうと思ひまして朝日の方へ話しをしたらもし五十回以上百回位迄のものなら頂戴は出來まいかと申して來ました是は虞美人草のあとへ四迷先生の短かいものを出して其次に出す計畫の由です

萬朝の方が御都合がつけばこちらへ廻して下さいませんか　以上

七月十二日

金之助

大塚御奥様

五七一

明治四十年七月十三日　午後三—四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區早稻田南町鶴巻町一番地坂元（當時白仁）三郎へ

拜啓御多忙の處をわざ〳〵池邊氏を御尋ね御返事を御聞き被下難有候
御申越の理由詳細判然承知致候
六ヶ月以内のものが貰はぬが原則ならば小生の貰ふたのが異數なるべし。深く池邊氏の御注意を謝す。
池邊君に御面會の節は小生が御尤もと納得したる上同君の御好意を感謝しつゝある旨を傳へられたし
ことに君が此件につき御奔走の勞を謝す。
晝者に御通ひ中のよし御病氣なるや大事にせられたし　以上

七月十四日　夏目金之助

白仁三郎様

五七二

明治四十年七月十六日　午前八時—九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高濱清氏へ

啓　松山へ御歸りの事は新聞で見ました。一昨日東洋城からも聞きました。私が弓をひいた垜がまだあるのを聞いて今昔の感に堪へん。何だかもう一遍行きたい氣がする。道後の溫泉へも這入たい。あなたと

一所に松山で遊んでゐたら暢呑氣な事と思ひます

大内旅館についての多評は好景氣の樣也三重吉は大變ほめてゐました。寅彦[原]も面白いと云ひました。そこへ東洋城が來て三人三樣の解釋をして議論をしてゐました。小生はよく御其議論をきかなかつた。小生の思ふ所は。大内旅館はあなたが今迄かいたものゝうちで別機軸だと思ひます。そこがあなたには一變化だらうと存じます。卽ちあなたの作が普通の小說に近くなつたと云ふ意味と。夫から普通の小說として見ると大内旅館がある點に於て獨特の見地（作者側）がある樣に見える事であります。詳しい事はもう一遍讀まねば何とも云へません。とにかく色々な生面を持つて居るといふ事はそれ自身に能力であります。御奮勵を祈ります。

五六日前一寸何を考へたか謠をやりました。一昨日東洋城が來た時は滅茶々々に四五番謠ひました。ことによつたら謠を再興しやうと思ひます。いゝ先生はないでせうか。人物のいゝ先生か。藝のいゝ先生か。どつちでも我慢する。兩者揃へば奮發する。虞美人草はいやになつた。早く女を殺して仕舞たい。熱くてうるさくつて馬鹿氣てゐる。是インスピレーションの言なり。　以上

七月十七日[原]

虛　先　生　　　　　　　　　　　　　　　　金

五七三

明治四十年七月十六日　午前八時—九時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町百二十番地行德俊則氏へ　〔はがき〕

啓朝日新聞件先方へ通知致候處主任澁川柳次郎氏（麹町區隼町四）御面會申度由につき乍御面倒御出向

願度候。毎朝八時迄ならいつでも在宅とあり

五七四

明治四十年七月十九日　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より相模國鎌倉長谷大塚楠緒氏へ

拜啓金尾文淵堂であなたの萬朝に出る小說を頂いて本にしたいと申ます夫で此男があなた〔に〕紹介してくれと申ます御迷惑でなければ一寸逢つてやつて下さい　以上

七月十九日　　金之助

大塚楠緒子樣

五七五

明治四十年七月十九日　午後八時―九時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

手紙が來たから一寸返事をあげる。東京は雨で毎日々々鬱陶しい其代り頗る凉しくて凌ぎいゝ。大井川が切れて〔原〕滊車が通じない郵便が後れる事と思ふ。叡山で講話會をやるから出てくれと云ふて來た。多分出ない事。ひまが出來たら北の方へ行く三重吉も行くと云ふ

虞美人草は毎日かいてゐる。藤尾といふ女にそんな同情をもつてはいけない。あれは嫌な女だ。詩的であるが大人しくない。德義心が缺乏した女である。あいつを仕舞に殺すのが一篇の主意である。うまく殺せなければ助けてやる。然し助かれば猶々藤尾なるものは駄目な人間になる。最後に哲學をつける。此哲學は一つのセオリーである。僕は此セオリーを說明する爲めに全篇をかいてゐるのである。だから決して

あんな女をいゝと思つちやいけない。小夜子といふ女の方がいくら可憐だか分りやしない。——虞美人草は是で御仕舞。

金子筑水の議論は念の入つたものではない。昨日上田柳村君が來て文學論について云々して去つた。大塚は眞面目に讀んで呉れて批評をしにやつて來た。博覽會へ行つて water シユートへ乘らうと思ふがまだ乘らない。伏見の宮さまが英國で大歡迎だと云ふ話である。僕は英國が大嫌ひあんな不心得な國民は世界にない。英語でめしを食つてゐるうちは殘念でたまらなかつたが昨今の職業は漸く英語を離れて時々した。所が早稻田と慶應義塾で敎師になれといふて來た。食へなければ狗にでもなる。英語を敎へるのはワンワンと鳴く位な程度であるからいざとなればやる積であるが、虞美人草の命があるうちはまづ御免蒙る。朝鮮の王様が讓位になつた。日本から云へばこんな目出度事はない。もつと强硬にやつてもいゝ所である。然し朝鮮の王様は非常に氣の毒なものだ。世の中に朝鮮の王様に同情してゐるものは僕ばかりだらう。あれで朝鮮が滅亡する端緒を開いては祖先へ申譯がない。實に氣の毒だ。朝日新聞の湯島近邊といふのを讀んで御覽。ああ云ふ小說もかいて好いと云ふ御許しが出ると小說家の氣も大きくなる。僕もまだ二三十年は英語を敎へないでどうかかうか飯が食へさうだ。

惡緣で英語を習ひ出したが是から可成英語を儉約して獨乙と佛語にしたいと思ふ。先づ獨乙を君に敎はりたい。夏休み以後は少しやつてくれ玉へ。　以上

七月十九日　　　　金

豐隆樣

五七六

明治四十年七月二十日　午前十時―十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金台町二丁目八十一番地野間眞綱へ

昨夜散歩から歸ると君の名刺があつて三省堂の事も書いてあつた。毎日あの方へ參る由夫で學校以外の收入も多少はあるとの事安心致し候　西國の方は御斷りの趣是亦承知致候字引事業はいつ頃迄つゞくものにや字引が濟んでも似た樣なものが出て來さうに思ふが如何

毎日雨にて鬱陶しい然し仕事をするには涼しくて却つてよろし。皆川には其後逢はず。小說はまだ書き了らず氣の長い事驚ろくべし。胃はよろしからず。旅行が致したし。昨日から大塚さんの小說が萬朝に出るから見てゐる。朝日に湯島近邊といふのがある。是もよんでゐたが二三行よむと何がかいてあるかすぐ分る。簡便でよい小說である。十八世紀文學の講義を金尾で出したいといふから承知した。森田、滿田兩君が書き直してくれる筈。此年は無暗に書物ばかりこしらへる。而して今日の「國民」にある如く五割の印稅をとつたら僕も今頃は一萬圓のうち位買へるだらうに。　以上

七月二十日　　　　　　　　　　金

眞綱　樣

五七七

明治四十年七月二十日　午前十時―十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込千駄木町二百三十八番地寺川方鈴木三重吉へ

君は何を思つたか深夜頓首して手紙をよこした。さうして内容は僕に會つた時と別に變つた事が書いて

ない。妙だよ。豐隆子が長い手紙をよこした。米を賣つて仕舞へといつて婆さんに叱られたとある。其癖婆さんから相談を受けたのださうだ。是は愈妙だよ。小說は中々氣が長いから僕も困る君も困る。八月になつたら早速出掛給へ。僕もし出來得べくんば君のゐる所へ廻つて行く。然らずんば何でもどつかで待ち合せる。然らずんば僕がどうしても東京を出られなくなつて君は一つ所にぶら下がる。是は大に氣の毒だが、今日の形勢を案ずるに或は西片町を去る事が出來ぬかも知れない。何しろ急行小說はやめたんだから。だら〳〵虞美人でいつ迄引張られるか自分にも見當がつかない。もしかうなると違約になる甚だ御氣の毒だ。さうなつたら二三日でもいいから君と前約履行のかたでどつかで遊ばう。僕近來ズルクなつて（廣島の意味）困る。何でも急がぬ方針だ。而して方針も何もない。生きてゐて、食つてゐて、而し〔て〕漫然たり　以上

七月二十日　　金

三重吉樣

五七八

明治四十年七月二十一日　午後二時―三時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より本鄕區駒込千駄木町二百三十八番地寺川方鈴木三重吉へ　〔はがき〕

漱石山房といふ印が俗でいやになつたひまが出來たら一人でもつとうまい奴を刻つてやる。昨夜は失敬

五七九

明治四十年七月二十一日　午後三時―四時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地內海方野上豐一郞へ　〔はがき〕

今日の讀賣に正當防禦と題して早稻田の人が君を攻撃してゐる見玉へ。金儂君は何をかいたのか。何をかいてもあんな攻撃をするのは早稻田の若ィ人ダ

五八〇

明治四十年七月二十二日　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巢鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ

拜啓人の攻撃を攻撃しかへすときは面白半分にからかふ時の事なり。ひまが惜しければやるべからず。堂々たる攻撃には堂々たる辯駁を要す。是は惜しい時間を割いてやる事なり。
僕未だ新聞雜誌に出たものに對して辯解の勞をとりし事なし。そんな事をするひまに次の作物か論文をかく方が遙かに有益也。
あんなものに眞面目に相手になる位なら始からあゝ云ふ風な評論をかゝれぬがよろしからうと思ふ。
何かいふ事があらば駁論とせず。次の作物か論文のうちに充分君の主張を述べらるべし。夫が自分は自由の行動をとつてしかもくだらぬ世評に頓着して居らぬ事を事實に證明する所以と思ふ。
君は文を好む文を好めば將來かゝる場合多かるべし。皆この例にならつて決せられん事を希望す。
尤も暑中休暇故ひまがあるならいたづらにいくらでも喧嘩をなさるのも一興と思ふ。
しかし喧嘩をし出すと、相手次第で暑中休暇後迄もやる積でないと行けません。途中でやめちやいけない。まあ愚になるね。　以上

七月二十一日　　金

豐一郎樣

五八一

明治四十年七月二十二日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區笄町柳原邸内松根豐次郎へ〔はがき〕

今日ひるから來客で多忙鈴木は明日から房洲へ行く由淋しくなる。何か謠を稽古したくなつた。

此處發句をかく筈にてあけたが出來ない

五八二

明治四十年七月二十三日　午後八時—九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ

暑いのに牛込迄通ふのは難義だ抔といふのは不都合だ口を糊するに足を棒にして腦を空にするのは二十世紀の常である。不平抔をいふより二十世紀を呪咀する方がよい。夫婦は親しきを以て原則とし親しからざるを以て常態とす。君の夫婦が親しけ〔れ〕ば原則に叶ふ親しからざれば常態に合すいづれにしても外聞はわるい事にあらず

君の事を心配したからといふて感涙抔を出すべからず僕は無暗に感涙抔を流すものを嫌ふ。感涙抔を云云するは新聞屋が〇〇の德を讃し奉る時に用ひるべき言語なり

僕は君に世話がして上げたくても無能力である。金は時々人が取りに來る。有るものは人に借すが僕の家の通則である。遠慮には及ばず。結婚の費用を皆川の樣な貧乏人に借りるのは不都合である。

細君は始めが大事也。氣をつけて御し玉へ。女程いやなものはなし。

どこかへ遊びに行きたいが虞美人草をかいて仕舞ふ迄は動き度ない。

野村には一向逢はない。毎日客がくる。

君は氣が弱くていけない。一所になつて泣けば際限のない男である。ちとしつかりしなければ駄目だよ。頓首

七月二十三日　　金

眞　繩　様

五八三

明治四十年七月二十六日　午後八時—九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若犬若館鈴木三重吉へ

犬若館とかいふ所に御神輿を据ゑられたるよし。是は何でも僕が通つた所らしい。ことによると昔し宿つた所かも知れぬ岩のなかに彫り込んだ宿屋抔は頗る面白い

東京は甚だ涼しい。土用でも土用の感じがない東洋城が來てとまつて一日ごろついて謠を三四番歌つて歸つて行つた。其他色々な人がくる。十八世紀文學は金尾をやめて春陽堂にした。昨日服部の印税未納をしらべたら八百圓程ある。僕も中々寛大な著作家たるに驚るいた。服部も通知を受けて驚いたらう。勿驚印税八百圓といつてすぐ持つてくればえらい。あれは版權を大倉へ讓り渡してしまふ方が得策だ。僕も便利だ。

虞美人草はだら〱小説七顚八倒虞美人草と名づけて未だ執筆中

あまり潮風に吹かれると女が惚れなくなるにつきいゝかげんに御養生可然候　以上

七月二十六日　　夏目金之助

鈴木三重吉様

五八四

明治四十年七月二十九日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

暑中如何御暮し被成候事〔か〕と存候ひしに不相變御健勝の由大慶の至に存候下つて小生如例碌々乍憚御休神願上候。虞美人草御讀被下候よし難有存候小生もあれが爲め今年夏も依然多忙實ははやく切り上げて遊びにでも參り度と存候へども因果にて如何とも致しがたく弱り切り候。小説もかうだら〱では讀者より著作者の方が先へ參り候御憐笑可被下候いづれ其内拜眉萬々先は御挨拶迄　匆々

七月二十九日　　夏目金之助

大谷兄

文學論も御求め被下候由あの一版は大變な誤植に候もし御入用ならば正誤表一部可差上候

五八五

明治四十年七月三十日　午前十時—十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若犬若僑鈴木三重吉へ

啓口々御水浴結構に候。甲野さんの日記は毫も不自然ならず。甲野さんの日記は京都の宿屋の所に出てゐる。つまり其つゞきである。しかしてかゝる哲學者のかいた日記をぽツ〱引き合ニ出スノハアル意味ニ於テ甲野サンヲ貫ヌカシムル方便デアル。實ハ此ヤリ口ハ僕ノ創體デハナイ英ノメレヂスの作に屢此手

ダアル。僕ハ之ヲ踏襲シタト評サレテモ仕方ガナイ。

「すや御道入」と云ふ句はチツトモ可笑シクハナイ。アレヲ可笑シガルノハ分ラナイ。廣イウチデ銘々部屋ヲ持ツテゐる。母ノ部屋へ娘ガ行く。すや御道入ヨリ云ヒ様ガナイ。而シテ尤も母ラシイ言葉デアル此言葉デ母ラシイ所ガ直チニ出ル。君ハ廣島ダカラサウ云フ意味ニ聽キ慣レテゐナイノダラウ。アレハ實ハ最上等ノ句ダヨ。

ワルイ所ヲ摘發スルナラバモツト此方ガ閉口スル所ガ澤山アルノニ、アスコガ目につくノハ可笑イ。此小説ハノンキ小説トモ、ダラ〳〵小説トモ、又ハ七顛八倒小説トモ稱シテ容易ニ片ヅク景色ナシ。然シ毎日カク。

二三日非常ニアツクナツタ。妻君ガ六十圓デ紋付ガコシラヘタイト云フ。君ノ前ダガソンナモノハ要ラナイ樣ダネ。妻君ニシテ六十圓ノ紋付ヲコシラヘルトナ。僕モ薩摩上布ノ上等ヲ買ツテ向チ張ル積デアル。中川カラアヅカツテ居ル百圓ハ利子ノ勘定や何カ面倒デイケナイ。アレハ自分ノ名デ預ケ替タラヨカラウ。歸ツタラ君カラ話シテクレ玉へ。　以上

七月三十日　　　　　　　　金

三重吉様

且アノ日記ハ母子ノ間柄ヲ裏面カラアラハス故中野サンノ日記云々トカク方ガ切實デアルノデアル。

（此所巽軒口調ナリ）

五八六

明治四十年七月末〔?〕　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より大阪市南區天王寺上の町三千六百六十九番地武定鉉七氏へ　〔はがき〕

貴句拜見虞美人草御よみ被下候よしダラ／＼になりて申譯なく候

　のうぜんの花を數へて幾日影

五八七

明治四十年八月一日　午後二時―三時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區伊皿子町三十五番地皆川正禧へ　〔はがき〕

岩代國耶麻郡鹽川町陸軍御用九重本舖栗村千代吉君方製造衛生滋養輕便珍菓九重（會津品評會銅牌受領）
[illegible]上一箱本日午前十時文學士北郷二郎君ヨリ落手多謝々々

五八八

明治四十年八月二日　午前十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金臺町一丁目八十一番地野間眞綱へ

拜啓　爲替で十圓あげる新婚の御祝に何か買つて上げやうと思ふが二十世紀で金の方が便利だらうと思ふから爲替にした。

暑いのに三省堂迄行くのは苦しからう然し世の中にはまだ苦しい事をしてゐるものも澤山ゐる。馬鹿で金を澤山とる奴はどうせ好い事はない。近いうちに祟があるものだ。君安心して業に就て可なり。

僕は毎日小說を四五枚かく其外に何もしない。

先達皆川と三浦白水君が來た。其他來客中々多し。小說さへ濟めば快談せんと思ふが今は澁談で氣の毒

である。

君には毎度御菓子やら何やらもらつてゐる。些少の稿料では引き足らん。決して禮を云ふては可けない。此間印税がとれたから上げる許だ。上げなくつてもどうせ使つて仕舞ふ金だ。さう思つてうまいものでも両君で食ひ玉へ

七月末日　　金

野間眞綱様

五八九

明治四十年八月二日　夜　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込西片町の森田米松へ

大學も駿河臺も満員の由自宅にては無論不便と思ふ。今朝早く尼子氏を訪問もう一遍相談あつては如何。他の病院を紹介してもらうか。或は適當なる醫師を周旋してもらうか也。もし尼子氏擔任すると云はゞ夫にてもよかるべし。あの人は信用してよい人故自分が出來なければ駄目といふべし。故に外の病院を又は外の人を周旋してくれと云ふべし。それと同時に先生がやつて下さつても私方はよろしと云ふべし。夫で向の返事を待つべし　以上

八月二日夜　　金

森田米松様

五九〇

明治四十年八月三日　午後八時—九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

手紙が來た。また何だか長々と女性的文字がかいてあるには恐縮したね。今日高須賀淳平が來て小宮さんはことによると戀病をすると云つた。氣を付けないといけない。漱石病なら心配はないが御絹病などになると甚だ痛心の至だ。僕の妻が赤門前の大道易者に僕の八卦を見てもらつたら女難があると云つたさうだ。しかも逃れられない女難ださうだ。早くくればいゝと思つて日夜渴望してゐる。大旱の雲霓を望むが如し。

あつくてだら〳〵してゐる。門司迄芝居を見に行く方はない。東京へ歸つてゆつくり見るものだ。田舍へ行つたら芝居氣をすてゝ田舍ものになるがいゝ。此間印稅が這入つた君が居れば何か奢つてやらうと思ふが幸不在だからやめた。文學論は三版になつた。但し五百部。虞美人草については世評はきかず。みんなが六づかしいと云ふ。凡てわからんものどもはだまつてゐれば好いと思ふ。それが普通の人間である。餘計な事をいふ奴は朝鮮國王の徒だ。況んや漱石先生に如何程の自信あるかを知らずして妄りに褒貶上下して先生の心を動かさんとするをや。君の前だが先生はしかく安價なる先生ならず。しかく安價なる作物を作りつゝあらざるなりか。

三重吉は洞穴（ホラアナ）生活の由何をして居る事やら。歸つたら屹度漁師の神さんに惚れられたとか。アマに見染められたとか云ふに違ない。

森田ノ赤ン坊ガ死ニカヽル。二三日何にもしない由。

野上が一兩日前來た。

エイ子さんのシッ追々本復す。姉妹悉くシッカキ性なるには愛想がつきた。エイ子さんが一番温良でユッタりしてゐて好い子だ。赤ン坊は豪傑の相がある。又寫眞をとらうと思ふ。　頓首

八月三日　　　　　　　　金

寧　隆　樣

五九一

明治四十年八月四日　午後六時―七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若犬若館鈴木三重吉へ　〔はがき〕

小宮先生ニ舞子ガ懸想シタ由扇ヲ以テ親切に煽いでくれたと云ふ。

一本の褌と風流いくれたや

五九二

明治四十年八月四日　午後六時―七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區笄町御厩舎内松根豐次郎へ　〔はがき〕

癖三醉君に田島金次郎といふ人の住所と經歷を聞いて置いて一寸知らしてくれ玉へ。今度逢ふ時でよろしい

五九三

明治四十年八月四日　（時間不明駒込局消印）　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高濱清氏へ

先日の御手紙拜見本月は一應御歸京の由。其節は御面會致し度と存候大鼓を打たれる由鼓を打つ人と鼓の音をきくと頗る人意を強うします。廿世紀にあんな閑日月があると思ふからです。僕も御指定の教師に從つて謠の稽古を致し大に時勢を後ろへ進歩致したい。近頃自然派とかいふて無暗に前へ出たがるから小生は不自然派でもおつ立てゝ後ろの方へ參らうかと思ひます。自然だらうが、不自然だらうが只主義を標榜する丈で主義相應の作物を出して見せなくつちあ仕樣がないぢやありませんか。圍爐裏のはたで一生懸念に水錬の藝術を説いてゐる樣なものだ。——以上はどうでもいゝ事ですが。是からが用になります。西村濤蔭と云ふ人が糸櫻と云ふ長篇小説を持つて來てホト、ギスへ出したいから八月十日頃迄に讀んでくれと云ひました所が心よく受合つた事は受合つたが、例の虞美人草の爲めによむひまがない。そこで濤蔭先生へ其旨を云ふてやつて虚子へ送るか、又は虚子が歸る迄預つて置くかと聞き合せてゐます。然し君の方の御都合もある事だらうから此事實丈を一寸御通知して置きます。

藤尾と御糸の會話をほめて下さつて難有う存じます。まだ褒められる所が段々出てくる事を希望して每每執筆します。　頓首

八月四日　　金

虚子樣

五九四

明治四十年八月五日　午後五時—六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若犬若館鈴木三重吉へ

日々暑い事だ。僕旅行の儀は延引又延行今月の半頃ならばと思つてゐるが一方では段々考へて見ると例の小説がどうも百回以上になりさうだ。短かく切り上げるのは容易だが自然に背く調子がとれなくなる。如何に漱石が威張つても自然の法則に背く譯には參らん。從つて自然がソレ自身をコンシユームして結末がつく迄は書かなければならない。するとことによると君と同伴行脚の榮を辱ふする譯に參らんかも知れぬ。旅行も大事だが虞美人草は胃病よりも大事だから其邊はどうか御勘辨を願ひたい。トルストイ。イブセン。ツルゲチフ。杯は怖い事更になけれど只自然の法則は怖い。もし自然の法則に背けば虞美人草は成立せず。從つて誰がどう云つてもゾラが自然派でフローベルが何とか派でも其他の人が何とか敵とか云つてもどうしても自然の命令に從つて虞美人草をかいて仕舞はねばならぬ萬一八月下旬に自然から御許が出たら早速端書をあげる。夫迄は吉原の美人でも見てインスピレーシヨンを起して居たまへ。もし自然の進行が長引けば此年一杯でも原稿紙に向つてゐなければならない。嗚呼苦しいかな。

八月五日　金

三重吉様

〔五九三〕

明治四十年八月五日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豊隆へ　〔はがき〕

夏目漱石先生著
吾輩ハ猫デアル
松林伯知述

八月五日夜

本郷日蔭町ヲ通ツタラコンナ看板ガアツテ面食ツタ。全體ドンナ事ヲ述ベル了簡カシラ

五九六

明治四十一年八月五日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地池内氏内高濱清氏へ

一昨日御話をした絲櫻といふ小說はいそがぬから私に見てくれといひますからあなたへは送りません。今日東亞の光といふ雜誌を見たら小林一郎（哲學の文學士）といふ人が近頃漱石氏の名前が出るにつれて追々非難攻撃するものが殖えて來た。もう少〔し〕文學者は雅量がなくてはいかんとありましたが。どうですか。私は未だ非難攻撃といふ程な非難攻撃に接した事がない。何だか小林君の說によると迫害でも受けてゐる樣に見えて可笑しい。漱石をほめるものが少なくなつたのは事實であります。然し是は漱石が作家として一般の讀書子から認められたからであります。漱石をえらい作家と認めれば認める程世間は無暗にほめなくなる譯だと思ひます。六號活字抔を以て漱石を非難攻撃抔といふのは頗る輕重の標準を失してゐるではありませんか。

今めしを食つて散歩に出る前に一寸時間がありますから氣燄を御目にかけます。
長い小說の面白い奴をかいて御覽なさらないか。さうして朝日新聞へ出しませんか。
今度の「同窓會」は駄目ですね。あれは駄目ですよ。あなたを目するに作家を以てするから無暗にほめません。ほめないのはあなたを尊敬する所以であります。　頓首

八月五日　　　　金

虛子先生

五九七

明治四十年八月六日　午前十時―十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保百人町百五十三番地戶川明三氏へ

拜啓酷暑の候愈御清適奉賀候頃日來御掲載の郊外生活多大の趣味を以て歡迎日々愛讀今日は飛んだ所で漱石が引合に出て大に面目の次第に候が玉稿が急に六號活字に縮少せるには驚ろき候。夫でひめゆりとか申すつゞきもの丶小說つきの廣告が絡入で巾を利かして居るには恐縮しました。新聞屋も餘程金がほしいと見え候。郊外生活は可成長く可成面白からん事を希望致候　以上

八月六日　　　　金之助

秋骨樣

五九八

明治四十年八月六日　午後四時—五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

豐隆先生　僕の小說は八月末には書き上げるだらうと思ふから九月早々出て來たまへ。旅行は多分やめるだらう。小說をかいて仕舞はないと雜誌さへ讀む氣にならん。旅行抔は來年に延ばして仕舞ふ。あの小說をかいてるうちは腹のなかにカタマリがあつて始終氣が重い。姙娠の女はこんなだらう。

　僕が洋行して歸つたらみんなが博士になれ〳〵と云つた。新聞屋になつてからそんな馬鹿を云ふものがなくなつて近來晴々した。世の中の奴は常識のない奴ばかり揃つてゐる。さうして人をつらまへて奇人だの變人だの常識がないのと申す。御難の至である。ちと手前共の事を考へたらよからうと思ふがね。あんな御目度奴は夏の蠅同樣尻が光つてすぐ死ぬ許だ。さうして分りもしないのに虞美人草の批評なんかしやがる。虞美人草はそんな凡人の爲めに書いてるんぢやない。博士以上の人物卽ち吾黨の士の爲めに書いてゐるんだ。なあ君。さうぢやないか。

　三重吉が下總の國で吉原の別嬪を見たといふ。物騷千萬な事だ。君の御絹さんと同じ事だ。

　森田の子供が死にかゝつて森田先生毎日僕の所へ病氣の經過を報告にくる。可愛らしい男であります。火事を出しかけて長屋の人が來て揉み消してくれたといふ。御蔭で五圓進上せざるを得ざるの已を得ざるに至つたといふ。惜い事也

　小說をかいて仕舞つたら書物をよんで諸君子と遊ばうと思ふ。それを樂しみに筆を執る。君謠を稽古してゐるか。僕は近々再興する積だ。一所に謠はう。

　今日は坐つてゐても汗が出る中々あつい事だ。僕の嫌な蟬の聲がする。花壇にはまだ花が咲いてゐる。不思議なものだ。僕も小說家としてもう少しの間は大丈夫だ。博士にならなければ飯(めし)が食へないと思ふも

のに好例を示してやる

八月六日　　　　　　　　　　　　金

豐隆様

五九九

明治四十年八月九日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓先日は御不幸御氣の毒の至に不堪實は御悔みに上がらうと思ふがオツカサンや奥さんで却つて御迷惑と思つて控へてゐる。先日生田君の取りに來たものは年些少香奠として差上るから其積にて御使用下さい。別に何か上げやうと思つたら細君が申すにあれを上げた方がよからうとあるから小生も其儀に同意した譯である。

昨日は來客、昨夜は東洋城とまり込み今猶のらくらしてゐる。虞美人草は昨今兩日共休業もし御閑なら入らつしやい　頓首

八月九日　　　　　　　　　　　　金

米松様

六〇〇

明治四十年八月十五日　午後五時—六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

拜啓トルストイの獨譯を賣つた。今二三頁讀んだ（但しいゝ加減）所があれをかくに際して沙翁を繙讀したのが七十五歳だと稱してゐる。其前にも度々讀んだとある。トルストイの樣に氣力があると僕も大作物を出す。

トルストイは沙翁を讀んで人の樣に面白くないと公言してゐる。そこが甚だよろしい。好漢愛すべしである。What is Art でも自分の思ふ事を勝手に述べてゐる。あの男の頭には感服せんがあの意氣には感服する。ライトと云ふ Dialectic Society で字引を編輯した人は四十になる迄英語の外は知らなかつたと云ふ。夫が今では大變な語學者になつた。西洋人はえらい根氣のある奴が居る。

漱石は沙翁を繰り返す氣もなし語學者になる氣もないが、此兩人の根氣丈はもらひたい。小說をじ然と發展させて行くうちには中々面倒になつてくる。是で見るとヂツケンスやスコツトが無暗にかき散らした根氣は敬服の至だ。彼等の作物は文體に於て漱石程意を用ひてゐない。ある點に於て侮るべきものである。然しあれ丈多量かくのは容易な事ではない。

僕も八十位迄非常な根氣のいゝ人と生れ變つて大作物をつゞけ樣に出して死にたい。

君の手紙をよんだ。返事の代りに之をかく。

是から文壇に立派な批評家と創作家を要求してくる。今のうち修養して批評家になり玉へ。

今より十年にして小說は漸移して只今流行の作物は消滅すべし。其時專門の批評家出でゝ眞正の作家を紹介すべし。

今の文壇に一人の評家なし批評の素養あるものは評壇に立たず。徒らに二三子をして二三行の文字を得意氣に臚列せしむ。

英、佛、獨、希臘、羅甸をならべて人を驚かす時代は過ぎたり。巽軒氏は過去の裝飾物なり。いたづら

に西洋の自然主義をかついで自家の東西を辨ぜざるもの亦將に光陰の過ぐるに任せて葬られ去らんとす。而る後批評家は時代の要求に應じて起るべし。豐隆先生之を勉めよ。樗牛なにものぞ。豎子只覇氣を弄して一時の名を貪るのみ。後世もし樗牛の名を記憶するものあらば仙臺人の一部ならん。謹んで撤す。　頓首

八月十五日　　　　　　　　　　　　　金

豐　隆　樣

六〇一

明治四十年八月十六日　午前八時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より　府下大久保八幡坂上杉方野氏内中村蓊へ

昨日は暑中見舞の書狀難有拜見、杉村氏歸京にて御多忙の事と推察致候

小生未だ小說を脫稿せず百回でやまざる故どこ迄行くか夫子自身心元なし Penelope's web と申す事あり。永劫に虞美人草攻となる了簡なり

細民はナマ芋を薄く切つて、夫れに敷割杯を食つて居る由。芋の薄切は猿と擇ぶ所なし。殘忍なる世の中なり。而して彼等は朝から晩迄眞面目に働いてゐる。

岩崎の徒を見よ!!!

終日人の事業の妨害をして（否企てゝ）さうして三食に米を食つてゐる奴等もある。漱石子の事業は此等の敗德漢を筆誅するにあり。

天候不良也腦顛異狀を呈して此激語あり。蓊先生願くは加餐せよ　以上

八月十六日

中村蓊様　　　　　　　　　　夏目金之助

六〇二

明治四十年八月十六日(?)　午後二時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彦へ　〔はがき〕

玉稿ハ新聞へ屆ケタリ。天陰、滿庭コトゴトク蟬聲。漫然トシテ座ス。興味無盡。理科ノ不平ヲヤメテ白雲裡に一頭地ヲ拔キ來レ

六〇三

明治四十年八月十六日　午後八時―九時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若犬若館鈴木三重吉へ　〔はがき〕

君の御蔭にて閑庭未だ花絶えず日々寂寥を慰す。昔人曰熱時には闍梨ヲ熱殺スト漱石ハ然ラズ學シテ云フ熱時ニハ闍梨ヲ凉殺ス

六〇四

明治四十年八月十七日(?)　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より大分縣大分郡松岡村吉峰竟也氏へ　〔はがき〕

四海同胞の好みを以て御書被遣拜見致候虞美人草の人物の名二葉亭氏に有之由御注意難有候實は其面影をよまず夫が爲めかゝるコントラストを生じ候先は御答迄　草々

六〇五

明治四十年八月十八日　午前十時—十一時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より松山市一番町十九番地河内氏内高濱清氏へ

濱で御遊びの由大慶に存じます大きな鼓を御うちの由是も大慶に存じます。松本金太郎君はどこにゐますか。私のゐる所からあまり遠方では少々恐れ入ります。謠の道にかけては千里を遠しとする程の不熱心ものであります。專門の學問をしに倫敦へ參つた時ですら遠く〳〵弱り切りました。

金太郎君へ入門の手續はどうしますか月謝はいくらですか。相成るべくは相互の便宜上師弟差向ひで御稽古を願ひたい。敢て同門の諸君子を恐るゝにあらず。鹿駒が揃はざるが爲めなり。

あなたは二十日頃御出京と承はりました。然し御令兄の御病氣ではいけますまい。どうか御大事になさい。

人の惡口を散々ついてそれとからかれは奬勵の爲めだといふのは面白いですね。六號活字の三行批評家や中學生徒に奬勵されちやたまらない。　以上

八月十九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金

虛子先生

六〇六

謠の件は近々御歸り迄待ちましてもよろしう御座います。いそぐ事ではありません

明治四十年八月十九日　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下總國海上郡高神村犬若大若館鈴木三重吉へ（はがき）

おとつさんが肺病になつた由御氣の毒なり。森田の兒が死んで川下江村は小田原で倒る。――吾等は難有く其日を送る。幸福なり。

其代りうちの下女は主人をおびやかしにかゝる。異な事なり。漱石下女の爲めに人生觀を易へる事あらば漱石と下女とは同程度の人物なるべし　呵々。

八月十九日

六〇七

明治四十年八月十九日（時間不明）　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

君が歸京前最後の手紙としてこれをかく。三重吉と一所にこしらへてくれた花壇は未だに花が絶えぬ御蔭で日々慰めになる。虞美人草をかく時にも大なる注意物となつた。筆を以て漫然とあの花畠を見てゐる。暑があけて秋が來て朝夕は涼しい。小供が蟲籠を軒へかけた。蟲がなく。少し書物が讀みたい。此夏も江山の氣を得ずに籠城して仕舞さうだ。三重吉のおとつさんが肺病になる。川下江村といふ人が卒業してすぐ死んでしまつた。

世の中は妙な考を持つてゐるものだ。殿下樣が漱石の敵だと云へば漱石はすぐ恐れ入るかと考へてゐる。至極呑氣に出來てゐる。殿下樣はえらいかも知れないが、漱石がさう安つぽく出來てゐた日にや小説なんかかく必要がなくなつて仕舞ふ。尤も甚しい例は漱石の文は時候後れだと云へばすぐ閉口して文體をかへるかと思つてる。漱石は讀めないと云つて冷評すれば漱石は翌日から性格を一變するかと心得てゐる。どう考へても世の中は呑氣だなあ、豐隆子。こんな人間がごろ／＼してゐるうちは漱石もいさゝか心

丈夫だ。
島からの端書到着。石は何で出來てゐると聞いた人は傑作家に違ない。
君が歸る迄は花壇に花があるだらう。小説は今月中には片づくだらう
　　八月十九日　　　　　　　　　　金
　豐　隆　樣

六〇八

明治四十年八月二十日　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麻布區笄町柳原方内松根豐次郎へ　〔はがき　署名に「夏目道樂禪者」とあり〕

問ふて曰く男女相惚の時什麽
漱石子筆ヲ机頭ニコロガシテ曰ク天空ニ向ツテ去レ
　讚曰
　　春の水岩ヲ抱イテ流レケリ
問ふテ曰ク相思の女、男ヲ捨テタル時什麽
漱石子筆ヲ机頭ニ竪立シテ良久曰ク日々是好日
　讚曰
　　花落チテ碎ケシ影ト流レケリ

六〇九

明治四十年八月二十一日　午後三時—四時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より麹町區町柳原方內松根豐次郎へ　〔はがき〕

心中するも三十棒
朝貌や惚れた女も二三日
心中せざるも三十棒
垣間見る芙蓉に露の傾きぬ
道へ道へすみやかに道へ
秋風や走狗を屠る市の中

六一〇

明治四十年八月二十三日　午前九時—十時　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より本鄕區本鄕四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ　〔はがき〕

野村さん二十五日に朝日新聞へ給料をとりに行つて呉れないか。どうせひまだらう。午後がよろしい。

以上

六一一

明治四十年八月二十八日　午前（以下不明）　本鄕區駒込西片町十番地ろノ七號より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社內中村蓊へ

大水にて大騷一寸見物に行きたい樣か致すがもう三四日は虞美人草故外出を見合せる
時に君も朝日へ入社の由大慶一人でも知つた人が這入るのは喜ばしい

御舍弟の御病氣の事は森田氏より承はりたり。御氣〔の〕毒と思ふ。

「うきふね」は二三の書店へ話丈はして置いたが只今出版界不景氣だからと云ふので春陽堂抔は一寸遜げた。かうでもしたらどうだらう。君が「うきふね」持參大倉へ行つて原平吉に逢ふ僕が是非出版してくれといふ添狀をかく。其後は君の談判に任せる。

それからまだこんな事がある。昨夕も森田に話したのだが。僕は月給の約束で明治大學で三十圓宛取つて居た。所が朝日へ這入るに就て明治大學も辭職した。その月（即ち三月か四月と思ふ）の月給をくれない。そこで一應は内海月杖君に催促したら先生は早速會計に申して取計ふといふ返事丈よこしてまだ寄こさない。君僕の代理として君の事情を打明けて之を内海氏からとるか上田敏君から受取つて貰ふかする勇氣があればその三十圓を君にあげる。

夫で歸國の旅費が足りなければ十月十日になると僕は二三百圓金が這入るそのうち二十圓位なら君にやつてもいゝ。昨夜は森田君に貳拾圓かし。其他へもチョイ〳〵貸シタリやツタリスルノが重ナルト何ダカ心細イ。然シ十月迄待テバソノ位ナ勇氣ハ回復スル

右一應御返事迄

兎に角九月初旬に一寸來給へゆつくり相談をする

八月二十八日　　　夏目金之助

中村蓊様

六一三

明治四十年九月二日　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

此間は失敬うちの家賃を三十五圓にするといふ三十五圓ぢやいやだから出る積だどこか好い所はないかね。無暗向不見に家賃を上げる家主は御免だ。御もよりに相當なのを御聞及なら一寸しらせてくれ玉へ頓首

九月二日　　金

虎　雄　樣

六一三

明治四十年九月二日　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區本郷四丁目四十一番地喜多方野村傳四へ〔はがき〕

野村さん。家主が家賃を三十五圓にするといふ。今月中に越すつもり好いうちがあるなら心掛けて敎へて呉れ玉へ

九月二日

六一四

明治四十年九月二日　午後十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より上總國一の宮一の宮館畔柳都太郎氏へ

端書拜見帥せんかたるの疑ありとの事大した事も有之間敷けれど隨分勉强して遊んだらよからうと思ふ僕も小說が脫稿に及んだから出掛て二三日馬鹿話でもしたいがどうも一の宮とあつては一寸行く氣にならん。實は此間大塚に誘はれて別莊地見分の爲め參つたのでね。一の宮より稻毛の方がよくはないか。

家賃を三十五圓にするといふから只今逃亡の仕度最中だ。君いゝうちを知らないか。〇〇は無暗に借りろ借りろといふ。あんなのは何だか氣味がわるい。實際僕の崇拜者でもないものが家を貸す爲に崇拜者になるなんて怪しからん譯だ。

僕例の立派な湯屋へ行つて體量をはかるに十二貫半である。今日かゝつた「ら」十二貫の半の半である。家賃と體量に正比例するものかと思ふ。今に家賃が百圓位になれば體量〇郎ら大往生の域に達する事だらう。胃が悪クテイケナイ。之を稱してキッツエンカタールト名ケル。一の當位ぢや中々癒らない。火葉鍋のストーブで煖めないと到底全治しないさうだ。

先は御返事迄　匆々頓首

九月二日

　　　　　　　　　　　金

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　畔　柳　様

六四三

明治四十年九月二日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より芝區白金台町一丁目八十二番地野間眞綱へ

殘暑にも拘らず御機嫌よきや小生不相變消光小說は漸く脫稿せり。先日佐治君が來て明治學院を斷つたと云ふ。其代の野村も斷つたといふ。其代はもう出來たのかね。もし出來なければ森田米松を入れてやつてくれないか。尤も君も時間が可成自由持つ方がいゝから餘つたらば餘つた丈を周旋つてやつてくれないか先は用事迄　匆々頓首

九月二日

金

眞鍋 様

六一六

明治四十年九月四日　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込西片町十一番地大谷正信氏へ

爾後御疎遠に打過申候不相變御清穆奉賀候小生漸く小説を脱稿今暫く小康をむさぼる積に候

偖突然ながら曙町でも何でもよろしきが小生の這入る位の貸家は無之やもし御見當り又は御聞及ならば端書にて御一報願上度實は今月中に此家を引拂はねばならぬ事と相成候につきもしやと思ひ唐突ながら伺上候　以上

九月四日　　　　　金之助

繞石詞兄

六一七

明治四十年九月四日　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

淨土宗の方は先約にて森卷吉氏にきまる明治學院の方は國史科の何とかいふ人が出來た由此人〇〇人にて無暗に利巧に立ち廻り學院の方でも難有なき由なれば森田君が思召がある事が今少し早く分つてゐれば譯なかつたのにと野間から云つて來た

右の次第にて雙方共駄目也。但し森卷吉は瀧の川の耶蘇衣學校をやめる筈だらうと思ふ。夜中瀧の川迄

通ふ勇氣があれば聞き合せて見るが如何

九月四日　　　　　　金

米　松　様

六一八

明治四十年九月四日　午後十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保仲百人町百五十二番地戸川明三氏へ

拜啓先日は郊外生活の件につき一寸申上候處早速御返事にて却つて恐縮致候

借however甚だ唐突ながら其郊外生活の儀につき御迷惑ながら伺ひ上げ候が小生の家主家賃を上げる事に堪能なる人物にて二十七圓を忽ちに三十圓と致し今や三十圓を三十五圓に致さんと準備最中にて此方にも御同様立退の準備を取り急ぎ候。そこで斯樣な立ち入つた話を致し候も實は貴君御住居の近邊に適當なる立退場御承知にもやと存じての御願の前置に候とくに御探しを願ふと申す樣な横着心にては萬々無之、もし御心づきの貸家も有之候はゞ何卒端書にて御一報被下間鋪候や御多忙中甚だ失禮を申上候何卒御用捨被下度候

匆々頓首

九月四日　　　　　　夏目金之助

戸　川　秋　骨　様

金魚は面白く拜見致候

六一九

明治四十年九月七日　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より上總國一の宮一の宮館畔柳都太郎氏へ

僕の胃ガン君の肺尖竹風の美的生活早稻田の自然主義大抵同程度なものだらう何れも心配するに及ばず。あの繪は傑作だ。あの音樂も大結構だ。タンホイゼル位な所だ。海邊へ行くとシーインスピレーションの御蔭で色々なものが出來る

昨夜机の上に載せて置いたニッケルの時計と鋏と小刀を盜まれた。隨分安直な泥棒だ。

四方に檄を飛ばして貸家を搜がしてゐる。君の所を二軒かりるもいゝが庭はまるで無いぢやないか

虞美人草脫稿後來客ストリームの如く流れ來る。主人ひと攻めとなる。

東京は中々暑い暑いのと人が來るので書物は一枚もよめない。グー〳〵寐る。寐る事は免許以上の腕前だね。

大阪の新聞で虞美人草を一回ぬかして濟して掲載してゐる。呑氣な不都合もあるもんだ。讀者は何とも云はない。氣のついたのは作者ばかりだらう

中川は一體熊本へ行くのかな何だか些とも分らない

まづ此位でやめる。

もう一つある。體量は十二貫半から半の半に減じた翌日から急に十三貫に增して昨日は十三・一あつた。此樣子で見ると體量と家賃は正比例するものと見て差支ない右正誤迄　草々

九月七日　　　金之助

芥舟先生

六二〇

明治四十年九月八日　午後三時―四時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ

拜啓
此間中から八重子さんが御病氣の由大した事もないだらうと思つてゐたら昨日鈴木の話では熱が四十度もある由それでは普通風邪位な事ではないのだらう中々大病で君も看病に骨が折れる事だらうと思ふ一寸見舞に行かうと思ふが此あついので僕も大分弱つてゐるそこへ朝から人ばかり來るので益弱るばかりそれで手紙で失敬する何か不便な事があるならして上げる云ふて來給へ　以上

九月八日　金之助

豐一郎様

六二一

明治四十年九月八日　午後五時―六時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保村百人町百五十三番地戸川明三氏へ

御面倒の御願を致した處早速御返事頂戴難有存候
御地近邊に一二軒は空屋有之よしいざとならばまかり出たくと存候。實は意外に繁殖力多き家族にて大供五人プラス小供五人の大景氣故五六間にては少々間に合ふまじかとそれが心配に候然し家賃頗る廉なるに免じて少々の我慢も致しかねまじき趨勢いざとなればなにかど御厄介になる事と存候

小生も御近邊にて時々御邪魔でも致す方を望み居候何だか西片町邊はエラ過ぎる樣に相成候
郊外生活は洪水の爲め一時御中止のよしもう大分退いた樣子故又御始めにならん事を希望致します
先は御禮迄　匆々

九月八日　　金之助

秋骨先生

六二三

明治四十年九月八日　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より小石川區原町十番地寺田寅彦へ

「やもり」まあ負けて面白いとする。缺點は(一)初めは御房さんが主になる樣だ(二)所が荒物屋が主になつて仕舞つた。(三)そこでツギハギ細工の樣な心持がする(四)始からやもりに關する記憶をツナゲル體で讀者に是が中心點だと思はせない樣に兩者を並列する心得があれば此矛盾は防げたらうに(五)さう云ふ態度で並べた話ならもつと渾然としてくる。如何となればいくつ並べてもやもりで貫いてゐるから。――又文章の感じが一貫してゐるから　である。

文章の感じは君の特長を發揮してゐる。矢張ドングリ感、龍舌蘭感である。此種の大人しくて憐で、しかも氣取つてゐなくつて、さうして何となくつやつやほくつて、底にハイカラを含んでゐる感じは外の人に出しにくい。君には是より以外に出せないかも知れない。先は一口評迄。早速虛子に送る

九月八日　　金

寅　　彦

六二三

明治四十年九月十日　午後六時—七時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

先刻は御多用の所御邪魔失禮致候御親切に御案内被下候段難有奉謝候偖眞宗大學の口は喜んで應ずる人は澤山可有之と存候が早速思ひつき候人を二三御紹介及候古きかた御望の由につき
(一)戸川明三。是は明治學院出にて英文撰科卒業。山口高等學校教授廢校後出京。御存じの秋骨君に候
(二)名須川　良。是は熊本高等學校教授たりし所衝突の結果出京
(三)野間眞綱　是は前の二人と違ひ門弟に候四年許前に卒業只今明治學院の教師先達士官學校をやめたり
其他御望とあれば猶二三人はあるべし。新しくて濟めばいくらでも有之候
先方へ問ひ合す前に一寸御意向を伺ひ置候先は右御返事迄　匆々頓首

九月十日　　　　金　之　助

大　谷　様

六二四

明治四十年九月十四日　午前九時—十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓戸川君の信仰事件は小生も知りませんが一つきいて見ませう。きいて耶蘇信者だと云つたら仕方がない。信者だらう丈でやめるのは少々殘念ですから。

家の事色々御盡力難有く存じます廣瀬君のうちは落成せぬうちから借りろ〳〵といふ好意でしたが實はまだ行つて見ません。名須川君の新居はどこか知りませんどこですか。其近所のうちは何だかよさゝうに思ひますが。御世話序にもう少し聞いて下さいませんか。出來ればこゝ五六日うちに極めて下旬には引き移る事に致す積です。もうどこへでも飛んで行く積です。　以上

九月十四日　　夏目金之助

饒　石　兄

六二五

明治四十年九月十四日　午前九時―十時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下大久保仲百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拜啓先日はわざ〳〵御光來被下ました處何の風情もなくまことに失禮致しました。偖大谷君から直接に御照會になつたさうですが例の眞宗大學授業の件ですが實は小生も大兄を推擧して置いた處昨日大谷君から手紙で當局者のいふには戸川君は耶蘇教ぢやないだらうかさうすると京都の頑固連に對して困るといふ返事ださうです。そこで大谷君があなたの信仰の有無を私へ聞き合せに來たのですが私はそんな事は一切知らないから――まあ戸川君に聞いて見るから待つてくれと大谷君に今手紙をかいた所です。

それで大兄があまり御望にならんものを信仰の有無など問ひ正す樣なホジクリは不必要と認めますが萬一目下の御事情該校出稼御希望なればだまつて其儘にして置いては却つて御不便宜かと存じ入らぬ事ながら一寸伺ひます。尤も直接に大谷さんの方へ御返事をなさつてもよろしう御座います。先は用事まで　匆匆

金之助

九月十四日

秋骨様

六二六

明治四十年九月十四日　午後四時—五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

寶生新君件委細難有候。早速始めたいが轉宅前はちと困ります。轉宅後も遠方になると五圓では氣の毒に思ひます。いづれ落付次第又御厄介を願ひませう

六二七

明治四十年九月十四日　午後四時—五時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拜啓其後は御無沙汰候今般大塚さんの奥さんが萬朝に連載した露と題する小説を文淵堂から出版するに就てあなたに表紙の意匠を願ひ度と申しますがどうか御面倒でも一つ書いて下さいませんか。口繪は滿谷さんに頼むさうですが出來るなら滿谷さんの繪を御宅へ持つて行く樣にしますからそれと調和する樣にやつて見て下さい。いづれ表向は文淵堂が參りますが私は個人として大塚さんの代りに御願申して置きます。私も小說が濟んで少々閑になつたから其うち上がります。あなたの繪はどうですかまだ忙がしいですか

貢さんによろしく

今月中に轉宅をしなければならんので方々聞き合せ中です　先は用事迄　匆々頓首

九月十四日

金

橋口清様

六二八

明治四十年九月二十三日　夜　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

今日千駄ヶ谷を探索君の家（即ち石門）を見んと存ぜし處千駄ヶ谷も隨分廣い所にて何とも蚊とも相分らず。代々木代々幡抔をぶらついて大に健康を養成致候

それで念の爲めもう一遍石門館を見たいと思ひ候が御慈悲に明日御連枝下間數や尤も明日は社の運動會が玉川にある。三時に散會といふ御布令だから其前に御免を蒙つてもよろしい故どこか御出張を願つて待ち合せたいと思ふが適當の場所と時を御指定願ひたい。それとも都合によりては運動會を御免蒙つてもよろしい。

猶都合によつては石門館の番地町名を御報にあづかりたい左すれば小生一名にて出掛候　以上

九月二十三日夜　夏目金之助

森田綠苹先生

六二九

明治四十年九月二十八日　午前十一時―十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より牛込區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

私の新宅は

牛込早稲田南町九番地[原]

デアリマス。アシタ越シマス

六三〇

明治四十年九月二十八日　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ　〔はがき〕

家の事にて種々御心配恐縮[原]漸く左記の處へ本月中に移轉の都合に相成候右御禮旁御通知迄　匆々

牛込區早稲田南町九番地

九月二十八日

六三一

明治四十年九月二十八日　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ　〔はがき〕

小生明日左記の處へ轉[原]居す

牛込區早稲田南町九番地

九月二十八日

六三二

明治四十年九月二十八日　午前十一時—十二時　本郷區駒込西片町十番地ろノ七號より下谷區谷中清水町五番地樋口清氏へ　〔はがき〕

先達は家の事で御面倒相願難有候今度牛込區早稲田南町九番地[原]へ轉居する事に相成今月中に引移る事に致候右御禮旁御報迄　匆々

も向き候へば御枉駕被下度待上候
虞美人草御讀被下候由本月末にて完了の旨御批評願上候
今度の引越につき始めて借家の掃底を感じ書物が邪魔になり殆んどいやになり申候昔の人は自分の家藏を持たねば一人前でないとか申居候漂浪を分とする小生如きものも成程と思ひ當り候漸々郊外へ退却の外無之我ながら憫笑
先は御返事かた〴〵御禮迄匆々如斯候　以上

十月初四　　　　夏目金之助

渡邊様

六三七

明治四十年十月四日　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區西片町十番地大谷正信氏へ

拜啓また御面倒なる事につき一書を呈する事と相成候
勸業銀行の有尾敬重氏の息子が今度中學を卒業して高等學校へ這入る迄英語の練習をして貰ひたいとの申込を引受候處意外の遠方へ引うつりたる爲めどう〔か〕近邊なる大兄に紹介して呉れぬかとの事に候(同氏は富士前町住に候)
小生は一週に一兩度ひまな時にはと申置候が其位の御閑は出來不申候や　實は大兄の御多忙の事も一應申置候。又御都合次第にては甚だ失禮ながら相應の御報酬を差出す樣に致すだらうと存候
實は御面倒で申上るのも甚だ恐縮とは存ぜしも小生移轉の爲め平生交際ある友人(醫學士尼子氏)の依

頗るむだしがたくかく御難題を吹きかけ申候
御遠慮なき處御返事被下候はゞ幸甚　頓首

十月四日　　夏目金之助

大谷正信様

六三八

明治四十年十月六日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ　〔はがき〕

御多忙の處御好意難有候早速右居氏へ通知致す事に取計ひ可申、或は先方より直接に御願に出るやら計りがたく其節はよろしく御相談願上候

六三九

明治四十年十月七日　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

拜啓御手紙の趣承知致候實は十月十日に銀座貳丁目服部書店より猫の印税殘部貳百七十圓持參の筈故そのうちを貳拾圓君に用立て様と思つて居た然し十日に君が出立するとなると間に合はない故封入の僕の名刺を持つて同店に行つて談判して一日でも早く取つてくれてそのうち二十圓差引いて殘りのうちで七十圓三十錢（九月丸善から取りに來た書代）を丸善へ拂つて殘りの百八十圓を僕の所へ持つて來て呉れゝば好都合である

もし服部が十日でなければ出來ぬといふならば君の出立日を一二日延べるより致方あるまい

序だが右猫印税の受取も入れて置く引替に渡してくれ給へ

十月七日　　　　夏目金之助

中村君

六四〇

明治四十年十月八日　牛込区早稲田南町七番地より府下青山原宿二百〇九番地森次太郎氏へ

祝満洲日々新聞創刊

朝日のつと千里の黍に上りけり

昨日は失敬御約束の句右の如くにて御免蒙り候尤も御取捨は御随意に候　以上

十月八日　　　　夏目金之助

森様

六四一

明治四十年十月八日　午後一時―二時　牛込区早稲田南町七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清氏へ

拝啓寳生の件は御急ぎに及ばずいづれ落付次第此方へ招待仕る方双方の便宜かと存候實はケチな事なが
ら家賃が五圓増した上に月謝が五六圓出ると少々答へる故一寸様子を伺つた上に致さうかと逡巡仕る也

善庵氏への紹介狀別封差上候間御使可被下候
先は用事迄　匆々頓首

十月八日　　　　金

虚子先生

六四二

明治四十年十月八日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　【はがき】

御小兒御病氣如何もし御樣子よくば木曜の夕晩飯を食ひに御出掛下さい尤も飯の外には何もなき由人間は連中どや／＼參る事と存候紹介狀サツキ郵便で出しました

六四三

明治四十年十月九日　午前九時―十時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込曙町十一番地大谷正信氏へ

拜啓先日願候有尾氏子息稽古の件につき同氏より先生の御出にては恐縮故此方よりまかり出で御教授にあつかり度と申出られ候御迷惑の次第とは存じ候へども右にて御聞入被下間敷候や。小生は直接に有尾氏を知らず只小生に依頼せる知人の言によれば同氏は平民的なる謙遜家なりと云へば子弟の教育上より家庭へ先生を呼びつける如き御由な所置を好まぬ爲とか手紙にて申越候色々御面倒なる事のみ願失敬千萬に候へども何とか今一應御熟考を煩はし度と存候　以上

十月九日

夏目金之助

大谷學兄

六四四

明治四十年十月九日 午前九時―十時 牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

貸本部件種々御盡力難有候同店主人本人小生方へ持參の由なれどどうせ其うちより君に上げるものを出す譯故君の方で受取つてくれた方が便利に御座候主人もわざ／＼早稻田迄出張する迷惑がはぶけて便利な譯に候。よつて御面倒ながら本日君が行つて取つて下さい。其方が雙方の便利であり且つ確かである 以上

十月九日

夏目金之助

中村蓊様

六四五

明治四十年十月十日 午前九時―十時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區西片町十番地大谷正信へ

御依賴の件御親切に御引受被下難有候早速先方へ申つかはし候定めて喜ぶ事と存候

先〔は〕御禮迄 匆々

六四六

明治四十年十月十日 午前九時―十時 牛込區早稻田南町七番地より麴町區内山下町東洋協會内[illegible]氏へ

拜啓先日願上候人の履歴別紙の如くに候間御廻送申上置候につきもし本人相當の事も有之候はゞ可然御周旋被下度先は當用のみ　草々頓首

十月十日　　夏目金之助

森　賢臺

六四七

明治四十年十月十一日　午後五時―六時　牛込區早稻田南町七番地より府下大久保仲百人町百五十二番地戸川明三氏へ

拜啓玉稿拜受難有候早速社の方へ廻付致置候輪廓文學は面白く拜見致候

偖御匿名の件は過般御面會の節は一應面白きかとも存じ候ひし處よく考へ候に矢張公然の方可然と愚考仕り且つモデル問題八釜敷際あとにてあれは秋骨君だといふ事が分つてはモデル問題に關係深き大兄が却つて他より入らざる揣摩を受けらるゝ事あらんかと存じ專斷を顧みず公然と雅號拜借致候一應は御相談の上可取計處左程の大事件にても有之間敷（寄稿の內容より察して）と存じ一存にて取計申候もし不都合なれば後日御面會の節御叱責を甘受可仕候　以上

十一日　　夏目金之助

秋骨兄

六四八

明治四十年十月十三日 [illegible] 大谷繞石へ

拜啓過般来毎々御面倒相願候右尾氏令息授業の件につき御紹介及候間御面會被下度委細は拜眉の上萬々可申述候　以上

十月十三日

金　之　助

大　谷　様

六四九

明治四十年十月十四日 [illegible] 戸川明三へ

拜啓モデル問題朝日新聞より返事致来候につき御積送申上候同氏作物の分出来候節は頂戴可仕と存候右當用迄　草々

十月十四日

金　之　助

戸　川　様

六五〇

明治四十年十月十六日 [illegible] へ [illegible]

蓄音器を買ふ様な餘裕のある人に金を寄附するなんて勿體ない。蓄音器どころではないセッパ詰つて借りに來る人がある。さういふ時に貸す方が有効で有益である。だから寄附は御免蒙り候

六五一

明治四十年十月二十一日　午前十一時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より赤坂區表町一丁目一番地戸田方松根豐次郎へ

拜啓尾崎より君へ参り候間供御高覽候返事は直接に同人へ御つかはし相成度候

二十一日

金

豐次郎様

宿所は廣島市水主町三六に候

六五二

明治四十年十月二十六日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より小石川區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

草雲雀の序遲延無申譯漸く半日の閑を偸んで書き了る。あまり御氣に入りますまいがこゝいらで御勘辨を願度候

十月二十六日

金之助

草平大人座下

六五三

明治四十年十月二十九日　午前十時—十一時　牛込區早稻田南町七番地より　麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸へ

啓先日御手紙に面會致候處御幼兒又々御病氣の由にて御看護の由無かし御心配の事と存候
偖別封（小說草稿）は佐藤と申す男の書いたもので當人は是をどこかへ載せたいと申しますからホトヽ
ギスはどうだらうと思ひ御紹介致しますもし當人貧乏にて多少原稿料がほしい由に候
御一覽の上もし御氣に入らなければ無御遠慮御返却相成候はゞ又外を聞いて見る事に致します　先は用事迄　匆
匆

二十九日　　　金之助

虛子先生

六五四

明治四十年十一月二日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より　[illegible]大谷[illegible]氏へ　「はがき」

御紙面拜見京都へ御赴任の事はかねて御聞及候御地は熊本より萬事好都合の事と存候先々結構に候小野さ
んのモデル事件は小生も新聞にて讀み候。勝手な事を申すやからに候。定めし御迷惑の事と存候。勝手な
事を勝手な連中が申す事故小生も手のつけ様なく候

六五五

明治四十年十一月二日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町　[illegible]地小吉館小宮豐隆へ　「はがき」

拜啓乙骨君の事難有存候同君の御隨意にしようとの事と存候同君の宿所がわかれば改めて社員がまかり

出萬事正式に御依賴致すべくと存候小生も參りて直接に參上の上御賴を致してもよろし

六五六

明治四十年十一月五日　午後一時—二時　牛込區早稻田南町七番地より小石川區久堅町七十四番地　高濱清へ　〔はがき〕

古道具屋で左の印を買つて來た處何と讀むやら分らず敎へてもらひたい

六五七

明治四十年十一月六日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より姫路市外平野村二百十五番地池内松太郎氏へ

拜復此前御つかはしの御書狀は大坂の社より廻送し來候へども書中の意味は二三の來客に示し候へどもとんと不得要領其儘に打棄置候

今度のには姓名住所判然と御書入につき御返事致候小生は大坂の社には居らず表面の處にまかりあり

貴兄の御差出の書面は（十餘回）と承はれども一回も受取りたる事なし貴兄の作物月見草其他も未だ拜見

も致さず通知も受けず候。是は大坂社より御受もどし可然と存候但し書面には簡明直截に用事と姓名住所を御認め可然然らざれば又々社の方で取り合はぬ事と存候
　右御返事迄　匆々

六五八

明治四十年十一月八日　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ　〔はがき〕

御手紙拝見難有八重子様より妻への書面も御申候下女の義御心配奉謝候是は妻より何とか御返事致し可申と存候先は御返事迄　匆々

六五九

明治四十年十一月九日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より小石川區久堅町七十四番地菅虎雄氏へ　〔はがき〕

篆字を調べてもらつた處はいゝが販賣免許は斷わいたね元來何に使つたものだらうどうも御苦勞さま難有いがつまらない

六六〇

明治四十年十一月十一日　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

先日は失禮御依頼の序文をかきました御氣に入るかどうだか分りませんがまあ御覧に入れます。ゆふべ大體の見當をつけて今朝十時頃から正四時迄かゝりました。然し讀み直して見ると詰らない然し大分奮發して書いたのは事實であります。そこを御買ひ下さい　頓首

十一月十日

蘆子様　　　　金

當分序分ハカヽナイ事ニシマス。ドウモ何ヲカイテ好イカ分ラナイ。
然シアナタノ作ヲ讀ムノハヒマガ入ラナカツタ。アレデハ頁ガ多クナリマセンネ

六六一

明治四十年十一月十五日　午前十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區丸山福山町四番地伊藤はる方森田米松へ

拜啓久しく拜顏を得なかつた處御手紙で虞美人草の批評をかいて居られる由承知右者々へ披露致候斯樣に御丹精御研究の上御批評あらんとは思ひも寄らぬ所たとひ虞美人草が夫程の價値なきにせよ又其批評が褒貶いづれに向ふにせよ小生は心中より深く君の好意を感謝致候大喜雀躍は單に自分の爲のみならず近來の批評は寄席へ行つて女義太夫を評する格にて文壇の爲め頗る物足らぬ節有之所へ君が出て一批評をかく爲めに露西亞派を研究獨乙の哲學を研究、最後にシラーの傳迄しらべるに至つては其厳正の態度堂々の獻立敬服の外なくしかも夫程骨を折つて貰ふ作物はといふと僕のかいたものに候故一層嬉しく思はれ候。君の批評を先鞭として日本の批評が從來の態度を一新する樣になつたら甚よろしからうと存候深田康算が獨乙から手紙にて僕の作物を評したいことに文學論と其外の諸論文の學界にまだ伴つてあらざりし所以を述べて精細なる批評を試みたいと申し來候。かゝる人がかゝる態度にて拙著を取扱つてくれるのはまことに心嬉しきものに候。もし夫れ大町桂月君の夏目漱石論に至つてはいくらほめられても小生の爲には批評界

の爲にもならぬ事と存候委細は拜眉を期候。うれしき故一筆御禮を申上置度と存じ此ふみ入御覽候一日も早く批評拜見致し度と存候中には隨分手痛き所も有之べく夫は承知故可成堂々とあゝやつたりやつたりと云ふ風に立派に眞の批評らしく御やり被下度候　以上

十一月十五日　金之助

草平先生

六六二

明治四十年十一月十八日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より　本郷區駒込西片町十番地小宮豐隆へ

拜啓讀賣の白雲子は事件であるから、投書を寄こす必要があるものか寄こすなら御笑ひ草として寄こすべし。それで讀賣がわるくなると申すは讀賣新聞自身にいふべき事なり讀者は面白がつて然るべき論文也。あの白雲子なる人はかつて僕の處へ話をきゝに來て僕が玄關先で返した趣味の男の由。至つて大人しい口も碌にきけさうもなき神經質の男也　それだからあゝ云ふ事をかく。あゝ云ふ男が相應の學問をしないであゝ云ふ事をかく時に少し氣が變になつて居る時分である。恐るべき事だ。あの人は生涯あれで蒼い顔で苦しんでさうして人から馬鹿にされて死んで仕舞ふ　穴賢

十一月十八日　金

豐隆樣

六六三

明治四十年十一月十八日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ　〔はがき〕

昨日は御馳走になりました私は廿二日入場の文藝協會の演藝會の特等の招待券をもらひました。（壹圓五十錢）あなたはもらひませんか。もし行くなら一所に行きませう。一人ならそんなに行き度もない

六六四

明治四十年十一月十八日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より赤坂區表町三丁目三番地戸田方松根東洋城へ　〔はがき〕

昨夜君の處へ行かうと思つたら途中で虚子と牛肉を食つて遲くなつてやめにした。不愉快ださうで御見舞に行く所であつた。讀賣を君も見たと見える。何と思つてあんなものをかいたのかな。氣の毒な

六六五

明治四十年十一月二十四日　使ヘ持參　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓明日上田敏氏送別會にて午後四時頃迄に上野精養軒へ參り候につき甚だ御迷惑ながら例のもの「朝日」社にて御受取置被下度行きがけに頂戴に立ち寄り可申候

右御依頼迄　匆々頓首

十一月二十四日

金之助

豐隆様

六六八

明治四十年十二月十日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

小說を御脫稿のよし大慶不過之候。樗陰は有卦に入り可申候。小生も二十日つゞきのものを只今たのまれた許りに候。小說と行かなくても三十日はつゞける義務が出來候。可相成は二十九日位で御勘辨を願はんかと存候。御風邪の趣折角御養生專一に候。小子奧方も風邪にて伏せり居候。從つて御見舞にもあがりかね候。羊羹は勿論の事御あきらめ可然候。八重子さんは小說を二つかき候。新小說とホトヽギスへ出す由に候。風呂が洩りて湯がたゝぬ由。何だか湯に這入り度候。風が吹き候。存外あたゝかに候。地震も有之候。

十二月十日

六六九

明治四十年十二月十三日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

拜啓乙骨三郎君の美學の論文の載つてゐる哲學雜誌（近刊のもの二冊）今度御出の節本鄕にて御求め御持參願上候　以上

六七〇

明治四十年十二月十六日　午後十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

ケラーの小說を十圓で御求めの由ケラーと〔は〕何者なるや一向存じぬ名前に候。近頃は妙な名前がボ

ツボツ出て來て時々癖耳を驚かし候よくなき事に候。クツの紐御求め被下候由、哲學雜誌も御買被下難有候。小生矢張り執筆中。毎日二三回かく豫定

文債に籠る冬の日短かゝり

六七一

明治四十年十二月十八日　午後四時—五時　牛込區早稻田南町七番地より相模國小田原在早川村濟光寺坪井方（齋藤岡田）鈴三へ　〔はがき〕

御轉地〔の〕よし精々御養生可然候もし手紙を出す氣分でも出たらひまな時御遣被下度候。何でも氣を長く平氣に御暮し可被成候。小生執筆にて多忙。東京は寒く候。御地は如何。風を引かぬ樣御注意あるべく候　以上

六七二

明治四十年十二月二十二日　午後二時—四時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小寺信小宮豐隆へ　〔はがき〕

毎度用事を御たのみ申相濟まぬ事と存候御禮は此世では六づかしき故いづれ未來にてうんと可仕候故氣を長く御待可被下候。フオルケルトは隨分高いね。讀まなければ莫大な損だ

六七三

明治四十年十二月二十四日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小寺信小宮豐隆へ　〔はがき〕

啓上社へ俸給をもらひに行つてくれる時は預けてある見とめの印を持て行く方安全に候。今日の平凡の御糸さんはうまいね。あゝは中々かけないよ　以上。

六七四

明治四十年十二月二十八日　午後五時―六時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき〕

拜啓又銀行へ御使を願ひたいものですが明日午前中に可成早く來て頂きたいですが。どうも恐れ入ります

六七五

明治四十一年　（一月十日以前と推定す）　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき〕

拜啓また御迷惑ながら明日早く來て野田先生の處へ原稿をもつて行つてくれ玉はぬか。「坑夫」は諸君予妨害の爲一向不進歩

六七六

明治四十一年一月十日　午後二時―三時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

昨日は失敬斑女には大弱り〔に〕弱り候。倩本朝本間久と申す人別紙原稿をよこしホトヽギスか中央公論へ周旋してくれぬかとの依頼故先つ以て原稿を供貴覧候御氣に入り候はゞ御掲載の栄を賜はり度候

本人の申條に曰くある雑誌記者曰く本間久は翻譯ばかりして創作は出來ぬ男なりと。是に於て此作ありと、即ち敵愾心の結果になれるものと覺候

原稿の價値は大したものにあらず少々物足らぬ様也然し折角の希望故御紹介致し候　以上

正月十日　　金

虛子方丈下

六七七

明治四十一年一月十日　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮館小宮豐隆へ　〔はがき〕

拜啓又御願が出來候。今日坑夫氏來り又話を聞いたら僕の間違を發見した。シキと申すのは坑の事を、銅山の構內と思ひ違へて無暗に使つたから、大に恐縮して正誤しやうと思ふんだが、君もう一遍九浦先生の所へ行つて原稿を持つて來てくれ玉へ。尤もシキと云ふ字の出初めは銅山へ着したすぐ前からだから此間の原稿の仕舞の方になる。回數はもう一寸分らないが、何でも長藏さんが坑夫に向つて「左りがシキだよ」と云ふ所がある。そこからさきを貰つてきてくれゝばいゝ。是は仕舞の方だから一寸持つて歸つても野田君の迷惑にはならない。それから、すぐ直して又持つて行つてもらひたい。どうも度々君子を煩はし奉つて恐縮千萬

六七八

明治四十一年一月二十日　午後二時—四時　牛込區早稲田南町七番地より[illegible]町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓御惠投の鑵詰今日着段々の御好意深く奉鳴謝候小子疎懶常にいづ方へも御無沙汰ことに舊臘より例の小說をたのまれたる上三女とも病氣にて病院開業の有樣ほとんど閉口今以て看護婦を一人賴み居候始末厄介無此上候大兄も御病氣の由然し大した事にも無之趣先以て安心然し御養生專一と存候淺井畫伯は惜し

き事致候小生いつか同君の水彩を欄間にかけ度と存居候ひしにまだたのみもせぬうちに故人となられ候。家がないから畫などたのんだつて駄目だと思つてるうちに畫の方が駄目に相成候。同君歸朝後の事業半途にて遠逝畫界のため深く惜むべき事に候不折もよろしからぬ由心痛致候小生も本年は四十二の厄年故どうなるか知れず。例の胃もよろしからず候
御惠投の鑵つめは平生參り候諸君子へすゝめて一餐の快をともにする積に候
坑夫かき上げる迄は氣がせいてなまけてるながら忙しく困居候
先は右御禮旁雜況迄　匆々頓首

正月二十日　　　　　　　　　　　　金

渡邊樣

六七九

明治四十一年一月二十二日　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より小石川區久堅町七十四番地[illegible]虎[illegible]氏へ

拜啓其後は御無沙汰小說がまだ濟まないんで何處へも出ない。時に僕倂の胃病で一寸醫者に見てもらつたら小便を試驗して是は糖分があるといふコイツには參つたね。それで自宅には器械がないから糖分ノ（原）パルセントを大學で調べてもらつてくれろといふんだがね。僕の療治法は其パルセントで極るんださうだ。そこで色々頼む人も考へればあるが君の親類の人に見てもらつてくれないかな。承知して呉れるなら時間と日どりを極めて小便をビールの瓶に入れて大學へ持たせてやる早い方が此方の便宜だ否や御廻答を願ひます

それから去月から病人ばかりで今は子供が口蓋炎とかいふものを煩つて口が腫れてヒー／＼泣いて気違でたまらない。此泣聲をきくと小説が一枚も書けなくなる。そこへ妻が寐ちまつた。仕方がないから看護婦を二人又雇つた。それでも雇へる丈が幸福だ

君のうちの病人は如何御大事になさい　以上

二十一日　　金之助

虎雄様

六八〇

明治四十一年一月二十四日　午後零時—一時　牛込区早稲田南町七番地より[illegible]町三十六番地[illegible]方中村蓊へ

拝啓先日は失敬。三四日前小生方へ封書をよこしたるものあり書中の人は君の近所のもの故入御覧候。尤も斬陽の種になるや否やは知らず候　以上

二十四日　　金之助

中村蓊様

六八一

明治四十一年一月二十六日（以下不明）　牛込区早稲田南町七番地より下谷区西黒門町二丁目一番地高嶋方市川文丸氏へ

拝啓先夜は失禮其節は好物御持参御蔭にて諸君子一夕の歡を添へ申候又和田山諸兄寫眞數葉是亦御親切

に御寄贈難有御禮申上候學年祭は面白き事と存候出來るなら御供致し度然し種々用事も控居候事故是非の御約束も仕かね候先は右御禮迄　匆々頓首

一月二十六日　　夏目金之助

市川文丸様

六八二

明治四十一年一月二十八日　午後二時―三時　牛込區早稻田南町七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

拜啓別紙の樣なものゝ捌き方をたのまれ候もし慈善會御保養の御覺召もあらば御出被下度候。もし御いやなら其儘御打棄置願上候岐阜訓盲院といふ（原）小生友人の父なる人の創立せるもの此男中年明を失ひ此事業に從事。今回の事はおもに其薫陶を受けたる人の發起に候。先は用事迄　匆々

一月二十八日　　金之助

渡邊和太郎様

演藝會は六日八日の兩日のよしこゝろみに兩日の分二葉宛差上候もし御入用ならそれを御取りあとは御都合にて小生方へ御返し被下るか又は賣りつけて被下候へば猶難有候

六八三

明治四十一年二月一日　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より府下大久保村百人町百五十三番地戸川明三氏へ

拝啓本日は久々にて参上致候處御留守にて不本意千萬に存候玉稿拝讀ながら社より封の儘相届候につき御査收願上候

夫から例の朝日文學欄につき池邊氏と篤と相談致たる處此三四月に至り紙面擴張の意見實行出來れば附錄ごとに文學ものゝ入要なれどそれまでは間文字の入れ所なき由に候

小生も右文學欄の出來るのを待ち居候へども是は單に編輯者の一存故主權者の方ではどうなるやら分らず候

もし左樣の改革も實行出來候曉には先日御話しの通小生知人に依頼面白きもの書いて頂き度と存じ居候

其節は是非御盡力相願度と存候

先づ夫迄は小生は先日申上候位のナマニエの儘で打過ぎる了簡故大兄も御投稿は一先づ御控え被下度候

先は右用事迄　匆々

二月一日　　　　金之助

秋骨老兄

御令閨より拝聞の上歸途横井氏の門内に這入り申候未だ赴任なき由故遠慮して家のなかは見ずに參り候

六八四

明治四十一年二月四日　午後五時―六時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區大久保余丁町馬場孤蝶氏へ

拜啓本日趣味を一寸のぞき候處例のリードルの件と思ひの外小生の人格に對し大々的御辯護の勞を辱ふし甚だ嬉しく候實は小生も云へば云ふ事はいくらでも候へども白雲子なるもの丶態度傍若無人故相手になるのを差控へ候始末。然しあれに對しそれ程の御同情を得んとは存じも寄らず。一兩〔度〕御目にかゝり候のみにて小生の心事深く御承知なき昨今別して知己の感に堪へず。茲に謹んで御禮を申述候

先日御紹介の早稻田學生に面會來意も判然其うち御邪魔にまかり出度と存候先は右迄　匆々

二月四日

金　之　助

孤　蝶　樣

侍　曹

六八五

明治四十一年二月四日　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區駒込西片町十番地瀧田哲太郎氏へ

拜復文學評論につき御申譯承知致候徹夜にては恐れ入候適當の所にて御まとめ願上候

虞美人草は既にとくの昔より一册も無之先般御申込の節も既に品拂の姿に候へばあしからず

夏目漱石論が來月の中央公論に出る由聊か恐縮致候。先達中より大分漱石論が出で申候。もう澤山に候。出來得べくんば百年後に第二の漱石が出て第一の漱石を評してくれゝばよいとのみ思ひ居候

坑夫病氣に召さぬ由已を得ざる次第に候。九十六回にて完結致候尤も東京朝日では休刊を補ふ爲め二回一所に載する事ある故九十三回位にて終る事と存候　先は右迄

二月四日

夏目金之助

瀧田樗陰樣

六八六

明治四十一年二月五日　午後一時—二時　牛込區早稻田南町七番地より相州大磯角伴方[illegible]氏へ　〔はがき〕

拜啓御病中をも顧みず御無禮の事相願恐縮の至。大磯では例の切符も何の御役にも立つまじく甚だ御氣の毒に存候。昨今の御病樣如何に御座候や。折角御養生專一に候。先は御禮迄　匆々頓首

六八七

明治四十一年二月七日　牛込區早稻田南町七番地より牛込區早稻田南町[illegible]番地[illegible]へ

啓上

御老人御逗留定めて御多忙の事と存候例の切符は先方の人大磯へ病氣療養の轉地中にて賣り損へり。然し御愛嬌に一枚は買つて呉れ候。小生も一枚頂戴致候

土曜には參る筈なれど小宮が行きたさうだから切符をやり申候あゝ云ふ處は若い人の方が出席する資格多きかと存じ割愛致候

此次の木曜に寶生氏を頼む積なり。尤も三時頃からみんなが来て遊ぶ由御出待ち候

切符代は大磯より〔原〕爲替のまゝ差上度どうか御面倒ながら御受取願度夫から小牛の分は現ナマにて封じ入候御落手願候

御老人へ御挨拶の爲め參上致す筈の處御混雜中と云ひ且つ御迷惑と存じ差控居候あしからず御容赦

先は右迄　匆々

二月七日　　　　金之助

森巻吉様

右の外に訓盲院の爲めに寄附金など御募りの計畫あらば多少は喜捨仕るべく又發起人として送附を受けたる切符四枚購買の義務有之は無論あと二枚は受持可申御遠慮なく御申聞被下度候

六八八

明治四十年二月七日　牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

啓上謠本五冊わざ〳〵御持たせ御遣はし御懇切の段感謝致候小生萬事不案内につき御申の通り寶生先生と相談の上御指定のうちを願ひ可申候今夜班女は少しにて濟む事と存候もし御都合もつき候へば御入來御兩人にて一番御謠あらまほしく候　先は御禮迄　匆々

二月七日　　　　　　　　　　　　　　金

高濱様

六八九

明治四十一年二月十日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より芝區[illegible]町[illegible]へ

拜啓其後は御無沙汰小生も小説をかいて仕舞ふと其間にたまつた用事を片付けねば［な］らず片付けてゐるとあとからすぐ雜誌やら何やら追かけてくる實に身體丈は閑であたまは多忙を極めてゐるのでついどこへも出です昨日久しぶりで一二軒へ行つて夫から銀世界を廻つて歸つて來た。梅は二三本開いてゐた。

妻君を國へ御歸しの由承知それで地方へ出かせぎの件も承知。小島へ依頼の件も承知爲事承知致候。是から此端で手紙を一散遣（端がきともいふ）其内で小島氏へも認める所也

坑夫は面白い由面白ければ難有い仕合せ。麗なる人草はわからぬ由是は少々困つた事也。もう少し賞めてもらひたい。高田が報知でほめてくれた。逢つた時よろしく願ひます。

今度の木曜に來るなら皆川君と來ぬか。（午後より）晩には寶生新が來て謠をうたつてみんなにきかせる筈。君謠がきらひなら仕方がない。

野村のうちは多勢御客があるさうだ　以上

二月十日　　　　　　　　　　　　夏目金之助

野間眞綱様

六九〇

明治四十一年二月十日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より松山市松山中學校小島武雄氏へ

拜啓漸々春暖の候に相成候處愈御清勝奉賀候却說御知り合ひの英文卒業生野間眞綱事事情あつて地方へ出かせぎに參り度由にて大兄の三月限り松山を去らるゝ由を傳聞しどうか小生から其後任として推擧ある樣依賴致候につき御手紙を差上る事に相成候

もし大兄の退松が事實に候はゞどうか野間君を御周旋願度ものに候。同君は御存じの通の好人物學問も小生保證致し候。履歷は陸軍士官學校、明治學院其他の英語教師に候

先は右御願迄　匆々

二月十日

夏目金之助

小島武雄様

六九一

明治四十一年二月十日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より相模國小田原在早川村清光館林原（當時岡田）耕三へ

拜啓過日御出京の砌は御忽々にて失禮其節橋本醫士の診斷にては肺部に異狀もなき由何よりの事此上は頭の方を精々御療養御歸京相成度候小生の糖尿もさしたる事も無之比例は〇・二に候へば當分死ぬ恐も無之候。大いなる蒲鉾わざ〳〵御送難有御禮申上候來る木曜には諸君子鮟鱇に會する約あり一きれ宛みんな

に接舞はんと存候先は右迄　匆々

二月十日　　　　夏目金之助

岡田耕三様

六九二

明治四十一年二月十日　午後三時―四時　牛込区早稲田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地高浜方岡田耕三へ〔はがき〕

此次の木曜には諸君子三時頃参りてごた〳〵に飯をくふ由。晩には寳生氏宅にて三山實盛を謡はれ候

二月十日

六九三

明治四十一年二月十六日　午後三時―四時　牛込区早稲田南町七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清へ

拝啓青木健作氏論文拝見致候ホト、ギスへ掲載之儀は如何様にてもよろしからうが是非共のせるべき程の名論文とも存じ不申然し載せてはホト、ギスの品格に害を與ふるとは無論思ひ不申候。昨日青年會館にて演舌今日之を通読問題が大に似たる處有之興味を感じ申候　以上

二月十五日　　　　夏目金之助

高濱老兄

六九四

明治四十一年二月十七日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より　芝區白金志田町十六番地　野間眞綱へ

拜啓本日小島氏より返事到來一足違にて後任相きまり御氣の毒の由後任は深江種明の由に候。故に君がもし越後高田を望むならば小島よりすぐに掛合ふ故電報（可相成）にて小島氏へ依賴ある樣申來り候。萬〔一〕越後の校長深江を手放さぬか又は松山難治の爲め深江の方で辭退すれば直ちに大兄を推擧可致旨に候。先は右御答迄　匆々頓首

二月十七日

夏目金之助

野　間　眞　綱　樣

六九五

明治四十一年二月十八日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より　府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内田方野上豐一郎へ　〔はがき〕

拜啓「御隣り」拜見仕舞の方は頗る面白く候。惜むらくは前が左程にあらず。もつと話めたらどうだらう。然しあれでもいゝかも知れぬ

六九六

明治四十一年二月二十四日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より　麴町區富士見町四丁目八番地　高濱清氏へ　〔はがき〕

朔日の講演速記は未だ參らず如何なり候にやかゝりは中村蓊に候。金曜に鼓を以て御出結構に存候。謡

望致候。ホト、ギスへ出す時には訂正致し度と存候。時間ガアレバア、云フ者デマトマツタモノニ書キ度候

鼓打ちに参る早稻田や梅の宿

六九七

明治四十一年二月二十六日　午後一時—二時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地瀧田哲太郎氏へ　〔はがき〕

啓新米は仰の方正しからんと存候御注意難有候講演會の筆記は朝日で出さなければホト、ギス四月號に出る筈です夫でなければ講演集を出すさうですが多分今度は講演集には出ますまい

六九八

明治四十一年二月二十九日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚楠緒氏へ

拜復

夫から夫へと用事が出てくるので御無沙汰をして居ります。かねて願ひました小説は正月から掲載の筈の處色々な事情が出來上りまして私が大阪の方へかく事になり夫を東京へも載せる事になりました。夫が爲めあなたの方も大ぎりに放り出して置いた譯で甚だ申譯がありません

一週間程前社の玄耳といふ男が旅行から戻りまして面會の上あなたの小説の事に就て同人も心配してゐましたんで相談の結果近日社から人を御宅へ出して改めて願ふ事に致して置きました。其時同人の話では書きかけて下さつたのは家庭ものだらうかたならば婦人の方へ出しても御承知下さるだらうか、又一ヶ月もあれば經まるだらうか抔と申して居りました。

右の譯でありますから御葉書を玄耳の方へすぐ廻して社のものを御宅へ伺は〔せ〕る事に致しますから、原稿の方はどうか御已めにならずに御繼續を願つて置く方が結構だらうと思ひます　先は右御返事迄　匆匆不一

二月二十九日　　　　金之助

大塚様

六九九

明治四十一年三月十二日　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より芝區伊皿子町三十五番地[illegible]川[illegible]清へ　〔はがき〕

拝啓野間の郷里の郡、村、番地御面倒ながら一寸至急御しらせ願候　以上

十[原]三日

七〇〇

明治四十一年三月十三日　午後五時—六時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

今日の俳諧師は頗る上出來に候。敢て一葉を呈して敬意を表す　頓首

三月十四日

七〇一

明治四十一年三月十六日　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

明治四十一年三月十八日　午前十一時—十二時　牛込区早稲田南町七番地より小石川区原町十番地寺田寅彦へ　〔はがき〕

日曜の音楽会には行きたいと思ふ。フロツクコートを着て新らしい外套を着て行きたい。切符御求願候。待合せる時と場所御報を乞ふ。ホト、ギスへ掲載の原稿書き直して見ると中々長くなり骨が折れさう也。萬一間に合はねば前日迄に断はり状を出し候。但し切符代はどちらにしても小生擔任の事

七〇六

明治四十一年三月十八日　午後八時—九時　牛込区早稲田南町七番地より本郷区森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき〕

ものうき為め人間謝絶の處又々金を借せと申すもの出来候甚だ御面倒ながら銀行へ御出被下間敷や。勝手のとき丈は御光来を仰ぐ次第に候　以上

七〇七

明治四十一年三月十九日　牛込区早稲田南町七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清氏へ

拝復ページ数相分り候とようしく候へども未だ判然不仕定めて御迷惑と存候が、いくら長くてもよしとの御許故安心致、可相成至速力にて取片附一日も早く御手元へ差出し度と存候。御風邪未だ御全快無之由存分御大事に願候。本日の面会日は謝絶致候。近来何となく人間がいやになり此木曜丈は人間に合はずに過ごし度故先達失禮ながら御使のものに其旨申入候。尤も謡の御稽古丈は特別に御座候。呵々

鏡花露伴両氏の作只今持ち合せず。草迷宮は先達て森田草平持ち帰り候。玉かづらは最初より無之候。近日来の俳諧師大にふるひ居候。敬服の外無之候。益御健筆を御揮ひ可然候。　以上

三月十九日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

虛子様

七〇八

明治四十一年三月二十四日　牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸へ

出來るならば一欄に組んで頂きたいと思ひます

題は創作家の態度と致して置きませう、

拜啓多分明日は出來るだらうと思ひます、十九字詰十行の原稿紙で只今二百五十枚許かいて居ります。多分三百枚内外にならうと思ひます。明日書き終つて、一遍讀み直しをして、差し上げたいと思ひます。何だかごた／＼した者が出來て、少々ひまをつぶします。頭がとぎれ／＼になるものだから大變な不經濟になります　頓首

二十四日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

虛子様

御風邪は如何で御座いますか。

七〇九

明治四十一年四月五日 午後十時ー十一時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豊隆へ［はがき］

御病氣の由時々御大事に可被成候近頃の風邪はチフスに成る事あるとか承り候。尤も東洋城の云ふ事故あまりあてにならず候。全快の上可成早く論文御片付可然候　以上

七一〇

明治四十一年四月五日 午後八時ー九時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地狩野亨吉氏へ

拜啓先日は失禮其節御話しの鹿兒島高等學校教師の件につき小生は文學士野間眞綱を推薦致し候が若し大兄の方へも聞き合せ參り居候へば何卒同人御周旋願上度本人は第五出身にて至極の好人物且篤學の人良教師として高等學校の先生として恥かしからぬ事は受合候。目下同人は郷里鹿兒島へ歸省中。小松原氏へも其旨相話し置候間右御含の上宜敷御取計願度候。一寸參堂の積の處每日々々何か事が起りつい〳〵容易に出られぬ事に歸着致候　以上

四月五日　　金之助

狩舟老兄

七一一

明治四十一年四月五日［明治四十一年か］ 牛込區早稲田南町七番地より下谷區中根岸町三十一番地中村鈼太郎氏へ

拜啓其後御無沙汰無申譯候

偖小生知人二宮行雄より郷里のものゝ碑文揮毫方を大兄に御依賴致度につき小生より紹介致し呉れ間敷

やとの希望につきもし御寸暇も有之ば此手紙持参の人に御面會の上御高教賜はり度候右用事迄候は拜顔の上萬々可申述候　以上

四月五日　　夏目金之助

中村不折様
　座右

七一二

明治四十一年四月十二日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より　京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

尊書拜見ホト、ギスは五部程もらひたれど來る人がみんな持つて去りて只今一部殘り居るものを昨日芥舟先生に進呈する約束をしたる故今は小生の分(誤植を正したる)のみ手元に有之。折角故社の方へ申しつかはし可申然し殘部あるや否や分りかね候間其邊は御容赦を願候。夫から毎月送る事については是迄僕が二部宛もらつて居るから其一部を君の方へ廻す事にしたらよからうと思ひ候是も社の方へ依頼致し置候

森田先生は一昨日小生方を引き拂ひ下宿したり。牛込築土八幡町二十四番地に居る筈に候。是は同學の高辻法學士の寓居にて同君が親切に自分の方へ來いといふからにて候。こんな時には趣味嗜好の友達よりも人間としての友達の方が有益なるものと被存候高辻氏は基督教のよし但し文學は一切知らぬ男なるべし

春雨蕭々日來小閑を得て二三無沙汰見舞をなし居候大阪の素川氏又々來阪を促がす中々上方の花抔を見て居る譯に參らず候

先達てある書生が書を寄せて漱石の小説はまとめて讀むべきものなり新聞にて日々讀めばつまらぬ故漱

石の名を損するのみ早く退社せよとありたり。小生も至極御同感に御座候。然し退社して單行本ばかりでは食へないから矢張り新聞小說をかく積りに候。

同書生又曰くよろしく悠々自適の生活を送るべしと。是も至極賛成に候。然し金をやるからとも何ともなきのみならず本人自身大の貧乏書生にて文を賣る口を周旋してくれと云はぬ許りの口吻也。小生此人に朝日新聞の小說欄を讓るべきか。呵々

四月十二日

夏目金之助

中村蓊様

七一三

明治四十一年四月十七日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より青森縣北津輕郡板柳町安田秀次郎氏へ

貴書拜見致候拙著御愛讀被下候趣難有存候御手紙の次第委細承知致候面白からんと思ふ人に逢へば却つてつまらぬものに候。然し折角の御希望御序の節は御立寄相成度候小生都合は毎木曜日（面會日）よろしけれど遠方よりわざ〳〵の御出ならばいつにても在宅の節は御目にかゝり可申候此手紙到着の節は既に東京表へ御出立の後と存候へども仰せに任せ折返し御返事如此に候　以上

四月十七日夜八時半

夏目金之助

安田秀次郎様

七一四

明治四十一年四月十九日 午後八時 牛込區早稻田南町七番地より本郷區[illegible]町一[illegible]七番地[illegible]郎氏へ 〔はがき〕

御手紙只今拜見明日御出被下候て差支無之候右御返事迄 草々頓首

四月十九日八時

七一五

明治四十一年四月二十六日 午前(時不明) 牛込區早稻田南町七番地より[illegible]表町一丁目[illegible]戸田方松根豐次郎へ 〔はがき〕

春色到吾家

おくれたる一本櫻憐也

南風故園情

逝く春やそゞろに捨てし草の庵

右御採用にはなりませんか

七一六

明治四十一年五月六日 午後零時—一時 牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豐一郎へ 〔はがき〕

端午の贈物難有存候。薰風南より來つて日々無腸の鯉をふくらます。天下の新綠又愁人の眼をようこばしむ。多謝々々

七一七

明治四十一年五月六日　午後六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區[illegible]町一番地小宮豐隆へ

拜復

あの女はほかに行く處がきまつてゐる由御失望御察し申候へども一方にては大いに賀すべき事に候學校を卒業もしないうちからさう萬事が思ひ通りに運んでは勿體な過ぎます、さうして人間が一生グウタラになります、勝者は必ず敗者に了るも〔の〕に御座候。ことに金や威力の勝者は必ず心的に敗者に了るが進化の原則と思ひ候。先は右御祝辭迄　草々頓首

五月六日　　　　　　　　　　　　金之助

豐　隆　樣

七一八

明治四十一年五月八日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より大[illegible]へ　〔はがき〕

御令閨御安產のよし奉賀候愈おとつさんの責任を生じ候事大事件に有之候。造士舘の方の成功を祈る

七一九

明治四十一年五月十一日　午後五時—六時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區駒込西片町十番地[illegible]氏へ

拜啓御手紙拜見致候先月中より御病氣の趣始めて承知ことに御繁[illegible]にてはさぞ御家事一切に御[illegible]り

候。貴簡の方御心配に及ばず小生どうせ一兩日中に瀧川氏へ參る積につき面會の上萬事同氏へ相談可致置候につき御介意なく御療養可然と存候もし御轉地先にて御徒然の餘り御執筆の運にも至り候へば好都合と存じ夫のみ祈り居候

そらだきは文章に御苦心の樣に見受申候趣向は此後如何に展開し可申や御完結の上ならではと存じ凡て差控申候

藤村氏のかき方は丸で文字を苦にせぬ樣な行き方に候それも面白く候。何となく小說じみて居らぬ所妙に悄然しある人は其代り藤村じみて居ると申候。あれも長きもの故萬事は完結後ならでは惡口申しかね候

さし繪御氣に入らぬ由殘念に候。然し普通の新聞さし繪はまああんなものぢやありませんか。

轉地はどこへなさいますか。あんまり小田原近邊だと却つて肺病に近いだからよせと醫者から云はれた人があります。あなたのは胃炎だから左程傳染の心配はないでせうがまあ可成安全な所へ入らつしやい。

此手紙は候文と言文一致の相の子の〔手紙〕であります　頓首

五月十一日　　　　金之助

大塚楠緒子樣

一週間に一返手紙をよこせとか毎日よこせとか云つて無花果を半分づゝ食ふ所がありましたね。あすこが面白い。今迄ノウチデ一番ヨカツタ

七二〇

明治四十一年五月十六日　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區西片町十番地大塚楠緒氏へ

拜啓今夜瀧川君から別紙が參りましたから御參考の爲めに御目にかけます。もし御都合であとが書く事が出來れば私も結構社の方も大喜に候。只今主筆池邊氏は參無理に御執筆を願出御心の通りのもの出來ねば御氣の毒であり且それが爲め御病氣に障る樣な事があつては濟まぬと申され居り候へば決して御心配には及び不申只私共の希望丈を申上るのみでありますから其積で御讀を願ひます　草々頓首

五月十五日夜

金之助

大塚楠緒子様

七二一

明治四十一年五月十八日　午前九時―十時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豐隆へ

啓

飛んだ夢を御覽になつたものに候。あんな夢はかいてくるに及ばず候。近頃の樣になまけて居ては駄目に候。もう少し勉强をなさい。

坑夫の校正は大抵にてよろしく候。少し位誤植があつても平氣に候。讀む人は猶平氣に候。

大塚さんのそらだきが好評嘖々の由社より報知有之先以て安心致候。池邊主筆曰くあれは中々うまいですねと。池邊主筆すらうまいと云ふ。讀者の歡迎するや尤なり。

追々短篇をちよい〳〵かく積りに候。

筆はルイレキの由度々御面倒に御座候。うまいものを食はせて夏は海岸へでもやらうかと存候

妻君未だ臥床困り入り候。いゝ加減に死んで呉れぬかと相談をかけ候處中々死なない由にて直ちに破談に相成候

サランボーと云ふものを讀み居候。瑰麗無比のものに候。中々うまいものに候。フローベルは兩刀使に候。エラク候。今夜寐しなに御手紙をかき候是も入らぬ事に候。只筆が持ちたくなつたからに候　草々以上

五月十七日夜　　金之助

豐隆樣

七二二

明治四十一年五月十九日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より相模國小田原在早川村清光院林原（當時岡田）耕三へ　〔はがき〕

先日は失禮大阪の日曜附錄には蕪稿掲載なし多分此つぎ位に廻したるならん。病氣御大事に御療養の事。

小生無異

五月十八日

七二三

明治四十一年五月二十八日　牛込區早稲田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拝啓
此手紙持参の人は宮澤鎌一郎とて俳道執心のものに有之よし今般四年がゝりにて俳諧辭書編輯を了へ大倉書店より出版につき大兄の序文もしくは校閲願度旨にて参上仕候につき御面倒ながら御面會相願度と存候本人は小生未知の人に候へども大倉書店よりの依頼にて一筆申上候たゞし大兄には運座の節一兩度御目にかゝり候由先は右當用のみ　草々不一

五月二十八日　　　　金　之　助

盧　子　先　生
　　　梧　下

七三四

明治四十一年五月三十日　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ　〔はがき〕

拝啓木曜には雨天にて御出無之。俳諧師頗る面白く候。十風が北海道へ行つてからが心配に候。あともどうかあの位に御振ひ可被下候。

七三五

明治四十一年六月七日　午前（時間不明）　牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

拝啓今回の演說再應御依頼なれど胸中無一物にて發展致し様も無之甚だ我儘ながら此次へ御廻し被下度候戸張岩村兩氏へ露伴氏でも加へたらば丁度よき時間と存候大塚氏辭退は如何なる譯にや殘念に候。

御尊慮の御都合も有之べくと存じ折返し御返事申上候　以上

六月七日

夏目金之助

中村蓊様

七二六

明治四十一年六月十四日　午後六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市山下町四百四十番地上村清延氏方中村蓊へ

久々にて御手紙拜見鹿兒島の方は其後どうなる事と思つて居つた處漸く落着是で君も當分安心御親父も御都合よく大に結構　小松原氏も居る事だから萬事便宜だらうと思ふどうか勉強して學校並びに自分の爲になる樣に働らかれる事を望む。小兒が大きくなつた由小兒の大きくなるのは實に早いものでおやぢは毎日の樣に驚ろかされるものだ。僕のうちは總勢五人で今年の末か來年正月頃には又生れるさうだ。かう毎年多事になつてはたまらない。人口を繁殖して御上に御奉公をする割には收入が增さないから、いかに愛國の士でも御奉公に考へものである。寺川には其後二遍逢つた。畔柳は喉頭結核にかゝつた。君も身體を大事にせんといけない。野村は氣樂らしい。あの男はからだ丈は大丈夫らしい。マードツクさんは僕の先生だ。近頃でも運動に薪を割つてるかしらん。英國人もあんな人許だと結構だが、英國紳士抔といふ名前にだまされて飛んだものに引かゝる。櫻島の溫泉に這入つて見たい。此間橋口の弟が歸省したが君には逢へなかつたさうだ。人吉迄汽車がかゝつたさうだ。球磨川の沿岸の景色は定めて好いだらう。おとつさんが祝を呉れると云ふなら是非もらひたい。但し急がないから忘れない樣に御父さんに話して置いてくれ給へ年寄は萬事忘れつぽくつて困る。僕は野村に新婚の御祝をやらうと思つていまだに忘れてる。又其う

ち小説をかき出すといそがしくなる。先は右迄　草々頓首

六月十四日

金　之　助

眞　鍋　様

七二七

明治四十一年六月十九日　午前九時―十時　牛込區早稻田南町七番地より芝區伊皿子町三十五番地長谷川正誼へ　〔はがき〕

拜啓御恵投のぜんまい到着難有候あれは水につけてふやかすものかと存候　以上

十　九　日

七二八

明治四十一年六月二十一日　牛込區早稻田南町七番地より府下青山原宿二百○九番地森次太郎へ

先刻は失禮御依頼の發句二つ程短冊に認め入貴覽候御氣に入らぬ方は御捨て可被下候右當用迄　草々頓首

六月二十一日

夏目金之助

森　様

七二九

明治四十一年六月二十一日　午後五時－六時　牛込区早稲田南町七番地より京橋区滝山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

拝啓陽炎拝見頗る面白く候はやく後篇を御廻附あり度候愚見は御目にかゝりたる時可申上候わる口も申上度候。然しよければ紙上にて大喝采を博す小説に相違無之ひそかに君の成功を祝し申候もう少しハイカラに書くが流篇として「春」の後を傳ふる度心地も致し候。委細は御目にかゝりたる時に譲り可申右不取敢申上候　以上

六月二十一日

夏目金之助

中村蓊様

七三〇

明治四十一年六月三十日　午前十一時－十二時　牛込区早稲田南町七番地より赤坂区表町一丁目一番地戸田方松根豊次郎へ　〔はがき〕

悼亡

青梅や空しき籠に雨の糸

六月晦日

七三一

明治四十一年六月三十日　午後三時－四時　牛込区早稲田南町七番地より麹町区富士見町四丁目八番地高浜清へ　〔はがき〕

今日の花洲先生鑿々として東西南北を睥倒致し候には驚入候欣羨々々

五月雨やまたと云はれし御月並

七三二

明治四十一年七月一日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜復小光はもつとさかんに御書きになつて可然候決して御遠慮被成間敷候今消えては大勢上不都合に候。鼠骨でも今日の彌次郎兵衛の處は氣に入る事と存候。「文鳥」十月號に御掲載被下候へば光榮の至と存候十月なれば東朝へ承諾を求むる必要も無之かるべくと存候。文鳥以外に何か出來たら差上べく候へども覺束なく候。ドーデのサッフォーと云ふ奴を一寸御讀みにならん事を希望致候名作に御座候。俳諧師の著者には大いに參考になるだらうと存候

今日の能樂堂例により不參に候。明日御令兄宅の御催し面白さうに候。ことによれば拜聽に罷り可出候。小生夢十夜と題して夢をいくつもかいて見樣と存候。第一夜は今日大阪へ送り候。短かきものに候。御一讀被下度候。盆につき親類より金を借りに參り候。小生から金を借りるものに限り遂に返さぬを法則と致すやに被存甚だ遺憾に候。おれが困ると餓死する許りで人が困るとおれが金を出すばかりかなあと長嘆息を洩らし茲に御返事を認め申候　頓首

七月一日　　　　　　　　　　　　　　　金

鮟鱇や小光が鍋にちんちろり

虚子先生
　　座右

七三三

明治四十一年七月四日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜啓又餘計な事を申上て濟みませんが小光入湯の所は少々綿密過ぎてくだくだ敷はありませんか。小光をも描かす小光と三藏との關係も描かす、云はゞ大體に關係なきものにて只風呂桶に低徊してゐるのではありませんか。さうして其低徊がそれ自身に於てあまり面白くない。どうか小光と三藏と雙方に關係ある事で段々發展する樣に書いて頂きたい。さうでないと相撲にならない。妄言多罪　頓首

四日　　金之助

虛子先生

七三四

明治四十一年七月五日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

前文御用捨御尋ねの豐彥は勿論豐國の間違に御座候どうか直して下され

七月五日夜

七三五

明治四十一年七月十一日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜復

御ふさ〔さ〕んは異存はなからうと愚妻が申します。然し松根がもらひたひのですかあなたが御周旋に
なるのですか伺つてくれと申します。

御ふささんは妻のイトコです貧乏です。支度も何もありません。　以上

七月十一日　　　金

虚子様

七三六

明治四十一年七月十二日　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

又啓

あなたが此事件で歩を御進めになれば自然松根に直接意見をきく事になります。さうすると公平を保つ爲めに私の方でも御房さんに其事を話さなければなりません。即ちあなたの思ひつきで松根に向つて御房さんをもらはないかと口をかける由と通知するのであります。それで本人が否だといふたら直ぐ無駄な御骨折を御中止を願ひます。又異存なしと答へたら何分にも御面倒を願ひませう。只今愚妻留守につき歸り次第御房さんの考を〔き〕かせますから左樣御承知を願ひます　頓首

七月十二日　　　金之助

虚子先生

七三七

明治四十一年七月十三日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より廣島市猿樂町鈴木三重吉へ

拜啓國元よりの御手紙にて御歸國の處御親父の御逝去に間に合はず御心殘り無此上事と存候諸事御片付方嘸かし御心配と遠察致候御身御大事に暑中御厭ひ萬障を排し御奮戰の義偏へに願候委細は東京にて拜眉の上萬々可申述不取敢御弔詞迄如斯に候　以上

七月十三日　　　　金之助

三重吉様

七三八

明治四十一年七月十四日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

謹白

「私は無教育でありまして到底高等の教育を受けた人の奥様になる資格はありませんが――もう一年も仕事でも勉強して――」

御房さんがこんな事をもしくは之に類似した事を愚妻迄申し出たさうです。これに由つて之を觀ると謙遜の樣にもあり。いきたい樣にもあり。一寸分りませんな。然し否ではないんでせう。さう手詰に決答を逼る必要もないから愚妻はよく御考へなさいと申したら、御房さんはよく考へて見ますと申したさうであります。

右は小生の直接硏究に無之候へども大體の見當は間違つた愚妻の報知とも思はれません
右迄　草々

七月十三日

金

盧子先生

七三九

明治四十一年七月十八日　午前六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より京都市室町通今出川下ル高島氏内中村蓊へ

拜啓御令弟突然御死去の爲め御西下の趣拜承嘸かし御愁傷の事と遙察致候乍然例の病氣にて長びきては御本人は無論大兄も隨分御苦痛の事と存候へば天壽にて早世被致候方將來の爲には却つて御都合かとも被存候

玉稿「春」のあとへ出ず烏の後に相成候趣御經濟の方は夫にてよろしきや。小生は阪朝鳥居君の依賴にて九月初旬より掲載の小說にとりかゝる筈なれども原稿料其他にて大兄の御不都合を招く事あらば「春」のあとへは寧ろ掲載を望まぬ方に候。何れ其うち御歸京とも存じ候へば御面會の上諸事御相談致度と存候先は右御弔詞旁當用のみ申述候　頓首

七月十七日夜

金之助

中村蓊樣

七四〇

明治四十一年七月二十一日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より麻布區山元町三十六番地小島武雄氏へ

啓上御尋ねの伊藤政市著につき皆川正禧氏より別紙の如き回答有之候故爲御参考入御覧候
先〔は〕當用迄　艸々以上

七月二十一日　　夏目金之助

小島武雄様

七四一

明治四十一年七月二十一日　午後八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき〕

要するにプロフエソーの批評はプロフエソーの人物の如きものである。自分が知らない水練の批評を講堂でするると同じである。彼はかれの力學をすぐ實際に應用出來ると思へり。それすら亂暴也。況んや其力學の頗る覺束なきをや
　只今春陽堂來る。十六頁程多しと云へり
　獨乙のプロフエソーは蒟蒻問答の樣ナ愚論チンシテ居ルノデハナキカ。

七四二

明治四十一年七月二十三日　午前八時―九時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

拜啓別封花物語は寅彦より送り越し候もの中には中々面白きもの有之出來得るならば八月のホト、ギスへ御出し被下度候

新旅行小石川同心町の住人代稽古に參り候中々上手に御座候何と申す人にや大藏省へ隔日に宿直する人の由

修善寺は如何に候ひしや　頓首

七月二十三日

金

虛子先生

七四三

明治四十一年七月二十七日　午前十時－十一時　牛込區早稻田南町七番地より愛媛縣溫泉郡今出町村上半太郎氏へ

酷暑の砌愈御清穆奉賀候小弟無異碌々消光御休神可被下候。拙作御所望にあづかり汗顏只今東朝に「春」と申す長篇掲載了りあとを引き受ける事に相成九月初より兩三囘に又々顏をさらす始末にて只今腹案を調へ中三四日中に執筆に取りかゝり度と存居候へども何だか漠然として取り留めなく自分ながら恐縮の體に御座候。掲載の上は何かど御助力にあづかり度と存候

近來俳句も作らず作らうとしても出來かね候。道後の溫泉へでも浸らねば駄目と存候

まいあたり精靈來たり筆の先

七月二十七日

金

霽月老臺
　　座右

七四四

明治四十一年七月三十日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より佐世保市港町四十一番地石井氏方鈴木三重吉へ

御手紙拜見東京の暑は大變なもので此二三日は非常に恐縮して小さくなつてゐる。夫でも堪らないから時々湯殿へ行つて水を浴びて漸く凌いで見たがすぐからだがほてつて氣が遠くなつて仕舞ふ。そこへもつて來てエルドマン氏のカントの哲學を研究したものだから頭が大分變になつた。どうかトランセンデンタル・アイに變化して仕舞たいと思ふ。

小宮からも手紙が來て君と停車場で落合つたとかいてある。何でも洋服屋の小僧に逆鱗してゐたとかいてあつた。小說をかゝなければならない。八月はうん／＼云つて暮す譯になるか、まあ命に別條がなければいゝがと私かに心配して居る。君の手紙や小宮の手紙を小說のうちに使はうかと思ふ。近頃は大分するくなつて何でもといふと手近なものを種にしやうと云ふ癖が出來た。

小宮ノ婆さんは達者なのださうだ。風邪でも引いて寢てゐて呉れなければ折角歸つた甲斐がないと云つて來た。

藩主の弟が死んで今日は市ヶ谷から永井邕香爐持に雇はれたと東洋城から云つて來た。今日は君大變な暑さだ。東洋城が途中でひつくり返りはしないかと思ふ。大方神主の服裝を着て行つたのだらう。神主の服に夏服があるかな。

あまり暑いから是で御免蒙る。　艸々頓首

七月三十日　　　　　　　　　　　　　　　金

三重吉様

七四五

明治四十一年七月三十日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より福岡縣京都郡犀川村小宮豐隆へ

拜啓　道中の手紙も着の手紙も到着拜見。御婆さん御無事の由結構に存じます。第一銀行の株は其後叉下がつた樣だよ。東京は熱い事夥だしい水を二三度浴びてゐる。明後日あたりから小説をかく。君や三重吉の手紙もことによつたら中へ使はうかと思ふ。

家内無事妻君の御腹は段々擴張。筆はブツ／＼が出來て貧民の餓鬼の樣である。猫が無暗に反吐をはいて始末がわるい。森田草平横寺町正何とか院へ轉居。東洋城香爐を捧げて御葬に染井迄行く藩主の弟が死んだのださうだ。

割合に蚊が少なくて凌ぎいゝ。今此手紙と三重吉への手紙とそれからもう一本かく。

珍らしく近所で義太夫を語つてゐる。何だか分らない。負けない氣で謠でもやらうと思ふが一人では心細いから虛子先生を待つてゐる。　艸々

木曜の晩

七月三十日　　　　　　　　　　　　　　金之助

豐隆様

七四六

明治四十一年八月三日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より福岡縣京都郡豐津村小宮豐隆へ　〔はがき〕

小說はまだかゝない。いづれ新聞に間に合ふ樣にかく。中々あつい。田舍も東京も同じくわるい人が居るのだらう。此分では極樂でも人殺しが流行るだらう。僕高等出齒龜となつて例の御嬢さんのあとをつけた。歸つたら話す。小供が丸裸である。どうも天眞爛漫として出來ものだらけだ。驚ろいた。

七四七

明治四十一年八月十九日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱清氏へ

御書面拜見朝日への短篇澁川君に御引受のよし敬承御多忙中嘸かし御迷惑と存候然し是にて澁川君は大なる便宜を得たる事と存候

今日「三四郎」の豫告出で候を見れば大兄の十二日の玉稿如何にもつなぎの樣にて小生は恐縮致候。全く大阪との約束上より出でたる事と御海恕願候。「春」今日結了最後の五六行は名文に候。作者は知らぬ事ながら小生一人が感心致候。序を以て大兄へ御通知に及び候。あの五六行が百三十五回にひろがつたら大したものなるべくと藤村先生の爲めに惜しみ候

昨紅綠來訪久し振に候。絽縮緬の羽織に絽の繻絆〔原〕をつけ候。なか〳〵座附作者然としたる容子に候ひし

大兄を訪ふ由申居候參りしや。暑氣雨後に乘じ捲土重來の模樣小生の小說もいきれ可申か　草々

八月十九日　　　　金之助

虚　子　先　生

七四八

明治四十一年八月二十四日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より麻布區山元町二十六番地小島武雄氏へ

拜啓大谷繞石君今般金澤高等學校へ赴任相成候については其あとが明く樣子に候。眞宗大學京北中學東洋大學の三所に候。大谷君は後任周旋の委任を受け居らぬ由にて各自學校にて人撰中との事に候。御運動如何にや。右一寸氣つき候まゝ御通知申上候　以上

八月二十四日

夏目金之助

小　島　武　雄　樣

七四九

明治四十一年八月二十四日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内海方野上豊一郎へ

此間は御出の處謠の稽古中にて御歸りの趣夢十夜の批大仕事と存候今日冷氣にて少々意外に候。今年は夏の方がいゝ心地に候。秋がくるのがいやに候。

社から月給をもらひたいに付ては御ひまな時封入の名刺を以て京橋區瀧山町四の社の會社[原]へ行つて御受取を願度と存候。二十五日の午後が渡す日なれど今月末迄のうちにていつにてもよろしく候　用のある時丈使つて濟まぬ事と存候。小說如何なり候や。小生も折角苦心中。八重子樣へよろしく　以上

八月二十四日

金之助

豊一郎様

七五〇

明治四十一年八月三十一日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

拜啓森田友人にて高辻と申す法學士が謠がすきで今度の日曜に僕の宅へ來て謠ひたいと申すよしに候。所が先生非常の熱心家なれど今年の正月からやつたのだから僕と兩人でやつたらどんな事に相成り行くか大分心細く候につき番頭取りとして御出が願はれますまいか。其上高辻氏は何を稽古してゐるか分らず小生の番數は御承知の通り共通のものがなければ駄目故旁御足勞を煩はし度と思ひますがどうでせう。此人は城數馬のおやぢさんに毎晩習ふんださうです。きのふも尾上に習ひました。尾上は中々うまい。

溫泉宿完結奉賀候趣意は一貫致し居候樣に被存候が多少說明して故意に納得させる傾はありますまいか。一篇の空氣に甚だよろしき樣被存候

三四郎はかどらず昨日の如きはかゝうと思つて机に向ふや否や人が參り候。是天の呪咀を受けたるものと自覺しとう〳〵やめちまいました

右當用に添へ御通知申上候　草々

二百十日

金

虚子先生

七五一

明治四十一年九月五日（時間不明）　牛込區早稻田南町七番地より麻布區山元町二十六番地小島武雄氏へ

拜啓明治學院講師皆川正禧氏今般鹿兒島高等學校へ赴任につき後任として大兄を推擧する樣野間眞綱氏より依頼ありたる旨につきもし御希望も有之候へば芝伊皿子三五番地皆川正禧宛にて履歴書至急御送り相成〔度〕由に御座候先は右當用迄　草々頓首

九月四日午後　　　　夏目金之助

小島武雄樣

七五二

明治四十一年九月十一日　午前十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市下荒田町百九十一番地野間眞綱へ

拜啓皆川は立ち申候鹿兒島中學の教師として副島は如何に候や三次には氣候其他の關係にて在任希望せぬことに先頃より持病とかにて鄕里に歸省中とか申來候が目下もはや歸任せるや否や存じ不申。同人かねての志願に海岸にて暖かき所と有之便利は大分あしき樣なれど鄕里にも近ければ如何ならんかと存候

右用事迄申入候　以上

九月十日　　　　夏目金之助

野間眞綱樣

七五三

明治四十一年九月十二日　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目二番地山口方松根豐次郎へ　〔はがき〕

御安着を祝す。猫遺書無数頂戴一々所蔵まかり居候。小説を書いてゐる為め返事を出さず候。エイ子百日せき。其他の小動物悉く異状ナリ。草合出来一部献上致度候。小宮帰着。大イニ紳士ヲ気取り居候。三重吉未ダ帰ラズ。三四郎マダ書ケズ

七五四

明治四十一年九月十四日　午後[illegible]　牛込區早稲田南町七番地より　赤坂區表町一丁目二番地山口方松根豐次郎へ　〔はがき〕

[illegible]へ

府下巣鴨町上駒込三百八十八番地内[illegible]方野上豐一郎へ

本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

辱知猫儀久々病気の處療養不相叶
昨夜いつの間にかうらの物置
のヘッツイの上にて逝去致候
埋葬の儀は車屋をたのみ箱詰にて裏の
庭先にて執行仕候。但主人
「三四郎」執筆中につき御會葬には
及び不申候　以上
九月十四日

〔野上宛の端書には「……蜜柑箱へ入れて裏の庭先にて……」とあり〕

七五五

明治四十一年九月十六日　午後〇時―一時　牛込區早稲田南町七番地より下谷區谷中清水町五番地橋口清氏へ

拝啓草合せ御蔭にて漸く出來御盡力奉謝候
表紙奇麗に且丈夫さうに見え候。結構に御座候
扉「坑夫」の方は甚だ面白く拝見致候へど野分の結婚の方は少々不出來と存候大兄御自身の御考は如何

に候や。有體を申せばあの方は増版の時に何とか御再考を願はんかと我儘な事を希望致し候がどうでせうか

小說濟しだい參上御禮可申上候。

インキ壺の中の銀[illegible]義其道のものゝ說を承はり候處矢張腐蝕の憂有之由エナメルでも掛ける譯にはいかぬものにや。もし御存も有之候はゞ御相談願上候。貴樣へよろしく　以上

九月十六日

金　之　助

橋　口　樣

七五六

明治四十一年九月二十一日　午後[illegible]時　牛込区早稲田南町七番地より[illegible]町小山内[illegible]氏へ　〔はがき〕

啓先日は御親切に貴著「窓」御寄贈にあづかり難有存候拙作「草合」御禮のしるし迄に一部進呈仕度と存候小包にて差出置候間御落手被下度候　草々頓首

九月二十一日

七五七

明治四十一年九月二十九日　午後一時—二時　牛込區早稲田南町七番地より水戸市釜神町三番地高濱清二郎氏へ　〔はがき〕

啓上

佳肴厨に來り青燈室を照す北人南人秋古今なり深謝

拙書草合春陽堂に托して御届可申候御落手願上候

二十九日

七五八

明治四十一年十月四日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

Urban, Die Literarische Gegenwart 3,25
なるもの丸善ニ來レリ。
買フ氣ハナキカ

七五九

明治四十一年十月十二日　午後○時—一時　牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百二十四番地野上豐一郎へ

先日は失敬御病人御變りもなき由御大事に可被成候當方自炊の由隨分厄介な事と御察し申候
入院證御依頼の通捺印御廻送及候御受取可被下候

朝寒や自ら炊ぐ飯二合

十月十二日　　金之助

豐一郎様

七六〇

明治四十一年十月十九日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町田中屋鈴木三重吉へ

愈御乘込のよし定めて御地は大賑の事と存候東京では成田へ行つたから成田屋あとみんなが申居候然るに住所は當分田中屋のよし。多分結構と存候。隨分酒を御飲過にならぬ樣願上候

小生八王子以來生活機能の降下を示し何にもたべる慾心無之。實は驚居候。然し毎日一食位で事が濟めば結句難有ものに候。四十二の厄から生活組織一轉日々紅茶一碗を口にするのみ。それでも童顏ピン／＼として健康少年を凌ぐとか何とか後世の史家に書いて貰はうと思つて居る。エイ子熱が出て四十度になる四五日閉ぢ事。何の爲の熱やら分らず。ゆふべは熱の爲の惡感を癲癇と間違へて青くなる。昨日は猫の三十五日に當る。細君鮭一切れと鰹節飯一椀を佛前に供す。筆子ヴイオリン入學。虛子近來木曜に來らず。文部省の美術展覽會は愚なり。和田三造の鐵工場見られざるぶるなり。小說の方が畫より數等進步して居る。目出度／＼　草々

十月十九日

金之助

三重吉樣

いつか參らんと存候。御前樣へ宜敷願上候。秋晴に印幡沼の鰻の居所を見てあるきたく候

七六一

明治四十一年十月二十三日　午後三時—四時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區富士見町四丁目八番地高濱淸氏へ

啓寺田に聞いて見ました處小說集に名前を出す事はひらに御免蒙りたいのださうであります。序の事は

本人は知らないらしかつた。然し厭でもないのでせう默つてゐました。一遍集めたものを讀み直した上の事に致したいと存じます　以上

十月二十三日　　　　金之助

虚子樣

七六二

明治四十一年十一月六日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町紅葉館林原（當時岡田）耕三へ

拜啓先日はわざ〳〵御來訪の處御遠慮にて玄關より御引取逡に不得御面語甚だ遺憾に存候其節の頂戴物正に拜受難有候御禮を申さうと思つた〔が〕君の宿所が分らぬ故其儘にして置き申候三女は腸チフスで一時は熱が高く弱つたれど只今は回復期に向ひます安心に候家族が多いと始終何かある寧日なき有樣夫でも多數の人よりもまだ〳〵大分幸福の方ならん君も大分一身上の心配やらごた〳〵やらある由頭の具合近來は如何にや

草合せを上げやうと思つて居たが皆なくなつて仕舞つた。三四郎が本になつたら上げやうと思ふ。

右迄　草々

十一月六日　　　　金之助

岡田耕三樣

御手紙拜見御の如く文學評論で大弱りの狀態しかもくだらぬ勞力故つくづくいやに成候此分にては當分成田行も駄目に候。

東京は日々好天氣小春うれしき日向也。新小說は御見合せの由殘念に候。何でも書いたらよからうと思ひ候

草平氏相變らず煤烟に腐心。文壇の現況に憤慨來年は大いに評壇を賑はすと申居候、如何にや。横丁の先生もちと御奮發ありたく候。先日御能を久し振りにて拜見中々退屈のものにて候。其時秋聲君に紹介され候。子供まだ床を離れず。細君の腹愈せり出せり。夫子フランネルの腹卷す。右の條々迄

十一月二十二日　　　金之助

三重吉様

七六六

明治四十一年十一月二十九日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小林方小宮豐隆へ　〔はがき〕

今日は難有候がマンチすあらば買つていたゞき度候、紅葉狩は郵便にて送り候

十一月二十九日

七六七

明治四十一年十二月十九日　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町吾妻屋鈴木三重吉へ

又々御轉宅のよし承知致候學校定めて御多忙の事と存候休みには泊りがけに御出京可然候。先達泥棒這入る。兩三日前赤ん坊生る。是にて今年も無事なるべきか。文壇紛々悉く是空洞の響なり。壇上の人亦遊戲三昧と心得て一生を了し得べし。馬鹿々々しき事を馬鹿々々しく思ひつゝ眞面目に進行さする事遊戲三昧の境に達せざる時は神經衰弱となり喪心失氣となる。天壽可惜。閑日月を抱いて雕龍の計をなす。可ならずとせんや。　草々

十二月十九日　　　　　　　　　　　金

三重吉樣

七六八

明治四十一年十二月二十日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉商小宮豐隆へ

先達ての論文を出すなら新聞では到底載せ切れまい。雜誌がよろしからう。新らしく書くなら新聞でも差支あるまじ。

あんまり僕をたよりにすべからず自分の考を自分で書いて漱石何かあらんと思ふべし。早稻田のあるものゝ書いたものは驚ろくべく愚也。あれは生活難の爲に先輩の指導を受くる餘裕なきによる。あゝならぬ君は幸福なれど餘裕あるが爲に萬事僕に見せてからの何のと思案するは獨立心なき事なり。是でよいと自己で自己を極める分別ありたきものなり。

文壇に出る一歩は實際的ならざるべからず。今の愚なるものに分り易く、讀み易く、相手になる樣に見

えて、侮りがたき思を起さしめざる可らず。從つて論旨は短からざるべからず、興味は時事問題ならざるべからず、其他色々の資格なかるべからず。之を重ねて行くうちに自から大いなる根底ある議論を出しても人が讀む樣にも耳を傾ける樣にも（今の樣に生活難と黨派心が盛では夫でも六づかしい）なる。始めから偉いものを書いたつて人は相手にしない。相手にするものは日本に五六人しか居ない。而して其五六人はみんな默つて相手にしてゐるのみである。

文壇に立つものはあらゆる競爭排擠に伴ふ墮落的行動に對して從容事を辨ぜざるべからず。もし淸きを以て自ら居り高きを以て自から處せんとせば一日も留まるべからず。

文壇の諸公皆賢なるにあらず。又正なるにあらず。而して賢の如く正の如くに見せる術を日夜に講じつつあり。憤るべからず。社會が胡麗化される程度にあるが爲なり。傍觀すべからず。社會は進む期なし。

今の文壇に立つものより生活難を引き去れ彼等の十中七八は喜んで文壇を引き上ぐべし。彼等は文壇に立ちながら苦悶しつゝあり。

君もし以上の諸件を承知の上ならば筆を執るも可なり。たゞ一時虛子の依賴にて出來心よりするは人魂のふわつく姿なり。夫にてもよし人魂を以て任ずるがいやならば始めから其覺悟をせざる可らず。

今の自然派とは自然の二字に意味なき團體なり。花袋、藤村、白鳥の作を難有がる團體を云ふに外なら

ず。而して皆恐露病に罹る連中に外ならず。人品を云へば大抵君より下等なり、理窟を云へば君よりも分らずや多し。生活を云へば君よりも甚しく困難なり。さるが故に君の敢て爲し能はざる所云ひ能はざる所を爲す。君是等の諸公を相手にして戰ふの勇氣ありや。君を此渦中に引き入るゝに忍びざるが故に此言あり。　以上

十二月二十一日　　　　　　　　　　　夏目金之助

小宮豐隆樣

七六九

明治四十一年十二月二十六日　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區富士見町四丁目八番地高濱清へ

拜啓ホトヽギス昨廿五日と今二十六日をつぶし拜見諸君子の作皆面白く候。其中で円川のが一番劣り候。あれは少々イカサマの分子加はり居候。他は皆眞物に候。大兄の作先夜伺つた時は少々失敬致しよく分らぬ仕舞の處活版になつて拜見の上大いに感服致候。あれは大兄の作つたうちにて傑作かと存候

猶向後もホトヽギス同人の健在と健筆を祈りて聊か茲に敬意を表し候。他の雜誌御覽なりや。どの位の出來か彼等の得意の處を拜見致度候　以上

十二月二十六日　　　　　　　　　　　金

虚子樣

子供の名を伸六とつけました。申の年に人間が生れたから伸で六番目だから六に候。此間の且は取消故併せて御吹聽に及候

ホト、ギスは廣く同人の小說を掲載すると同時に大いに同人間の論客を御養成如何にや。紫堂の舞踏談抔面白く候

七七〇

明治四十二年一月二日　午後二時―三時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ケ谷田町二丁目一番地　野上豐一郎氏へ　〔はがき〕

恭賀新年

御病氣の由御大事に可被成候小生なまけてどこへも年頭に參らず、賀狀も返事を出す丈に留め居候。いづれ永日萬々

煤烟出來榮ヨキ樣にて重疊に候

七七一

明治四十二年一月七日　午後六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より青森縣三戸郡是川村市川文丸氏へ

拜啓御歸省中の由承知仕候定めて雪深き春を迎へられたる事と存候當地別に變りたる松飾もなく無事の正月に候

御恵送の山鳥一羽安着御芳志難有候先年の一夕を思ひ出し持來る人あらば又一椀の羹をわかたんと存候
御用立申候金子については御心配御無用に候
寒氣烈敷御隨分御自愛可然　草々頓首

一月七日　　夏目金之助

市川文丸様

七七二

明治四十二年一月十日　牛込區早稻田南町七番地より坂元三郎へ

病氣中長い手紙を難有う。長い手紙をかくのは難儀だが貰ふ方は面白いものだ。此間は妙な關係で敦賀に居る若い婦人から君の二三倍ある手紙を受取つた。是も面白かつた。昔し正岡抔と往來する時分には隨分ひまに任せて長い手紙のやりとりをした。今では忙しくてとても出來ない。此間も七限から「原稿まだ出來ませぬか」といふ電報をかけられて大に狼狽した。新年の原稿さへ書けないのだから長い手紙は書けないのも無理はない。

高須賀が來たから君も病氣ださうだといふと何金病でせうと答へてゐたが矢張り本當の病氣の樣に見える一體どんな徵候なのかね。謠をうたふ位ならば大した事もないのだらう。がまづ〳〵用心し玉へ。高須賀が金山の話やら品川埋立事件の話やら何でも大分面白い話をして呉れたので新年に餘程變化のある世界を見た。そのあとへ僕の小學校の友達キーちやんなるものが何十年振かで尋ねて來て、是又鑛山の話をした。會津の奥で千二百萬坪の鑛區をかりて月々稅丈納て居る。時機を見て採掘をやるといつてゐた。袂か

ら妙な石を出して是れがその蛋白石だと教へてくれた。隨分面白い人がやつて來る。一番陳腐なのは雜誌記者だらうと思ふ。主人公に何等の利益をも與へない。夫でもつて來て雜誌へ人のわる口を書く。會津の山で蛋白石でも搜してゐる方が餘程氣が利いてゐる。

君の友達の話は中々面白い少し工夫したらば種になる樣に思ふ。わざ〳〵の御報知難有い。

水彩は全く廢止だから上げない。これで實は水彩に愛想をつかして書かないのぢやない。書くひまがないのだ。からだは病人の樣に机にばかりへばりついて、夫で頭丈火の車の樣に働らくべく餘儀なくされてゐる。文學も大きな世間を見渡すと窮屈千萬で人間がシミタレて、顏が蒼くなつて、胃病や腦病が起つてよくない樣だ。

今年は元日には謠はなかつた其代り大晦日に松根東洋城と二三番謠つた。八日に新が黑紋附を着て來て稽古初めをして呉れた。土車といふのはゆるしものださうだが是を少し教はつた。

御產はあつた。母子共健全。申の年に生れた人間で六人目だから伸六とつけた。人間も半ダース子供がある樣では頗る時勢後れだ。一人が十分づゝ泣いても丁度一時間かゝる。八釜敷事甚しい。彼等の前途を考へると皺が寄りさうである。

申の年の子丈あつて頭に毛が眞黑に生えてゐる。四五年前生れた子は頭がはげて居た。雛壇中〇〇〇〇〇〇〇〇ぢやないかと思つて大いに恐れを抱いてゐたら、漸く人間並に毛が生えて來た。妙なものだ。

雪が降るので火鉢を擁して此手紙をかく。夫から又原稿をかく。何でも夢十夜の樣なものとの註文だから每日一つ宛かいて大阪へ送る積りである。僕が原稿の催促を受けて書き出すと相撲が始つて記事が不足しない樣になる。社の方では氣が利かないと思つてゐるだらう。　以上　〔うつし〕

正月十日

金之助

坂元三郎様

七七三

大正四年一月十二日（火） 牛込区早稲田南町七番地より牛込区早稲田南町十番地 飯田政良へ

拝啓御作持参の時下女が留守中であなたの御手紙と雑誌を持つて来ました。手紙はすぐ拝見しました。坪内先生のも拝見しました。色々御事情のある事と御同情申します。私も別に主宰してゐる雑誌のある譯でもなし夫から本屋に大勢力のある譯でもないから、こんな場合にはいつでも困つてゐます。然し御作を拝見した上で何とか御相談も致しませう。

只今は少々取り込んだ用事があつてはる／＼御作をよんでゐられません其上正月から用をしやうと思ふとはからぬ人に襲はれて無暗に時をつぶして仕舞ひます。是非やらなければならない大阪へ日々やる原稿をかくかゝない位です。夫であなたのものを拝見するのももう少し待つて頂きたいがどうでせう

尤も木曜は面会日ですから何時でも御目にかゝります人がゐる時がいやなら朝のうちでも入らつしやい。

今日の午後御出の由だが右の譯だから出来るなら木曜にのばして下さい。木曜に入らしつてもまだあなたの作物は讀んでゐますまいが、兎に角御目にかゝつて御話丈は致します。御互に忙がしい切りつめた世の中に生きてゐるのだから御互に譲り合はなくては不可ない。随分窮屈の至です。先は御返事迄 草々

十二日

夏目金之助

飯田政良様

七七四

明治四十二年一月十三日　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

拜啓御預けの預金帳のうちで金五拾圓を明十四日受取り明後十五日高須賀君に御渡し被下度候

印形は封入致候

手紙は淳平氏持參致候

先は右御願迄度々御面倒相願恐縮致候　草々頓首

一月十三日

夏目金之助

小宮豐隆樣

七七五

明治四十二年一月十七日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より相模國小田原小峯梅林大久保神社内[illegible]へ　〔はがき〕

暮から病氣がよくない由御大事の事こ每日人が來て時間を奪はれるので仕事をする事が出來ず閉口なり。

胃病よろしからず。南方に旅寐して梅花を見たし

七七六

明治四十二年一月二十一日　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ　〔はがき〕

拜啓石葛屋の婆さん拜見あれは破甕よりは數等上等の作、御進境、感敷存候こたゞ時々同村料を引つ張

りスギテ、クドイ所あり。今少シ短カク隙間ナクスル方モ考ヘラルベシ。トニカク大體ニ於テ、此調子ハ本物也。

七七七

明治四十二年一月二十四日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町若松屋鈴木三重吉へ

御手紙拜見致候酒を御やめの事當然と存候、酒をのむならいくら飲んで〔も〕平生の心を失はぬ樣に致したし君の樣に一升にも足らぬ酒で組織が變つては如何にも安つぽくつてへら〳〵して不可ない。のみならずはたのものが危險不安の念を起す。

黑髮は何だか氣乘がしなかつた。君自身あきがきたといふ。夫が正しい所ぢやないかと思ふ。精々勉強して御互に書かなくては不可ない。

扉子へは序を以て貴意を傳ふべし　以上

二十四日　　　　金之助

三重吉樣

七七八

明治四十二年一月二十四日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内中村蓊へ

拜啓煤煙が二三日出ない樣に候がどんな事情に候や。是迄朝日の小說は一回も休載なきを以て特色と致し候に森田草平に至つて此事あるは不審也。本人の不心得の爲とも存じ候へどもわけを一寸御報知願度君

が一番森田に就て近い關係があるから御尋する。もし本人の不都合から出たなら僕は責任がある實に困る

金之助

中村蓊樣

序に露國二葉亭の宿所を知らして呉れ玉へ

七七九

明治四十二年一月二十六日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地[illegible]小宮豐隆へ　〔はがき〕

草平今日の煤烟の最後の一句にてあたら好小說を打壞し了せりあれは馬鹿なり。何の藝術家かこれあらん

七八〇

明治四十二年二月三日　午後六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂內本多直次郎氏へ　〔はがき〕

拜啓文學評論原稿（活版に廻したるもの）413 と 414 とつけたる中間一枚紛失致し居り。活版屋は夫に御構なく先を組み候。一先づ御とめ下さい。さうして搜して組直しを御命じ下さい。紛失と事が極れば新たに原稿を書いてあげます。（そこが片づかなければ、こゝを直しても駄目だから校正を見合せます）

七八一

明治四十二年二月七日　牛込區早稻田南町七番地より牛込區横寺町正定院內森田米松へ

拜啓漱石世間にて概して評判よき由結構に候。先日四方太は激賞の手紙をよこし候。然る所一から六迄はうまい。（其中要吉が寺へ行つて小供に對する所は少し俗也）七になつて神部なるもの が出て來て會話をする所如何にもハイカラがつて上調子なり。罵倒して云へば歯が浮きさうなり。どうか御氣を御付け下さい。病院の會話も然りあれでは病氣見舞に行つたよりもあゝ云ふ會話をやりに行つたやうなり否あゝいふ會話が出來る事を讀者に示す爲に書いたやうなり。頗るよろしからず。君もし警句を生かさんが爲に小說をかゝば顔の美を保存せんとて手術は御免蒙り夫が爲に命をとられる虚榮心强き婦人と同じ、警句が生きると同時に小說滅びる事あるべし。切に注意ありたし。夫から田舍から東京へ歸りて急に御種の手を握るのは不都合也。あれぢや、あとの明子との關係が引き立つまい。要吉は色魔の様でいかん。

要吉は細君に對して冷刻なる態度其他要吉の名譽にならぬ事をしたり云つたりする。五六行先へ行くと必ずそれを自覺して自己を咎めてゐる。此要吉が未だ要吉を容赦し得ざる書き方なり。自己の醜を摘きながら自から醜に安んずる能はずして一解二解と辯解しつゝ進まば厭味にあらずして何ぞや、但し是は書き方にあらず寧ろ書き方の呼吸なるべし。御注意ありたし

四方太激賞の後二三日前面會す、彼曰く今迄大に擔いだが今更困ると。余曰く忠告すれば元氣沮喪しさうだし。忠告せざればます〳〵あんな風に會話をかくだらう困つたと、小宮もあの會話に不贊成なり。たゞしあの會話も時と場合にて活きる事あらん。君の用ひたる時と場合にては全くうその會話也。

右の條々御注意迄に申入候猶御努力可然候　草々

二月七日

金之助

草　平　樣

今日の所持ち直しの氣味なり

七八二

明治四十二年二月七日　午後四時－五時　牛込區早稻田南町七番地より金澤市櫻畠九番町十九番地大谷正信氏へ

拜啓其後は御無沙汰奉萬謝候當時不相變電車の如き生活毎日頭のみ忙がはしく御座候二三日來氣候も少少ゆるみ少しは春めき候〔へ〕ども氷はまだ張り候。北の方は嘸かしと存候。隨分御大切に御攝生可然と存候カキ〔原〕わざ〔〳〵〕御贈御厚意深く奉謝候。あれは先年も誰かゝら（〔原〕四方太と氣がつき候。四方太のは鳥取の蟹で大兄のは金澤のかになるが味も鳥取と金澤との相違可有之か。風味の上批判可致候

御地仕事の模樣拜承外國人への御教授も面白きかと存候先日佐治秀壽の言にも其邊の消息有之。俳句は只今一句も出來ず。大兄は不相變御勉强。永日小品は面白いのと面白くないのと有之よしどうぞ參考の爲め面白いのと面白くないのとを指摘被下度候右不取敢御禮申上候　草々

二月五日　　金之助

繞石兄
座右

七八三

明治四十二年二月八日　夜　牛込區早稻田南町七番地より牛込區早稻田南町十番地飯田政良へ

原稿は御希望通只今郵便にて春陽堂へ遣り申候先方より其内諾否の返事をくれるやうにたのみ置候故其事がきまらぬうちは「町の湯」を外へ出す事は御控被成べく候。尤〔原〕論の事なれど御注意迄に申上候。文章世界差上候

先は右迄　草々

二月八日　　　　夏目金之助

飯田政良様

七八四

明治四十二年二月九日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より赤坂區青山南町六丁目百〇六番地坂元三郎へ

拜啓御尋ねの書物小生の記憶になしよく調べ又は聞き合せて御返事すべし。多分ないだらうと思ふ死際といつても色々比較して何か一定の概括が出る樣なら面白いが到底出來まいそれに天才とはどんなものかきめてかゝらなければならない。それから死ぬ時の有樣の區別

(一)病氣　キーツ肺病。ニイチエ、モーパサン等氣狂、スヰフオ〔原〕同上〔?〕輕病等

是等は何かまとめられる。

(二)天才使川の社會的結果。ナポレオン。ユーゴの島流し(是は死ニアラズ)。あらゆるマータヤー

(三)獨身　シオペンハワー(是も死際にあらず)

(四)楠正成、西郷隆盛の類

(五)窮死チャタートン
(六)放狂ヱルレーン等
其他色々になるべし。よく御考の上類別可然候。
煤烟のどこを見てそんな氣を起したものか。天才は鹽原抔へは行かない方が多い樣なり。尤も鹽原行の天才もあるべしと云へど是は寧ろ例外ならん
御承知のロンブロゾーの「天才と狂氣」といふ本に特色が澤山かいてある但し死際はさう書いてない
以上

二月十日　　夏目金之助

坂元樣

七八五

明治四十二年二月十七日　牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓友人生田長江氏今般ニイチエの代表的作物ザラツストラ全部の翻譯を思ひ立ち候に就ては右出版の義につき貴堂を煩はし度旨依賴有之候につき御紹介申上候。どうぞ御面會の上御相談被下度候。此間の御話では翻譯ものはちと御迷惑の樣なりしもザラツストラは少部分竹風君によつて翻譯せられたるのみにてまだ何人も手を着けて居らぬ樣子故如何かと存じ一寸申上候　以上

二月十七日　　夏目金之助

本多直次郎様

七八六

明治四十二年二月二十二日　午後二時―三時　牛込區早稻田南町七番地より東京京橋區元數寄屋町二番地太平洋通信サンデー發行所内安成二郎氏へ

昨日はサンデーへの談話の件につきわざ〳〵御來訪の處多忙中不盡其意遺憾に存じ候間あらためて手紙にて小生の考を申上候

近來雜誌に諸家の談話を掲載する事流行なれどあけて見るとつまらぬもの多く購買者は色々な名が行列して居るのでだまされて買ふと一般に候。甚だよろしからぬ弊風と存候。それからもう一つは青年子弟があんな馬鹿氣た談話を見て所謂文學者の談話意見とはこんなものかと思ひ込みたまはゞ骨の折れた研究に價する論文抔が出ても始めから面倒がつて眼さへ觸れぬ事に候。是は雜誌にも責任あれどもはなす方にも責任有之小生は深く此無責任の談話をはづるの結果從來の行掛上不得已特別の關係ある雜誌にあらねばはなしを御免蒙る方針を立て候。それからもう一つは自分がいそがしくて一々雜誌記者に談話をして居る事が出來ぬのも源因の一つに候。時々談話に誤謬があつて人に迷惑を及ぼすのも源因に候。

右の諸事情からして一應御斷り致候譯なれど木曜に御出を願つて講釋をするがものはなく候故手紙にて右の主意を申上候。あしからず　馬場君へもよろしく　草々

二十一日

夏目金之助

安成二郎様

七八七

明治四十二年二月二十三日　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區元數寄屋町三番地太平洋通信サンデー發行所内安成二郎氏へ

拜啓再應の御手紙拜見致候小生の特別の緣故ある雜誌と申すはホトヽギス其他二三從來の關係上已を得ざるものを指す意味に候。其他の雜誌はさきに申上たる理由にて今度より段々御斷わりを致さうと決心せる矢先故甚だ御氣の毒なれど談話は掲載の義は御容赦にあづかり度と存候。小生身心閑適にて充分自己の意見をまとめて一々訪問記者の御滿足に參る樣出來候へば始めよりかかる氣の毒な事は誰にも口外せずして濟む次第に御座候其邊は御承知被下度候　以上

二月二十三日　　夏目金之助

安成二郎樣

七八八

明治四十二年二月二十四日　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

俳諧趣味とか俳句に對する君の考とかは默つてゐた方がいゝ。俳句を研究する人に任せべき事だ。夫より有益な大問題はいくらでもごろ〱してゐる。尤も特別の考あれば無異義。俳人何ぞ君の俳論ヲキクヲ要セン

七八九

明治四十二年三月一日 午後四時—五時 牛込區早稻田南町七番地より日本橋區通四丁目五番地春陽堂へ 〔はがき〕

啓 三四郎原稿校正は小宮氏に依頼の處都合により牛込區早稻田南町五十一西村誠三郎氏に依頼變へ致し候につき校正は同氏方へ御廻送願上候 以上

三 月 一 日

七九〇

明治四十二年三月三日 午後三時—四時 牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市山下町三百六十七番地[illegible]へ

拜啓御地は暖國だから椿杯もとうから咲いたらう。當地は今が盛なれど町内には一本もない様也。見に行く所もないうちに散つて仕舞ひさうだ。今日は御節句で長閑で好い心持だ。然し風が強くて不可ん。小松原が今朝立つたので新橋迄送りに行つた。歸りに丸善へ寄つて佛蘭西の小説（英譯）を三圓許買つて歸つた。丸善の通は改正で見違へる様になりつゝある。

ザボンの罐詰着難有う。細かに切つて食つてゐる。あれは甘ひものだが澤山食ふと胃の毒だね。近頃葡萄酒を食毎に呑んでゐる

此一週間程少々心地が閑適で生命が延びつゝある。それに春風が何よりの藥だ。鶯が時々鳴く、あれは好いものだ。西洋人は知らないものだ。文學評論が一週位すると出來る。上げるから學生に紹介して呉れ玉へ。

野間は不相變丈夫の事だらう。久しく無沙汰をしてゐる。よろしく。此間坂牧善辰が來て教師を探してゐた。今日副島に逢つたら日本の美術を研究する男の顧問になつて鎌倉に居るさうだ。 草々

三 月 三 日

金之助

正禧樣

七九一

明治四十二年三月十三日　午後五時—六時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

アンドレーフをならひてより急に獨乙語趣味が出た樣なれば此機に乘じて次の仕事に取りかゝる迄大いに勉强仕度、どうぞ日數を御ふやし下さい。尤も來月のホト、ギスに何か書くなら御掛念に及ばず

七九二

明治四十二年三月二十日　午後六時—七時　牛込區早稲田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上八重へ　〔はがき〕

鵙の話早速拜見。面白く候すぐ虛子の手許へ廻し候來月は附錄を出すとか出さぬとか申居候故都合によりては如何と思ひ候へども出來るならば掲載する樣賴ひ置候

七九三

明治四十二年三月二十九日　午前十時—十一時　牛込區早稲田南町七番地より鹿兒島市下龍尾町百九十一番地野間眞綱へ

其後御無沙汰先達ては御親戚のものより御惠投の香爐御地産錫の盃一個と黒柿の杖正に拜受早速御禮狀を出す筈の處當時「文學評論」出版の砌にてそれを一冊添へて手紙を書かうと思ひ居りたるに「文學評論」を春陽堂から小生の方へ獻本せざる先に悉皆本屋の方へ廻したる爲め再版來るを待ちとう〳〵御無沙汰をせりいづれ二三日中には君と皆川君へ宛贈り候間御ひまもあらば御一覽學生へ御紹介を乞ふ。先日寺田寅彦

外國へ留學星岡茶寮にて送別會相開き傳四も參り候。過日皆川よりザボンの砂糖漬到來早速禮狀を出し候處もとの下宿へあてたる爲め屆かぬと覺え聞合せ參候へども其內宛名の下宿より屆けて呉れる事と存じ打遣り置きたり御面會の節右御傳可被下候。春暖落梅鶯啼の好時節御地は櫻さへ咲たる事と察せらる。一年の佳節すべからく遊樂すべく遙かに御勸め申候　以上

三月二十九日

金　之　助

眞　鍋　樣

七九四

明治四十二年四月二日　午前六時－七時　牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町仁山病院鈴木三重吉へ

昨夜豐隆歸京君が辭拂ひになぐられて眼に創を拵らへたといふ警報に接し大に御氣の毒に思ひ居候。眼球の故障の方は心配なき由につき先々安心なれどもわるくすると眼睨みの悲運に廻り合ふやも知れぬ由隨分精出して御療治可然かと存候。好男子惜むらくは遠近を知らず抔とあつては甚だ心細く候。豐隆申候には「三重吉が眞面目くさつて、どうも私の不德の致す所だ……」といつたとて大いに笑ひ候。私の不德の致す所は近來の大出來と存候。

此間中より食傷の結果胃痛にて困難罷在候。三四日蟄居の體何か持つて御見舞に上り度れど、どうも其內には退院になりさうであるから一先づ手紙を以て御左右を伺ひ奉る。

草平大怪談を揚げてやに下り居候。大兄も何か一つ我黨の爲に御書き被成度候。豐隆アンドレーフ論をホト、ギスに送り候。小生は豐隆にアンドレーフを教はり居候　以上

三月三十一日　〔封筒の裏には四月一日とあり〕

金之助

三重吉様

七九五

明治四十二年四月三日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より金澤市櫻畠九番町十九番地大谷正信氏へ

春暖の候愈御清適奉賀候。其後は存外御無音に打過申譯無之候。過日文學評論出來の節早速一部進呈の積の所初版は賣切とかにて漸く手元へ一部持參致したる迄にて其他は今日に至る迄いまだ納本仕らず從つて諸君へも未だ寄贈の運に至らざりし處御地にて態々御購求御一覽を賜はり候のみならずとくに御推奬の辭を辱ふし加之御叮嚀に誤植の表迄も御示しにあづかり感佩此事に候。萬事行屆かぬ事多く自分にも不滿足の箇所多く有之候へども若し御氣付の所も有之候へば御示教にあづかり度と存候

永日小品はなぜ東京へ載せなくなり候や小生にも分らず候。四月下旬より又大阪の方へ少し續くものをたのまれ執筆〔の〕都合につき御讀被下候へば幸甚に候。東京の方は煤烟のあとを與謝野鐵幹がかきそのあとを小生がかくべき役割の樣に承はり候右御禮旁御返事迄　草々不一

四月三日

金之助

繞石兄

座下

折角の御訂正二版には間に合かね候。もし三版も出る好機も有之ば御厚志を利用致し度と存候

七九六

明治四十二年四月三日　午後六時—七時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚保治へ

拜啓かねて大學在職中にやつた講義ののこりものを又出版したから御覽に入れる。もう是で大學に縁のあるものはなくなつた。大學は君の周旋で這入つた處だから夫が縁故で出來た著書に君が間接に書かした樣なものだから記念の爲の一部机右に御備へ置を願ひたい。中には讀んでも讀まなくてもいゝが可相成ば讀んでくれる方がいゝ。さうして批評をしてくれゝば猶結構である　艸々

四月三日　　　金之助

大　塚　樣

先達て奥さんが御出の節文學評論が一部欲しいと仰しやつたさうだがもし別に今一部御入用なら、まだ二三部あるから夫を獻上してもいゝ。然し君にあげれば大抵よからうと思つて一部にして置いた。よろしく

七九七

明治四十二年四月十二日　午後九時—十時　牛込區早稲田南町七番地より千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

拜啓御病氣漸次御回復結構に候入院其他の費用嵩み御困難の由承知御無心の五十圓ちと辟易なれど外の事にも無之兩三日〔中〕に御送附可申につき御安心御療養可然候。大阪へ今月末から小説をかく約束あり

何にも履行する了見起らず。花が咲く所為と存候
小宮の評論中々タチよろしく候當地にても真面目な人には評判よき方結構に候く森田のも世間では大分もてゝ居る由。
先は右迄　草々

十一日　　　金之助

三重吉様

昨今風にて上野の花大分散り候よしに承はり候澤山僕をもつて湯治に参り度と存候

今日散歩の歸りに鰹節屋を見たら亭主と覺しきもの妙な顔をして小生を眺め居候。果して然らば甚だ氣の毒の感を起し候。其顔に何だか憐れ有之候。定めて女房に惚れてゐる事と存じ是からは御神さんを餘り見ぬ事に取極め申候
右は序迄餘は拜眉に讓る

七九八

明治四十二年四月十九日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内坂元三郎へ

御手紙の趣承知せり六月十日より掲載となつては大分切迫の感あり。出來る丈大塚さんを延ばす御運動を乞ふ

小生かくものは長短不定なり。（長い方の御注文なれど）短かければ年内に分量的に勘定の立つ樣に何遍もかく積也

右迄　草々

四月十九日　　夏目金之助

坂元三郎樣

七九九

明治四十二年四月二十二日　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内坂元三郎へ

拜啓森田草平の煤烟は社へ掲載の約束なりたる當時原稿料は大塚氏のそらだき同樣にてよろしきやとの瀧川氏の問に對し承知の旨を答へ置候。

そらだき原稿料は一回四圓五十錢と記憶致し候が間違に御座候や

本日森田參り社へ稿料をもらひに行つたら煤烟は一回參圓五十錢なる故最早渡すべき金なしと山本君より言はれたる由

それで小生の考と原稿料の點に於て少々矛盾相生じ候。もしそらだきが一回參圓五十錢ならば小生の覺え違草平に對して小生の責任に候が小生は四圓五十錢と記憶致居候につき念の爲め御問合せ申候。御多忙中恐縮なれど一寸御しらべの上御一報願度候　以上

四月二十二日　　夏目金之助

坂本[原]三郎様

八〇〇

明治四十二年四月二十四日　午後三時—四時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區菊坂町三十一番地雄集信林原（當時岡田）耕三へ　〔はがき〕

拜復急用なればいつでもよろし急がずば木曜の都合の好い時に御出可被成候文學評論を一部上げても好いが忙がしくて讀めないだらう

八〇一

明治四十二年四月二十四日　午後五時—六時　牛込區早稻田南町七番地より千葉縣千葉町仁山堂病院鈴木三重吉へ

拜啓病氣漸々御快復奉賀候當日麗日好風囊中無一物にして何となく表をあるきたき心なり

草平一回分參圓五十錢のを四圓五十錢と間違へ朝日へ原稿料をとりに行つて拒絶を食ひ蒼く成居候是は實は小生の記臆[原]違より出づ。滑稽よりも氣の氣なり。〆て百圓程の損

小宮のアンドレーフ論を御褒めのよし是から褒める時は可成公共の機關を利用して天下に廣告ありたし。國[民]文の文學欄抔至極よろしからん。由來吾黨の士は内々で褒めてゐる許だから戰國亂世の今日には丸で無能力と一般に候。彼徒のなす所を見ると敵の機關を借りて迄傍若無人の法螺を叩き居候。あれ程押が强くなければ日糖事件の今日には文士として通用致さぬにて候

小說は大阪へ出すにて候。まだ一回も書かず候。何だか如是閑と申す男が？といふ標題で今しきりに書いて居り候。其あとへでも載せる氣にや一向催促も參らず候。然し小生ももう書き始める積りに候唯何を書いてよきか分らぬ丈に候

細君子宮内膜炎、エイ子肺炎、アイ子純一風邪、家内不安全　一時は當惑、小生も精神過勞にて陸羹内膜炎にでもなりさうな氣が致したり。現今諸人平癒に向ひ候。漸く安堵

運櫻、山吹　若芽甚だ快適　以上

四月二十四日　　　　　金之助

三重吉様

八〇二

明治四十二年五月三日　午後一時－三時　牛込區早稲田南町七番地より[illegible]へ

追々暖かに成候御機嫌よき事と存候先日手紙にて御問合せの件松根東洋城に相談致候處御引受致してもよろしくとの事故宜敷同人方へ御廻し可然候住所は赤坂表町一丁目貳番地山口方に候先は用事迄　草々

五月二十五日　　　　　金之助

眞鍋様

八〇三

明治四十二年五月三日　牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓先日御話申候文學評論誤植以序差出置候間改版の節何とか御工夫被下度候右用事迄　草々頓首

五月三日

本多嘯月様　　夏目金之助

八〇四

明治四十二年五月七日　午前十時―十一時　牛込區早稻田南町七番地より鹿兒島市長田町城ヶ谷百二十一番地林久男氏へ

其後達者にて御暮し奉賀候時々は薩摩へ行つて櫻島が見度なり候もの〻其日々々に追はれると是も夢に候砂糖漬わざ／＼御送り被下難有拜受此間皆川からも貰ひ候あのザボンの砂糖漬の偉大なるには驚き候西鄕隆盛の砂糖漬の樣なものに候「三四郎」不日出來につき出來たら御返禮に差上度と存候

右御禮迄　草々

五月七日　　夏目金之助

林久男様

小宮は徵兵の件にて鄕里へ歸り候御袋さんは食物を食はず腹を下して可成からだを疲らして歸つて來いと云つて來た由さうして其手紙を書留にして小宮へ送つた由愛嬌に御座候

八〇五

明治四十二年五月九日　午前九時―十時　牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ

拜復安倍能勢〔原〕字宙の評をかく由結構に候。あれはどこで〔も〕評をせず。不都合に候。帝文に内田夕闇

といふ人有之あの人の方が天笠より理窟の云へる樣に御座候。序に御依賴如何に候や。美學に乙骨三郎といふ人有之時々書いてもらつたら面白い事があるかも知れないと存候。其他澤山あるべく候。親類にごた／＼ある由御面倒御察し申候。小生愈小說にかゝらねばならぬと存じバザンの小說を二卷よみ候いづれも駄作に候。右迄　草々

五月八日夜　　金之助

豐一郎樣

八〇六

明治四十二年五月二十三日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より金澤市第四高等學校大谷正信氏へ　〔はがき〕

拜啓「三四郎」出來につき一部進呈仕候御落掌被下度候　草々

五月二十三日

八〇七

明治四十二年五月二十五日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より赤坂區仲町十九番地橋口清氏へ

拜啓先達ては多勢まかり出御邪魔致候三四郎御盡力にて漸く出版難有存候

表紙の色模樣の色及び兩者の配合の具合よろしく候

然し文字は背も表紙もともに不出來かと存候

小生金石文字の嗜好なく全く文盲なれど畫家にはある程度度〔原〕此種の研究必要かと存候、尤も大作を以て

任ずる大兄に對して插畫家もしくは圖案家に對する注文抔持出しては御叱りあるべけれど、此は研究のみならず娯樂としても充分面白き業かとも存候。
不取敢御禮旁無遠慮なる惡口申上候失禮御ゆるし可被下候　以上

五月二十五日　　夏目金之助

橋口清樣

二伸　御令兄へよろしく御傳聲先達拜見の畫皆々面白く存じ候

八〇八

明治四十二年五月二十八日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より金澤市櫻畠九番町十九番地大谷正信氏へ

拜啓三四郎の切拔態々御送被下難有御禮申上候あれは進呈本の代りに小生方に記念として所藏可致候又又小説に取りかゝらねばならぬ事と相成候。來月末より東京大阪雙方へ掲載の筈に御座候。先便中の下旬と申候は都合により延期致候ものに有之候
先不取敢御禮迄　草々頓首

五月二十八日　　金之助

饒石老兄

八〇九

明治四十二年六月二日　午後五時—六時　牛込區早稻田南町七番地より横濱市根岸町二千六百二十二番地大内淸孝氏へ　〔はがき〕

拜啓御惠送のピツクルス一瓶着難有拜受致候右不取敢御禮迄申上候。文學評論御通讀被下拜謝此事に候

夏目金之助

八一〇

明治四十二年六月四日　牛込區早稻田南町七番地より牛込區早稻田南町十番地飯田政良へ

菓子少々御目にかけ候につき御つまみ被下度候　以上

四　日

舌　代

飯　田　政　良　樣

八一一

明治四十二年六月十二日　午前十時—十一時　牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社內山本松之助氏へ

拜啓大塚女子(原)のあとの小說揭載の日どり御報知奉請候

小生の小說の名は「それから」と申候今月二十(原)前後に二三十回纏めて御送附可致候「それから」は大阪と交涉まとまり東朝と同日より向ふにても揭載の筈につき右御含みの上可然御取計願上候

豫告の文字必用なれば五六行相認め可申候さらずばたゞ「それから」丈を御豫告願候右用事迄　草々頓首

六月十二日　　夏目金之助

東朝社會部

山本様

八一二

明治四十二年六月十二日　牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓京都大學圖書館長島文次郎氏より別紙の如く申來候については甚だ御面倒ながら文學評論一部御堂より同氏宛にて京都大學へ御寄贈被下度候右用事迄　草々頓首

六月十二日　　夏目金之助

本多直次郎様

八一三

明治四十二年六月十二日、午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ

拜復

「それから」の豫告別紙認め候、可然御取計願上候。大阪へは小說の名前通知致し置かず候故豫告文と

ともに御廻し願上候
原稿は十八九日迄に出來た丈可差出候　草々

十二日夜

夏目金之助

社會部主任
山本様

八一四

明治四十二年六月二十二日　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ

拜啓
別紙萬朝の召使〔一〕たまね君より參りました。御一覽の上差支がなければ都合の好い時に御載せ下さい。
御手數を煩はして濟みません
此會には私もたのまれて關係があるから頼んで來たのであります　草々

六月二十二日

夏目金之助

山本様

八一五

明治四十二年七月一日　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ

其後は意外の御無沙汰益御健勝の事と存候横濱は開港五十年祭で大變な賑はひの由大分面白からうと只でさへ出掛けて見たき心持に候

昨日は御招きの御手紙を頂戴御親切の段鳴謝致候家の（書生）ものは行つて御覧なさいと勸め候小生も行きたく候然るに例の如く只今小説起草の低氣壓を感じ新聞より肉薄を受け居る最中其上客抔參ると一日つぶされる。昨日抔も音樂の先生が朝から晩迄居つた爲め今日はせめて一回でも埋合せをせねばならぬと氣を焦ち候。

あなたの招いて下さる時は何か故障があつて何時でも快よく參上した覺がない私も甚だ遺憾に思つてゐます。が今度も右の譯故斷念します、もう一ヶ月もすると小説を書き上げてしばらくは樂になります其時もし機會でもあつたら御目にかゝりたいと思つてゐます

あなたに歌舞伎へさそはれと（原）事があるが此間とう／＼行つて芝居を見ました。不折も行きました。不折も私も素人だから面白い。ツンボが蓄音機を買ふ樣なものですな。　草々

七月一日　　　金之助

渡邊和太郎樣

八一六

明治四十二年七月五日　午前（以下不明）　牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ

拜啓國民文學原稿料拜受

水上齋の原稿をたのまれて虚子に紹介し置きたる處別紙端書到着につき一寸高濱君に御問合せ願度候

あれは多分駄目と思ふ廬子多忙なら一寸見てやつてくれ玉へいけなければ水上へ返してやつて呉れ玉へ
以上

七月五日　　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

豐一郎様

八一七

明治四十二年七月六日　午後二時―三時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區駒込西片町十番地阿部次郎氏へ

拜復

「三四郎」を包んで呼柳部太郎様といつもの如く書いて置いたら森卷吉が來て奪つて行つた事は遺也本人をつらまへて御糺明被下たし。

實は拙著をやる所はいつでもやり、やらぬ所はいつでも遣らぬ故今度は少し方針を易へて今迄の人を拔いたる遺也。其故如何となれば。

あまり小生の本ばかり貰つても持て餘す連中あるべし。引越の時厄介だ抔といふ人が出來てもつまらないから少々此方で遠慮しやうと云ふデリカシーなり。然るに大兄は御迷惑でなき由そこが明らかなれば是からの著書を必ず一部づゝ進呈仕るべし。其代り御保存の責任は無論有之候。今一ヶ所から君同様の苦情を擔ぎ込まれたり。

若杉三郎なるものは、あなたの作つたものは屹度一冊宛下さいと約束を逼り候。此方がやる方では先方の意志明瞭にて都合よろしく候。

本屋に申付御送可取計候。もし又中に何か書く必要あらば序を以て認むべく候。草々以上

七月六日　　　　　　　　　　　　　　　　　　金之助

芥舟先生

八一八

明治四十二年七月六日　牛込區早稲田南町七番地より日本橋區通四丁目春陽堂内本多直次郎氏へ

拜啓甚だ申かね候へども「三四郎」を赤坂區表町一丁目二番地松根豐次郎方と、夫から本郷西片町十畔柳都太郎方と、二ヶ所へ一部づゝ御送り被下度願上候。毎度御手數恐縮致候　以上

七月六日　　　　　　　　　　　　　　　　夏目金之助

本多嘯月様

八一九

明治四十二年七月八日　午前六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚保治氏へ

美學の會へは僕の方が傍聽に出たいと思つてゐる。御話し抔はとても出來さうもない。

拜復

文學評論を通讀して呉れて寔とに難有い。其上わざ〳〵批評を書いて貰つて濟まない。大變に過重な褒辭を得て少々辟易するが矢張り嬉しい。それから悪い所をもつと色々指摘してもらひたかつた。もつと無

遠慮に僕の參考になる樣に云つてくれると猶よかつた。がそれは忙がしい君に望むのは僕の方の無理かも知れない。

國民の野上が君の所に文學評論の印象を聞きに行つたら君は斷はつた。其手紙を僕に見せた。僕も仕方なしにその儘にして置いた。

實はあれを國民文學へ出したい。君も別段異存もあるまいと思ふから、失敬だけれど專斷で遣る。何故遣るといふと矢張り自分の書物を廣告したいといふ事に歸着するが、もう一つは君の意見を公衆の參考にしたい。（そこでもつと僕の缺點があげてあれば結構だと云つたのである。）君の所に御產があつた樣に聞く。奥さんも赤坊も御壯健ならん事を祈る。菅の細君病氣長びき困却の樣子。僕其後未だ逢はず。

また小說をかき始めて多忙御目にかゝつたら萬々

不取敢御禮旁御願迄　草々

七月七日　　　　金之助

大塚樣

書いて仕舞つて考へると私書を無斷で出すのもわるい樣だ。もし不可なら、端書を一本くれ玉へ。

國民の方へ通知ヲ出ス

八二〇

明治四十二年七月十五日　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より京橋區瀧山町四番地東京朝日新聞社内山本松之助氏へ

拜啓別封の如きもの小生の手許へ參り候。大兄とは直接關係なけれど一寸面白き故御目にかけ候。封入の爲替は販賣部へ御廻し可然御取計の程本人の爲に願上候　草々頓首

七月十五日　　　　金之助

山本様

八二二

明治四十二年七月十五日　牛込區早稻田南町七番地より岡山市古京町内田榮造へ

拜啓御手紙と玉稿到着致候直ちに拜見の上何分の御批評可申上筈の處只今拙稿起草中にて多忙故夫が濟む迄しばらく御待被下度候

尤もホトヽギス掲載方御希望につき原稿は虚子の方へ一應廻付致し可申候虚子が適當と思へば此次位に載せるならんと存候へども其邊は編輯の權なき小生には何とも申しかね候

右御返事迄　草々

七月十五日　　　　夏目金之助

内田榮造様

八二三

明治四十二年七月十八日　牛込區早稻田南町七番地より牛込區早稻田南町七番地飯田政良へ

拜啓

○○○といふ人はいゝ人だけれども金の事は丸で當にならないさうである此間中村武羅夫に逢つたらあの人に賴んだや駄目だといつて居た。其時德田秋聲なら好いと云つた。

もしつてがあるなら德田君にでも逢つて見給へ

ホト、ギスへも出來るなら周旋する事は出來る。が夫は物次第である。

金を五圓上げるから叉湯にでも這入つて氷水でも呑み給へ　草々

七月十八日　　　　夏目金之助

飯田青凉樣

八二三

明治四十二年七月二十日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社內野上豐一郎へ　〔はがき〕

秋骨先生僕の文學評論の評を二六へかいてくれた由二六はとつてゐず。御面倒ながら君の所にあるのを切拔いてくれ玉はぬか　以上。

今日は稍凉し大慶

八二四

明治四十二年七月二十六日　午後四時—五時　牛込區早稻田南町七番地より安房國北條字八幡江戸屋畔柳都太郎氏へ

御手紙拜見

避暑結構小生書齋にて執筆中々暑い事に候。昨日齋藤阿具青木昌吉兩氏參り夕刻迄談話二人とも〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇聾の如く申しゐたり。是はたしか大兄も御嫌の一人故とくに御吹聽に及び候。

「それから」の主人公は小生だとの御斷定拜承所があの代助なるものが姦通を致しさうにて弱り候。小生にもそんな趣味があれば別段抗議を申入るゝ勇氣も無之候

大塚の文學評論評は局部々々に小生の妙に思ふ所有之。然し大塚の樣な無精ものが書いてくれた事故大いに感謝の意を表し居候。秋骨は二六に書いてくれ候。

大塚は重箱の如くキチンとしたる頭の男に候。形式家としては鬱然たるものに候。面白い說を吐く人としては一寸推服致しがたかるべきか。尤も夫程大塚のものを讀まぬ故何とも申しがたし。一日も早く此說を正誤致し度考に候。

森卷吉は沼津に參り候。小生小供の爲にピアノを買はせられ候。ピン〱ポン〱中々好音を發し申候

七月二十六日　金

芥舟先生

大學の英文に井上十吉氏入る由高等學校の方は如何

八二五

明治四十二年八月三日　牛込區早稻田南町七番地より牛込區早稻田南町十番地飯田政良へ

御手紙拜見

折角だけれども今借して上げる金はない。家賃なんか構やしないから放つて置き給へ。僕の親類に不幸があつてそれの葬式其他の費用を少し辨じてやつた。今はうらには何にもない。僕の紙入にあれば上げるが夫もからだ。

君の原稿を本屋が延ばす如く君も家賃を延ばし玉へ。愚圖々々云つたら、取れた時上げるより外に致し方がありませんと取り合はずに置き給へ

君が惡いのぢやないから構はんぢやないか　草々

八月一日

夏目金之助

飯田青凉樣

紙入を見たら一圓あるから是で酒でも呑んで家主を退治玉へ

八二六

明治四十二年八月十六日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より安房國北條字八幡江戸屋[illegible]氏へ

拜啓當地暑氣少々ゆるみ稍凌ぎよく相成候。御地は如何。昔の細君長々病氣の處十五日死去氣の毒に存候。小供澤山にて大弱りの體。小生漸く小說脫稿是から讀書が出來る事と樂み居候雜誌のたまつたものを片付ける丈でも一仕事に候。森は敎授になり先々結構。

此近年避暑といふものをした事なく旅行を思ひ立つても時間の惜いのと金の惜し「い」ので成就せず。

大倉といふ爺さんが朝日新聞記者にめしを食はして常盤津を聞かして是が私の道樂で御座いといふ樣な事を實例で示したのは大倉の口振ぢやないが好うがすな。外の奴より餘程洒落てゐる。朝日の記者は恐らく常盤津も何も分らない奴で辟易したんだらうと思ふ。其分らない所を分つた樣に書いたり振舞つたりしてゐるから、大倉の爺さんに舐められてゐるのみならず、讀者も少々氷魂先生を踏み倒したくなる。私はあの實業家廻りを面白く讀んでゐるあれは下手な小說を讀むより可うがすよ。國民には先達てから文士の遊び振りといふものが出てゐる。笹川臨風、田岡嶺雲、姉崎嘲風、樋口龍峽ことごとく生捕られ候。御覽にや面白く候。

エリスのセツクスの心理といふ本を二冊買ひ候。こんな本は讀んでゐるうちは面白くて讀んで仕舞ふと誰かに遣つても惜しくない種類のもの多く候。

關東に大地震が有之候。寺田が立つ時近いうちに大きな地震があるかも知れませんと云つたが、果して豫言適中なり先づ／＼我々は厄逃の氣味に候。

ゆる／＼御養生御歸京の上何れ御目にかゝり可申候　以上

八月十六日　　金之助

芥舟先生

八二七

明治四十二年八月十九日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より　横濱市御影町前川淸二氏へ

御手紙拜見致候御藏書小生の爲に御割愛被下候由難有仕合に存候頂戴可致候頂戴の上は御寄贈の御厚志

に對し永く丁重に保存可致候右不取敢御返事迄　草々頓首

八月十九日　　　夏目金之助

淺[原]川清二様

二伸小生不日旅行の積につき留守中に御受取の際は自然御禮狀を忘るやも計りがたくにつき其邊は御容赦被下度候

八二八

明治四十二年八月二十四日　午前六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ケ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ

拜復小生病氣につきわざ〳〵御見舞狀を頂き難有存候。小生は御承知の通り年來の胃弱なれど今回の如く急性カタルを起したるは始めてにて一時は嘔吐烈敷自分ながら生きてるのが厭になり候處うまくしたものにて今日位から少々人間の慾望出來此手紙も寐ながら書ける樣に相成候まづ〳〵御安心被下度候。大兄も少々腸胃の御加減よろしからぬ由隨分御養生專一と存候然し大兄の如く強壯無比のものは少しは腸胃病に冒さるゝ方色氣ありてよろしかるべくと存候

倘諸先生御招飲の件最初は「それから」執筆中次には荊妻臥蓐中第三には小生の病氣最後には滿洲旅行にて漸々順繰りに延引甚だ[原]恐縮の至是はとくに此書面にて御詫を申上度と存候

滿洲旅行は友人の勸めて參る事に相成滯在日子も不定なれど歸京の上は天地神明に誓つて前約履行の覺悟に候へば天高馬肥の時期に乘じ諸君子腹を抱いて御來駕被下候樣あらかじめ願置候

右御禮旁御詫迄　草々不一

八月二十三日

金之助

中島様

八二九

明治四十二年八月二十四日　牛込區早稻田南町七番地より岡山市古京町内田榮造へ

御手紙拜見老猫批評の件頓と失念致居候甚だ申譯なく存候小說脫稿後種々の用事重なり居候處へ急性胃カタールに罹り臥蓐の爲め何やら蚊やら取紛れ申候あしからず御海恕願候

蓐中早速「老猫」を拜見致候筆ツキ眞面目にて何の衒ふ處なくよろしく候。又自然の風物の敍し方も面白く思はれ候。たゞ一篇として通讀するに左程の興味を促がす事無之は事實に候。今少し御工夫可然か。尤も着筆の態度、觀察其他はあれにて結構に御座候へば其點は御心配御無用に候。虛子の評によれば面白からぬ樣に候へども小生の見る所は虛子よりも重く候。猶御奮勵御述作の程希望致候

花筵一枚御贈被下候由難有候小生病氣全快次第旅行にまかり出候につき留守中到着候節は御返事も怠り可申につき其邊はあしからず

先は右御返事迄　草々頓首

八月二十四日

夏目金之助

内田榮造様

八三〇

明治四十二年九月二日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内高濱清へ　〔はがき〕

是より出發す。風聞録に出立とある時は在京、見合せとあるときは出京。時と事實とは大概此位の差違あるべきか。ホト、ギス到着円川君の鶴簡面白く候

九月二日午後二時

八三一

明治四十二年九月七日　午前十一時―午後一時　鐵嶺丸船中　[illegible]へ　〔繪はがき〕

胃病如何。小生健在。今晩大連着。伊香保より航海の方愉快なるべし。もう山から御歸りの事と存じ候

六　日

八三二

明治四十二年九月七日　午前十一時―午後一時　滿洲大連大和ホテルより牛込區早稲田南町七番地夏目鏡へ　〔繪はがき〕

只今大連着ヤマトホテルと云ふ旅館につく。

六　日　　　　夏目金之助

八三三

明治四十二年九月七日　午前十一時―午後一時　滿洲大連ヤマトホテルより本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔繪はがき〕

君の風邪如何。小生の胃病大分よし。只今大連のヤマトホテル着。隣の室で西洋人の女がしりきにピヤノを彈じてゐる。

六日午後七時

八三四

明治四十二年九月十三日　午後十一時—十二時　滿洲大連大和ホテルより牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ　〔滿鐵總裁官舍繪はがき〕

九月十四日

御前も無事。小供も丈夫の事と思ふ。此方にも別狀なし。毎日見物やら、人が來るのでほとんど落付いてゐられず。昨夕は講演をたのまれ今夜も演說をしなければならない。中村の御蔭で色々な便宜を得た。西村へよろしく。其他の人にも宜敷

〔裏に〕

是は總裁中村是公の家。旅順の戰場を見て二泊昨日歸り。明十四日北の方へ向け出發の豫定。其後胃が時々いたい。此地は非常に晴れ具合の奇麗な處。

八三五

明治四十二年九月十九日　滿洲湯崗子より牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ　〔繪はがき〕

今十九日湯崗子と云ふ溫泉發奉天に向ふ。同行舊友札幌農學校教授橋本左五郎氏久々にて御面會致し毎日愉快に同行致居候　橋本左五郎

八三六

明治四十二年九月二十一日　午前十一時—午後三時　滿洲奉天滿鐵附屬地より千葉縣成田中學校鈴木三重吉へ　〔繪はがき〕

是からハルピンに行く積り歸りには朝鮮へ出る。歸る頃に遊びに出て來給へ。かうしてゐると文學だの小說だのといふ事は丸で頭の中から消えて仕舞ふ。

〔裏に清國女優二名の寫眞あり〕

こんなのは如何です

八三七

明治四十二年十月九日　午前九時—十一時　朝鮮京城旭町總督府官舍鈴木穆氏內より牛込區早稻田南町七番地夏目鏡へ　〔繪はがき〕

三十日に京城に來て三四日で立たうと思つた所とう〳〵一週間程宿屋にゐた。七日の晚に穆さんの新官舍に移つてしばらく厄介になる。穆さんが切角親切に來い〳〵と云つてくれるからである。立派な淸潔な家だ。穆さんは馬を二頭持つてゐる。日本なら男爵以上の生活だ。其うち歸る。

十月九日　　　　金之助

八三八

明治四十二年十月九日　午前九時—十一時　朝鮮京城旭町總督府官舍鈴木穆氏內より京橋區日吉町國民新聞社內野上豐一郞へ　〔繪はがき〕

十月九日　　　　京城　夏目金之助

其後は御無沙汰去月三十日に來り未だ逗留二三日うちに立つ積り。雜誌屋に雜誌新着といふ赤いのぼり

があつたから這入つて見たら十月のホト、ギスと中央公論抔があつた。君の小說も小宮安倍抔の論文がある。讀まうと思つてまだ讀まない。朝鮮は好い天氣の國だ。

秋晴や山の上なる一つ松

諸君へよろしく

八三九

明治四十二年十月九日　午前九時―十一時　朝鮮京城旭町總督府官舍鈴木穆氏內より神田區錦町三丁目錦城中學校野村傳四へ〔繪はがき〕

君が鹿兒島から歸る前に僕は滿洲に旅行した。今京城に來て朝鮮人を每日見てゐる。京城は山があつて松があつて好い處だ。日本人が多いので內地にゐると同樣である。

十月九日　　夏目金之助

八四〇

明治四十二年十月十九日　午前六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區下二番町三十番地野村傳四へ〔はがき〕

僕は昨朝歸つた君は病氣の由大切に御養生をなさい。御見やげは何にもない。癒つたら來給へ。方々へ禮狀を出すので忙がしくて困る

八四一

明治四十二年十月二十二日　午後八時―九時　牛込區早稻田南町七番地より朝鮮京城通信管理局官舍矢野義二郞氏へ

矢野君京城では色々御世話になつて難有かつた御蔭で方々見物が出來て萬事好都合であつた。釜山では草梁から矢野君が滊車へ乘つて船迄案内して吳れた。僕は此間一寸電報をかけた通り去る十七日歸つた。胃はまだ悪いことによれば一つ洗滌して見樣かと思ふ。
御禮といふ程のものでもないが今日小包を一つ出したから受取つて吳れ玉へ
奥さんによろしく
右口上迄　草々

十月二十二日　　夏目金之助

矢野義二郎樣

八四二

明治四十二年十月末（?）・牛込區早稲田南町七番地より大阪市北區中之島朝日新聞社内鳥居赫雄氏へ

〔初めの部分切れてなし、十行十九字詰の原稿紙第七頁より始まる〕

區劃をなして居る自治團の樣なものであります。夫から營口へ行つた時も捕まつて同所の俱樂部で講演をする事になりました何れも一時間位の長さのものです。奉天でも相談を受けましたが日取が一日狂つた爲めとう／＼逃れました。京城でも切に望まれましたが、何しろプログラムが切り詰めてあるのと、少時でも宅にゐると人が來たり電話が掛つたり碌々飯も落ち付いて食はれない有樣だつたので、依賴者も斷念して歸りました。

講演以外に苦しんだのは字を書く事です。字は下手だと云つても承知せず何は作らないと斷つても容し

て呉れず。甚だ辟易しました。ある所では宿屋の御神さんに是非書いて行けと責められて已を得ず宿帳の様なものに分らな「い」事を書いて置いて來ました。京城にそれから會と云ふのがあつて、其會員は娛樂の一法として歌留多をやるさうですが、百人一首を讀む前に何でも一首別の歌を朗讀して音聲を調へるんださうです。所が會の名がそれから會丈あつて、此會員は是非私に其空歌と云ふのを作つて呉れと云ふんです。私は生れて歌なんかよんだ覺はないが、何しろそれから會の名に對しても濟まぬ事と思つて、とう〳〵三首程短冊に書いて置いて來ました。其歌ですか歌は斯う云ふんです。名歌だから御聞きなさい。

高麗百濟新羅の國を我行けば
　我行く方に秋の白雲
草茂る宮居の迹を一人行けば
　礎を吹く高麗の秋風
肌寒くなりまさる夜の窓の外に
　雨を聽くポプラァの音

ポプラァですか。えゝ彼地(あつち)には澤山あります。
此度旅行して感心したのは日本人は進取の氣象に富んでゐて貧乏世帶ながら分相應に何處迄も發展して行くと云ふ事實と之に伴ふ經營者の氣概であります。滿韓を遊歷して見ると成程日本人は頼母しい國民だと云ふ氣が起　〔以下缺〕

八四三

明治四十二年十一月七日　午後四時―五時　牛込區早稻田南町七番地より京橋區日吉町國民新聞社内野上豐一郎へ　〔はがき〕

虛子から催促された夢の如しの評入御覽候。願くは一日に御掲載願候先達停車場へ〔註〕四方太に逢つたら同人よりも何か書けと云はれ候　以上

十〔原〕月七日

八四四

明治四十二年十一月九日　午後六時―七時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ケ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ

拜啓御手紙わざ〳〵病中に御認め御厚意難有候露西亞講師の件は只今手紙にて中村へ申つかはし候處御推擧の人物はもし先方より何とか申來候節は慥かに申聞べく候

音樂會へは娘をつれてフロックで出掛ました。ソソッカシイので本郷の中央會堂へ行つて仕舞ました。夫から又三崎町へ取つて返した處幸ひまだ開會に至らず。ことごとく拜聽の榮を得候。小生音樂の耳なく唯だ遺憾たゞ面白く聞いたには相違なけれど恐らく何を聞いても同程度に面白い位の耳なるべく寺田を連れて行かなかつたのを殘念に思ひ居候。いくら文學者でも此位の耳では音樂會を天下に吹聽するの勇氣乏しく候

西村はとう〳〵大連へ參り候在京中は色々御世話になりました。

音樂會の切符を三枚買つた處第三女が連れて行つて吳れといふので連れて行きました。切符が一枚足りないから斷つてゐるとそこへもと英文科で教へた人が出て來てなによろしう御座いますといつて入れてくれました。幸田、橘、賴母木等の諸先生が見えました。シーモアと云ふ異人もゐました。然しもう少し人を呼びたかつた樣です。然らずんばみんなよりぬきの鑑賞家をあつめたかつた。私の樣なものがあの中に交るのは何だか氣の毒ですが或は私同樣の驢馬が這入つてゐるかも知れません。其驢馬を勘定に入

れてあの位の入りなんだから氣の毒です
　粟餅で發熱したのは珍らしくて愛嬌があります。私はいそがしいから是でやめますあなたの病氣見舞の代りに此手紙を書きます　頓首

十一月九日　　夏目金之助

中島六郎様

八四五

明治四十二年十一月二十日　牛込區早稻田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地大塚保治氏へ

拜啓其後は御無沙汰講釋より歸りて一寸伺ふ筈の處不相變多忙にて失禮致居候
さて思ひも寄らぬ事と御驚きならんが實は今度朝日新聞に文藝欄といふを開店し二十五日頃より始めるに就ては僕の友人などより話をきゝ又は原稿をもらつて文藝の時事に關する事を記載しなければ立ち行かぬ事と相成たるにより、どうぞ御迷惑でも此男に逢つてやつてくれ玉へ是は森田草平といつて、僕自身拜趨萬事願ふ所を多忙だから代理に頼むのである。
委細は森田より御聞取、朝日文藝欄のスペシアル・コントリビユーターとなる事を兎に角御承認を願ふ
いづれ拜眉萬々　艸々頓首

十一月二十日　　夏目金之助

大塚様

八四六

明治四十二年十一月二十一日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小宮豐隆へ

拜啓左の如き端書が來たから面倒でも一寸行つて呉れ玉へ。二三日前同じく端書で月謝を納めろと云つて來たが、本人に一先づ聞き合せ樣と思つて問合せの手紙を出した。當人は唐津炭坑にゐるさうであるから少々ひまがかゝる夫迄埒を明けるのを待つてもらつて呉れ玉へ

第一、一學期の月謝未納とは何の事だか分らない。一學期が未納で卒業が出來るのかな　以上

十一月二十一日　金之助

豐隆樣

八四七

明治四十二年十一月二十五日　午後八時―九時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ケ谷田町三丁目十一番地中島六郎氏へ　〔はがき〕

拜啓文藝欄を設けるため度々森田を以て御邪魔を致し不相濟候昨二十四日の音樂會の評難有存候淨書の上二三日中に掲載可致候右御禮迄　草々頓首

八四八

明治四十二年十一月二十八日　午後一時―二時　牛込區早稻田南町七番地より Bei Frau Schmeltzer Geisbergstrasse 39. Berlin W.

寺田寅彥へ

君が度々手紙を寄こして呉れるのにたゞの一度も返事を出した事がない。正直をいふともらふ度に今度は出さう〳〵と思ふが、あまり溜つてゐるから、書くなら長いものを書かう抔と贅澤を極めてゐるうちに、まあ手近な用を片付けなければならなくなる。實は御存じの通り坐つてする仕事がいくらやつても遣り切れない位積つてゐる。夫で失敬ばかりする。僕は九月一日から十月半過迄滿洲と朝鮮を巡遊して十月十七日に漸く歸つて來た。急性の胃カタールでね。立つ間際にひどく參つたのを我慢して立つたものだから道中非常に難義をした。其代り至る所に知人があつたので道中は甚だ好都合にアリストクラチックに威張つて通つて來た。歸るとすぐに伊藤が死ぬ。伊藤は僕と同じ船で大連へ行つて、僕と同じ所をあるいて哈爾賓で殺された。僕が降りて踏んだプラトホームだから意外の偶然である。僕も狙撃でもせ〔ら〕れゝば胃病でうん〳〵いふよりも花が咲いたかも知れない。

夫からキチナーといふ男がくる。宇都宮で大演習をや〔る〕。中々賑やかな東京になつた。僕は新聞でたのまれて滿韓ところ〴〵といふものを書いてゐるが、どうも其日の記事が輻輳するとあと廻し〔に〕される。癪に障るからよさうと思ふと、どうぞ書いてくれといふ。だから未だにだら〳〵出してゐる。其所へもつて來て此二十五日から文藝欄といふものを設けて小說以外に一欄か一欄半づゝ文藝上の批評やら六號活字で埋めてゐる。君なぞが海外から何か書いてくれゝば甚だ光彩を添へる譯だが、僕は手紙を出さない不義理があるからヅウ〳〵しい御賴みも出來かねる。尤も文藝欄の性質は文學、美術、音樂、なんでもよし。ハイカラな雜報風なものでも、純正な批評でもいゝとして可成多方面にわたつて、變化を求めてゐる。あとで六號活字を愛嬌につける。今はハウプトマンだのエデキンドだのゝ逸話見た樣なものを載せてゐる。是は小宮が書いてくれるのだが、ぢきに種が盡きさうで困る。まあ食後に無駄な時間でもあつたら繪端書へでもいいから何か書いて呉れ玉へ。評論にしても一回讀切りを主としてやる、どうも長くなると

弱るからね。

近頃はモミアゲの處に白髮が大分生えて御爺さんになつた。昔し教へた御弟子が立派になるから恐縮だ。松根は式部官になつた。森田は文藝欄の下働きをしてゐる。社員にしやうと思つたら社長があゝ云ふ人は不可ないといふんだから弱つた。

今日は上野に音樂會がある。いゝ天氣だ。行つて見やうかとも思つてゐる。四五日前は有樂座でロイテル氏の御披露演奏會があつた。ピヤノが旨いさうだ。ゴルグマイステルは君知つてゐ「る」ね。幸田の姉さんが僕の旅行中に休職になつて、すぐ外國へ行つて仕舞つたさうだ。神戸さんが歸つて來た。昨夜は同じく有樂座で森鷗外譯のイブセンのボルクマンを左團次や何かゞやつたさうだ。是は小山内薫が主宰してゐる自由劇場の興行である。

文部省の展覽會もある。此間見に行つたが、日本人も段々旨くなるね。前途有望だ。不折は不相變チヤイの裸をかいた。虎の皮の犢鼻褌をしてゐるからえらい。然し肉の色は甚だ可かつた。背景は拙悪極まるものだ。

僕の家は經濟が膨脹して金が入つて困る。然しまだ借金は出來ない。君の留守にとう／＼ピヤノを買はせられた。歸つたら演奏會をやりに來給へ。君が買へ／＼と云つてゐたから、ピヤノが到着した時は第一に君の事を思ひ出した。君がゐたら嘸喜ぶだらうと思つた。筆が稽古をしてゐる。それで來年の春は同じ位の年の人と一所に演奏會へ出て並んで何かやるんださうだからえらいね。さうして中島さん(筆の先生)が十時の休息時間に僕に何か挨拶をしろといふんだから猶々驚ろく。

僕は此度「それから」といふ小説を書いた。來年の正月春陽堂から出るから送つて上げる。獨乙でハイカラな寫眞を撮つたら寄こし玉へ。今日は好い天氣だ。緣側でこれを書いてゐる。山茶花が咲いてゐる。

もう何も書く事がなくなつたやうだからやめる　以上

十一月二十八日

金之助

寅彦様

八四九

明治四十二年十一月二十九日　午後八時—九時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區市ケ谷田町二丁目十一番地中島六郎氏へ

拜啓文藝欄設立につき御援助を願ひ候處早速樂界の爲に御奮ひ被下難有既にロイテル氏披露會の御評を賜はり又秋季演奏會の御評も頂戴深謝の至に不堪候

　然る處先日ロイテル氏の分はあれでは文藝欄の五號批評としては一般の讀者に通じがたきにつき森田に命じてあれをまとめて一篇の概括的批評文を作らしめ候、處が森田は音樂に對して零の智識を有し從つて小生と同一につき遂に眞意を誤まり候箇所など相生じ候由實以て申譯なく恐縮致候。時間さへあれば一應御檢閲を仰ぐ處なれど取いそぎ候爲め事實大兄に對し失禮を敢てしたると同一の結果に陷り甚だ濟まぬ事に相成候わるい氣ではないのですからどうぞ御ゆるしありて、勇氣沮喪を御禁じ下さつて何卒御盡力を願上候

　西村君の評は自分の義務と思つて書いた事と存候。元來編輯會議では文藝欄を設けないでも藝術文學の批評はやるのだからさう云ふ種類のものをまとめて小生の管理の下に紙面中に收めたらよからうと云ふ相談故、強く抗議を申込めばやめさせる事も出來候へどもあれはたゞ襍報の筆がすべつたもの位に見逃しても差支ないと存候是亦漸次改良の積故さう一時に御立腹なく完成の機迄御見屈願上候

秋季演奏會の御批評は都合上或は六號にて全部掲載するやも計りがたく候につきあらかじめ御含み願上候貴訂正の箇所（もしあれば）時間の都合にて一應入貴覧る積なれど萬一間に合はぬ時はすぐに出し可申間どうぞご御勘辨を願候其代り充分注意可致候

右御返事迄　艸々頓首

十一月二十九日

金　之　助

中　島　様

八五〇

明治四十二年十一月三十日　午後零時—一時　牛込區早稲田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十二番地阿部次郎へ　〔はがき〕

玉稿たしかに落掌御多忙中難有存候紙面の都合次第掲載可仕候

只今森田氏不在につき小生より御禮申上候　艸々

十一月三十日

八五一

明治四十二年十一月三十日　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき〕

少々御相談申上度事有之明一日早く御出願はれ候や

右用事迄　草々

十一月三十日

八五二

明治四十二年十二月三日　午後〇時―一時　牛込區早稻田南町七番地より神戸市中山手通四丁目二十番地淺野方東新へ

拜啓御手紙拜見金圓御用立の件御申越の通御返却にてよろしく候其地の學校は萬事意外の事のみにて定めて面白からぬ事と被察候がまあ當分御辛抱可然かと存候只今多忙にて長い返事をかく譯に參らず候故是にて御免蒙り候。先達てはアナグマの皮御一枚惠投にあづかり深謝致候あれは何にしたらよきやチヤンチヤン可然か序に御教へ願候先は右迄　草々

十二月三日　　　　夏目金之助

東　新　樣

八五三

明治四十二年十二月三日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十二番地阿部次郎へ

御手紙拜見かねての講演御催促にて恐縮致候が御承知の如く文藝欄開店の爲め事務不少其上滿韓ところ〴〵を今月中つゞけた上に、新年の阪朝に十口つゞき位のものを書く事に相成何とも思案の餘地無之甚だ違約がましく不快なれどどうぞ事情御諒察の上御勘辨被下度候

右御詫迄　艸々頓首

十二月三日　　　　夏目金之助

耕　三　様

八五六

明治四十三年一月二日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ　〔はがき〕

恭賀新年
能勢が來て君に「それから」を評してもらへと申します。さうして本を一部送れと申します。本は便次第送ります。御批評は願ひます。（朝日文藝欄なら一二三回以下にて）

八五七

明治四十三年一月三日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より鹿兒島市春日町三十九番地蒼崎氏方皆川正禧へ

恭賀新年
忙がしいから端書で失禮當地も暖かな好新年である。謠は御勉强の由御出京の節御相手可致候

八五八

明治四十三年一月三日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より伊豆國修善寺新井方林原（當時岡田）耕三へ　〔はがき〕

恭賀新年
「それから」は一部上げる積で居たのに惜しい事をした
三　日

八五九

明治四十三年一月四日　牛込區早稻田南町七番地より千葉縣成田町谷津作木三吉へ　〔はがき〕

謹賀新年
今年より御活動のよし大慶の至に存候
　　一月四日

八六〇

明治四十三年一月十一日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豐隆へ　〔はがき〕

古本御序の節御求めを乞ふ　代金はあとから御返上可致候　以上

八六一

明治四十三年一月十四日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より京都市二條川東疏水西廚川辰夫氏へ

拜啓朝日文藝欄に御同情被下玉稿わざ〳〵御寄送被下難有御禮申上候小包は只今到着いまだ拜見不仕候へども慥かに落手致候。舊冬中よりの原稿少々たまり候上前日掲載ものゝ反駁やら何やら參り且つ其間に起る時事に就て少々は意見を發表する必要も刻々起り候故出來る丈早く掲載の積には候へども多少の時日を要し候事故其邊はあしからず御含置願度候
又雜誌の原稿も同時に着是も出來る丈早く御希望の通に取計ふ所存に御座候中央公論が不可なければ外の雜誌をも聞き合せ可申其節は今一度御問合可致候

「それから」御ほめにあづかり難有候
右不取敢御返事迄　草々頓首

一月十四日

夏目金之助

厨川辰夫様

八六二

明治四十三年一月十九日　午後六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區弓町一番地小吉館小宮豊隆へ　〔はがき〕

拜啓此間の池松常雄氏（赤城元町三十四）へ二十四日の會の番組とくる樣に案内とを出す樣にカンノツさんか高野さんに電話で賴んでくれ。何か役をつける事も賴んでくれ。うまい人だから尊敬した役をつけるがいゝと云つてくれ

八六三

明治四十三年一月二十一日　午前十時—十一時　牛込區早稻田南町七番地より 59 Airedale avenue, Chiswick, London 大谷正信氏へ

拜啓其後は御無沙汰御地着の上只今はもはや御落付御研究最中と存候
御出立後東京も別段の變化無之。正月も例年の通り。降雪二回。晝日は寒き方に候。倫敦抔防寒的に家屋の構造の出來てゐる處は却つて我々の書齋よりも遙かに暖國に候。芝居其他御遊覽に相成候や。倫敦ほど雄大な處は世界中にこれあるまじく考へ樣次第にては内地よりもずつと呑氣なものに候へば久し振りにて老書生に立ち歸り勝手に世帶の苦勞なく御消光可然と存候

「それから」出版致し候につき一部此手紙と同便にて進呈致候。日本の小說抔却つて御歸りの時の御邪魔にも相成るべくとは存じ候へどもかねて御愛讀を辱ふせる御厚意に對する記念として差上候もの故御落手被下度候

昨年末より朝日（東京）紙にて文藝欄なるものを開始し、毎日一段もしくは一段半位の批評もしくは文藝上の論文抔かゝげ居候。其下に六號活字にて柴漬と申すものを置き是には西洋の雜誌抔より通信、消息、報道等人の面白がりさうなものをごちや／＼にならべ居り候。大體一項十行内外に候。

御地御見聞上の事にてももし現下日本の文藝上の時事問題に直接もしくは間接に關係ある御意見もしくは報知も有之候はゞ時々御寄稿被下度幸不過之候。又どこかへ御遊覽の節（ハンプトンコート抔）繪端書の裏へ寫生文の樣なもの五六行御書き被下候へば消息として今申したる柴漬の後へ載せたき考に候。

どうせ新聞故大論文や長時間を費やすものに就て御迷惑をかける料簡にては無之。たゞ霧が降つた人の顏がぼんやり映るとか、ショーの脚本をどこ座で見たが面白くなかつたとか。何とか云ふ事を五六行にてよろしく。もし又一二時間の御閑も有之ば文藝欄の五號活字として載せ得るもの一欄か一欄半位にて讀み切りのもの……何とか蚊とか手前勝手のみ申し募り候。御笑ひ可被下候　草々

一月十九日

夏目金之助

繞石老臺　座下

八六四

明治四十三年一月二十一日　午後二時—三時　牛込區早稻田南町七番地より府下大久保八幡坂上杉村廣太郎氏へ

拜啓本日御葬送とは存候へども本門寺ではちと遠方故失禮致候

此間中より每々倶樂部の御周旋に相成好都合至極何か御禮と思へど大した思付もなし。幸ひ今迄拙著を進呈したる事なき故珍らしくてよろしからんと存じ近刊それからを一部座右に呈し候中に何か書かうと思へども本屋の方で小包用につゝんである故まづい字抔はと考へ直して其儘差出候

御葬式其他にて嘸かしの御混雜の際に閑言を弄し恐縮なれど氣の付いた時出さないと人が來てそれから夫へと經つて行く故あるうちにと存じ敢て場合を顧みず。失禮御高免の事。猶萬事了畢後の道體保安を祈る　草々頓首

一月二十一日　　　　金之助

楚人冠盟臺

　　座下

八六五

明治四十三年一月二十一日　（以下不明）　牛込區早稻田南町七番地より府下淀橋町柏木四百二十三番地[illegible]氏へ

御手紙拜見致候送別會の件につき何遍も御手數をかけ不相濟る事と存候が其後始終ごた〳〵致し毫も頭に餘裕無之甚だ殘念ながら「出來た時に」と云ふ條件にて延期を願ふより外に致しかたなくと存候右不取敢御迷惑ながら御返事申上候　早々

一月二十日

問題として修正一箇所（花袋君嗚呼云々）が左程貴論にヴイタルならざりしならんとの結論に候。貴兄も綺羅も只義相調に候　是にて大兄の御不満も少しにても取れ候へば小生は難有仕合に存候

御承知の通原稿は先月末に出すべき筈の處議會にて締切よりも遅々になり候處昨日森田電話にて掛合此次に組込む筈に致候旨申来候につき時日切迫の爲め或は貴意の如く元の通りに致しかね候やも計りがたく候へども出来る丈御希望の件可成早く何［と］か分別可致、御目にかゝり御話をすればよけれどかけ離れ居候爲め無益なる筆にて御詫を入れ申候あしからず御了恕願候　草々

二月三日　　夏目金之助

阿部次郎様

諸方より来る原稿中削除もしくは訂正する事有之、是は寄稿者が文をなさゞる場合にいたし候。又はなし手を入れる事あり、是も投稿者へ断つて賛意を表する場合にも致候。大兄のとは全然趣を異に致し候故是も序に申上置候

八六九

明治四十三年二月三日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區大久保余丁町百〇八番地へ

御手紙拝見致候先達ては失礼致候御来旨の趣は阿倍君よりも森田へ問合せ来り候處森田參らざる故小生より返事を出し置候

花袋云々の件は阿倍氏の書き方の前後より押して毫も全篇の主意に痛痒を與へざるものと見做したる故森田より相談を受けたる時夫でもよろしからんと申候。森田の考は阿倍君とあすこの處丈が違つた故に訂正を申し出したるならんとは其時存じ候。人の書いたものを一字でも手を入れる事に許諾を與へたるは阿倍氏は森田小宮抔と親交ありて、あの位の事はあとから斯う云ふ譯だと話せばあゝさうかと笑つて仕舞ふ位の間柄と思ひし故に候。權利問題を呈出されて事が六づかしくならう抔と想像し得る程の大關係の箇所とも思はず、又森田對阿倍の關係が夫程フォーマルに禮儀を盡さねば手落となりて後で抗議を受けるとも思ひ居らざりし故に候。

小生は文藝欄擔任記者として凡ての論文に對し自ら責任を負ふ積り故文章が意味を爲さゞる場合は森田に書き直させ候事も有之候。又長ければつゞめさせる事も有之。右兩樣共寄稿者並びに文藝欄の體面上雙方の便宜と思ふ場合に有之。從つて是等の場合は寄稿者に寧ろ尊敬を拂ひし爲の手續と考へ居候。阿倍氏のは右兩樣の場合とは異なり。却つて懇意づくより他の原稿を多少どうかし得るフリードムありと信じたる親密を森田阿倍兩氏の間に測定せるより起るものに候。

此測定が人を侮辱せるもの也との抗議ならば不敏を謝するより外無之候。謹んで大兄と阿倍君に御詫び可致候。

有體に申候へば今の所謂自然派(自然派をかたち作る人物)が嫌に候。是は其説が如何にも粗漏放漫にして相手の人格及び意見に對して毫も敬意を拂はざる表現法をのみ用ひるが故に御座候。かの人々自からのコンシートを撤回せざる限りは到底かの人々の議論に對し敬意を拂ひがたく候。敬意を拂ひ得る丈に議論は周到ならず、態度は士君子流ならざる故に候。この嫌惡の情の爲に左右せられて森田の提議に應じたるかの質問に對しては寧ろ然りと答へるの事實なるべきを公言致したき位に候。去れども徹底に彼等兩人

は自然派たり得ずと理智の判斷に支配されたるも事實に候。最後に尤も多く余を動かしたるはどうでも好い所だと云ふ念と、懸意づくの間柄だからと云ふ心持とに候。夫が貴兄等の尤も癪に障つた所だらうと後悔致し候。論議は公正ならざる可らず、意見は不偏不黨ならざる可らざる事は御說の如くに候。小生が許諾を與へて訂正せしめたるも此公平と不偏不黨を傷けざる範圍内の出來事位に暗々の裏に思惟せるとしか自分には考へられず候。夫を然らずと御思ひありては只恐縮の外なく候へども致し方も無之候。小生はあの時大兄の題をつけかへて、匿名を蒔樓に直したる森田の擧動を寧ろ不穩當と感じいさゝかためらひ申候へども、前述の通り是も懸意づく故君等がリバーチーを與へられたるものと信じ矢張り承諾致候

小生不行屆にて諸君子に煩を及ぼし慚汗不少候。右返事により幾分か小生の心意を致すを得ば幸に候。

猶期御面會申候　以上

二月三日　　　　夏目金之助

安倍勢成様

八七〇

明治四十三年二月六日　午後二時―三時　牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郞へ　〔はがき〕

拜啓虛子轉地の由編輯御多忙ならんと存候。小生此間の謠會に七騎落を西神田倶樂部へ忘れし樣なり、御序の節幹事に願つて取つてもらつてくれ玉はぬか右御願迄、　八重子さ〔ん〕赤坊共御健勝の事と存候

八七一

明治四十三年二月十日　牛込區早稻田南町七番地より栃木縣芳賀郡山前村字滝龍土高松甚一郎氏へ

御手紙拜見私のものを御愛讀被下るよし難有い事でどうぞ今後も御讀を願ひます。近頃の本でノンビリと氣の樂になる樣なものはあんまりありません。私の友人の高濱虛子といふ人の書いた俳諧師といふのがあります。民友社の出版で並製壹圓以下と覺えてゐます、あれでも讀んで御覽なさい右御返事迄　草々

二月十日

夏目金之助

高松甚一郎樣

八七二

明治四十三年二月十六日　午後一時—二時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

柴漬難有頂戴明木曜日もし御光來なら本鄕で掌中醫方と申す小冊子（壹圓程か）を御買求め被下度右願上候　草々

二月十六日

八七三

明治四十三年二月二十日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

別紙の如き端書參り候御序の節御返事御出し被下度候當用のみ　草々

二月廿日

金之助

豐 隆 様

八七四

明治四十三年三月二日 午後十一時―十二時 牛込區早稲田南町七番地より本郷區第一高等學校寄宿舎東寮十一乙林原（當時岡田）耕三へ

拜啓三月記念祭にて切符わざ／＼難有候小生當日學校にて參るひまなく殘念に候いつれ拜眉萬々

本日の新聞には會の景況色々記載有之候大分面白かりし樣被存候小生執筆中にて多忙今度はゆるゆる書いて居候

三月二日

夏目金之助

岡田耕三様

八七五

明治四十三年三月四日 午前十一時―十二時 牛込區早稲田南町七番地より Bei Frau Schmeltzer, Geisbergstrasse 39, Berlin W. 寺田寅彦へ

端書拜見其後御變りもなき事と存候。今度音樂家で山田といふ人が岩崎の金で伯林へ留學する幸田の所をたよる由。此人の友人で筆の先生の中島さんから君へも序に頼んでくれといふから一寸御報知する。何かの機會もあつたら世話をしてやつてくれ玉へ。

段々春めいてきて少しは暖かになつた。昨日湯に入つたら今朝始めて鶯をきゝましたよ。まだ下手ですねと云つてゐた。宅では簞笥の上に御雛樣を飾つてゐる。山田といふ奥さんから庖屋の雛の菓子をもらつて飾つた。二日の夜明に又御産があつて大混雜。又女が生れた。僕は是で子供が七人二男五女の父となつ

たのは情ない。髪の所に白髪が大分生えた。又小説をかき出した。三月一日から東京大阪兩方へ出る。題は門(もん)といふので、森田と小宮が好加減につけてくれたが、一向門らしくなくつて困つてゐる。小宮も森田も中々有名になつた。虛子が去年の末腸チフスをやつて漸く快復したがまだ衰弱してゐる。其他異狀なし
草々

三月四日御天氣のいゝ日　　　金之助

寅彦様

八六八

明治四十三年三月十一日　午前[illegible]時　牛込區早稻田南町七番地より[illegible]

雜誌拜受玉稿面白さうなれど未だ讀まず。あの六號活字は誰が書くにや。僕と楚人冠と確執してゐる様に書いてある。僕が十五二十四兩日に各部會議に出るため社へ行くと會議の濟むのが何時でも午頃になる。すると楚人冠が何時でもおい夏目君飯を食ふぢやないかと僕を誘つて表へ出る。さうしてつい傍の東洋軒へ行つて會食する。僕は倶樂部の會員でないから費用は何時でも楚人冠の擔任だ。僕は楚人冠の誘を受けるとうん御馳走し玉へと云つて一所に出る。是ぢやあまり確執でもあるまい。

蒼瓶がジョナリズム（自然派攻擊）の非難を書いた時、楚人冠が新聞界で自分のやつてゐるジョーナリズムの意味にとつて反駁した事がある。其時僕はストーブの前へ君あんな事を書くと丸で僕と喧嘩してゐる様に世間で思ふよ。かくなら文藝欄のうちへ書かないかと云つたら、楚はうんさうかと云つてゐた

六號抔はどうでも好いが是も一つの材料だから虛子が僞寳會の事を辯じた様に風聞錄か抔で六號へ事

實を書いて吳れないか。たゞし僕が自分で正誤する程なら自分の新聞でやるから、そこは君の取計で如何様にも願たい。尤もこんな事は始終あるから別に氣にもならないから、君の方の都合が好かつたら材料として使つて貰はう位の所に過ぎない　草々

三月十一日　　　　　　　　　　金之助

豐一郎樣

森田のやつこが楚人冠へ答辯をかいた時は僕に原稿を檢閲す〔る〕ひまを與へずにすぐ社へ持つて行つた。あれを僕は書き方がよくないと叱つた位だ

八七七

明治四十三年三月十二日　午後十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小宮豊隆へ　〔はがき〕

拜啓ロンドンシャウ一、二月號同時に着。瞥見するにあまり材料なき樣也。御序の節可差上候　草々

十二日

八七八

明治四十三年三月十三日　午後零時―一時　牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ　〔はがき〕

本日風聞錄で楚人冠記事拜見御手數難有候。ミナも拜見あれは面白く候此前の新小說のと共に佳作に候。「赤門前」よりはよろしく候

八七九

明治四十三年三月十三日　午後零時—一時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區第一高等學校寄宿舍東寮十一乙林原（當時岡田）耕三へ

御手紙拜見指が痛いつて云ふのは何の病氣かね醫者にはかゝつてゐるのかね、指が痛くつて筆が持てなくつては學生は出來ない位だ養生をしなくつちや不可ない
人世觀とか世界觀とかいふものは段々變るものだが其時其場合には誰にもしつかりした處があつて欲しい。何物にか逢着したのは君の仕合だ
印は押し候　草々

三月十三日　　金之助

耕三様

八八〇

明治四十三年三月十八日　午後四時—五時　牛込區早稻田南町七番地より麴町區九段中坂望遠館松根豐次郎へ　〔はがき〕

御歸京の由、御父さんの病氣は如何。此間少々用事あり七時頃君の處へ行つたら、今御國へ御歸りと云つた。用事は今濟んだ。何れ其うち、御産は安産、性は女子、名つけてひなといふ三月二日朝三時の生れ。

八八一

明治四十三年三月十九日　午前六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

明治四十三年三月二十九日　午後九時—十時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町六番地鈴木三重吉へ

御手紙拜見春雨の候御地は如何。淋しい由。色々な意味にて誰も淋しく候。小鳥の巣毎日拜見隨分御苦心の事と存じ候へども書きかけたもの故是非共始末を奇麗に御付可被成候學校授業執務の外に小説を毎日書くのは定めて御難義とは存居候。小生は胃の加減わるく氣に任せて長く筆を執ると疲勞する故大抵毎日一回位で胡麿化し居り候。いづれ委細は御面晤　草々頓首

三月二十九日　　　　金之助

三重吉樣

八八五

明治四十三年三月三十日　午前八時—九時　牛込區早稲田南町七番地より麴町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ　〔はがき〕

拜啓白樺一號御恵送にあづかり拜受。卷頭の「それから」評未だ熟讀不致候へども直ちに一寸眼を通し候。拙作に對しあれ程の御注意を御拂ひ被下候のみならず、多大の頁を御割愛被下候事感佩の至に候。深く御好意を謝し申候。御批評の内容は未だ熟讀を經ざる事故何とも申上かね候へども所々肯綮に當り候所も多き樣に存候。中にも「それから」が運河だと云ふのは恐らく尤も妙なる譬喩ならんと存候。「それから」のとめ方の御話もあの通りの愚見にて候ごし。先は御禮迄　草々

八八六

明治四十三年四月六日　午後五時—六時　牛込區早稲田南町七番地より麴町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ　〔はがき〕

拝啓「代助と良平」頂戴難有候都合次第掲載可致候間しばらく御猶豫願上候。右御禮迄　草々

（森田参るべき處多忙にて電話にて御迷惑願候事と存候御免被下度候）

八八七

明治四十三年四月十日　午後六時―七時　牛込區早稲田南町七番地より清國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ

拝啓御出發の際は御見送も不致海陸御無事御地に御着のよし大慶の至に候春雨濛々とか黄鶴樓とか申す言葉をきくと是非一遊致し度相成候當地も春景色にて諸新聞ともに花信を掲載致居候處生憎筆に祟られ外出不仕慨然の至に候。朔日文藝欄にては時々清君を煩はし畫界の事に關し御執筆願居候。御地にて何か面白き報知も有之候はゞ同欄のなかへ掲載致度考に候。どうも文藝欄を擔任してより商賈氣多く相成困入候。

菁畫皆々隨分御清賞不淺事と存候　草々

四月九日

金之助

橋口貢様

八八八

明治四十三年四月十一日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ　〔はがき〕

御端書拝見致候あの文句を玉稿中に插入する事はどこかツギの出來る樣な氣がして、どうも旨く行きませんから已めました。右あしからず。御旅行の由充分の御保養を祈る

八八九

明治四十三年四月十二日　午後零時―一時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ

貴墨拜誦再度申上候。自然主義が滑つても轉んでも小生も毛頭異存無之候へども、自然主義を振り廻す人と同商賣故何うでもよくなくなり候。それから自分は何うでもよいとしても斯ういふものに支配される若い人が澤山有之候故、矢張り何とか蚊と［か］誤詫をならべて文藝欄を賑はし、且つ其人々にあまり片寄らぬ樣な所見を抱かし度考になり候。

然し毎日自然主義がどうしたとか斯うしたとかにては小生も讀者も大兒も辟易故、たまには大兒の御得意の鳥獸草木も是非御紹介を願度候。然し根が新聞故講義體に堂々と例證ばかり出てきて何日もつゞくと困り候故、一般讀者並びに文藝好い人に興味のある樣な事にて八十行位で一寸面白く讀まれ得るも［の］切望に候。然し此方から注文を出すと又六つかしく相成恐縮致候が、もし御閑もあらば御含置の上たまには御認め被下度あらかじめ願置候　艸々

四月十二日　　金之助

芥舟樣

八九〇

明治四十三年四月十六日　午前十時―十一時　牛込區早稲田南町七番地より千葉縣成田町鈴木三重吉へ　［はがき］

拜啓小鳥の巣は題名の通り小鳥の巣に至つて始めて君の眞面目を發揮致し候。あゝいふ事の敍述は今の

文壇無之。從つて甚だ興味深く候　草々

八九一

明治四十三年四月二十二日　午後五時―六時　牛込區早稻田南町七番地より佐賀縣神埼郡三田川村若野行德二郎氏へ

拜啓其後は御無沙汰に打過候過日俊則君御歸鄕の砌り一寸御近況を伺ひ候當時は學校をやめて御鄕里にて御靜遊のよし奉賀候

兩三日前御惠投の苗木芽生數種到着幸ひ植木屋參り居候故直ちに適當の所を擇ひ植付來春に至り花頃に植かへる事と致候御多忙中御親切の段深く感謝致候不取敢右御禮申上度草々如斯に候　頓首

四月二十二日

夏目金之助

行德二郎樣

御兩親樣ならびに御令兒へよろしく願上候

八九二

明治四十三年四月二十九日　午後三時―四時　牛込區早稻田南町七番地より茨城縣結城郡岡田村長塚節氏へ

拜啓其後は御無沙汰に打過候偖先般は森田草平氏を通じて突然なる御願に及び候處早速御聞屆被下候段感謝の至に候其後草平君より再度の照回に對する御返事正に拜見致候小生の小說はいつ完結するや實の處本人にも不明に候へどもごく短かくても九十回にはなるべきかと豫想致居候只今六十回故今より御起草被

下候へば小生も安心。萬々一の事にて夫よりも早く片付候ても毫も心配無之故失禮をも不顧伺候次第に候御返事の趣にて一旦御引受の上は不都合なき由御申聞難有候東京と茨木とは少々懸隔居候故自然懸念も相生じ杞憂相洩し候樣の譯あしからず御高免願上候右御挨拶旁御願迄如斯に候　草々頓首

四月二十九日　　夏目金之助

長塚樣

八九三

明治四十三年五月二日　午後八時—九時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區元園町一丁目一番地武者小路實篤氏へ　〔はがき〕

玉稿はたしかに入手致しました。都合つき次第掲載致します。毎度御迷惑をかけて濟みません。此後も時々願ひます。白樺も慥かに頂戴。右御禮迄　草々

八九四

明治四十三年五月三日　午後十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ　〔はがき〕

當安奉線は御申越通りならんと思但しよく知らず、もう一つの方はあれで慥かに宜しい。君の時計らしいのが忘れてある。催促も探索もしないところがえらい。東さんにトルストイの御禮を云つてくれ

八九五

明治四十三年五月十一日　牛込區早稲田南町七番地より鹿兒島市春日町二十九番地濱崎氏方皆川正禧へ

拜啓其後は御無沙汰奉謝候御手紙難有拜見致候近來は東京朝日に文藝欄を設け諸君子の文藝上の意見を紹介致し居候獨文の方は中々活躍英文の方は少々振はず候ちと御投稿如何に候や
謠は小生も熱心に候此夏御上京の節は御相手致度候
「門」御愛讀被下候よし難有存候近頃身體の具合あしく書くのが退儀にて困り候早く片付けて休養致し度、今度は或は胃腸病院にでも入つて充分療治せんかと存候四十を越すと元氣がなくなり申候
野間君も健在の事と存候よろしく
御職業の事精々心掛可申候隨分困難につき御〔ママ〕邊は御承知願上候
野村も一度は地方へ參る由申居候
先は御返事迄　草々

五月十一日　　　　夏目金之助

皆川正禧樣

八九六

明治四十三年五月二十二日　午前十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より淸國湖北省沙市日本領事館橋口貢氏へ

拜啓其後は御無沙汰致候御地着後新らしき山川人情定めて御眼新らしき事と存候
當地櫻も散り若葉の時節。昨二十日は英國先帝の遙拜式有之大分盛大の模樣、白馬會と太平洋畫會と同時に開會賑やかに候。小生胃病烈しく外出を見合せ世の中を頓と承知不仕候
御送りの寫眞數葉着御好意深謝致候日英博覽會記念繪葉〔書〕一組御目にかけ候スタンプは押してなく候

へどもそれは差支なくと存じたゞ葉書のみ差上候
先は御禮迄　艸々

五月二十一日　　　夏目金之助

橋口様

八九七

明治四十三年五月二十二日　午前十一時—十二時　牛込區早稲田南町七番地より佐賀縣神埼郡三田川村吉田行德源誠氏へ

拜啓未だ不得拜眉の榮候處愈御壯勝奉賀候御令息俊則樣並に二郎樣にはかねてより御近づきの事とて時時色々の用事抔相願ひ失禮のみ重ね居候
今度二郎君御出京につき保證人御依囑につき印形丈押し申候外別に何の御役にも立ち不申不本意の處わざわざ御禮狀被差遣却つて汗顏の至に候
二郎氏御出京の節は結構なる御土產頂戴是亦深く御禮申上候
右御返事旁御挨拶迄　艸々

五月二十一日　　　夏目金之助

行德源誠樣

八九八

明治四十三年五月二十三日　午前十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

拝啓「それから」に就き御丁寧なる御批評難有頂戴御多忙中甚だ恐縮致候實は「それから」が拙著なるの故にあの樣に委曲なるものを三日もつゞけて文藝欄へ出して場所を塞げるのが少々面目なき心地致候。是は御論の内容とは丸で關係なき只小生の氣がねに候。種々配合の都合も有之候へば森田とも相談の上掲載の日取取極度しばらく御猶豫願候。玉稿最初の一句宿約云々は削除致しても差支なくや一寸伺ひ候。氣の進まぬのをわざと書かして自己の文藝欄で吹聽する樣にて恐れ候。實は新刊の書物をもつと澤山文藝欄で批評して居るとこんな時には遠慮が入らなくてよろしけれどつい ひまなく森田も多忙にて其方を怠り候ため一寸勇氣を失ひ候。

玉稿の内容は面白く候ことに會話などに作爲のあとあるところ御同感に候其他御説として伺ひても小生のしか思はぬ點も有之候。

消極的の衒氣のみならず積極的にも大分あるやに見受られ申候。だから小生は自分の作を本になつてから讀んだ事は無之候。近頃四篇のうちに文鳥と申す短篇を收め候を豐隆が校正致し大いに賞め候故こわごわながら讀み返し候處是は左のみ厭味も感じ申さず候ひし。何事も書いてゐるうちが花に候後を振りかへると冷汗のみに候

「四篇」もし御入用なら差上可申候

右御禮旁申述候いづれ拜眉萬々　艸々

五月二十三日

夏目金之助

阿部次郎様

八九九

明治四十三年五月二十四日　午前六時—七時　牛込區早稻田南町七番地より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ　〔はがき〕

御返事拜見致候。二葉亭の全集に就ては社と特別の關係もある事故是非何か書きたくと存候已を得ねば又魯庵先生でも煩はし度と思ひ居候が、大兄もし御閑なら其方を先にして「それから」の前に出して下さる餘裕ありや一寸伺ひ候。一存にては二葉亭と「冷笑」でもやつたあとに「それから」を廻し度と存候

九〇〇

明治四十三年五月二十八日　牛込區早稻田南町七番地より牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ

拜啓先日は失禮其節御あづかり申上候玉稿あれからすぐにホト、ギスへ送り申候處早速同君より別紙の如き返事參り候間御目にかけ候

猶同君の意見向後御述作上の御參考になりて可然かと存候　草々

五月二十八日　　夏目金之助

山田茂[原]子様

九〇一

明治四十三年五月三十一日　午後一時—二時　牛込區早稻田南町七番地より府下大久保仲百人町百五十六番地戸川明三氏へ　〔はがき〕

啓四篇と申すもの拵らえ申候間御目にかけ申候いづれ拜眉　艸々

九〇二

明治四十三年五月三十一日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豊一郎へ　〔はがき〕

此間中より度々手紙頂戴。原稿も頂だい面白く候。近著四篇今度御出の節差上度と存候　艸々

五月三十一日

九〇三

明治四十三年六月四日　牛込區早稲田南町七番地より府下大森山王杉村廣太郎氏へ

○拝啓「新聞紙上の印象主義」慥かに落掌。其理由も正に拝承。至極賛成。僕は年來悪口ばかり云はれてゐるから、ふだしもだが、君は甚だ迷惑だらう。よし兩人とも構はないとしても社のために悪いから、こんな方法をとるのは此際結構だらう。深く御手數を謝す。
○其上「新聞紙上の印象主義」は新らしくて面白い。ことに文藝欄に投書してくれる人は、商賣氣がないから、ゆつくり辛抱して讀めば相應の事を云つてるのだけれども、よ程手つ取り早く片付ける方法を講じて呉れないで困る。かう云ふ人に讀ませる丈でも甚だ利益がある。
○此間の英國皇帝の遙拜式の記事（築地會堂の）は讀んで面白かつた。且書き方がうまいと思つた。あれも一面から云へば印象的な描寫ぢやないか。僕はあの記事を讀んだ時、新聞記事としては大變新らしいといふ感じを起した。あれは君のかいたものではないか。
○玉稿中×から×迄は少し論旨がそれる樣だ。それを布衍しては又長くなるから割愛した。あしからず。
○「四篇」といふ書物を出版す。朝日に出た舊作をあつめたもの也。君もし入用なら何時でも進呈。

六月四日夜　　　　金之助

楚　兄

九〇四

明治四十三年六月五日　午後十一時―十二時　牛込區早稲田南町七番地より麹町區元園町一丁目武者小路實篤氏へ〔はがき〕

拜啓尊稿正に落掌致し候。あれで宜しいと思ひます。たゞ全局に渉つての議論になると、あゝばかりも行くまいと思ひます。今少し原稿がたまつてゐますから少し後れますから其積に願ひます。少し位時日が經過しても腐る種でないから構はないでせう。毎々難有存じます。

九〇五

明治四十三年六月九日　午後三時―四時　牛込區早稲田南町七番地より神田區駿河臺鈴木町十七番地大野方橋田丑吾氏へ

拜復「猫」手元になき爲め前後の關係不明なれど御答申上候

メジョー・ペンデニス。（サッカレーの小說ペンデニス中に出て來る人物。世俗的知識に富めど高尚な理想も何もなき所謂世間的の人、或は俗物）

ベオウルフ。　アングロサクソン時代のエピック詩の主人公。ガルガ galga は現今の英語の gallows 絞首臺の事

ピヤース・プローマン。　十四世紀頃の英國の詩の名。ブラックストーンは有名な英國の法律家 Commentaries of the Laws of England の著者

先は右迄　艸々

六月九日

夏目金之助

橋田丑吾様

九〇六

明治四十三年六月十日　午後一時―二時　牛込区早稲田南町七番地より小石川区久堅町七十四番地菅虎雄氏へ

拝啓　自分の小説中に書き込む必要ありて「われに三等の弟子あり所謂猛烈にして諸縁を放下し専一に己事を究明するこれを上等といふ云々の戒を大燈国師の遺誡として書いたる所ある人よりあれは夢窓国師の遺誡だ大灯のではないといふ注意を受けたり。さうらしくもある。どつちだか御教示を乞ふ。又何に出てゐるか其邊も序に御教へ被下度成るべくは出所の書物を一見致度候

又塔頭を塔中と書いたとて注意を受けたが是も僕の心得違で塔頭でなければならんのだらうな。又室内といふ言葉はあるが室中とは聞かないと注意した男がある。夫もさうらしいが能く知らぬ序に御教示を待つ

胃病にて長与病院に行く胃くわいようの疑あり。ことによると入院の積。

君の不眠如何。クスグッタイ感じ如何。老頽頭を壓して至御互に棺でも作つて置く事かや　艸々

六月十日

金之助

虎雄様

九〇七

明治四十三年六月十日　午後一時―二時　牛込區早稲田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ

拜啓赤門前御出版の由承知致候あれは如仰小生よく讀まざりしものなれど讀んだうちに大分不本意の所有之君もいま繰り返したらば定めて色々な缺點に氣がつくだらうと思ふ何卒其邊に御注意の上よく御訂正あり度切望致候

新文藝に出た崖下の家面白く候今日の萬朝の六號につまらないもの丶樣にかいてあり候があれは嘘に候僕は君の短篇の方が却つて赤門前より優れてゐるのがあると思つてゐる。

漸く小說を書き終つたらば色々な雜用が出來矢張忙殺。胃腸病院に行く胃くわいようの疑あるとの事にて只今糞便檢査中なり　金ばかり入つて困る。君の投稿未だに出さず甚だ御氣の毒原稿が重なると方々へ義理がわるくなる

右御返事迄　草々

六月十日　　金之助

豐一郎樣

肝心の序文の事を忘れたり。君が書き直したのを一寸見た上にしたし如何にや夫でなければ又外に一工夫致すべく候

九〇八

明治四十三年六月十二日　（時間不明）　牛込區早稻田南町七番地より兵庫縣多可郡黒田庄村藤井節太郎氏へ

拜啓五月五日附の御書面に對してとくに御返事可致筈の處種々雜用にとり紛れ荏苒今日に至り候怠慢の罪御ゆるし可被下候

御編輯の引例一寸拜見致候斯樣に頁多きものを根氣に御書き拔の段敬服の至に存候嘸かし御苦勞の事と存候

右に就き一寸御注意迄に申上候が斯樣の引例は理論の例證として必要の場合多く從つて已れにしかとしたる議論なければ左のみ用をなさぬものにて候（小生の文學論中にある分類はよろしからず例も面白からねばあれは論ずるに足らず候）

夫でなければ單に文章の手引草として類別し讀者の讀みたいと思ふ所を索引の便宜にて隨時に讀ましむるに有之。此點にては可成面白き例を撰む必要相生じ〔候〕

右兩樣のうち何れにてもよろしく候間御盡力希望致し候

只實際上の困難は夫程浩瀚の書物を書肆が引き受けて出版するの勇氣あるかの問題に候。現今の樣な不景氣の時には先づ以て絕望の姿と存じ候此邊はよく〳〵御注意可然と存候

玉稿は別封小包にて御返却申上候先は御答迄　草々頓首

六月十一日夜

夏目金之助

藤井節太郎樣

九〇九

明治四十三年六月十二日　午後十一時—十二時　牛込區早稻田南町七番地より府下巣鴨町上駒込三百三十四番地野上豐一郎へ

啓　「門」の中に吾に三等の弟子あり所謂猛烈にして諸緣を放下し云々の遺誡を大燈國師のものとして揭出す。ある人報じて曰くあれは夢窓國師の遺誡なり大燈國師のにあらずと、第二の人叉報じて曰くあれは正覺國師の遺誡也と第三の知人は卽ち曰くあれは關山國師の作る所と

小生無識にて適從する所を知らず。御社の森大狂先生は斯道の人也。願くは御序[原]の同君に出所を御確め被下たし。叉其出てゐる本の名及び出來得るなら本其物を拜見したき由御依賴被下度候

右用事迄　草々

六月十二日　　金之助

豐一郎樣

九一〇

明治四十三年六月十三日　午前四時—五時　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區森川町一番地表北裏七十一號竹倉氏方林原（當時岡田）耕三へ

拜啓先刻外泊屆の印をもらふための屆書に肝心の印を捺さずに屆書を其儘封入して送[原]くつたやうに思ふ故別紙白紙の好加減な所に印を押して上げる故本文はそちらにて御認めありたく候　艸々

六月十二日　　夏目金之助

岡田耕三様

九一一

明治四十三年六月十七日　牛込區早稻田南町七番地より府下大森山王杉村廣太郎氏へ

啓上厲人厲語記念特製參拾號御惠送を受け拜謝
あの表紙は女の兒の記念にはうつりの好い美くしいものである。夫にしては「厲人厲語」が少々强過ぎる
僕胃潰瘍の嫌疑にて明日から内幸町の長與病院に入る。交詢社の御馳走も當分駄目となる
右迄　艸々頓首

六月十七日　　金之助

楚人冠兄

九一二

明治四十三年六月十八日　午前十一時―十二時　牛込區早稻田南町七番地より牛込區大久保余丁町百〇六番地安倍能成へ

拜啓御病氣の事は承はり候へどもついに御見舞にも參上致さず怠慢に打過候御回復の模樣は小宮抔より折々耳に致しひそかに喜び居候粥か食べられる樣になつた事も小宮から聞き候もう大丈夫とは存じ候へども精々御攝生專一に存候小生は其後不相變胃病に苦しみ居候處十日程前決意長與の胃腸病院へ參り候處胃潰瘍の疑にて遂に入院する事に相成明十八日より轉移致候いつ出るか分りかね候。もし君丈夫になつても

未だ入院中ならちと遊びに御出掛被下度候
「土」は御説の通うまく候。「四篇」御高覧の由難有候
先は右迄　草々

六月十七日夜　　夏目金之助

安倍能勢（原）様

九一三

明治四十三年六月十九日　午後七時—八時　麹町区内幸町胃腸病院より麹町区九段中坂望遠館松根豊次郎へ

拝啓此間は御手紙を難有う。夫から醫者の勸にてとう〳〵表面の處へ入院、食物も、臥起も、萬事醫者の指圖通。運動もいけず、入浴もまだ許されず。徒然無聊。たま〳〵閑に乘じ此手紙をかく。さうして御返事に代ふ。小鳥を飼つてゐる病人あり。ちちちちと鳴いてゐる。　艸々

六月十九日　　金之助

豊次郎様

九一四

今日の新聞に獨乙國賓松根式部官の案内にて云々とあり

明治四十三年六月二十一日　午後八時―九時　麹町區内幸町胃腸病院より府下淀橋町柏木四百三十三番地阿部次郎へ

拜啓それからの御批評掲載おそく相成不相濟候（五月二十一日）とある論文が丸一ヶ月後の六月二十一日に掲載濟になるのも何か最初からにたくしたるやうの偶然に候。

改めて申候御批評は上中下共立派に拜見特に中を美事に存候。下は「それから」の筋を明瞭に記臆[原]して居る人でないと讀むに骨の折れる所有之候。然し長いものを短かくつゞめる爲には已を得ぬ譯かとも被存候兎に角中を讀んだ時は突然自分が偉大に膨脹した樣に覺え後で大いに恐縮致候

御蔭を以て「それから」も立派な作物と相成候。作家は評家により始めて理解せらるべきものかと思ひ候位に候。多くの作者が一二行の惡口で葬らるゝ中に小生は君の如き批評を受くるは面目にも光榮にも有之改めて御禮申上候。艸々頓首

六月二十一日　　　　夏目金之助

阿部次郎様

九一五

明治四十三年六月二十三日　午前九時―十時　麹町區内幸町胃腸病院より本郷區森川町一番地小石館小宮豊隆へ　〔はがき〕

本月二十三日の柴漬にアフリルフールとあるが英語ではエープリ・フールと云ふので、四月をアフリルなんて發音されては文藝欄擔任の漱石[原]の英學者としての名前に關る。元來獨乙語なら獨乙語でいゝからアプリルナールとでも書いたら好いぢやないか。何を苦しんで半解の英語なんか振り舞すのだか要領を得ない。病院〔に〕も病人にも左右の兩隣にも變化なし。　艸々

六月二十三日

九一六

明治四十三年六月二十六日　午前八時—九時　麹町區内幸町胃腸病院より茨城縣結城郡岡田村長塚節氏へ

書狀にてわざ〳〵の御見舞篤く御禮申上候年來の宿痾一層の進歩を加へ胃潰瘍とか申す病氣の由にて當分當院内に靜養まかり在候「土」御苦心の御模樣嘸かしと御推察申上候是は自分にも經驗ある事とて大兄の御心狀よく相分り候御健康可成御かばひ可然か夏より秋にかけての御惠みの草花も御培養の御閑なき趣かうなると創作も人の子を賊するやの感を生じ候。「土」は毎朝拜見。一般に評判よき樣に候。何卒今暫くの御辛抱願上候先は右御挨拶迄　草々頓首

六月二十五日

夏目金之助

長塚節樣

九一七

明治四十三年六月二十八日　午後三時—四時　麹町區内幸町胃腸病院より北海道小樽區量徳町五十八番地林原（當時岡田）耕三へ　（はがき）

試驗濟にて御歸省の由結構に存候充分御攝生專一と存候。小生胃潰瘍といふ病氣にて十日前此所に入院靜養中。左したる事も無之候へば御心配に及ばず。先は御返事迄　匆々

六月二十八日

九一八

明治四十三年六月二十八日　午後五時—六時　麹町區内幸町胃腸病院より兵庫縣多可郡黒田庄村藤井節太郎氏へ

拜啓御手紙拜見致候御手漁の香魚御心にかけられわざ／＼御送被下候然る處殘念な事に陽氣の爲め腐敗致し居候由なるが或は箱の中でむれたのかと存候小生は只今病氣にて當院に靜養中に有之。どうしても香魚に緣なき身に候故腐つて〔も〕腐らないでも物質上の利害は同一に候たゞ御芳志に對し厚く御禮申上候　草々頓首

六月二十八日

夏目金之助

藤井節太郎様

九一九

明治四十三年七月三日　午後一時—二時　麹町區内幸町胃腸病院より府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ

拜啓御手紙難有拜見致候其後とう／＼思ひ切つて入院致し最初の一週位は極樂の如く呑氣に消光致候處出血とありて二週間目より蒟蒻で腹をやくんだと云つて火の様な奴を乘せられるので一難を增し申候。のみならず一日にて腹が火ぶくれに相成り見るも淺間しく恐縮の體に候。昨今病氣よりも此方が苦痛に候。新潮には昨日宅から屆き一見致候。夏目漱石論抔と大きな活字が目につくと、今迄世の中と無關係に暮したものが急に婆婆氣づき何だか又人間に立ち歸る樣な情なき心持に候。

第一の印象はよくも漱石の爲めにブラフ君がかく迄に方々を驅け廻り、諸家又漱石のためによくもこん

な面倒な事を敢てしてくれたかといふ勿體なき感じに候。然し新潮は新潮で又自分勝手の意味も有之べければ自然掃〔よ〕つた大兄等丈が御迷惑な譯に相成まことに申譯なく候。ことは大體の上に於て諸君が好意を以て同情を以て小生を批評せられてゐる様なのは難有き慰藉とも可申か。

まゝ誤謬誤譯等あるも是亦文壇一時の卽興景氣づけ位の所と思へば夫迄に候。のみならず到底歴史逸話傳記類に徹頭徹尾本當のものは無之事を深く感じ居候昨今には、間違が却つて面白く候。

大兄は冒頭より漱石黨と名乘つて出でられ候御厚意御奮發に對して小生とくに他の諸君以上に御禮を申さねばならぬ義務有之候。然る處御批評のなかに漱石は付合ひにくい男と有之。是も貴意を諒し候へども甚だ心細く候。小生から申せば大兄は小生に對しあまりに慇懃過ぎて付合にくく候。是を兩方で撤回してもつと無遠慮になつたらもつと御互が楽になるだらうと存候。小生は御評を拜見せぬ前より常にさう考へ居候處あれを見て愈思ひ當り候樣な心持に候。私はいつでも無遠慮になれる男に候。大兄はみんなから淡泊な人と評されて居らるゝ紳士に候。御相談の上是から交際法を變化して見たらどうだらうかと存候。貴意如何。と申し〔た〕からと云つて別に御返事を豫期する譯にも無之。まづ病中のいたづらと御聞流し可被下候　艸々頓首

七月三日　　　　金之助

秋骨先生

九二〇

明治四十三年七月十二日　午後二時―三時　麹町區内幸町胃腸病院より本郷區森川町一番地小吉館小宮豐隆へ

一寸御願あり病氣中に書本の揃つたのを綴ぢて置きたいと思ふ。
宅へ行つて調べて五冊ばかり纏になつてゐる奴を相馬屋か何處かへ持つて行つて綴ぢさしてくれ給へ。
あとから書くのに表紙がちがつては困るから、其邊の都合のつく位澤山ある表紙を撰んでくれ玉へ。
内外にて表紙を區別してもよし。
表紙に白紙を貼付する事も頼んでくれ玉へ（あとから名前を書き込む）
「松風」はとぢ込まずにあるが、あれを入れて五冊にまとまるならあれも入れて呉れ。あれは新の本だが何時迄立つても歸せと云はないから貰つてもよからう。しかも相手が新だから色々な點に於て、是を斷行しても差支ない理由がある。
揃はない分を寫してくれる人があるなら頼んでだん／＼纏めたし。夫も一寸聞き合して呉れ。面倒でも揃はない分の名前を表にしてそれを持つて行つて頼んでくれ。（是は事が面倒ならやらなくても好い）
以上

七月十一日　　　　金之助

豐隆様

九二一

明治四十三年七月十四日　午前八時—九時　麹町區内幸町胃腸病院より　本郷區［illegible］町一［illegible］小宮豐隆へ　「はがき」

啓昨日頼置候謡本寫取の件朱點入に願へれば大變面倒省けて好都合に候。四方太君のおとつさんへ餘計御禮をしてさう願へればさう致し度野上へ一寸御傳言願上候　以上

十四日

九二二

明治四十三年七月二十一日　午前八時—九時　麹町區内幸町胃腸病院より横濱市元濱町一丁目一番地渡邊和太郎氏へ　〔はがき〕

拝啓御懇切なる御見舞状頂戴難有候小生病症は胃潰瘍にて今少しすれば退院位は出來さうに候、平生も御無沙汰病氣になると猶御無沙汰まことに不相濟候右御禮迄　艸々

七月二十日

九二三

明治四十三年七月二十一日　午前八時—九時　麹町區内幸町胃腸病院より千駄木町…良田町鈴木三重吉へ　〔はがき〕

拝啓此間は御見舞難有候御手紙も拝見致し候もう少しで退院位出來さうに候。小鳥の巣箱へ行く所から大變よろしき樣に存候、あの調子で始めたら仕方がなかつたが甚だ殘念に候右迄　艸々

九二四

明治四十三年七月二十九日　午後八時—九時　麹町區内幸町胃腸病院より北海道小樽區色内町五十六番地林原（當時岡田）耕三へ

手紙をもらつて返事を出さうと思つても人が不絶來るのと懶いのとで甚だ失禮をした胃潰瘍の療治は一段落ついて今は消化試驗やら胃液の試驗やらをやつてゐる。もう少〔し〕したら退院の許可が出るだらうと思ふ。時々散歩を許されたので日比谷から銀座へ出かける。病院〔?〕で時々[illegible]がわるく。人のくるのはいゝが床の上に横になりたくなる。北海道では山が破裂して大騷ぎ、此間友人がノボリベツ

の温泉へ行けと勸めたが是ぢや危險の樣だ。

君の病氣は如何涼しい所だからいゝだらうと思ふ。手のシビレるのはどうも氣になつてならん、全體何の病氣だかそれが分らないのは變である。是非とも療治の必要がある樣に思ふ

今九月御上京の節に御目にかゝらう折角攝生を祈る　艸々

七月二十九日　　　　金　之　助

耕　三　樣

九二五

明治四十三年八月二日　午後四時―五時　牛込區早稻田南町七番地より　府下青山原宿一百〇九番地　奥太一郎氏へ

拜啓先日は御見舞難有候あの朝久し振で詩を考へ候これはあなたの扇子へ何か書いて見たくなつたからに候一時間ばかりして詩は出來候

來　宿　山　中　寺

更　加　老　衲　衣

寂　然　禪　夢　底

窓　外　白　雲　歸

といふのです、夫から墨を磨つてあの扇へ書きました處飛んだ字が出來上りました、扇は持つて歸りましたがあれは私が頂戴して置きます　艸々

八　月　二　日

夏目金之助

森　次太郎様

九二六

明治四十三年八月二日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より府下西大久保百五十六番地戸川明三氏へ　〔はがき〕

病中は御暑い所をわざ〳〵御見舞難有存候漸く輕快退院、田部君にはどうか大兄よりよろしく願上候

不取敢御禮と御報をかねて右申上候

九二七

明治四十三年八月二日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より横濱市元濱町一丁目　渡邊和太郎氏へ　〔はがき〕

入院中は御見舞難有候漸く輕快に赴き退院致候右不取敢御禮旁御報迄　早々

御令弟へよろしく

九二八

明治四十三年八月二日　午後四時―五時　牛込區早稲田南町七番地より牛込區辨天町百七十二番地山田繁氏へ　〔はがき〕

入院中は度々御見舞をうけ千萬難有候漸く輕快退院の運に至候、御禮のため參上致す筈の處病生の都合にて時間甚だ窮屈故端書にて御免蒙り候　艸々

九二九

九三三

明治四十三年八月二日　午後四時—五時　牛込局消印　牛込區早稻田南町七番地より本鄕區駒込西片町十番地畔柳都太郎氏へ　〔はがき〕

入院中は度々御見舞難有候漸く輕快退院の運に至り候右御禮旁御通知迄　艸々

八月二日

昭和三年九月一日印刷
昭和三年九月五日發行

漱石全集第十八卷

著作權者　夏目純一

編輯及發行　漱石全集刊行會
東京市神田區南神保町十六番地

右代表者　岩波茂雄

印刷者　井上源之丞
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

（大森製本）